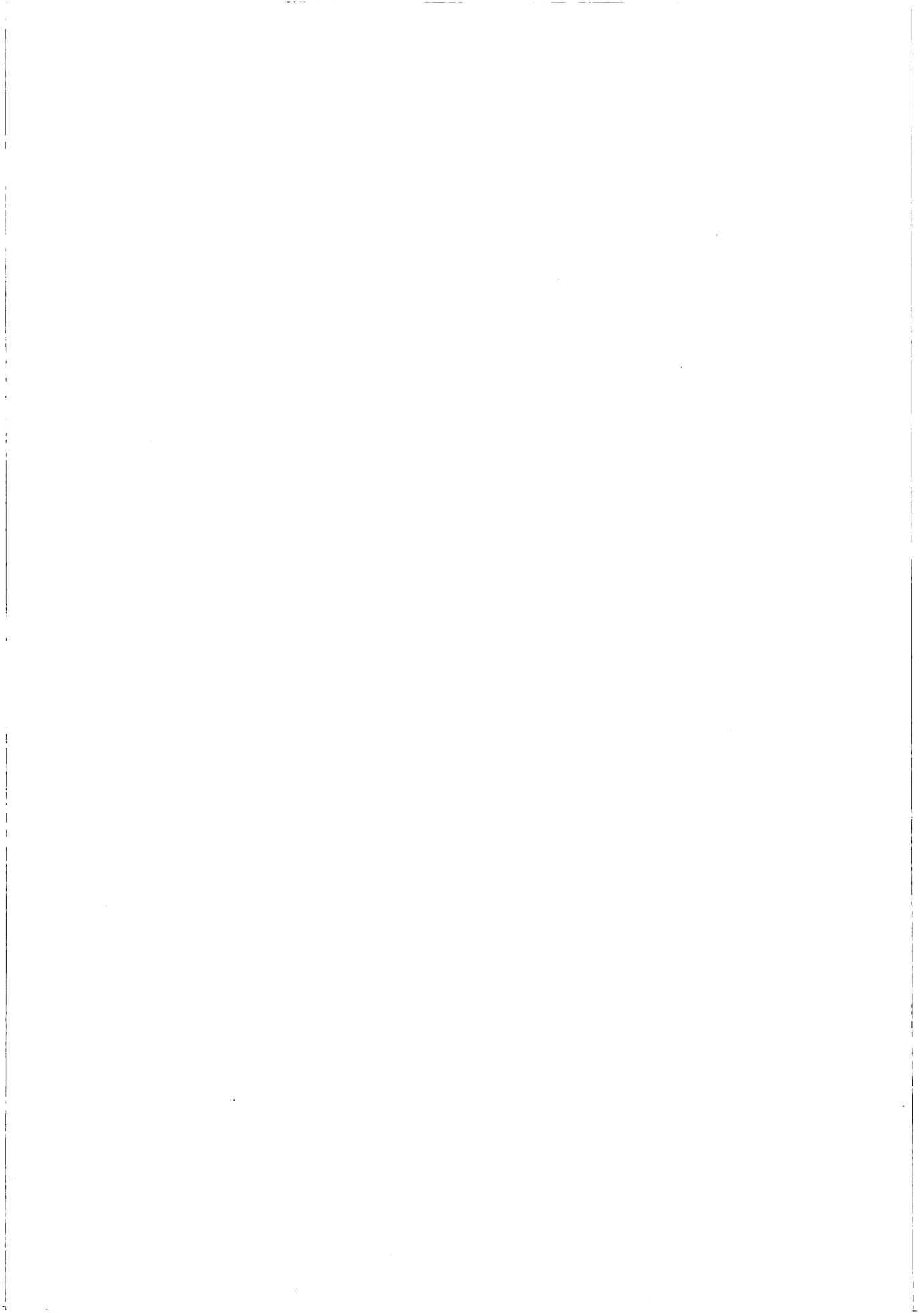


川上 B 遺跡

— 北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和 55・57 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



川上 B 遺跡

— 北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和55・57年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

川上B遺稿

—— 東京府立第一高等学校図書蔵書 ——

東京府立第一高等学校

—— 東京府立第一高等学校図書蔵書 ——



1. 空からみた川上B遺跡

o

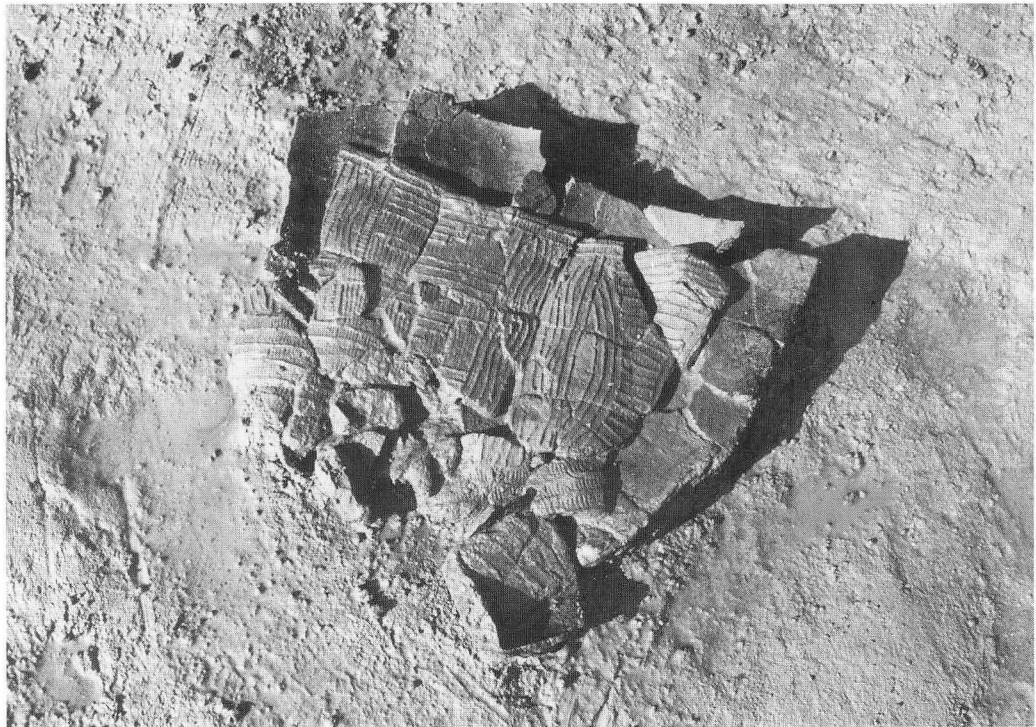
0

P

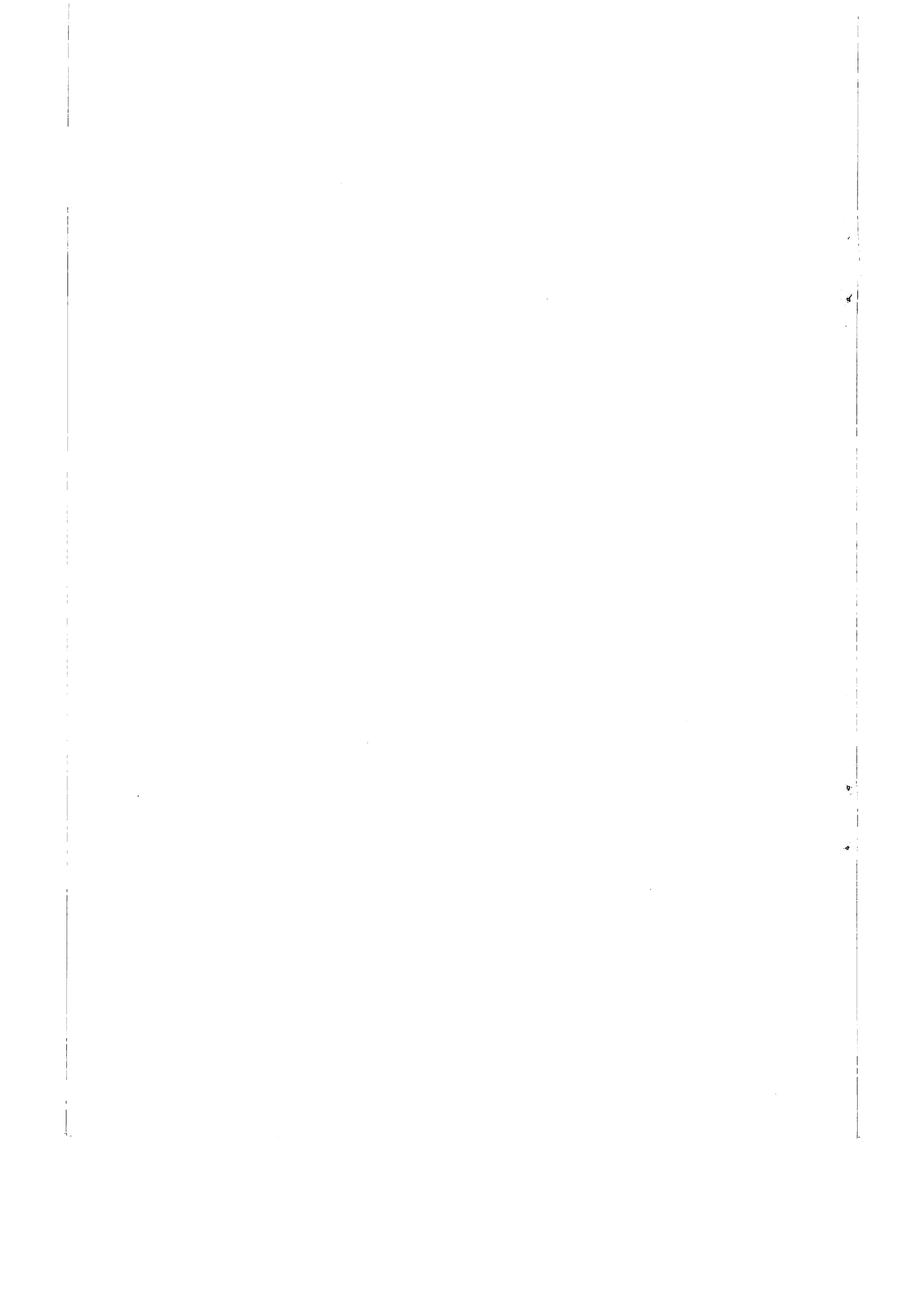
4



2. 遺跡遠景（南西方より）

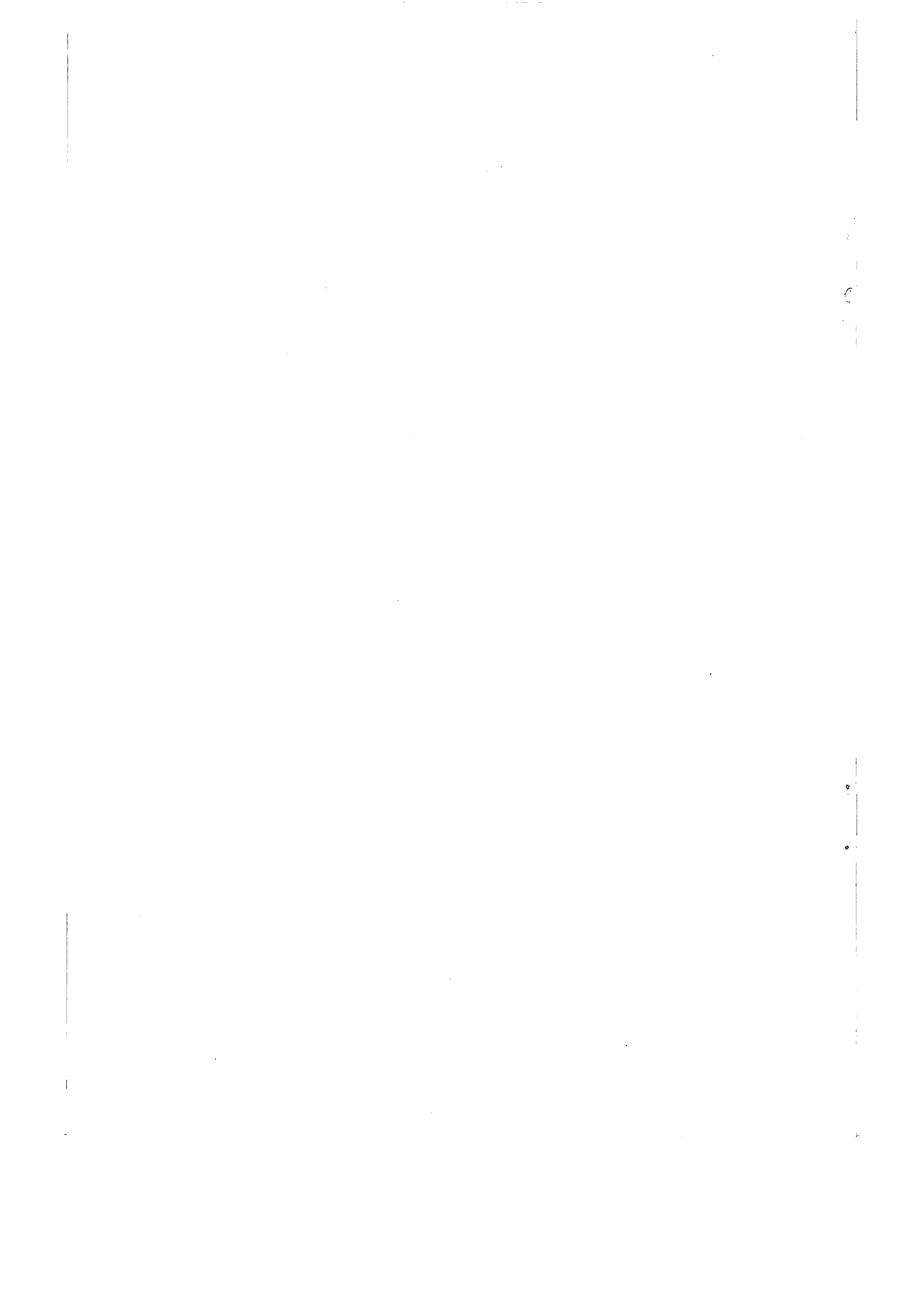


3. DH-8 出土の土器



例 言

1. この報告書は、北海道縦貫自動車道室蘭東インターチェンジ建設予定地の昭和55、57年度の発掘調査に関するものである。
2. 本書の作成は、調査員全員の討議のもとに次のように分担執筆した。I-1～4 畑宏明、III-1 越田賢一郎、III-2 遠藤香澄、IV-1～4 西田茂、V-1～4 熊谷仁志、VI-1～4 三浦正人、VII-1～4、VIII-1～3 遠藤香澄、IX-1～3 佐藤訓敏、X-1～4 越田賢一郎、XI-1 畑宏明、XI-2 三浦正人、XI-3 越田賢一郎、XI-4 大橋秀規、XI-5 熊谷仁志。編集は畑宏明が担当した。
3. II章の執筆は次の方がたに依頼した。II-1 花岡正光・福田正巳、II-2 山田悟郎。
4. 遺構・遺物の写真は、立川トマス・伊野正之・三浦正人、測量、は大利俊男が担当した。
5. 本文・図表中では以下の略号を使用した。
遺構——H：住居跡、P：ピット、S：石組み炉、F：住居跡に付属しない焼土、Y：配石遺構。
岩質——Aga.：めのう、And.：安山岩、Ba.：玄武岩、Bl-Sch.：黒色片岩、Che.：珪岩、Gr-Mud.：緑色泥岩、Gr-Sch.：緑色片岩、Ha-Sh.：硬質頁岩、Mud.：泥岩、Obs.：黒曜石、Per.：かんらん岩、Phy.：片麻岩、Pum.：軽石、Sa.：砂岩、Ser.：蛇紋岩、Sh.：頁岩、Sl.：粘板岩、Ta.：滑石。
6. アルファベットと数字の組み合わせで表現した10m四方の発掘区を5m四方に4等分し、それを南西隅から左まわりにa、b、c、dの記号をつけて呼称した。(例：M-91-b)
7. 遺構の規模は、確認面における長径×短径×深さ、単位mで示した。



目 次

例 言	
I 調査の概要	5
1 調査要項	5
2 調査体制	5
3 調査の経緯	6
4 調査の概要	6
II 遺跡の環境と堆積物	13
1 川上B遺跡周辺の地形・堆積物と斜面の地史	13
2 縄文海進以降の古植生について	23
III 遺物の分類	31
1 土器	31
2 石器	33
IV A地域の調査	37
1 概要	37
2 遺構とその遺物	39
3 包含層の遺物	58
4 小括	84
V C地区の調査	85
1 概要	85
2 遺構とその遺物	88
3 包含層の遺物	118
4 小括	150
VI D地区の調査	169
1 概要	169
2 遺構とその遺物	170
3 包含層の遺物	208
4 小括	220
VII E地区の調査	233
1 概要	233
2 遺構とその遺物	235
3 包含層の遺物	236

4	小括	238
VIII	F地区の調査	259
1	概要	259
2	包含層の遺物	261
3	小括	262
IX	G地区の調査	269
1	概要	269
2	遺物	272
3	小括	277
X	近・現代の遺構と遺物	281
1	炭窯	281
2	円形ピット	282
3	木箱	282
4	遺物	282
XI	成果と問題点	289
1	有舌尖頭器と細石核	290
2	珧状耳飾	291
3	土器片の移動について	296
4	底部内面に突起のある土器	300
5	大形住居跡	302

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 北海道縦貫自動車道登別地区及び白老地区埋蔵文化財発掘調査業務
 事業委託者 日本道路公団札幌建設局
 事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
 遺跡名 川上B遺跡（道教委登録番号：J-03-6）
 地区名・所在地・調査面積及び調査期間

地区名	所在地	面積	調査期間
A地区	登別市青葉町17-5、18番地	6,000m ²	昭和55年4月1日～昭和56年3月31日
C地区	登別市青葉町18、19番地	9,765m ²	
D地区	登別市青葉町19、20番地	3,110m ²	
E地区	登別市青葉町28番地	3,485m ²	昭和57年4月1日～昭和58年3月31日
F地区	登別市青葉町25番地	1,400m ²	
G地区	登別市青葉町25、30番地	1,535m ²	

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター 理事長 浅井理一郎
 業務部長 馬場 治夫（昭和55年度）
 ” 皆川 富三（昭和57年度）
 調査部長 高橋 稀一（昭和55年度）
 ” 藤本 英夫（昭和57年度）
 調査第一班長 中村 福彦（昭和55年度 発掘担当者）
 調査第三班長 畑 宏明（昭和57年度 発掘担当者）
 文化財保護主事 越田賢一郎（昭和57年度）
 ” 西田 茂（昭和55・57年度）
 ” 遠藤 香澄（昭和57年度）
 臨時職員（調査補助員） 立川トマス（昭和55年度）
 ” 中村 英重（ ” ）
 ” 大利 俊男（昭和57年度）
 ” 伊野 正之（ ” ）

I 調査の概要

臨時職員（調査補助員）	佐藤 訓敏（昭和57年度）
〃	熊谷 仁志（ 〃 ）
〃	大橋 秀規（ 〃 ）
〃	三浦 正人（ 〃 ）

調査にあたっては、文化庁、奈良国立文化財研究所および北海道教育委員会の指導をいただいた。また、つぎの機関及び人びとの協力を得た。

登別市教育委員会、登別市役所、北海道開拓記念館、北海道登別南高等学校、登別市立青葉小学校、登別市立幌別小学校、登別市立図書館、登別市立郷土資料館、室蘭市民俗資料館、虻田町教育委員会、東京大学文学部藤本強、北海道大学理学部勝井義雄、同興水達司、同福田正巳、同山本博、同花岡正光、北海道開拓記念館野村崇、同赤松守雄、同山田悟郎、北海道登別高等学校宮武紳一、北海道登別南高等学校街道重昭、室蘭市民俗資料館久未進一、陶芸研究家荃田由雄、白老民俗資料館伊藤裕満、旭川市教育委員会齊藤傑、北見市教育委員会久保勝範、宮宏明（順不同敬称略）

3 調査の経緯

日本道路公団が建設を進めている北海道縦貫自動車道（函館～稚内）のうち、室蘭～苫小牧の分布調査は、北海道教育委員会が昭和51年度に行った。その結果、川上B遺跡が、室蘭東インターチェンジ予定地に該当していることが判明した。昭和54年度にA・B地区の事前発掘調査（試掘）を行い、翌昭和55年度にA地区の発掘調査を行うとともに、C・D・E・F・G地区の事前発掘調査を行った。A地区については、昭和56年3月にその概要を報告してある。

今年度の調査は、昭和55年度の事前発掘調査の結果に基づいて設計したものである。現地調査は、昭和57年5月12日～10月29日に行った。

D・E・F・G地区は、全域発掘完了。A・B・C地区で合計約9,000㎡の調査予定地が残っている。また、A地区の北側とC地区の西側については、用地問題未解決のため事前発掘調査を行っていない。

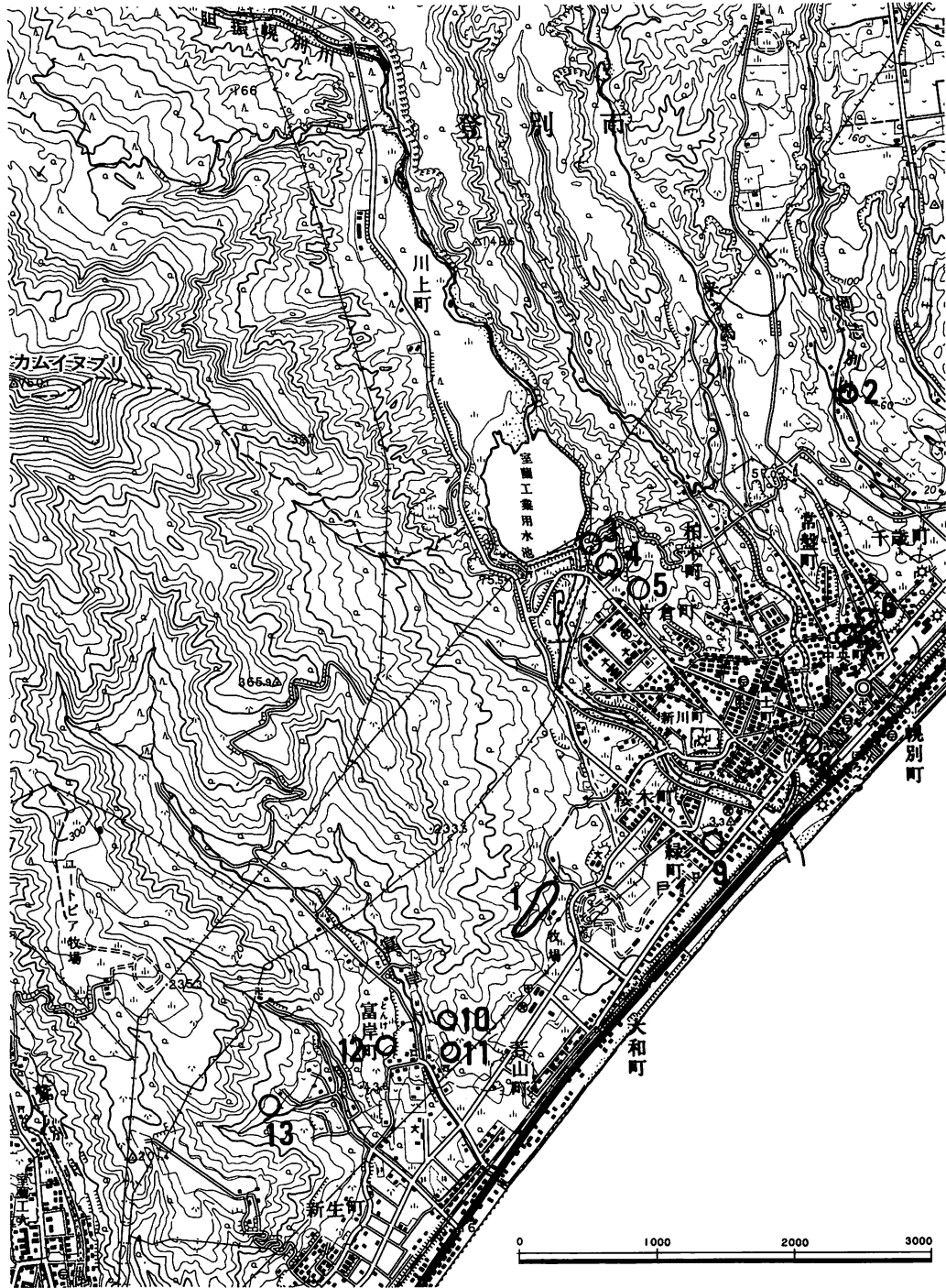
4 調査の概要

発掘区の設定

現地調査の基本図は、HOKKAIDO EXPRESS WAY PLAN (NOBORIBETSU-TOMAKOMAI) 縮尺1:1,000のNO. 49-3と4を使用した。

A地区の発掘区の設定は以下のとおりである。

まず、STA22（直角平面座標系第Ⅲ系、 $X = -177440.161$ 、 $Y = -95967.459$ ）とSTA24（同、 $X = -177247.628$ 、 $Y = -95913.951$ ）を見通し、それをM列とする。STA22の南脇をM-1とし、STA24がM-21となるように10m単位に区切る。そして、M列に平行する



図I-1 遺跡の位置(この図は国土地理院発行の5万分の1地形図登別温泉を複製したものである)。

- | | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|-------------|
| 1, 川上 B 遺跡 | 6, 山木 2 遺跡 | 8, 幌別遺跡 | 10, 富岸遺跡 | 12, 富岸小学校遺跡 |
| 2, 千歳 5 遺跡 | 4, 片倉遺跡 | 7, 山木 1 遺跡 | 11, 川上 A 遺跡 | 11, 富岸神社遺跡 |
| 3, 来馬チャシ | 5, 今田遺跡 | | | 13, 亀田公園遺跡 |

I 調査の概要

線を10mごとに引き、東へ向かってN、O、P……、西へ向かってL、K、J……の各列を設定する。このようにして区画された10m四方の区域は、それぞれ南西隅の列記号で呼称する。5m四方の小発掘区は、例言に示したとおりである。昭和54年度の事前発掘調査では、10m四方の各区画の中央を2m四方発掘した。しかし、このことが、翌55年度には5m四方の小発掘区を設定する上で障害となったため、全体の区画を、北と東へそれぞれ2m移動させて発掘した。発掘区の南北軸は、座標系に対して15° 31' 53"である。

C、D、E、F、G地区の発掘区は、インターチェンジの北と南で路線がカーブしているため、A地区の区画とは別に設定した。

S T A 22をM-80とし、S T A 21が川の中に位置するため、その見出し杭を見通してM列を設定した。方位は、202° 24' 01"である。あとは、A地区と同様の方法で10m四方の区画を設定した。ただし、昭和55年度の事前発掘調査は、前回の経験から、区画の南西隅を発掘したため、本発掘では、区画の移動をしなかった。

位置と環境

川上B遺跡は、登別市幌別市街の南西約2.5kmに位置する。カムイヌプリ（標高750m）の南東山麓にあたり、ヤンケシ川⁽¹⁾とその支流に面した緩斜面（標高10～25m）上にある。遺跡の前には、縄文海進の痕跡とみられる低湿地が広がり、約1kmで海岸に到達する。

登別付近は、年間2,000mmを越える全道一の豪雨地帯で特に7～9月の夏季に集中している。一方、冬季の積雪は、50～60cmと少なく、年間を通じて温暖な気候である。このことは、遺跡の周辺に、トチ、クリ、サンショウなどが生育していることからいえる。

また、動物では、時折キタキツネが発掘現場に出没していた。ほかに目立った動物はないが、かつては、多種の動物が生息していたことであろう。

土 層

- I層 表土層。黒色腐植土。灰白色や灰褐色の火山灰の薄層が、2～4層挟在している。最下層の火山灰層までをI層とした。断面を放置しておく中間に苔の生える層がある。
- II層 火山灰層下の黒色土層。I層より粒径小さく、乾燥するとクラックができる。F地区では、この層の中間に水成砂礫層が挟在する。ヤンケシ川第3支流の氾濫によるものだろう。縄文時代中～後期の遺物包含層。
- III層 シルト質降下軽石層及び腐植がかったシルト層。降下軽石層は、沢や竪穴住居跡などの凹地に堆積している。縄文時代早～前期の遺物包含層。昭和55年度の発掘調査では次のIV層と一括して扱っている。
- IV層 角礫及び黄褐色シルト層。本層の中に、N,Us-c火山灰の二次堆積物が挟在する。遺物は出土していない。

(1) 昭和55年度概報では、「フレベツ川」の名で記載したが、その後、河川名は「ヤンケシ川」とその支流（北から第1、第2、第3と呼ばれる）であることが判明したので訂正する。昭和29年版 仮製五万分の一地形図では、「トンケシ川」となっている。「ヤンケシ」は「トンケシ」の訛とみられる。また、現在の「富岸川」は、「フシベツライハ川」と記されている。

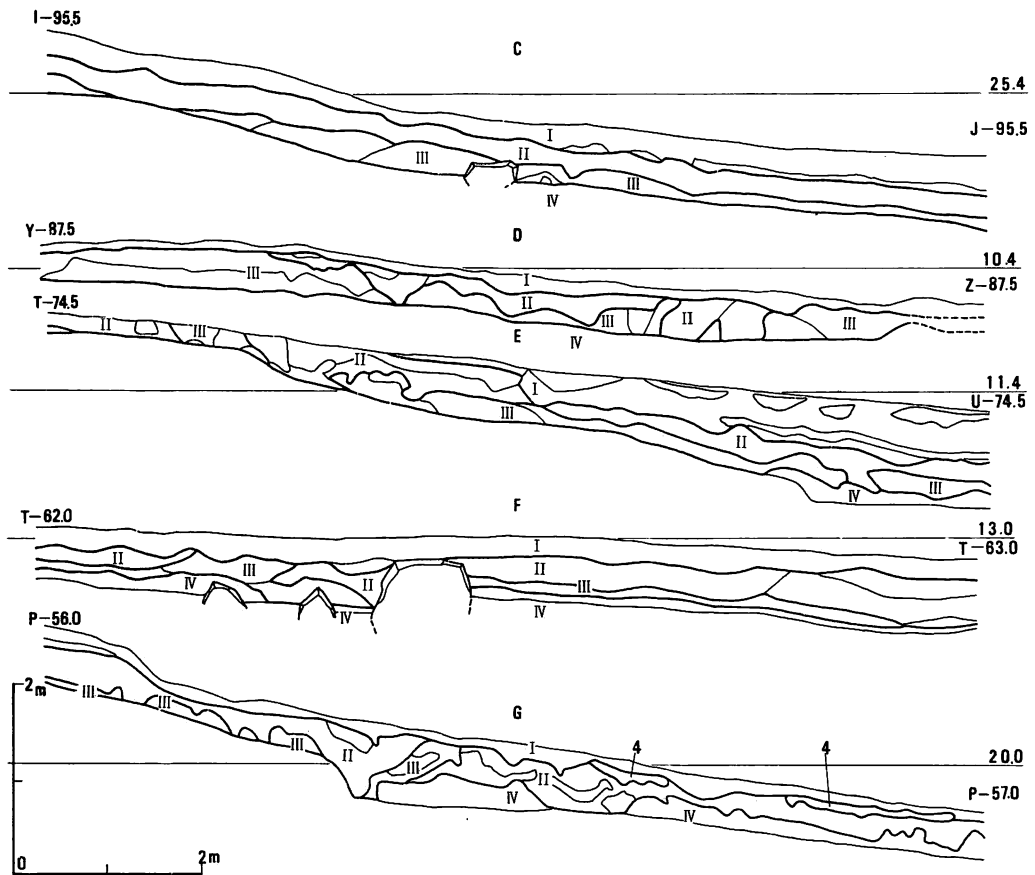


図 I - 2 発掘区の土層

A 地区

ヤンケシ川とその第1支流の右岸の緩斜面。標高14~20m。縄文時代早期のピット5、同中期の住居跡4及びピット10を確認した。遺物は、縄文時代早期と中期の土器、石器などが13,732点出土した。

早期の土器には、東釧路IV式土器とコッタロ式土器が多い。円孔をもつ条痕文土器や魚骨回転文土器も少量ある。中期の土器には、サイベ沢V、VI、VII式土器、見晴町式土器、柏木川式、大安在B式土器、静狩式土器、レンガ台式土器などがある。サイベ沢VI式と思われる土器の内容物の C^{14} 測定では、 $5,170 \pm 90$ y. B. P. (KSU-376)の年代が示されている。

石器は、各種の石鏃、やり先、ドリル、つまみ付きナイフ、各種のスクレイパー、石斧、すり石、北海道式石冠、たたき石、砥石、石錘、石皿などのほか、石炭礫も出土している。

C 地区

ヤンケシ川第2支流の左岸、崖錐斜面。標高16~26m。発掘区の南部には、第2支流とほぼ平行する埋没谷が発見された。降下軽石層の堆積状態からみると、この谷は、縄文前期以降に

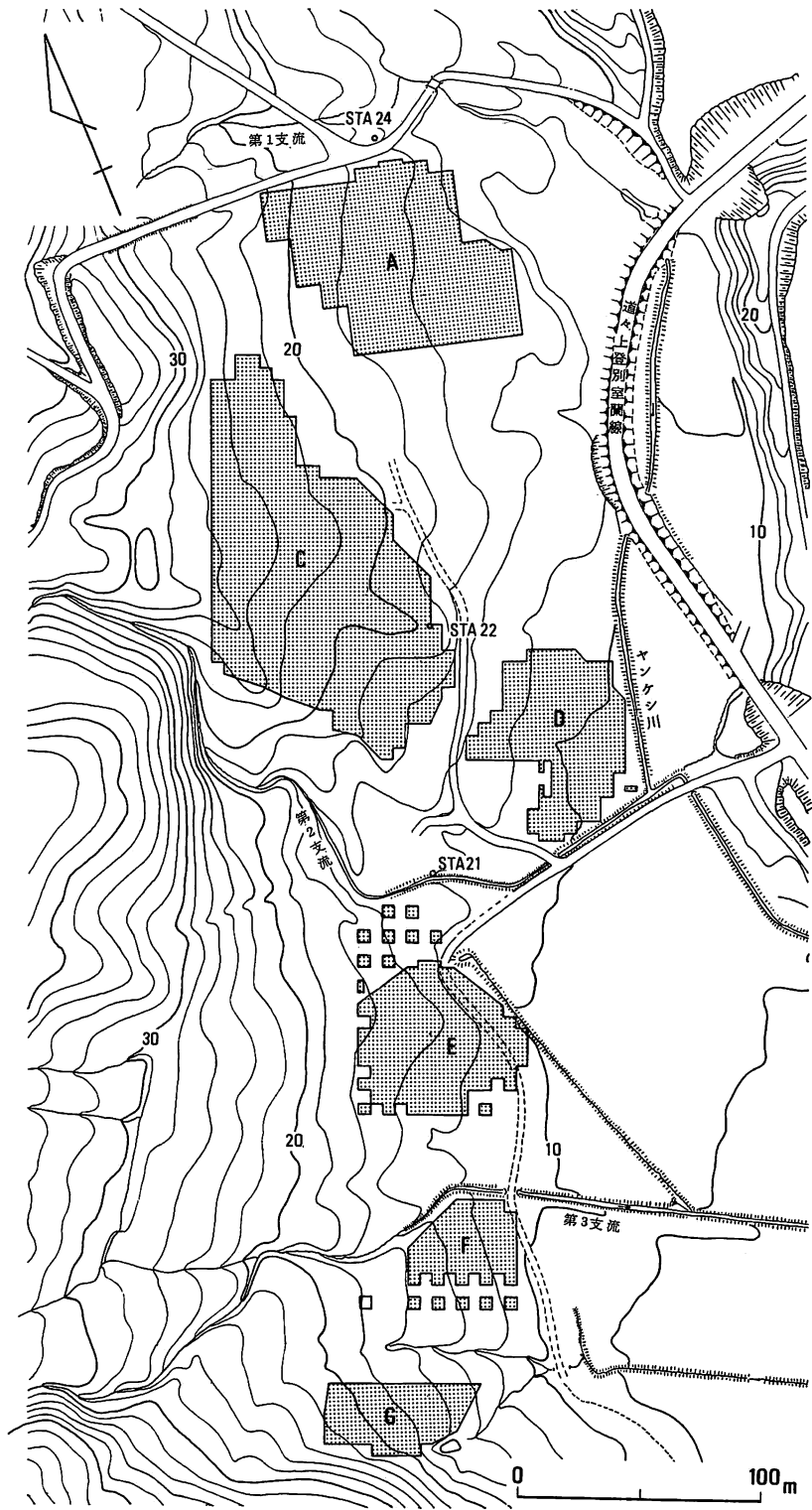


図 I - 3 遺跡周辺の地形

埋没したものである。つまり、縄文海進のピーク以降に埋没し、花粉分析の結果と一致する。

また、埋没谷と第2支流に挟まれた区域や発掘区ナンバー95ライン以北には広汎に角礫が分布している。これは、ヴェルム氷期最寒期の周氷河環境下で、岩盤の剥離作用やソリフラクションによって生成・運搬された岩海堆積物と考えられている。角礫の一部は、黒色土層の中にも存在し、礫と礫の間に遺物が挟まっている。

遺構は、縄文時代中期末～後期初の住居跡11、ピット3、配石遺構1、焼土9を確認した。住居跡はほとんどが石組み炉をもち、重複遺構もある。中でもCH-2は、長径12m以上もあり、柱穴の配置から増・改築の可能性が考えられている。これは、縄文時代中期末のいわゆる大形住居跡に属する。これらの住居跡から出土した木炭の年代測定結果は、次のとおり。

CH-2 覆土 (L-93-a-152、13.96 g) 3,530±20 y. B. P. [KSU-586]

CH-2 床面 (L-93-b-376、1.72 g) 3,040±100 y. B. P. [KSU-584]

CH-4 床面 (J-92-d-570、1.28 g) 3,200±120 y. B. P. [KSU-585]

遺物は、縄文時代早期、中期、後期の土器、石器などが64,918点出土した。土器は、貝殻条痕文土器をはじめとする早期の一群を除くと、ほとんどが中期末～後期初のものである。中でも、余市式、入江式土器に相当するものが大半を占める。石器は、石鏃、石皿、台石などが多い。特に石鏃の比率の高さが目につく。ほとんどのものが、中期～後期初の土器に共伴するものと思われる。また、有舌尖頭器と思われるものが1点出土している。その他、土製円盤9 (Ⅲa類、Ⅲb-3類、Ⅳa類土器など) や垂飾2が出土している。

D地区

ヤンケシ川本流と第2支流に挟まれた区域。C地区の裾部にあたる。標高9～14m。C地区の埋没谷の続きがD地区を縦貫する。最下流のY-83-a北壁の泥炭や泥炭質シルト等のサンプルを用いて花粉分析を行った。樹木花粉構成は、RⅢ花粉帯に相当し、縄文海進以後の堆積物である。また、Ko-e?火山灰層を境にそれより上層では、ミズバショウが優占するなど微地形と対応する結果が出ている。遺構、遺物は、これらのサンプルを採取した層より下から出土している。

遺構は、住居跡9、ピット7、焼土2を確認した。すべて縄文時代早期のものである。住居跡は、長円形で地床炉をもつものが多い。住居跡の凹地には、降下軽石層が堆積しており、遺構発見の手がかりとなった。この降下軽石層の起源は不明であるが、直上から縄文時代前期の土器が出土していることから、堆積年代は6,000 y. B. P. 頃と推定される。

遺物は、縄文時代早期、前期、中期の土器・石器などが21,345点出土した。土器は、縄文時代早期の東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式土器が主体を占め、他に縄文時代前期、中期のものが若干含まれる。早期の土器は、住居跡の外からも出土しており、中には40mほど離れて出土したものが接合した例もある。石器は、つまみ付きナイフ、擦り切り磨製石斧など早期の土器に共伴するものが多い。ほかに、細石刃石核と思われるものや瑛状耳飾、土製円盤 (東釧路Ⅲ式～中茶路式土器)、底部内面に突起や文様のある土器などが出土している。

I 調査の概要

また、昭和期に埋設されたとみられる大小2個の木箱が発見されている。中から三平皿、ランプのほやなどが出土した。付近には陶磁器片が散乱している。

E地区

ヤンケン川第2支流と第3支流に挟まれた傾斜のゆるやかな舌状台地。標高10~16m。第3支流に面する南側斜面は傾斜がゆるやかで、礫が分布している。発掘区の南端には、第3支流の旧河道がある。発掘直前まで牧草畑として使用されていた所で、高所には不陸ならしの影響を受けている所もある。

遺構は、ピット2、焼土4を確認した。いずれも、縄文時代早期のものと推定している。

遺物は、8,110点出土。縄文時代早期のものが大部分を占め、発掘区の北側、東側、南側に集中区がある。土器は、東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式土器が出土している。D地区と同じ底部に突起のある土器の小片がある。石器は、つまみ付きナイフ、擦切り磨製石斧、断面三角形すり石などが目立つ。

F地区

ヤンケン川第3支流の右岸斜面。標高10~16m。発掘区の東側に向かう3本の埋没谷が発見された。C地区の埋没谷同様、降下軽石層の堆積以後に埋没が進行している。ここでは、II層の腐植土層堆積中に、表面流出水による小規模な崩壊が度々あり、その堆積物が挟在している。縄文時代中期中葉の土器(見晴町式土器並行)は、この土石流による二次堆積物中からも出土している。

遺構は確認されていない。遺物は、2,165点出土。縄文時代早期末の東釧路Ⅳ式土器が多い。集中区は3か所ある。高位の集中区では、縄文中期中葉の土器が出土している。石器は、E地区の組成とよく似る。つまみ付きナイフ、石鏃、石斧、断面三角形すり石が目立つ。北海道式石冠もあるが、これは、中期の土器に共伴するものだろう。

G地区

カムイヌプリ東南麓の末端に位置し、川上B遺跡の南はずれにある。標高14~22m。発掘区の上と下に2か所の湧水がある。

遺構は、焼土1を確認した。縄文時代早期のものだろう。

遺物は、703点出土。縄文時代早期の円孔文、沈線文土器、東釧路Ⅲ式土器が多く、中期の柏木川式土器を若干含んでいる。円孔文土器は、類例が少なく時代は明確でないが条痕文土器群の末に位置づけられる可能性がある。A地区出土品と同類。石器は、石錘、擦切り磨製石斧、断面三角形すり石などが目につく。スクレイパーは、不定形のものが多く、他地区の石器とは若干様相を異にする。円孔文土器には、大形スクレイパー、スクレイパー、石斧が共伴している。

II. 遺跡の環境と堆積物

1. 川上B遺跡周辺の地形・堆積物と斜面の地史

花岡正光*・福田正巳**

I. はじめに

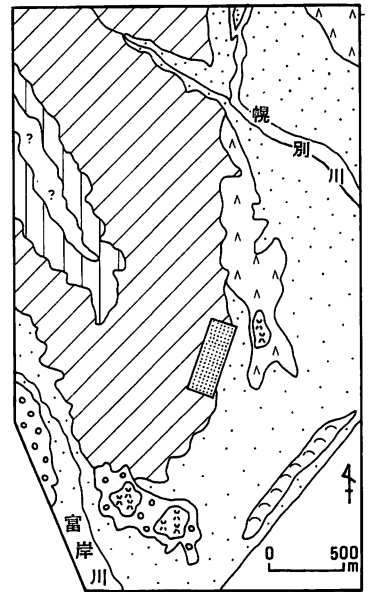
本遺跡内及びその周辺には、緩傾斜の波状の地形と、径1 mにも及ぶ巨礫堆積物が分布することが注目された。発掘の進展につれて巨礫の分布や堆積構造が捉えられるようになった。それらの観察によれば、地形や巨礫層の特徴は、寒冷環境下におけるソリフラクション (solifluction) によって形成されたことを推定させる。

ここでは、遺跡内の堆積物の記載を行なうとともに、地形と巨礫堆積物の成因・形成環境及び斜面の地史について考察する。なお、火山灰については本遺跡外のものについても若干触れている。

II. 遺跡を含む周辺の地質・地形の概要

登別市の位置する北海道南西部は、地質構造的にみれば東北日本弧内帯の北方への延長部に当たっており、中新世から更新世にかけての火山噴出物で特色づけられている。

遺跡周辺は、カムイヌプリ (幌別市街から北西へ6.5kmの標高750.1 mの峰) 一帯の安山岩類や倶多楽火山噴出物の軽石流堆積物が広く分布している。周辺の地質・地形は幌別川を境として大きく分けられる。左岸側では、倶多楽火山噴出物の軽石流がつくる非常に緩やかな、標高100 ~ 300 mの台地が広がる。右岸側では、カムイヌプリ・室蘭岳を中心とする比較的解析の進んだ、標高100 ~ 900 mの火山岩山地から成り、標高300 m以下では段丘や山麓の緩斜面が分布する。また断片的に、輝石に頗る富む赤橙色の降下軽石 (N, Us-c-佐々木, 1973-) が分布する (図II-1)。



*北海道大学大学院 環境科学研究科

**北海道大学低温科学研究所

図II-1 遺跡周辺の地形学図

遺跡内では、鮮新世の室蘭層の凝灰岩・頁岩を基盤として、巨角礫・沖積層・腐植土・降下火山灰が分布する。地形は、全体に起伏の小さい波状の緩斜面をなしており、発掘範囲の全域にわたって巨角礫が分布する。標高約10m以下には沖積低地が広がる。また、巨角礫層堆積面上には数本の旧河谷があって、基底には垂円～円の中礫が認められる。この旧河谷は腐植土によって埋積されている。F地区では、腐植土と指交する (interfinger) 小規模な崩壊性堆積物も認められる。

III. 堆積物の記載

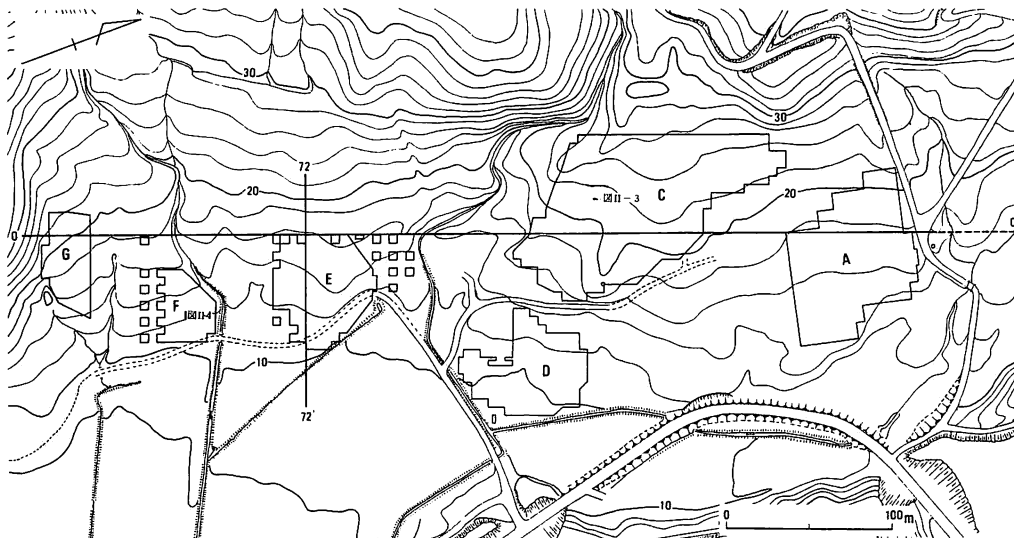
1. トレンチにみられる地質断面

発掘最終面 (巨角礫層堆積面) 以上の堆積物は、C地区・D地区・E地区と、F地区・G地区とでは若干異なっている。それぞれの代表的な地質断面として、L-89-c (C地区) と T-66-a (F地区) のトレンチ断面のスケッチを図II-3及び図II-4に示す (位置は図II-2を参照)。また、他地点での地質柱状図及び火山灰の対比については図II-5に示す。

各層の内容は下記の通りである。

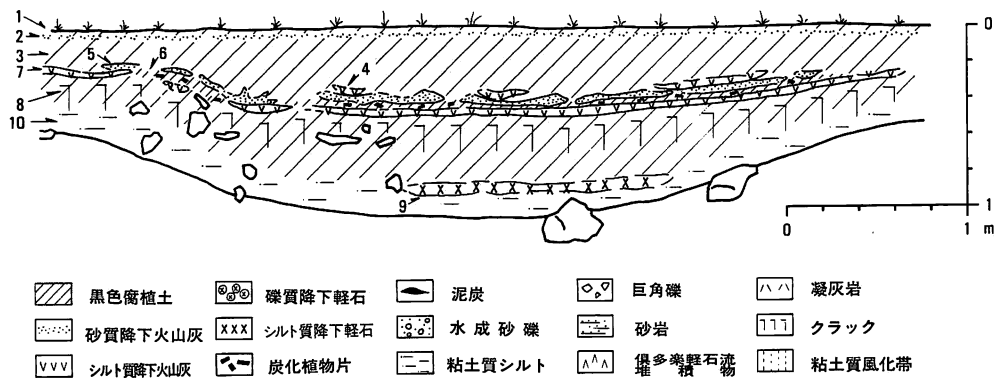
L-89-c (図II-3・図II-5)

- 1 黒色 (7.5YR2/1) シルト～中粒砂質腐植土、2cm。植物根を含む。本層の上部1cmは草本の根系層である。
- 2 灰白色 (2.5Y8/2) 中粒砂質降下火山灰、1cm。本層は現在の地表面下数cmの位置で比較的良好に追跡される。見かけの色調・鉱物組成 (軽鉱物に富む) は第5層に似るが、粒径が小さく (0.5mm)、層厚も薄い。



図II-2 断面作成位置

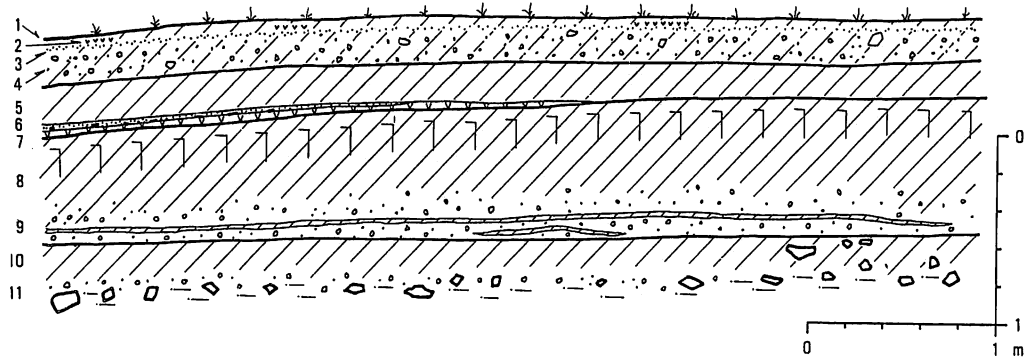
- 3 黒色 (7.5YR2/1) 砂質腐植土、34cm。径1cm±の軽石礫・植物根を含む。断面表面にはコケが附着し易く、本層相当層の他のトレンチ断面でも同様である。
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質降下火山灰、2cm。本層は連続性が悪く、このグリッドやE地区とF地区の間の小川の断面に認められる程度である。
- 5 灰白色 (2.5Y8/2) 粗粒砂質降下火山灰、2cm。粒径がほぼ1mmでよくそろっている。軽鉱物に富む。他のトレンチ断面では径1cm以下の白色の軽石礫を含むことがある。本層は連続的によく追跡され、遺跡の周辺にも分布する。
- 6 黒褐色 (5YR2/1) シルト質腐植土、1.5cm。本層は比較的連続性がよく、炭化植物片を含むのが特徴である。
- 7 褐色 (7.5YR4/3.5) シルト質降下火山灰、4cm。本層は第5層とともに最もよく連続的に追跡され、遺跡周辺にも広く分布する。
- 8 クラック入り赤黒色 (2.5YR1.7/1) シルト質腐植土、34cm。輝石安山岩の巨角礫を含む。第9・10層に漸変する。
- 9 明褐色 (7.5YR5/8) シルト質降下軽石、10cm。レンズ状に堆積している。上下の層との境界は漸変する。本層と同じ軽石は、遺跡内で発掘最終面上の凹地に、厚さ10cm±、径数十cmのレンズ状に散在して堆積している。D地区では縄文時代早期の住居跡内に堆積しているのが認められる。
- 10 巨角礫、50cm+。本層は径数十cm～1mの輝石安山岩の角礫と火山灰起源の黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトのマトリックスから成る。本層は遺跡内全域に分布する特異な堆積物で、遺跡背後の緩斜面上にも広く分布する。この巨角礫層の成因や形成環境についての詳細は後述する。



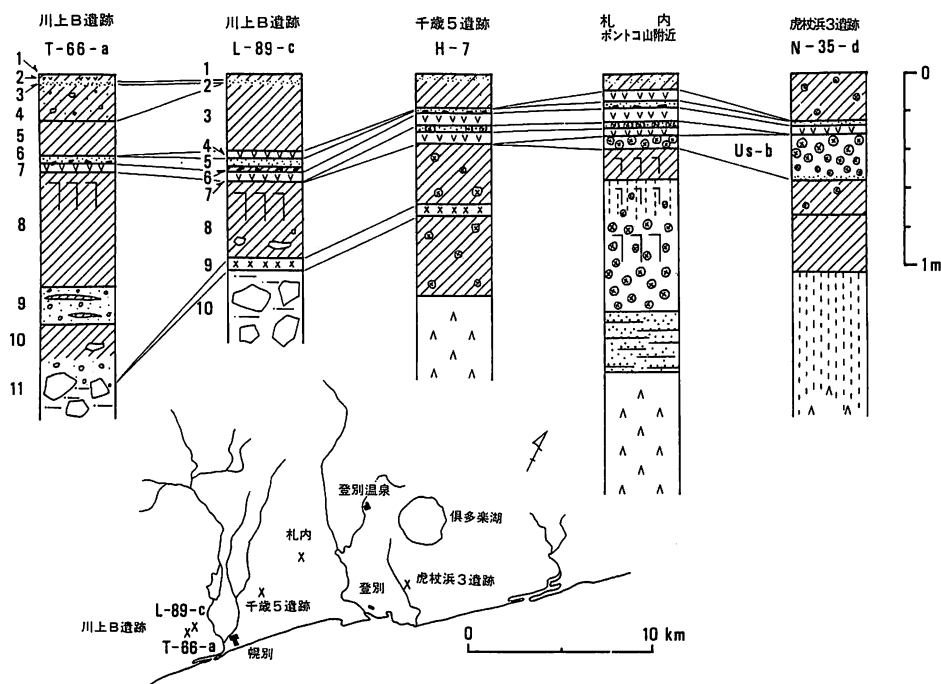
図II-3 グリッドL-89-cにおける地質断面

T-66-a (図II-4・図II-5)

- 1 黒色 (7.5YR2/1)粘土～シルト質腐植土、4cm。植物根を含む。上部は根系層となっている。
- 2 灰褐色 (7.5YR5/2)シルト質降下火山灰、0.3cm。本層は第7層に似るが、不連続で層厚は非常に薄く、遺跡内の他の断面ではほとんど認められない。
- 3 灰白色 (2.5Y8/2)中粒砂質降下火山灰、0.7cm。本層は第6層に似るが層厚は薄い。L-89-cの第2層に対比される。
- 4 水成角～亜円礫、21cm。安山岩の径1cm±の礫を主体として最大径15cmの礫を含む。礫は一般に橙色を帯び、くさり礫化しているものもある。
- 5 黒色 (5YR1.7/1)粘土～シルト質腐植土、18cm。本層には所どころに径1cmの軽石礫を含む。断面表面にはコケが附着し易い。本層はL-89-cの第3層相当層である。
- 6 灰白色 (2.5Y8/2)中粒砂質降下火山灰、1cm。粒径がほぼ1mmでよくそろった軽鉱物に富む火山灰である。基底には長さ1cm未満の炭化木片を含む。本層はL-89-cの第5層に対比される。
- 7 灰褐色 (7.5YR4/2.5)シルト質降下火山灰、2cm。本層は第6層とともに、最もよく連続的に追跡される。L-89-cの第7層に対比される。
- 8 クラック入り黒色 (7.5YR1.7/1)粘土～シルト質腐植土、45cm。L-89-cの第8層相当層である。
- 9 水成砂礫、20cm。径1cmの軽石の亜角～亜円礫を主体として最大径3.7cmの礫を含む。礫の表面は橙色を帯びている。厚さ1cm未満の腐植質シルトを挟む。
- 10 黒色 (N1.5/0)粘土質腐植土、14cm。まれに輝石安山岩の角礫を含む。本層はL-89-cの第8層相当層である。
- 11 礫、50cm+。輝石安山岩の径20cm±の角礫を主体とし、径1cm±のくさり礫化した凝灰岩の亜円礫を含む。マトリックスは砂まじり粘土。本層はL-89-cの第10層に対比され、遺跡内及びその周辺に広く分布する角礫層である。亜円礫を含む点については後述する。

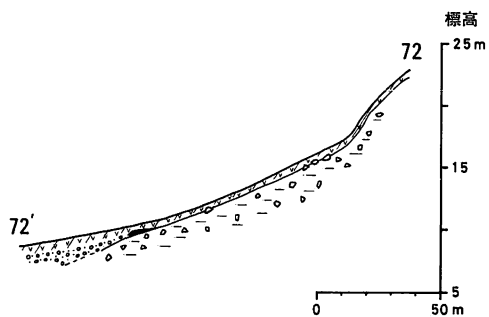


図II-4 グリッドT-66-aにおける地質断面 (凡例は図II-3参照)



図II-5 地質柱状図 (凡例は国II-3参照)

これら両断面に認められる降下火山灰は、図II-5から、L-89-cの第9層を除いて有珠山b降下軽石(Us-b-横山他、1973-、北海道火山灰命名委員会、1982のUs-cに同じ)よりも上位の火山灰であることは明らかである。L-89-cの第7層とT-66-aの第7層は、Us-bに整合的にのることや色調・粒度からUs-bに対比される。その年代は1663年と考えられている(横山他、1973)。その他の火山灰の噴出源・年代については目下のところ未詳であるが、L-89-cの第4層は有珠山IV a火山灰あるいは同III a火山灰(それぞれUs-IV a-1822年-、Us-III a-1853年-、横山他、1973)に対比されると考えられる。L-89-cの第2層やT-66-aの第2・3層についても有珠山起源と考えられる。L-89-cの第5層やT-66-aの第6層は駒ヶ岳起源の可能性もある(北海道火山灰命名委員会、1982の「Ko-c相当層」?)。L-89-cの第9層については、この層直上・直下の遺物との関係から年代的には縄文時代早期から同中期までの間と考えられるが、噴出源は不明である。



図II-6 72-72'に沿う断面 (凡例は図II-3参照)

2. その他の堆積物

D地区・E地区及びF地区の標高約10m以下では沖積層が分布し、沖積低地を形成している。粘土・砂・径数cmの垂角～円礫から成り、泥炭を挟む。この沖積層は巨角礫層堆積面を覆う（図II-6）。

巨角礫層よりも下位の地層（基盤）は、巨角礫層を切る小川の断面で認めることができる。その基盤は青灰色の凝灰岩で、砂・径数cmの安山岩や緑色凝灰岩の礫を含み、部分的に頁岩を挟む。層厚不明。小川の断面で見ると、本基盤は地表下約2mの所に認められる。そこでは巨角礫層の厚さは2m程であって、巨角礫層基底面の形態もおそらく巨角礫層堆積面に平行的であることが予想される。（図II-7）。

IV. 巨角礫層について

1. 現在の気象環境

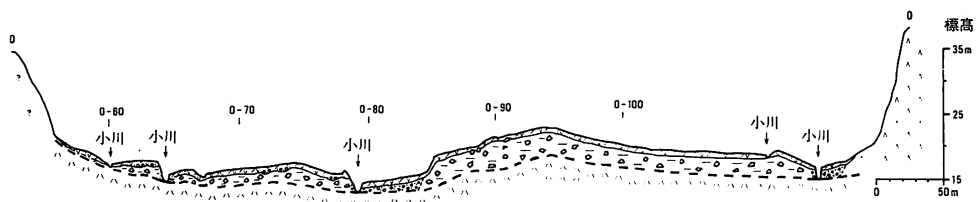
北海道のような寒冷地域では、地形形成や斜面堆積物の生産には内的要因にも増して、地盤に働きかける外的要因としての気象条件が大きく効いてくると考えられる。そこでまず、現在の気象環境とそれに関連する地盤の凍結深を明らかにして、地盤や一度生産された斜面堆積物の不安定さに及ぼす効果を考えることにより、巨角礫層の成因を考察する手だてとする。

1974～1975年の積算寒度値の分布を図II-8に示す。この図から登別市附近では約400℃・daysで、道内ではかなり温暖な地域となっている。図II-9に1941～1970年の平均最深積雪の分布を示す。登別市附近では50cm以下で、道内では最も積雪量の小さい地域となっている。図II-10には、1975年の除雪条件下での最深凍結深の分布を示す。登別市附近では30～40cmと推定される。

以上の気象条件や凍結深から、登別市附近では、現在は比較的温暖ながらも無積雪期には地盤の凍結を受けており、過去の寒冷期にはより寒冷な気候環境下での凍結を蒙ったことが予想される。

2. 巨角礫層の成因

結論的に言えば、遺跡内全域及びその背後の斜面にわたって広く分布する巨角礫は、寒冷環境下で生産・運搬された岩海(Washburn, 1979) 堆積物と考えられる。その理由は以下の通り

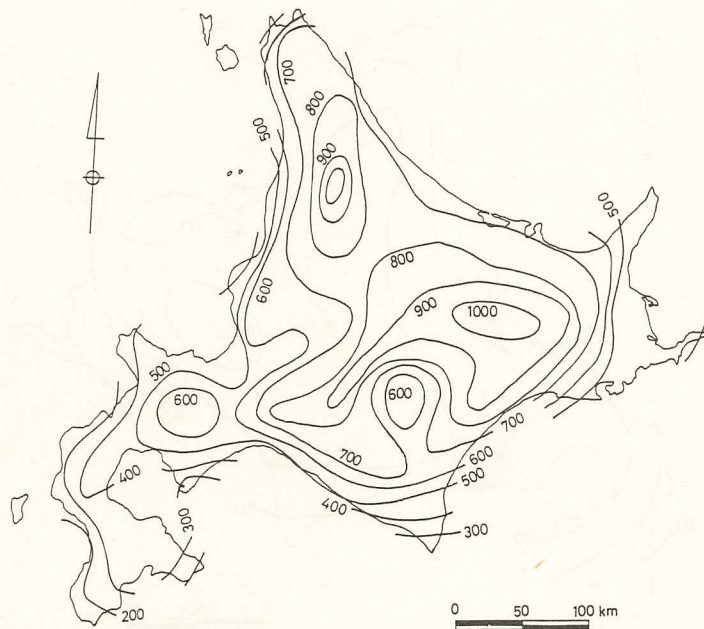


図II-7 0-0に沿う断面（凡例は図II-3参照）

である。

地形から見ると、遺跡ののる斜面（巨角礫層堆積面）は、縦断方向には $8\sim 10^\circ$ の緩傾斜で遺跡背後の斜面へ連続しており、横断方向には小起伏の波状の地形を呈している（図II-6・図II-7）。この小起伏波状の緩斜面には深い谷の切れ込みもなく、遺跡背後に向かって広く浅い凹地状斜面へと連続している。それらの斜面はカムイヌプリから延びてきている支尾根へ連続していて、崩壊地形を認めることができない。

次に堆積物の特徴からみると、まず、本巨角礫層を構成する礫は輝石安山岩で、本層下位の凝灰岩と岩種が異なっており、基盤岩の原地性の風化物ではなくて明らかに他所から供給されたものである。次に、平面的な拡がりをもって分布している点が注目される（付図参照）。本巨角礫が崩壊性の堆積物であるならば、その平面的分布形態は舌状あるいは線状となるであろうが、そのような分布を示さない。堆積物の粒度組成の点からみると、本巨角礫層は、径数十cm \sim 1mの巨礫から一気にシルトの粒度に急変し、それらの中間の粒度の物質に極めて乏しい。崩壊性や流水の堆積物であれば、淘汰不良の様々な粒度の物質が含まれるが、そのような性質がない。さらに、マトリックスの粘土質シルトの間で、長軸をほぼ垂直にして立ち上がりを示している礫もある。（写真V-1-2・VI-5-1・VIII-1-1）。凍上はシルト質土で最も起り易いことが知られている。以上の地形や堆積物の特徴から、本巨角礫層は、前述したような過去のより寒冷な気候環境下（周氷河環境下）での岩盤の剝離作用、及びソリフラクションによって斜面を面的拡がりをもって運搬されてきた岩海堆積物だと考えられる。



図II-8 北海道における積算寒度値の分布(1974年11月1日～1975年2月28日, $^\circ\text{C}\cdot\text{days}$)

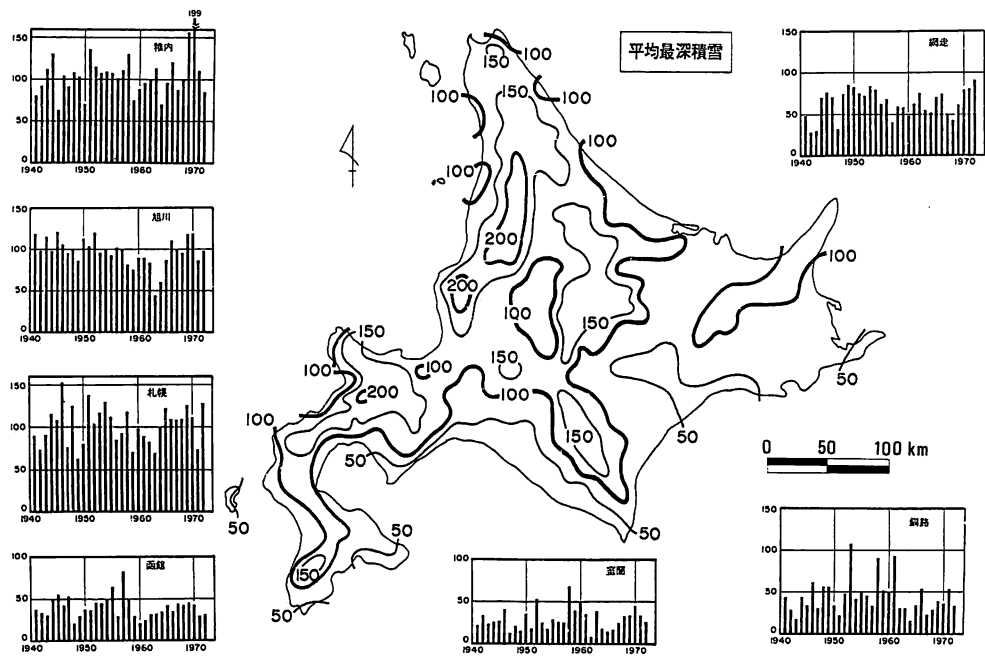


図 II - 9 平均最深積雪の分布図と最深積雪の年々変化図 (1941年~1970年、cm)

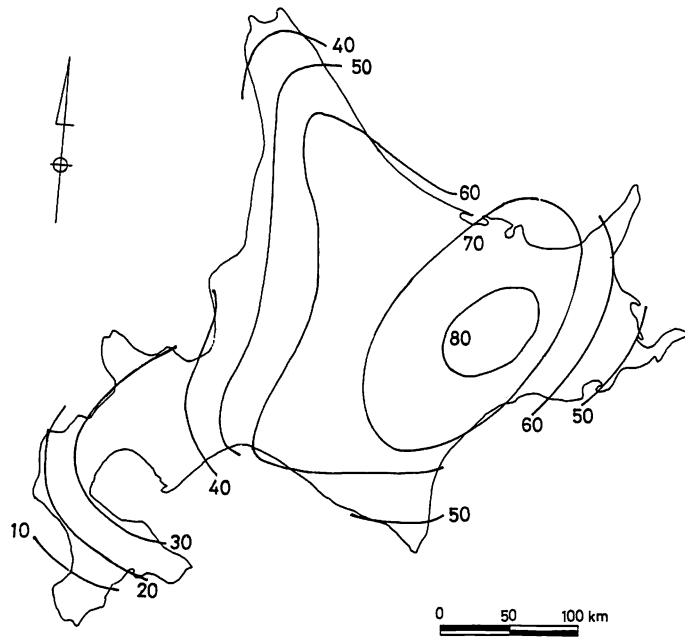


図 II - 10 北海道における土の最深凍結深の分布 (1975年, 除雪条件, cm)

3. 巨角礫層の時代

時代を決定する確実な証拠はないが、図II-6でも明らかのように、巨角礫層堆積面が沖積層に覆われることから、完新世よりも古い。また寒冷期の堆積物であるので、現在よりもはるかに寒冷な一氷期、おそらくヴェルム氷期の最寒期であると推定される。

V. 斜面の地史

以上述べてきた堆積物の特徴や遺構・遺物から、遺跡ののる斜面の地史は以下のように考えられる。

1 巨角礫層は過去の寒冷期に形成されたものである。この巨角礫の生産・運搬と同時あるいは遅れて、火山灰起源の粘土質シルト（L-89-cの第10層、T-66-aの第11層）が堆積した。この粘土質シルトは、亜円～円の細礫を含んだりすることから火山灰の二次堆積物である。周氷河環境下で、礫は凍上によって立ち上がりを示すものもあった。

2 次いで、巨角礫層堆積面上には小川が流れるようになり、その流路には径数cmの亜円～円礫を薄く堆積させた。また巨角礫間の隙間をも埋めた（例えば、J-90からM-89方向への凹状地内やT-66-aの第11層の亜円礫）。また、流水の作用によって粘土質シルトが洗い流され、E地区でみられるように直線状に巨角礫が露出する場所もできた。

3 縄文時代早期と中期の間にシルト質の降下軽石の堆積をみた（L-89-cの第9層）。この軽石は、表面流出水によって洗い流されて、巨角礫層堆積面の凹地や縄文時代早期の住居内にレンズ状に残っているにすぎない。

5 この軽石堆積後からシルト質物質の堆積が盛んになり、巨角礫層堆積面上の旧河谷を埋積し腐植を集積させ（L-89-cの第8層、T-66-aの第8・10層）、また、それに先行して沖積層が巨角礫層堆積面を覆った。これらの堆積期は、おそらく縄文海進による高海水準期で、附近一帯は湿地の環境であったと考えられる。F地区では、表面流出水で運ばれてきた小規模な崩壊起源の堆積物をこの腐植土中に挟んでいる（T-66-aの第9層）。

6 次いで、有珠山起源の火山灰（L-89-cとT-66-aの第7層、1663年）の堆積をみた。この火山灰は、その上位の砂質火山灰（L-89-cの第5層、T-66-aの第6層）とともに巨角礫層と黒色腐植土（L-89-cとT-66-aの第8層）の直上をほとんど途切れることなく覆っている。したがって、これらの火山灰堆積後は巨角礫層の移動は起こっていないと考えられる。

7. さらに、表面流出水によって移動してきた物質を母体とする腐植土（L-89-cの第3層、T-66-aの第5層、多分に耕作の影響を受けている）の形成、F地区ではこの腐植土層の上位に、流水による小規模な崩壊性堆積物（T-66-aの第4層）をみ、より新期の火山灰薄層（L-89-cの第2層、T-66-aの第2・3層）に覆われて現在に至っている。

末筆ながら、現地で火山灰に関して御教示頂いた北海道教育大学春日井昭教授、調査の機会を与えられた北海道埋蔵文化財センターの諸氏に深く感謝します。

注

- 1) Washburn(1979)によれば、岩海 (block field) とは、中～大の角張った岩塊によって地表の50%以上が覆われたかなり広い平坦地またはごく緩やかな斜面 (10° 以下) を指す。そのような岩塊の堆積は周氷河状態を記録したものであって、角張った堆積物は凍結作用を強く示唆している。

参考文献

- Butzer, K. W. (1971): Environment and archeology—an ecological approach to prehistory (2nd ed.). Chicago, Aldine, 703pp.
- 福田正巳・武田一夫 (1975) : 北海道における昭和49～50年冬の積算寒度値の分布. 低温科学物理篇資料集, 33, pp. 85—91.
- 北海道火山灰命名委員会 (1982) : 北海道の火山灰. 札幌, 23pp.
- 木下誠一・福田正巳・矢作 裕 (1978) : 北海道における土の凍結深の分布. 自然災害科学資料解析研究, Vol. 5, pp. 10—15.
- 斎藤昌之・小山内 熙・酒匂純俊 (1953) : 5万分の1地質図幅「登別温泉」及び同説明書. 北海道地下資源調査所.
- 佐々木竜男 (1972) : 後志南部のテフラについて. 北農試土性調査報告No.21, 後志支庁管内土性調査報告, その2, pp. 113—120
- Washburn, A. L. (1979) : Geocryology—A survey of periglacial processes and environments. London, Edward Arnold. 406pp.
- 横山 泉・勝井義雄・大場与志男・江原幸雄 (1973) : 有珠山—火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策. 北海道防災会議, 札幌, 254 pp.

2. 縄文海進以降の古植生について

山田 悟郎*

1. 試料

ここで取扱った試料は、昭和57年度の発掘調査期間中に地質調査を兼ね現地を訪れた際に、D地区Y-83-a北壁より採取したものである。

試料採取地点は扇状地の末端が沖積低地と接する付近で、採取した試料は縄文海進によって高くなった海水面が低下し、海岸線が後退する際に形成された低湿地に堆積した泥炭・泥炭質シルト・泥炭質砂・シルト・火山灰の22点である。

層序は上位より、1層、粗粒砂を多量に含む泥炭質シルト(23cm)、2層、泥炭(6cm)、3層、火山灰(1.5cm)、4層、泥炭(4.5cm)、5層、外来礫を含む水磨された軽石(4cm)、6層、泥炭(3cm)、7層、軽石(2.5cm)、8層、軽石を含む泥炭(0.5cm)、9層、火山灰(4cm)、10層、泥炭質シルト(4cm)、11層、シルト(25cm)、12層、火山灰(Ko-e層? 2cm)、13層、泥炭(18cm)、14層、泥炭質緑灰色粗粒砂(20cm)に細分され、以下は地下水面下となるため詳細は不明である。

2. 試料処理および表示について

1) 処理方法

試料処理にあたって、泥炭は乾燥重量5g、泥炭質シルト・砂・シルト・火山灰については10gを50cc遠沈管にとり分析に供した。

アルカリ処理→水洗→比重分離→水洗→アセトリシス処理→時計皿処理→HF処理→水洗の順に物理・化学処理を行い、グリセリンゼリーで封入し、マニキュア液でシールして各3枚のプレパラートを作成した。

2) 表示方法

検鏡にあたっては樹木花粉が200個以上になるまでに出現した花粉・胞子を無作為に同定し計数した。

表示にあたっては、樹木花粉については樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉・胞子については総花粉・胞子数を基数とした百分率で花粉ダイヤグラムに表示した。

また、樹木・草本花粉・胞子のそれぞれの構成比も百分率で表示した。

3. 検出された花粉・胞子

22点の試料から樹木花粉31属2科、草本花粉2属22科、胞子4科を検出した。

その内訳および想定される母植物は下記のとおりである。

針葉樹：*Picea* (トウヒ属：エゾマツ)、*Abies* (モミ属：トドマツ)、*Pinus* (マツ属：ゴヨウマツ・ハイマツ)、*Cryptomeria* (スギ属：スギ)、*Cupressaceae* (ヒノキ科：アスナロ)

*北海道開拓記念館

広葉樹：*Alnus* (ハンノキ属：ハンノキ・ヤマハンノキ)、*Betula* (カバノキ属：シラカンバ・ウダイカンバ)、*Castanea* (クリ属：クリ)、*Phellodendron* (キハダ属：キハダ)、*Styrax* (エゴノキ属：ハクウンボク)、*Fagus* (ブナ属：ブナ)、*Juglans* (クルミ属：オニグルミ)、*Carpinus* (クマシデ属：サワシバ)、*Corylus* (ハシバミ属：ツノハシバミ)、*Fraxinus* (トネリコ属：ヤチダモ・アオダモ)、*Acer* (カエデ属：エゾイタヤ・ハウチワカエデ・ヤマモミジ等)、*Aesculus* (トチノキ属：トチノキ)、*Quercus* (コナラ属：コナラ・ミズナラ)、*Euonymus* (ニシキギ属：オオツリバナ・ツリバナ等)、*Ulmus* (ニレ属：ハルニレ・オヒョウニレ)、*Cornus* (ミズキ属：ミズキ)、*Magnolia* (モクレン属：ハウノキ・キタコブシ)、*Salix-Populus* (ヤナギ—ハコヤナギ属：ドロノキ・オノエヤナギ・バツコヤナギ・ネコヤナギ等)、*Tilia* (シナノキ属：シナノキ・オオバボダイジュ)、*Sorbus* (ナナカマド属：ナナカマド・アズキナシ)、*Rhus* (ウルシ属：ヤマウルシ・ツタウルシ)、*Ilex* (モチノキ属：ハイイヌツゲ)、*Araliaceae* (ウコギ科：ハリギリ・コシアブラ・タラノキ)、*Cercidiphyllum* (カツラ属：カツラ)、*Sambucus* (ニワトコ属：エゾニワトコ)、*Hydrangea* (アジサイ属：ノリウツギ・ツルアジサイ)、*Morus* (クワ属：ヤマグワ)、*Vitis* (ブドウ属：ヤマブドウ・エビズル)

草本：*Chloranthaceae* (センリョウ科：ヒトリシズカ・フタリシズカ)、*Polygonaceae* (タデ科：エゾノギンギシ・オオミゾソバ・オオイタドリ等)、*Chenopodiaceae* (アカザ科：シロザ・ハマアカザ等)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科：エゾカワラナデシコ・タチハコベ・ミミナグサ等)、*Ranunculaceae* (キンポウゲ科：ニリンソウ・アキカラマツ・カラマツソウ・キツネノボタン等)、*Rosaceae* (バラ科：ヤマブキシヨウマ・オオダイコンソウ・オニシモツケ・キンミズヒキ等)、*Labiatae* (シソ科：イヌゴマ・カワミドリ等)、*Leguminosae* (マメ科：キンミズヒキ・クサフジ・ヌスビトハギ)、*Haloragaceae* (アリノトウグサ科：アリノトウグサ)、*Umbelliferae* (セリ科：セリ・エゾニユウ)、*Plantaginaceae* (オオバコ科：オオバコ)、*Carduoideae* (キク科：アキタブキ・ヨツバヒヨドリ・ヨブスマソウ・コウゾリナ・エゾノサワアザミ等)、*Artemisia* (ヨモギ属：オオヨモギ)、*Potamogetonaceae* (ヒルムシロ科：ヒルムシロ)、*Lysichiton* (ミズバショウ属：ミズバショウ)、*Liliaceae* (ユリ科：オオウバユリ・バイケイソウ・ユキザサ・マイズルソウ等)、*Iridaceae* (アヤメ科：ヒオウギアヤメ・ノハナショウブ)、*Commelinaceae* (ツユクサ科：ツユクサ)、*Geraniaceae* (フウロソウ科：チシマフウロウ)、*Cruciferae* (アブラナ科：タネツケバナ・コンロンソウ・ヤマガラシ等)、*Hypericaceae* (オトギリソウ科：トモエソウ・オトギリソウ等)、*Typhaceae* (ガマ科：ガマ)、*Cyperaceae* (カヤツリグサ科：アブラガヤ・オクノカンスゲ等)、*Gramineae* (イネ科：イワノガリヤス・ヨシ・ススキ等)

孢子：*Osmundaceae* (ゼンマイ科：ゼンマイ・ヤマドリゼンマイ等)、*Lycopodiaceae* (ヒカゲノカズラ科：ヒカゲノカズラ・ミズスギ等)、*Monolote type spore* (シダ類：オシダ・メシダ・ヒメシダ等)、*Pteridaceae* (ワラビ科：ワラビ・クジヤクシダ等)

2) 出現傾向

樹木花粉では、*Alnus*・*Quercus*・*Ulmus*の広葉樹が優勢で、次いで針葉樹の*Abies*・*Pinus*と広葉樹の*Phellodendron*・*Betula*・*Fagus*・*Juglans*・*Carpinus*・*Fraxinus*・*Salix*・*Populus*・*Acer*・*Araliaceae*が多く出現する。

一般に針葉樹は低率であるが、13～11層下半部にかけて*Picea*・*Abies*が増加し、*Alnus*・*Quercus*・*Ulmus*とともに優勢を示す。また、*Araliaceae*も11層上部と10層で急増し優勢を示す。

*Alnus*は下半部で10～40%の範囲で著しい増減をくりかえすが、中位で安定し上位にかけて次第に増加する傾向をみせる。*Quercus*は小幅な増減をくりかえしながら上位にむけて次第に減少する。他の樹木には大きな変化はみられない。

また、北海道には自生しない*Cryptomeria*と北海道西南部日本海側にのみ分布する*Cupressaceae*が、1%弱ではあるが確認されるとともに、黒松内低地帯を自生北限地とする*Fagus*が2～4%弱ではあるが、連続して出現する。

草本花粉・胞子では*Gramineae*・*Monolate type spore*が全般に優勢を示し、上位で*Lysichiton*も優勢となる。次いで、*Ranunculaceae*・*Rosaceae*・*Artemisia*・*Cyperaceae*・*Osmundaceae*が多く出現する。

*Gramineae*は全般に優勢を示すものの、下位から中位にかけて増加し、上位で再び減少する変化を示す。*Gramineae*が増加する中位では*Cyperaceae*が減少する。*Monolate type spore*は13層で一時的に急増する以外は小幅な増減をくりかえすのみである。*Lysichiton*は下位で1～2%弱であるが、中位から上位にむけて次第に増加し上位では30%を越す出現率となる。*Artemisia*も下位で1～2%弱であったものが、中位～上位にかけて増加し3～6%の出現率となる。一方、*Osmundaceae*は下位～中位で2～6%の出現率であるが上位で1～2%と減少する。

その他、出現率は1～2%と低いものの*Haloragaceae*・*Liliaceae*・*Iridaceae*・*Typhaceae*・*Labiatae*・*Potamogetonaceae*等の湿地や水域を好む草本の花粉が連続して確認される。

4. 古植生について

1) 堆積物の年代

川上B遺跡D地区、Y-83-aは扇状地の末端と沖積低地が接する付近の沖積低地側に位置し、堆積物も泥炭・泥炭質シルト・砂・火山灰・シルトからなる。いずれも縄文海進以降に海岸線が後退するにつれ形成が進んだ海岸低湿地の堆積物である。

泥炭の堆積は連続したものではなく、シルト、砂質が搬入され堆積し、水域への水の流入が安定したものでなかったことを物語っている。泥炭にも多少の腐植土が混入している。

試料を採取するに際して、外来礫を含む円磨された軽石（5層）を含め5枚の火山灰、軽石を確認したが、最下位の12層とした火山灰は色調・粒度等からKo-e降下火山灰に対比される。

Ko-e層の降下年代については、腐植酸を使用したC⁽¹⁾年代測定で1,700±130y.B.P.とされているが、八雲町熱田遺跡で土師器が出土する住居址を被っていることから⁽²⁾1,200年前頃に降下したものと考えられる。

したがって、14層の泥炭質粗粒砂が堆積したのは、Ko-e火山灰降下時より若干古い時代であったと考えられる。

2) 古植生について

分析結果の項で述べた花粉群集をもとに、川上B遺跡が位置する扇状地先端に泥炭質砂が堆積しはじめてから現在までの古植生は次のように堆定される。

扇状地の端を流れる河川沿いにはミズナラ・ハルニレ・エゾイタヤ・ハリギリ・オニグルミ・キハダ・トチノキ・シナノキ・ホオノキ・サワシバ・シラカンバ・エゾノサワアジサイ等からなる溪畔林が分布していた。同地付近はトチノキの自生分布東限にあたる。ここで確認されたトチノキはブナ林分布域では溪畔林としてのトチノキ-サワグルミ林を形成するが、ブナ林分布域をはずれた幌別付近ではミズナラ-カツラー-オニグルミ林の一構成種となるにすぎない。クリも混じていた。

一方、遺跡の前面にひろがる低湿地沿いには、ハンノキを主としヤチダモ・ヤナギ類を混じた低混地林が分布し、林床下には、ヨシ・アブラガヤ・ガマ・ミズバショウ・オニシモツケ・エゾノサワアザミ・ヒメシダ・ヤマドリゼンマイ・オオミゾソバ・イワノザリヤス・アリノトウグサからなる群落ที่ 繁り、ヨシ・ヒメシダ・オニシモツケ・アブラガヤが優占していた。11層から上位にかけてミズバショウが増えはじめ優占種となった。

比較的乾燥した扇状地末端にはオオイタドリ・エゾニュウ・オオヨモギ・アキカラマツ・クサフジ等からなる草本群落が分布したが次第にオオヨモギが増加した様子がうかがわれる。

Cupressaceae, *Cryptomeria*の針葉樹花粉が確認されたが、*Cryptomeria*は本道に自生せず、Cupressaceaeは本道西南部日本海側に分布する針葉樹であることから、風により本州・本道西南部から運搬されたのであろう。*Picea*・*Abies*・*Pinus*の針葉樹も遺跡周辺に分布したのではなく、背後の山地から風で供給されたものであり、黒松内低地帯を自生北限とする*Fagus*も風によって運搬されたものである。

樹木花粉構成から、ここで確認された花粉群集は、NAKAMURA⁽³⁾(1952)、塚田⁽⁴⁾⁽⁵⁾(1967、1974)によるR III帯の花粉帯に対比される。

5. まとめ

川上B遺跡の発掘に際して得た土壌試料の花粉分析を行った結果、次のことがあきらかとなった。

1) 試料を採取した低湿地堆積物の下限年代はKo-e層が降下した約1,200年前より若干古い時代である。

2) 樹木花粉31属2科、草木花粉2属22科、孢子4科の33属28科の花粉・孢子からなる花粉

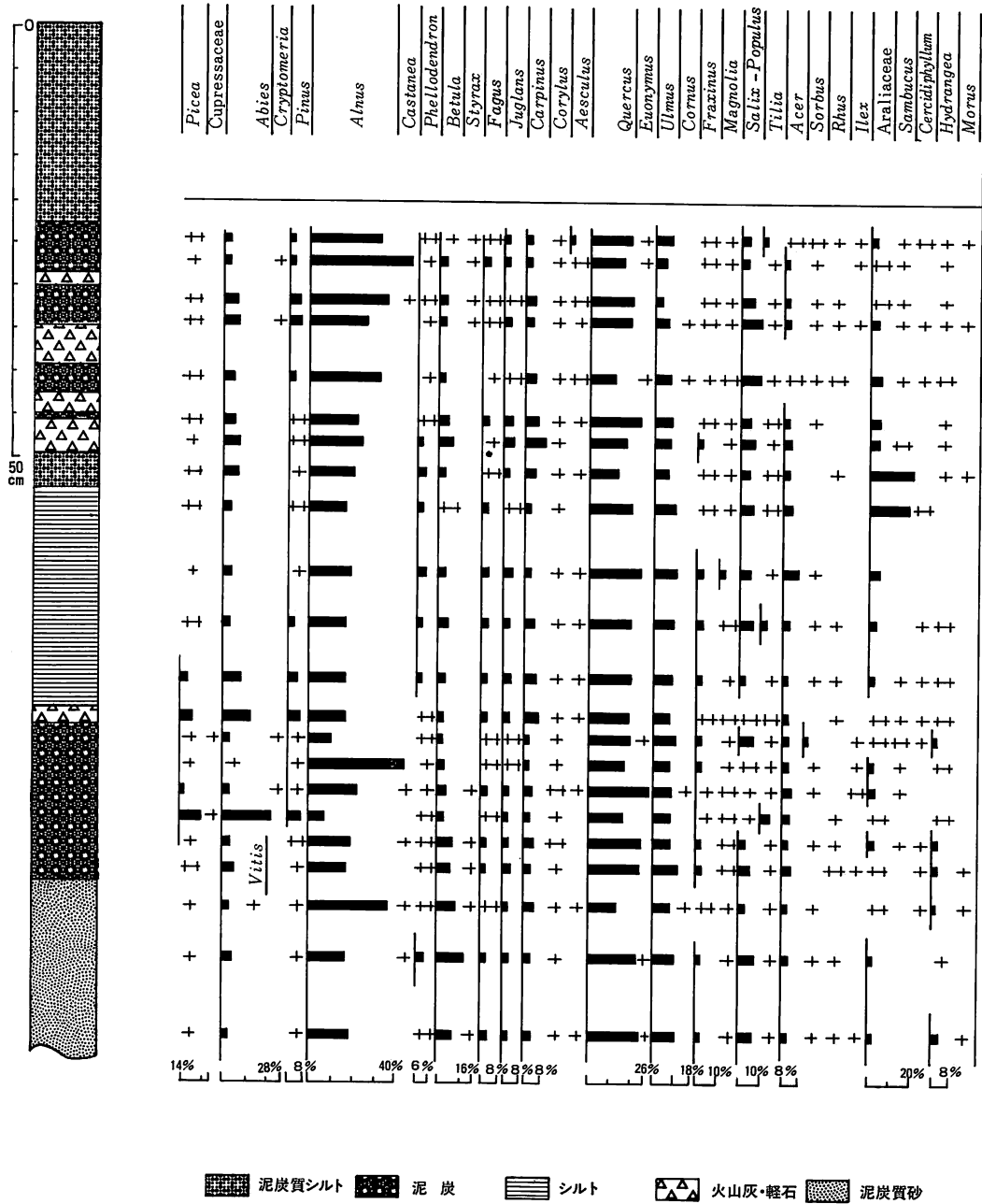
群集が確認された。

3) 花粉群集から、溪谷沿にはミズナラ・ハルニレ・ハリギリ・サワシバに若干のトチノキをまじえた溪畔林が、低湿地にはハンノキを主とした低湿地林が分布し、低湿地林の林床にはヨシ・アブラガヤ・オニシモツケ・ヒメシダ・ヤマドリゼンマイ・ミズバショウを主とした群落が繁り、比較的乾燥した扇状地末端にはアキカラマツ・オオヨモギを主とした群落が分布していたことがあきらかとなった。

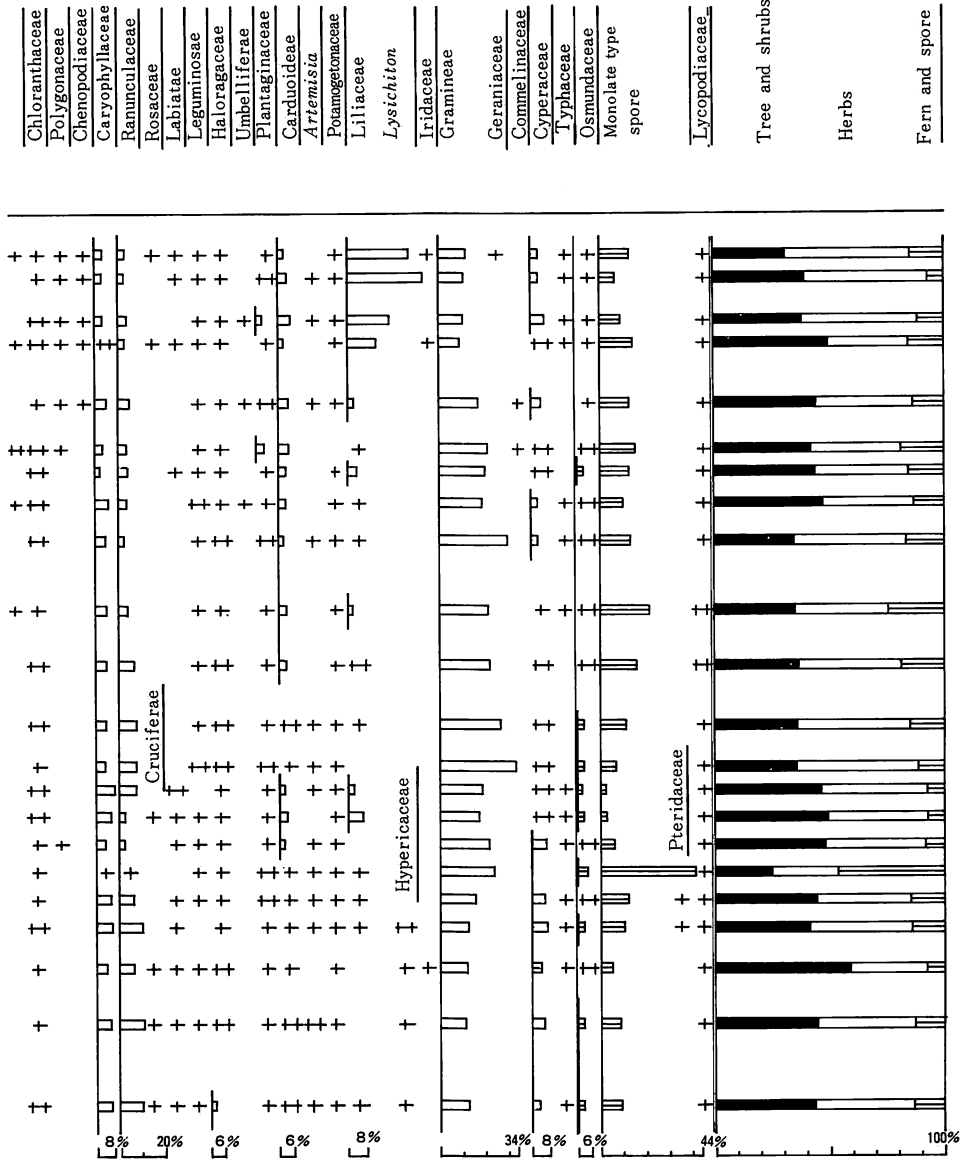
引用・参考文献

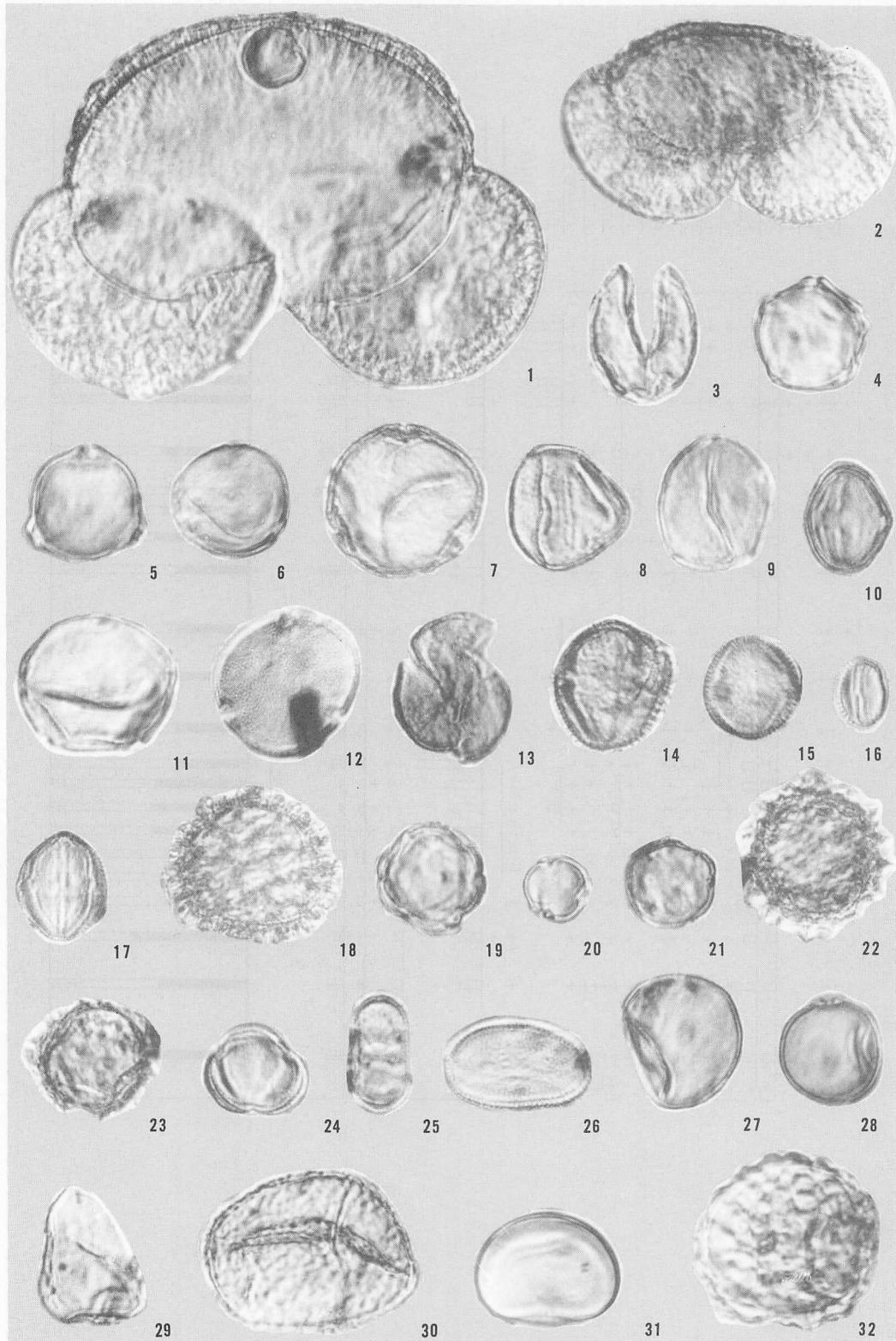
- (1) 北海道火山灰命名委員会 (1979) : 北海道の火山灰分布図
- (2) 武内収太・山田悟郎 (1968) : 山越郡八雲町熱田遺跡における緊急調査報告、ゆうらふ 2
- (3) NAKAMURA J. (1952) : A comparative study of Japanese pollen records. Res. Rep., Kochi:Univ., 1 (8) 1-20
- (4) 塚田松雄 (1967) : 過去一万二千年間、日本の植生変遷史 I、植物学雑誌、80、326-336
- (5) 塚田松雄 (1974) : 古生態学、生態学講座15巻、223-225、共立出版

1. <i>Abies</i>	No.17	17. <i>Rhus</i>	No.19
2. <i>Pinus</i>	No.13	18. Polygonaceae	No.19
3. <i>Cryptomeria</i>	No.16	19. Rosaceae	No.21
4. <i>Alnus</i>	No.2	20. Rosaceae	No.22
5. <i>Betula</i>	No.21	21. Ranunculaceae	No.19
6. <i>Carpinus</i>	No.13	22. Carduoideae	No.16
7. <i>Fagus</i>	No.21	23. Carduoideae	No.3
8. <i>Quercus</i>	No.22	24. <i>Artemisia</i>	No.3
9. <i>Ulmus</i>	No.22	25. Umbelliferae	No.22
10. Araliaceae	No.22	26. <i>Lysichiton</i>	No.3
11. <i>Juglans</i>	No.21	27. Gramineae	No.13
12. <i>Tilia</i>	No.17	28. Gramineae	No.9
13. <i>Acer</i>	No.10	29. Cyperaceae	No.21
14. <i>Phellodendron</i>	No.21	30. Osmundaceae	No.22
15. <i>Fraxinus</i>	No.21	31. Monolate type spore	No.17
16. <i>Salix -Populus</i>	No.22	32. Monolate type spore	No.10



図II-11 川上B遺跡の花粉分析結果





1. 川上B遺跡の花粉

III 遺物の分類

本遺跡は、A、C～Gまでの6地区にわかれており、そこから出土する遺物は、地区ごとに異なった時期のものが多い。しかし、地区ごとに分類基準を設けるのは繁雑であり、遺跡全体を通して埋蔵文化財センターの分類⁽¹⁾を基準として使用することにした。従って、ここでは大まかな区分のみを記すことにとどめ、各分類の特色はそれぞれの章で述べることにする。

土器は、縄文時代早期に属する資料をI群とし、以下順次前、中、後、晩期を、II群、III群、IV群、V群とした。続縄文時代以降に属する資料は、出土していない。

石器等については、礫・礫片、土・石製品（玉類、玦状耳飾、土製円盤等）を分類対象から除外し、昨年度⁽²⁾の分類に若干補足して使用した。

1 土 器

<I群>

縄文時代早期に属する土器群、本群はa、bの2類に分類され、後者はさらにb-1、b-2、b-3、b-4の4類に細分される。

a類 貝殻文、条痕文のある土器群。

b類 縄文、撚糸文、組紐圧痕文、貼付文等のある土器群。

b-1類 東釧路III式に相当するもの

b-2類 コッタロ式に相当するもの

b-3類 中茶路式に相当するもの

b-4類 東釧路IV式に相当するもの

<II群>

縄文時代前期に属する土器群 胎土に植物性繊維を多量に含むもので、a、bの2類に分類される。前者はさらにa-1、a-2の2類に細分される。

a類 縄文尖底土器群

a-1類 網文土器とそれに伴う斜行縄文、羽状縄文、組紐回転文等の施された土器群

a-2類 春日町式、中野式に相当するもの

b類 円筒土器下層式に相当するもの、および植苗式から大麻V遺跡出土資料に相当するもの。今回の調査では出土していない。

<III群>

縄文時代中期に属する土器群、本群はa、bの2類に分類される。後者はさらにb-1、b-2、b-3類に細分される。

a類 円筒土器上層式に相当するもの

III 遺物の分類

b 類

- b-1 類 天神山式、見晴町式に相当するもの
- b-2 類 柏木川式、大安在B遺跡出土資料に相当するもの
- b-3 類 北筒式、ノダツップII式、静狩式、レンガ台式に類似するもの

<IV群>

縄文時代後期に属する土器群、本群は a、b、c の3類に分類される

- a 類 余市式、入江式に相当するもの 入江貝塚第3貝層出土資料⁽⁴³⁾、鳥崎遺跡出土資料⁽⁴⁴⁾、大津遺跡B地点出土資料⁽⁴⁵⁾に相当するものと、涌元式、手稲砂山式⁽⁴⁶⁾に類似するものを含む。
- b 類 船泊上層式、手稲式および茶津洞穴IV層出土資料に相当するもの ウサクマイ遺跡群C地点出土資料⁽⁴⁷⁾に類似するものを含む。
- c 類 堂林式および茶津洞穴III層資料に相当するもの

<V群>

縄文時代晩期に属する土器群は a、b、c の3類に分類される。

- a 類 大洞B、BC式に相当するもの 上ノ国式に類似するものを含む。
- b 類 大洞C₁、C₂式に相当するもの
- c 類 大洞A式に相当するもの タンネットウL式を含む。

<VI群>

続縄文時代の土器群

<VII群>

擦文時代の土器群

注

- 1) 北海道埋蔵文化財センター 昭和55年度 『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』
- 2) 北海道埋蔵文化財センター 昭和56年度 『吉井の沢の遺跡』
- 3) 名取武光・峰山巖 昭和33年 「入江貝塚」 『北方文化研究報告』第13輯
- 4) 森町教育委員会 昭和50年 『鳥崎遺跡』
- 5) 松前町教育委員会 昭和49年 『松前町大津遺跡発掘報告書』
- 6) 石川徹 昭和42年 「札幌郡手稲砂山出土の土器について」 『北海道考古学』3
- 7) 千歳市教育委員会 昭和49年 『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』

2 石器

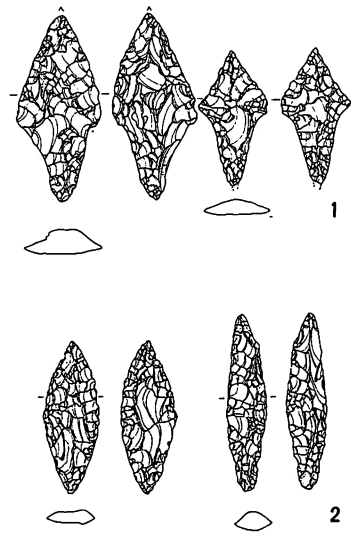
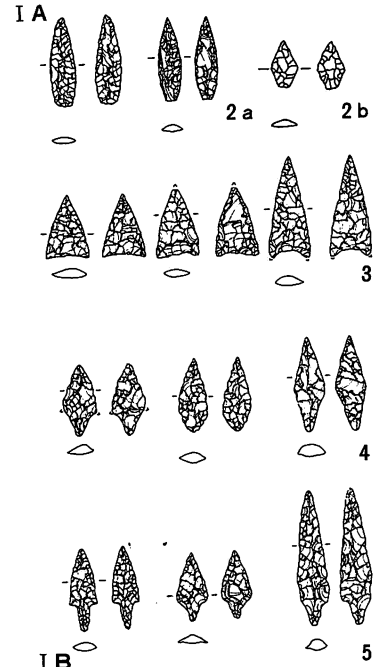
<I群> 石鏃・やり先類

A 石鏃

- 1 石刃鏃
- 2 細身で薄いもの、基部が内湾するものもある
 - a 柳葉形のもの
 - b 五角形のもの
 - c 大形のもの
- 3 三角形のもの
(基部にえぐりのあるものも含む)
- 4 明瞭な基部がないもの
(ひし形、基部が丸くなるもの)
- 5 基部があるもの
- 8 破片など
- 9 今後、分類を必要とするもの

B やり先またはナイフ

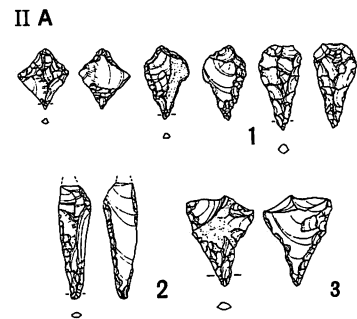
- 1 基部があるもの
- 2 明瞭な基部がないもの
(ひし形のものも含む)
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの



<II群> 石錐類

A 石錐類

- 1 刺突部をつくりだしたもの
(刺突部が複数のもものもある)
- 2 棒状のドリル
- 3 棒状のドリルにつまみ部がつくりだされたもの
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの

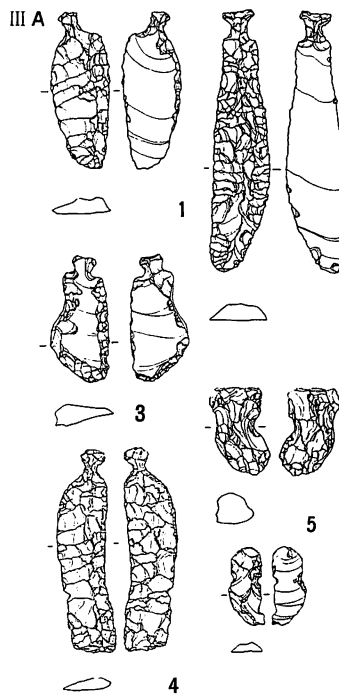


III 遺物の分類

〈III群〉 ナイフ・スクレイパー類

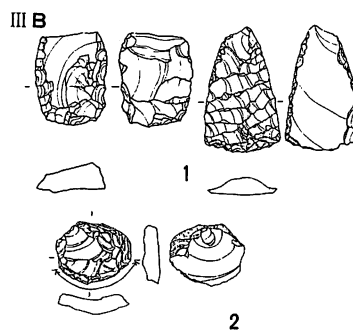
A つまみ付きナイフ

- 1 二次加工が片面全体に施されるもの
- 3 二次加工が周辺に施されるもの
- 4 両面加工のもの
- 5 つまみ部のみが作り出されたもの
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの



B スクレイパー

- 1 石べら
- 2 ラウンド・スクレイパー
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの



〈IV群〉 石斧

- 1 擦り切り手法によって製作されたもの
 敲打痕（ベッキング）のみられるもの
- 3 打ち欠きによる整形がみられるもの
- 4 素材を大きく変形することなく刃部のみに磨きがみられるもの
- 5 全面磨製のもの
- 8 素材、未製品、擦り切り残片、破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの

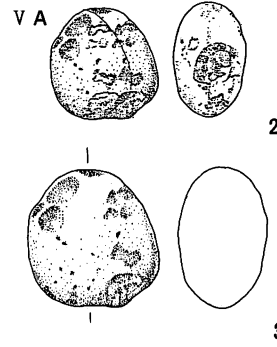
B 石のみ



<V群>

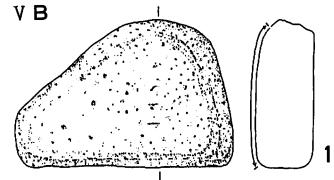
A たたき石

- 1 棒状礫の一端にたたき痕があるもの
- 2 扁平礫の周辺にたたき痕があるもの
- 3 扁平礫の表・裏面にたたき痕があるもの
(くぼみ石と称されるものも含む)
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの



B 台石 (石器製作 その他の作業でテーブルとなったもの
出土状態などの状況証拠を重視する)

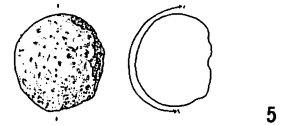
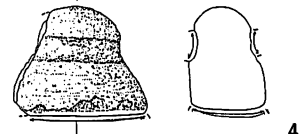
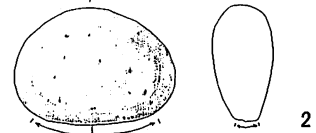
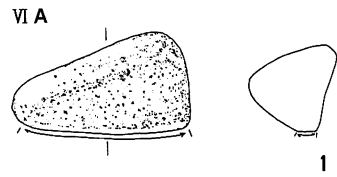
- 1 台石 (平坦面に使用痕がみられるもの)
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの



<VI群> すり石・石皿類

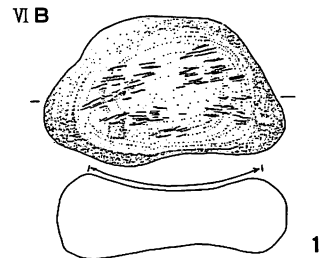
A すり石

- 1 断面がすみ丸三角形の礫の稜を擦ったもの
- 2 扁平礫の側縁を擦ったもの
- 3 扁平礫を半円状に粗く打ち欠き弦を擦ったもの
- 4 北海道式石冠
- 5 円礫で擦り面が曲面のもの (片側にたたき痕がみられるものが多い)
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの



B 石皿

- 1 石皿
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの



III 遺物の分類

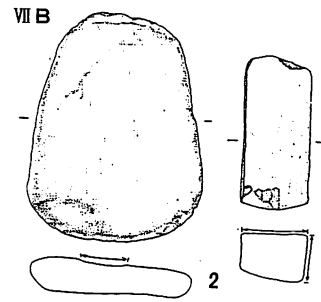
〈VII群〉 石鋸 砥石類

A 石鋸

- 1 石鋸（刃部が直線状になるもの）
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの

B 砥石

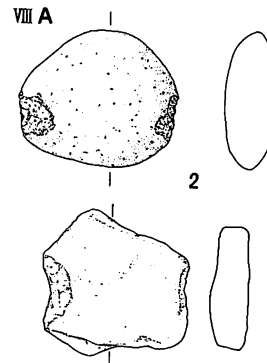
- 1 研磨面に溝があるもの
- 2 研磨面が平滑なもの
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの



〈VIII群〉 石錘

A 石錘

- 1 4ヵ所に打ち欠きのあるもの
- 2 長軸の両端に打ち欠きがあるもの
- 8 短軸の両端に打ち欠きがあるもの
- 8 破片など
- 9 今後 分類を必要とするもの



〈IX群〉 コア・フレイク類

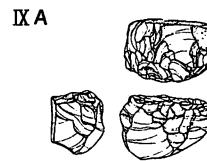
A コア（剥片石器の素材となるも原石等も含む）

B フレイク・チップ

〈X群〉 加工痕・使用痕のあるフレイク・礫

A 加工痕・使用痕のあるフレイクで 今後 分類を必要とするもの（定形的な石器としては認定されていないもの彫器、ピエス・エス・キューと呼称されるものそれらの削片などを含む）

B 加工痕・使用痕のある礫で、今後、分類を必要とするもの



IV A地区の調査

1 概要

調査区域は、ヤンケシ川とその第一支流の右岸、標高14~20mの緩傾斜地にあたる。発掘区の中央部と南部に西から東へ向かって2筋の小沢がある。遺構、遺物の集中区域は、それらの小沢の北側の微高地、Q-14区付近と、M-18区の付近にある。(図IV-10)。

発掘直前まで、一枚の牧草畑として利用されていたが、1930年代には小さな地割りであって、K・L・M-12~15区あたりでは、水田として稲作がおこなわれていたという。

このことを裏付けるかのように、沢筋ではいたるところで地下水の滲出・湧出がみられ、じめじめとした湿地の状態であり、牧草畑になってからの陶管や雑木を埋設した排水施設が検出された。

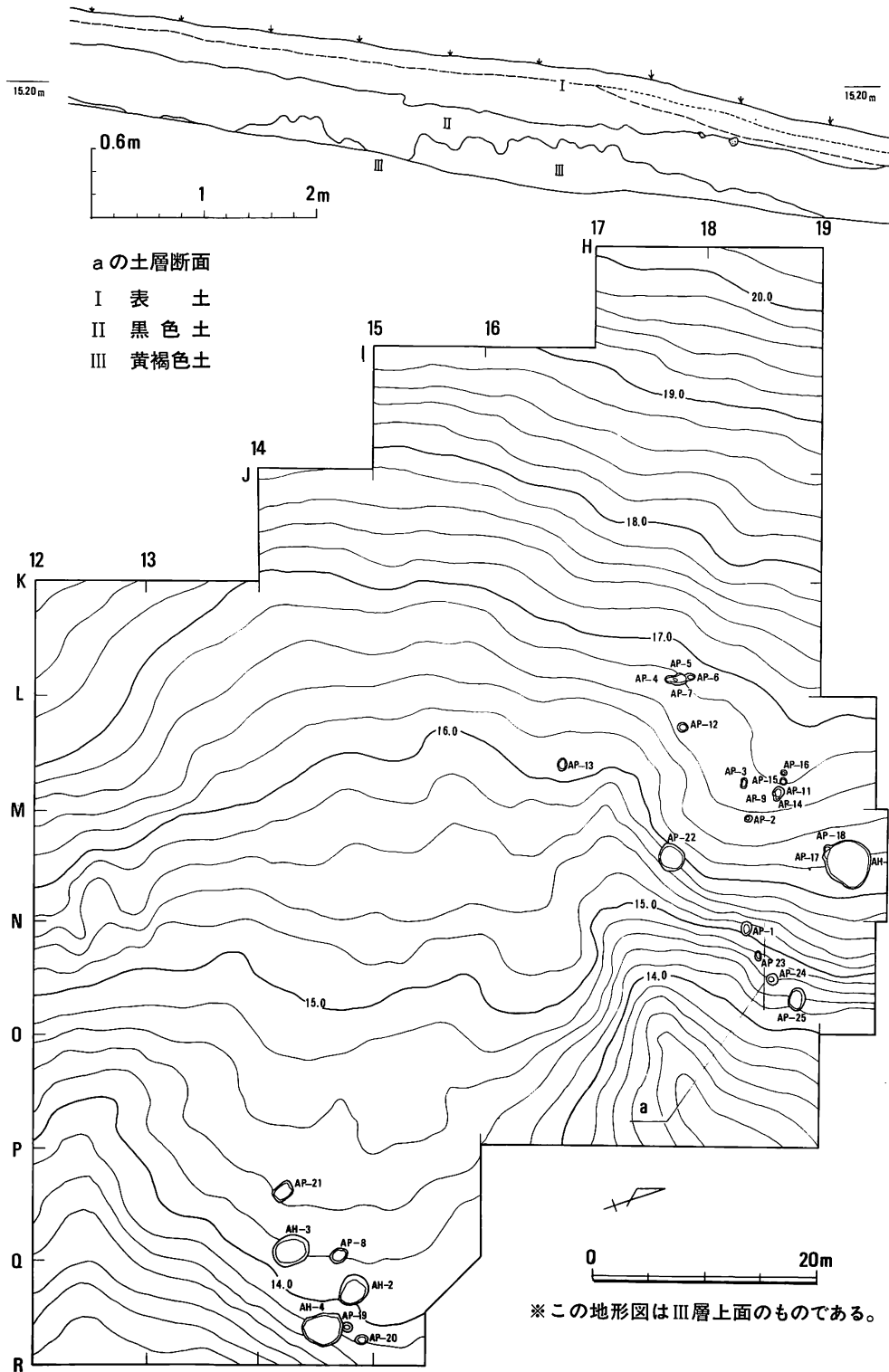
土層区分は、図IV-1のように行った。I層は黒褐色土で、上部は耕作されている。色調のちがいはなどによって、上下に二分あるいは三分しうところもある。II層は、10~50cmの厚さの黒色土で、遺物包含層である。II層のなかほどに縄文時代中期の遺物が多く出土し、II層下部からIII層上部にわたって縄文時代早期の遺物が多い。沢筋にあたる場所のII層には、大小の礫が多くみられ、礫と礫の間から土器・石器等の出土が認められることから、縄文時代以降において、礫の多い黒色土層には局地的な動きがあったものと推定できる。

III層の黄褐色土は、粘性の強弱やふくまれる礫の大小、多少など場所ごとに大きな変異がある。部分的に50cmほど深く掘り下げてみたが、遺物の出土はなかった。縄文時代の遺構は、このIII層に掘り込まれている。微高地では、耕作などによってIII層上部あたりまで削平を受けていたところもある。

縄文時代早期と中期の遺構、遺物がある。縄文時代早期の遺構、遺物は、調査区域の北部(M-18付近)に多く、貝殻条痕文土器群と撚糸文土器群に属するものである(図IV-10, 11)。貝殻条痕文土器には、口縁部の下にほぼ等間隔に円孔を施すものがある。撚糸文土器には、東釧路III式、コッタロ式、中茶路式、東釧路IV式などの諸型式のものがあり、魚骨回転文土器もある。縄文時代中期の遺構、遺物は南部(P-14付近)と北部(M-18付近)の2か所にまとまりがみられる。(図IV-10)。遺構は、住居跡4か所、土壇11か所がある。なかでもAH-4の住居跡からは、20個体分以上の土器と、石皿、すり石、石炭礫などが出土している。

土器は、サイベ沢V式、サイベ沢VI式、サイベ沢VII式、見晴町式、柏木川式、大安在B式、静狩式、レンガ台式などの諸型式に相当するものである。土器の出土状況は、破片となって散在しているものが多いが、なかには、遺構中に横倒しの状態であったり、1個体分がまとまっていたりするものもある。J-17-a区には、炭化物が充満した直立状態の土器がみられた。これは、サイベ沢VI式に相当するものであるが、内容物の¹⁴C測定では5.170±90 Y. B. P. (KS U-376) が示されている。

IV A 地域の調査



図IV-1 地形・遺構位置・土層の断面

2 遺構とその遺物

検出した遺構は、住居跡4か所、ピット24か所、焼土16か所である。これらのうちで時期の判明したものは、早期のピット5か所（AP-2・3・4・15・22）、中期の住居跡4か所（AH-1～4）、中期のピット10か所（AP-1・8・17・18・19・20・21・23・24・25）である（図IV-1～9）。縄文時代の遺構は、Ⅲ層の黄褐色土まで掘り込まれており、Ⅲ層中に含まれる大小の礫が底面や壁面に露出していることが多い。

AH-1（図IV-2）

長径4.0m、短径3.5mのほぼ円形で、深さ0.2mほどの浅い皿状である。中央の焼土は床面のものであり、東縁の焼土は覆土中のものである。土器の小破片や石器などが約50点みられたが、このうち特徴的なものを図示した。1は縄文時代早期の東釧路Ⅳ式、2と3はサイベ沢Ⅴ式、5はサイベ沢Ⅵ式、4は見晴町式に相当する。6は緑色片岩製の石斧の破損品で覆土から出土している。この遺構は、早期の包含層をこわして、中期につくられたものと考えられるが、出土土器のいずれの時期にあたるか確認できなかった。

南西隅にピットAP-17とAP-18を検出した。時期を決められるような遺物の出土はなかったが、覆土の状態がAH-1に似ていることから、これを接近した時期のものと推定した。

AH-2（図IV-2）

長径3.0m、短径2.3mの角張った長円形で、深さ0.3mである。北西側の壁は二段になっている。北西部の床には深さ10cmほどの浅いピットがあり、覆土中に焼土もみられる。1と4は同一個体でⅢb-2類に含まれ、覆土中からほぼ1個体分出土したが、もろい小破片が多くて復原できなかった。2、3も覆土中から出土しており、ともにサイベ沢Ⅴ式に相当する。5は安山岩製のスクレイパーで中期の遺物であるが、その詳細な時期は明らかでない。

AH-3（図IV-3）

長径3.8m、短径2.8mの長円形で、深さ0.3mである。床面には焼土と深さ10cmほどのピットがある。覆土中や床面には9個体分以上の土器破片が出土したが、もろい小破片が多くて復原できたものはない。1・3・6・8はサイベ沢Ⅴ式。7、10はサイベ沢Ⅵ式に相当する。2と9は同一個体であり見晴町式に相当する。11は頁岩製の石鏃の破損品、12は黒曜石製の石鏃である。13と14は黒曜石の縦長剥片の側面に微細な剥離面の列がみられるもので、分類上は、加工痕あるいは使用痕のあるフレイクとした。中期の遺構であるがその詳細な時期は明らかでない。

AH-4（図IV-3～5）

長径4.0m、短径3.0mの角張った長円形で、深さ0.2mである。風倒木によると考えられる土層の攪乱があって、底面は凹凸がみられるが、ほぼ中央にある焼土の部分は床面に相当するものであろう。焼土を掘り込んでいる深さ40cmのピットのほかに、10cmほどの浅いくぼみが2か所ある。覆土や床面に20個体分以上の土器破片が出土したが、このうち4個体は器形を復原できた。1・2・3・5・6・9・10はサイベ沢Ⅴ式、4・8・12・13・14はサイベ沢Ⅵ式、7・

11は見晴町式に相当する。18は安山岩製の石皿の破片であり、15は安山岩製のすり石である。16は石炭の垂円礫である。15と16は、床面から出土しており、しかも15cmほどの間隔しかないので、共伴資料とみなせる。17は頁岩製スクレイパーの破損品である。

この遺構は、1の土器で示されるサイベ沢V式期につくられたものと考えられる。

AP-1 (図IV-6)

直径1mの円形で、深さ0.3mである。覆土中に土器片が20点ほど出土したが特徴的な4点のみ図示した。1と2、3と4はそれぞれ同一個体であり、ともにサイベ沢V式に相当する。5と6は、覆土中から出土した石器である。5は安山岩製の石皿の破損品である。6は頁岩製のつまみ付きナイフである。6の石器は、形態から縄文時代早期のものと思われるが、これは混入品であろう。ピットは中期のものと推定している。

AP-2 (図IV-6)

長径0.7m、短径0.5mの長円形で、深さ0.1mである。耕作などによる削平を受けており、底面ちかくしか確認できなかった。時期を明らかにしうる遺物はないが、覆土は黄褐色土だけで黒色土を含まないことから、早期の遺構と推定した。

AP-3 (図IV-6)

長径0.9m、短径0.6mの長円形で、深さ0.2mである。耕作などによる削平を受けており、底面ちかくしか確認できなかった。時期を明らかにしうる遺物はないが、覆土は黄褐色土だけで黒色土を含まないことから、早期の遺構と推定した。

P-4、5、6、7 (図IV-6)

4つのピットが連なって検出されたが、それぞれの切り合い関係は、把えられなかった。時期を早期と判断したのは、覆土は黄褐色土だけで黒色土を含まないことと、AP-4から出土した1~3の東釧路IV式土器による。

AP-8 (図IV-7)

長径1.7m、短径1.3mの長円形で、深さ0.1mの浅い皿状である。時期を中期と判断したのは、覆土が黒色土であることと、及びIII a類土器の小破片が出土したことによる。

AP-15 (図IV-7)

直径0.75mの円形で、深さ0.2mである。耕作などによる削平をうけており、底面ちかくしか確認できなかった。時期を明らかにしうる遺物はないが、覆土は黄褐色土だけで黒色土を含まないことから、早期の遺構と推定した。底面には、III層に含まれている礫が露出していた。

AP-17、18 (図IV-7)

AH-1の南西縁に検出されたが、それぞれの切り合い関係は把えきれなかった。時期を明らかにしうる遺物はないが、覆土に黒色土が含まれることから、中期の遺構と推定した。

AP-19 (図IV-7)

直径0.9mの円形で、深さ0.2mである。AH-4と接しているが、互いの先後関係は把えきれなかった。時期を明らかにしうる遺物はないが、覆土に黒色土が含まれることから中期の遺

構と推定した。周辺にある礫は、II層あるいはIII層に含まれているものであり、この遺構とは直接関係しない。

AP-20 (図IV-7)

長径1.1m、短径0.9mの長円形で深さ0.3mである。1のサイベ沢V式に相当する土器が覆土中に横倒しの状態で検出されたことにより、中期の遺構と判断した。覆土中からは、次のような土器、石器も出土している。2はサイベ沢V式、3はサイベ沢VI式に相当するものである。4は安山岩質の垂円礫を素材とするたたき石で、長軸の両端、腹背両面に使用痕がある。5は頁岩製のスクレイパーの破損品である。

AP-21 (図IV-8)

長径2.0m、短径1.3mの長円形で、深さ0.2mである。住居跡と考えたものよりも若干規模は小さいが、南側の底面に焼土が検出されており、住居跡の可能性はある。時期を中期と判断したのは、覆土が黒色土であることと、1・2・3の土器が出土したことによる。土器の出土状況は、2の下に3が押しつぶされて覆土中にあり、1は横倒しの状態で底面に近いところにあった。3・4・5・6は同一個体であり、破片をみると口縁部から底部まで認められるが、もろい小破片が多くて復原するには至らなかった。

AP-22 (図IV-9)

直径2mのほぼ円形で、深さ0.2mである。傾斜地にあつて、南半の周壁は明瞭には確認できなかった。時期を明らかにしうる遺物の出土はないが、覆土の黄褐色土の状態から早期の遺構と推定した。中央部の焼土は、底面から10cm以上も高い位置にあるので、この遺構が埋没していく過程で残されたものと考えられる。

AP-23 (図IV-9)

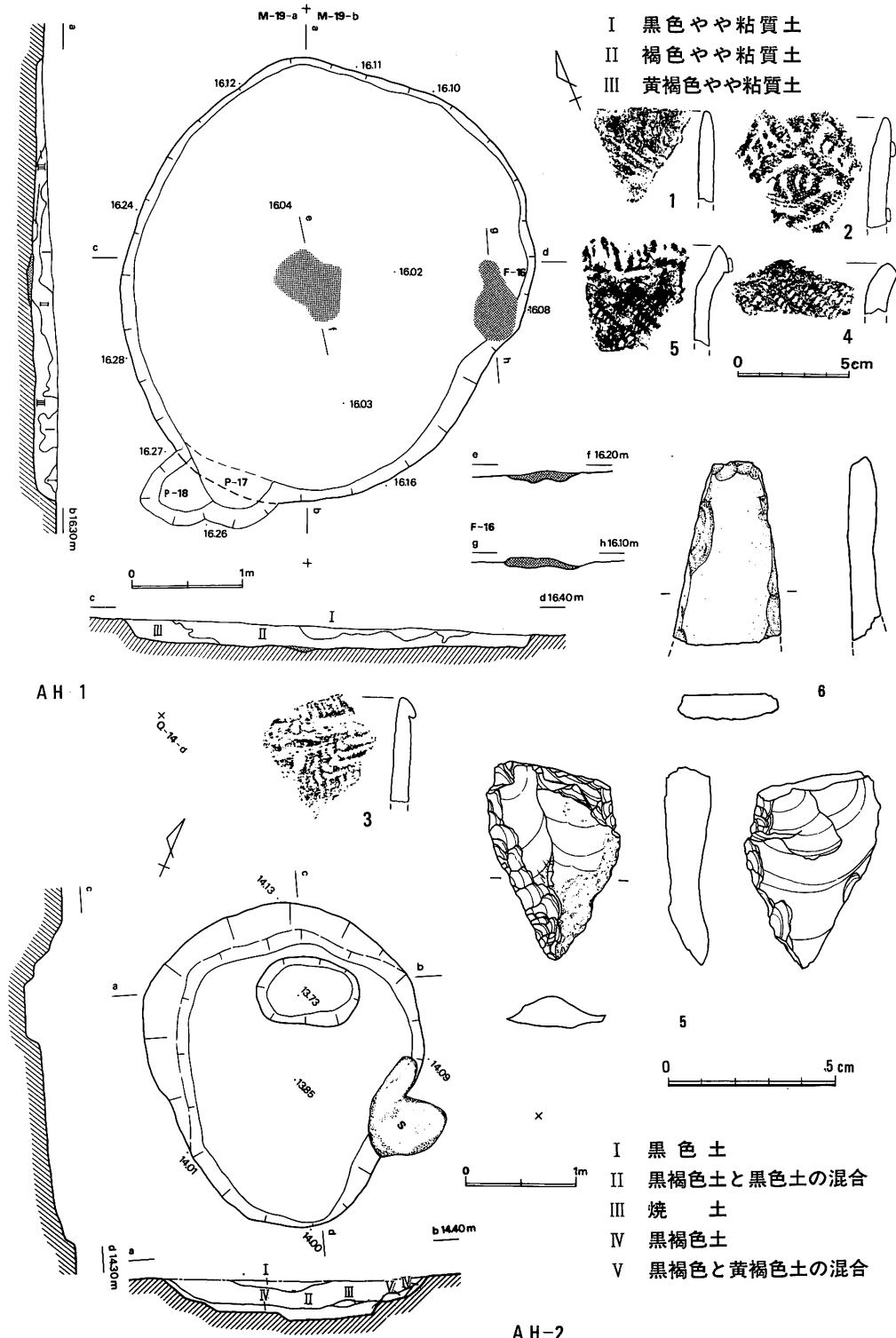
長径0.9m、短径0.6mの長円形で、深さ0.15mである。覆土に黒色土が含まれることと、2のすり石が底面近くから出土したことにより、中期の遺構と推定した。1は早期のコツタロ式に相当する土器で覆土中から出土しているが、これは混入と考えられる。

AP-24 (図IV-9)

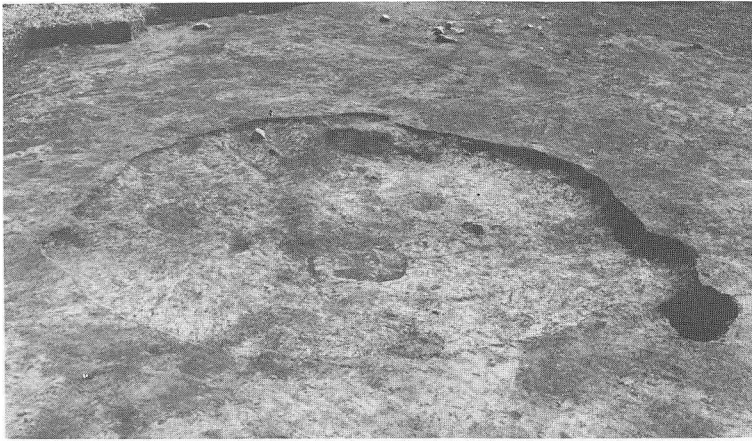
長径1.1m、短径0.8mの長円形で、深さ0.4mである。底面には礫が数個あるが、加工はみられない。覆土に黒色土が含まれることと、ピットの肩部から1のすり石が出土したことにより中期の遺構と推定した。1は板状の安山岩を素材とし、打ち欠きによって周辺を整形し、下辺に擦り痕がみられるものである。

AP-25 (図IV-9)

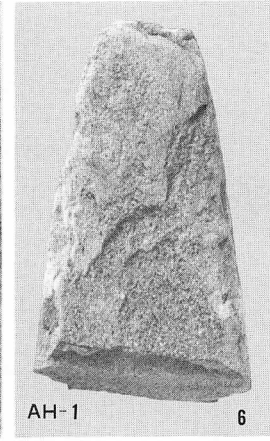
長径1.7m、短径1.3mの長円形で、深さ0.4mである。傾斜地にあつて、南東側の輪郭は不明瞭である。覆土が黒色土であることと、1のサイベ沢V式に相当する土器が覆土中から出土したことにより、中期の遺構と判断した。1～3は同一個体であり、ほぼ1個体分が出土したが、もろい小破片が多くて復原するにはいたらなかった。



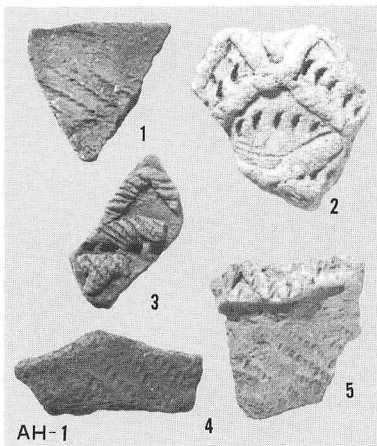
図IV-2 AH-1・2



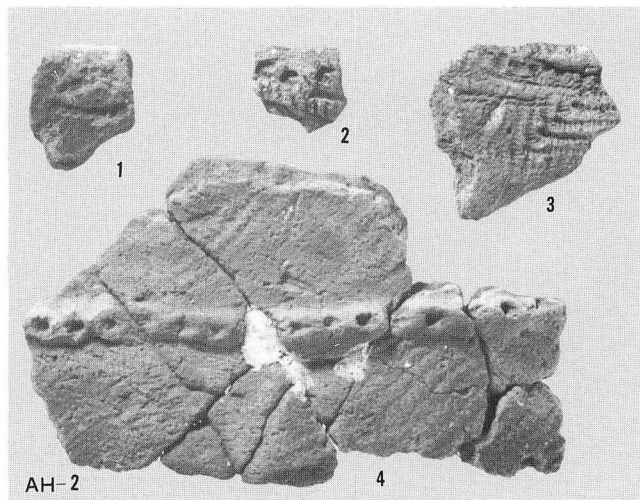
1. AH-1



2. AH-1 石器



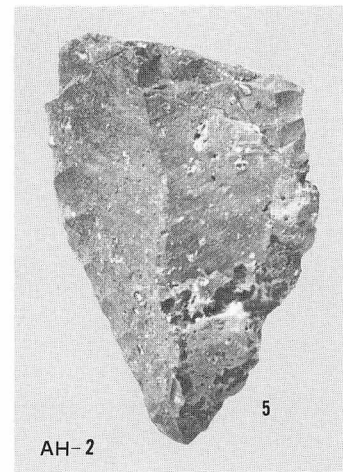
3. AH-1 土器



4. AH-2 土器

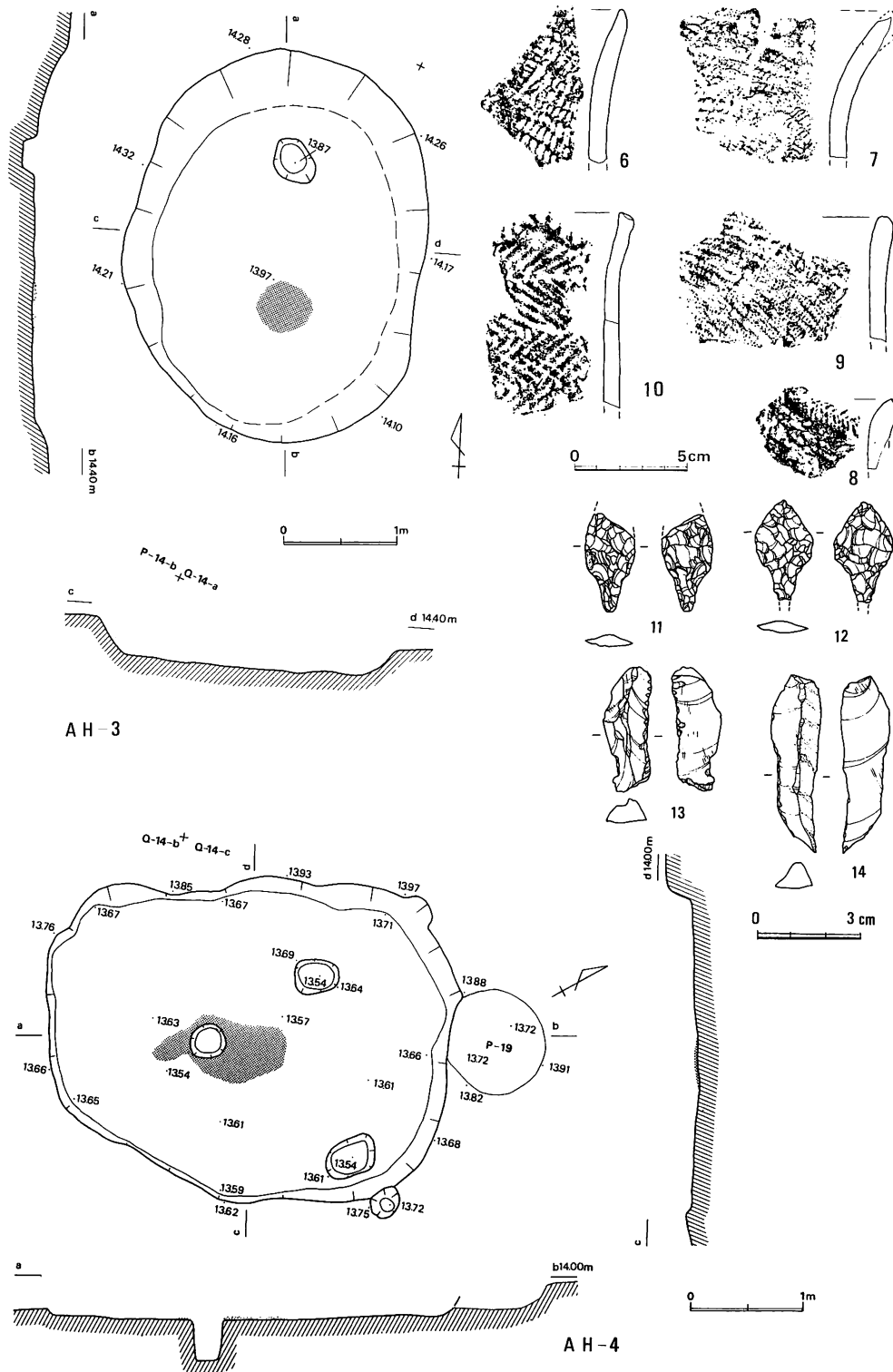


5. AH-2



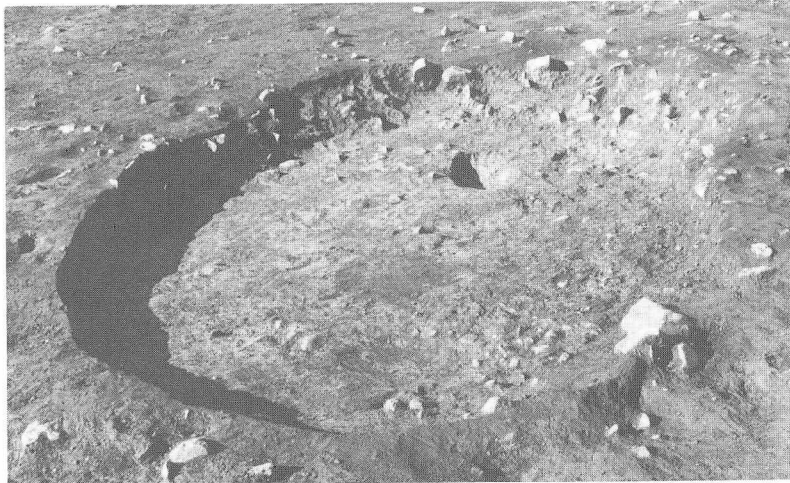
6. AH-2 石器

IV A地域の調査

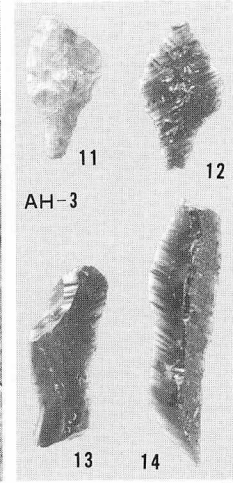


図IV-3 AH-3・4

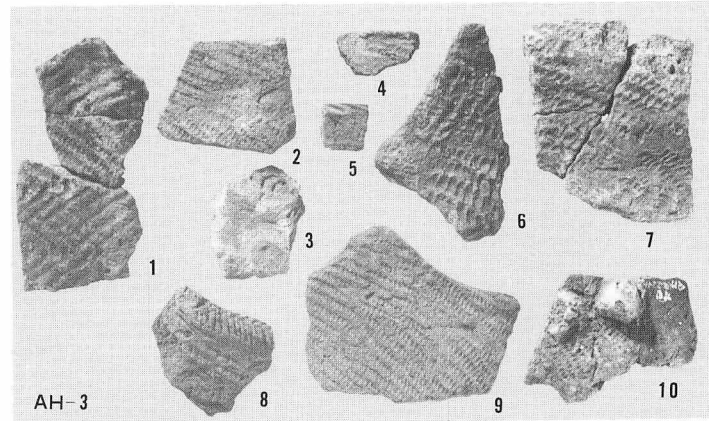
図版IV-2



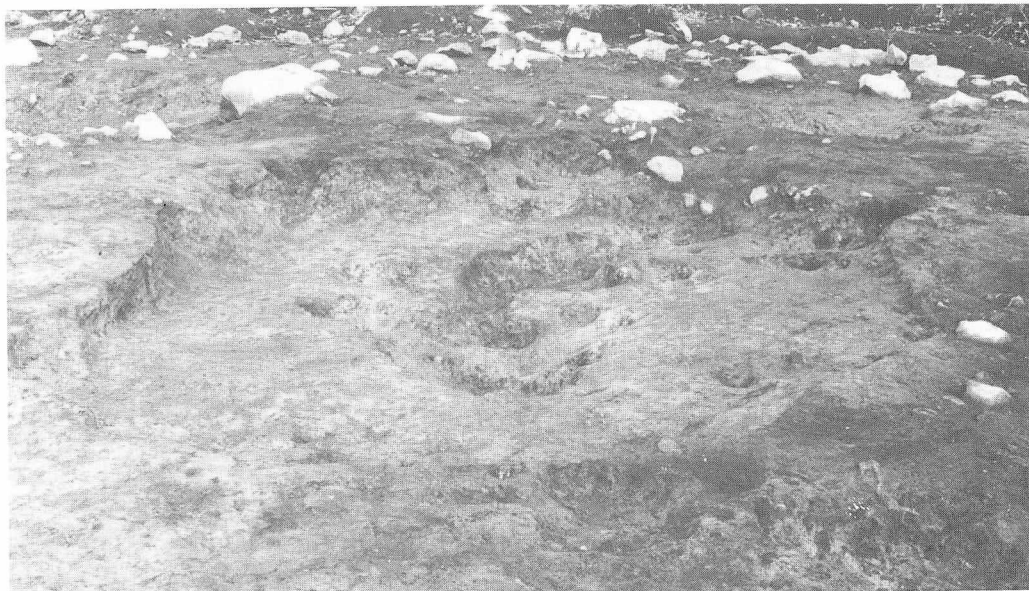
1. AH-3



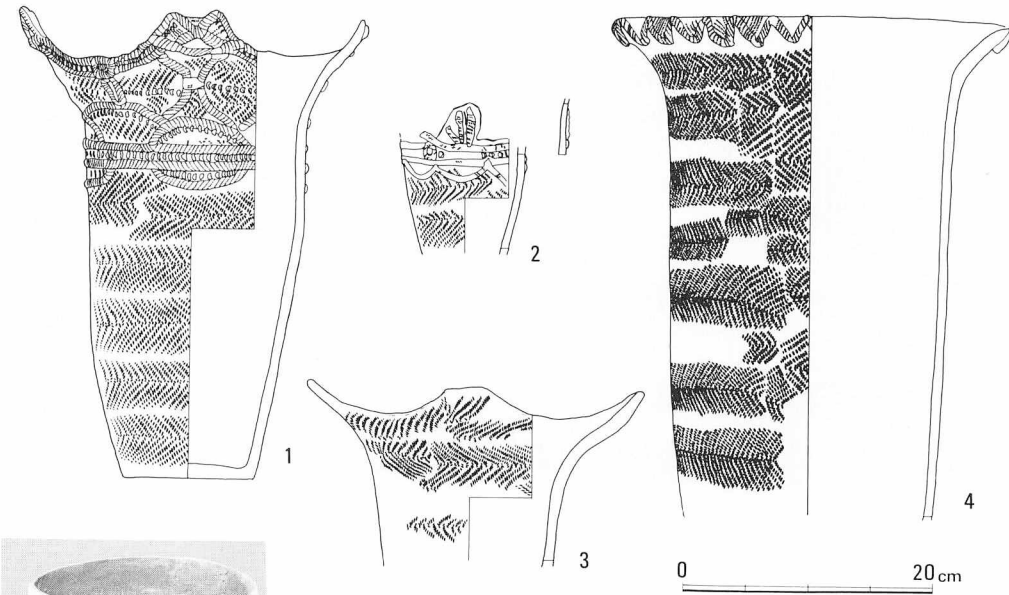
2. AH-3 石器



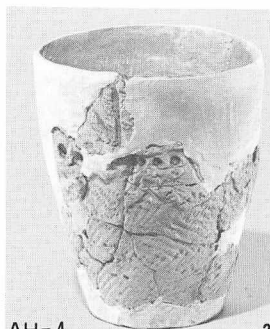
3. AH-3 土器



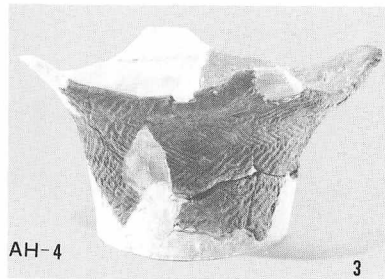
4. AH-4



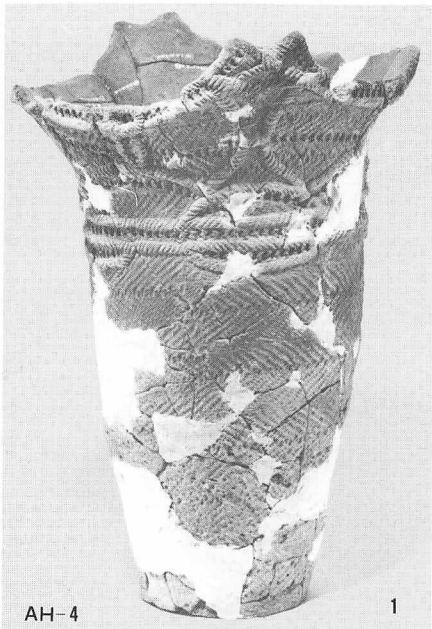
図IV-4 AH-4の土器



AH-4 2
1. AH-4 土器2



AH-4 3
2. AH-4 土器3



AH-4 1
3. AH-4 土器1



AH-4 4
4. AH-4 土器4



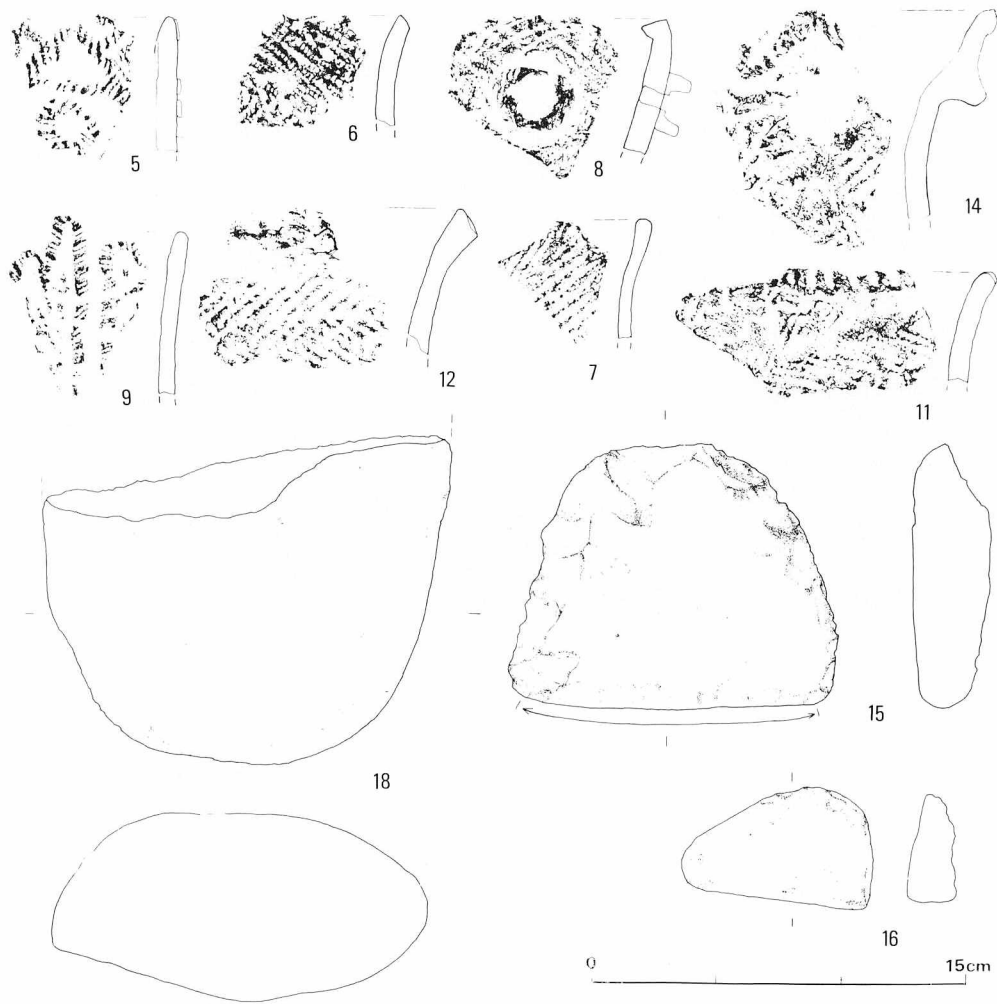
1. AH-4 土器4の出土状況



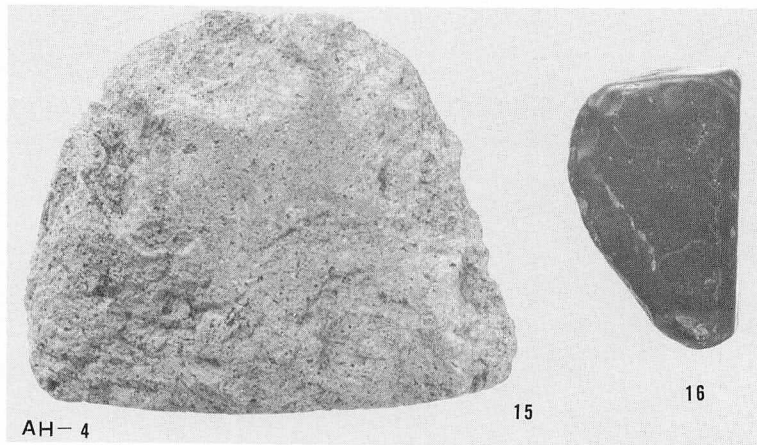
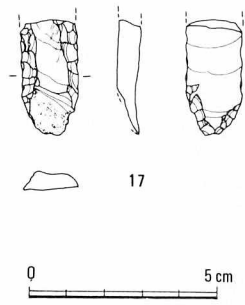
2. AH-4 土器1の出土状況



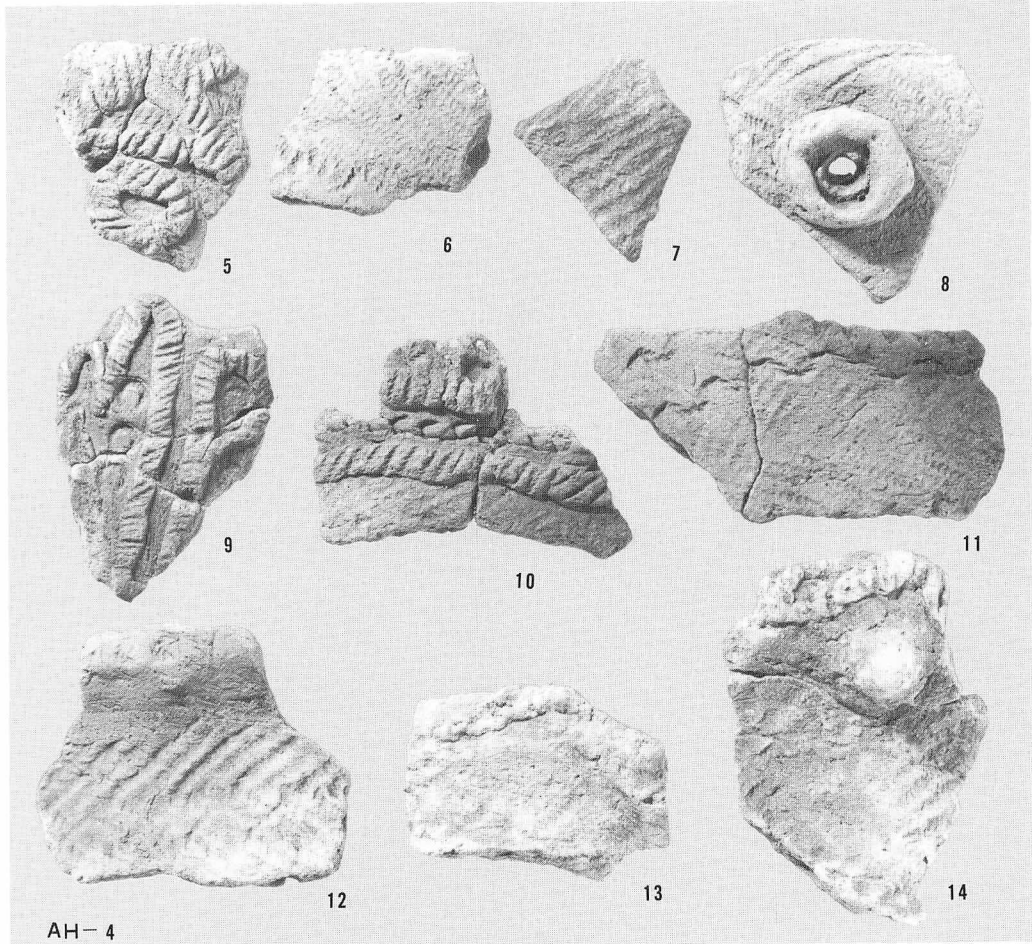
3. AH-4 石器15・16の出土状況



図IV-5 AH-4の遺物



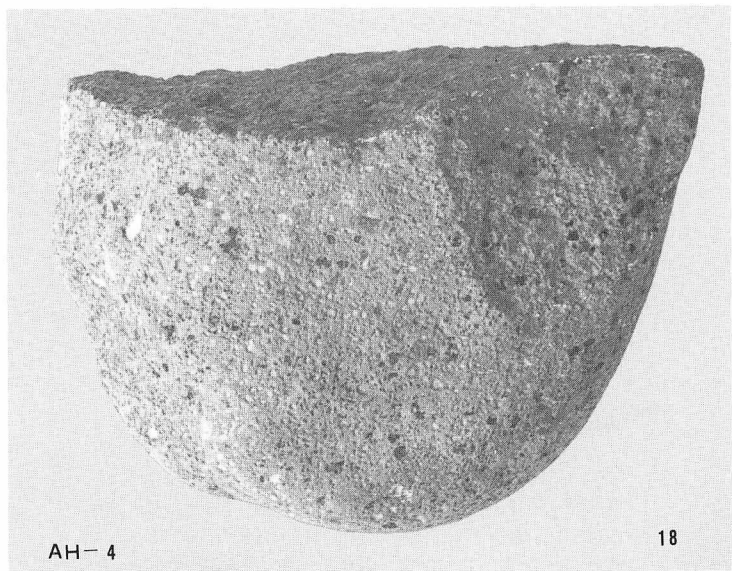
AH-4
AH-4 石器 15・16



1. AH-4 土器

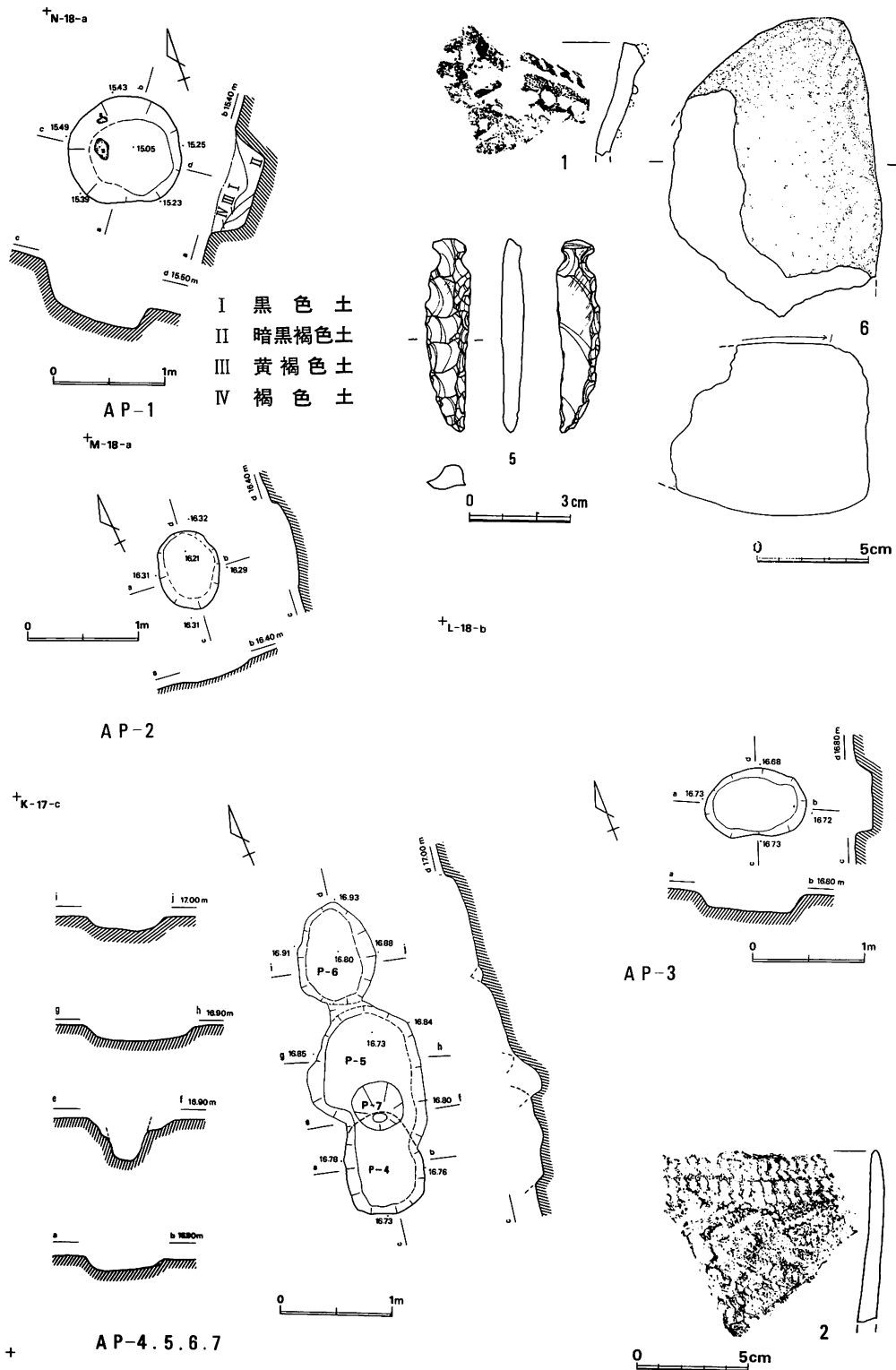


3. AH-4 石器(1)

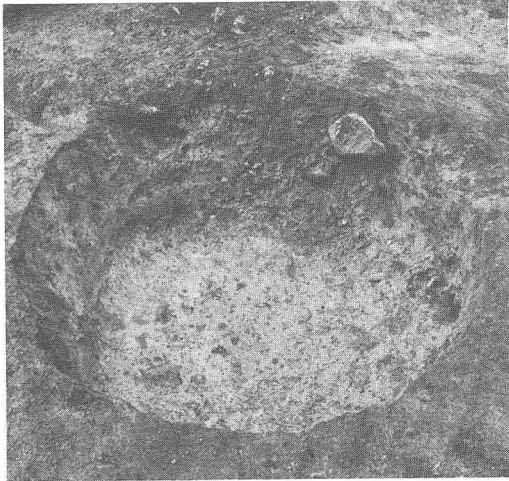


2. AH-4 石器(2)

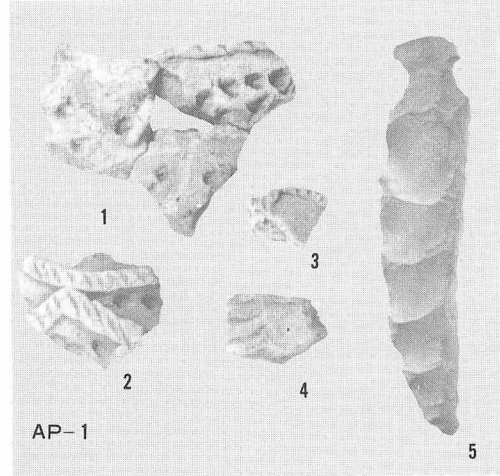
IV A地域の調査



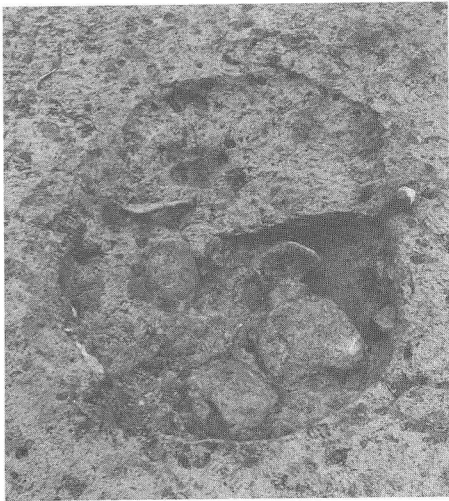
IV-6 AP-1~7



1. AP-1

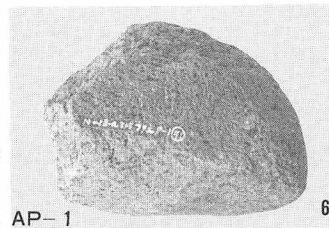


2. AP-1
遺物

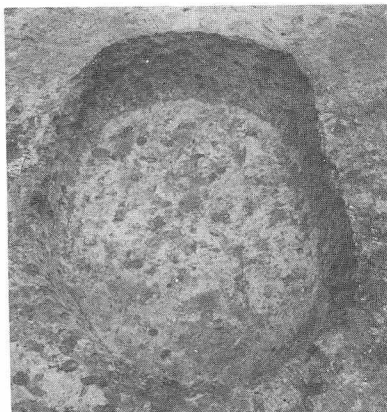
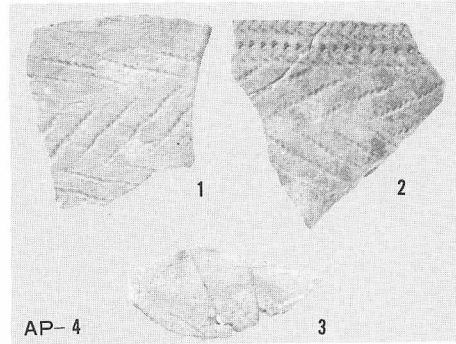


3. AP-2

4. AP-1 遺物



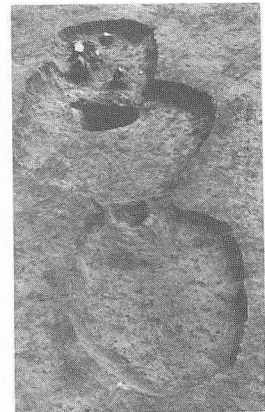
5. AP-4 土器



6. AP-3

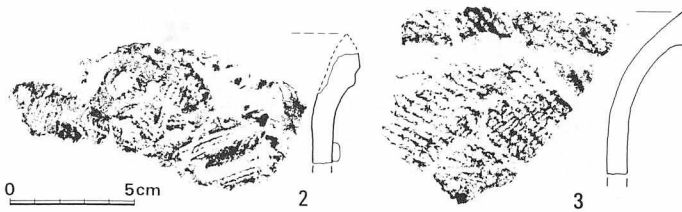
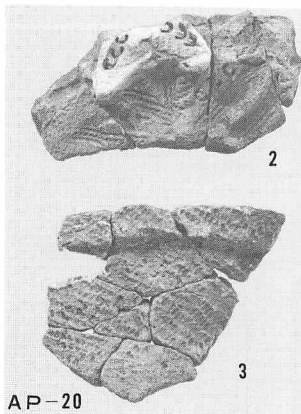
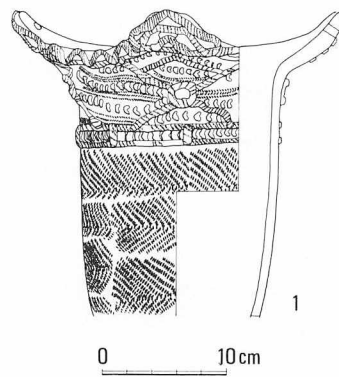
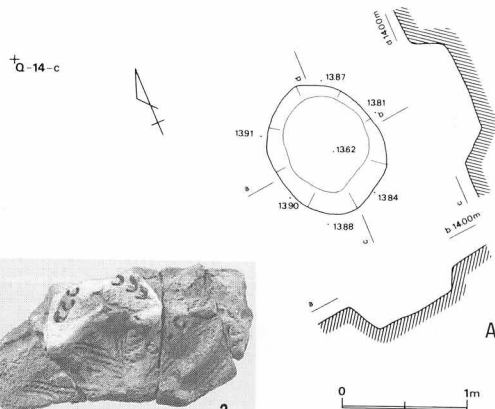
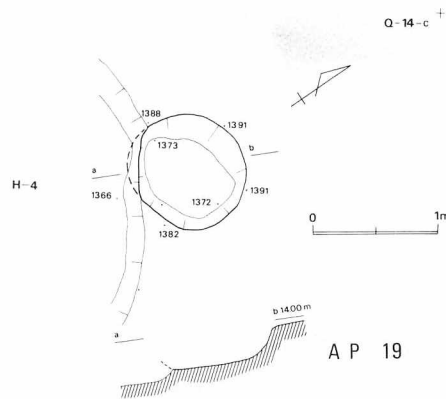
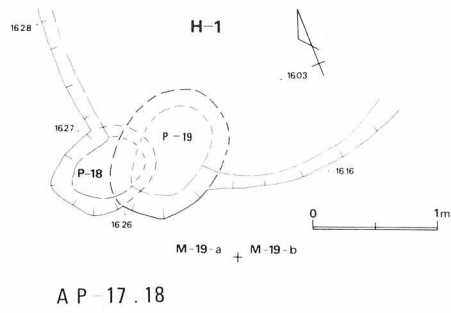
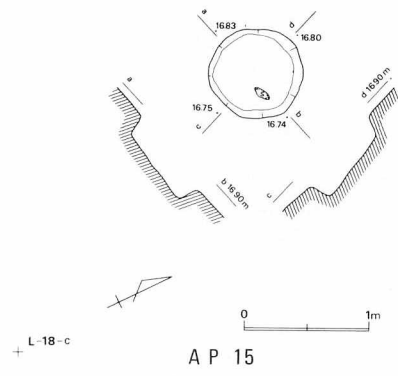
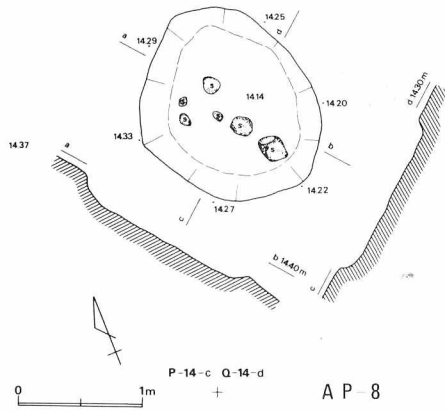


7. AP-4



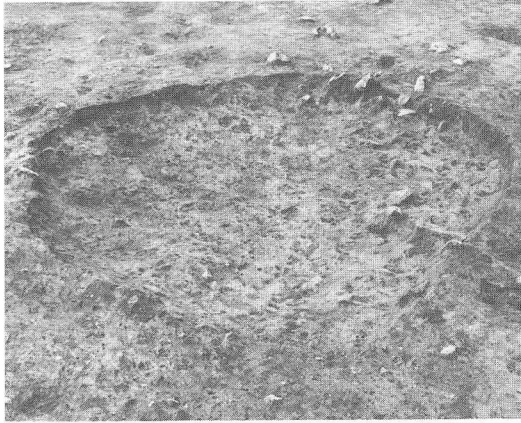
8. AP-4・5・6・7

IV A地域の調査



AP-20
AP-20 遺物

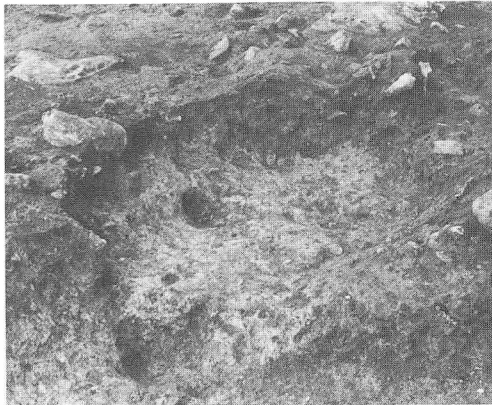
図IV-7 AP-8・15・17~20



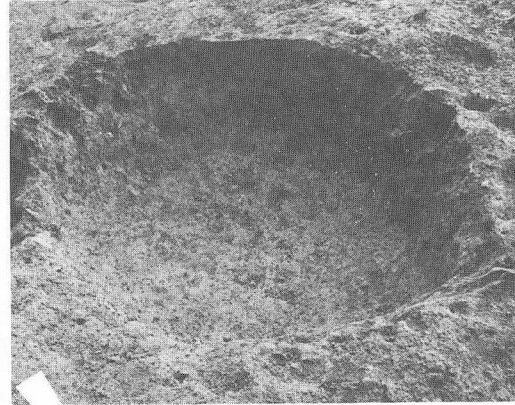
1. AP-8



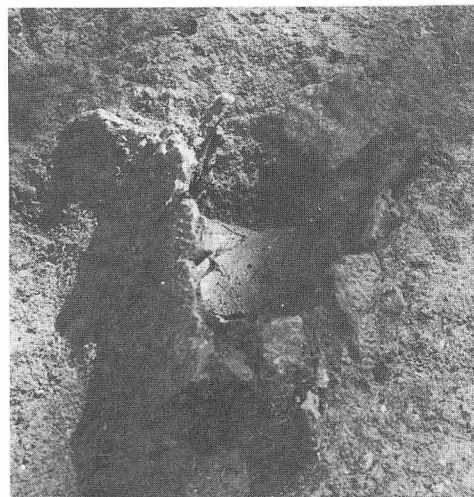
2. AP-15



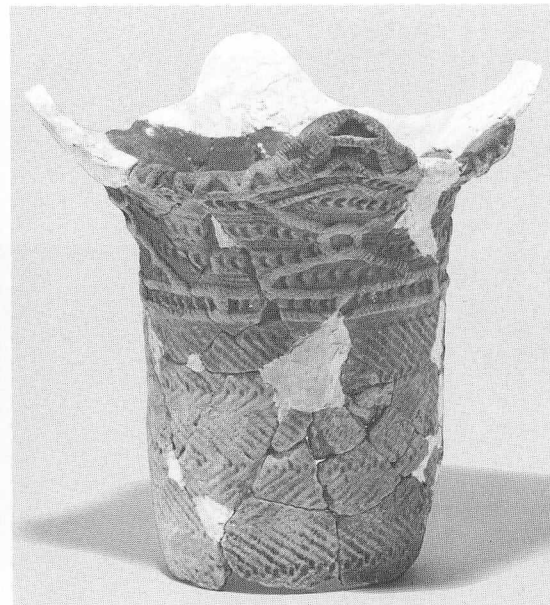
3. AP-19



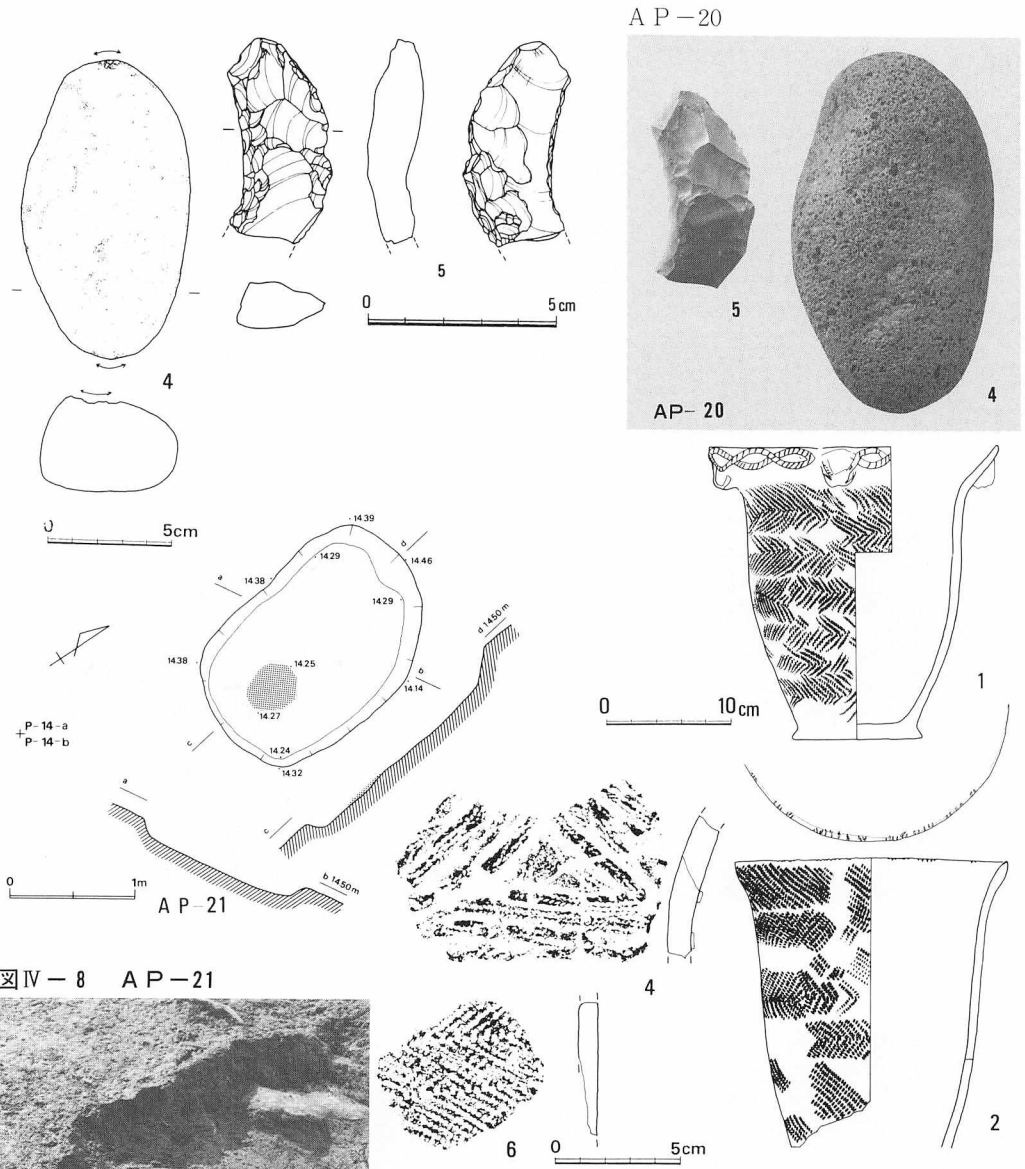
4. AP-20



5. AP-20 土器1の出土状況



6. AP-20 土器1



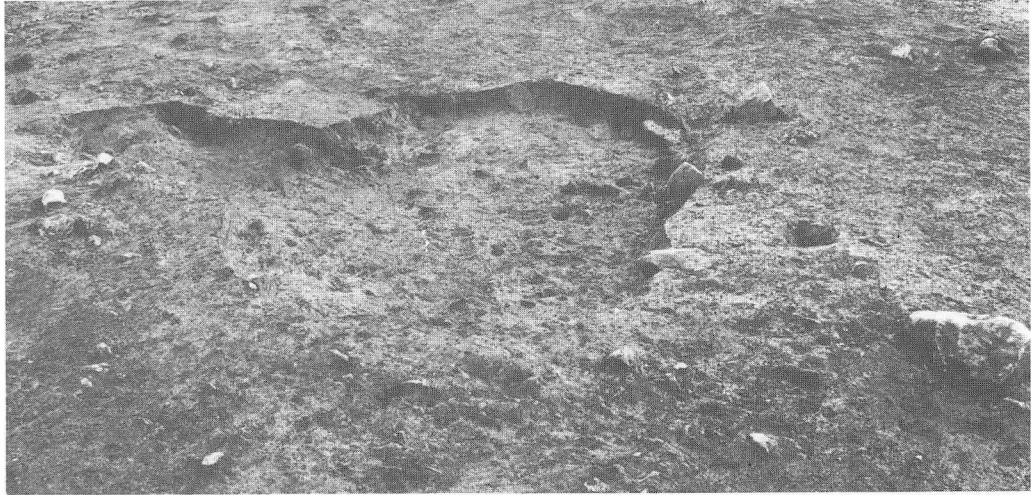
図IV-8 AP-21



AP-21 土器1の出土状況



AP-21 土器2の出土状況



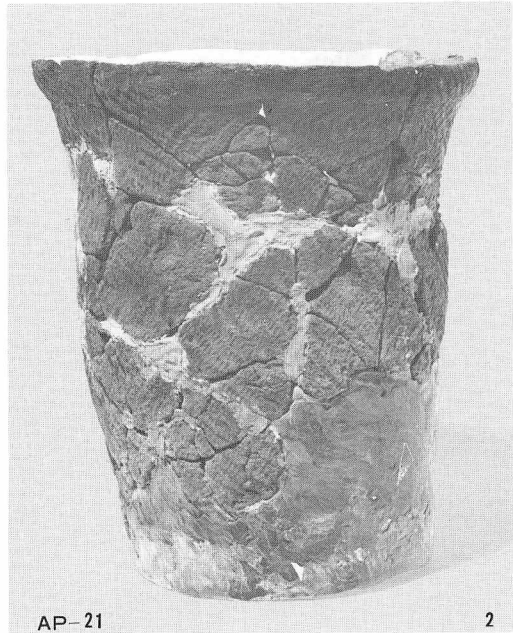
1. AP-21



AP-21

1

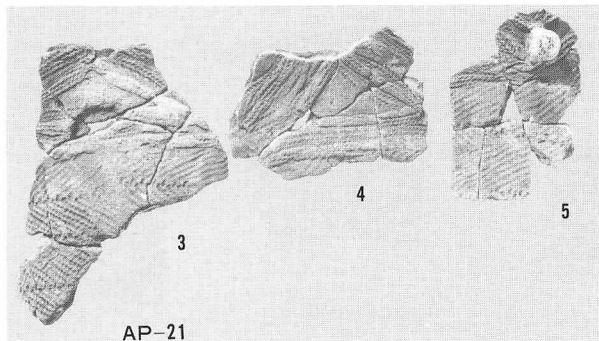
2. AP-21 土器 1



AP-21

2

3. AP-21 土器 2

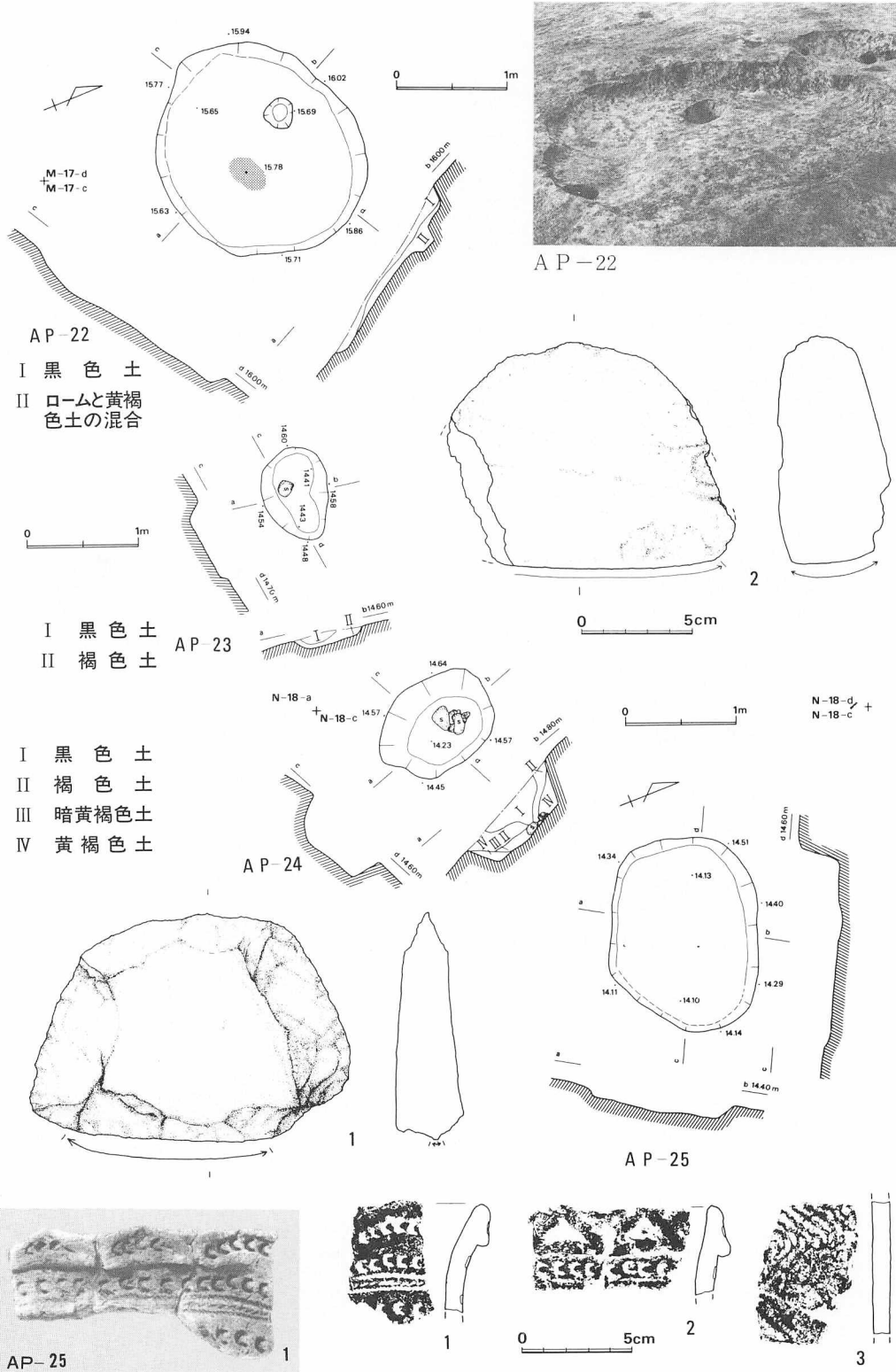


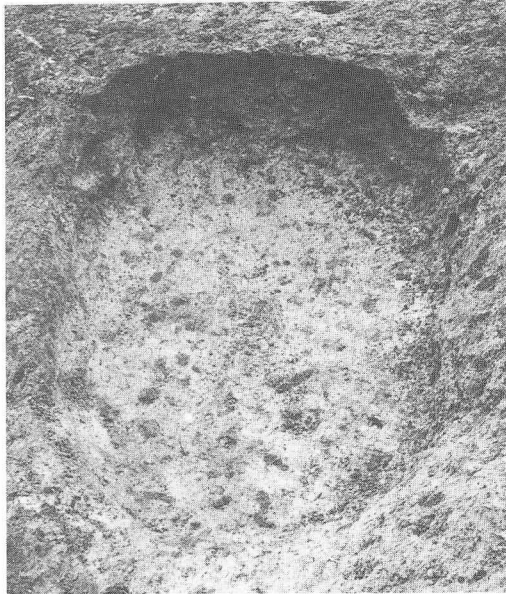
AP-21

4. AP-21 土器



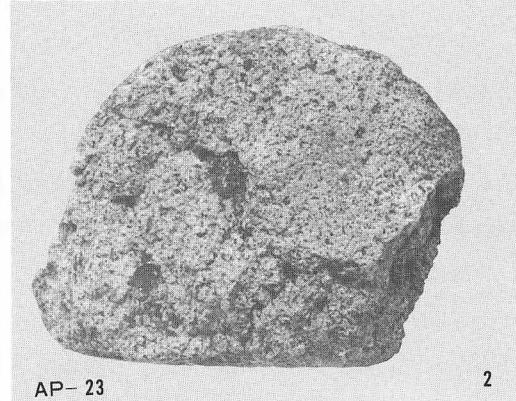
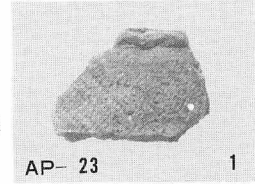
5. AP-21 土器 3 の出土状況



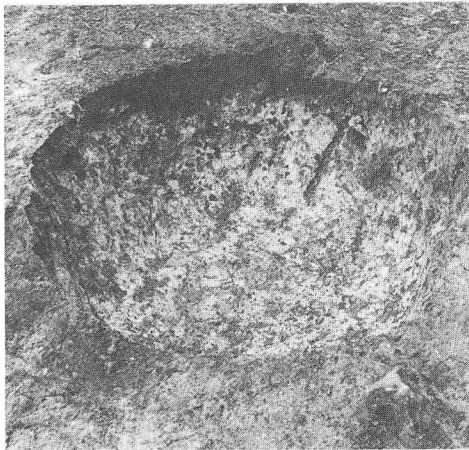


1. AP-23

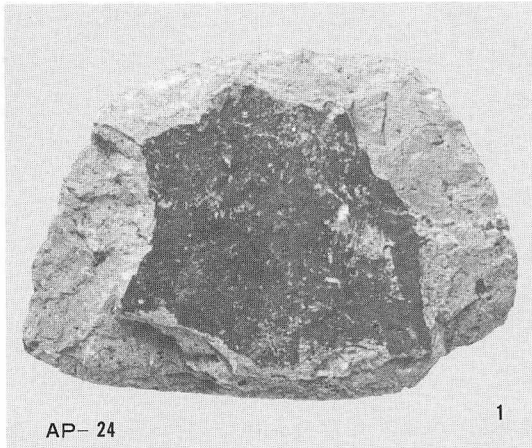
2. AP-23 土器



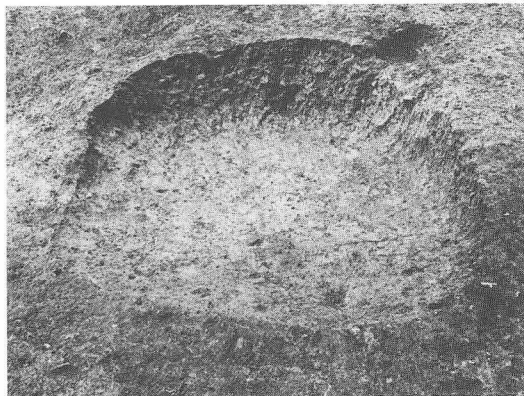
3. AP-23 石器



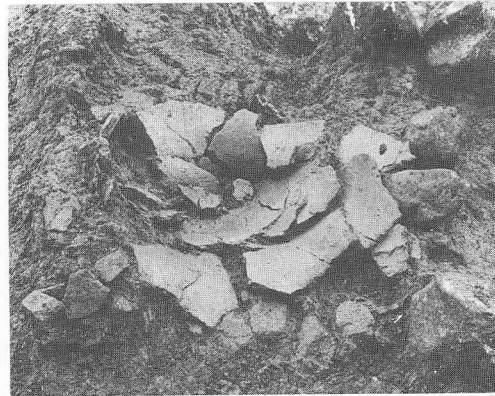
4. AP-24



5. AP-24 石器



6. AP-25



7. AP-25 土器 出土状況

3 包含層の遺物

縄文時代早期と中期の遺物が出土している。土器の時期別分布は、図IV-10に示した。これは口縁部破片による個体識別の数であり、時期のちがいが、分布のちがいとして明瞭にあらわれている。しかし、これらの土器に伴う石器を時期別のまとまりとして把えることはできなかった。石器の器種による分類の内訳は、表IV-1に示した。また土器の図示にあたっては、型式の特徴がよくあらわれている口縁部破片を主体とした。

1) 早期の土器

I a 類の貝殻条痕文土器は、L・M-18区の付近に出土しており、7個体以上あるものと思われるが、器形を復原できたものはない(図版IV-10、6-19)。

底部は平底(図IV-12、6)であり、口径にくらべて底径はきわめて小さなものである。図IV-12の14・15・19は口縁の下に円孔が施されているが、ともに焼成以前の円孔であり、15は外側から、19は内側からの刺突によるものである。

I b 類の撚糸文土器は調査区の北側の部分、J~N-16~19区に、出土している(図IV-10、1)。識別できた個体の内訳は、東釧路Ⅲ式5個体以上、コツタロ式19個体以上、中茶路式3個体以上、東釧路Ⅳ式23個体以上である。コツタロ式、東釧路Ⅳ式土器が多い(図版IV-11、33~86)。コツタロ式に相当するとみなしたものには、魚骨回転文が施されたものもある(図版IV-10、20~29)。

2) 中期の土器

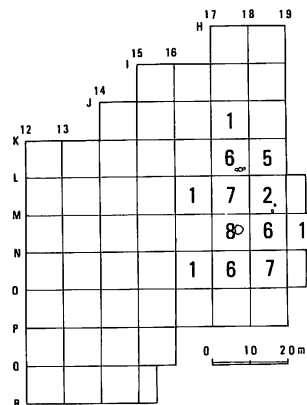
中期の土器は、遺構から出土したものも含めて、器形、文様などの特徴によって、以下のよう⁵に5分類できる。

1: III a 類に含まれるもので、円筒上層b式、サイベ沢V式に相当する土器(図版IV-12)。AH-4の1やAP-20の1をもって代表され、器形、文様などの特徴は次のとおりである。4か所の山形突起による波状の口縁部をもち、貼付帯による文様の構成と、撚糸による線状圧痕や馬蹄形圧痕が多くみられる。ただしAH-4の3などは、貼付帯による文様の構成がみられないが、波状口縁であることをもって、ここに分類しておく。

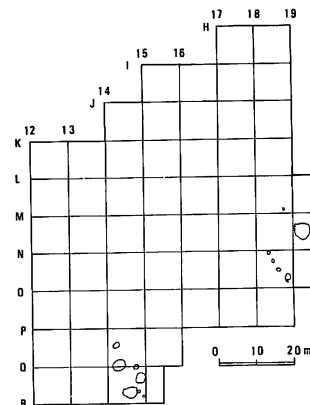
この土器の分布は、図IV-10、3である。これによれば、N-16区をさかいにして、その北側と南側の微高地を中心にして分布している。

2: III a 類に含まれるもので、サイベ沢VI式、サイベ沢VII式に相当する土器(図版IV-13)。サイベ沢VI式に相当するものには、水平口縁で文様は口縁部のみにみられるものと、波状口縁で胸骨文と呼ばれる細い貼付帯が胴部ちかくまでみられるものがある。水平口縁のものは、AH-4の4やAP-21の1、図IV-11の1などをもって代表される。ただし、AP-21の2は貼付帯を欠いているが、水平口縁であることからここに含めた。数量的には、水平口縁の土器が圧倒的に多い。

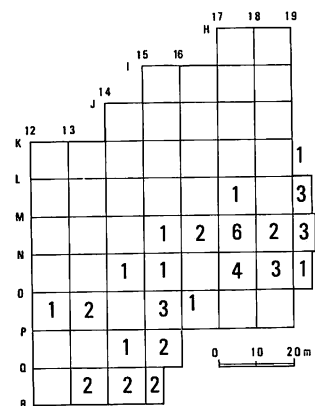
サイベ沢VII式に相当するものは、波状口縁で沈線による文様の構成がみられる土器であるが



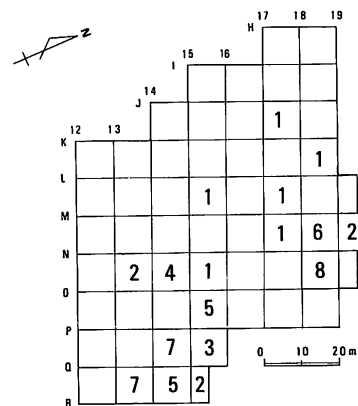
1. 早期の遺構と燃糸文土器の分布



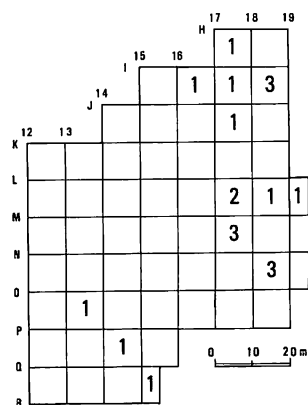
2. 中期の遺構の分布



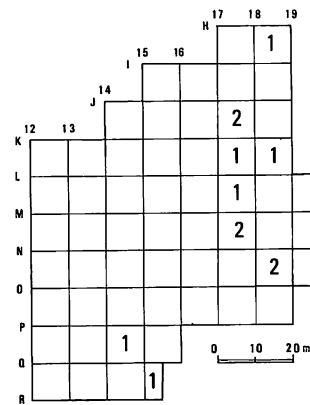
3. III群 a 類 サイベ沢 V 式の分布



4. III群 a 類 サイベ沢 VI 式・VII 式の分布



5. III群 b-2 類の分布



6. III群 b-3 類の分布

図IV-10 遺構・遺物の分布

その数は少ない。

この種の土器の分布は、図IV-10の4に示した。サイベ沢V式の土器の分布とよく似ているが、南と北の微高地により集中的に分布している。

図IV-11の2は、炭化物がびっしりつまって、直立した状態で出土した。耕作等による削平を受けて、上半部は欠けているが、浅い穴に埋めこまれていたものと推定できる。地文の縄文と底部のつくりがA P-21の1と類似することから、ここに含めておく。内容物のC測定値は 5170 ± 90 y. B. P. (K S U-376)であり、測定前に予想した年代よりも、いくぶん古い値である。

3：III b-1類に含まれるもので見晴町式に相当する土器（図版IV-14）。ちいさな山形突起をもちゆるい波状口縁をなし、地文の斜行縄文が口唇部まで施される特徴をもつ。図版IV-14の193は羽状縄文であるがここに含めた。この例を含めても6個体ほどであり、少ない個数なので分布図は示さなかった。

4：III b-2類に含まれるもので、柏木川式、大安在B式などに相当する土器（図版IV-14）。

図IV-11の4や図版IV-14の198などに代表され、口唇や胴部の貼付帯に刺突穴が施されるところに特徴がある。図版IV-14の195と196は同一個体である。口唇部表面が剥落した196には刺突穴が認められ、表面が剥落していない195には刺突穴がみられない。このことから、ひとたび刺突穴をうがったのちに表面をふさぎ、その上に縄文を施す口唇部調整の存在を知ることができる。

この土器の分布は図IV-10の5に示した。2ヵ所の微高地からすこし離れたI-17区のあたりにも点在している。

5：III b-3類に含まれるもので、静狩式、レンガ台式などに相当する土器（図版IV-14）。水平口縁で、斜行縄文がみられるものである。この土器の分布はIII b-2類の分布と類似している（図IV-10、6）。このほか型式を確定しがたい土器（図版IV-14の217~232）について、若干の特徴を以下に記す。

217と218は、口唇部に横ならびに刺突が連続している。223と224は底部破片で、外面に縦方向の細い沈線がみられる。225と226は同一個体と考えられ、口唇に刺突穴が、口縁部と胴部に下方からつきあがる刺突列がみられる。胎土や焼成の具合、縄文のきめこまやかさなどからみると、早期の燃糸文土器に含まれる可能性もある。228と229は同一個体で地文の縄文を切り裂くような2本のすどい沈線がある。231は、押し引き痕のある胴部破片であり、内面の研磨、光沢からみると同筒上層式に相当するものであろうか。232は、縄文地に曲線の沈線がみられる胴部破片で、縄文時代後期の磨消縄文土器の可能性がある。

3) 早期の石器

石鏃の1~4、つまみ付きナイフの28~36、スクレイパーの44~46、すり石の75~78などは、早期の石器と考えられる。石鏃は、黒曜石製のものが多く、細身でうすくつくられている。ほかに、7の細長い二等辺三角形でそれぞれの辺が内側にかかるく湾曲するもの、18・19の長い五

角形のもの、20の基部が強く内湾するものなども早期の可能性がある。つまみ付きナイフは、すべて頁岩製である。縦長剥片を素材にしており、正面図右側に急な傾斜の剥離によって刃部が作られている。

スクレイパーは、すべて頁岩製で、両面加工によって長軸に対してほぼ対称に整形され、両側縁と一端に刃部が作られる。すり石は、断面が三角形の礫を素材としており稜線部分が使用されている。安山岩製。

このほか、61・67の蛇紋岩製の擦り切り手法によってつくられた石斧、99～101の角礫にすり面のある石皿、95～97の石錘なども早期のものであろう。つまみ付きナイフ、スクレイパー、すり石、石皿の出土位置は、早期の土器の分布域と一致する。

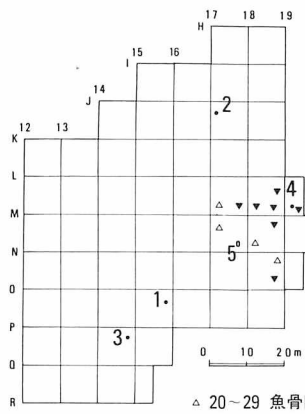
4) 中期の石器

石鏃の8～17、すり石の80～87は、中期の石器と考えられる。石鏃は、すべて黒曜石製で茎部をもつ。すり石は、扁平なもの(80・81)と幅広いすり面をもつもの(82～87)の二種がある。扁平なすり石は、板状の礫を打ち欠きによって整形し、その側縁を使用している。幅広いすり面をもつすり石は、亜円礫を敲打によって整形し、お供え形のものが多い。このすり石は、顕著なすり面を持つ一方、すり面に衝撃点をもつ破損品もみられるので、たたき石としても使われたものと考えられる。

表IV-1 包含層出土石器等の分類別内訳

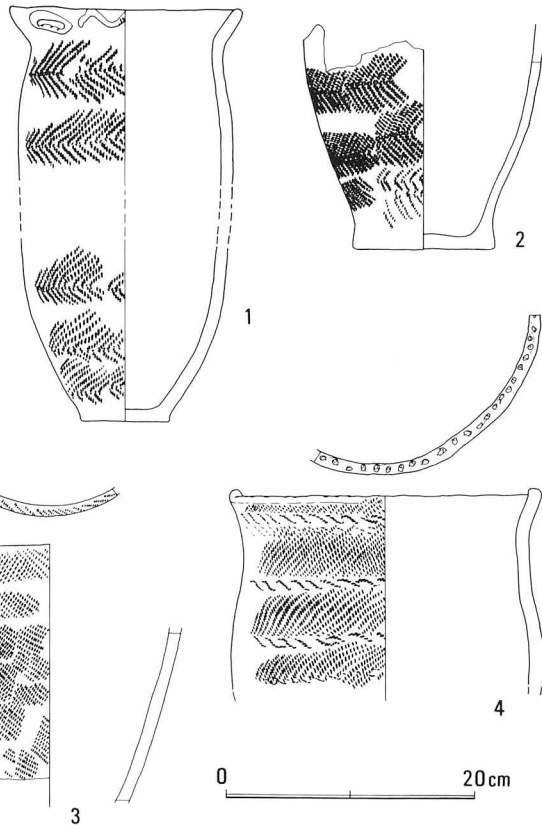
名 称	分 類	数	名 称	分 類	数	名 称	分 類	数
石 鏃	IA2a	4	石 斧	IVA4	3	石 皿	VIB1	3
〃	3	3	〃	5	4	〃	VIB-	3
〃	4	12	〃	8	6	石 鋸	VIA-	2
〃	IA-	14	〃	IVA-	16	砥 石	VIB1	1
や り 先	IB1	3	石 の み	IVB-	2	〃	2	4
ま た は			た た き 石	VA1	2	〃	VIB-	2
ナ イ フ	IB-	3	〃	2	2	石 錘	VIA2	1
石 錘 類	IIA3	3	〃	VA-	6	〃	3	2
〃	IIA-	2	台 石	VB-	3	〃	VIA-	1
つまみ付き	IIIA1	10	す り 石	VI A 1	1	コ ア	IX A	5
ナ イ フ	2	1	〃	2	1	フレイク・チップ	IX B	約4200
〃	3	3	〃	3	5	Uフレイク	XA	33
〃	IIIA-	9	〃	4	13	加工痕・使用痕のある礫	XB	8
スクレイパー	IIIB1	3	〃	5	1			
〃	IIIB-	38	〃	VI A -	8			
石 斧	IVA1	1						

IV A 地域の調査

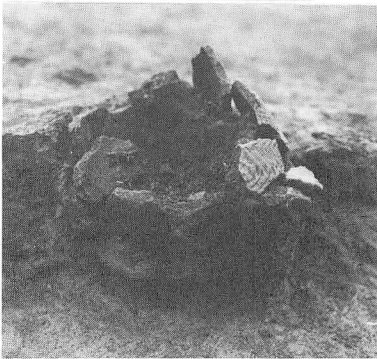
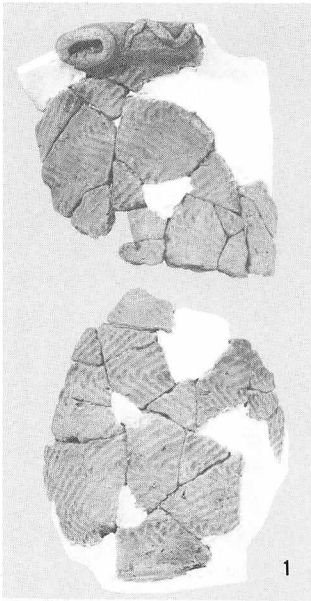


△ 20~29 魚骨回転文土器
▽ 6~19 貝殻条痕文土器

土器の出土位置(1~29)



図IV-11 包含層の土器と出土位置



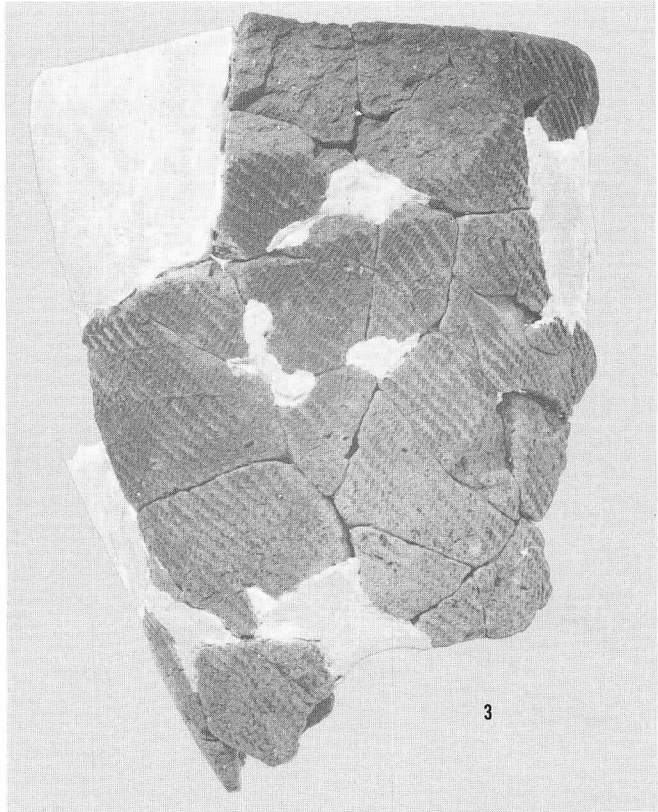
土器2の出土状況



土器2



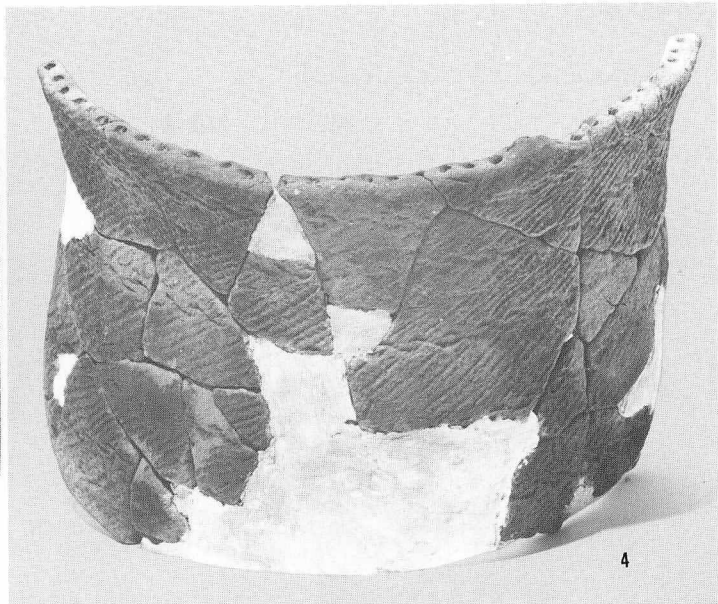
土器3の出土状況



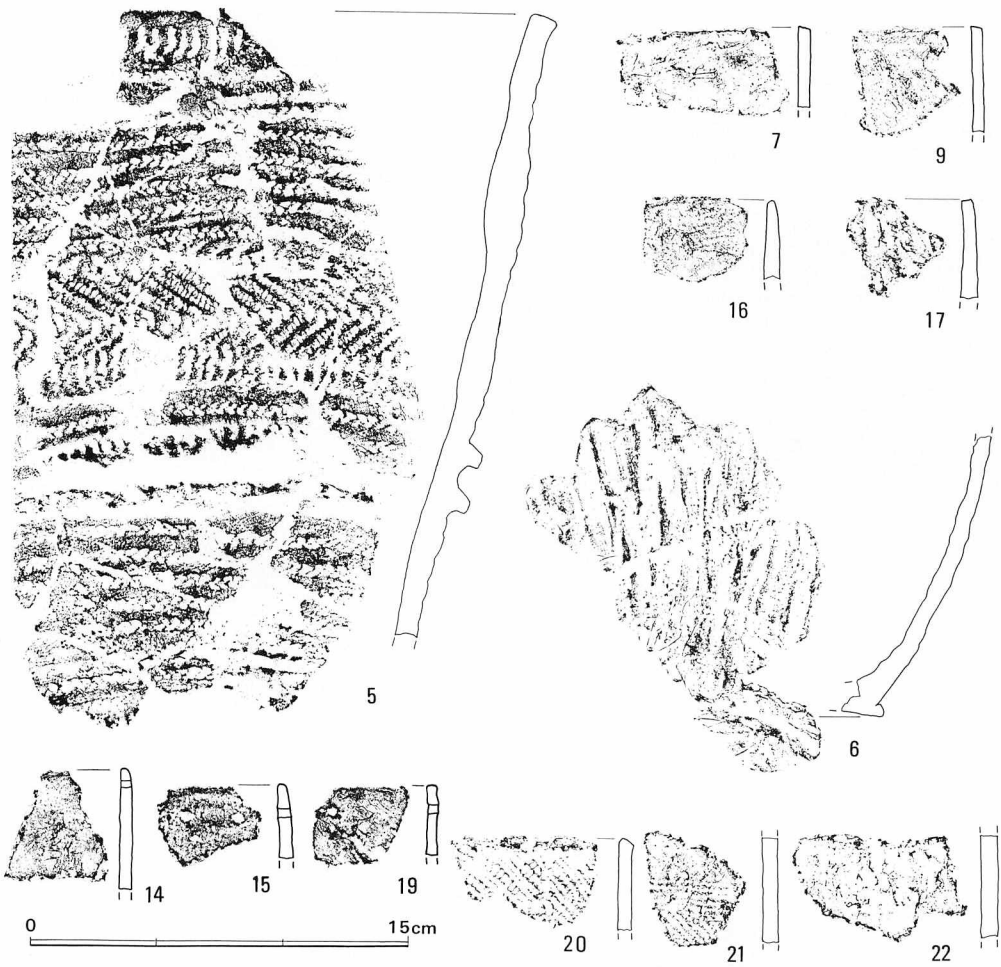
土器3



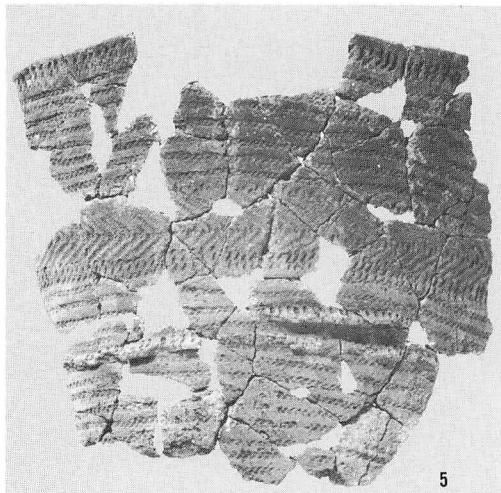
土器4の出土状況



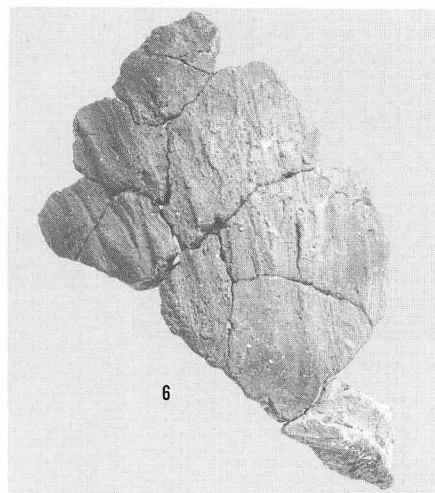
土器4



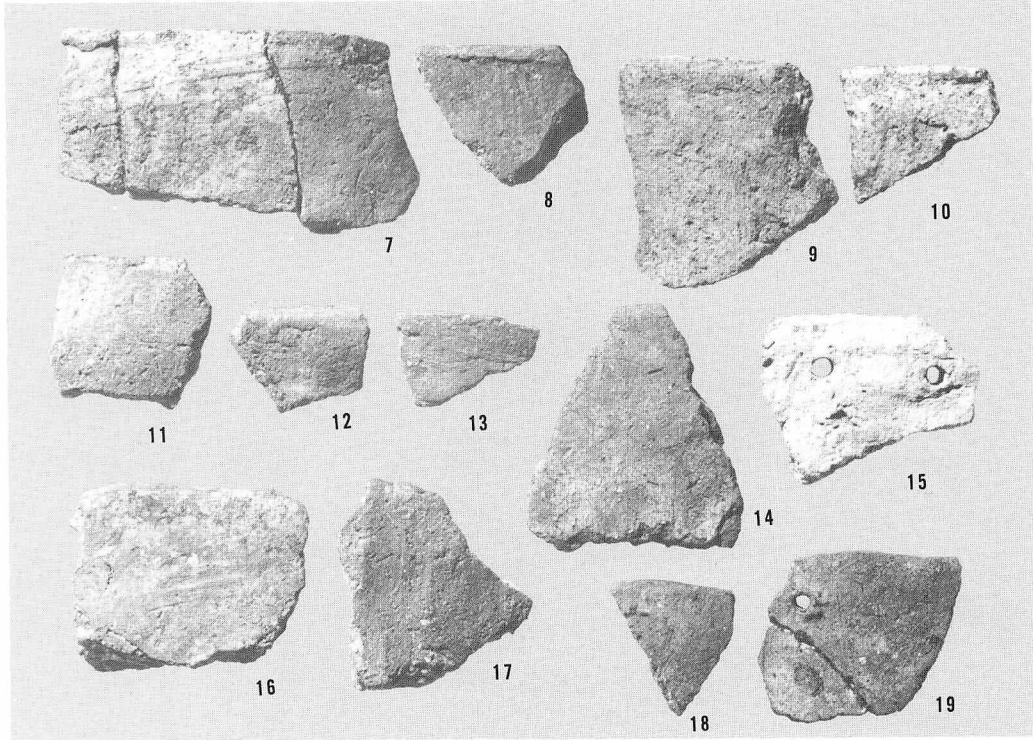
図IV-12 包含層の土器



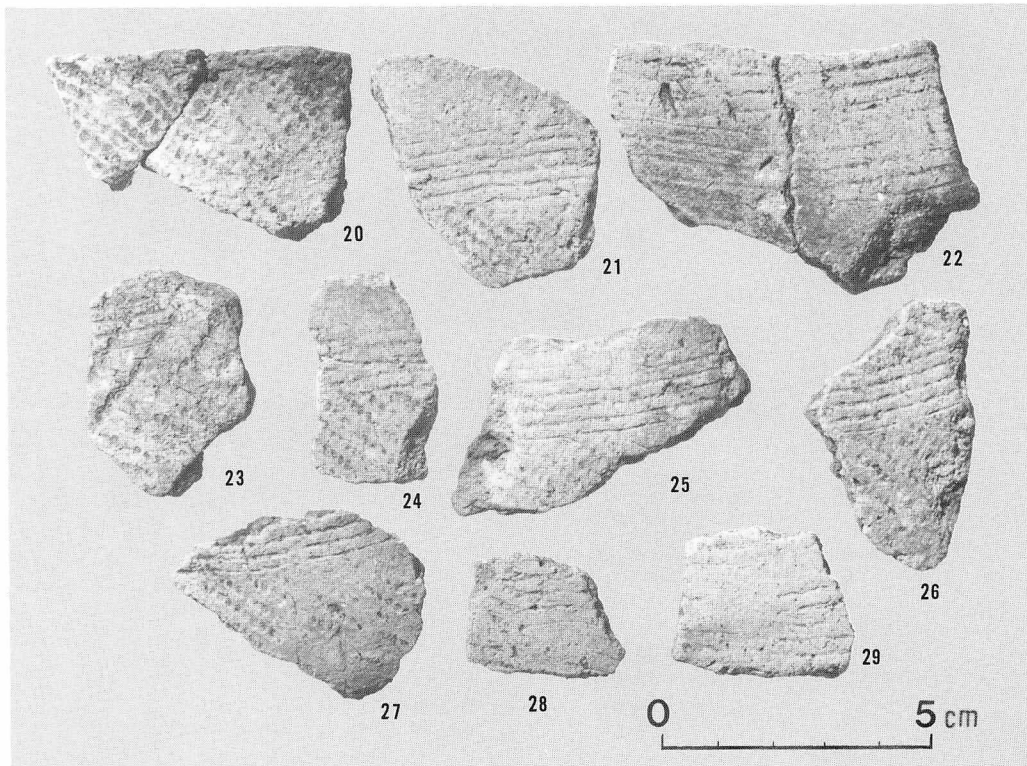
土器5



土器6



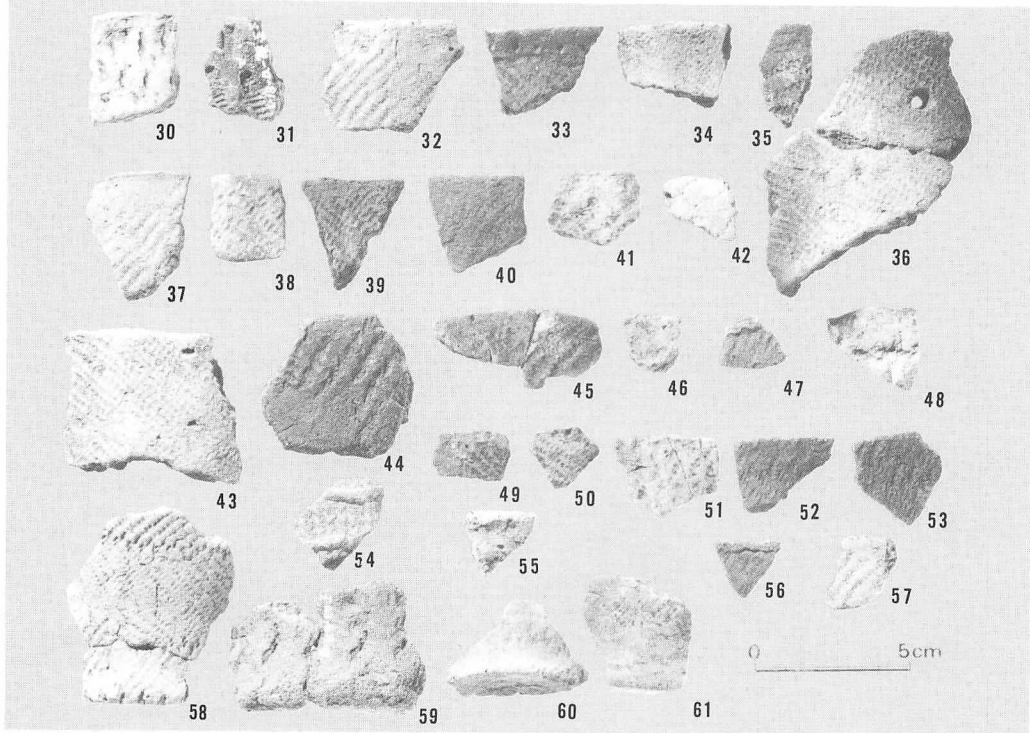
1.



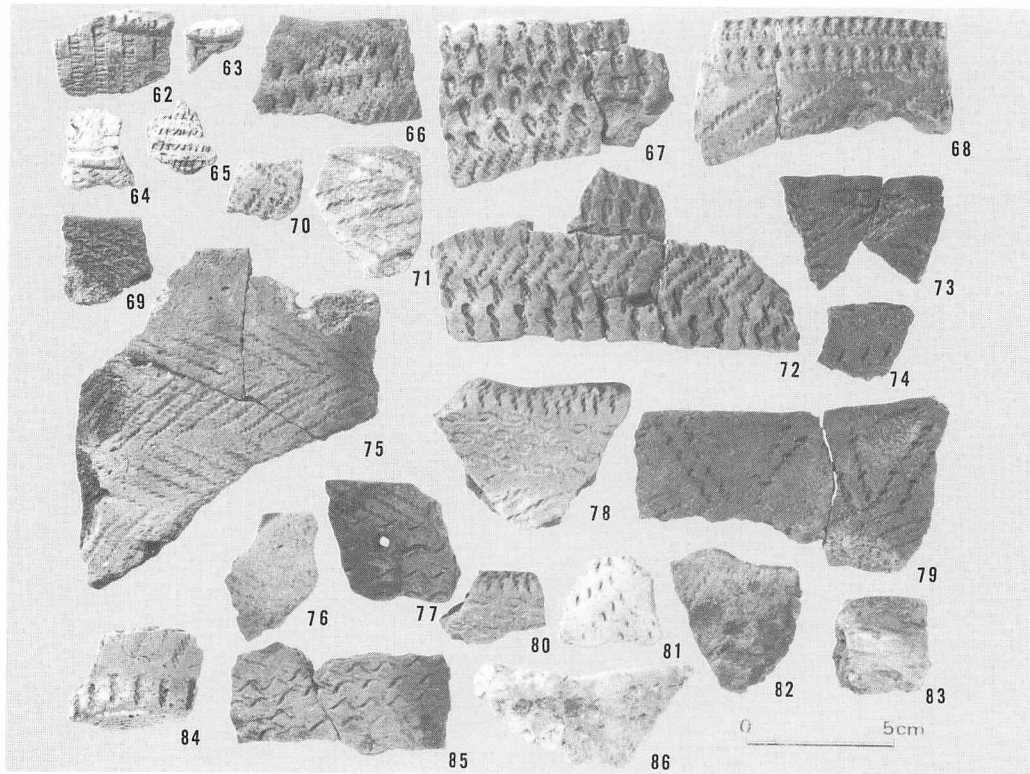
2.

包含層の土器(1)

図版IV-11

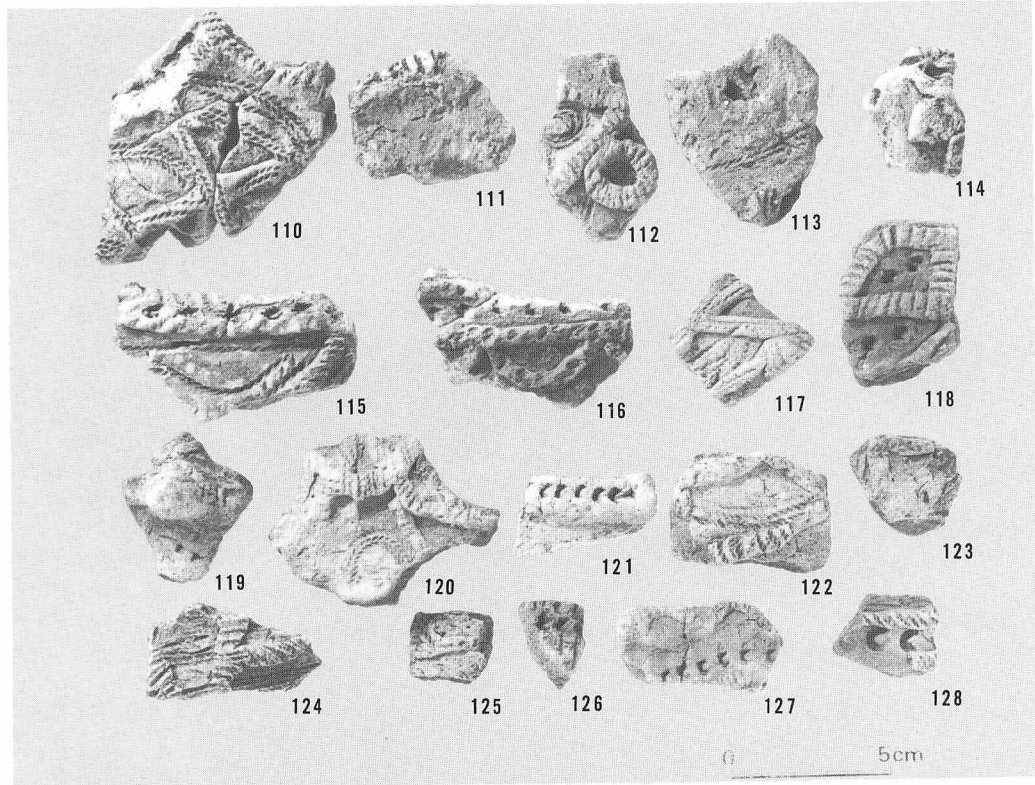


1.

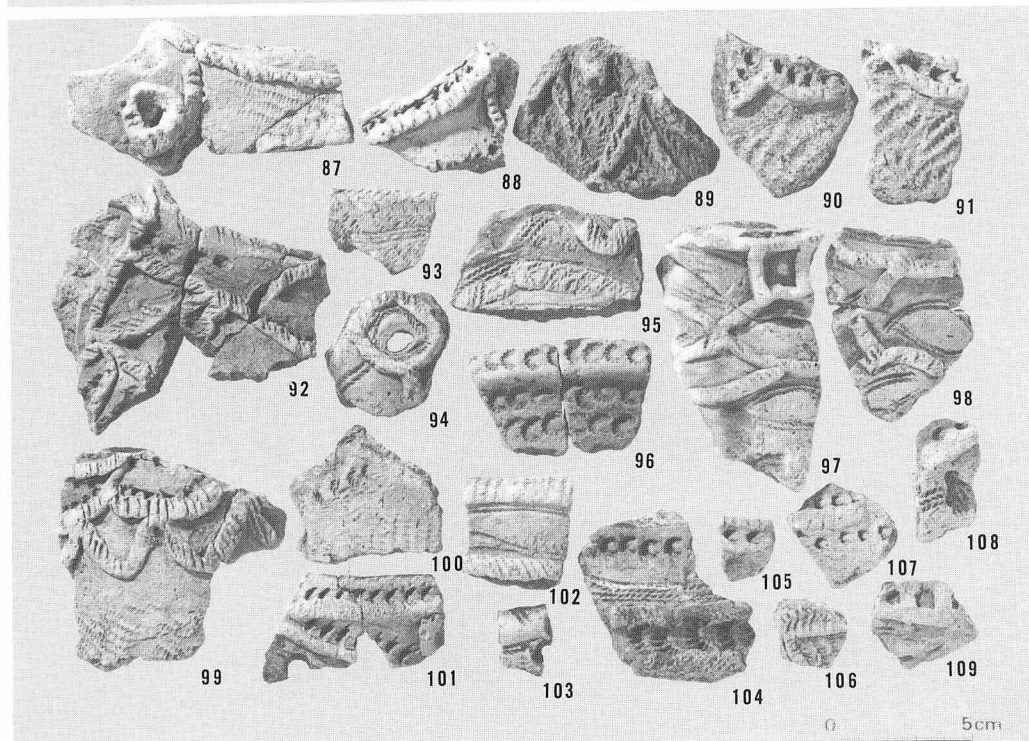


2.

包含層の土器 (2)



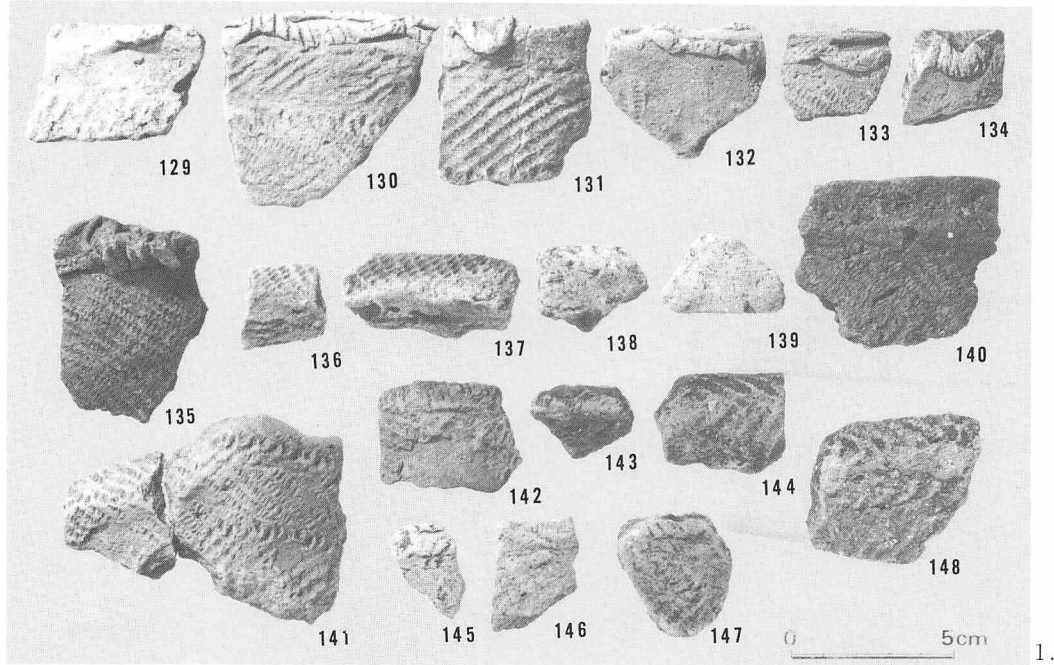
1.



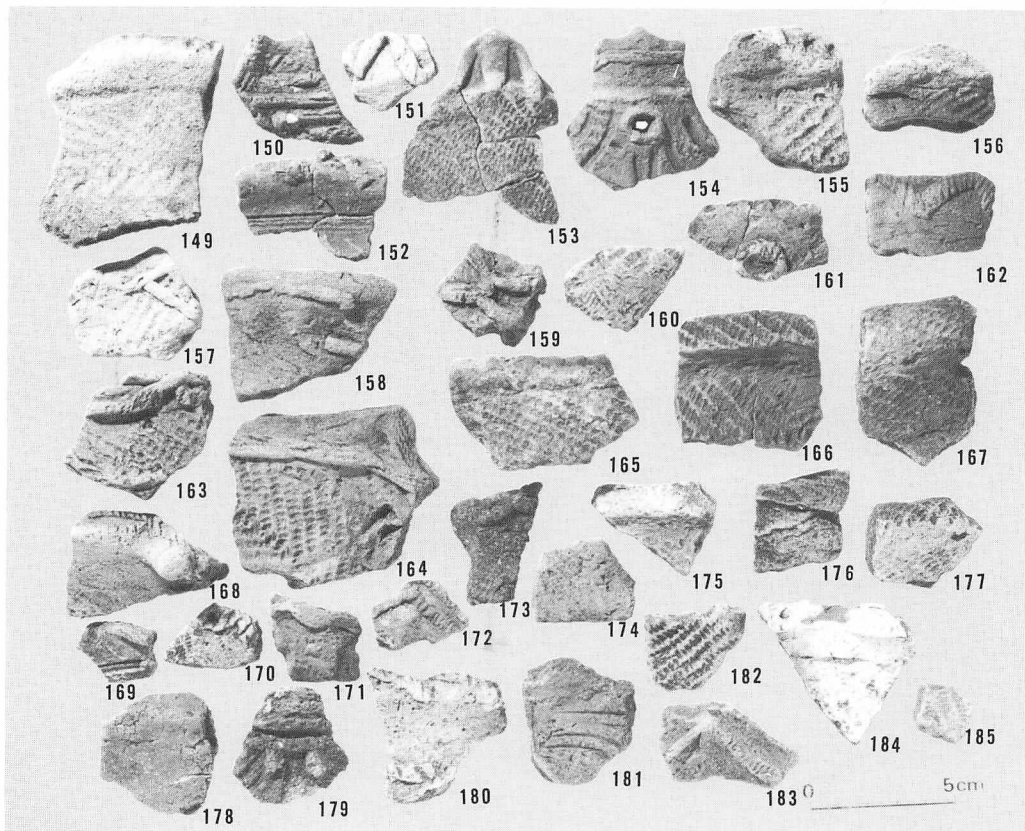
2.

包含層の土器(3)

図版IV-13



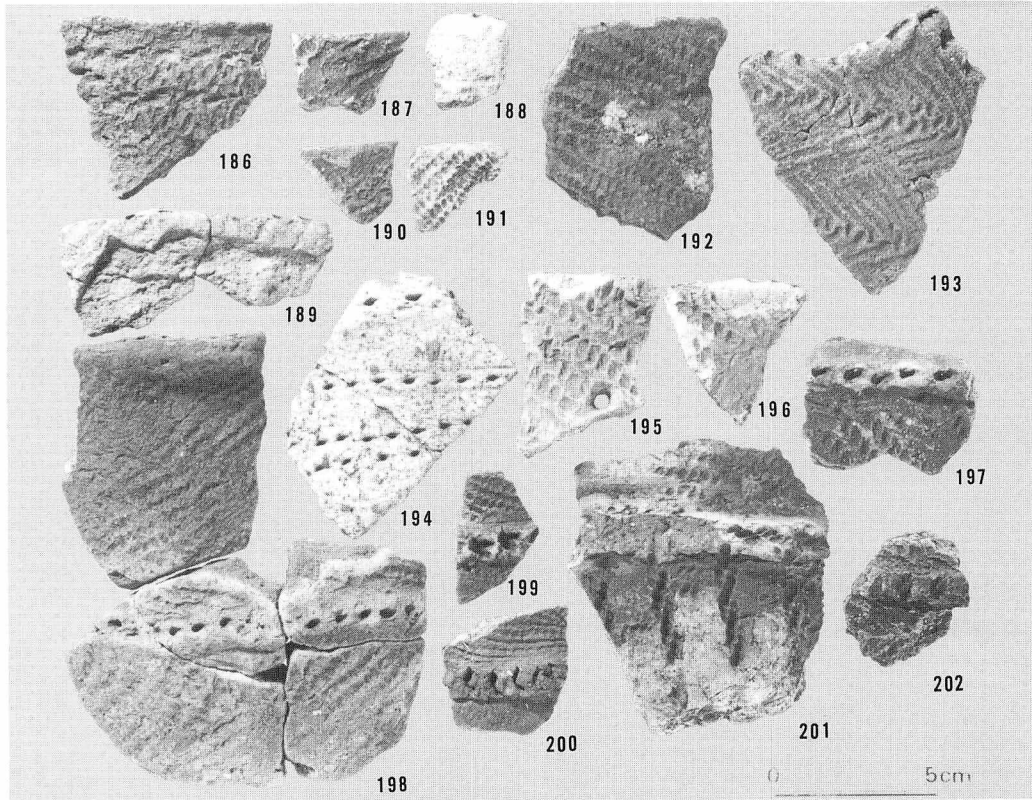
1.



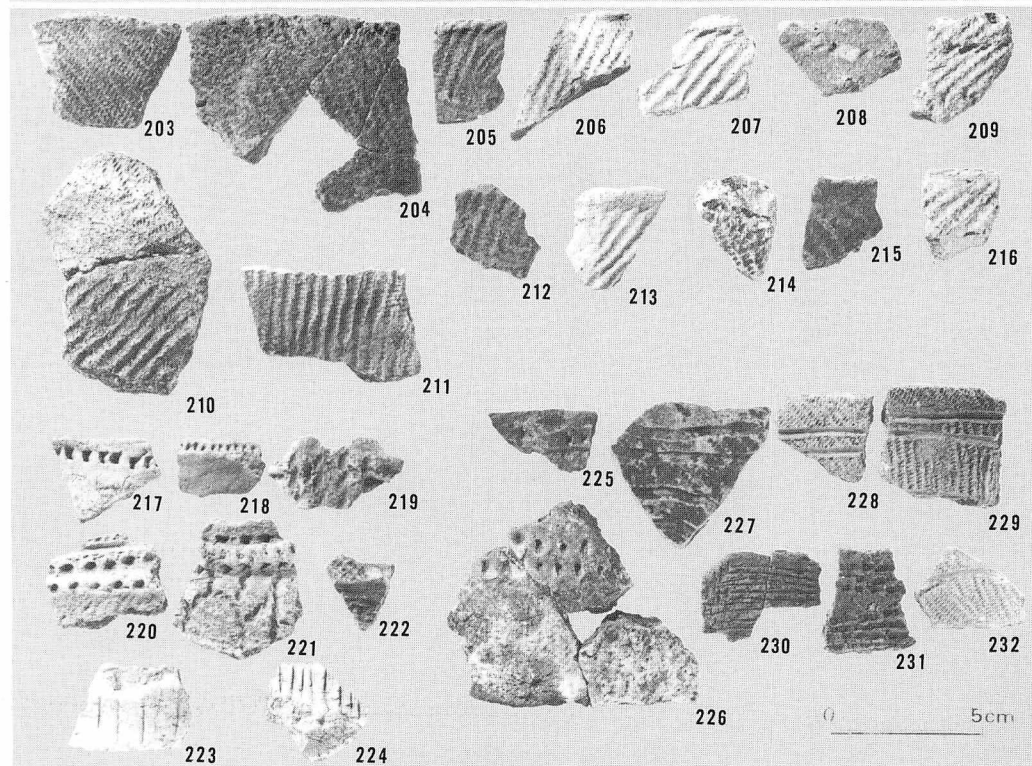
2.

包含層の土器(4)

図版IV-14

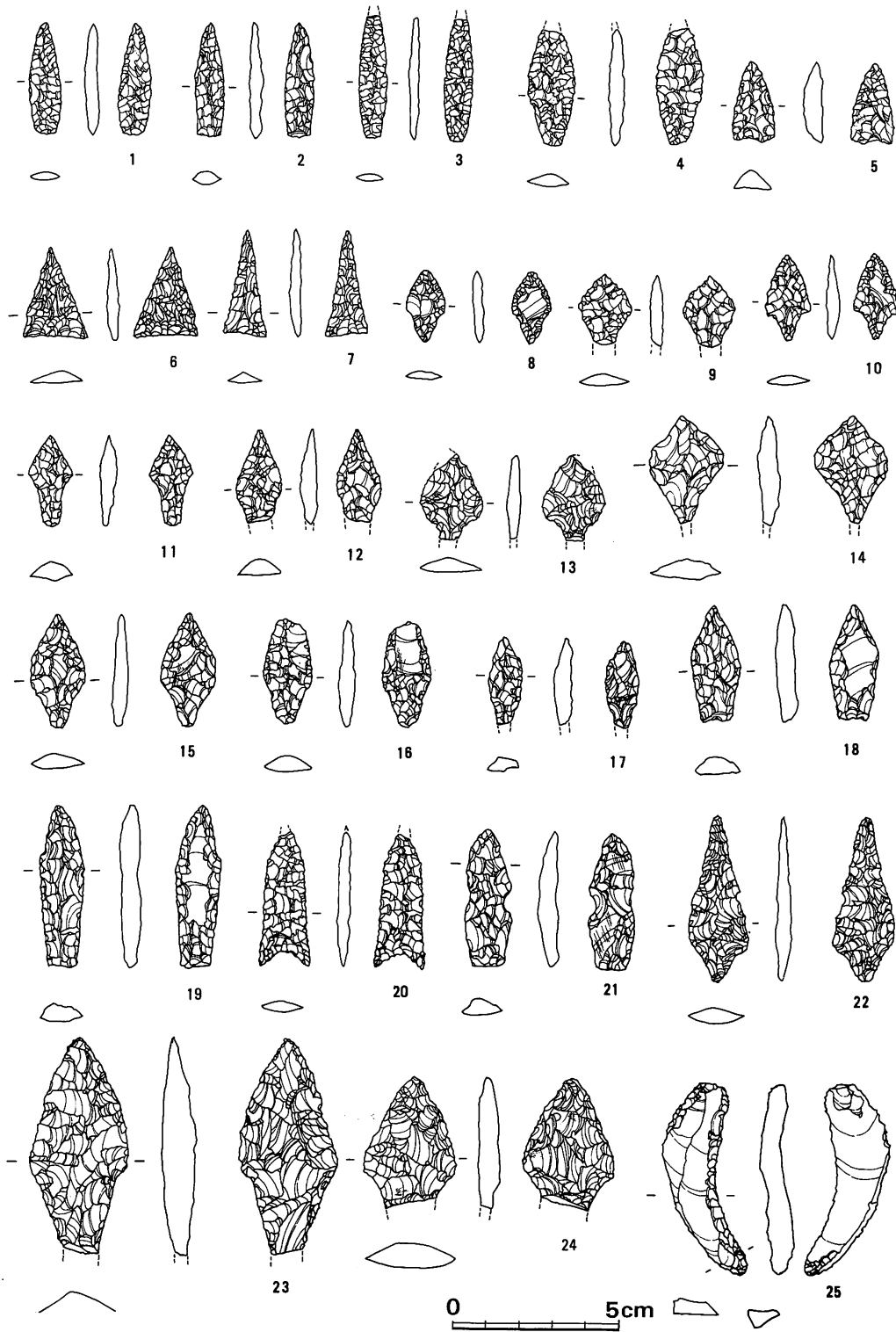


1.

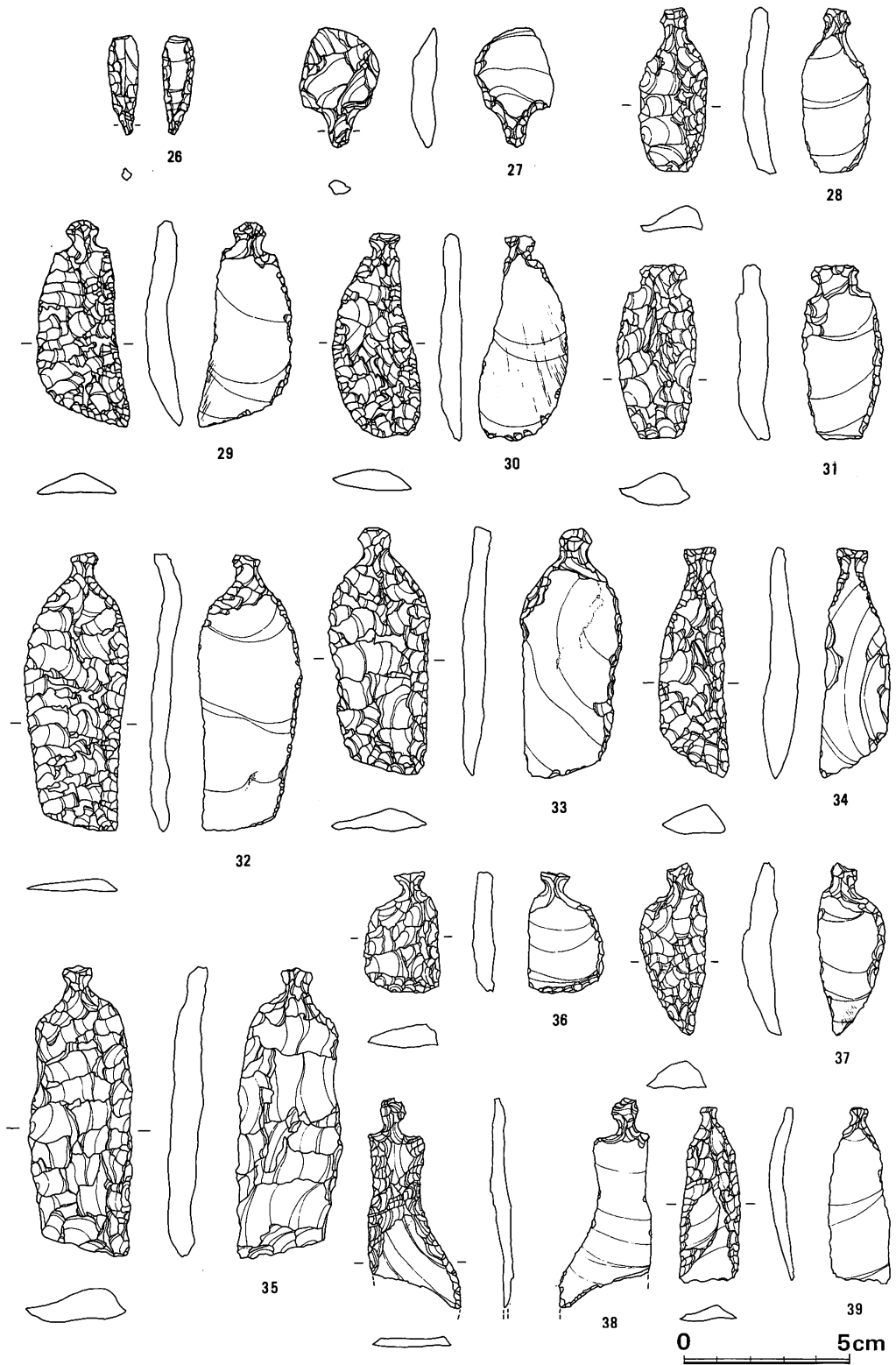


2.

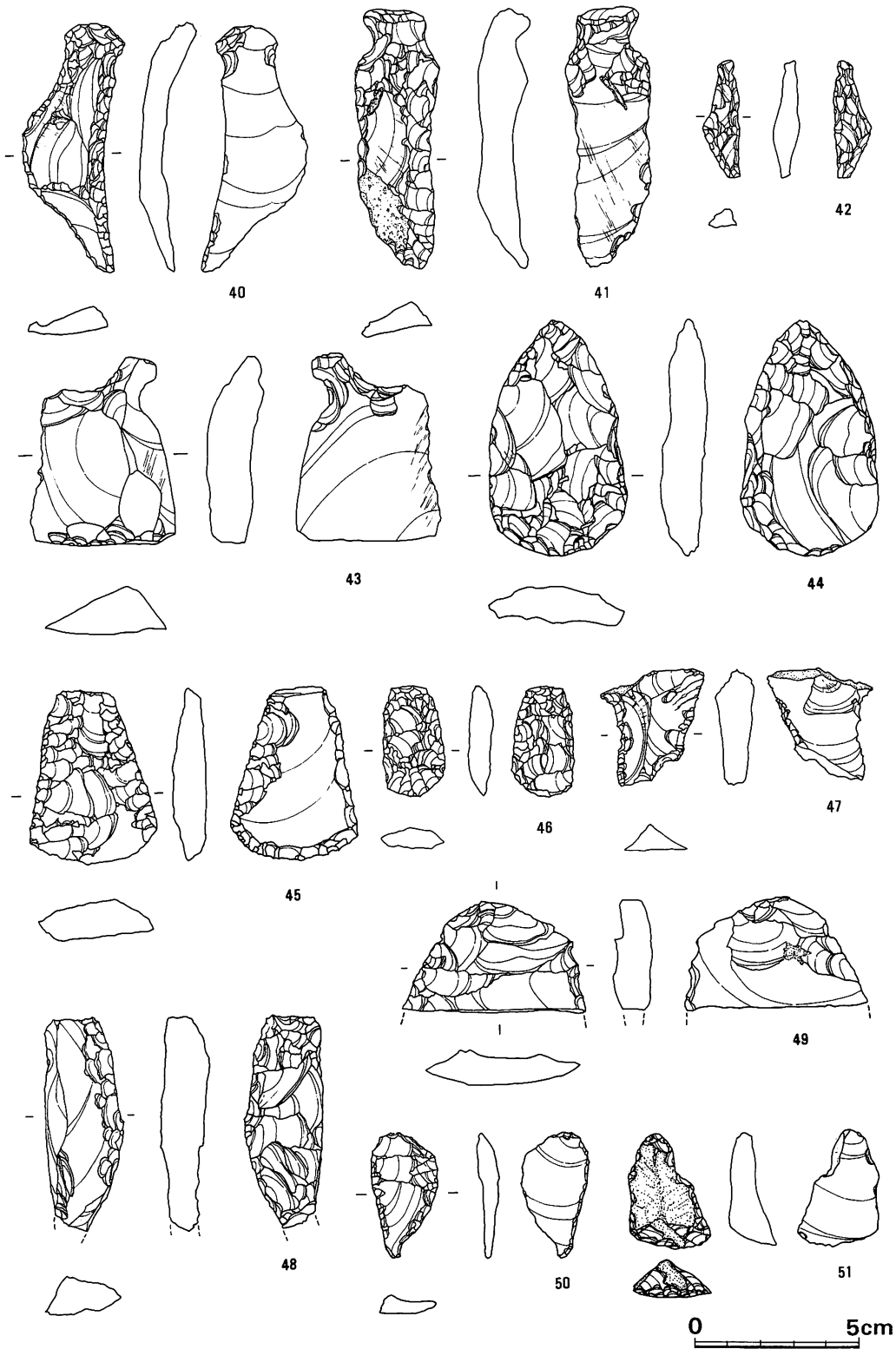
包含層の土器(5)



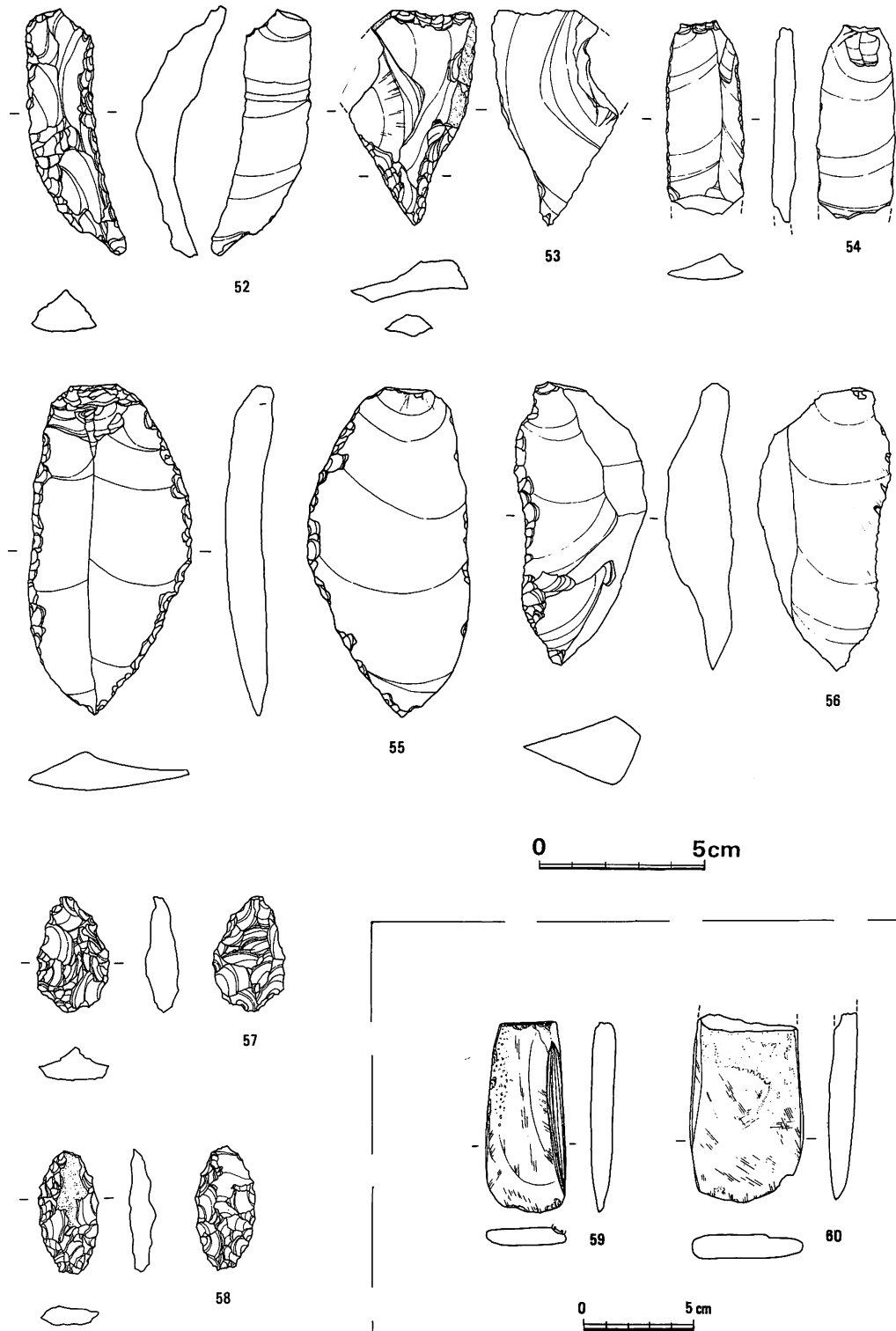
図IV-13 包含層の石器(1)



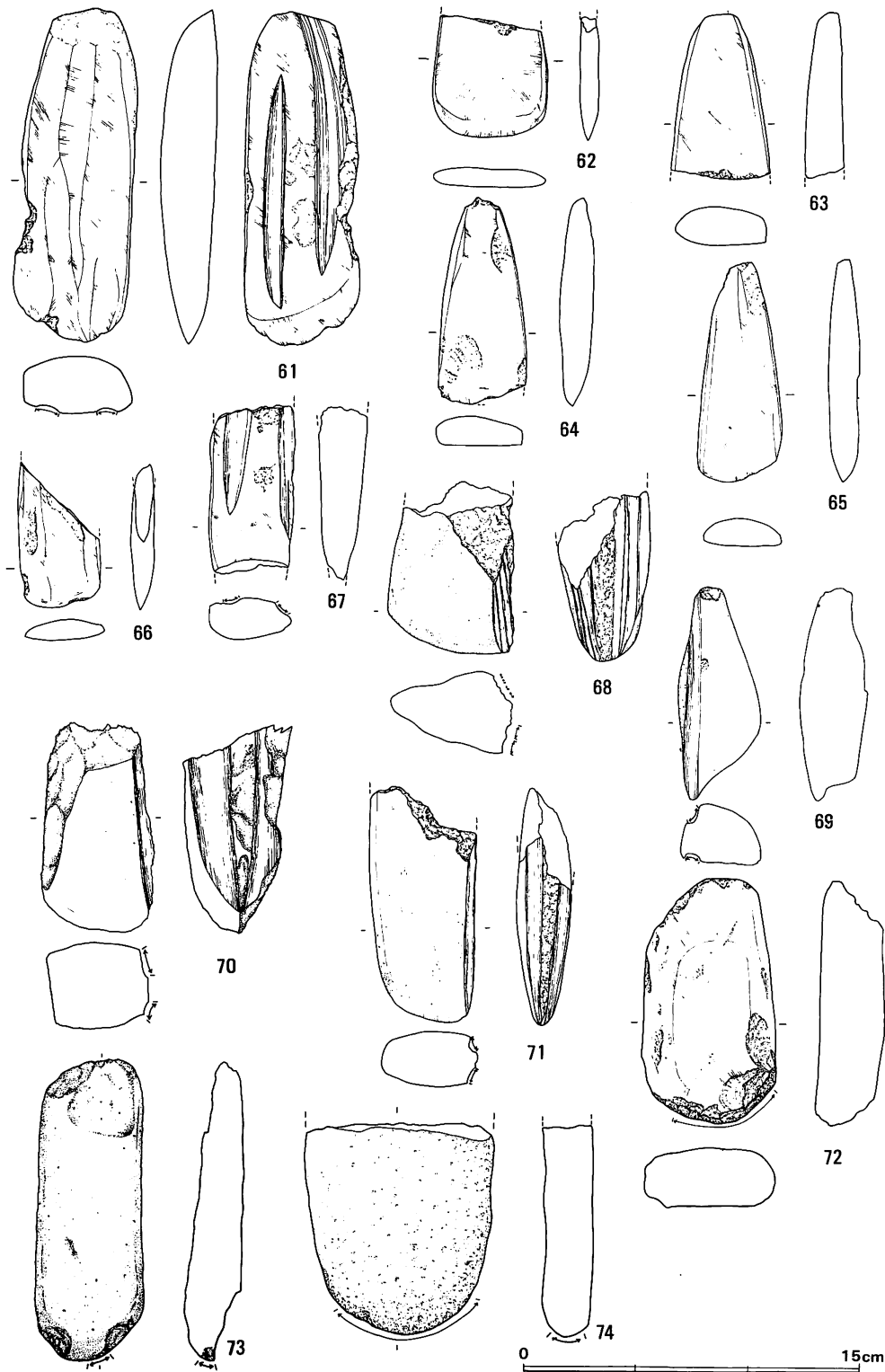
図IV-14 包含層の石器(2)



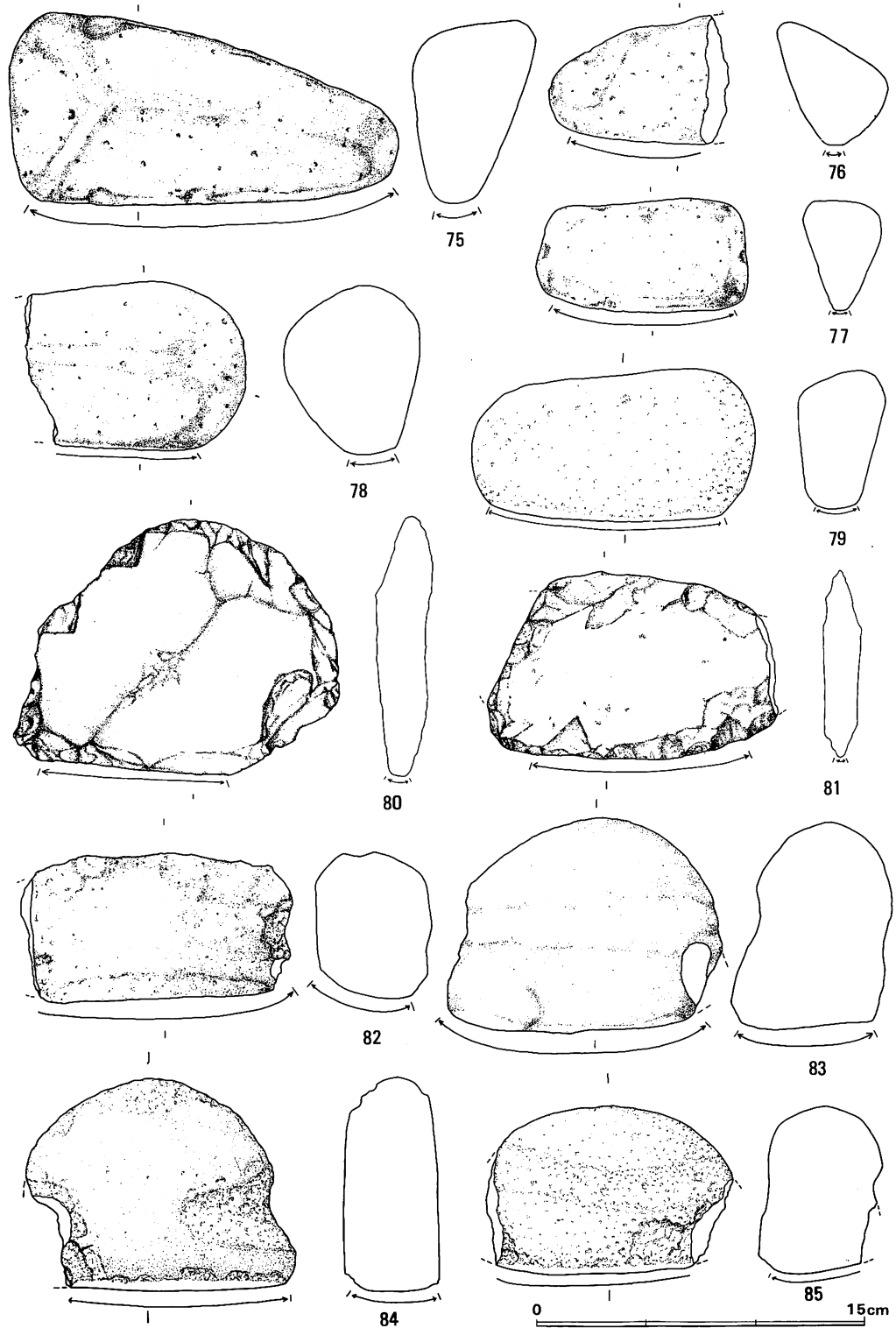
図IV-15 包含層の石器(3)



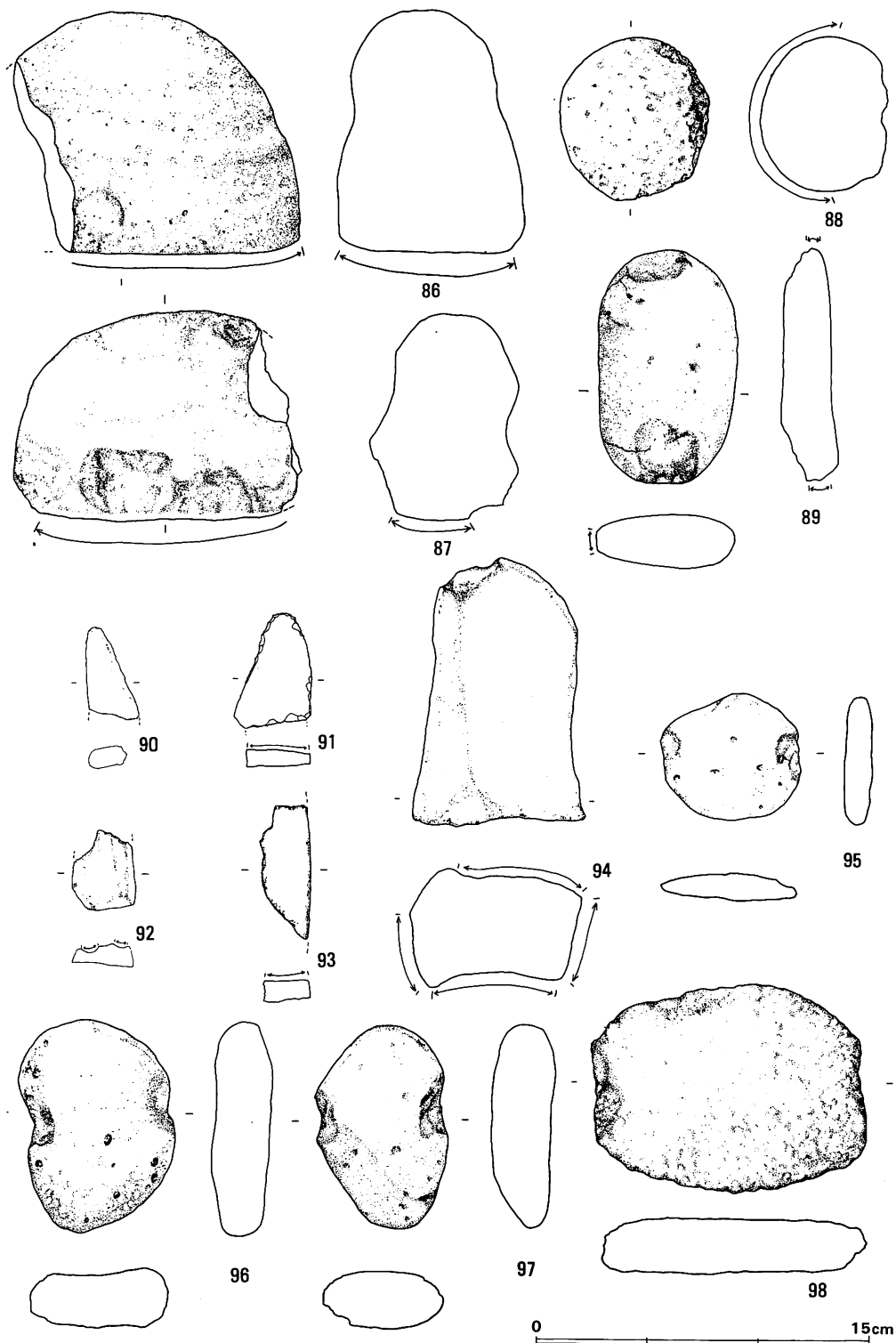
図IV-16 包含層の石器(4)



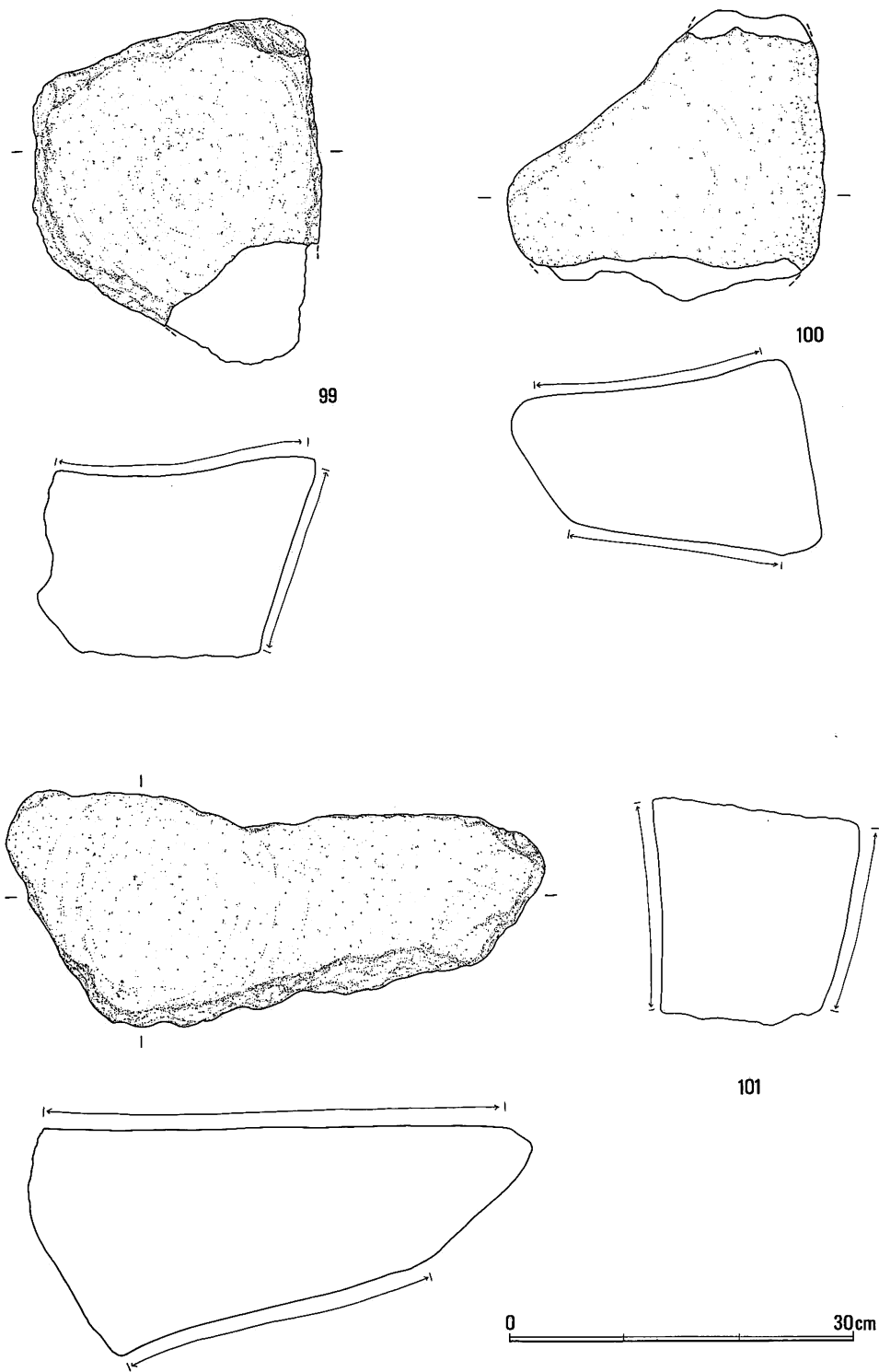
図IV-17 包含層の石器(5)



図IV-18 包含層の石器(6)

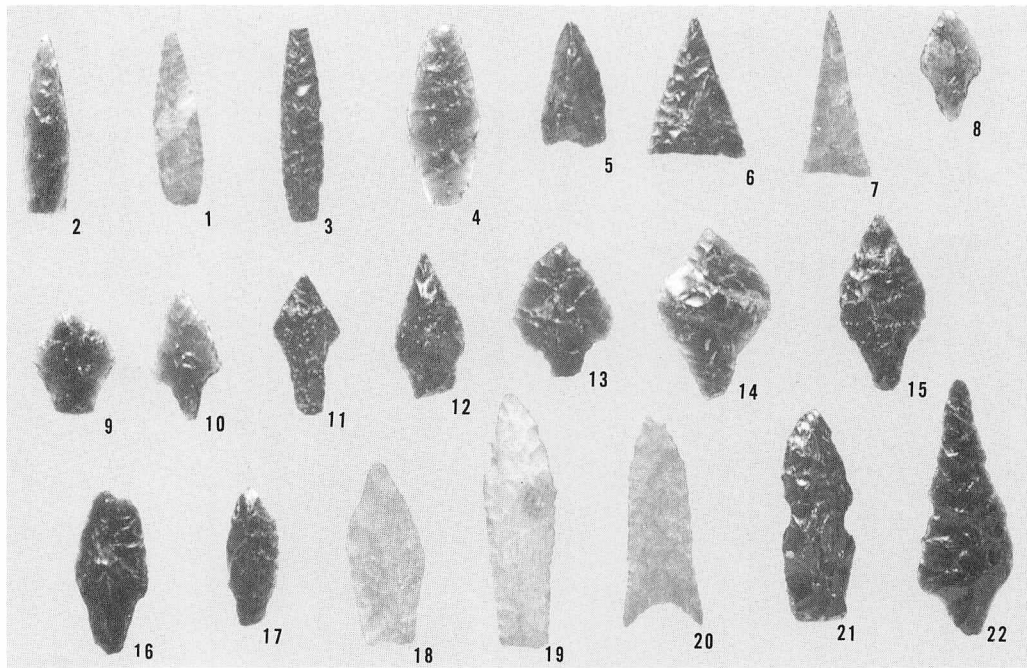


図IV-19 包含層の石器(7)

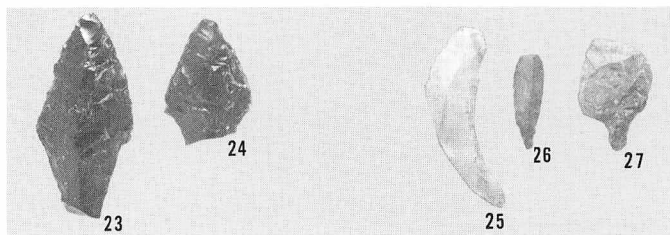


図IV-20 包含層の石器(8)

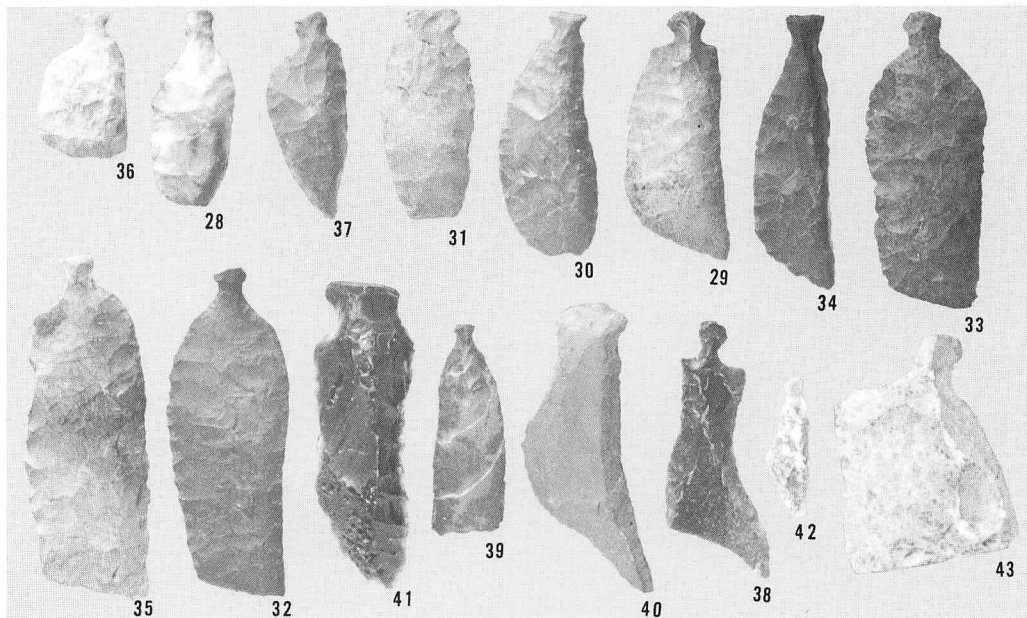
図版IV-15



1.

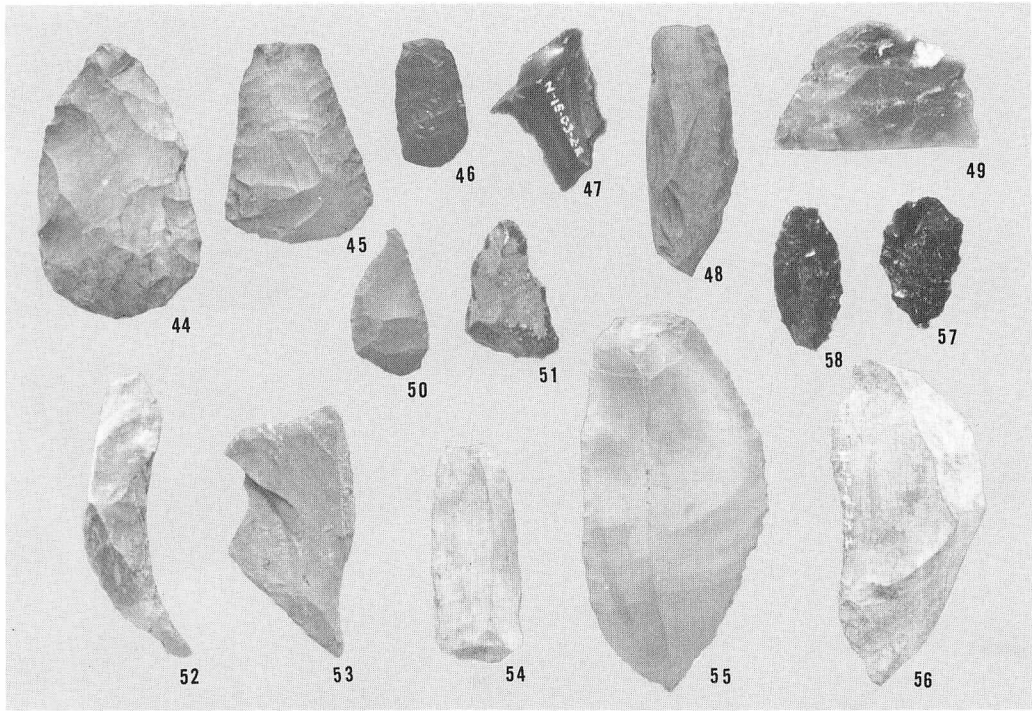


2.

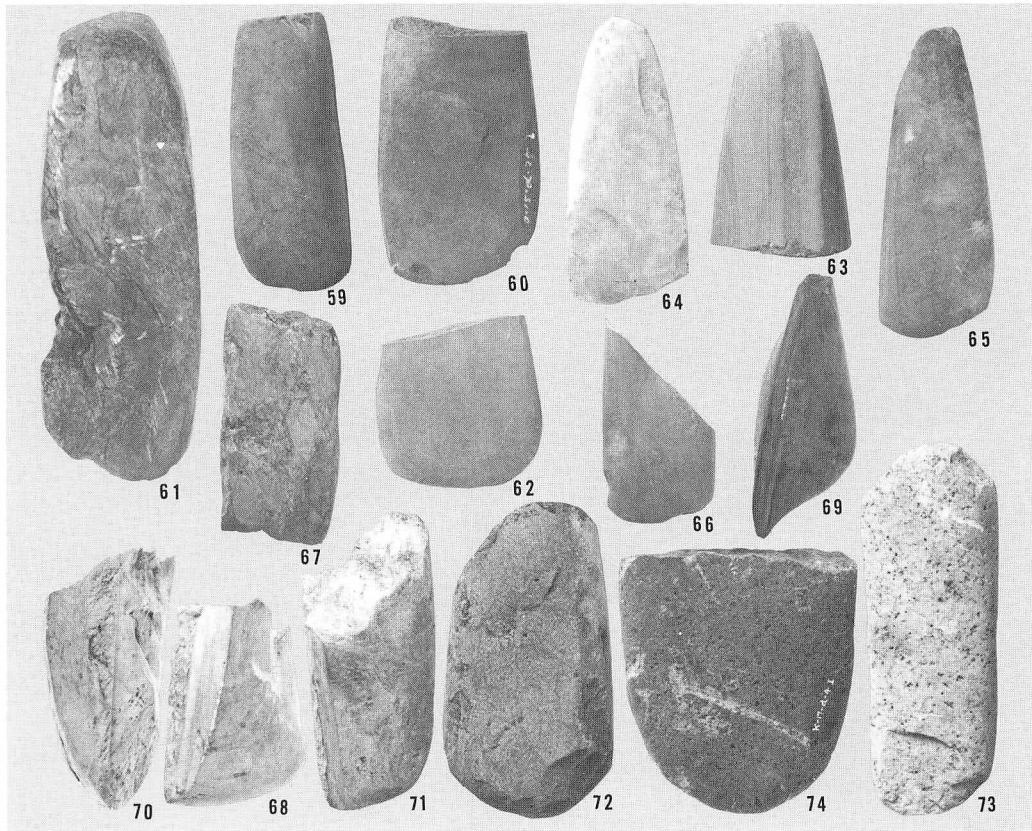


3.

包含層の石器(1)



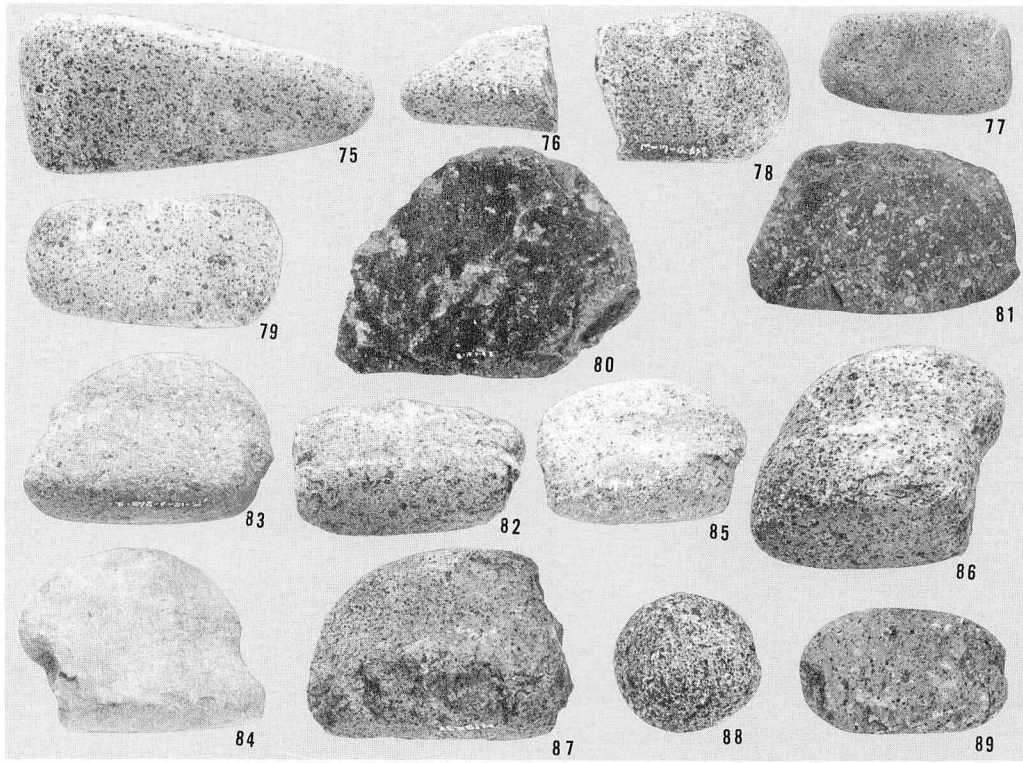
1.



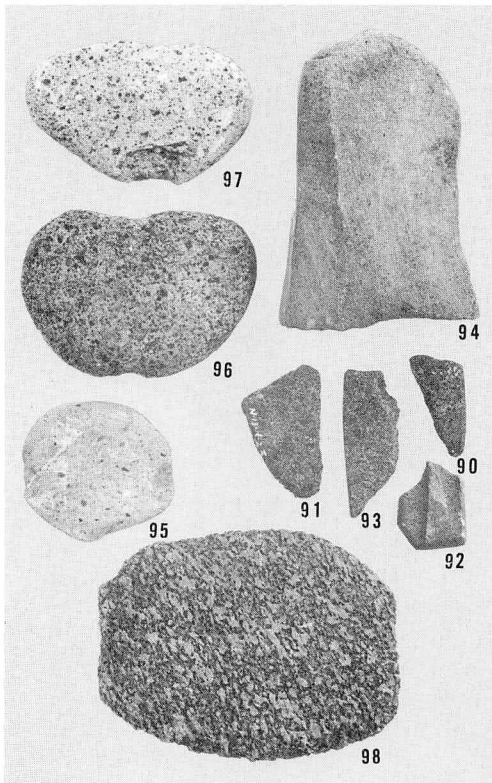
2.

包含層の石器(2)

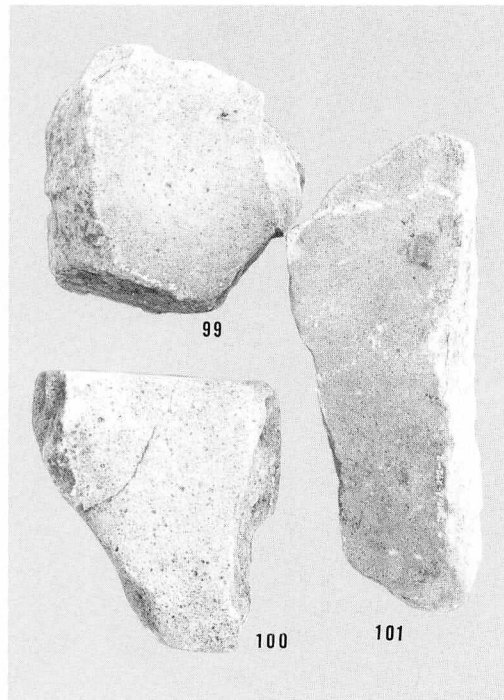
図版IV-17



1.



2.



3.

包含層の石器(3)

表IV-2 A地区掲載土器一覧表(1)

番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
1	IIIa-3	O-15-d		21	Ib-2	M-17-a		41	Ib-2	J-17-b	
2	"	J-17-a		22	"	N-18-a		42	"	L-18-a	
3	IIIb-1	P-14-d		23	"	M-17-a		43	"	L-16-b	
4	IIIb-2	L-17-b		24	"	L-17-b		44	"	N-18-d	
5	Ib-1	M-17-c		25	"	M-17-a		45	"	J-17-b	
6	Ia	L-18-b・c・d		26	"	L-17-b		46	"	M-17-b	
7	"	M-18-d		27	"	L-17-b		47	"	N-18-a	
8	"	M-18-d		28	"	M-18-b		48	"	L-17-b	
9	"	M-18-d		29	"	M-18-b		49	"	M-17-a	
10	"	M-18-d		30	Ib-1	N-18-a		50	"	K-19-b	
11	"	L-18-c		31	"	L-18-a		51	"	N-18-a	
12	"	M-18-d		32	Ib-2	L-17-b		52	"	K-19-b	
13	"	M-18-d		33	"	N-16-c		53	"	K-19-b	
14	"	N-18-c		34	"	N-17-a		54	"	N-18-c	
15	"	L-19-b		35	"	L-18-a		55	"	L-17-a	
16	"	L-18-c		36	"	N-17-d		56	"	N-18-a	
17	"	L-18-c		37	"	K-18-c		57	"	N-18-a	
18	"	L-17-c		38	"	M-17-d		58	"	N-18-d	
19	"	L-17-c		39	"	N-17-d		59	"	N-18-a	
20	Ib-2	L-17-b		40	"	K-18-c		60	"	L-18-a	
番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
61	Ib-2	M-17-d		81	Ib-4	M-18-d		101	IIIa	M-19-a	
62	Ib-3	M-17-a		82	"	M-18-a		102	"	N-18-a	
63	"	M-18-c		83	"	M-18-d		103	"	K-19-b	
64	"	M-17-a		84	Ib-2	M-18-c		104	"	L-17-b	
65	"	M-17-a		85	Ib-4	M-18-c		105	"	M-17-c	
66	Ib-4	K-17-c		86	"	K-17-c		106	"	M-17-c	
67	"	K-17-c		87	IIIa	M-17-b		107	"	N-17-a	
68	"	K-17-c		88	"	M-17-c		108	"	N-18-a	
69	"	K-18-d		89	"	O-16-a		109	"	M-19-a	
70	"	M-19-b		90	"	M-16-d		110	"	P-15-a	
71	"	M-18-d		91	"	M-18-b		111	"	Q-13-c	
72	"	K-17-c		92	"	N-17-d		112	"	Q-14-b	
73	"	K-18-d		93	"	L-19-b		113	"	O-12-b	
74	"	K-17-c		94	"	M-18-c		114	"	P-15-d	
75	"	N-18-a		95	"	L-19-a		115	"	O-15-b	
76	"	N-18-a		96	"	L-19-a		116	"	Q-15-a	
77	"	M-18-c		97	"	N-18-c		117	"	N-15-a	
78	"	K-18-b		98	"	N-18-b		118	"	Q-14-d	
79	"	N-17-d		99	"	M-17-c		119	"	O-13-d	
80	"	K-18-b		100	"	N-17-b		120	"	O-13-a	

表IV-3 A地区掲載土器一覽表(2)

番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
121	III a	O-15-d		141	III a	K-18-c		161	III a	P-14-b	
122	"	P-14-c		142	"	M-18-c		162	"	N-14-d	
123	"	N-14-c		143	"	M-18-c		163	"	N-14-b	
124	"	Q-13-c		144	"	M-18-c		164	"	P-15-a	
125	"	Q-13-d		145	"	N-18-a		165	"	P-15-b	
126	"	O-15-b		146	"	N-18-d		166	"	Q-13-c	
127	"	Q-13-d		147	"	N-18-d		167	"	O-14-b	
128	"	M-19-a		148	"	N-18-c		168	"	N-13-c	
129	"	L-13-c		149	"	N-13-a		169	III b-1	Q-15-a	
130	"	L-17-d		150	"	Q-13-d		170	III a	P-15-b	
131	"	M-18-b		151	"	O-15-d		171	"	Q-13-c	
132	"	N-18-b		152	"	Q-13-c		172	"	Q-14-c	
133	"	N-18-b		153	"	P-14-d		173	"	O-15-d	
134	"	N-18-a		154	"	N-15-b		174	"	Q-14-b	
135	"	M-19-a		155	"	Q-14-b		175	"	P-14-a	
136	"	M-18-d		156	"	O-15-b		176	"	O-15-c	
137	"	M-18-d		157	"	Q-13-d		177	"	P-14-b	
138	"	N-18-d		158	"	N-14-b		178	"	Q-13-c	
139	"	M-18-b		159	"	Q-14-b		179	"	Q-14-c	
140	"	M-18-b		160	"	O-15-b		180	"	N-14-a	
181	III b-1	P-14-b		201	III b-2	J-17-d		221	III b-3	K-18-c	
182	III a	O-15-b		202	"	P-15-a		222	"	L-17-d	
183	"	N-14-b		203	III b-3	P-14-b		223	"	H-17-d	
184	"	P-14-b		204	"	Q-15-b		224	"	M-17-c	
185	"	Q-15-a		205	"	M-17-b		225	"	O-15-c	
186	III b-2	I-18-d		206	"	M-17-b		226	"	O-15-c	
187	"	L-18-a		207	"	J-17-c		227	"	O-15-d	
188	"	M-17-d		208	"	O-14-d		228	"	不明	
189	"	M-17-c		209	"	H-18-a		229	"	N-18-c	
190	"	I-18-c		210	"	N-18-c		230	"	N-15-c	
191	"	N-18-d		211	"	J-17-c		231	"	M-17-b	
192	III b-1	P-14-d		212	"	M-17-b		232	"	L-19-b	
193	"	O-14-b		213	"	K-18-a					
194	III b-2	I-17-b		214	"	L-17-c					
195	"	H-17-d		215	"	K-17-a					
196	"	H-17-d		216	"	N-18-d					
197	"	H-17-d		217	"	L-17-d					
198	"	L-19-b		218	"	N-15-c					
199	"	M-17-b		219	"	K-18-c					
200	"	M-17-a		220	"	N-18-c					

表IV-4 A地区掲載石器一覧表(3)

番号	名 称	分 類	発掘区	重さ(g)	材 質	備考	番号	名 称	分 類	発掘区	重さ(g)	材 質	備考
1	石 鏃	I A 2a	M-19-b	0.8	Sh.		52	"	"	M-18-b	7.2	Sh.	
2	"	"	M-15-c	1.0	Obs.		53	"	"	N-15-a	6.6	Che.	
3	"	"	M-18-d	0.8	"		54	"	"	K-18-b	5.5	Sh.	
4	"	"	N-13-b	2.0	"		55	"	"	L-19-a	37.7	"	
5	"	I A 3	N-14-b	1.4	"		56	"	"	H-17-d	34.9	"	
6	"	"	I-18-b	1.1	"		57	U.フレイク	X A	M-18-c	4.5	Obs.	
7	"	"	I-15-a	1.0	Sh.		58	"	"	L-18-d	3.7	"	
8	"	I A 5	Q-18-b	0.6	Obs.		59	石 斧	IV A 1	O-15-d	48.7	Gr-Mud.	
9	"	"	N-12-b	1.0	"		60	"	IV A 4	O-15-d	75.5	"	
10	"	"	P-18-c	0.8	"		61	"	"	N-16-b	320	Ser.	
11	"	"	O-15-a	1.1	"		62	"	"	M-19-b	34.2	Gr-Mud.	
12	"	"	N-18-b	1.4	"		63	"	IV A 5	L-18-d	73.2	"	
13	"	"	O-15-a	1.7	"		64	"	"	O-16-d	51.9	"	
14	"	"	N-17-a	2.7	"		65	"	"	O-17-d	58.8	"	
15	"	"	O-15-d	1.9	"		66	"	"	M-16-c	22.8	"	
16	"	"	M-18-d	1.2	"		67	"	IV A 8	O-15-b	84.1	Ser.	
17	"	"	Q-15-d	1.1	"		68	"	"	N-18-a	200	"	
18	"	I A 9	K-18-d	2.1	Sh.		69	"	"	M-14-c	120	Gr-Mud.	
19	"	"	L-19-a	3.6	"		70	"	"	P-14-c	270	Ser.	
20	"	"	L-18-c	1.9	"		71	"	"	L-19-b	160	"	
21	"	"	M-18-c	3.0	Obs.		72	"	"	L-19-b	320	Gr-Mud.	
22	やり先又はナイフ	I B 1	I-16-a	2.8	"		73	た た き 石	V A 1	N-14-b	210	And.	
23	"	"	P-15-b	7.5	"		74	"	V A 2	K-17-d	320	"	
24	"	"	L-17-d	5.3	"		75	す り 石	VI A 1	N-18-a	970	"	
25	石 錐 類	II A 3	L-19-a	4.7	Sh.		76	"	"	L-19-b	270	"	
26	"	"	K-17-c	1.4	"		77	"	"	M-17-a	240	"	
27	"	"	K-17-d	4.4	"		78	"	"	M-17-a	740	"	
28	つまみ付きナイフ	III A 1	M-18-d	4.3	"		79	"	VI A 2	N-19-b	590	"	
29	"	"	N-16-a	6.2	"		80	"	VI A 3	Q-14-b	500	And.	
30	"	"	M-19-a	5.1	"		81	"	"	O-15-d	270	"	
31	"	"	N-17-d	6.3	"		82	"	VI A 4	P-12-b	600	"	
32	"	"	K-18-b	6.4	"		83	"	"	M-18-d	1,240	"	
33	"	"	K-17-c	6.4	"		84	"	"	Q-12-c	800	Sa.	
34	"	"	N-17-a	6.4	"		85	"	"	N-19-a	750	And.	
35	"	"	K-18-a	7.2	"		86	"	"	P-12-a	1,550	"	
36	"	"	K-17-d	4.3	"		87	"	"	N-18-a	1,150	"	
37	"	III A 2	M-18-b	4.7	"		88	"	VI A 5	N-17-d	330	"	
38	"	III A 3	N-15-d	4.3	"		89	"	VI A 9	M-17-c	230	"	
39	"	"	N-15-b	4.2	"		90	砥 石	VII B 2	N-14-b	4.6	Sa.	
40	"	"	M-17-a	6.5	"		91	"	"	N-13-d	7.1	"	
41	"	III A 9	O-14-b	14.8	Obs.		92	"	VII B 1	M-18-d	5.9	"	
42	"	"	M-18-d	0.9	Sh.		93	"	VII B 2	N-14-b	6.7	"	
43	"	"	O-15-a	15.8	"		94	"	"	O-16-a	420	"	
44	スクレイパー	III B 1	K-18-a	28.7	"		95	石 錘	VIII A 2	M-19-b	60	And.	
45	"	"	K-17-c	7.2	"		96	"	VIII A 3	M-17-a	230	"	
46	"	"	K-18-a	4.4	"		97	"	"	M-18-e	170	"	
47	"	III B 8	N-15-c	4.6	Obs.		98	磔	X B	Q-13-c	460	Phy.	
48	"	"	K-17	7.7	Sh.		99	石 皿	VI B 1	M-18-d	17.0kg	And.	
49	"	"	M-18-b	7.7	Che.		100	"	"	M-18-d	15.1kg	"	
50	"	III B 9	N-18-b	3.5	Sh.		101	"	"	M-18-d	20.8kg	"	
51	"	"	L-19-b	5.0	Obs.								

4 小 括

出土した遺物は、縄文時代早期と中期のもので、中期のものが多く、土器の分布状態（図IV-10）に示したように、時期による立地の差異がみられる。

早期の遺構は、ピットを5か所検出したが、上面を削平されていることもあって、本来的な規模や性格など詳細については不明な点が多い。早期の貝殻条痕文土器は、口縁部の下の円孔に特色がある。早期の撚糸文土器は、J～N-17～19区に50個体以上が出土したが、器形を復原できたものはない。個体数は、コッタロ式と東釧路IV式のものが多い。コッタロ式に相当する土器に、魚骨回転文が施されたものがある⁽¹⁾（図版IV-10）。

早期の石器は、資料が少なく、土器型式に対応する石器の組み合わせを示すことはできなかった。しかし、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、すり石、石皿、石錘など特徴的なものがあって、これらの多くは土器の分布と重なりあうところから、この北側の微高地は、居住をもとにした生活の場として利用されたものと推測できる。

中期の遺構は、住居跡4か所、ピット11か所を検出できた。これらのうちで、時期をさらに限定できるものは、サイベ沢V式期と考えられる住居跡AH-4、ピットAP-20、ピットAP-25と、サイベ沢VI式期と考えられるピットAP-21である。

中期の土器は、遺構から出土したものも含めて、個体数で160個以上識別でき、これらは5つに分けられる。1：サイベ沢V式、2：サイベ沢VI式、サイベ沢VII式、3：見晴町式、4：柏木川式、大安在B式、5：静狩式、レンガ台式などに相当するものである。数量的にはサイベ沢V式とサイベ沢VI式のものが多い。サイベ沢VI式には、水平口縁の近くにだけ貼付帯を施すものが多く出土している。

中期の石器で特徴的なものは、石鏃とすり石である。石器ではないが類例の少ない遺物として、AH-4出土の石炭礫があげられる。石炭礫は、昭和55年度に発掘した虎杖浜4遺跡でも出土している⁽²⁾。虎杖浜4遺跡の石炭礫のひとつは、交互剝離状の打ち欠きや線状擦痕などから明らかな人工品と認められたが、それらの時期は決定できなかった。AH-4の石炭礫は、加工の痕跡はみられないが、出土の状況から考えてサイベ沢V式土器の時期のものと考えられる。礫化の様子から判断すると、転礫状態にあったものとみられる。先年、江別市の吉井の沢1遺跡⁽³⁾の発掘調査のおり、基盤の砂礫層（裏の沢層）を観察する機会があり、この砂礫層に石炭の亜円礫が含まれることを知ったが、大きさは最大径で4cmほどのものであった。このことから川上B遺跡や虎杖浜4遺跡の資料も類似の状況のもとで採取されたものと考えられるが、遺跡付近で石炭礫を含む層は知られていない。産地や用途の究明など今後の課題である。

(1)(2)北海道埋蔵文化財センター 昭和55年度『社台1、虎杖浜4、千歳4、富岸遺跡』で紹介した資料である。

(3) 北海道埋蔵文化財センター 昭和56年度『吉井の沢の遺跡』

V・C地区の調査

1 概要

C地区は、ヤンケシ川第2支流の左岸に位置し、西から東へ傾斜する崖錐の斜面上にある。標高16～26mで、川上B遺跡の中では最も高い。発掘区の南部には、I-90からR-86にかけて埋没谷が発見された。この谷の中には、III層の降下軽石層が堆積していることから、縄文前期以前に形成されたものであることがわかる。この埋没谷より南側と発掘区の95列より北側には、広汎に角礫が分布している。C地区の土層は以下のとおりである。

- I層 耕作土。黒色腐植土。層厚約20cm。近・現代の陶磁器片や下層から浮き上がった混入遺物を包含している。有珠及び駒ヶ岳系とみられる火山灰層が挟在している。
- II層 黒色腐植土。層厚約30cm。遺物包含層。上部は、細粒で粘性が強く、乾燥するとクラックが入る。下部は、上部よりも粗粒で、クラックは入らない。
- III層 II層からIV層への漸移層。暗黄褐色土。層厚約10cm。
- IV層 黄褐色シルト。R-89では、IV層上面から約1mの深さの所にN・Us-c火山灰層の二次堆積物がみられる。無遺物層。

なお、II層以下には、最大径1m以上の安山岩角礫が多量に存在する。

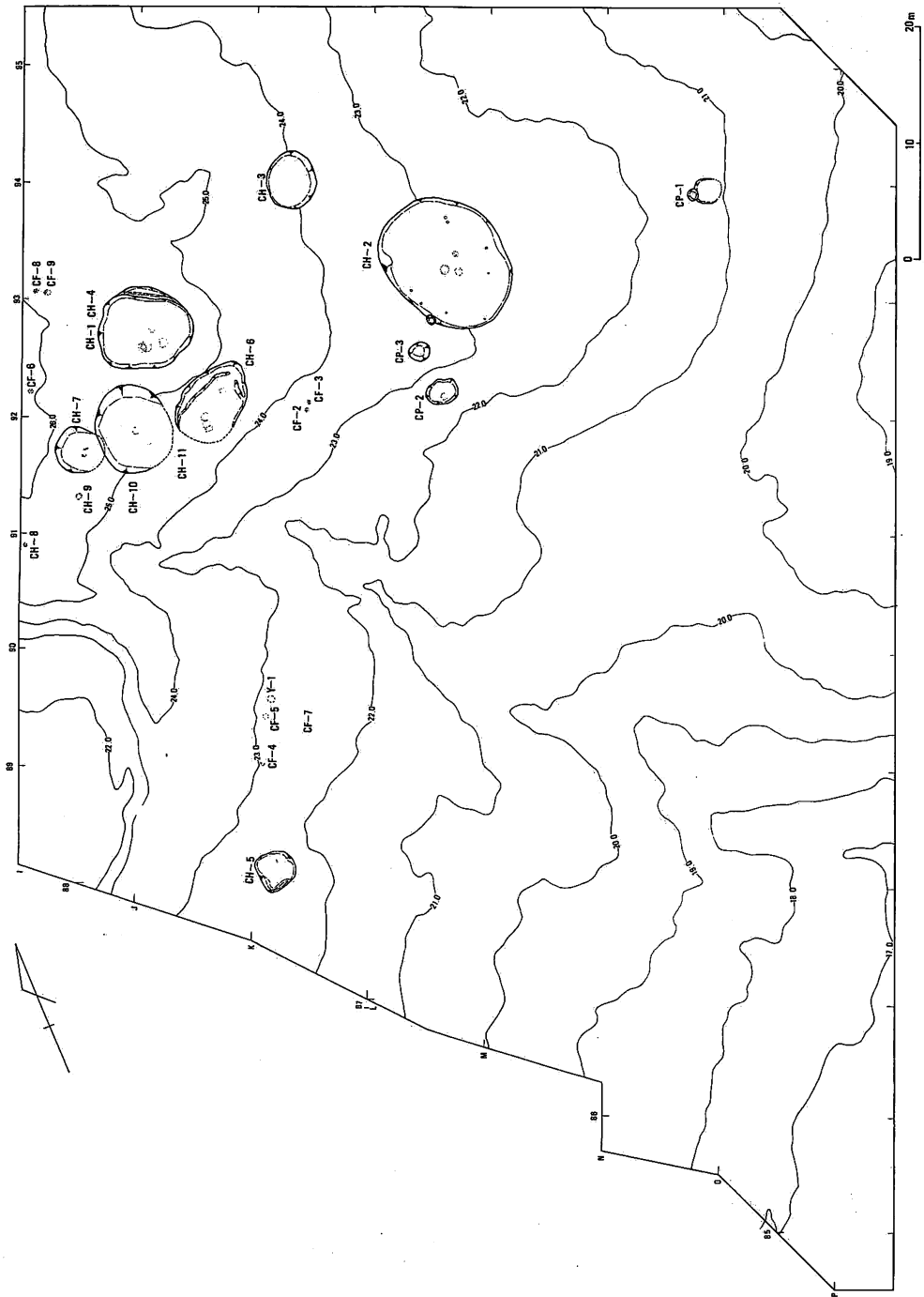
遺構は、住居跡11（石組み炉のみのもの2）、ピット3、配石遺構1、焼土9が発見された。住居跡は、比較的礫の少ない区域に分布しており、II層からIV層へ掘り込まれている。縄文時代中期末3、同後期初5、時期不明3である。ただし、CH-3を除いて他はすべて石組み炉を備えていることから、いずれもかなり接近した時期（中期末～後期初）のものだろう。CH-2は直径12m以上あり、中期末の大形住居跡と呼ばれるものに属する。

遺物は総数64,918点出土した。土器は、縄文時代中期末～後期初頭に属するものがほとんどである。中でも、余市式や入江式に相当する土器が多い。ただし、貝殻条痕文土器1個体を始め東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式など縄文時代早期の土器もわずかながら出土している。

石器は、石鏃、石皿、台石などが多い、特に石鏃の比率の高さが目につく。他に、有舌尖頭器と思われるものが1点出土している。

表V-1 C地区出土遺物一覧表

名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量
土 器	I a	69	スクレイパー	III B 9	78
"	I b-1	1	石 斧	IV A 1	10
"	2	34	"	2	11
"	3	17	"	3	48
"	4	1	"	4	6
"	I b-	3	"	5	19
"	III a	939	"	8	376
"	III b-1	3	"	9	8
"	3	8,677	石 の み	IV B 1	9
"	III b-	1,447	た た き 石	V A 1	29
"	III-	5	"	2	3
"	IV a	27,032	"	3	8
"	IV b	363	"	8	2
"	IV-c	26	"	9	8
"	不明	2,580	台 石	V B 1	8
土 器 計		41,197	"	8	1
石 鏃	I A 2 a	1	す り 石	VI A 1	12
"	3	15	"	2	2
"	4	70	"	VI A 3	1
"	5	238	"	VI A 4	6
"	8	49	"	8	7
"	9	31	"	9	7
やり先またはナイフ	I B 1	30	石 皿	VI B 1	26
"	2	9	"	8	9
"	8	20	"	9	3
"	9	8	石 鋸	VII A 1	2
"	I-	1	"	8	3
石 錐 類	II A 1	2	砥 石	VII B 1	1
"	2	2	"	2	18
"	3	7	"	3	3
"	8	2	"	8	6
"	9	5	"	9	1
つまみ付きナイフ	III A 1	3	コ ア	IX A	119
"	2	3	フ レ イ ク	IX B	21,133
"	3	3	U.フ レ イ ク	X A	119
"	4	2	加工痕、使用痕礫	X B	22
"	8	5	礫 ・ 礫 片		1,055
"	9	11	そ の 他		4
スクレイパー	III B 1	14	石 器 等 計		23,721
"	8	7			



図V-1 遺構の分布

2. 遺構とその遺物

CH-1・4

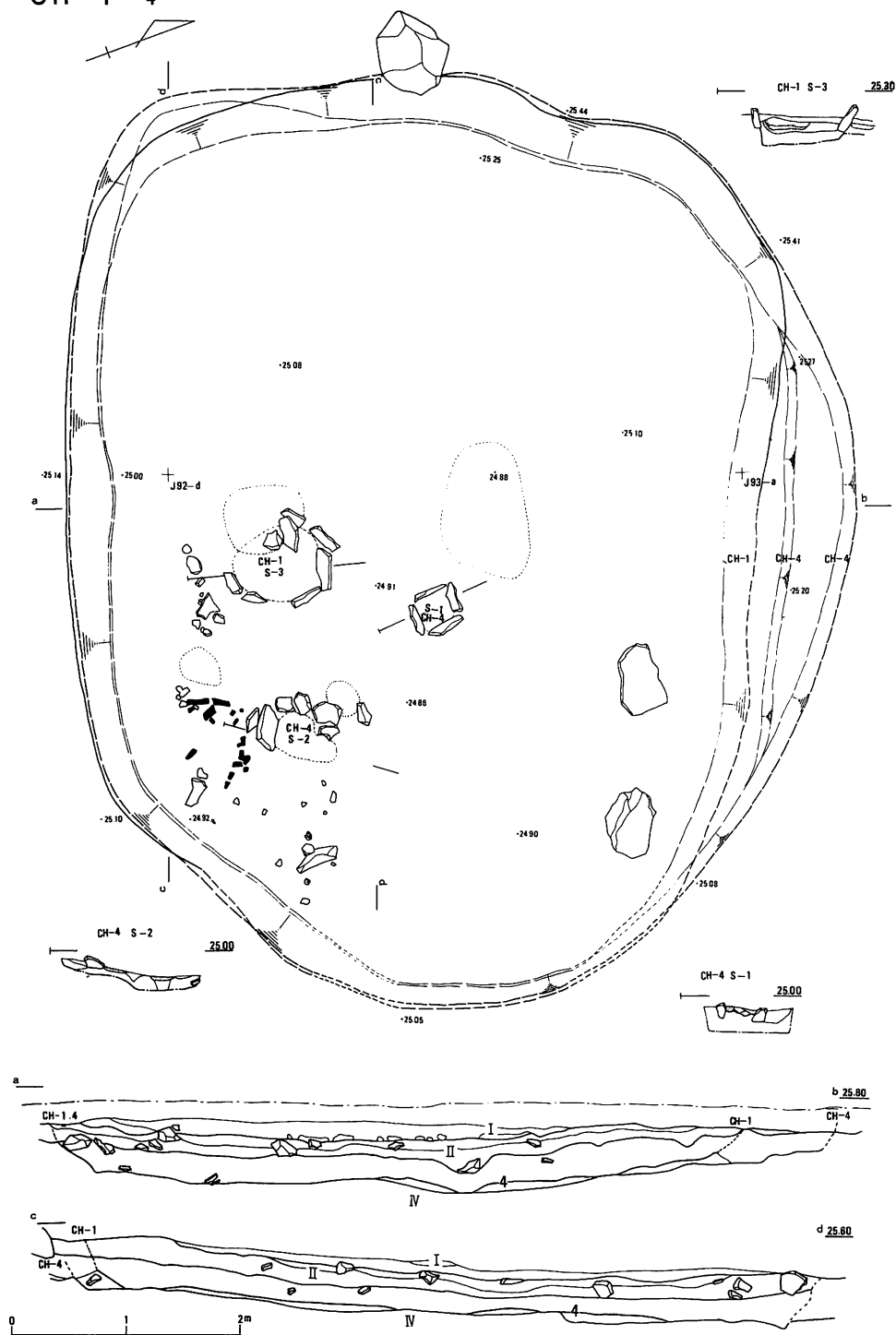


図 V-2 CH-1・4

位置 I-92-b・c、I-93-b、J-92-a・b、J-93-a

規模 7.50×(6.00)×0.50

特徴 CH-1とCH-4は重複し、上部にCH-1、下部にCH-4がある。CH-1の東半分の輪郭は、あきらかではないが、平面は長円形になるものと思われる。床面は東半分は、CH-4の覆土中にあるが、西半分では礫の多いIV層中に掘り込まれている。中央からやや南よりに石組み炉S-1がある。一部欠損しているが板状の安山岩を用いて、長円形に組まれている。

CH-4は、2か所の石組み炉、S-2、S-3がある。S-2は、4枚の板石で長方形に囲ってある。CH-1の石組み炉、S-1とのレベル差は15cmあり、S-2の方が古い。S-3は、板石が横置の状態出土した。本来は、縦位置にあったものが転倒したものと考えられる。CH-1とCH-4を別の住居跡と考えた根拠は、石組み炉のレベルに差が認められること、S-3の周囲に炭化材が面的な広がりをもって出土していることにある。

表V-2 CH-1出土遺物一覧表

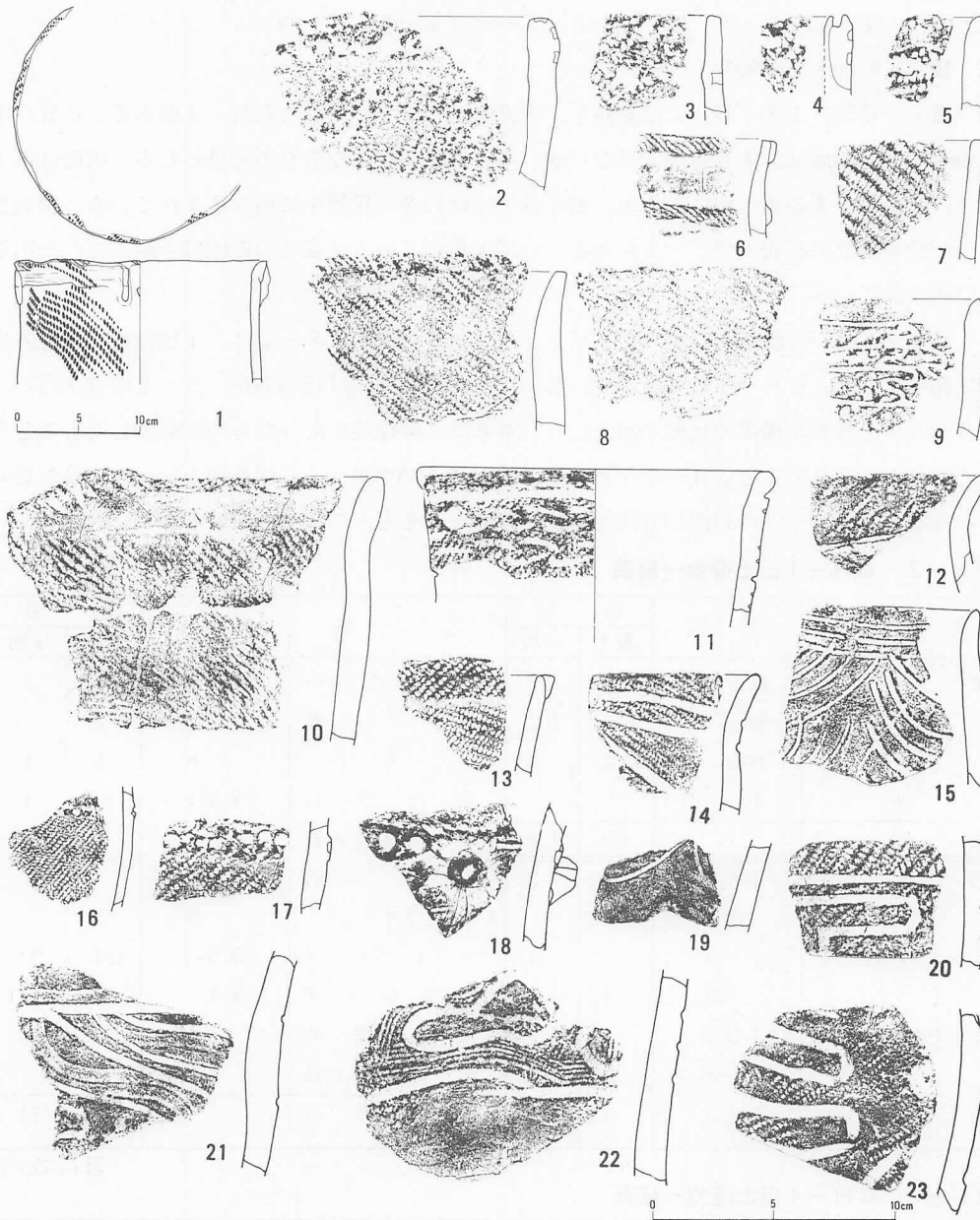
名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	III b-3	71	26	スクレイパー	III B 9	2	2
"	IV a	610	102	石斧	IV A 5	2	
"	IV b	4		"	8	5	1
"	不明	5		たたき石	V A 1		1
土器計		690	128	すり石	VI A 1	1	
石鏃	I A 4	3	3	砥石	VII B 2		1
"	5	9		"	8	1	
"	8		1	フレイク	IX B	434	29
"	9	1		Uフレイク	X A	1	
やり先またはナイフ	I B 1	1		礫・礫片		23	16
"	8	1		土製品		1	
石錐類	II A 3	1		石器等計		486	54

計1,358点

表V-3 CH-4出土遺物一覧表

名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	III b-3	2	70	スクレイパー	III B 9		1
"	IV a	5	99	石斧	IV A 8		3
土器計		7	169	フレイク	IX B		70
石鏃	I A 5		3	礫・礫片			6
やり先またはナイフ	I B 8		1	石器等計			84

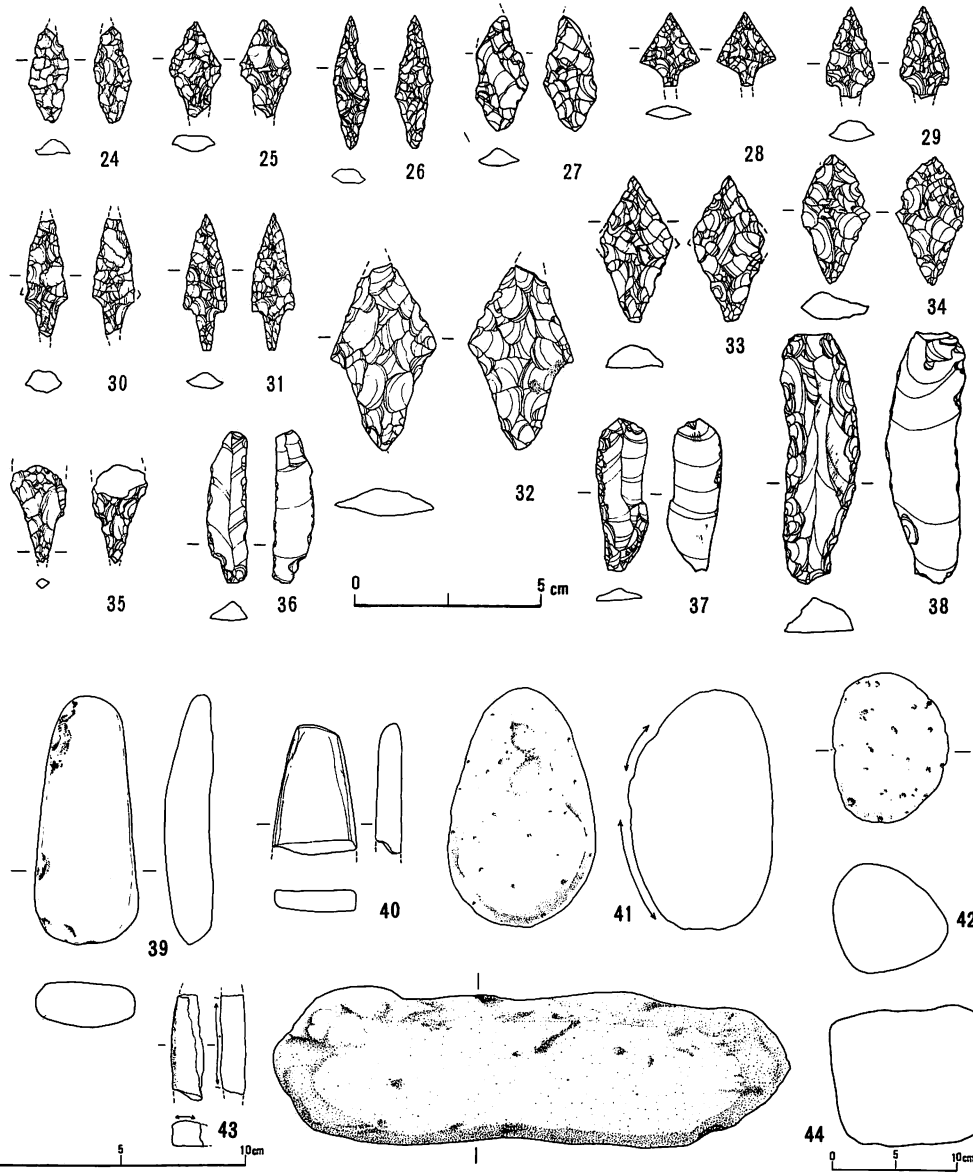
計260点



図V-3 CH-1出土の土器

遺物

CH-1は覆土及び床面からⅢb-3類、Ⅳa類が出土している。床面出土土器の主体はⅣa類が占めている。9・15・21は、鳥崎遺跡出土の土器に類似し、13は、口縁部に一本の貼付帯をもつことから、余市式土器に比定される。1は、覆土中より破片で出土しているが住居跡外からの出土した破片と接合することからみて流れ込みの可能性が強い。CH-4床面よりⅢb類土器(6・7・9・10・11・12)が出土している。



図V-4 CH-1出土の石器

表V-4① CH-1掲載遺物一覧表(1)

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	IV a	覆土				6	土器	IV a	覆土			
2	"	不明	"				7	"	"	床			
3	"	III b-3	"				8	"	不明	"			
4	"	不明	床				9	"	IV a	"			
5	"	"	覆土				10	"	"	覆土			

表V-4② CH-1 掲載遺物一覧表(2)

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
11	土器	IV a	覆土				28	石 鏃	IA 5	覆土	(0.5)	Obs.	
12	"	"	"				29	"	"	"	(1.1)	"	
13	"	"	床				30	"	"	"	(1.8)	"	
14	"	"	覆土				31	"	"	"	1.2	"	
15	"	"	床				32	やり先 またはナイフ	IB 1	"	(6.2)	"	
16	"	不明	覆土				33	石 鏃	IA 4	床	(3.1)	"	
17	"	"	"				34	"	"	覆土	2.4	"	
18	"	IV a	床				35	石 錐 類	II A 3	"	(2.0)	"	
19	"	"	"				36	スクレイパー	III B 9	"	1.8	Ha-Sh.	
20	"	"	覆土				37	"	"	床	1.7	Obs.	
21	"	"	床				38	"	"	覆土	14.6	Ha-Sh.	
22	"	"	覆土				39	石 斧	IV A 5	"	119.5	Mud.	
23	"	"	床				40	"	"	"	(24.1)	Gr-Mud.	
24	石 鏃	IA 4	覆土	(0.5)	Sh.		41	たたき石	V A 3	"	336	And.	
25	"	"	床	(1.4)	Obs.		42	すり石	VI 1	"	140	"	
26	"	"	"	1.1	"		43	砥 石	VII B 8	"	(6.0)	Sa.	
27	"	"	覆土	(1.5)	"		44	礫	"	床	11.6kg	And.	

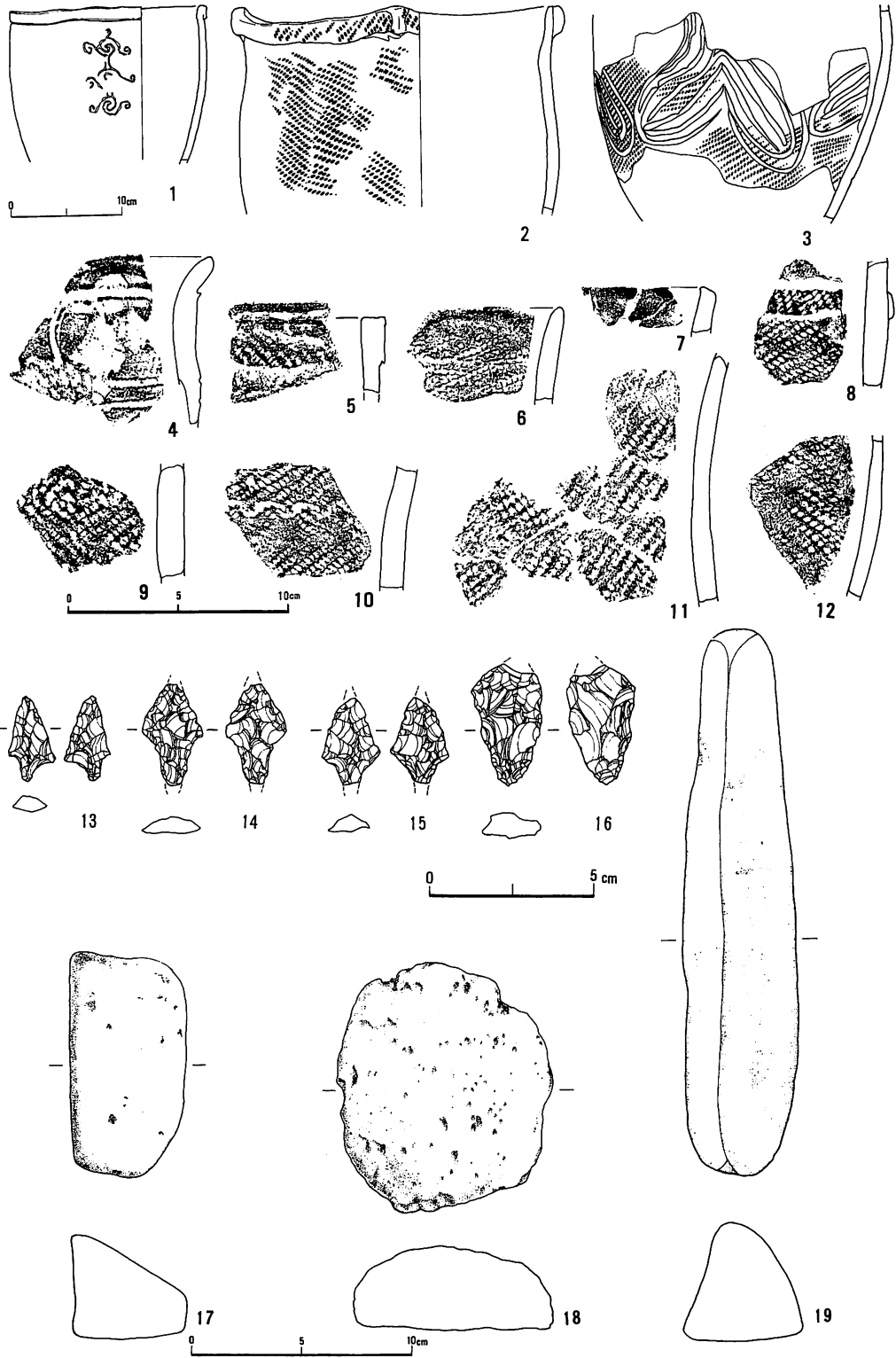
表V-5 CH-4 掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	IV a	覆土				11	土器	III b-3	床			
2	"	"	"				12	"	IV a	"			
3	"	"	"				13	石 鏃	IA 5	"	0.9	Obs.	
4	"	"	床				14	"	"	"	(1.6)	"	
5	"	"	CH-1 の下の				15	"	"	"	(1.5)	"	
6	"	III b-3	床				16	スクレイパー	III B 9	"	(4.4)	"	
7	"	"	覆土				17	礫	"	"	405	And.	
8	"	IV a	床				18	"	"	"	44.1	Pum.	
9	"	III b-3	"				19	"	"	"	880	And.	
10	"	"	"										

時 期 CH-1 縄文後期初頭、IV a 類土器の時期

CH-4 縄文中期末、III b-3 類土器の時期

なお、CH-4 床面出土木炭のC¹⁴年代測定値は、3,200±120y・B・P・(KSU-585)である。



図V-5 CH-4出土の遺物

CH-2

位置 L-92-c・d、L-93-a・b・c・d、M-92-d、M-93-a・d

規模 12.52×9.57×0.54

特徴 緩やかな傾斜をもつ張り出しの先端部に位置する。遺構の存在はI層黒色土を除去した段階で、灰褐色火山灰の落ち込みによって予想できた。平面形は長円形、床面は比較的礫が少なく、固まっておリ、確認しやすい。竪穴内には、3基の石組み炉がある。S-1はIV層を深く掘り込み、扁平な安山岩礫を組んで構築している。平面形は長方形、焼土が厚く堆積し、炉石も熱を受け亀裂が入っている。P-10は、S-2に隣接している。その底面から拳大のベンガラが出土している。P-1から7の柱穴は傾斜の角度及び方向は一定しないが、おおむね竪穴住居の中央部を向いている。ただし、このような柱穴は、住居跡の南側に限られ、北側では確認できなかつた。S-3は、浅い掘り込みの中に扁平礫を組み込んで構築している。

遺物

床面と覆土から3個体の土器が出土している。1は、床面出土の土器でIII b-3類、静狩式に類似している。2・3は、覆土中から出土し、2は、余市式、3は、手稲砂山式に比定される。覆土出土土器は、IV a類が主体を占める。5は、IV b類である。石器は、石鏃の出現頻度が高く38点を数える。その他、コハク、ベンガラ等が出土している。

表V-6 CH-2出土遺物一覧表

名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	III a	1		スクレイパー	III B 1	1	
"	III b-3	56	20	"	8	1	
"	IV a	670	11	"	9	3	2
"	IV b	25		石 斧	IV A 3	1	
"	不明	14		"	8	39	
土器計		766	31	"	9	1	
石 鏃	I A 4	13	2	すり石	VI A 8	2	
"	5	13	1	石 皿	VI B 1	1	6
"	8	7	1	フ イ ク	IX B	8,131	4
"	9	5		U フ レ イ ク	X A	3	
やり先またはナイフ	I b 1	1		礫 ・ 礫 片		121	50
"	8	1		その他		1	
石 錐 類	II A 3	1		石 器 等 計		8,347	66
"	8	1					

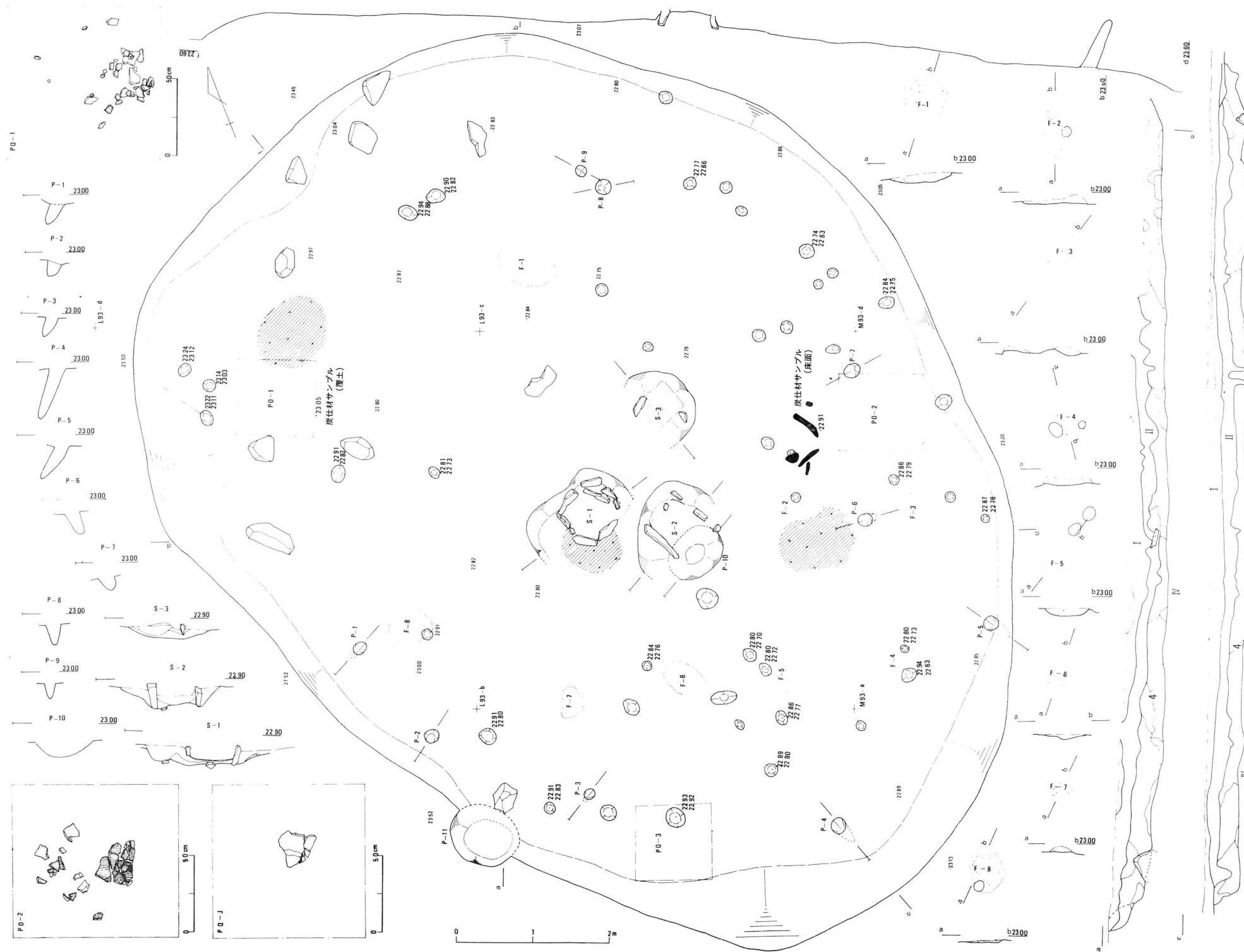
計9,210点

時期 縄文時代中期末、III b-3類土器の時期

備考 CH-2床面と覆土中から炭化物が検出されている。

C¹⁴年代は、以下のとおり。3,040±100y・B・P・(KSU-584) (CH-2床面)

3,530±20y・B・P・(KSU-586) (CH-2覆土)



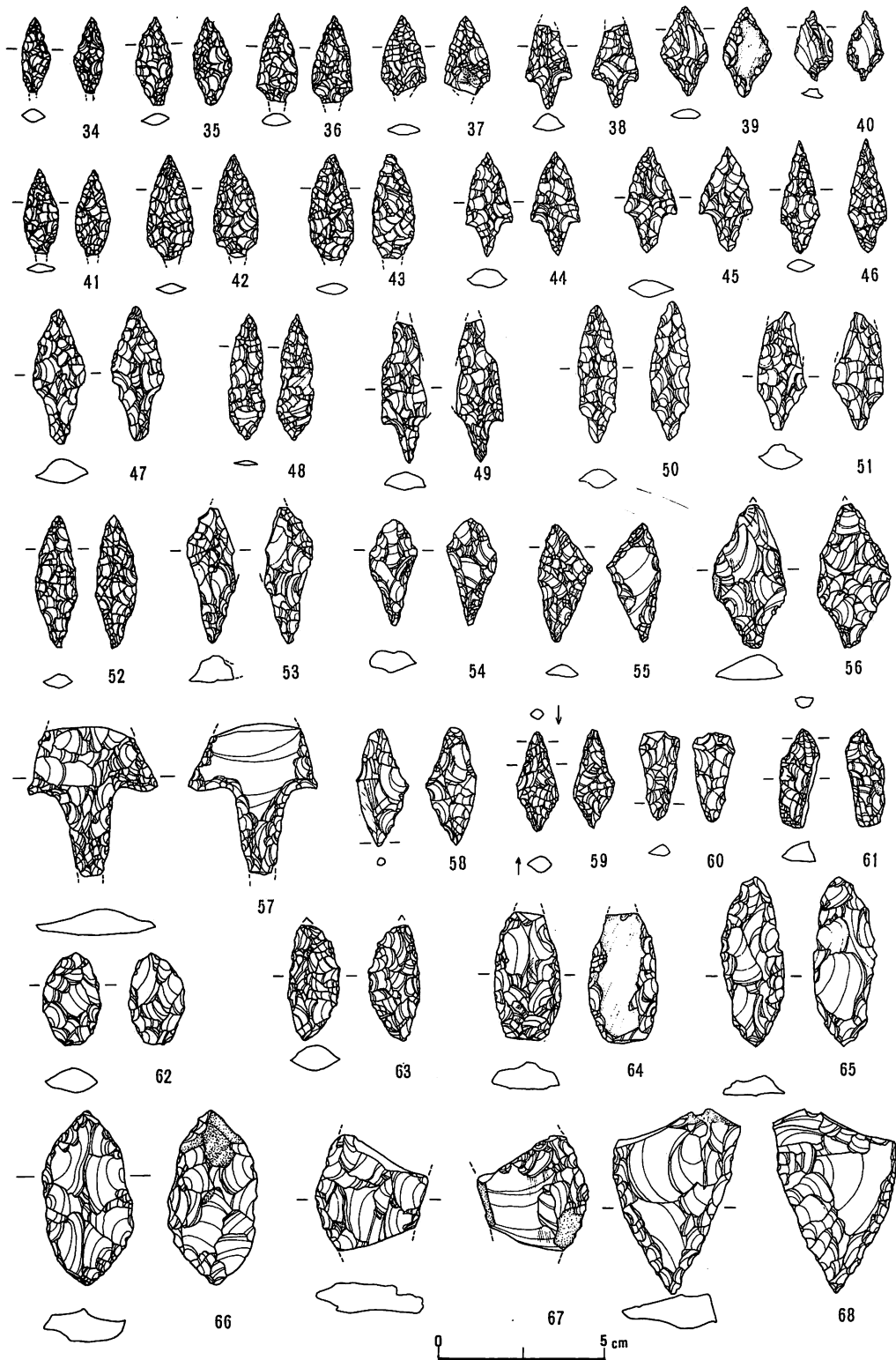
表V-7 CH-2 掲載遺物一覧表

掲載遺物一覧

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	III b-3	床				43	石 鏃	IA 4	覆土	(1.4)		Obs.
2	"	IV a	"				44	"	IA 5	床	1.3		"
3	"	"	"				45	"	"	覆土	1.7		"
4	"	"	"				46	"	"	"	1.1		"
5	"	IV b	覆土				47	"	"	"	3.3		"
6	"	III b-3	"				48	"	IA 9	"	1.1		"
7	"	"	"				49	"	IA 5	"	(2.4)		"
8	"	"	"				50	"	"	"	2.2		"
9	"	"	"				51	"	"	"	(2.2)		Che.
10	"	"	"				52	"	IA 4	床	2.0		Obs.
11	"	"	"				53	"	IA 9	覆土	(2.9)		"
12	"	IV a	"				54	"	IA 4	"	2.5		"
13	"	"	"				55	"	IA 9	"	2.0		"
14	"	"	"				56	やり先 はナイフ	IA 4	"	5.8		"
15	"	"	"				57	"	IB	"	(6.4)		"
16	"	"	"				58	フレイク	XB	"	1.5		Sh.
17	"	"	"				59	石 鏃	IA 4	"	1.5		Obs.
18	"	"	"				60	"	IA 9	"	0.8		Sh.
19	"	"	"				61	石 鏃 類	II A 8	"	2.2		Obs.
20	"	"	"				62	コ ア	IXB	"	2.8		"
21	"	"	"				63	石 鏃	IA 4	"	(3.4)		"
22	"	"	"				64	フレイク	XA	"	(6.6)		"
23	"	"	"				65	スクレイパー	III B 9	床	5.8		"
24	"	"	"				66	フレイク	IXB	"	7.8		"
25	"	"	"				67	石 斧	IV A 9	覆土	(7.8)		"
26	"	"	"				68	スクレイパー	III B 9	"	7.6		Ha-Sh.
27	"	"	"				69	石 斧	IV A 3	"	(50.2)		Gr-Mud.
28	"	"	"				70	礫	"	"	33.4		Sa.
29	"	"	"				71	礫	"	"	260		And.
30	"	"	"				72	"	"	"	(260)		"
31	"	"	"				73	たたき石	不明	"	(200)		Gr-Mud.
32	"	"	"				74	石 斧	IV A 8	"	880		"
33	"	"	"				75	すり石	不明	"	1.1kg		And.
34	石 鏃	IA 4	"	(0.5)		Obs.	76	"	IV A 5	"	440		"
35	"	"	"	1.0		"	77	"	不明	"	870		"
36	"	"	"	(1.1)		"	78	石 皿	VIB 1	"	(940)		"
37	"	"	"	(0.8)		"	79	礫	"	"	5.9kg		"
38	"	IA 5	"	(1.1)		"	80	石 皿	不明	床	12.2kg		"
39	"	IA 8	"	0.9		"	81	"	"	"	(19.5kg)		"
40	"	"	"	0.6		"							S-2 炉石
41	"	IA 5	"	(0.7)		"							S-2 炉石
42	"	IA 4	"	(1.5)		"							S-2 炉石



図V-7 CH-2出土の土器



図V-8 CH-2出土の石器(1)

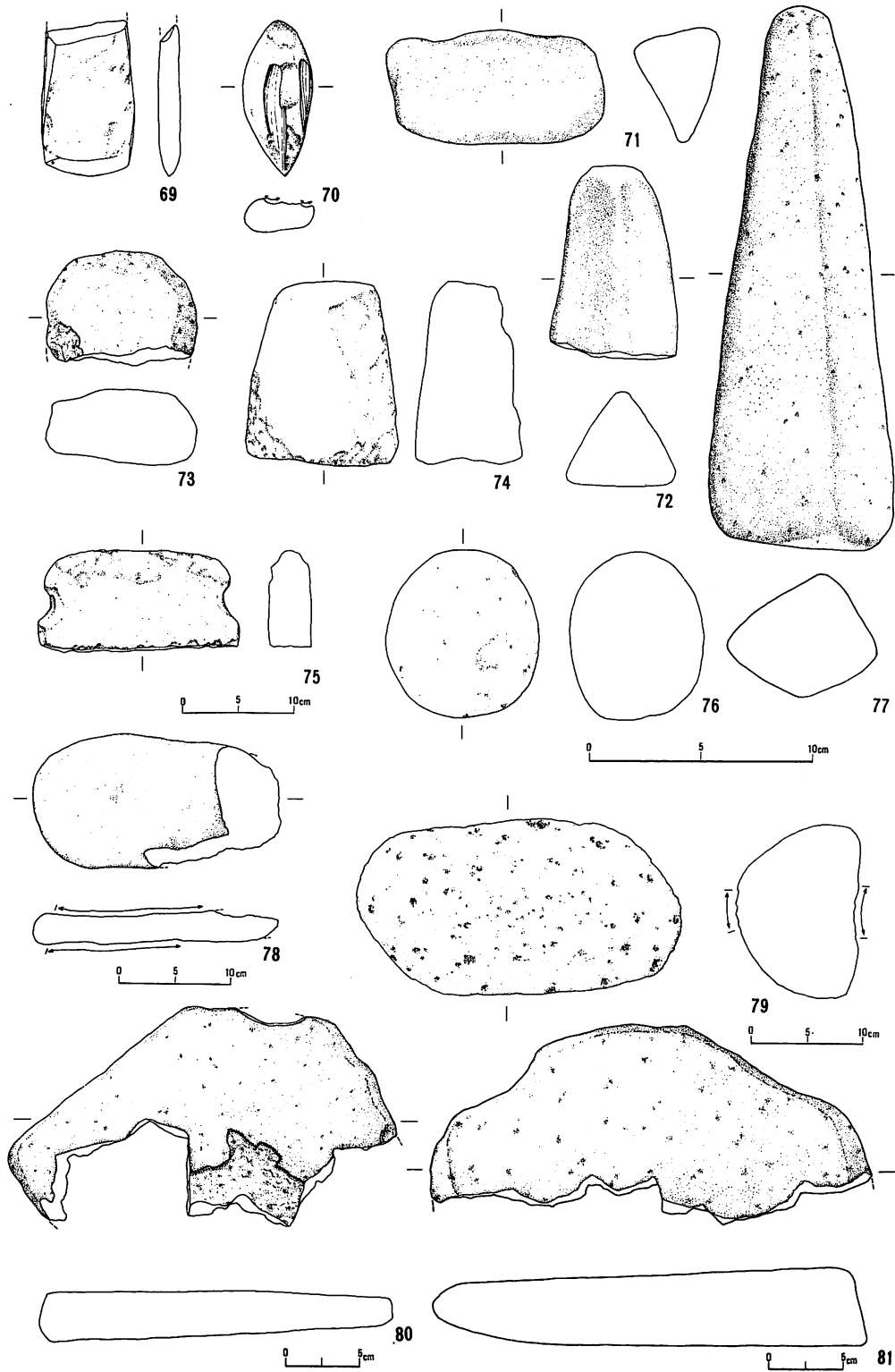


図 V - 9 CH - 2 出土の石器(2)

CH-3

位置 K-93-c、L-93-d、L-94-a、K-94-b

規模 4.92×4.02×0.52

特徴 平面形は、長円形を呈す。周壁に沿ってベンチ状の段差をもつ。東側は、風倒木に攪乱されている。覆土の黒褐色土中に、安山岩礫が多量に流れ込んでいる。焼土、柱穴は確認されなかった。

遺物

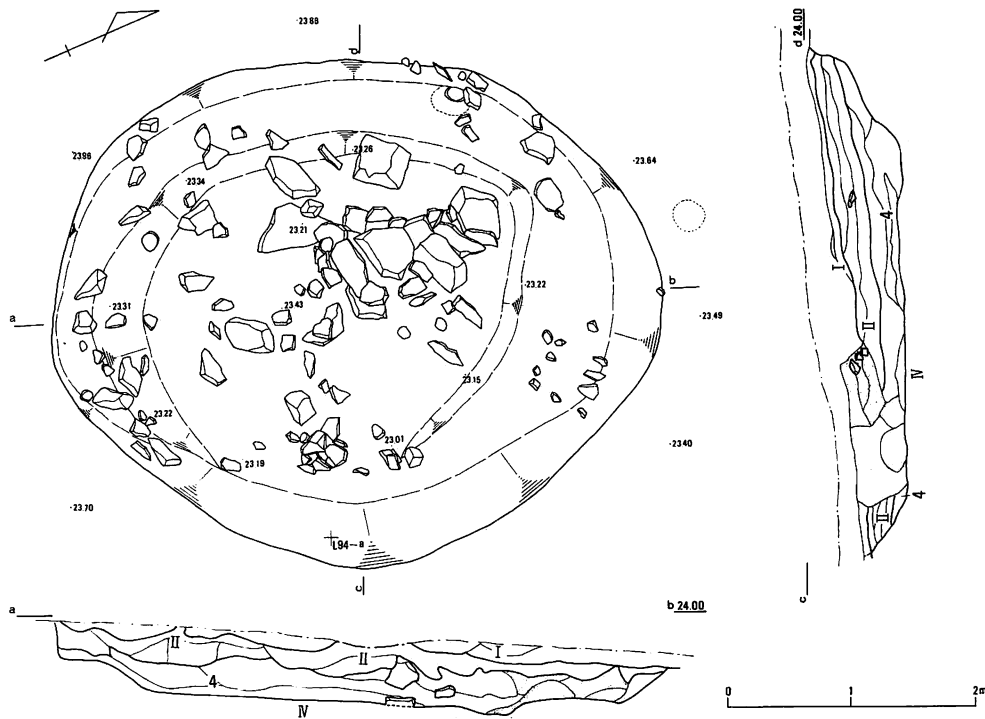
床面遺物はなかった。覆土からIII b-3類、IV a類の土器が出土している。1は、北筒式。2、3は、涌元式土器に比定される。16は、IV群に伴うすり石で全面に擦痕をもつ。

表V-8 CH-3出土遺物一覧表

名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	III b-3	5		石斧	IV A 2	1	
	IV a	32			フリック 礫・礫片	IX B	3
土器計		37		石器等計			7
石鏃	IA 4	1					

計44点

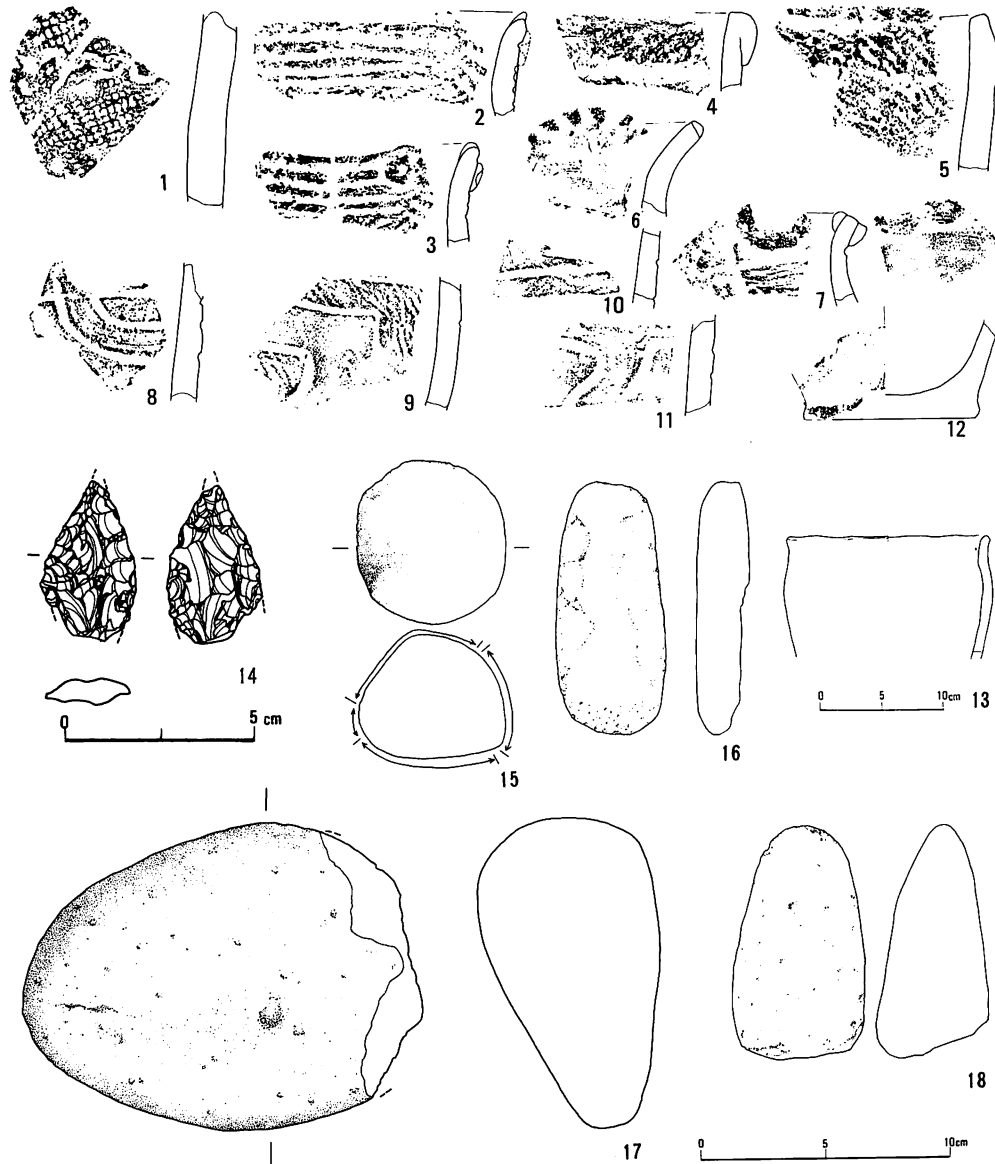
時期 不明



図V-10 CH-3

表V-9 CH-3 掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	III b-3	覆土				10	土器	IV a	覆土			
2	"	IV a	"				11	"	"	"			
3	"	"	"				12	"	"	"			
4	"	"	"				13	"	"	"			
5	"	"	"				14	石 鏃	IA 4	"	(5)	Obs.	
6	"	"	"				15	すり石	VI A 9	"	320	And.	
7	"	"	"				16	石 斧	IV A 3	"	130.8	Mud.	
8	"	"	"				17	石 皿	VI B 1	"	1.1kg	And.	
9	"	"	"				18	たたき石	V A 9	"	300	Mud.	



図V-11 CH-3 出土の遺物

CH-5

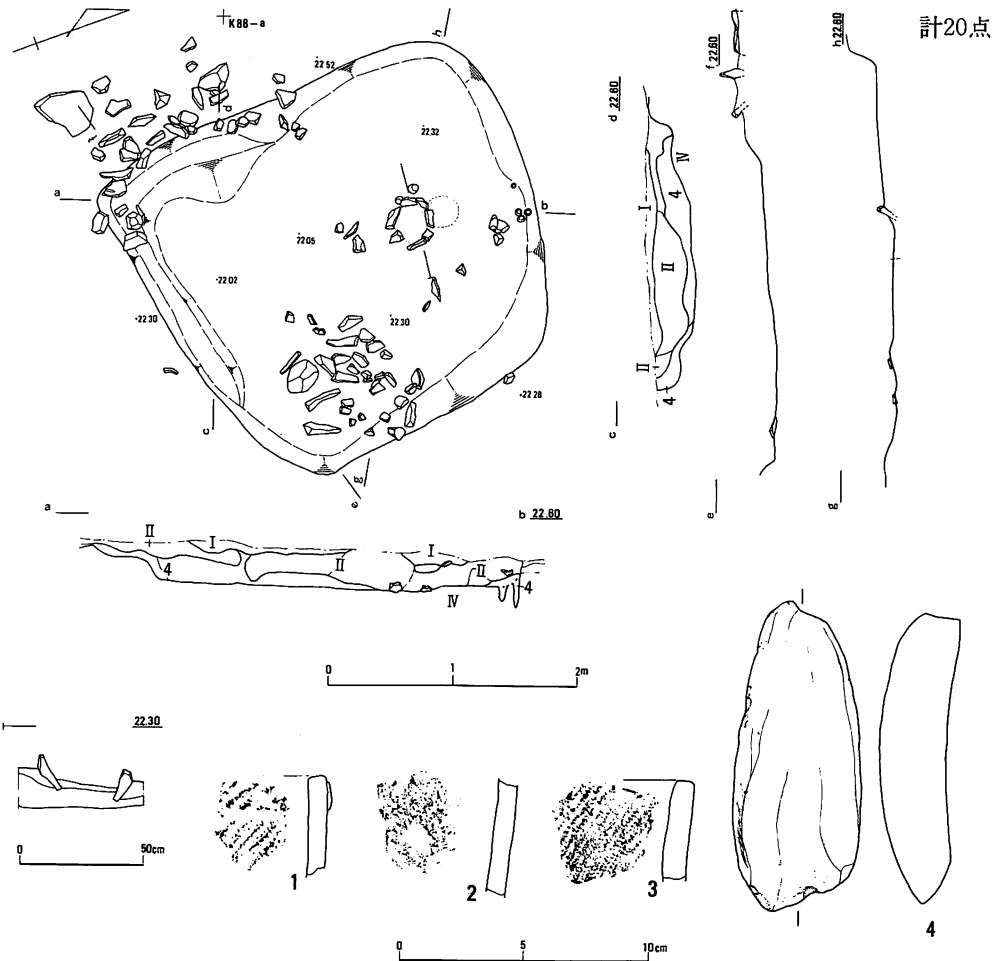
位置 K-87-d、K-88-a

規模 3.12×2.88×0.36

特徴 南側の輪郭はあきらかでないが、平面形は、ほぼ方形。IV層中に掘り込まれてまれている。床面は礫が突出し凹凸が著しい。石組み炉は、安山岩をIV層に浅く埋め込んで構築しており平面形は小型円形である。

表V-10 CH-5出土遺物一覧表

名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	III b-3	1	1	フレイク 礫・礫片	IX B	7	1 7
土器	IV a	1	1				
土器計		2	2	石器等計		8	8
石斧	IV A 5	1					



図V-12 CH-5とCH-5出土の遺物

遺物

覆土および床面よりIV a類土器が出土している。1は、余市式土器。2は、斜行縄文の胴部破片である。また石斧も出土している。

時期 後期初頭。余市式土器の時期。

表V-11 CH-5掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	IV a	床			
2	"	"	"			
3	土器	IV a	床			
4	石斧	IV A 5	床直	260	Gr-Mud.	

CH-6・11

位置 J-91-c・d、J-92-a・b

規模 7.60×4.80×0.48

特徴 CH-6とCH-11は、重複し、上部にCH-6、下部にCH-11がある。輪郭は、北側一部を確認したのみで、平面形は不明、礫の多いIV層に掘り込まれている。西側に2か所、東側に1か所の石組み炉があり、その周辺に7か所の焼土がある。西側の石組み炉は重複し、S-1はCH-6、S-2はCH-11に伴う。S-3は不明、最底3度以上の建て替えが行われたと思われる。焼土はCH-11に伴うものと思われる。

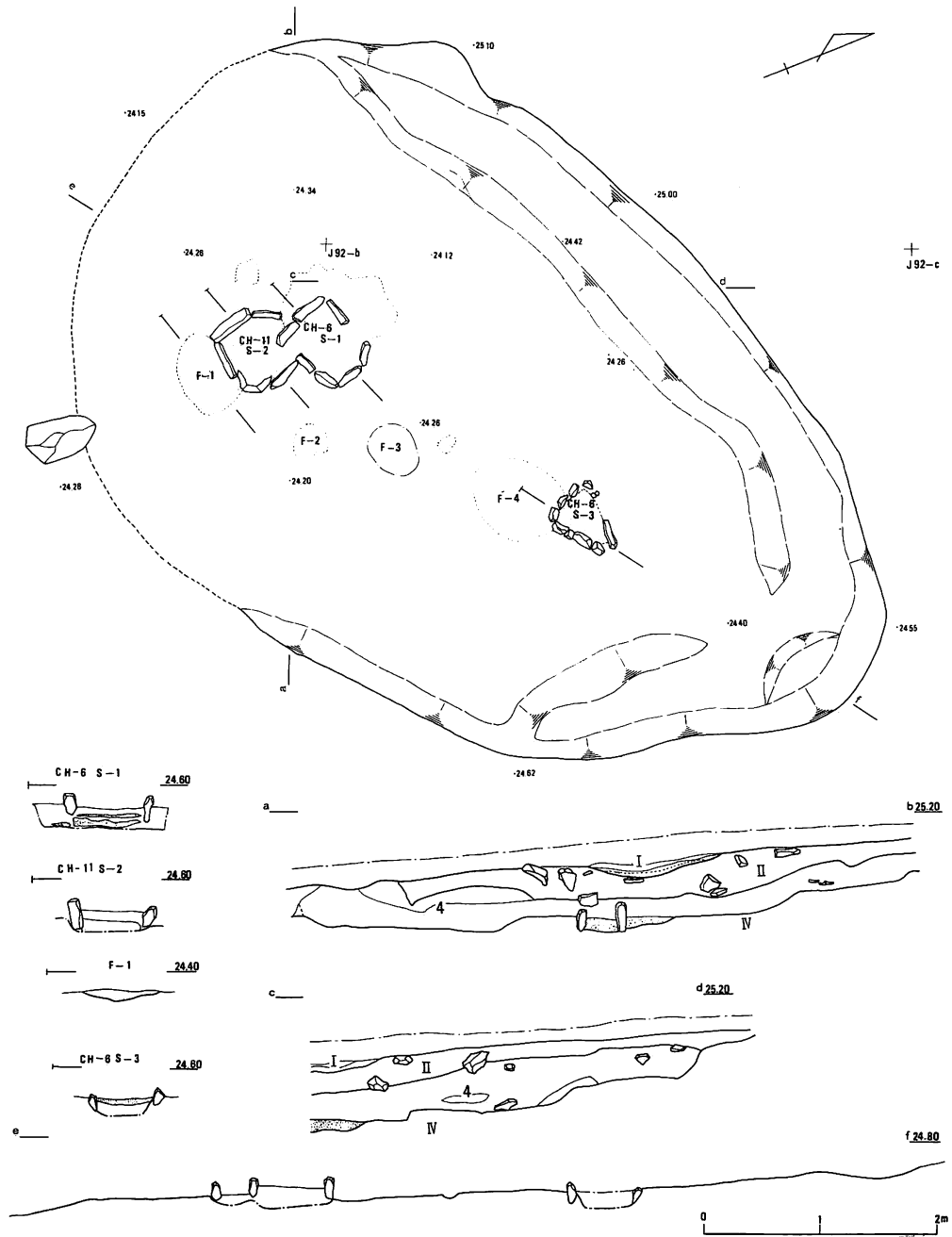
遺物

表V-12 CH-6・11出土遺物一覧表

名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	III b-3	240	121	スクレイパー	III B 9	1	
"	IV a	549	157	石斧	IV A 3	1	
"	IV b		1	"	5	1	
"	不明	13	2	"	8	10	2
土器計		802	281	すり石	IV A 9		1
石鏃	I A 4	1		コア	IX A	1	1
"	5	10	3	フレイク	IX B	227	99
やり先又はナイフ	I B 1		1	Uフレイク	X A	2	3
つまみ付きナイフ	III A 9		1	礫・礫片		13	10
スクレイパー	III B 1	1	1	石器等計		268	122

S-1に伴うとみられる土器は、IV a類とIV b類である。IV a類には、余市式土器(26・30・31)や鳥崎遺跡出土土器に相当するもの(43)がある。IV b類には、42の船泊土層式土器がある。これは、S-1焼土中から出土した。S-2に伴うとみられる土器は、III b-3類土器である。4・5・10・16・17・19は、北筒式土器、6・7・8・13・15は、レンガ台式土器である。

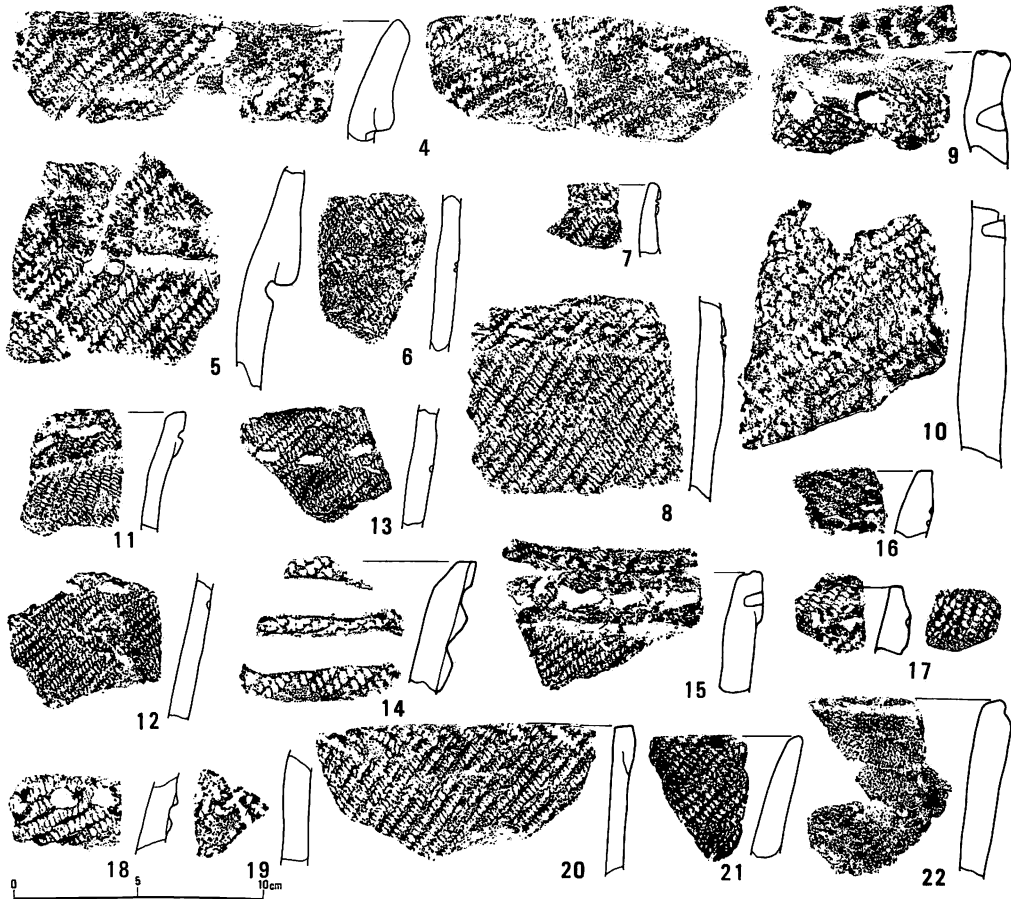
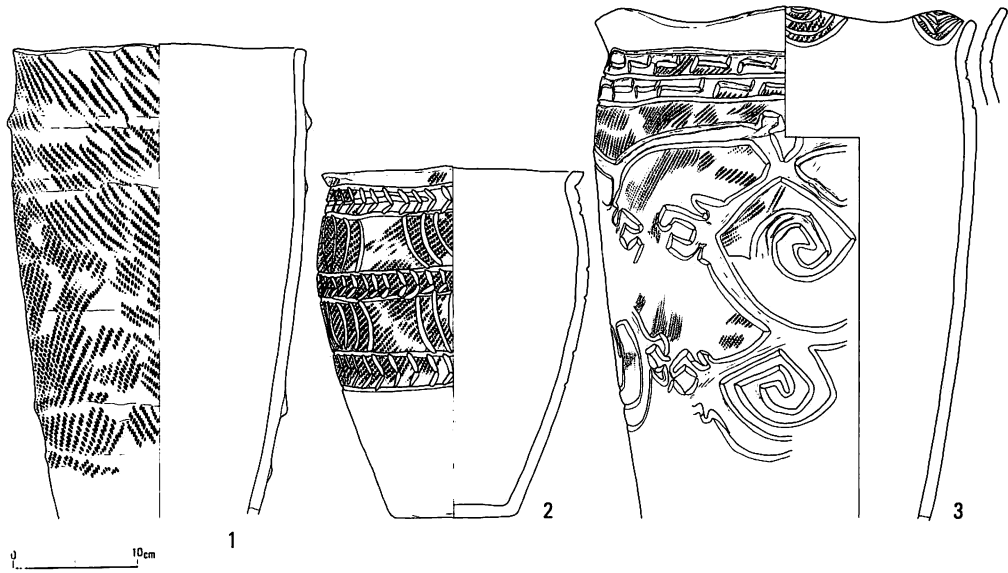
時期 CH-6は、縄文時代後期の余市式もしくは、入江式土器の時期。船泊上層式土器は混入の可能性あり。CH-11は、縄文時代中期末の北筒式もしくはレンガ台式土器の時期。



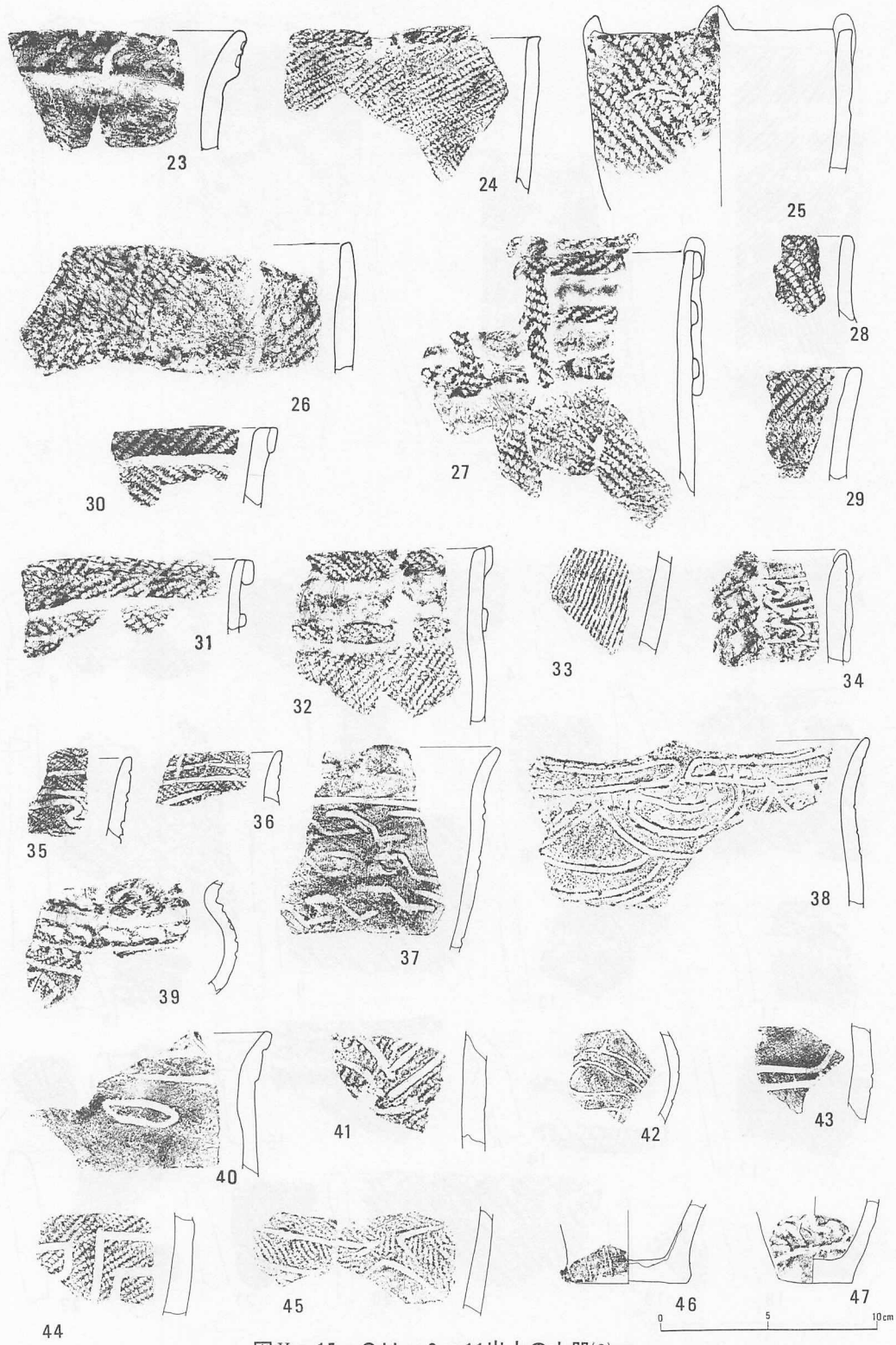
図V-13 CH-6・11

表V-13 CH-6・11掲載遺物一覧表

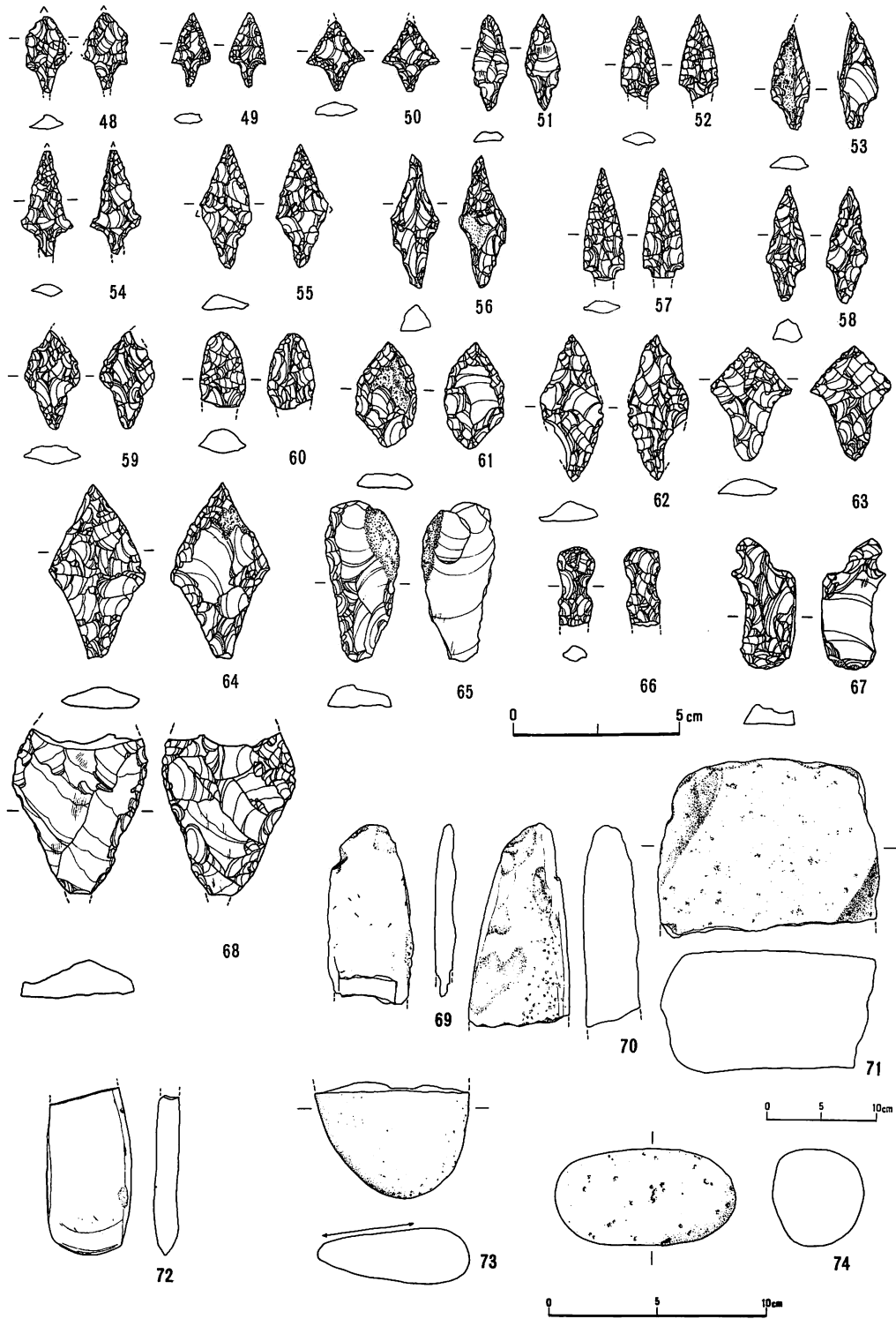
番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	III b-3	覆土				39	土器	IV a	覆土			
2	"	IV a	"				40	"	"	"			
3	"	"	"				41	"	"	"			
4	"	III b-3	床				42	"	IV b	床・S-1			炉の焼土中から出土
5	"	"	"				43	"	IV a	床			
6	"	"	"				44	"	IV b	覆土			
7	"	"	"				45	"	"	"			
8	"	"	"				46	"	IV a	床			
9	"	"	覆土				47	"	"	覆土			
10	"	"	"				48	石 鏃	I A 5	"	(0.9)	Obs.	
11	"	"	覆土				49	"	"	床	0.5	"	
12	"	"	"				50	"	"	床直	(0.9)	"	
13	"	"	床				51	"	"	覆土	0.8	"	
14	"	IV a	覆土				52	"	I A 4	"	(0.8)	"	
15	"	III b-3	床				53	"	I A 5	床	(0.9)	"	
16	"	"	"				54	"	"	覆土	(0.9)	"	
17	"	"	"				55	"	"	床直	(1.6)	"	
18	"	"	覆土				56	"	"	覆土	3.1	"	
19	"	"	床				57	"	"	"	(1.1)	"	
20	"	"	覆土				58	"	"	"	1.8	"	
21	"	"	床				59	"	"	床	(1.6)	"	
22	"	"	覆土				60	やり先又はナイフ	I B	"	(1.9)	"	
23	"	"	"				61	石 鏃	I A 4	炉下	2.5	"	
24	"	IV a	"				62	やり先又はナイフ	I B 2	床	(2.3)	"	
25	"	"	"				63	石 鏃	I A 5	覆土	2.6	"	
26	"	"	床				64	やり先又はナイフ	I B 1	床	4.9	"	
27	"	"	覆土				65	スクレイパー	III B	"	6	Ha-Sh.	
28	"	"	床				66	異形石器		床直	(1.1)	Obs.	
29	"	"	"				67	石 斧	IV A	床	4.4	Ha-Sh.	
30	"	"	"				68	スクレイパー	III B	"	(7.7)	Obs.	
31	"	"	"				69	石 斧	IV A 8	覆土	(8.9)	Sch.	
32	"	"	覆土				70	"	IV A 3	"	(158.5)	Gr-Mud.	
33	"	"	床直				71	たたき石	V B 1	II層	6kg	And.	
34	"	"	覆土				72	石 斧	IV A 5	覆土	(50)	Gr-Mud.	
35	"	"	"				73	すり石	不明	床	(78)	Sa.	
36	"	"	"				74	たたき石・礫	"	"	220	And.	
37	"	"	"				75						
38	"	"	覆土・床				76						



図V-14 CH-6・11出土の土器(1)



図V-15 CH-6・11出土の土器(2)



図V-16 CH-6・11出土の石器

CH-7

位置 I-91-c・d

規模 (4.20) × 3.60 × 0.40

特徴 傾斜地にあって輪郭は、北西部分を確認するにとどまったが、平面形はほぼ円形になるものと推定される。IV層中に掘り込まれている。床面には、多くの礫がみられる。覆土は黒褐色土で、床面近くではやや粘性を帯びている。IV層中の巨角礫2個をそのまま利用した石組み炉が2基ある。2か所の炉跡から同一個体土器が出土しており同時期のものである。

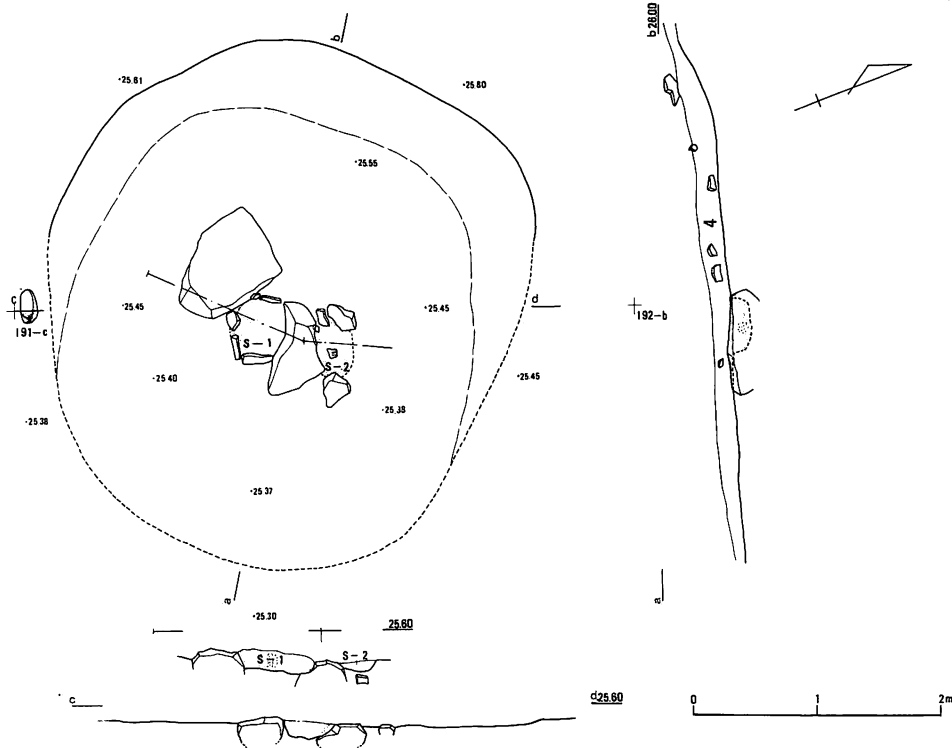
遺物

表V-14 CH-7出土遺物一覧表

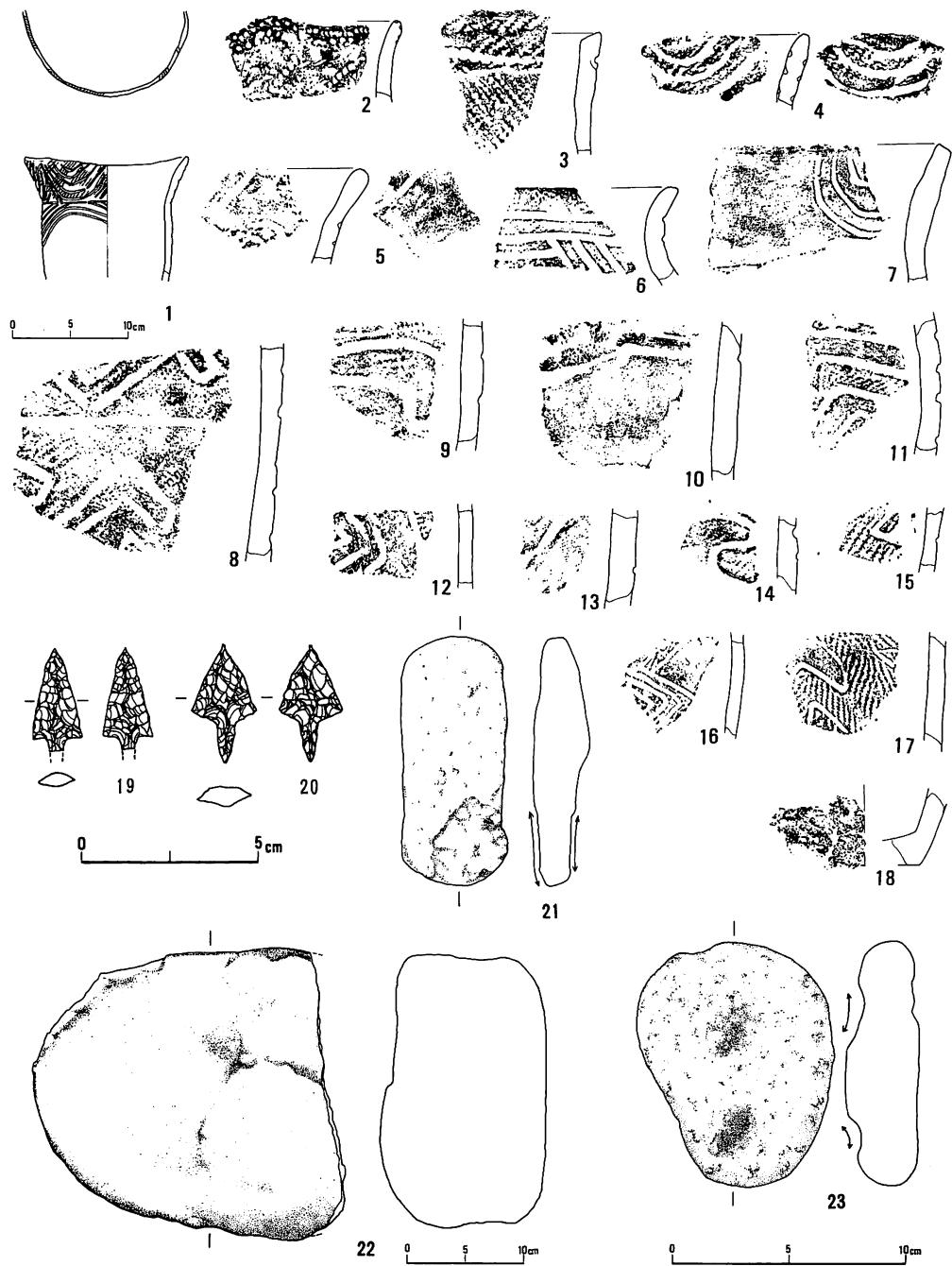
名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	III b-3	40		コア	IX A	2	
	IV a	121			フレイク	IX B	6
土器計		161		Uフレイク	X A		1
石 鍬	IA 5		2	礫・礫片		2	2
たたき石	VA 3	1	1	石器等計		11	109

計281点

覆土、床面、炉の焼土中より、IV a類土器が出土。8は、S-1焼土から出土、9は、S-2から出土したもので、斜行縄文を地文とし太い沈線文でスパナー状の胴部文様を描く。大



図V-17 CH-7



図V-18 CH-7出土の遺物

津遺跡B地点出土土器に類似する。覆土中から後期中葉、船泊上層式土器(1)や、中期中葉の天神山式土器類似の(2)が出土している。2は、口唇部に細い円形刺突文が2列施され、内面調整は極めて丁寧に行われている。

時期 後期初頭、IV a 類土器の時期

表V-15 CH-7 掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	IV b	覆土				13	土器	IV a	覆土			
2	"	III b-1	床				14	"	"	焼土			
3	"	IV a	覆土				15	"	"	床			
4	"	"	床				16	"	"	覆土			
5	"	"	"				17	"	"	床			
6	"	"	焼土				18	"	"	"			
7	"	"	床				19	石 鏃	I A 5	"	(0.8)	Obs.	
8	"	"	S-2 焼土中			9と同一個体	20	"	"	"	1.4	"	
9	"	"	S-1 焼土中			8と同一個体	21	たたき石	V A 3	"	145.8	And.	
10	"	"	床				22	礫	"	"	10.8kg	"	
11	"	"	"				23	"	"	"	300	"	
12	"	"	"										

CH-8

位置 I-90-d

形状 石組み炉を確認しただけで、住居跡の輪郭は不明。

特徴 昭和57年度の発掘区域の南西隅で発見された。他の住居跡と同様、傾斜地にあるので、西側部分を発掘すれば、輪郭が出るものと予想される。

時期 不明

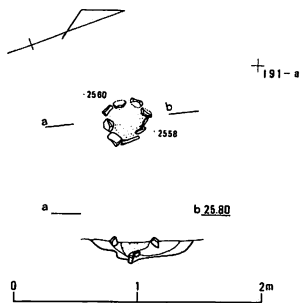
CH-9

位置 I-91-a・b

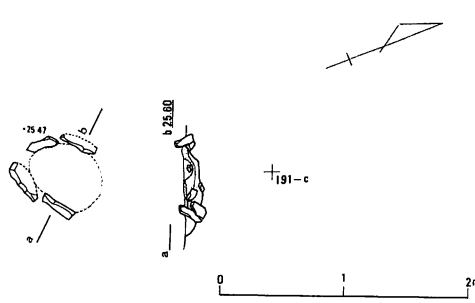
形状 石組み炉を検出しただけで、住居跡の輪郭は確認できなかった。

時期 不明

CH-8



CH-9



図V-19 CH-8・CH-9

CH-10

位置 I-91-c、I-92-b、J-91-d、J-92-a

規模 7.60×6.30×0.40

特徴 傾斜地にあり、輪郭は、北西部を確認したにとどまったが、平面形は、ほぼ円形になるものと推定される。IV層中に掘り込まれ、床面には多くの礫がみられる。覆土は、黒色土と黄褐色土が混じり、床面近くでは幾分粘性を帯びる。2基の石組み炉がある。S-1は、中央に安山岩礫がL字に配置されている。おそらく本来は、方形に構築されていたものだろう。S-2の石組みは4~5個の礫が残っていただけで、その輪郭は不明である。石組みをおおって厚さ10cm程の焼土が不整形に広がっていることや、石組みの残存具合から判断するとS-2の方がS-1より古いものと考えられる。

遺物

表V-16 CH-10出土遺物一覧表

名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	III b-3	39	1	スクレイパー	III B 9		1
"	IV a	257	19	石斧	IV A 8		1
"	不明	1		フレイク	IX B	3,985	33
土器計		297	20	Uフレイク	X A	1	2
石鏃	I A 4	1		礫・礫片		12	2
"	5	4	1	石器等計		4,004	40
"	9	1					

計4,361点

S-2の焼土中からIV a類土器(5・7・18)が出土している。7・18は、沈線で網目状文が施された同一個体の土器。鳥崎遺跡出土土器に類似。他に床面と覆土の出土土器が接合した例がある。1は、余市式土器、4は、観音山式、羅臼式土器に類似、口縁部に縦の貼付帯が施されている。

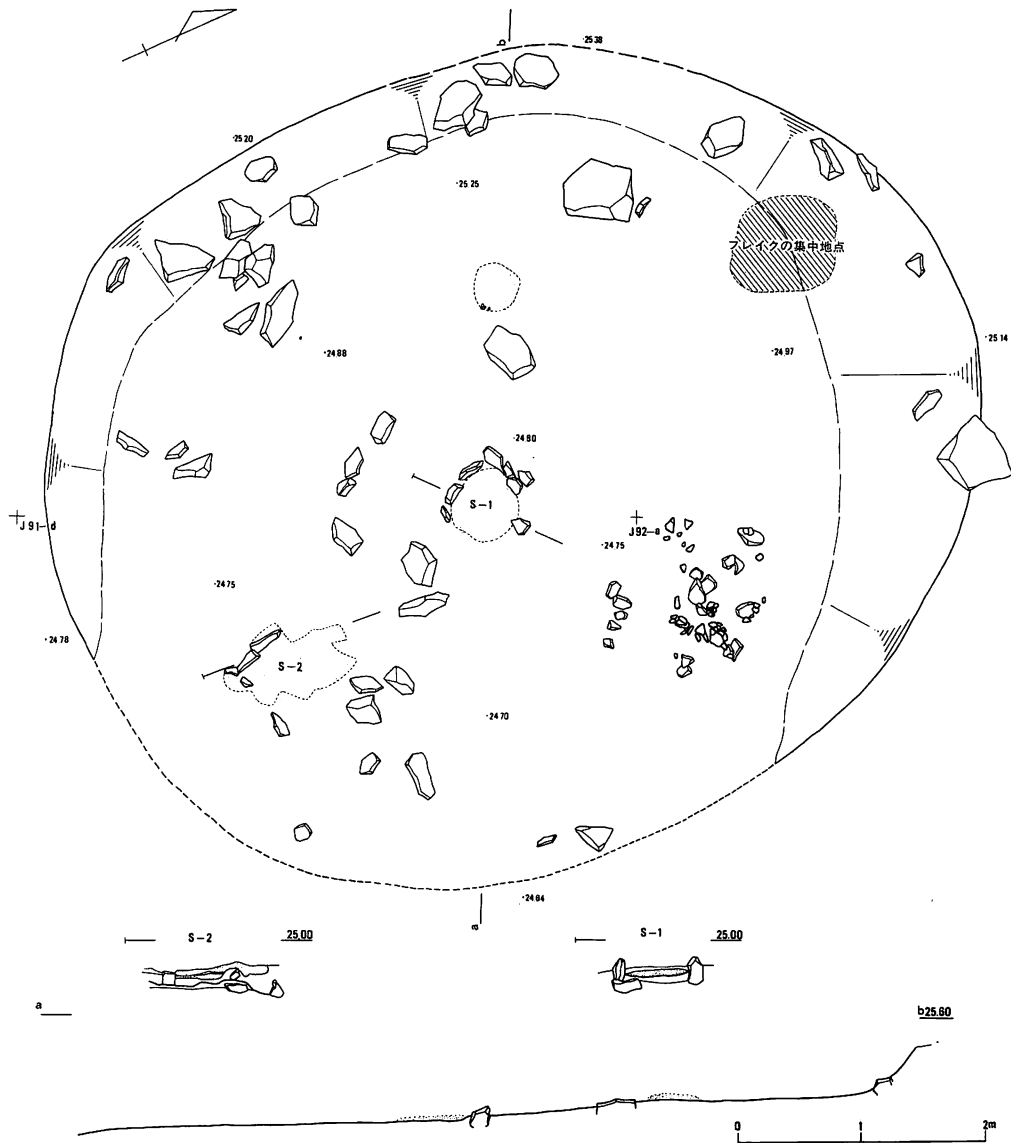
時期 後期初頭、IV a類土器の時期

表V-17① CH-10掲載遺物一覧表(1)

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	IV a	床, II層				10	土器	不明	覆土			
2	"	"	"				11	"	IV a	"			
3	"	"	床				12	"	"	床			
4	"	"	"				13	"	III b-3	"			
5	"	"	S-2の炉の中				14	"	"	覆土			
6	"	"	床				15	"	"	床			
7	"	"	S-2の炉の中				16	"	IV a	"			
8	"	"	床				17	"	"	"			
9	"	不明	"				18	"	"	S-2の炉の中			

表V-17② CH-10掲載遺物一覧表(2)

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
19	土器	IV a	II層				26	スクレイパー	不明	床	(1.4)	Obs.	
20	"	"	覆土				27	石 鏃	IA 5	覆土	(1.4)	Ha-Sh.	
21	"	"	床				28	"	"	"	2.6	Obs.	
22	"	"	覆土				29	"	"	焼土	(8.2)	Ha-Sh.	
23	"	"	"				30	礫	不明	炉の中	33.6	And.	
24	石 鏃	IA 4	"	3.1	Obs.		31	たたき石	VA 3	覆土	420.0	"	
25	"	IA 5	"	(0.3)	"								



図V-20 CH-10

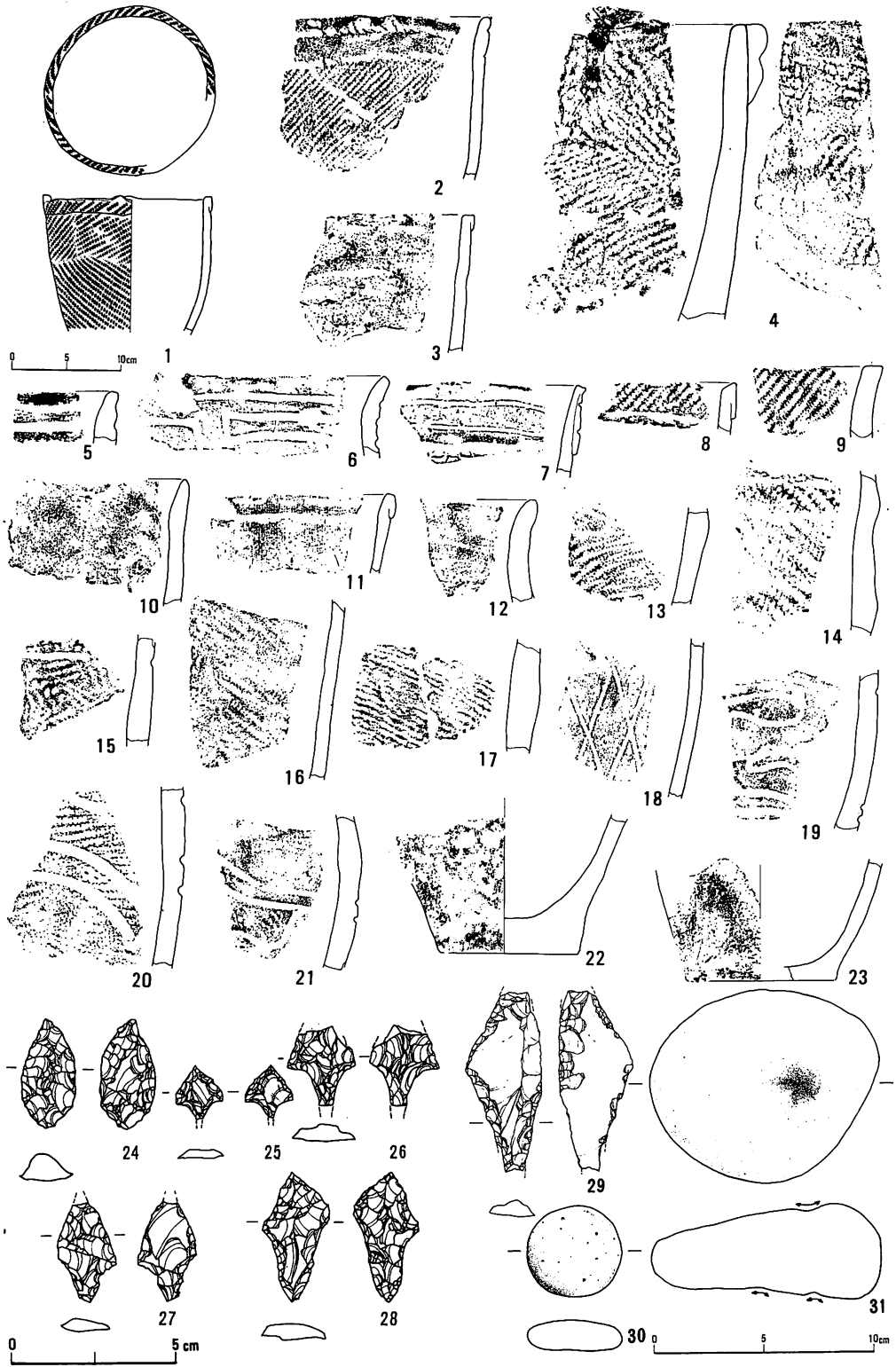


図 V-21 CH-10出土の遺物

CP-1

位置 M-93-c、N-94-b

規模 2.14×2.10×0.10

形状 平面形は、隅丸方形を呈し、IV層を掘り込んでいる。掘り込みは浅い。中央部に石組み炉をもつ。しかし、炉石はIV層に掘り込まれていない。

遺物

土器の細片が数点出土したが、特徴をもつものはない。礫が3点出土している。

時期 不明

備考 小形住居の可能性あり。しかし、遺物がほとんど見られないこと、また炉の石組みがIV層に掘り込まれていないことなどから、ここでは、ピットとして扱った。

CP-2

位置 L-92-a・b

規模 2.74×2.12×0.24

特徴 斜面に位置し、IV層を掘り込んでいる。覆土中に焼土、炭化物層がある。

遺物

IV a 類土器が底面から出土

時期 後期初頭。IV a 類土器の時期。

CP-3

位置 L-92-a・b

規模 1.70×1.50×0.36

特徴 平面形は円形。IV層に掘り込んでいる。

遺物

なし

時期 不明

Y-1

位置 K-89-d

規模 1.46×1.23

特徴 直径30cm程度の安山岩角礫が集積されている。最下部の中央に70×60cmの板状の礫がある。石の隙間には、黒色土がつまっている。配石下に、ピットは認められなかった。

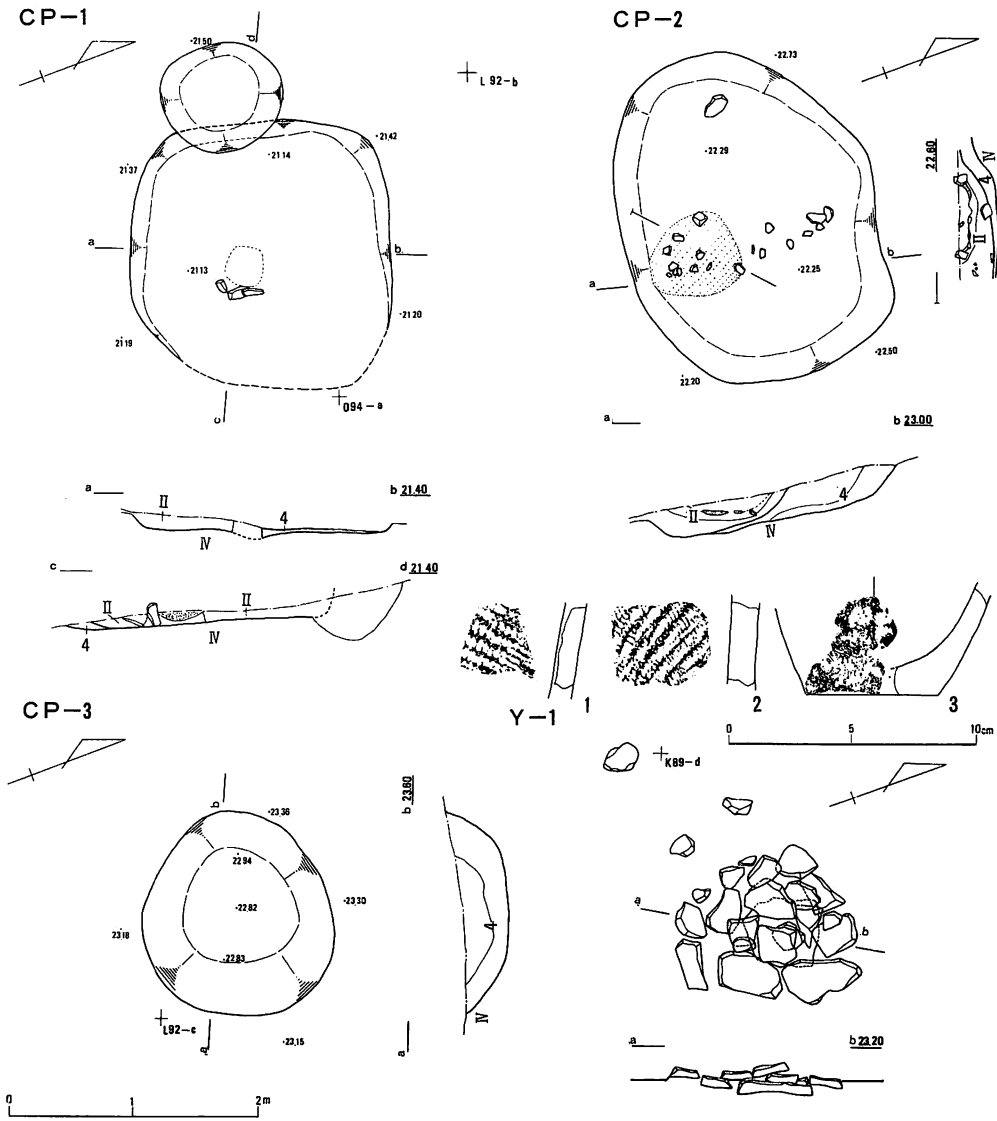
遺物

なし

時期 不明

表V-18 CP-2 掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	IV a	床				3	土器	IV a	床			
2	〃	〃	〃										



図V-22 CP-1・2・3、Y-1

3 包含層の遺物

1) 土器

I群a類(1・2)1は、器面全体に擦痕が見られる。2には、絡条体圧痕文が施されている。アルトリ式に類似する。

I群b-1類(3・4) 撚紐圧痕文、絡条体圧痕文が認められる。

I b-2類(5~11) 断面三角形の細い貼付帯をもちその上から刻み目がつけられている。

I b-3類(12~15) 微隆起線がみられ撚紐圧痕文がその上にまで及んで施されている。

14、15は、綾絡文が施されている。I b-2類とI b-3類は、明確に判別しきれないものがある。

III群a類(16~38・40) 18は、撚紐の側面圧痕を施した隆起帯が口縁をめぐっている。隆起帯による区画内は、異なった原体による3本の並列した撚紐圧痕文が付けられている。サイベ沢IV式土器に比定される。16・19~26は、口縁部に撚糸による馬蹄形圧痕があり、サイベ沢V式土器に比定される。27~35は、口縁部に波状、クサリ状に細い貼付帯がつく。サイベ沢VI式土器に比定される。27・30・32・34・35は、へら状工具の連続刺突が加えられている。36・37・40は、サイベ沢VII式土器に比定される。

III群b-1類(39・41・43~46) 天神山式土器に比定される。

III群b-2類 42・48・50・51は、柏木川式土器、47・49は、大自在B式土器に比定される。

III群b-3類(52~159) 北筒式土器、ノダツブII式土器、レンガ台式土器と、それぞれに類似するものがある。

北筒式土器とそれに類似するもの(52~116)。

52・55~59・71~73・75~78・84~91は、北筒式(トコロ6類)土器に相当し口縁部に断面三角形の肥厚帯をもち、その上面や口唇部にへら状工具、半截竹管による押し引き文または連続刺突文が施される。肥厚帯の下縁にO・Iの円形刺突文をもつものである。

74・76・77・79~83・85・86・93~95・107・110は、円形刺突文をもたない可能性のあるもの。105・109は、縄線文が施されたもの。70は、円形刺突文のみのもの。96・97は地文のみのものである。

また、口縁の肥厚帯がまのびした感じを呈し、2本の貼付帯をめぐらしたかのように見えるものがある(73・76)。いずれも肥厚帯上に押し引き文が見られ、73は、円形刺突文がある。この他に肥厚帯をもたず、押し引き文、連続刺突文や円形刺突文を施すものもある(98~104・106・108・111)。

112・113は、同一個体で貼付帯上にへら状工具で押し引き文が加えられている。114は、縄文と貼付帯は、ノダツブII式に類似するが綾絡文が施されているためこのグループに入れておく。

ノグップⅡ式土器に相当するもの(117~146)。

地文上または太い貼付帯に縄線文、棒状工具または半截竹管で短刻線や連続円形刺突文、沈線を施したもの(117~130)。

口縁部に短刻線をもつもの(131~146)。

131~135は、口縁部の地文上に2条の短刻線が施されている。内面調整と地文は粗く、口唇部は丸味をもつ。(136~146)は、口縁部からやや下がりぎみに貼付帯が施され、その上に短刻線が施されるもので、内面調整が粗雑で、口唇部が丸味をもち、地文、縄文もやや粗い。

レンガ台式に類似するもの(147~159)。

147~159は、口唇直下に貼付帯をもち、その上に短刻線が施される。内面調整は丁寧で、口唇の両端に角をもつ。153・156~159は、底部および胴部破片である。

Ⅳ群a類(160~346)。余市式土器、手稲砂山式土器、入江式土器がある。

いわゆる余市式土器に類似するもの(160~208)。

160~165は、レンガ台遺跡出土の土器に類似し、口縁部が断面三角形を呈し、縄文は、貼付帯を付した後に施文される。内面調整は比較的丁寧に行なわれている。162は、貼付帯に縄線文が施されている。

166~202・207・208は、入江第3貝層出土土器に類似し、口縁部断面が角形を呈し、内面調整は粗雑で輪積痕や凹凸が残っている。地文を施した後に貼付帯をめぐらす。貼付帯上に縄線文を施しているものも認められた。口縁部の肥厚帯は折り返し、貼付の2通りある。

数段の貼付帯をもつもの(166・173~185・207・208)、口唇部直下に1条だけもつもの(186~202)があり、後者の器形は小型のものが多く、口唇部に貼りつけによる山形突起をもつもの(172・183・188・202)もある。170・171・200~202・207・208は、貼付帯上に縄線文をもつものである。203・206は、ノグップⅡ式に近い器形をもつが、胎土、調整等からこのグループに入れる。

手稲砂山式土器に相当するもの(217・248・249)。

口縁の器形は5弁の波状で、胎土は砂粒を含み、整形は粗雑である。指圧痕のある貼付帯をモール状に口縁部に貼付し、その下に沈線で連弧文を描く。地文は縄文を施した後、ヘラで軽くなでつけている。

入江式土器に相当するもの(209~216・218~247・250~346)。

沈線文を主要文様要素とするグループである。便宜上、無文、地文のみのものもこのグループに含める。

(209~214・226~238)は、縄文、無文のもの、まれに擦痕や沈線を施すものもある。器形は、深鉢、ボール状のものがある。

(215・216・218~225・250・251・253~276・292~300・328~346)は、大津遺跡B地区出土の土器に類し、太い棒状工具を用い、直線的な文様をもつものである。218~220・222~225・254~276は、2本組の沈線で幾何学的文様を描き、その間に、クシ目文、縄文を施したも

の。沈線を主体とする文様には次の様なものがある。215・216・221・224・328～436は、「く」「ㄥ」「ㄱ」。268～278は、スパナ状。292～330は、山形文様がみられる。同様な文様を粘土紐を貼りつけて表現した例(328)もある。250・253は、口縁部に太い粘土紐で波状、山形が施されている。これらの文様要素は、単独で施されるのではなく、組合わされて施されることが多い。そして地文に縄文が施されているものと、施されていないものがある。器形は、深鉢、浅鉢、壺形、甕形が認められた。

(239～247・252・277～291・301～327)は、鳥崎遺跡出土土器に類似し、細く、鋭い棒状工具を用い、曲線的文様を描く。240～245は、網目状の沈線を描くもの。252・277～289・291・315・316・318～320・323～326は、円形、連弧文、渦巻文を主要文様とするもの。301～314・317・321・322・327は、数条の平行沈線と「S」字の沈線の組合わさるもの。283・286・290は、ケズリ出し文様をもつもの。239は、網目状撚糸文である。301～306は、口縁部に細い粘土紐による8の字状の貼付文をもつものである。このグループは、深鉢、甕形等が認められ、地文がないものが多い。

IV群b類(347～383)。ウサクマイ遺跡C地点出土土器に類似する土器、船泊上層式土器、手稲式土器が出土している。

347～353は、ウサクマイ遺跡C地点出土土器に類似し、器形は、口縁部から胴部にかけてのくびれが緩やかである。口縁部に、緩やかな山形、くずれた渦巻文様をもち、胴部に磨消文をもつ。354～368は、船泊上層式土器に比定され、くびれは不明瞭ながら現われてくる。口縁部に鋸歯状の沈線文が施され、胴部に磨消文をもつ。369～383は、手稲式土器に比定され、磨消文が発達し、くびれ部が明瞭に現われる。口唇部が平坦に丁寧に調整される。平行沈線が多用され、それらを区切る1列おきに向きの異なる短い孤線がみられる。

IV群c類(384～389)。堂林式土器に比定されるもの。

包含層出土土器は、III b-3類、IV a類が主体を占める。土器は、住居跡の周辺(87～94ラインと、I～Mライン)に囲まれる範囲に集中して分布する傾向を示し、I群は、そこから少し離れた地点から散発的に出土する。IV b類は、87～90ライン、J-Lラインに囲まれた範囲から集中的に出土している。さらに未調査のIラインより上部に、遺物集中が拡大する傾向を示している。

2) 石器

本地区より出土した石器の総数は、23,721点にのぼる。以下に石器種別に代表的なものを図示し、その概略を述べる。

石鏃(1～44)。本地区から多量に出土している。1・2は、柳葉形石鏃、3～6は三角形石鏃、7～10・14・29は、無茎で、そのほかはすべて有茎である。茎部があり、刃部が厚い作りの粗雑なIII b-3類土器～IV a類土器に伴うものが多い。1・2は、早期、I b-2、3類土器に伴うもの。3～6は前期、II群土器に伴う可能性がある。しかし本地区からII群土器の出土例は認められていない。25は、IV b類に伴出するものと思われる。

やり先またはナイフ(45~62)。45~52・54~59は、左右対称である。53・60・61・62は、左右非対称である。53・55・56・59・60・61は、ナイフ的用途をもつ。62は、両面加工のナイフ、または、スクレイパーとして使用されたものだろう。

石錐(63~71)。63・64・70・71は、不定形の剥片の一端に突部を作り出したもの。65・66・67・69は、全面を調整し突部とつまみ部分とを作出したもの。67は、両端に突部をもつ。

つまみ付きナイフ(72~82)。縦長のもので定形的なもの(72~76)。不定形剥片を利用したもの(77~80)。両面加工の横長のもの(81、82)。

スクレイパー(83~107)。83・84・85・86・87は、石ベラと称されるもので、硬質頁岩が多く、両面加工のもの(84・85・86)と、二次加工が周辺に施されているもの(83)がある。89・90は、片面加工のラウンドスクレイパー。88・91~106は、不定形剥片を用いたもの。

コア(108~111)。原石面を残すものが多く、礫面をそのまま打面としているものが多い。

石斧(123~137)。石材は、緑色泥岩、黒色片岩が多い。123は、擦り切り痕がある。124は、基部にベッキングが認められる。127は、棒状の自然礫に刃部のみを作出したものである。134は、泥岩質で非常にもろい石材を用いている。137は、破片の再利用。

たたき石(138~149)。安山岩質の河原石を用いているものが多い。145は、緑色泥岩でほぼ全周にわたってたたき痕がみられる。148は、全面が擦られ、整形している。たたき痕もみられるがすり石的用途も強いように思われる。

台石(150~152)。本地区から、多量に出土している。安山岩の丸味をもった扁平な礫が用いられている。

すり石(153~156)。安山岩の素材を用い、断面三角形のもの(153)と、断面が扁平なもの(154・155)そして、156は、北海道式石冠である。

石皿(157・158)。安山岩を用いている。本地区において多量に出土している。

砥石(159~164)。砂岩を用いている。断面四角形を呈するものが多く、その各面を使用している。

その他の遺物(112~122)。112~120は、土製円盤である。土器破片を再利用したもので、117は、縄線文土器が用いられている。119は、馬蹄形圧痕が認められ、円筒上層式土器が利用されたものと思われる。121・122は、垂飾である。かんらん岩製。一対そろって出土した。

本地区の石器出土状況は、住居跡周辺に集中して出土する傾向を示し、石鏃、石皿、台石の出土数が多いのがきわだった特徴といえる。

表V-19① C地区掲載土器一覧表(1)

番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区		番号	分類	発掘区	備考
1	I a	K-88-c		44	III b-1	I-91-a		87	III b-3	M-93-a	
2	"	J-88-a		45	"	K-91-c		88	"	I-90-c	
3	I b-1	Q-88-b		46	"	K-94-a		89	"	K-92-a	
4	"	L-89-b		47	III b-2	L-91-c		90	"	K-88-b	
5	I b-2	O-91-c		48	"	J-90-c		91	"	N-91-a	
6	"	L-88-d		49	"	I-91-a		92	"	I-90-d	
7	"	J-88-a		50	"	K-90-b		93	"	K-89-d	
8	"	"		51	"	I-90-c		94	"	L-90-a	
9	"	L-89-b		52	III b-3	I-90-b		95	"	K-90-d	
10	"	J-88-d		53	"	K-92-d		96	"	M-92-b	
11	"	I-92-a		54	"	J-91-d		97	"	L-89-d	
12	I b-3	J-88-a		55	"	I-90-c		98	"	L-92-b	
13	"	O-91-c		56	"	J-91-c		99	"	I-90-b	
14	"	P-94-a		57	"	J-91-a		100	"	M-90-d	
15	"	"		58	"	J-92-c		101	"	I-91-d	
16	III a	J-91-a		59	"	L-88-d		102	"	I-92-d	
17	"	I-90-c		60	"	L-90-d		103	"	J-91-a	
18	"	I-91-c		61	"	I-91-b		104	"	I-92-a	
19	"	J-90-d		62	"	J-93-b		105	"	K-91-d	
20	"	L-88-a		63	"	L-91-b		106	"	J-91-d	
21	"	J-91-c		64	"	J-91-d		107	"	K-89-a	
22	"	K-89-a		65	"	J-91-c		108	"	J-92-b	
23	"	K-88-d		66	"	J-90-d		109	"	K-91-a	
24	"	J-90-b		67	"	K-92-d		110	"	"	
25	"	J-89-a		68	"	J-90-d		111	"	J-90-a	
26	"	K-89-a		69	"	I-92-a		112	"	J-91-d	
27	"	J-90-c		70	"	K-91-d		113	"	"	
28	"	L-92-a		71	"	L-88-c		114	"	I-90-c	
29	"	Q-86-c		72	"	I-93-a		115	"	I-98-a	
30	"	J-91-c		73	"	J-91-d		116	"	I-91-a	
31	"	K-91-a		74	"	J-91-a		117	"	K-91-d	
32	"	J-90-a		75	"	K-88-d		118	"	L-91-d	
33	"	L-88-d		76	"	"		119	"	不明	
34	"	J-90-c		77	"	K-90-d		120	"	I-94-b	
35	"	J-89-a		78	"	I-91-b		121	"	I-90-d	
36	"	K-89-c		79	"	I-90-d		122	"	J-90-c	
37	"	J-91-c		80	"	K-88-c		123	"	J-91-c	
38	"	"		81	"	K-89-b		124	"	L-88-d	
39	III b-1	I-91-b		82	"	I-92-a		125	"	J-90-d	
40	III a	L-88-a		83	"	J-89-a		126	"	J-91-b	
41	III b-1	J-91-c		84	"	M-91-b		127	"	J-91-c	
42	III b-2	"		85	"	J-91-a		128	"	I-91-a	
43	III b-1	J-90-d		86	"	I-90-c		129	"	I-90-d	

表V-19② C地区掲載土器一覧表(2)

番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区		番号	分類	発掘区	備考
130	III b-3	I-94-b		174	IV a	J-91-b		218	IV a	I-90-c	
131	"	J-90-a		175	"	I-92-b		219	"	J-90-b	
132	"	K-88-c		176	"	K-89-a		220	"	I-90-d	
133	"	J-90-a		177	"	I-90-d		221	"	I-91-a	
134	"	J-90-a		178	"	J-93-a		222	"	I-91-b	
135	"	J-90-d		179	"	J-90-d		223	"	J-91-d	
136	"	I-93-a		180	"	I-93-b		224	"	J-90-a	
137	"	J-91-c		181	"	J-93-b		225	"	I-91-c	
138	"	K-94-b		182	"	I-90-a		226	"	I-91-c	
139	"	K-94-d I-93-b		183	"	不明		227	"	I-90-d	
140	"	J-92-a		184	"	I-92-a		228	"	"	
141	"	J-90-b		185	"	M-93-a		229	"	K-87-d	
142	"	L-89-c		186	"	J-93-b		230	"	L-90-b	
143	"	K-92-b		187	"	I-90-c		231	"	I-92-b	
144	"	K-92-a		188	"	"		232	"	不明	
145	"	J-91-a		189	"	"		233	"	K-88-a	
146	"	不明		190	"	"		234	"	L-91-c	
147	"	J-91-b		191	"	L-92-b		235	"	不明	
148	"	"		192	"	J-90-d		236	"	I-92-d	
149	"	K-91-c		193	"	I-92-a		237	"	I-90-c	
150	"	I-91-b		194	"	K-89-a		238	"	I-96-d	
151	"	L-89-c		195	"	I-92-a		239	"	M-93-a	
152	"	I-93-b		196	"	I-91-b		240	"	J-89-a	
153	"	J-90-d		197	"	I-91-c		241	"	J-90-d	
154	"	K-92-a		198	"	I-91-d		242	"	K-89-a	
155	"	L-89-c I-90-d		199	"	J-92-b		243	"	I-90-d	
156	"	J-91-c		200	"	I-92-a		244	"	K-88-a J-88-b	
157	"	"		201	"	"		245	"	K-88-a K-88-b	
158	"	L-92-b		202	"	"		246	"	I-96-d	
159	"	J-90-a		203	"	J-88-b I-92-a		247	"	J-92-a	
160	IV a	O-89-d N-93-a		204	"	I-90-a		248	"	L-90-c	
161	"	K-91-a		205	"	I-92-a		249	"	K-88-a	
162	"	I-90-c		206	"	I-90-c I-91-b		250	"	I-92-a	
163	"	M-87-d		207	"	I-92-b		251	"	I-91-a	
164	"	L-90-a		208	"	I-93-b		252	"	K-94-b	
165	"	J-91-d		209	"	J-91-d		253	"	L-91-b	
166	"	J-93-a		210	"	J-90-a		254	"	I-90-d	
167	"	K-89-a		211	"	K-88-c		255	"	I-91-b	
168	"	J-91-c		212	"	K-88-a		256	"	K-92-b	
169	"	I-90-b		213	"	I-90-d		257	"	J-90-a	
170	"	M-89-d		214	"	J-92-a		258	"	I-91-d	
171	"	I-92-a		215	"	I-91-c J-92-a		259	"	I-93-b	
172	"	I-90-b		216	"	K-89-a		260	"	J-88-d	
173	"	I-93-a		217	"	K-87-d		261	"	L-92-b	

表V-19③ C地区掲載土器一覧表(3)

番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
262	IV a	I-91-b		306	IV a	L-88-a		350	IV b	I-92-a	
263	"	J-90-a		307	"	L-88-a		351	"	J-90-d	
264	"	I-91-b		308	"	L-88-a		352	"	I-92-a	
265	"	J-89-c		309	"	N-91-d		353	"	J-91-d	
266	"	J-91-d		310	"	J-90-d		354	"	I-91-a	
267	"	I-90-c		311	"	K-89-a		355	"	J-89-a	
268	"	I-90-d		312	"	J-92-a		356	"	I-90-c	
269	"	J-88-b		313	"	K-88-b		357	"	I-92-a	
270	"	J-91-a		314	"	L-92-b		358	"	M-87-a	
271	"	I-90-d		315	"	I-90-c		359	"	I-92-c	
272	"	I-91-b		316	"	I-90-c		360	"	K-87-a	
273	"	I-90-c		317	"	K-88-b		361	"	L-91-d	
274	"	J-90-c		318	"	I-90-d		362	"	L-87-a	
275	"	J-91-a		319	"	I-90-d		363	"	N-87-c	
276	"	I-90-d		320	"	J-91-b		364	"	J-91-c	
277	"	I-91-b I-91-a		321	"	J-90-a		365	"	J-91-a	
278	"	K-88-a		322	"	J-88-d		366	"	L-92-d	
279	"	I-92-b		323	"	I-92-b		367	"	L-89-c	
280	"	"		324	"	J-91-d		368	"	L-89-c	
281	"	I-93-b		325	"	L-89-c		369	"	K-89-a	
282	"	I-90-c		326	"	I-90-d		370	"	J-88-d	
283	"	M-93-a		327	"	L-88-b		371	"	K-91-d	
284	"	L-88-c		328	"	K-91-c		372	"	J-91-d	
285	"	K-91-c		329	"	J-90-d		373	"	M-87-c	
286	"	J-95-a		330	"	I-91-d		374	"	P-88-d	
287	"	K-88-a		331	"	J-89-d		375	"	M-92-a	
288	"	"		332	"	J-90-d		376	"	M-86-c	
289	"	"		333	"	I-92-a		377	"	N-89-a	
290	"	J-90-b		334	"	J-91-d		378	"	不明	
291	"	L-88-a		335	"	J-90-d		379	"	I-88-a I-88-d	
292	"	I-91-b		336	"	I-92-c		380	"	I-91-b	
293	"	N-90-b		337	"	I-91-d		381	"	J-90-c	
294	"	J-90-a		338	"	I-91-d		382	IV c	I-91-a	
295	"	J-90-d		339	"	I-91-a		383	"	I-89-c	
296	"	I-97-a		340	"	I-91-a		384	"	K-88-d	
297	"	I-91-b		341	"	I-90-b		385	"	K-88-d	
298	"	"		342	"	I-92-a		386	"	K-88-c	
299	"	M-91-d		343	"	J-83-a		387	"	D-92-a	
300	"	I-92-c		344	"	I-90-d		388	"	K-87-d	
301	"	L-91-a		345	"	J-90-a		389	"	P-85-a	(C調)
302	"	L-87-a		346	"	I-91-b					
303	"	K-88-a		347	IV b	I-91-c					
304	"	I-91-c		348	"	I-90-d					
305	"	L-88-a		349	"	I-90-d					

表V-20① C地区掲載石器等一覧表(1)

番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	備考
1	石 鏃	I A 2a	O-89-a	(1.2)	Obs.		41	石 鏃	I A 5	J-98-a	1.2	Obs.	
2	"	"	V-93-b	(0.9)	Ha-Sh.		42	"	"	J-91-d	2.1	"	
3	"	I A 3	I-90-d	1.8	Obs.		43	"	"	I-92-d	2.4	"	
4	"	"	L-94-b	(1.0)	"		44	"	I A 9	I-90-a	1.8	"	
5	"	"	I-92-a	0.9	"		45	やり先又はナイフ	I B 1	I-92-b	2.1	"	
6	"	"	M-91-d	1.0	Ha-Sh.		46	"	"	K-92-a	2.0	"	
7	"	I A 4	L-92-b	1.0	Obs.		47	"	"	J-91-a	2.6	"	
8	"	"	V-91-a	1.3	"		48	"	"	K-92-a	2.5	"	
9	"	"	I-91-c	(1.4)	"		49	"	"	I-90-b	3.7	"	
10	"	"	I-91-a	(1.2)	"		50	"	"	I-92-b	3.7	"	
11	"	I A 5	I-90-a	1.1	"		51	"	"	K-89-d	3.8	"	
12	"	I A 4	N-86-a	1.2	"		52	"	"	K-89-b	4.1	"	
13	"	"	N-90-d	1.0	"		53	"	"	K-88-c	4.3	"	
14	"	"	K-88-a	1.9	"		54	"	"	J-91-d	6.9	"	
15	"	"	N-93-d	1.3	"		55	"	"	J-91-c	6.9	"	
16	"	I A 5	K-88-b	1.7	"		56	"	"	I-90-c	5.6	Sh.	
17	"	I A 4	J-92-b	2.2	"		57	"	"	J-93-b	5.4	Obs.	
18	"	"	J-91-d	(3.0)	"		58	"	I B 2	I-96-d	4.5	"	
19	"	I A 5	K-91-a	0.8	"		59	"	"	I-92-b	7.0	"	
20	"	"	I-91-d	1.8	"		60	"	"	L-92-a	8.7	"	
21	"	"	J-91-a	1.8	"		61	"	"	J-94-d	9.0	Ha-Sh.	
22	"	"	I-91-a	0.8	"		62	"	I B 9	I-90-d	7.6	Obs.	
23	"	"	J-91-a	0.9	"		63	石 錐 類	II A 1	J-91-a	1.2	"	
24	"	"	J-91-a	1.2	"		64	"	"	J-88-a	1.6	"	
25	"	"	K-89-a	0.6	"		65	"	"	N-87-b	1.8	"	
26	"	"	J-92-a	0.7	"		66	"	"	K-91-a	1.9	"	
27	"	"	J-88-d	1.3	"		67	"	II A 3	L-89-a	7.7	Ha-Sh.	
28	"	"	M-92-a	1.1	"		68	"	II A 1	I-91-d	1.5	"	
29	"	"	K-92-d	1.5	"		69	"	"	L-91-a	4.4	"	
30	"	"	K-87-d	2.0	"		70	"	"	K-88-b	2.1	"	
31	"	"	L-88-d	1.1	"		71	"	II A 2	不 明	6.8	"	
32	"	"	J-90-d	1.0	"		72	つまみ付きナイフ	III A 1	N-91-a	7.5	Aga.	
33	"	"	I-91-a	1.1	"		73	"	"	O-89-d	5.2	"	
34	"	"	L-87-d	0.8	Ha-Sh.		74	"	III A 2	M-92-c	7.0	Ha-Sh.	
35	"	"	I-91-a	(0.9)	Obs.		75	"	"	I-90-d	4.3	"	
36	"	"	K-87-b	1.5	"		76	"	"	I-90-c	4.1	"	
37	"	"	L-87-d	2.1	Ha-Sh.		77	"	III A 3	K-88-a	5.7	"	
38	"	"	I-90-c	1.6	"		78	"	"	L-89-a	7.0	Che.	
39	"	"	J-93-b	2.0	Obs.		79	"	III A 2	M-90-d	7.5	Ha-Sh.	
40	"	"	J-90-c	2.3	"		80	"	III A 9	I-90-c	6.1	"	

表V-20② C地区掲載石器等一覧表(2)

番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	備考
81	つまみ付きナイフ	III A 9	J-91-b	1.6	Obs.		123	石 斧	IV A 1	N-89-b	(140)	Gr-Mud.	
82	"	"	J-92-a	2.4	"		124	"	IV A 3	J-90-d	335	"	
83	スクレイパー	III B 1	L-89-c	8.7	Ha-Sh.		125	"	IV A 4	J-91-d	96.9	Bl-Sch.	
84	"	"	M-89-d	7.6	"		126	"	"	P-91-b	114.2	"	
85	"	"	K-91-b	7.1	"		127	"	IV A 3	J-93-b	114.4	Gr-Mud.	
86	"	"	M-89-d	4.3	"		128	"	"	N-90-b	382	"	
87	"	"	I-90-c	7.7	"		129	"	IV A 4	I-91-c	164.8	Bl-Sch.	
88	"	"	L-90-a	43.3	"		130	"	IV B	K-88-b	54.2	Gr-Mud.	
89	"	III B 9	N-89-c	7.6	Obs.		131	"	IV A 5	J-91-d	(31.5)	"	
90	"	"	J-92-c	2.7	"		132	"	"	M-92-c	(65.3)	Bl-Sch.	
91	"	"	J-88-d	3.8	"		133	"	IV B	I-92-d	15.4	Gr-Mud.	
92	"	"	K-92-a	7.5	Ha-Sh.		134	"	IV A 5	I-90-c	25.3	Mud.	
93	"	"	M-90-d	7.6	"		135	"	IV A 2	I-97-b	32.0	Gr-Mud.	
94	"	"	I-92-b	9.1	"		136	"	IV B	J-89-c	36.7	Bl-Sch.	
95	"	"	L-92-b	8.0	"		137	"	IV A 8	L-92-d	2.1	Gr-Mud.	
96	"	III A 8	M-86-c	39	"		138	た た き 石	V A 1	K-87-d	260	And.	
97	"	III B 9	M-92-b	19.4	"		139	"	"	I-93-a	(185)	"	
98	"	"	J-91-b	31.6	"		140	"	"	K-88-c	293	"	
99	"	III B 1	I-91-c	22.5	Aga.		141	"	V A 3	V-91-t	435	"	
100	"	"	Q-92-a	(6.5)	Ha-Sh.		142	"	V A 1	I-92-b	422	"	
101	"	"	L-88-a	6.8	Obs.		143	"	V A 9	K-88-a	377	Gr-Mud.	
102	"	"	N-92-d	(7.6)	Ha-Sh.		144	"	V A 1	K-89-b	361	And.	
103	"	"	M-94-b	6.4	"		145	"	V A 9	L-89-d	179	Gr-Mud.	
104	"	"	I-92-c	51.3	Obs.		146	"	V A 2	L-87-b	130	And.	
105	"	"	I-92-c	5.6	"		147	"	V A 1	J-91-c	94.3	"	
106	"	"	L-93-c	4.5	"		148	"	V A 9	K-89-a	164	Phy.	
107	"	"	J-93-a	7.4	"		149	"	V A 3	I-92-d	168	And.	
108	コ ア	IX A	K-92-d	6.0	"		150	台 石	V B 1	I-93-a	10.8kg	"	
109	"	"	J-92-a	7.0	"		151	"	"	C-89-d	(10.7kg)	"	
110	"	"	K-89-a	7.0	"		152	"	"	O-89-d	6.1kg	"	
111	"	"	M-90-d	6.7	"		153	す り 石	VI A 1	M-90-d	166	"	
112	土 製 品		J-90-d				154	"	VI A 2	I-92-b	334	"	
113	"		J-92-b				155	"	"	L-88-a	559	"	
114	"		L-93-b				156	"	VI A 4	K-89-d	(655)	"	
115	"		J-92-b				157	石 皿	VI B 1	I-92-c	20.8kg	"	
116	"		L-89-d				158	"	"	L-87-b	29.2kg	"	
117	"		J-91-c				159	砥 石	VII B 2	I-90-d	(42.8)	Sa.	
118	"		L-88-d				160	"	"	J-91-b	113.0	"	
119	"		J-91-a				161	"	VII B 1	J-91-b	(103.7)	"	
120	"		J-90-a				162	"	VII B 9	J-91-c	(58.5)	"	
121	垂 飾		K-91-d	5.7	Per.		163	"	"	I-90-c	(16.2)	"	
122	"		K-91-d	5.7	"		164	"	VII B 2	I-90-c	(188.9)	"	

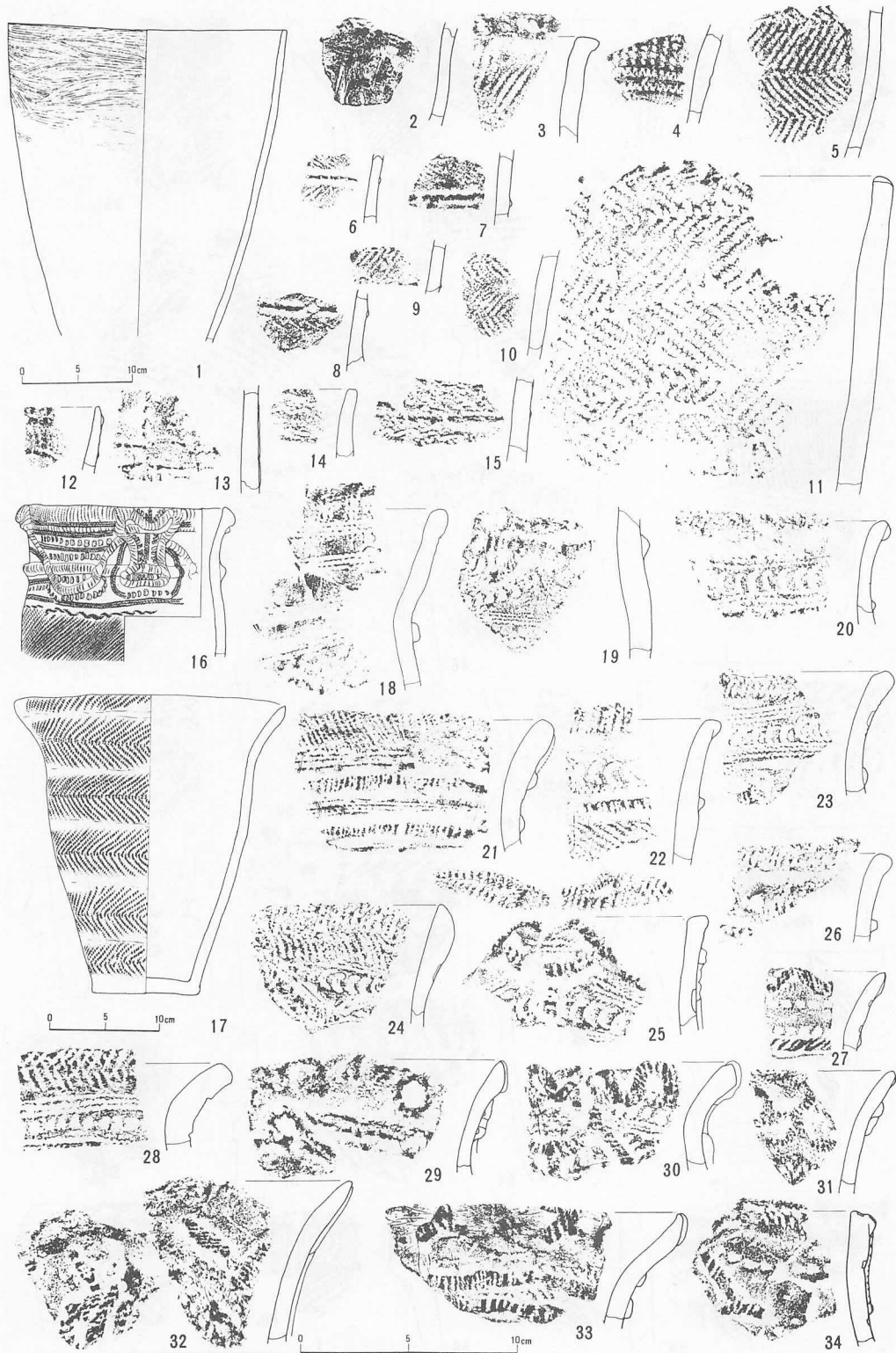
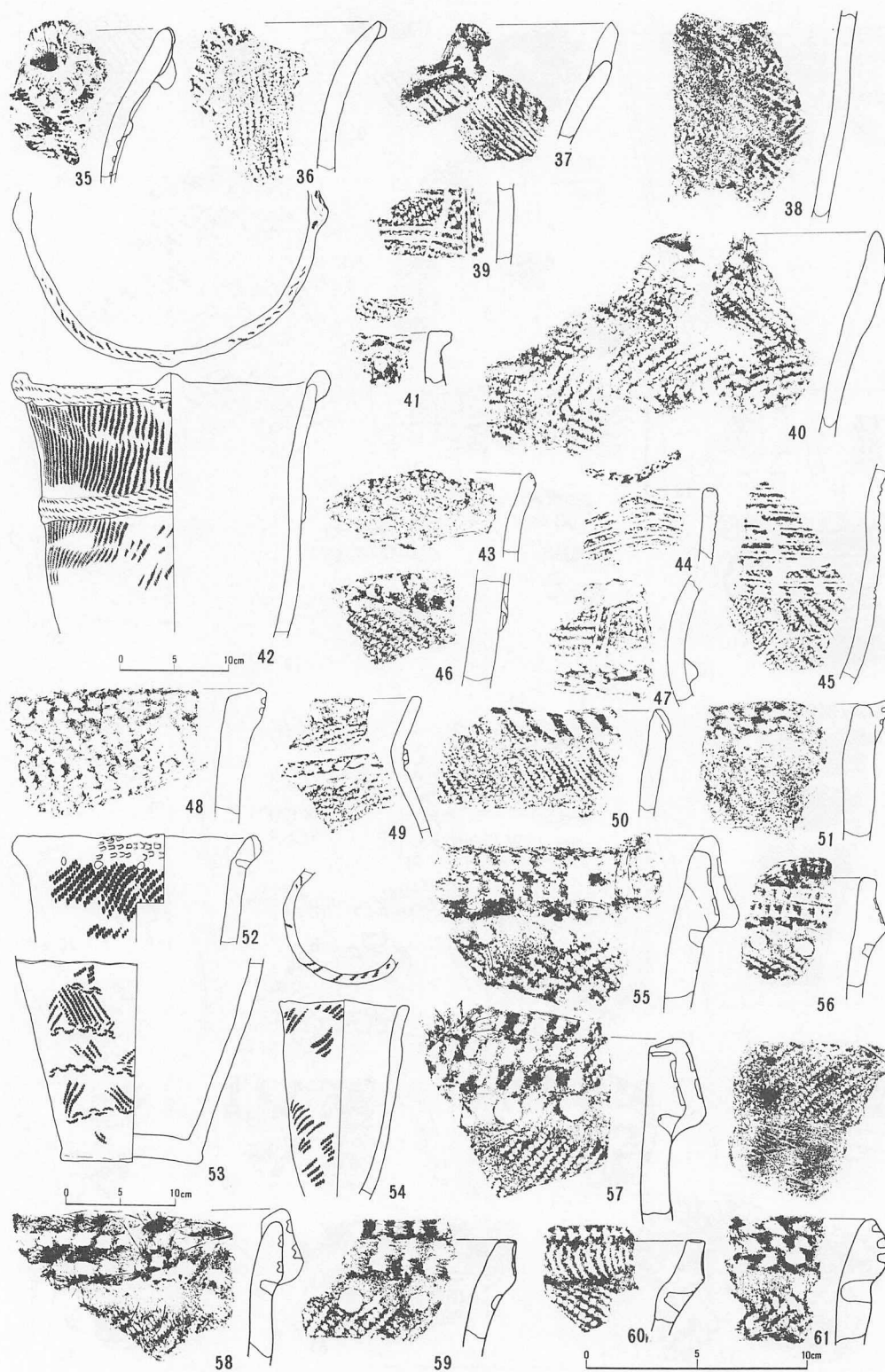


図 V - 23 包含層出土の土器(1)



図V-24 包含層出土の土器(2)



図 V - 25 包含層出土の土器(3)

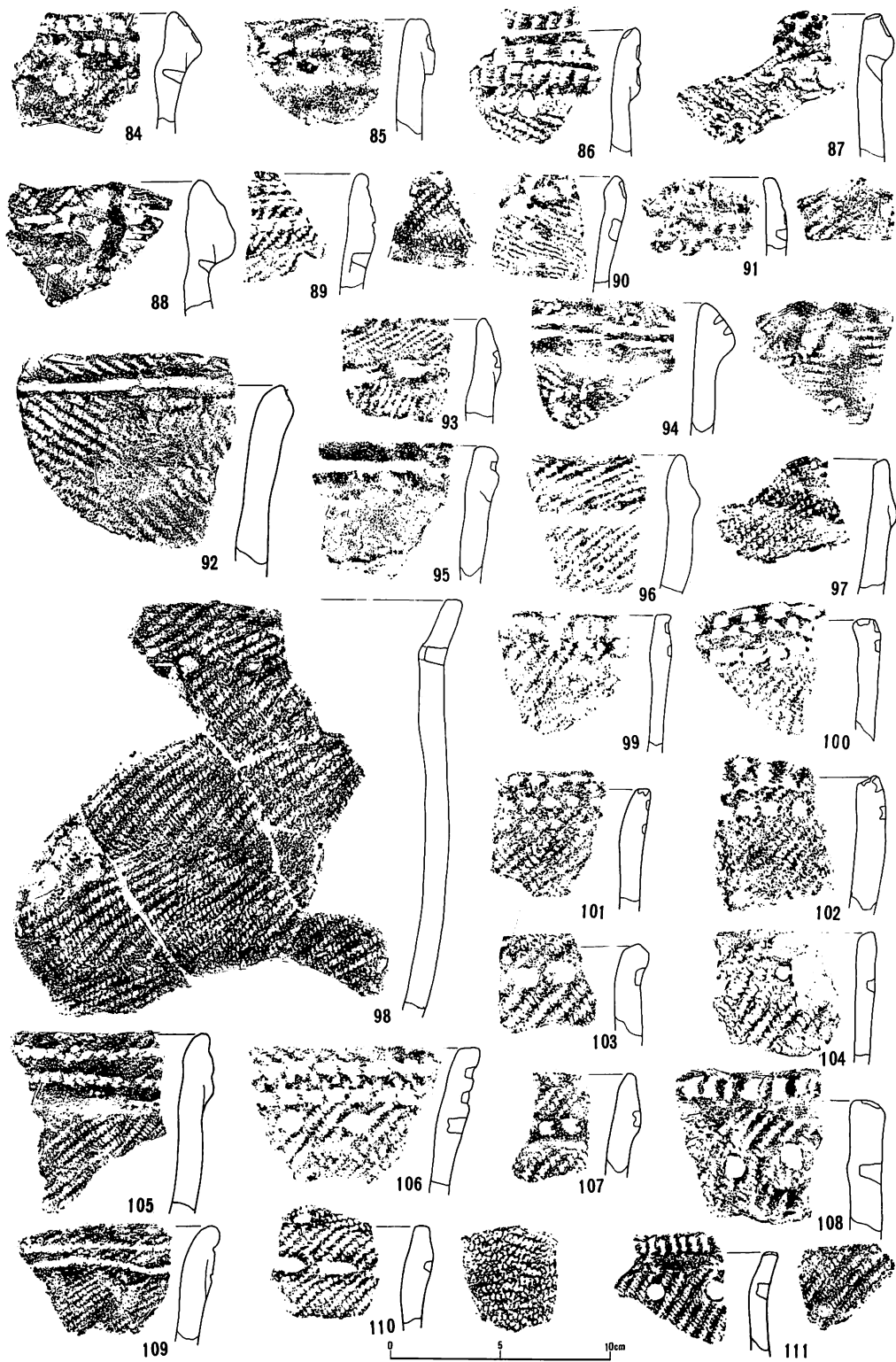


図 V - 26 包含層出土の土器(4)

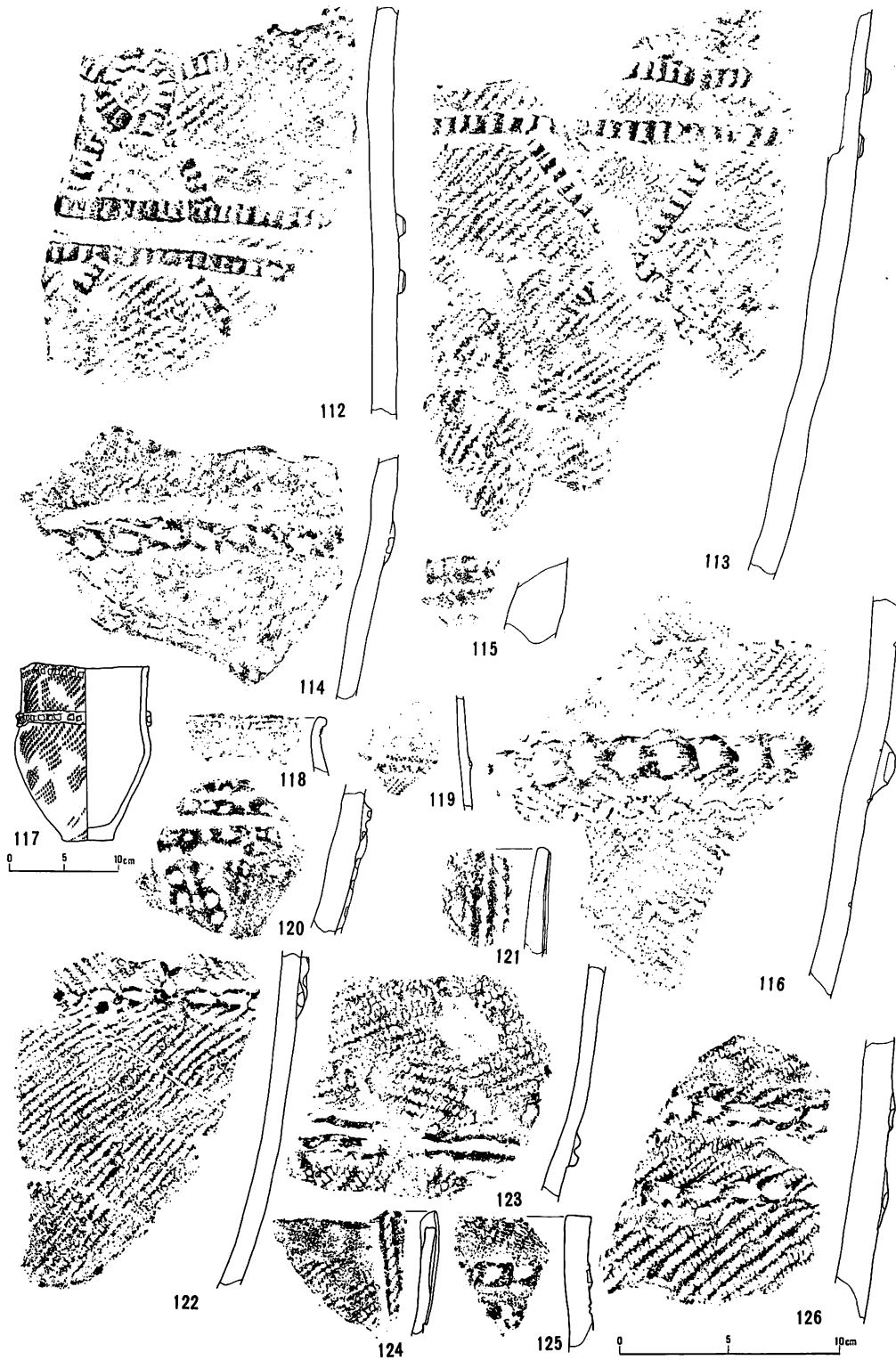


図 V - 27 包含層出土の土器(5)

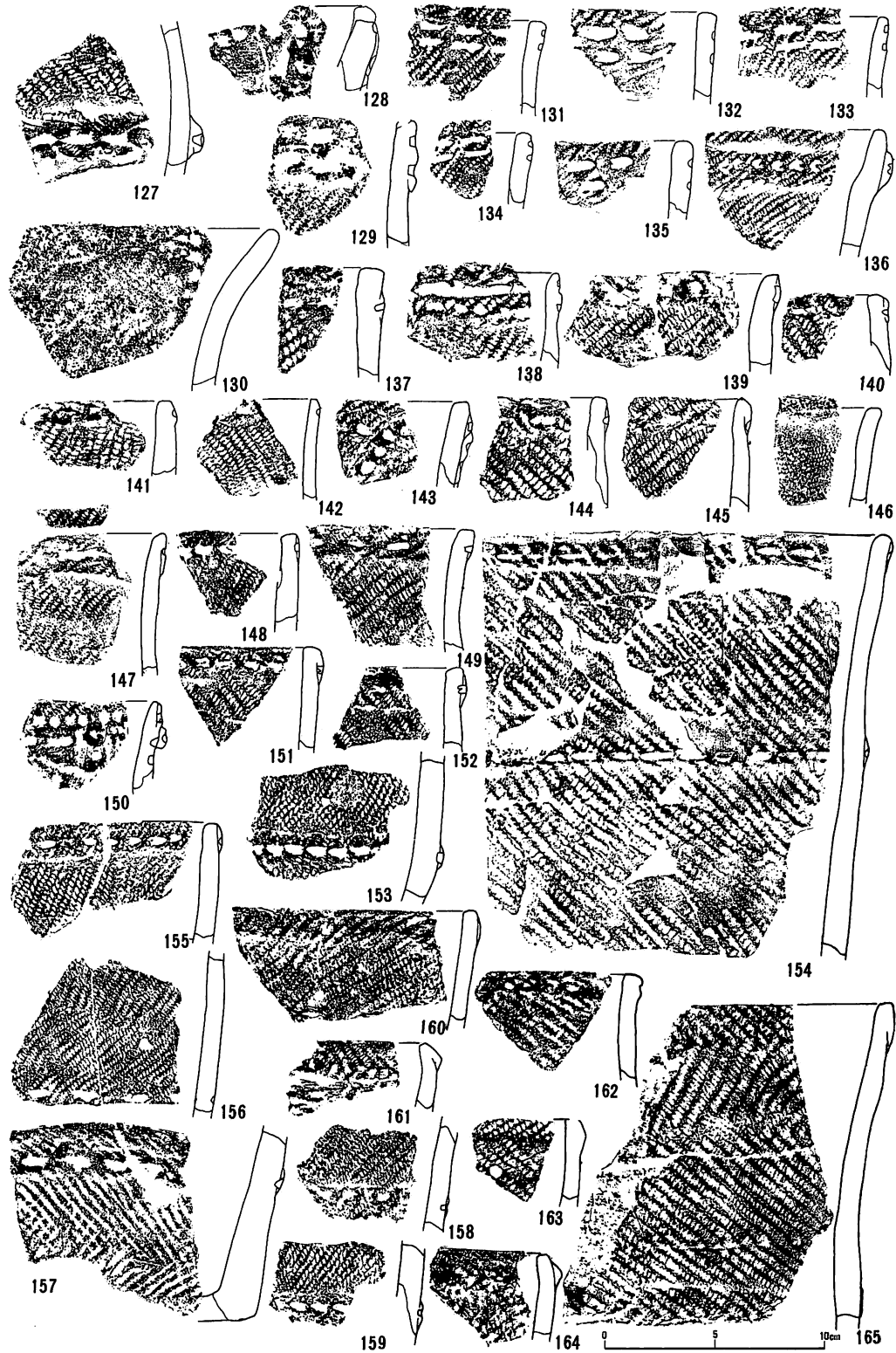
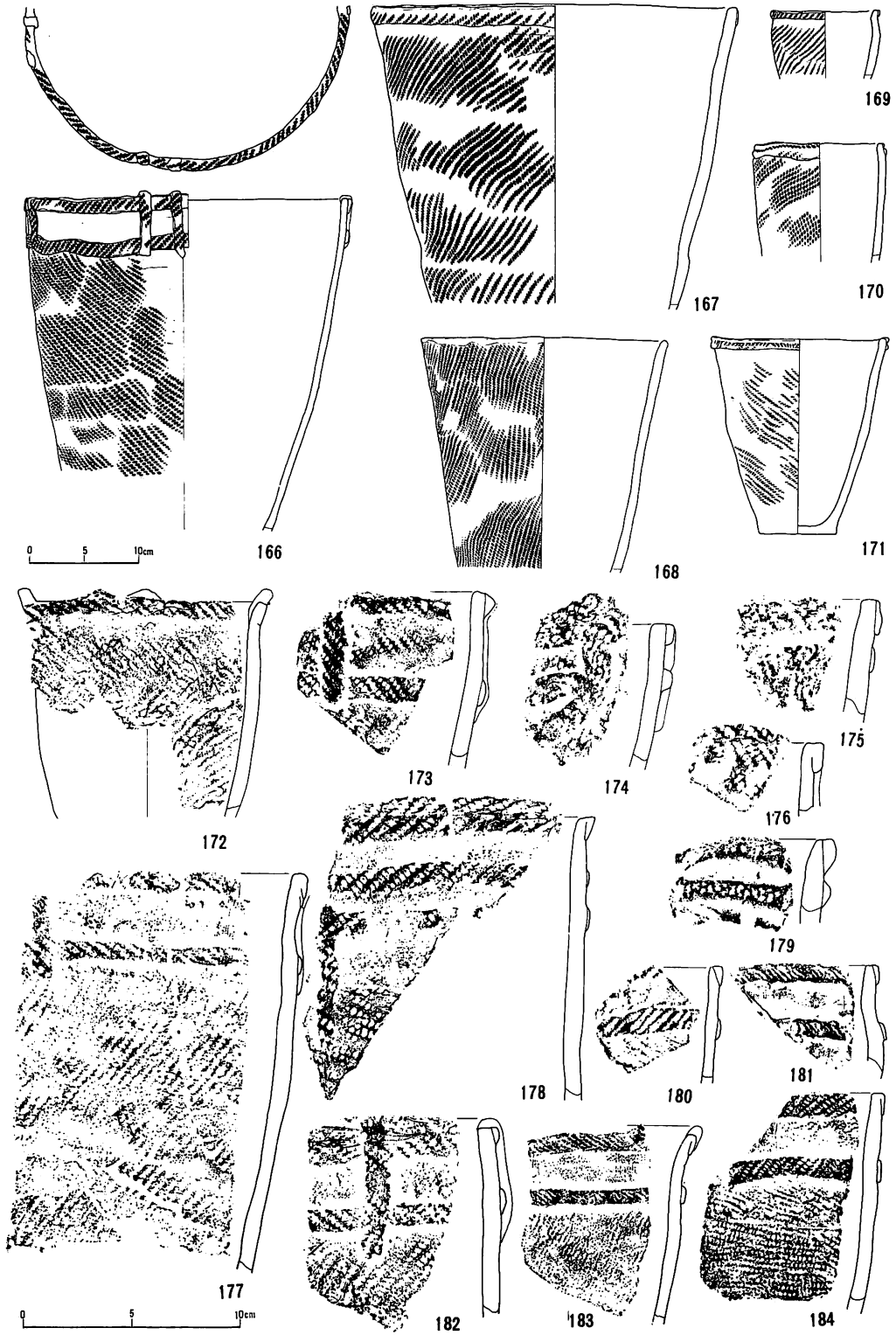


図 V-28 包含層出土の土器(6)



図V-29 包含層出土の土器(7)

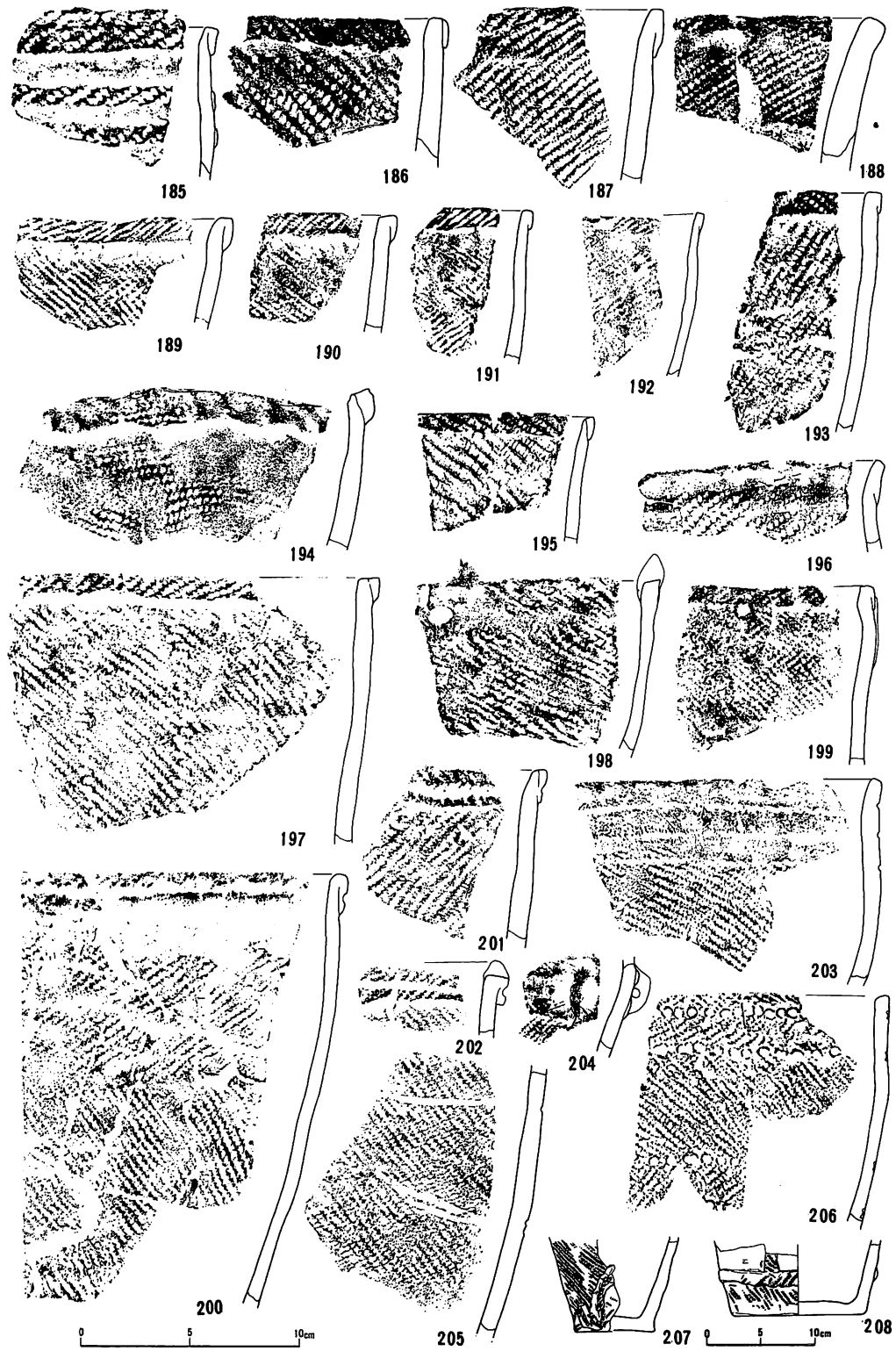
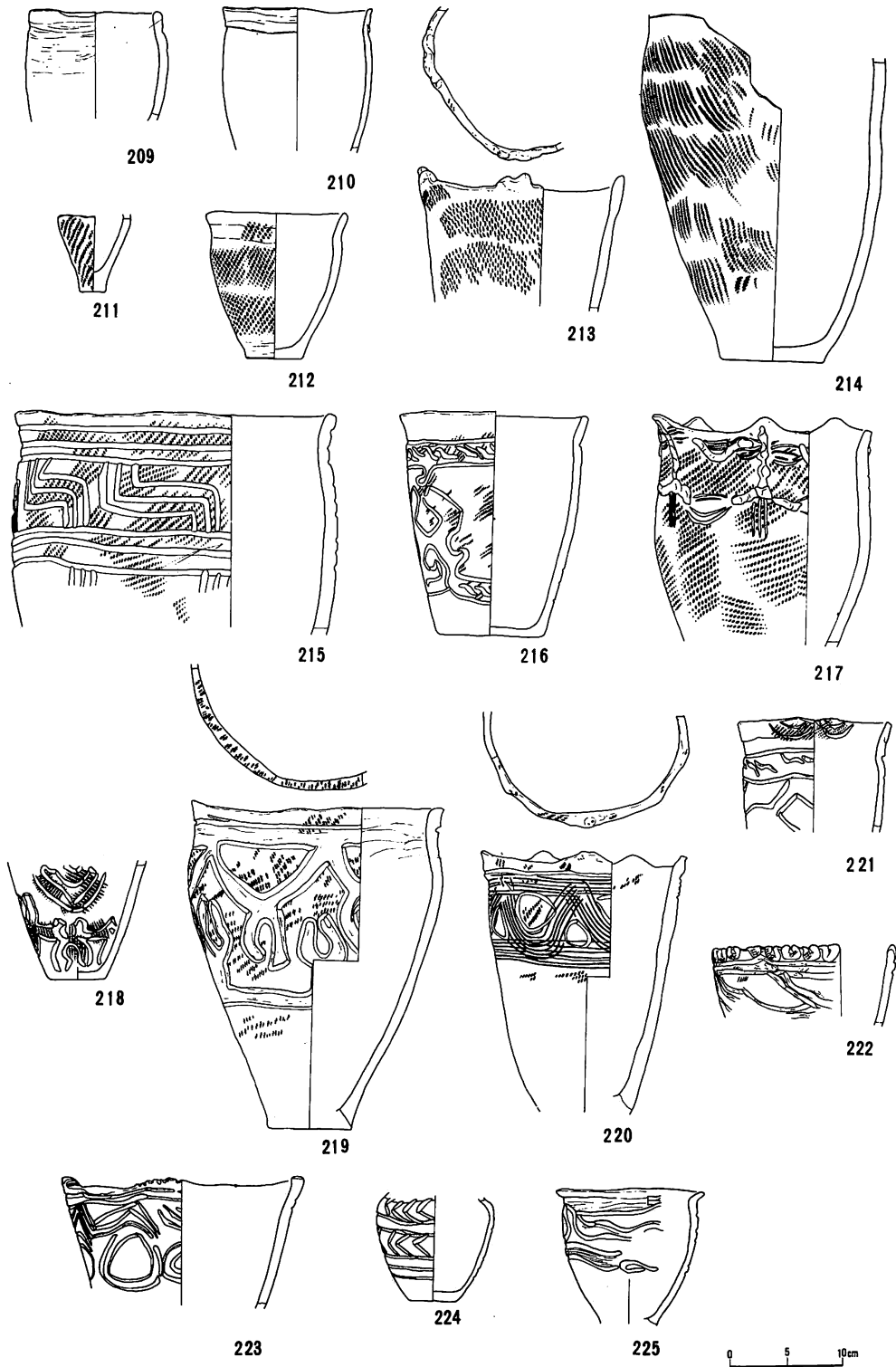


図 V - 30 包含層出土の土器(8)



図V-31 包含層出土の土器(9)

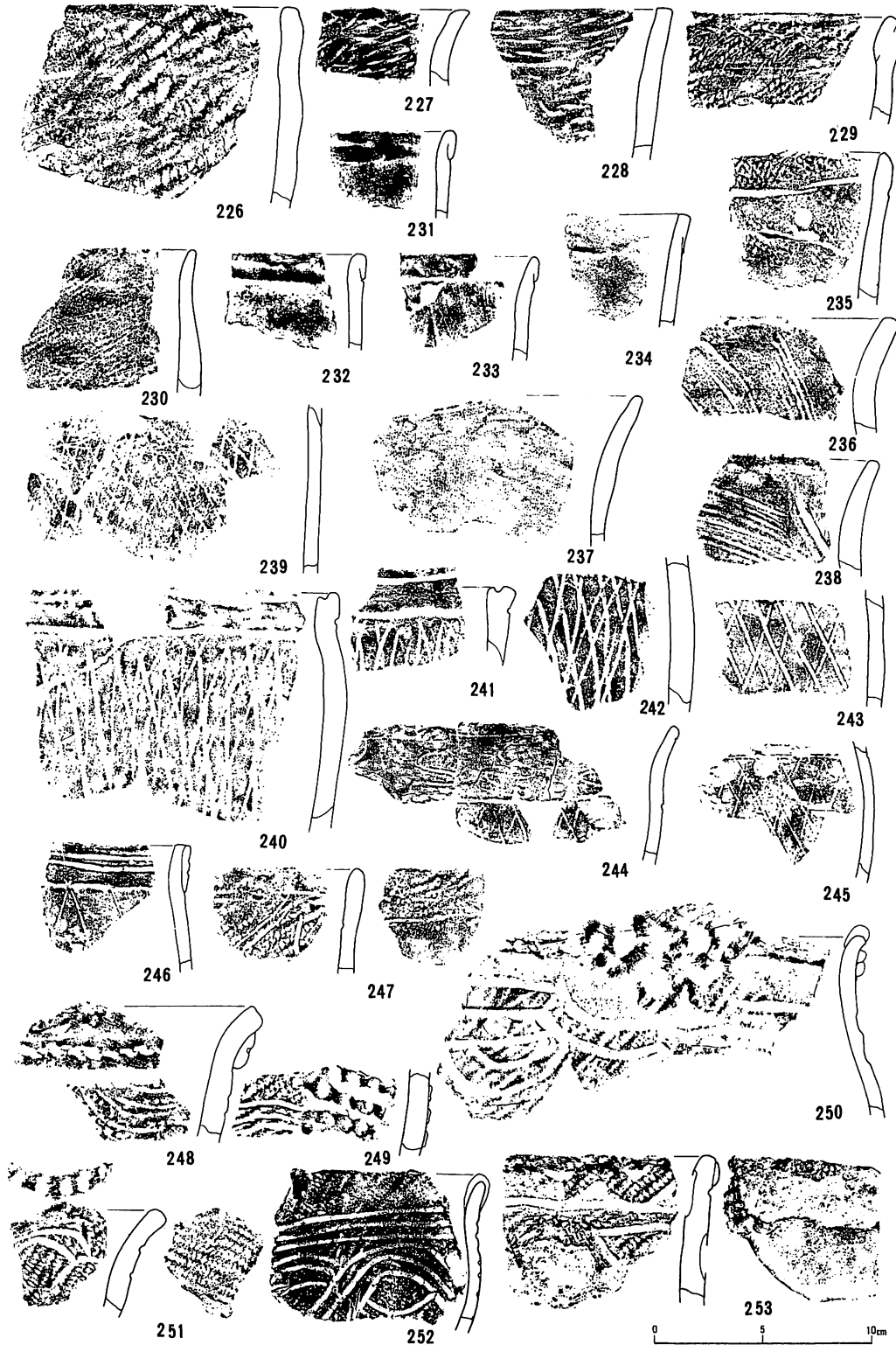


図 V - 32 包含層出土の土器(10)

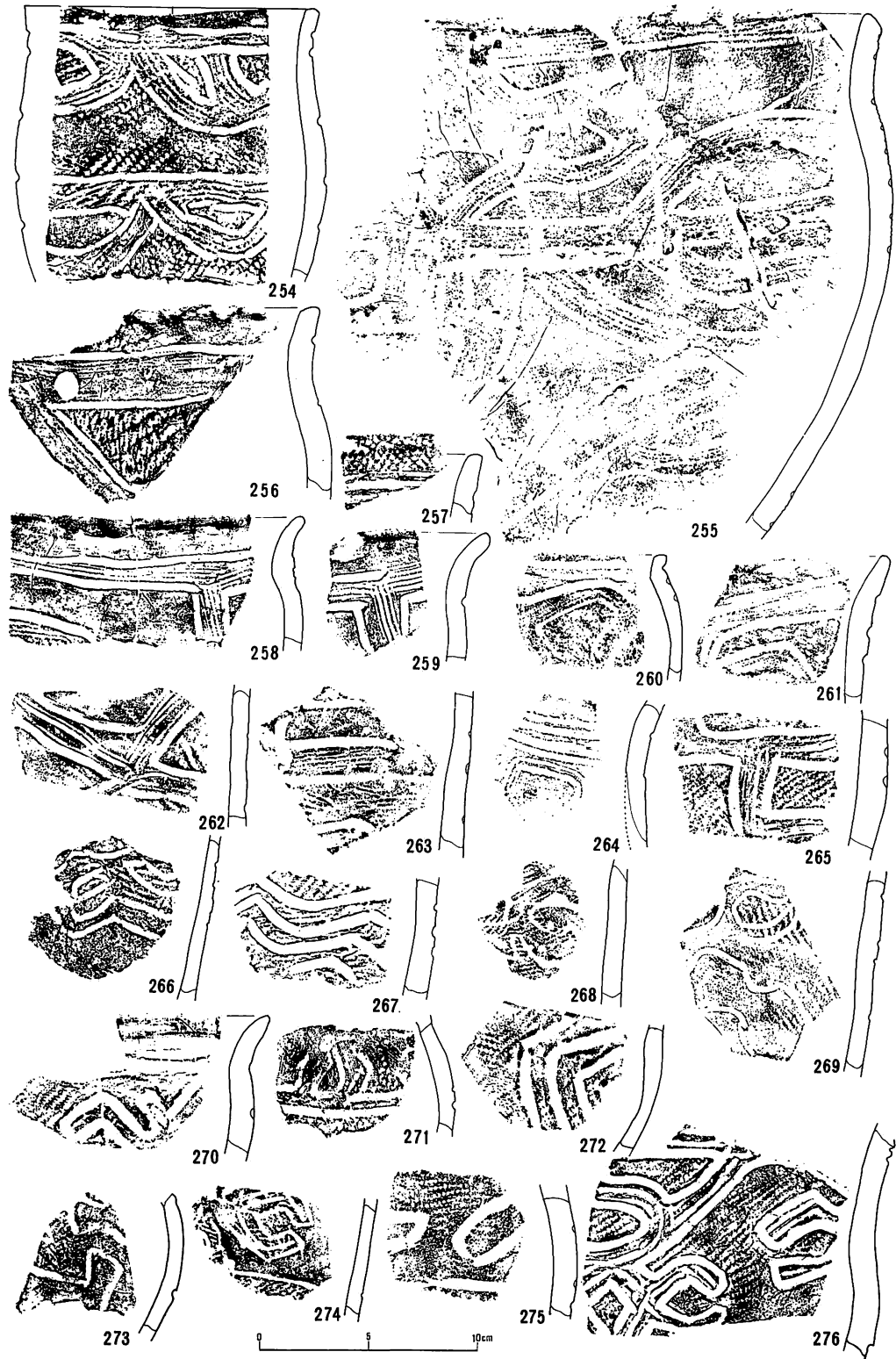


図 V - 33 包含層出土の土器(11)

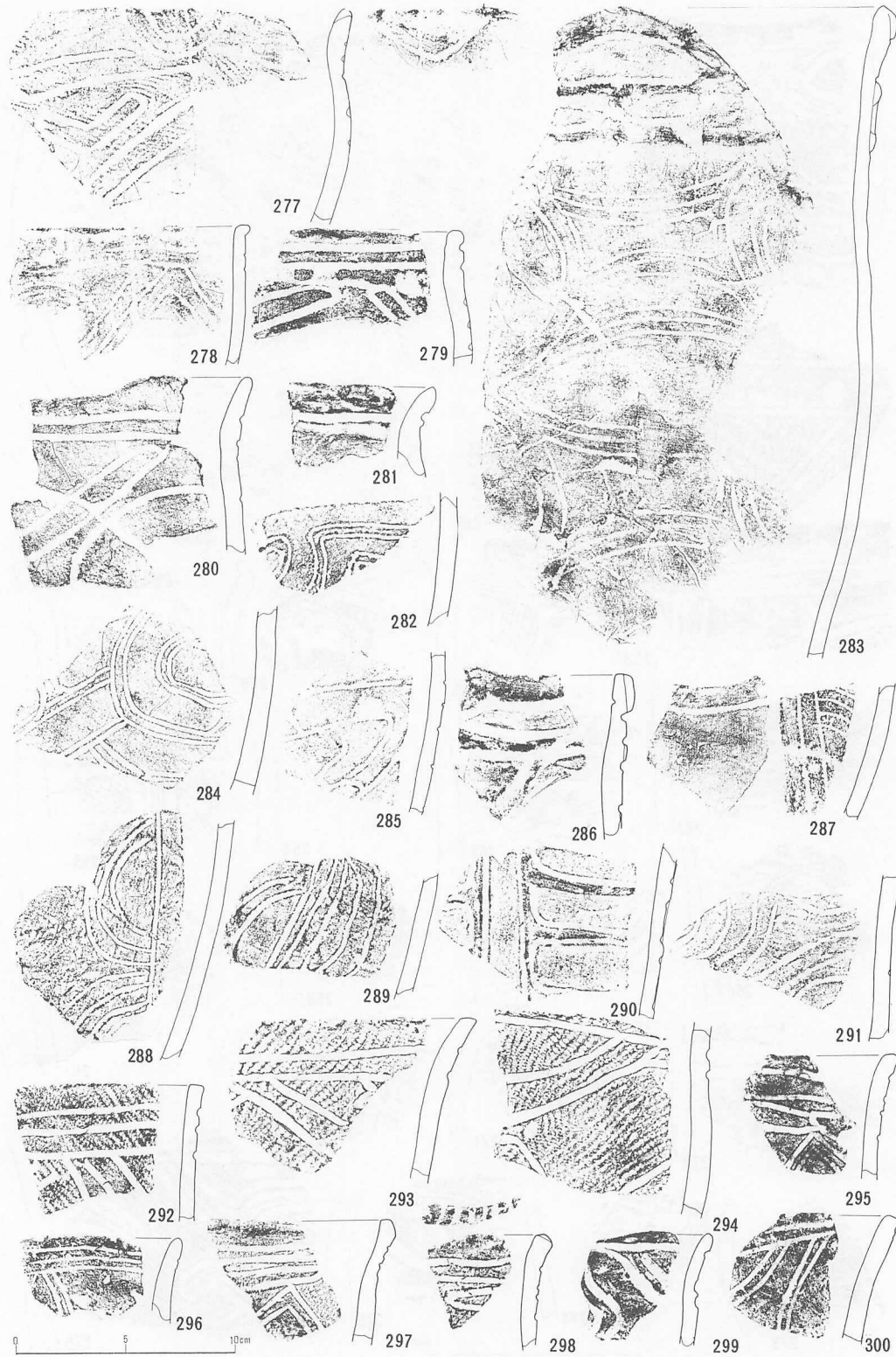


図 V - 34 包含層出土の土器(12)

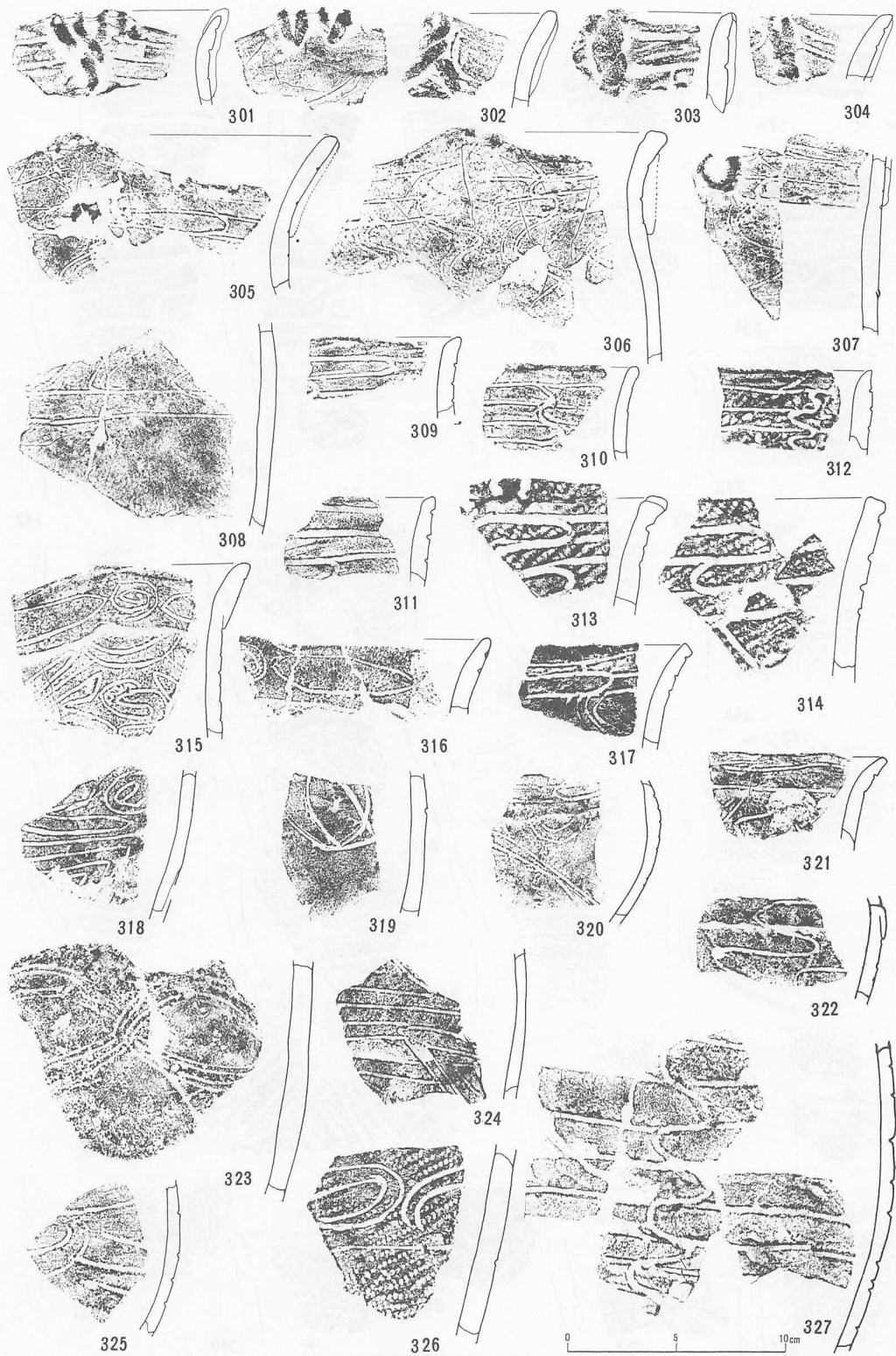


図 V - 35 包含層出土の土器(13)

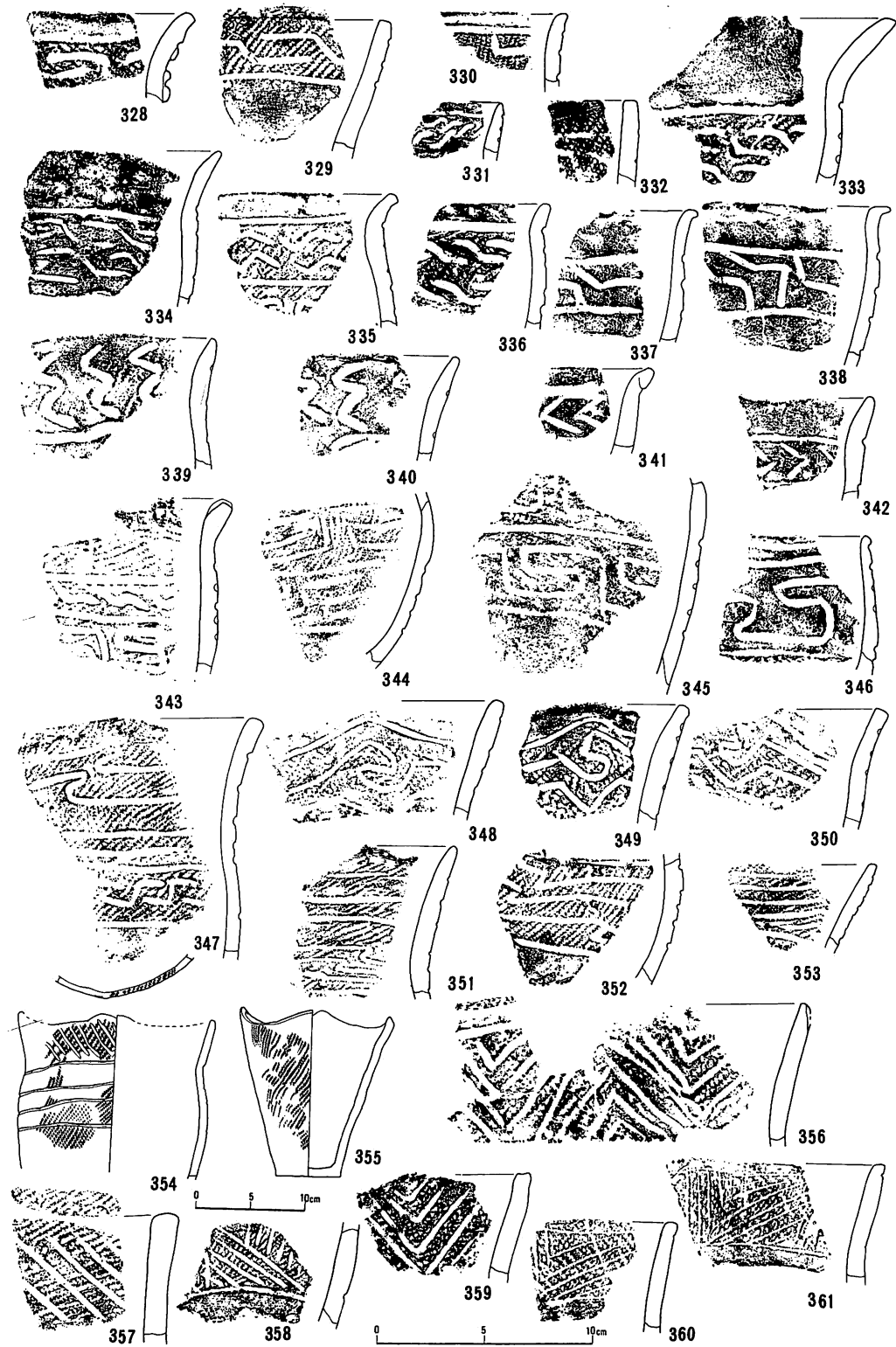


図 V-36 包含層出土の土器(14)

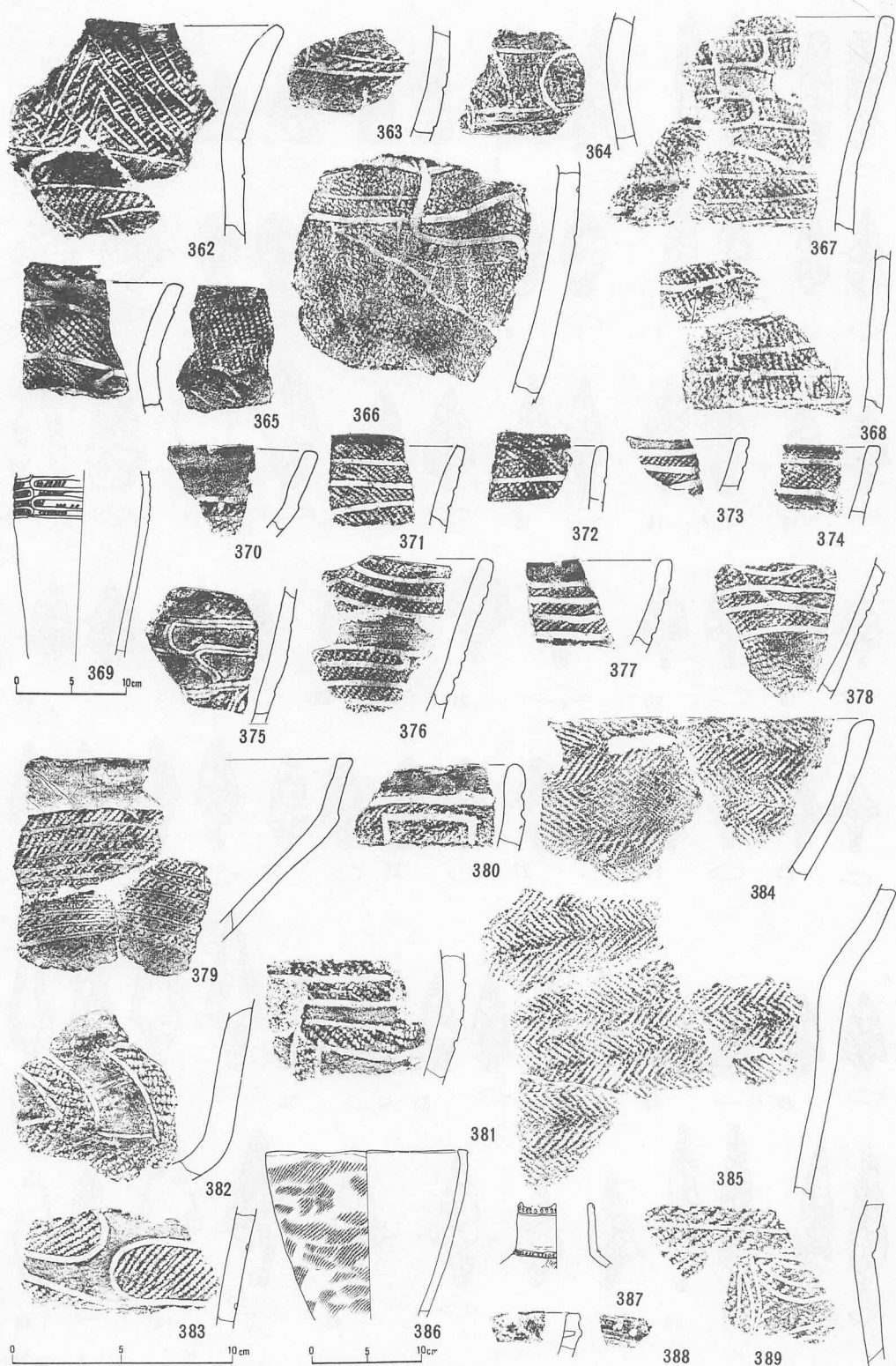


図 V-37 包含層出土の土器(15)

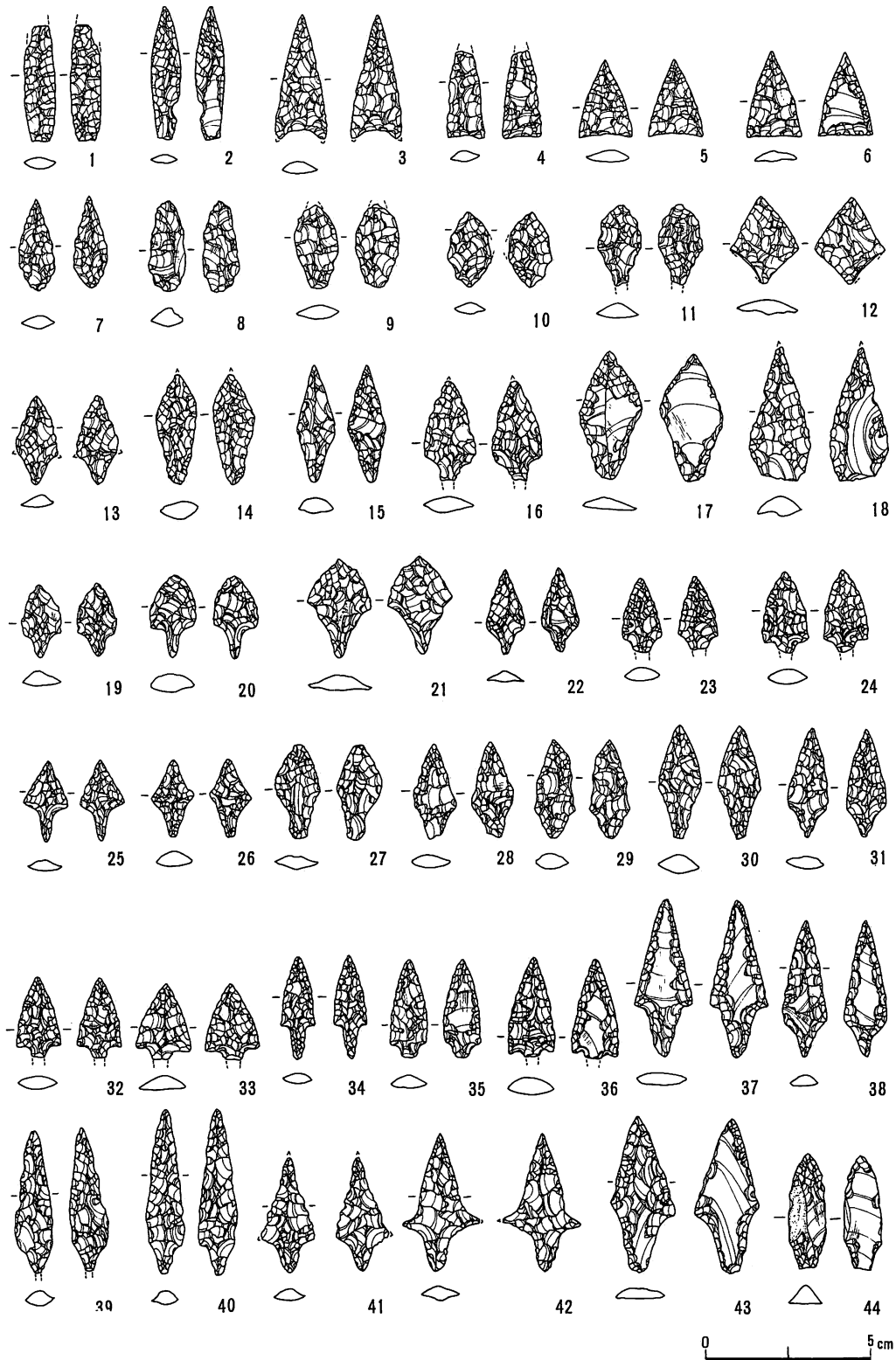
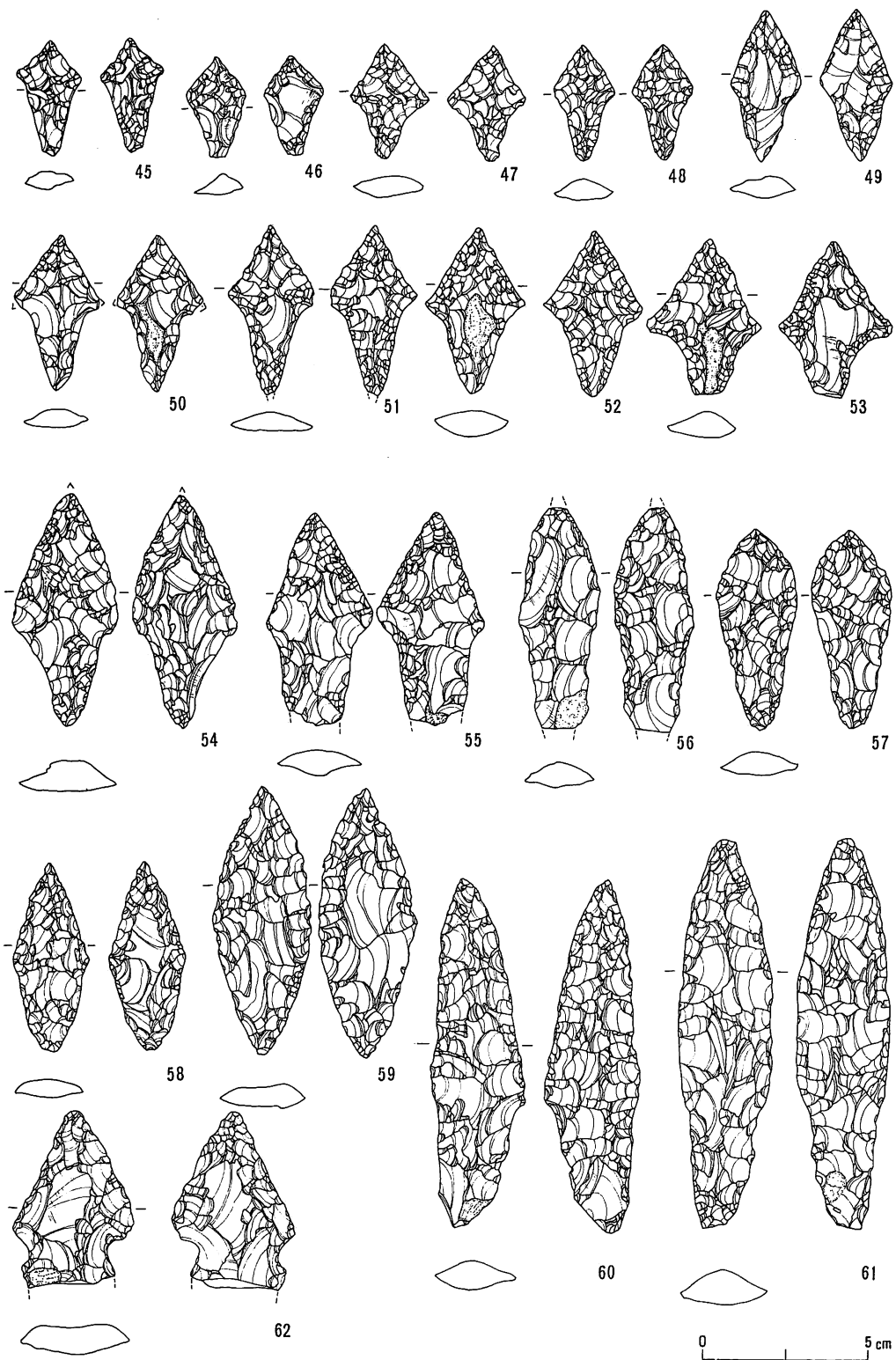


図 V-38 包含層出土の石器(1)



図V-39 包含層出土の石器(2)

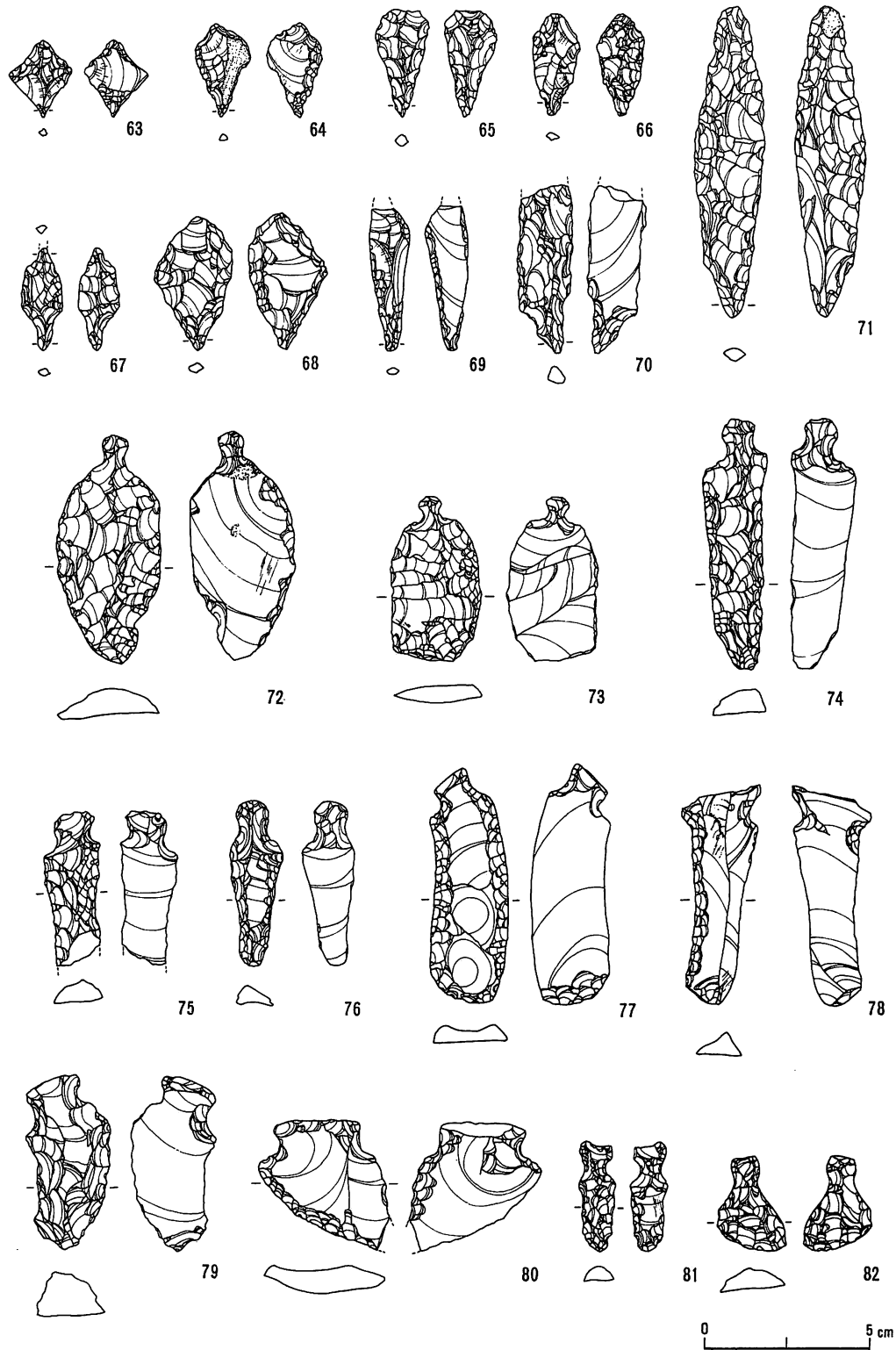


図 V-40 包含層出土の石器(3)

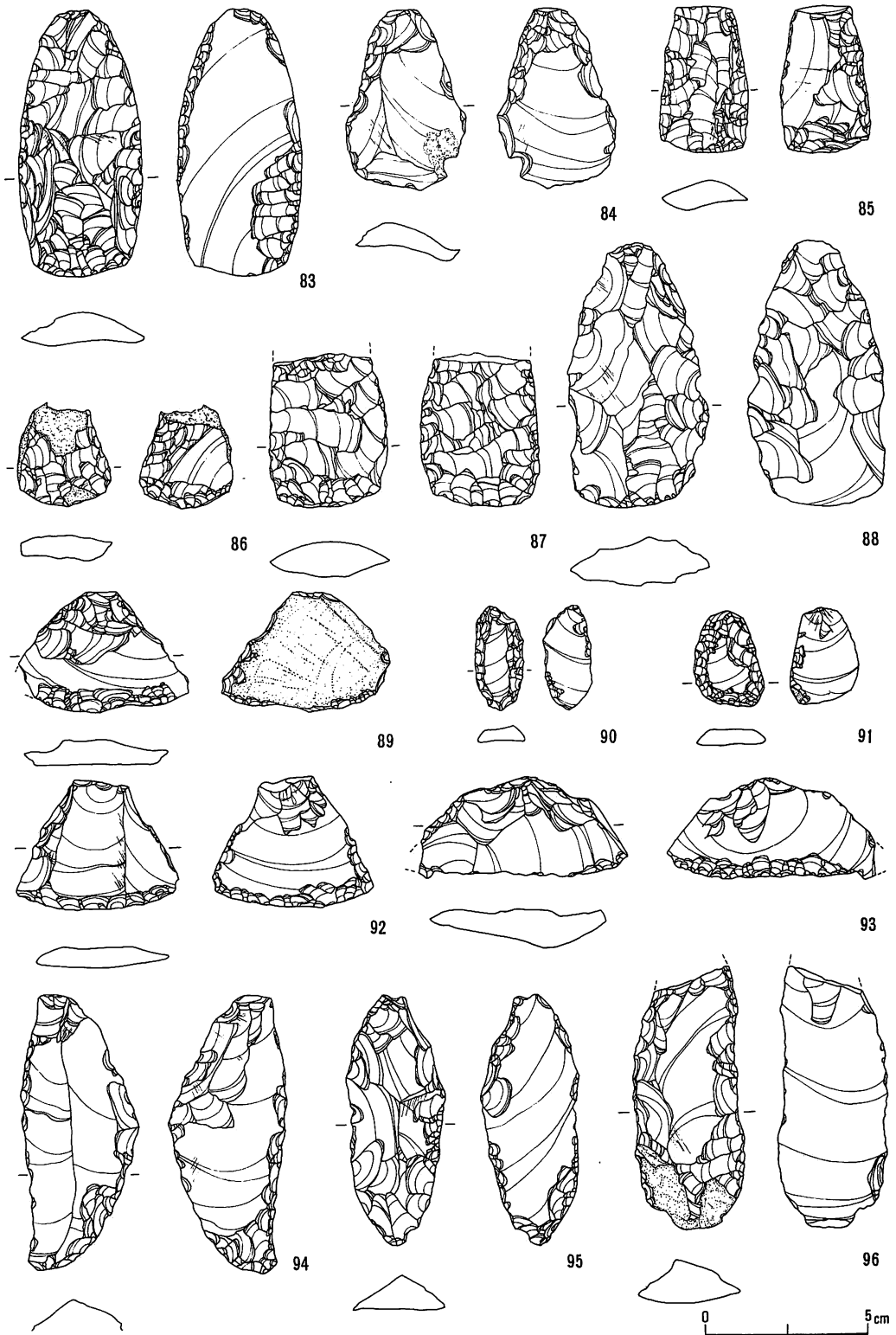


図 V-41 包含層出土の石器(4)

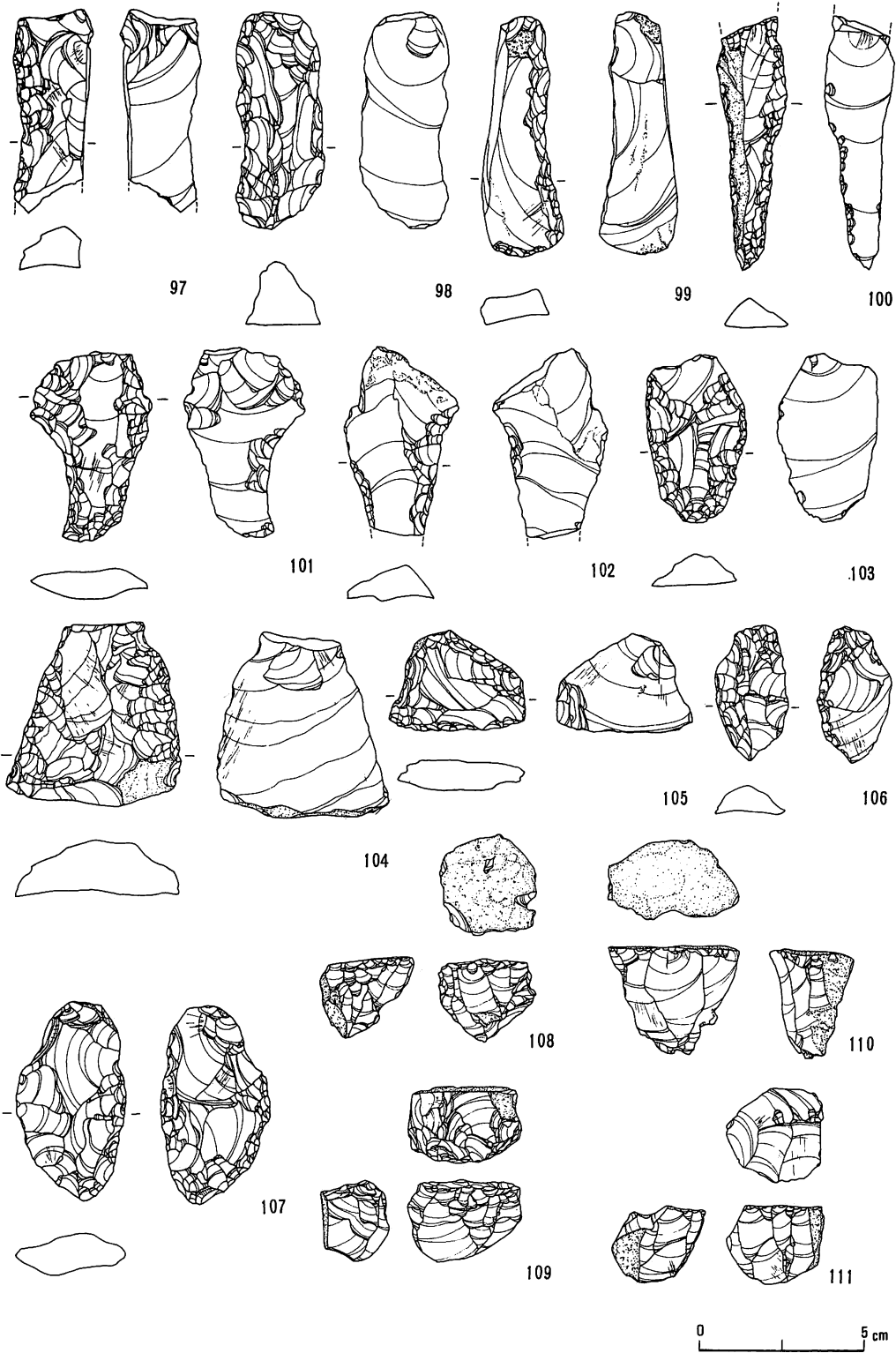


図 V-42 包含層出土の石器(5)

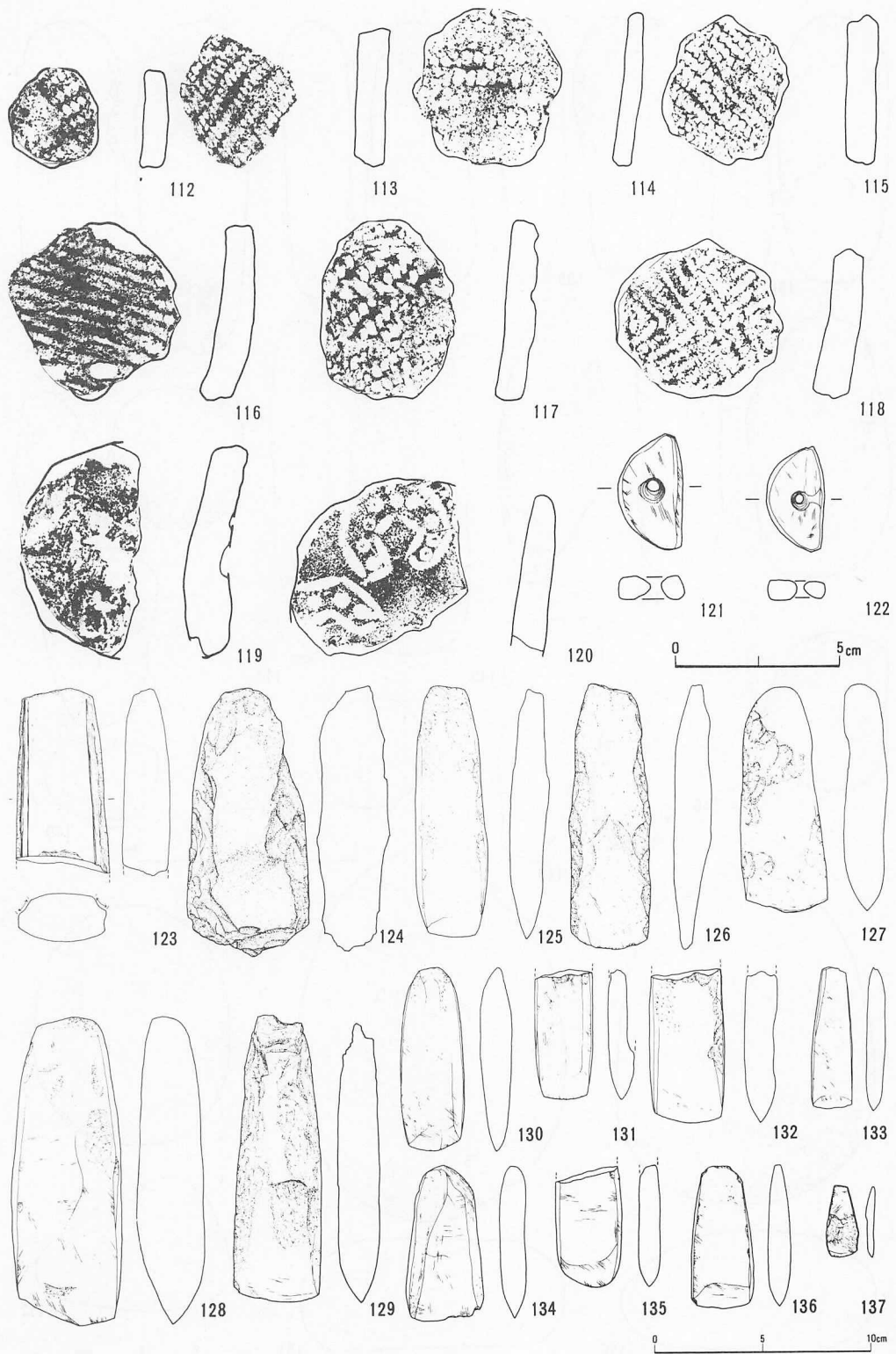


図 V - 43 包含層出土の石器(6)

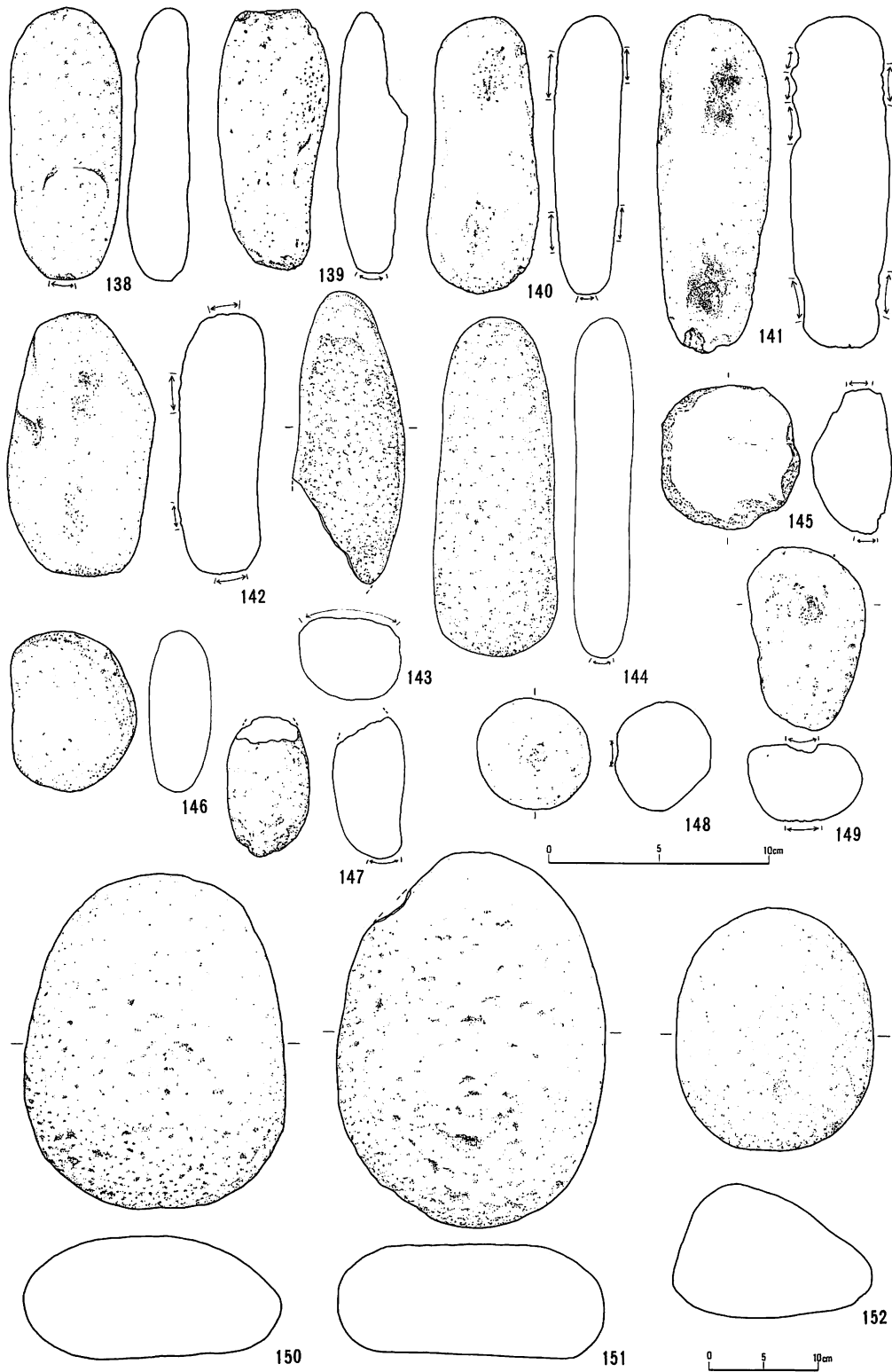


図 V-44 包含層出土の石器(7)

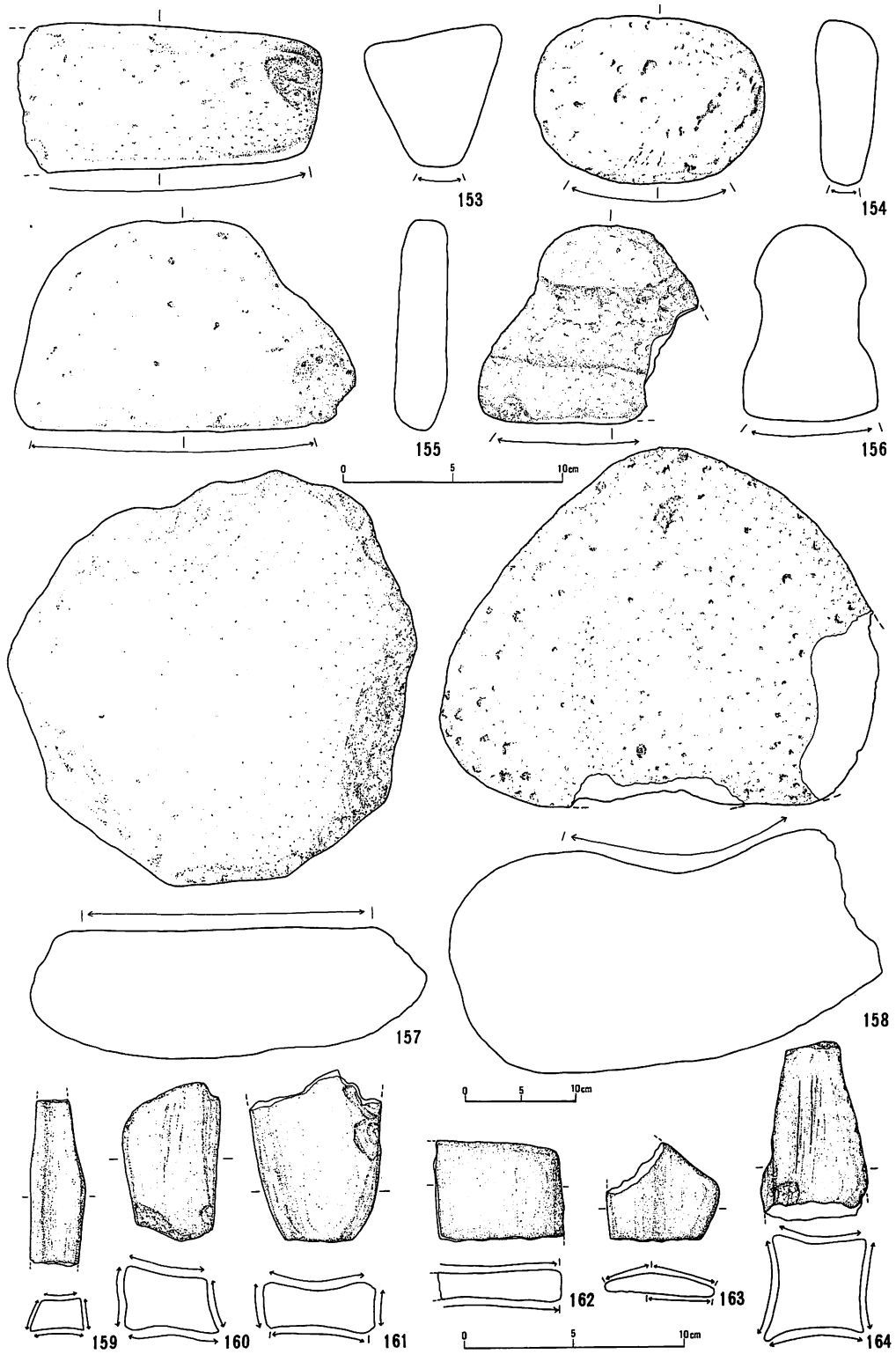


図 V-45 包含層出土の石器(8)

4 小 括

川上B遺跡C地区は、縄文時代早期、中期から後期の遺跡である。中期末葉から後期初頭の集落が主体を占める。住居跡は、発掘区南側、I-90からR-86にかけて縦走する埋没谷の左岸に集中して認められた。平面形は不明瞭なものが多いが、ほぼすべての住居跡に石組み炉が認められた。CH-2は、長径12m以上あり中期末の大形住居跡に属するものである。住居跡東側床面から登別市千歳4遺跡5号住居出土土器に類似する土器がまとまって出土した。また覆土から口縁部に貼付帯を1条もつ余市式と手稲砂山式がそれぞれ出土した。これらの土器は、わずかにレベル差をもち余市式が下位から出土しているが、明確な層位の違いとしてとらえることができなかった。CH-2出土の土器は、静狩式→余市式、手稲砂山式の流れが認められるが、CH-2床面出土の炭化材のC¹⁴年代は、 $3,040 \pm 100y \cdot B \cdot P \cdot (KUS-584)$ 。手稲砂山式土器の脇から出土した炭化材のC¹⁴年代は、 $3,530 \pm 20y \cdot B \cdot P \cdot (KUS-586)$ 。とほぼ同様な測定値が与えられ、これらはかなり接近した時期のものと思われる。

本地区出土の余市式土器は、口縁部に複数の横環する貼付帯をもつものと、口縁部に1条の貼付帯もしくは折り返し口縁のものに分けられる。前者は、器形は比較的大形のものに多く器厚は0.8cm前後で道央に見られる余市式に比べ薄手で。貼付帯は丸味を持つ平紐の形状を呈するものが多く、その間は、地文を磨消しているものが主体を占める。縦の貼付帯は、口唇内面へ折り返しが認められ突起状を呈している。後者は、比較的小形のものも多く、器厚は0.5cm前後で、貼付帯自体が薄くなり不明瞭なものに変化し、わずかに磨消帯だけを残すものもあった。口唇部に貼りつけによる山形突起が4ヶ所に認められ、この山形突起は、貼付帯自体の退化を示し、余市式土器の新旧関係を表わすものと思われる。本地区出土土器を見る限り、余市式土器群の特徴的文様要素であるタガ状の貼付帯は、複帯から単帯へ移行するものと思われる。しかし、貼付帯の単帯化、山形突起の発生が、器形の大小の違いによる簡略化という可能性も否定できない。今後の調査において検討されてゆかなければならない。

石器は、有茎の粗雑な作りの石鏃と丸い扁平な礫を用いた石皿、台石の出土例が多い。有舌尖頭器と思われるものが1点出土している。

今回の調査によって確認された住居址の中には、発掘調査区の境界線上に位置するものもあり、まだ住居跡群が斜面上部（未調査区）に拡大する様相を示している。そして遺物出土分布においても同様な傾向が認められている。したがって現段階で遺跡全体の復元は困難であり、今後の調査結果を待って、縄文時代中期末葉から後期初頭の集落復元をすすめてゆかなければならない。



1. 発掘調査前遠景

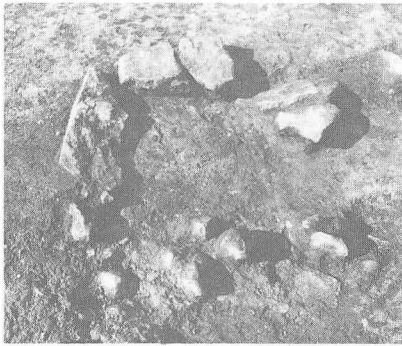


2. 発掘終了後全景

図版V-2



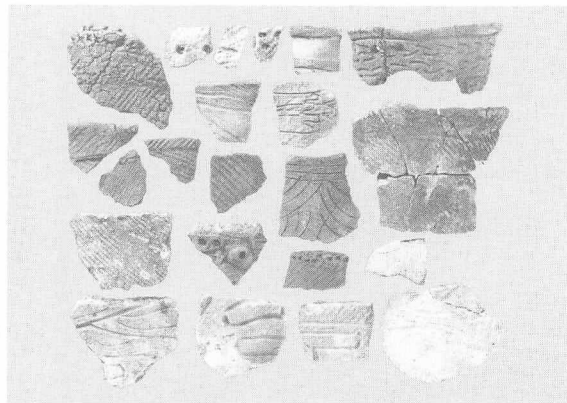
1. CH-1・4



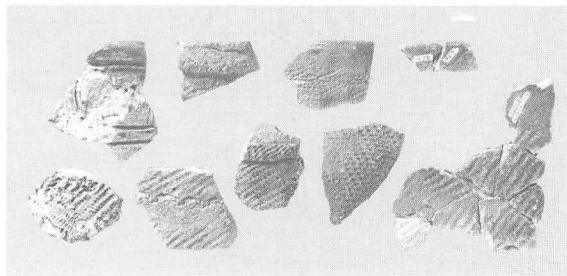
2. CH-4 (石組み炉)



3. CH-4 (石組み炉)



4. CH-1 土器



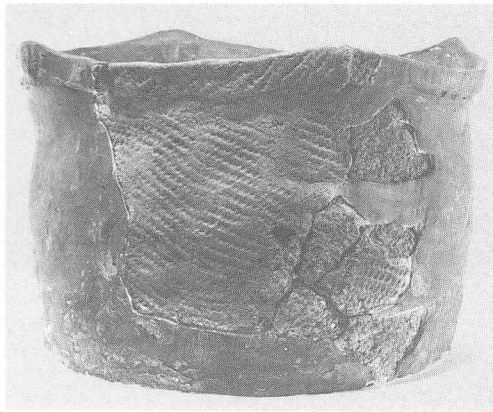
5. CH-4 土器



1. CH-1 土器



2. CH-4 土器



3. CH-4 土器



4. CH-4 土器



5. CH-2 発掘風景

図版V-4



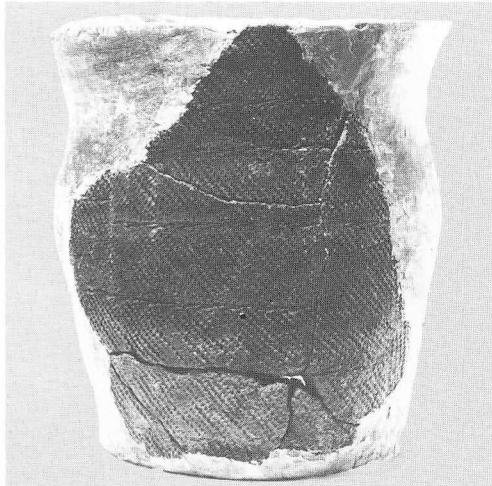
1. CH-2 完掘



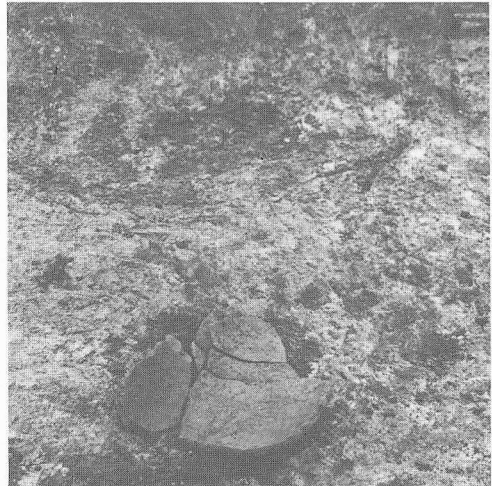
2. CH-2 表土除去の段階



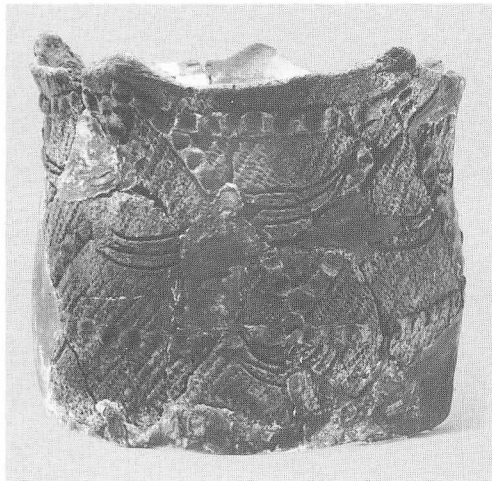
3. CH-2 石組み炉 (S-1. 2)



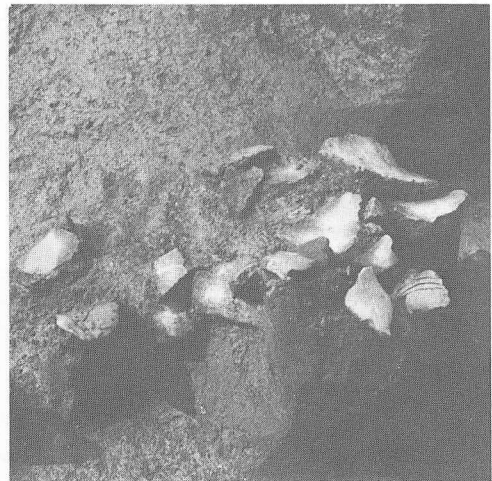
1. CH-2 床面出土土器



2. 同左出土状況



3. CH-2 出土土器



4. 同左出土状況



5. CH-2 出土土器



6. 同左出土状況

図版V-6



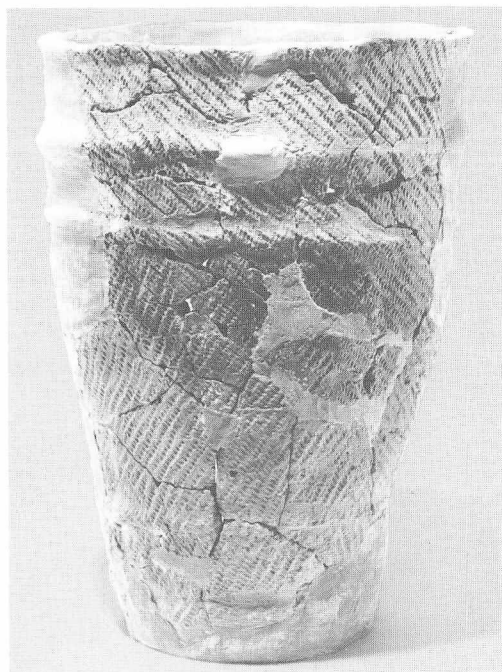
1. CH-3



2. CH-5



1. CH-6・11



2. CH-11 床面出土土器



3. CH-6 床面出土土器

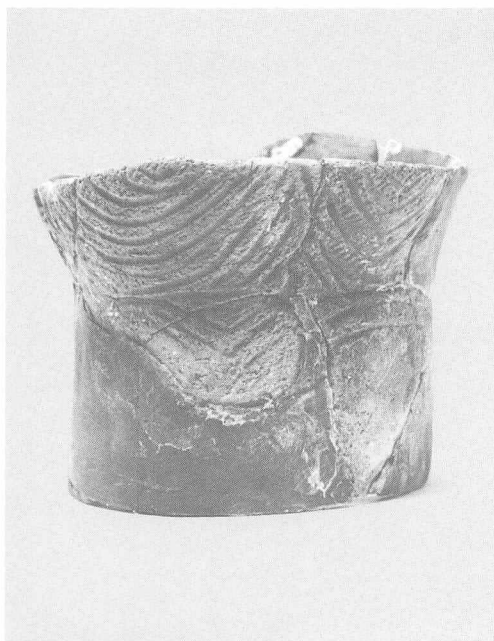
図版V-8



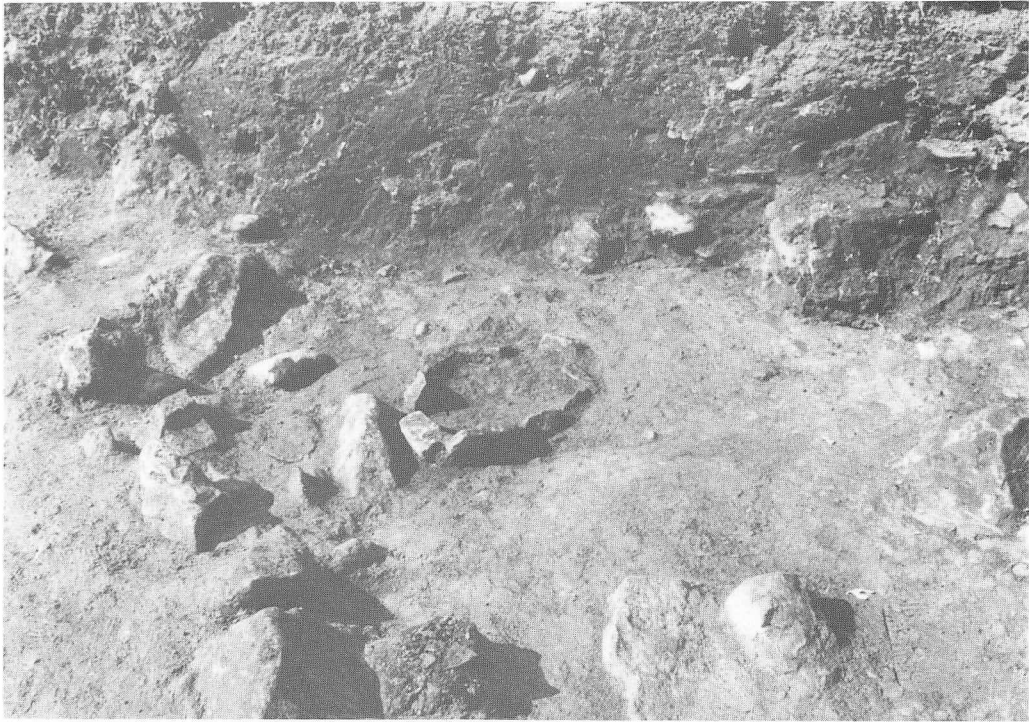
1. CH-7



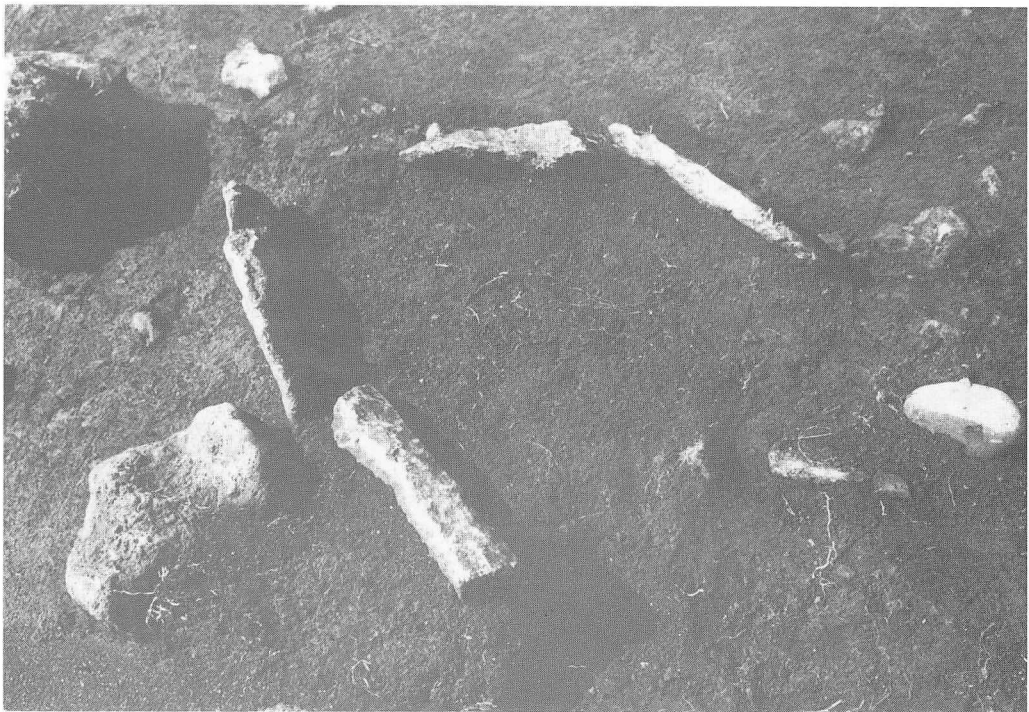
2. CH-7 石組み炉



3. CH-7 出土土器



1. CH-8



2. CH-9

図版V-10



1. CH-10



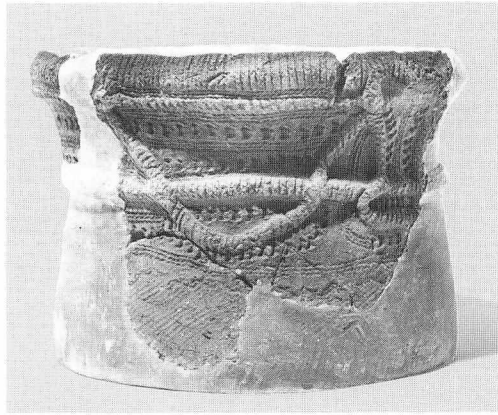
2. Y-1



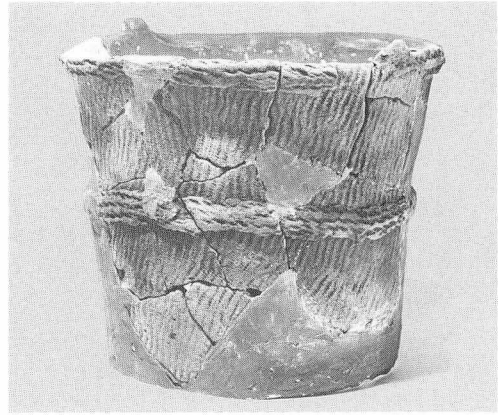
1.



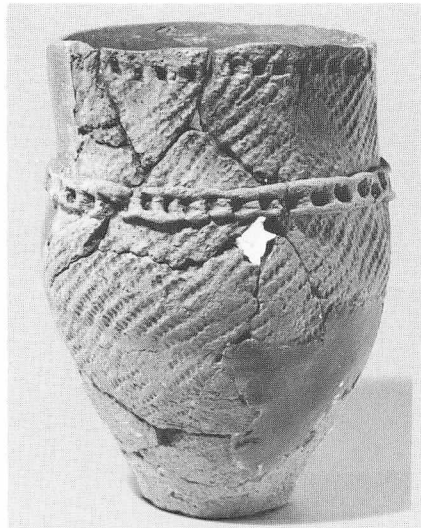
2.



3.



4.



5.

包含層出土の土器(1)

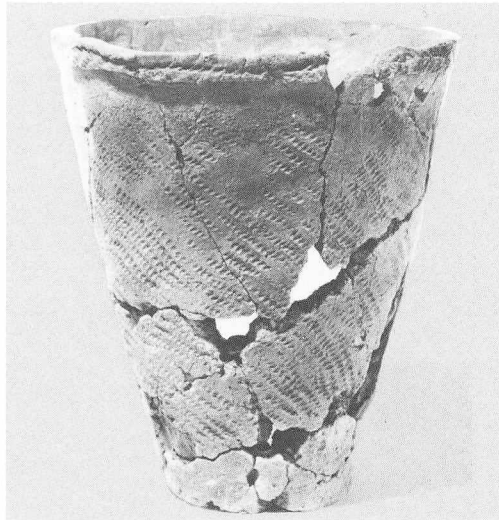


6.

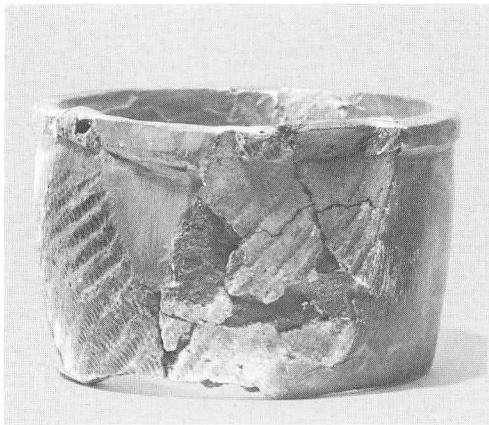
図版V-12



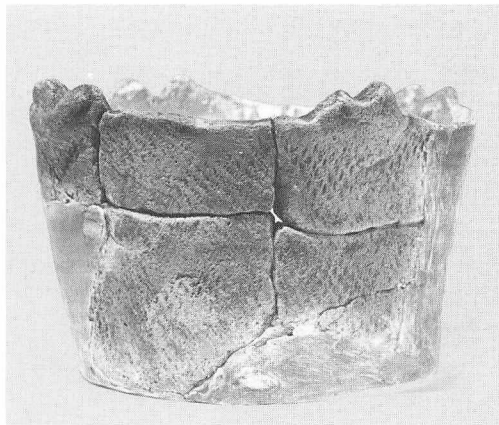
1.



2.



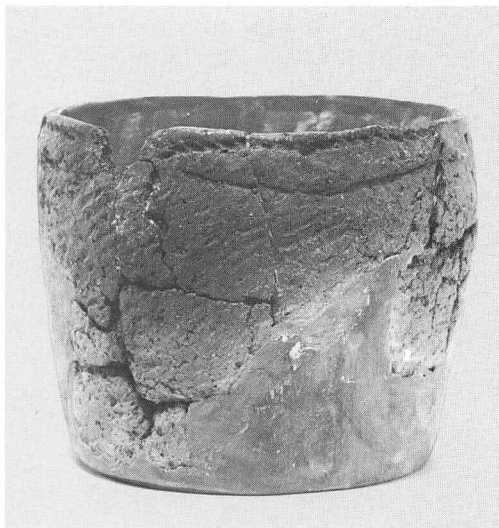
3.



4.

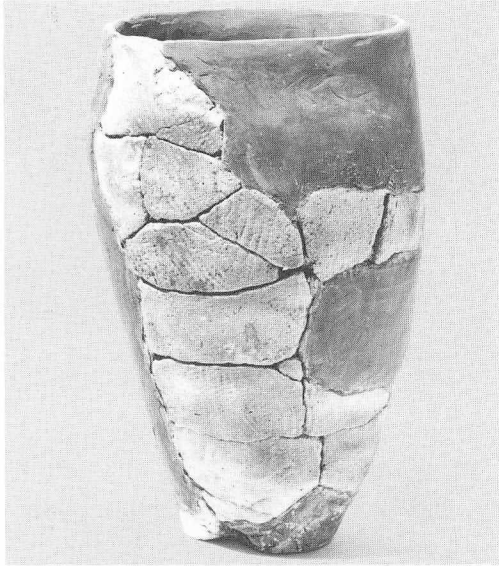


5.

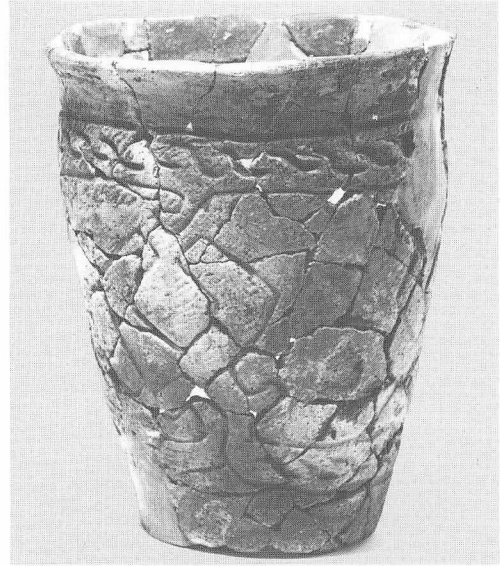


6.

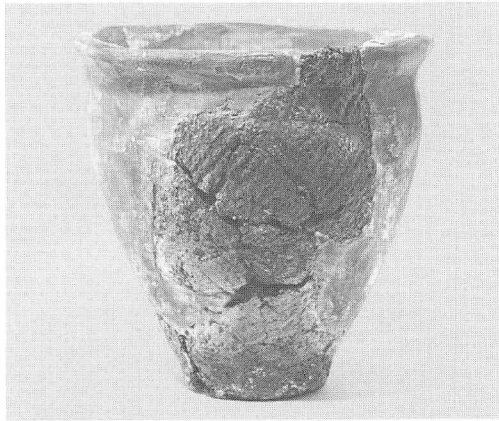
包含層出土の土器(2)



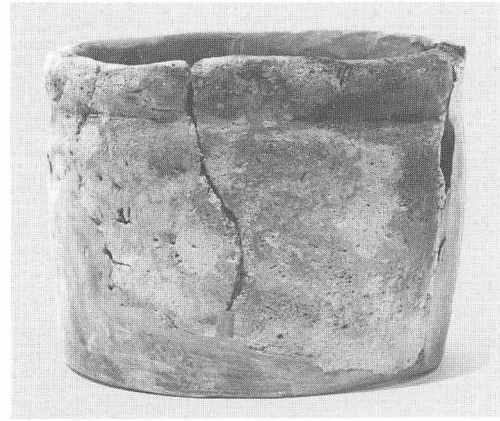
1.



2.



3.

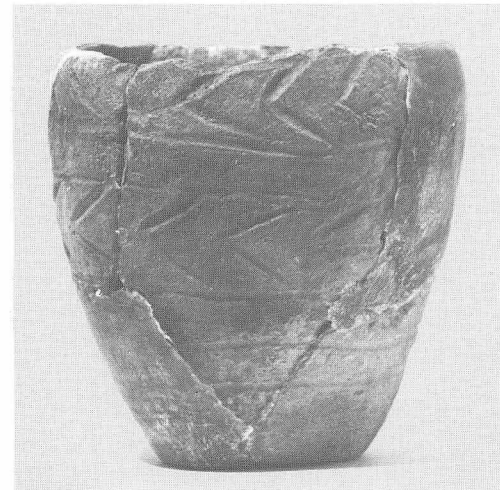


4.



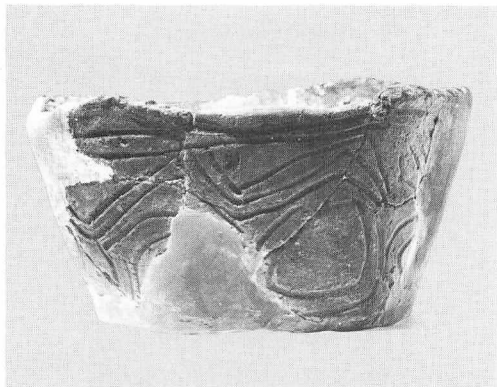
包含層出土の土器(3)

5.



6.

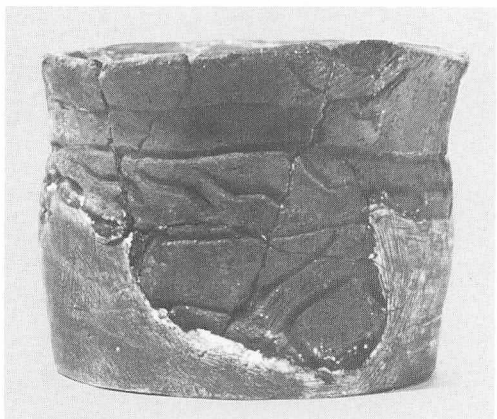
図版V-14



1.



2.



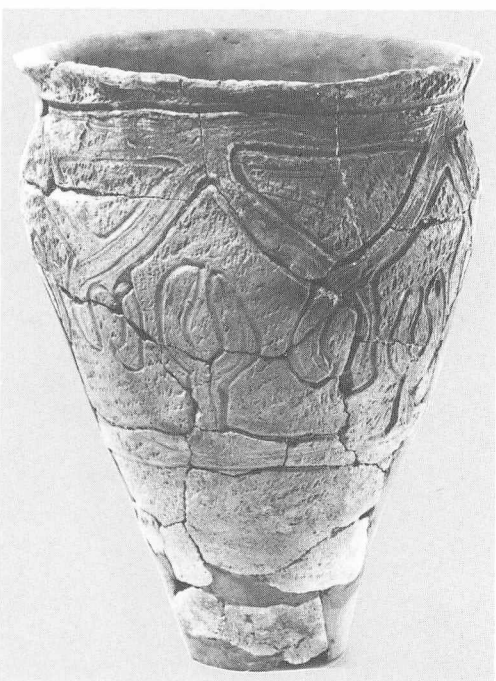
3.



4.



5.

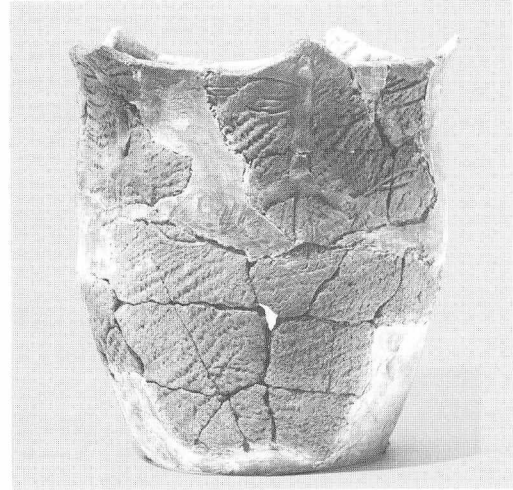


6.

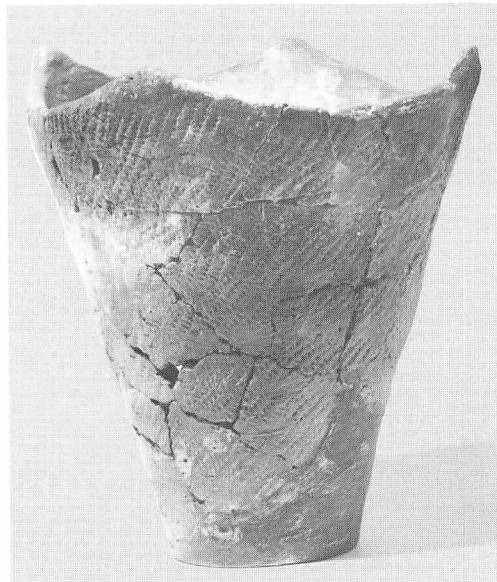
包含層出土の土器(4)



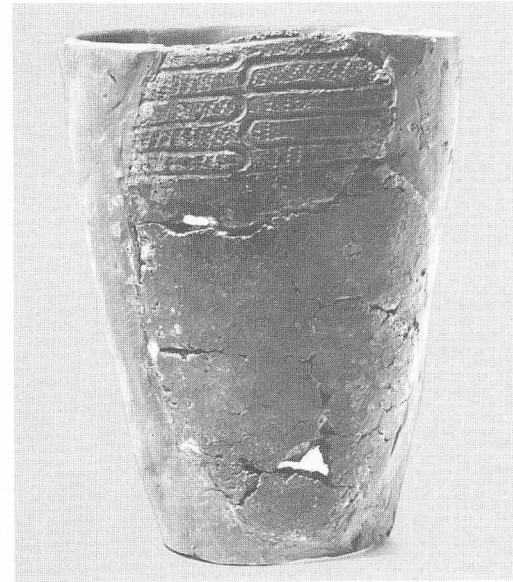
1.



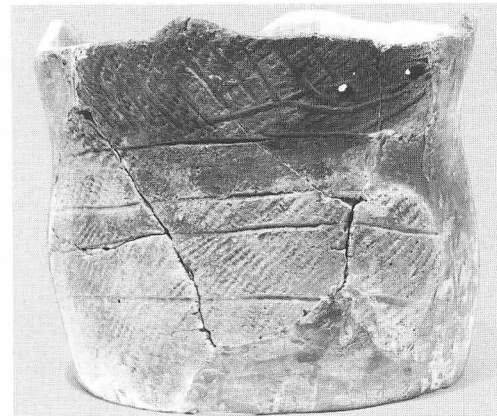
2.



3.



4.



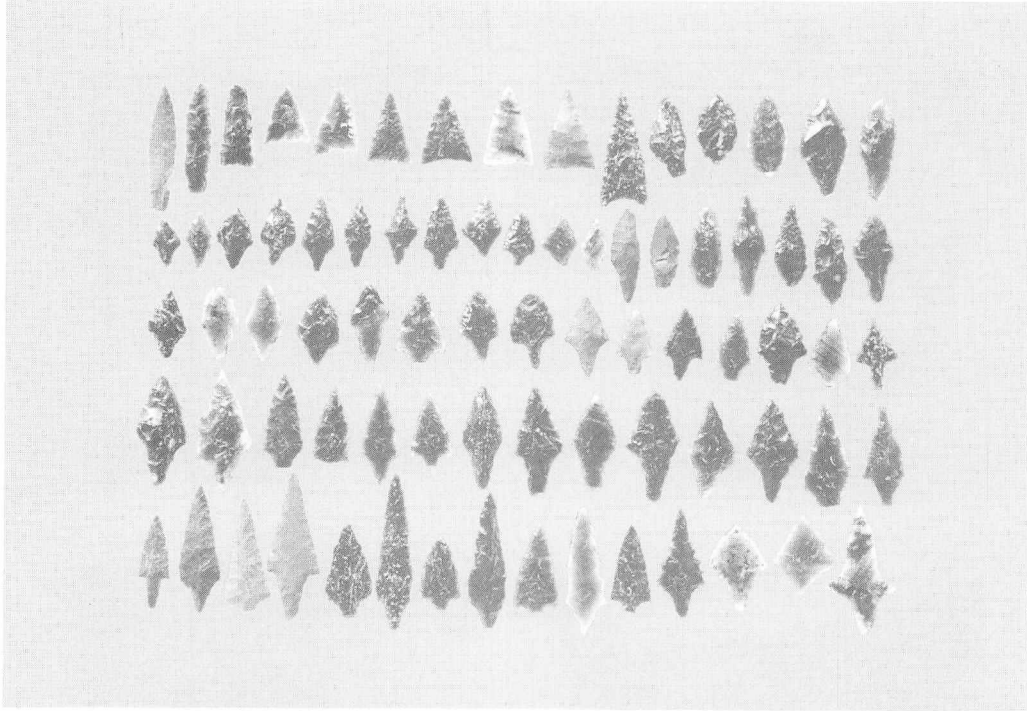
包含層出土の土器(5)

5.

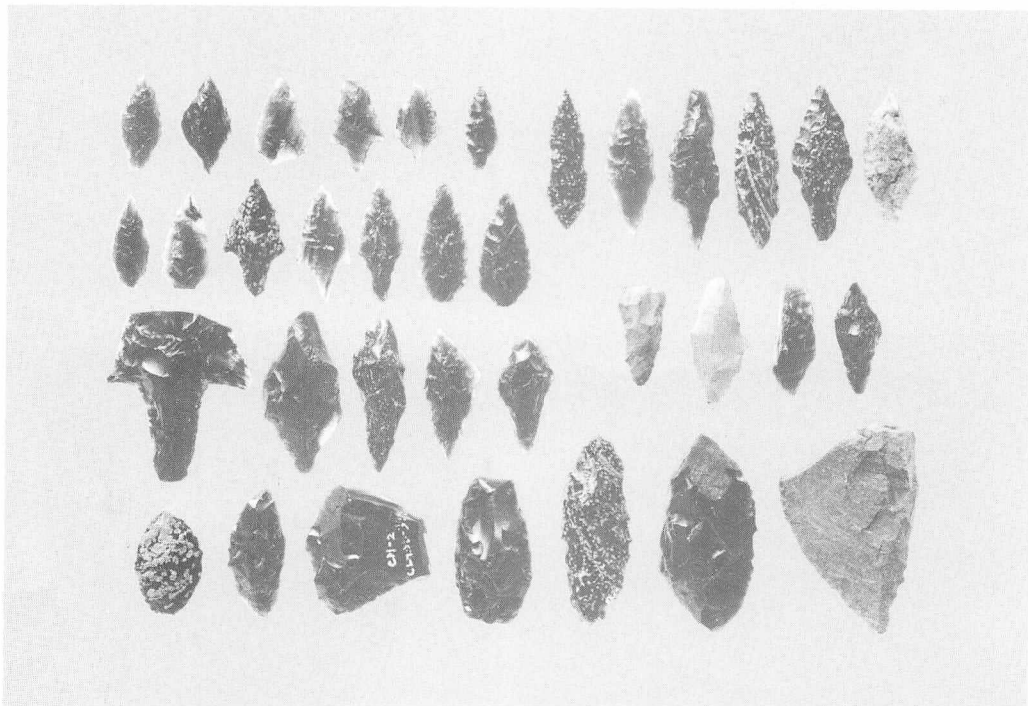


6.

図版V-16



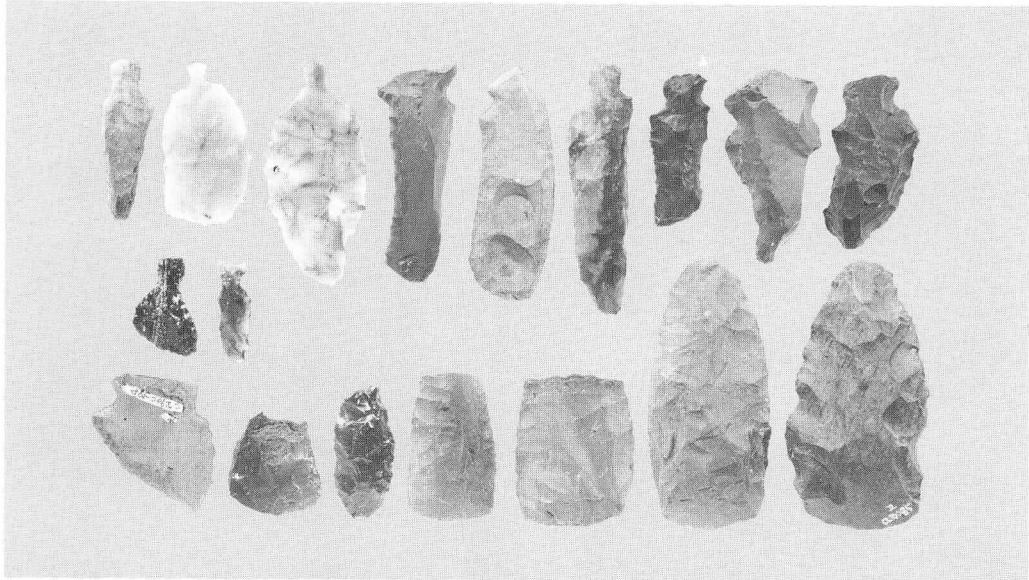
1.



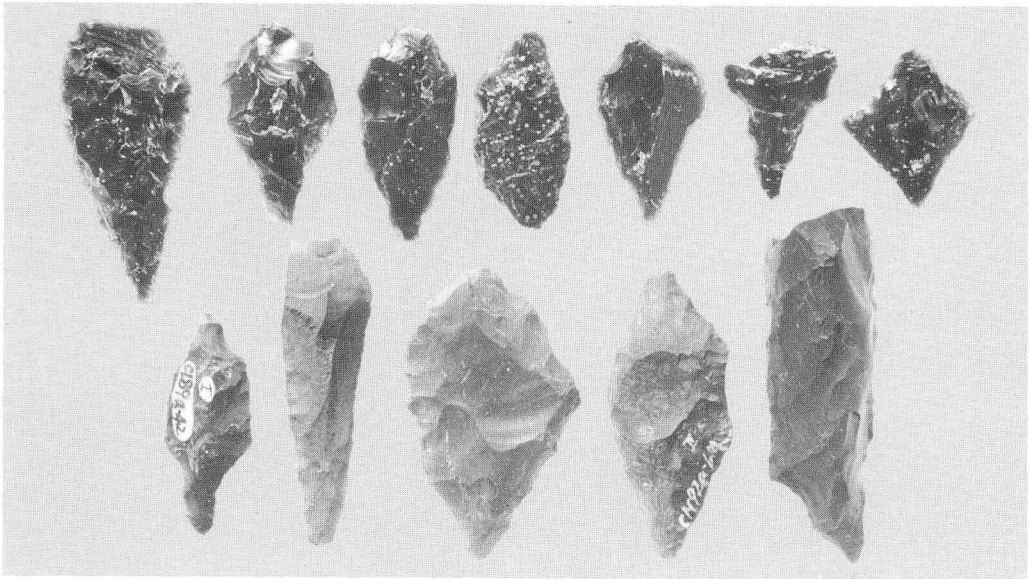
包含層出土の石器(1)

2.

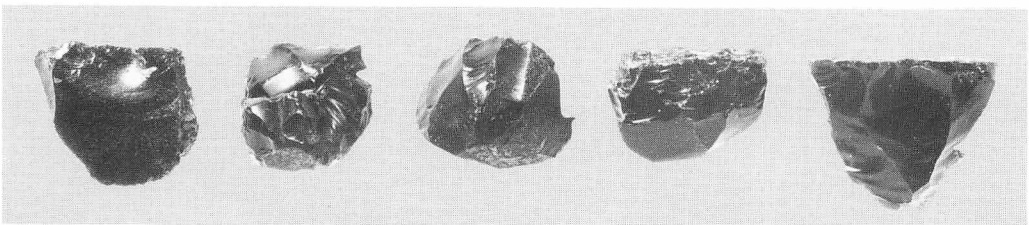
図版V-17



1.



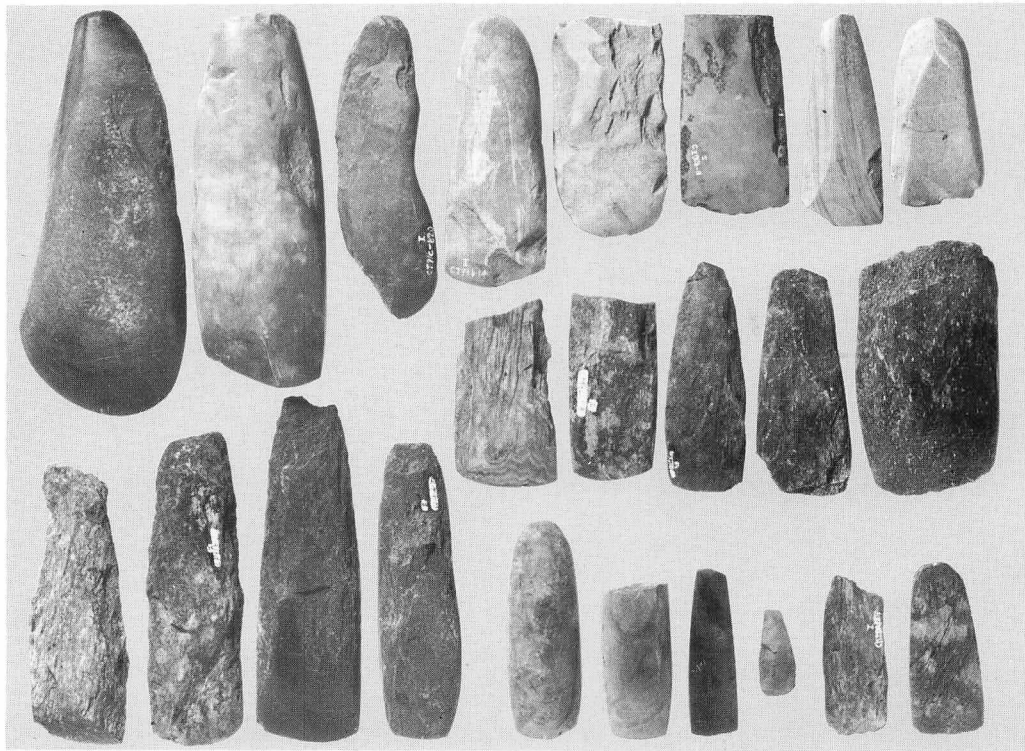
2.



包含層出土の石器(2)

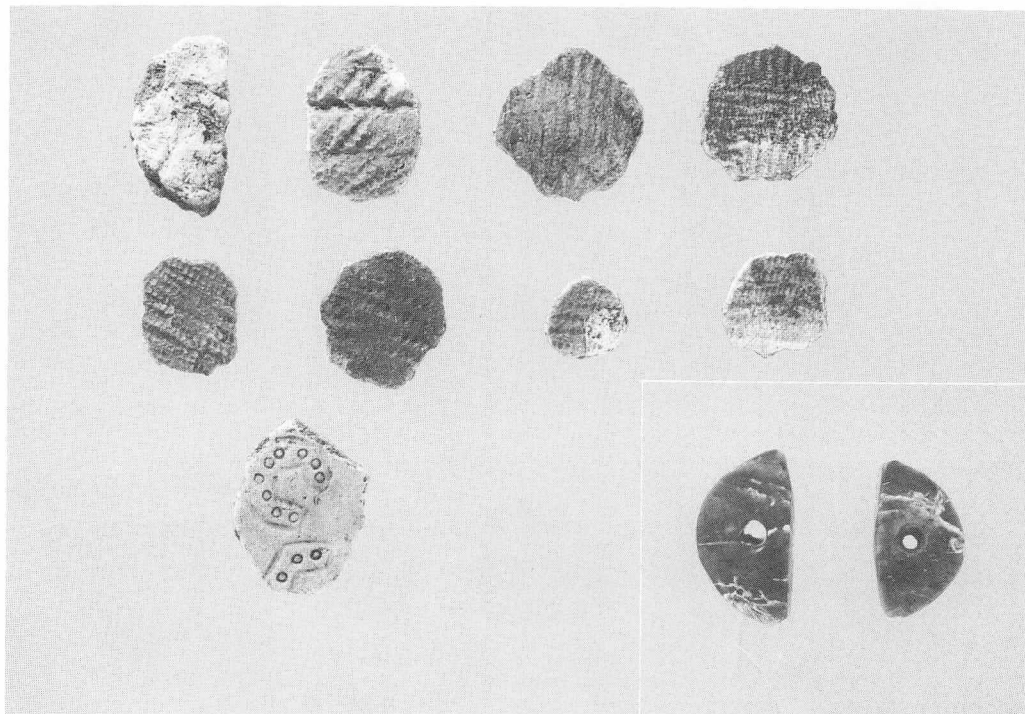
3.

図版V-18



包含層出土の石器(3)

1.



包含層出土の土製品・垂飾

2・3

VI D地区の調査

1. 概要

D地区は、ヤンケシ川本流と第2支流にはさまれた標高9~14mの地域である。後背地は、C地区、B地区に連なる。発掘区のほぼ中央をC地区から下りる古い沢が通り、南・北二地区に分けられる。低位に位置するため、常に水が湧出し、25%調査時にはすぐ水びたしになるグリッドが多かった。標高の高い西部は礫層砂利層が堆積し、東部は礫と粘土質の土層が堆積している。遺物包含層は礫の多く混入した褐色土が中心で、遺構等のくぼみに堆積した黄褐色シルト質降下軽石層より下層に、縄文時代早期後半~前期、上層に前~中期の土器、石器等が発見されている。遺物点数は総計21,745点である。遺構は沢北側に住居跡7、性格不明のピット7、沢南側に住居跡2が、各々集中して分布している。いずれの遺構もIV層中に床面・底を掘り込む縄文早期後半のもので、土器分類ではI b-1類~I b-3類の時期である。前述の降下軽石層のレンズ状堆積が住居跡発見のメルクマールとなったが、水や礫の影響で床、壁は

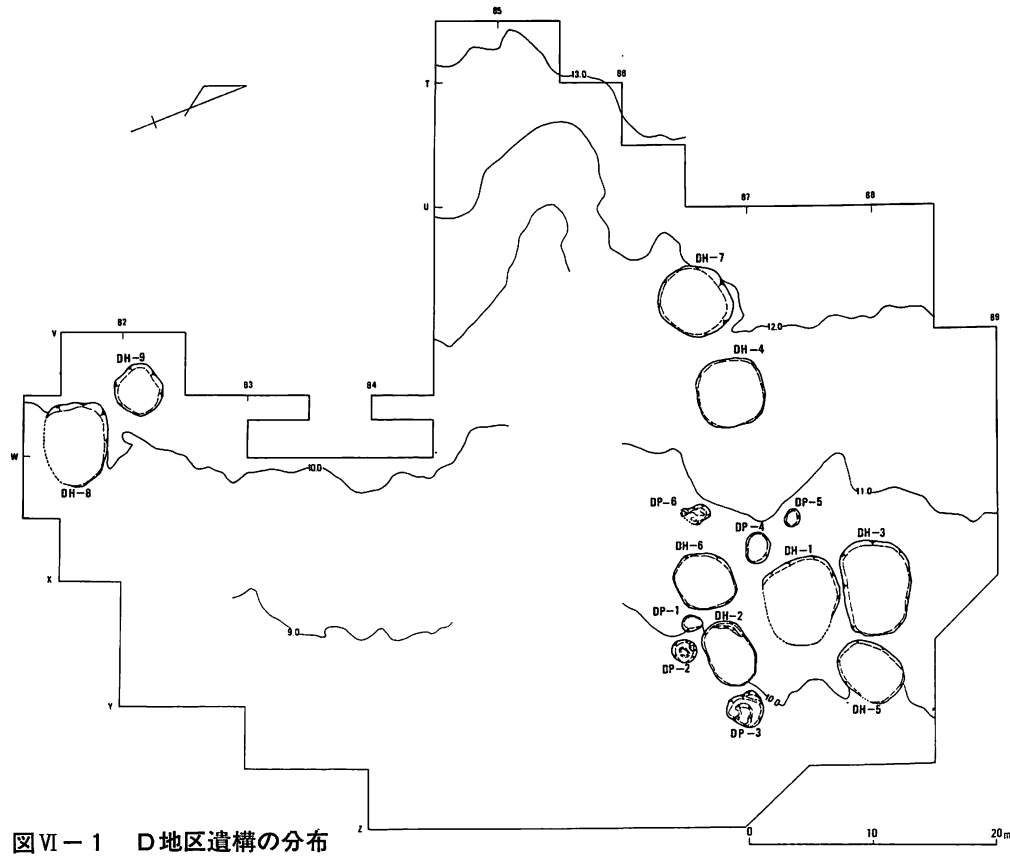
名称	分類	数量	名称	分類	数量	名称	分類	数量
土器	I a	12	やり先又はナイフ	I B 2	3	たたき石	V A 1	1
"	I b-1	1,464	"	8	1	"	2	14
"	-2	1,352	石錐類	II A 1	5	"	3	2
"	-3	2,673	"	3	1	"	9	5
"	-4	77	"	9	4	すり石	VI A 1	29
"	I b-	15	つまみ付きナイフ	III A 1	18	"	2	11
"	II a-1	9	"	2	3	"	8	2
"	II a-	83	"	3	1	"	9	1
"	III a	258	"	4	1	石皿	VI B 1	9
"	III b-3	2	"	5	5	"	9	2
"	IV a	4	"	8	5	砥石	2	2
"	不明	43	"	9	1	"	9	3
土器計		5,992	スクレイパー	III B 1	9	コア	IX A	14
石	I A 2 a	13	"	2	2	フレイク・チップ	IX B	15,000
"	b	3	"	3	1	U. フレイク	X A	27
"	c	2	"	8	2	加工痕礫	X B	4
"	2-	1	"	9	18	礫・礫片		95
"	3	4	石斧	IV A 1	1	土製円盤		11
"	4	2	"	5	1	珠状耳飾		1
"	5	2	"	8	5	石器等計		15,353
"	8	3	石のみ	IV B 1	2	総計		21,345
やり先又はナイフ	I B 1	1						

表VI-1 D地区出土遺物一覧表

かなり乱されており、遺物も磨滅が著しい。また、遺物の移動もはげしく、40mほど離れた位置で住居内の土器が接合する例もある。包含層出土遺物も遺構の時期に一致するI b-1類～I b-3類のものが全体の90%以上を占める。中心部を流れる古い沢のC地区側ではIII a類の土器（サイベ沢V・VI式土器相当）が出土している。他にマイクロコアと推定される石器や、半欠の珧状耳飾が発見された。この2点については章を改めて説明する。

周辺は旧地主の家屋や家畜小屋、牧草地のあったところで、陶器片や鉄製農具、馬具等近・現代の製品が、出土する。沢南側の西側は、家屋のあったところで、それに関連し大小各1個の木箱が出土しており、中には日常生活品や廃物が入っていた。近・現代遺構等は章を改めて説明する。

水と礫に終始悩まされながらの調査であったことを特に付記しておく。



図VI-1 D地区遺構の分布

2. 遺構とその遺物

DH-1

位置 W-87-b・c、X-87-a・b・c・d

規模 7.36×6.39×0.47

特徴 平面形は、長軸を北西に向けた不整の卵形。Ⅳ層を掘り込んでつくられた床面は固くしまり、北半部には角礫が多い。P-1は壁際にあり貯蔵穴の可能性はある。P-4・5のような柱穴とおぼしきピットもみられる。壁面は南から東にかけて崩壊しており、残存面も概してしまりが無い。炉跡は床面のほぼ中央・南北に長く広範囲にある。レンガ色の固くしまった焼土が中間層にある。住居跡覆土にはセクション図の斜線で示したように、降下軽石がレンズ状に堆積している。

なお、当住居の上げ土がDH-3に入り込んでいるように観察できる。DH-3が廃棄された後に、構築されたものと考えられる。

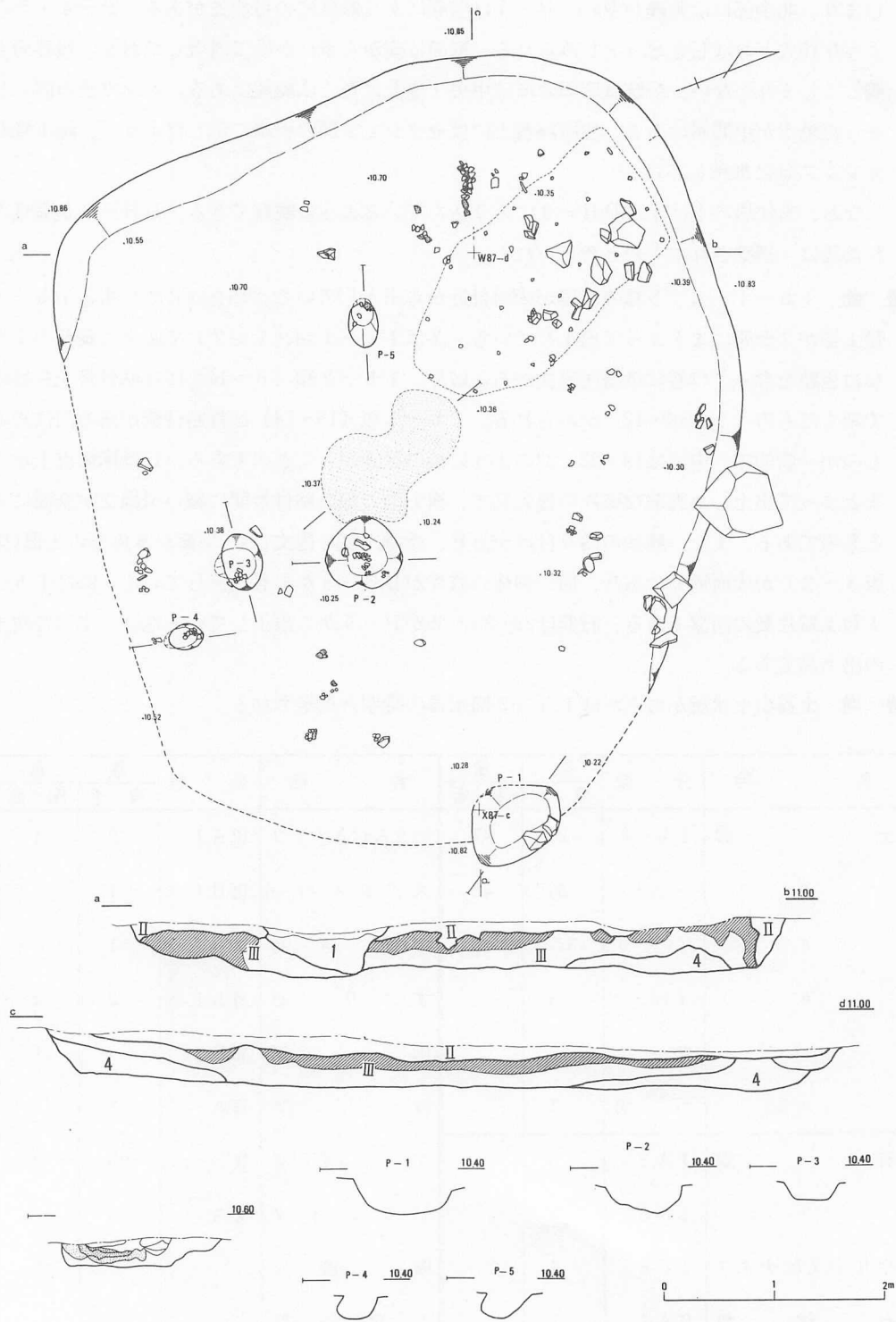
遺物 I b-1、2、3類の土器が床面付近から出土している。15をはじめとするI b-3類土器が2ヶ所にまとまって出土している。3はI b-1類(1~7)で胎土に長石のような白色粒を含み、口唇に撚紐圧痕文がある破片。I b-2類(8~14)には貼付帯上を撚紐で刻んだもの(9・10・12)がみられる。I b-3類(15~24)は細貼付帯が横方向に走るものが一般的で、中には19・22・23のように縦の区画が入るものもある。15は床面直上からまとまって出土した脆弱な破片の復元品で、横方向の細い貼付帯間に細い斜縄文が全面に入るものである。また、鱗状の貼り付けがあり、撚紐圧痕を施文した、平面が多角形の土器(図版3-2)が床面近くにあり、同一個体の破片がDH-3からも出土している。25はI b-1類土器片製の円盤である。石器は29・33・36がP-5から出土している他は、すべて覆土の出土品である。

時期 土器出土状況からみればI b-3類土器の時期と推定される。

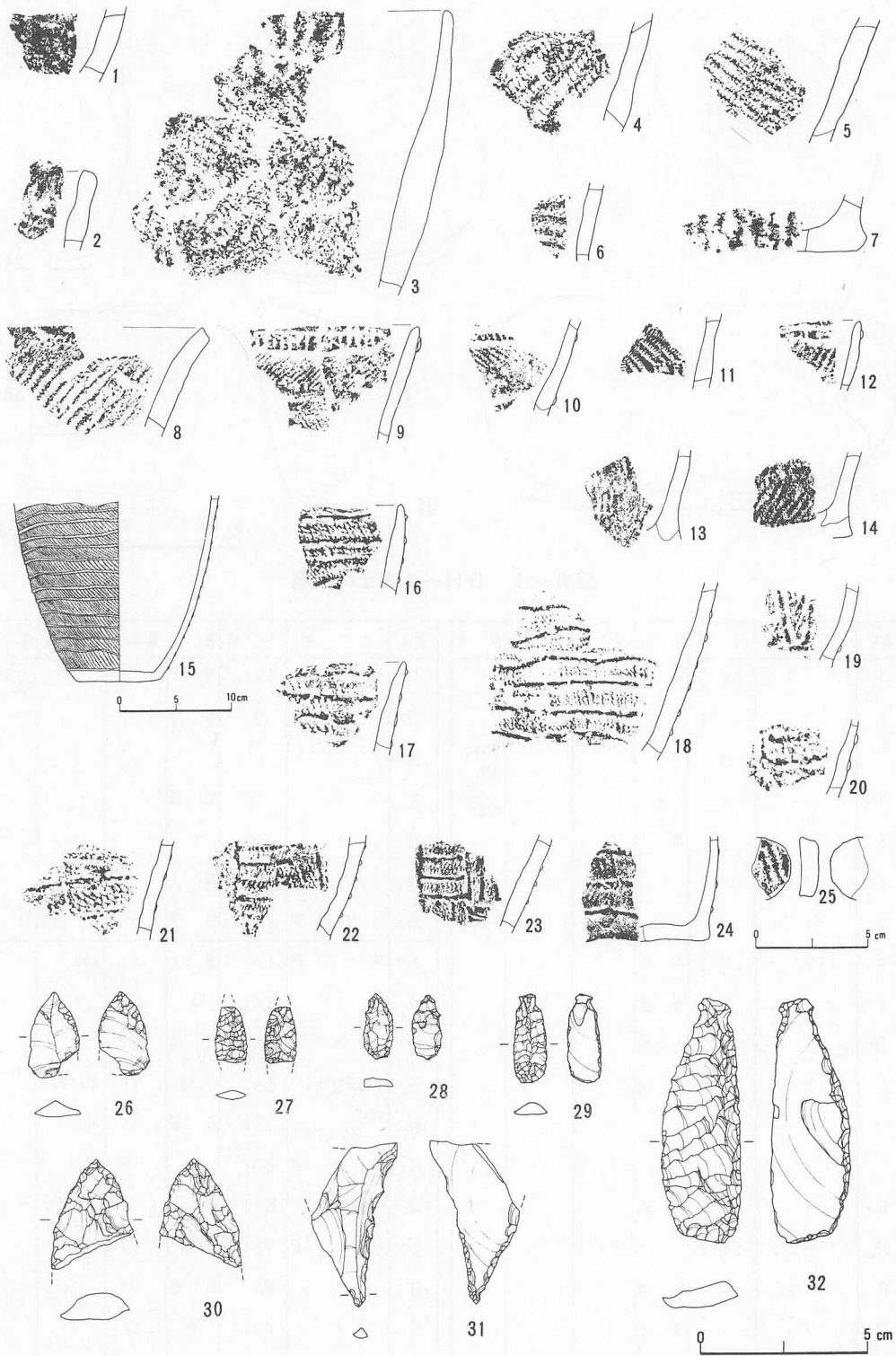
名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面			覆 土	床 面
土 器	I b-1	23	47	つまみ付きナイフ	ⅢA1	2	1
〃	-2	86	45	スクレイパー	ⅢB1	1	
〃	-3	527	12	たたき石	V A 2	1	
〃	I b-	3		すり石	ⅥA1	2	2
〃	Ⅳa	1		砥石	ⅦB2		1
〃	不明	1		コア	ⅨA	3	
石 鏃	I A 2 a	3		フレイク	ⅨB	25	9
〃	I A 8	2		Uフレイク	X A	3	
やり先又はナイフ	I B 8	1		礫・礫片			1
石 錐 類	ⅡA1	1		土製円盤		1	

表VI-2 DH-1出土遺物一覧表

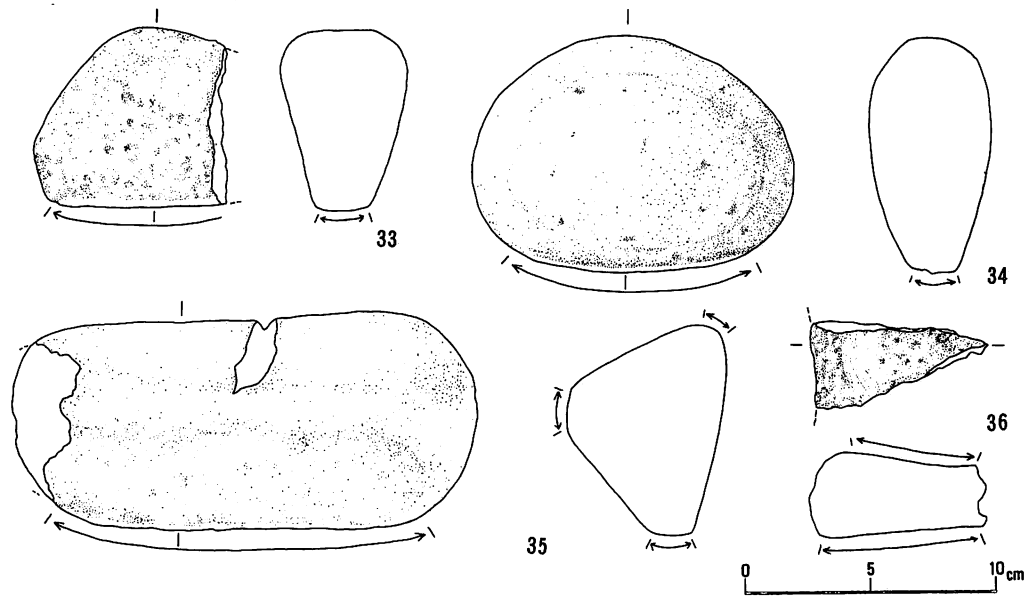
(計 804点)



図VI-2 DH-1



図VI-3 DH-1出土の遺物



図VI-4 DH-1出土の石器

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	Ia	覆土				19	土器	Ib-3	覆土			24と同一個体
2	"	Ib-1	"				20	"	"	III層			
3	"	"	"			4と同一個体	21	"	"	"			
4	"	"	床			3と同一個体	22	"	"	II層			
5	"	"	覆土				23	"	"	"			
6	"	"	"				24	"	"	覆土			
7	"	"	床				25	土製円盤	Ib-1	III層			
8	"	Ib-2	床直				26	石鉄	IA	覆土	2.0	Obs.	
9	"	"	覆土				27	"	IA2a	"	0.5	"	
10	"	"	不明				28	"	IA9	II層	0.5	"	
11	"	"	覆土				29	つまみ付きナイフ	IIIA1	Pit.覆土	0.8	Ha-Sh.	
12	"	"	"				30	やり先 またはナイフ	IB8	II層	6	Obs.	
13	"	"	"				31	石錐類	IIA1	"	9	Sh.	
14	"	"	床直				32	つまみ付きナイフ	IIIA1	覆土	12	Ha-Sh.	
15	"	Ib-3	"				33	すり石	VI A1	Pit.覆土	400	And.	
16	"	"	III層				34	"	VI A	III層	706	"	
17	"	"	覆土				35	"	VI A1	床	1,480	"	
18	"	"	"				36	砥石	VIB2	Pit.覆土	72	Sa.	

表VI-3 DH-1掲載遺物一覧表

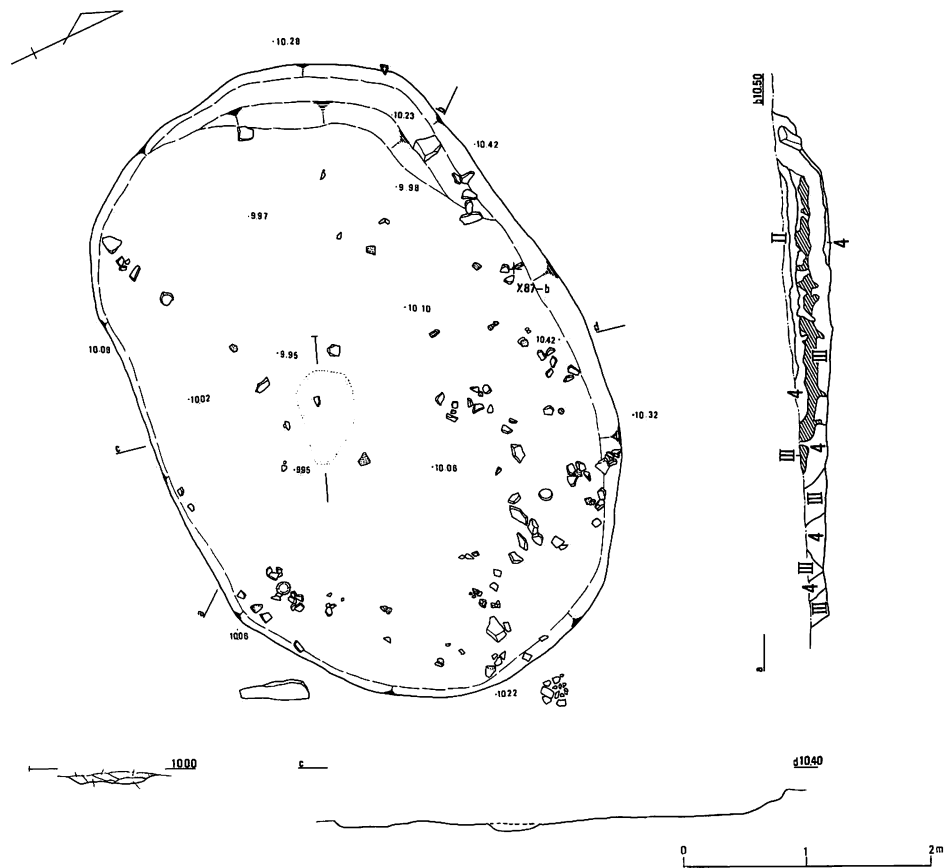
DH-2

位置 X-86-c・d、X-87-a・b

規模 5.29×3.61×0.47

特徴 平面形は東西に長い小判形。床面はIV層を掘り込み、固くしまった面が広がる。柱穴は確認できなかった。壁面は西側が二段になり深く、固くしまっている。南から東にかけては、ほとんど崩壊し、わずかに浅く残っているのみである。炉跡は中央やや南寄りにある。覆土には降下軽石が、かなりしまった状態でレンズ状に堆積しており、その下層の褐色土から床面にかけてが遺物を包む層である。本住居跡の降下軽石層は、最も明瞭に堆積している。

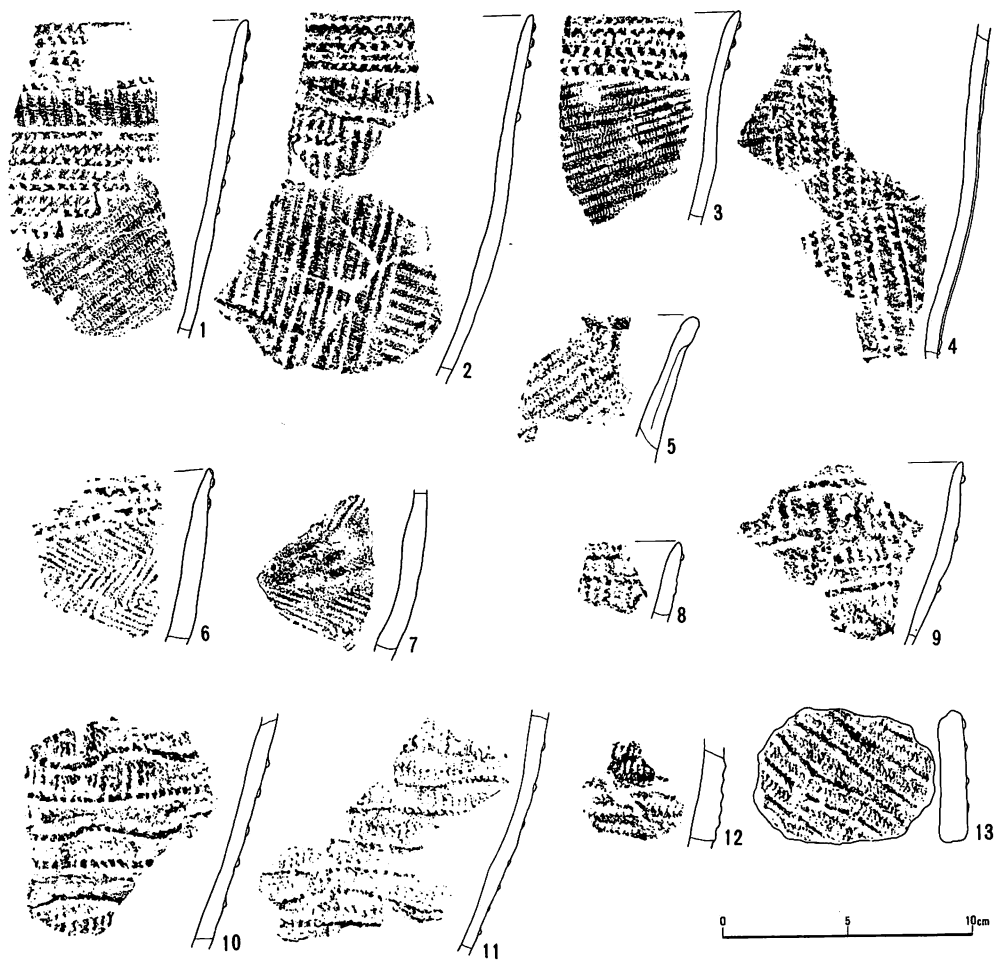
遺物 Ib-2類(1~7)とIb-3類(8~11)が床面やその直上から出土しているがIb-2類の中には、出土レベルの高いものや、II層出土品との接合例とある。反面Ib-3類は南側にまとまって出土しており、他との接合例はない。1~4は同一個体で、Ib-



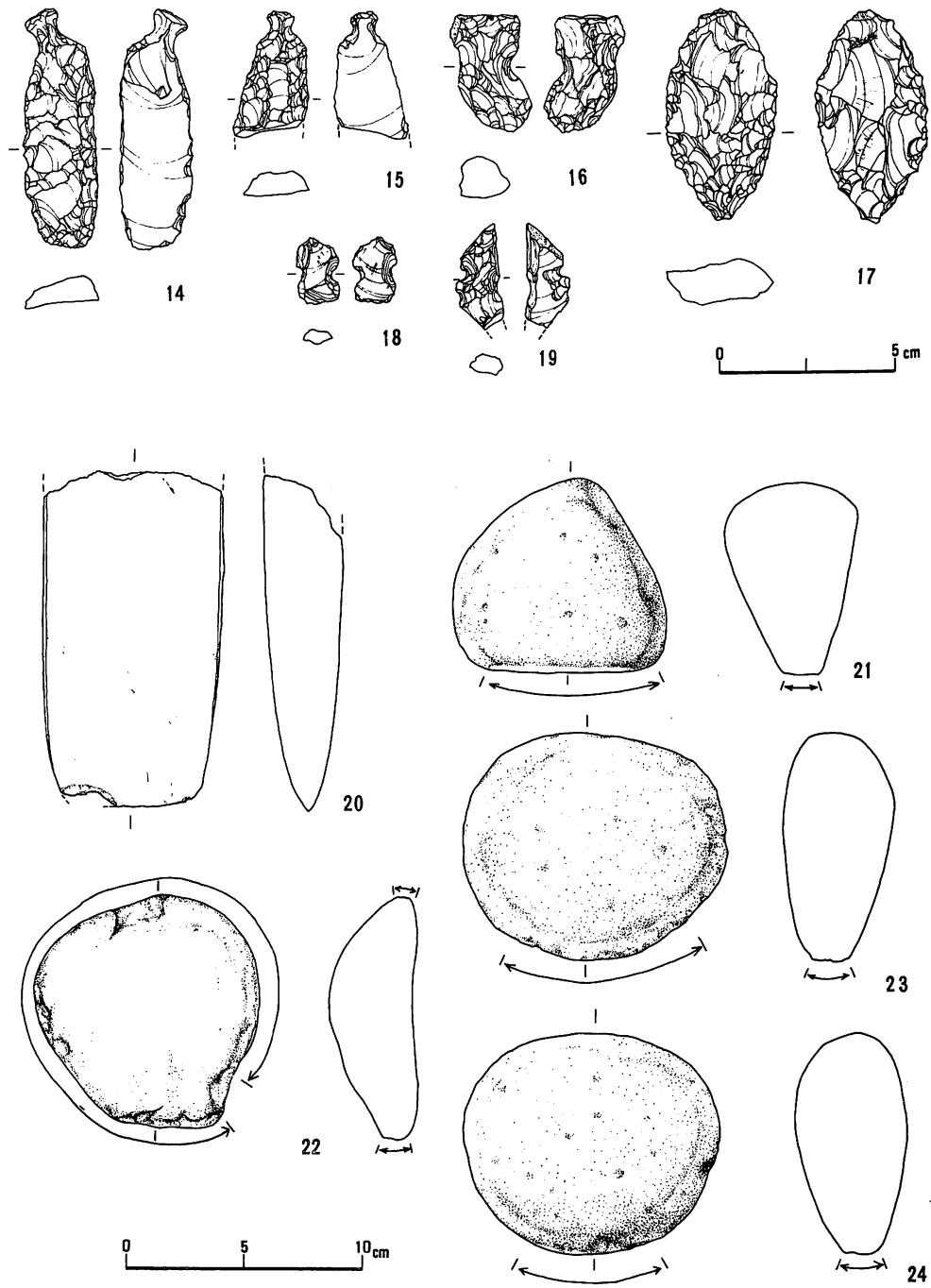
図VI-5 DH-2

2類である。まず絡条体圧痕文を施文し、その上に細貼付帯を貼りつけ、その後に短縄文を施文している。9～11はI b-3類である。細貼付帯の上に短縄文を施文している。13はI b-3類土器片製の円盤で覆土から出土している。石器は、つまみ付きナイフ、スクレイパー類とたたき石が多い。16・18・19は両長辺に抉りを入れただけのつまみ付きナイフで、DH-8からも1点出土している。20は当地区では出土数の少ない石斧である。

時期 出土レベルが床に近く、かたまって出土するI b-3類土器の時期と推定される。



図VI-6 DH-2出土の土器



図VI-7 DH-2出土の石器

名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆土	床面			覆土	床面
土 器	I b-2	16	4	石 斧	IV A 8	1	
"	-3	83	24	た た き 石	V A 2	2	
"	II a-	1		"	9	1	
つまみ付きナイフ	III A 1	1		す り 石	VI A 1		
"	2		1	フ レ イ ク	IX B	7	2
"	9	2	1	U. フ レ イ ク	X B	2	
スクレイパー	III B 1	1		礫・礫 片		2	
"	9	1		土 製 円 盤		1	
石 斧	IV A 5	1					

表VI-4 DH-2 出土遺物一覧表

(計 115点)

番号	名 称	分 類	層 位	重さ(g)	材 質	備 考	番号	名 称	分 類	層 位	重さ(g)	材 質	備 考
1	土 器	I b-2	覆 土			同一個 体	13	土 製 円 盤	I b-3	覆 土			
2	"	"	床 覆 土				14	つまみ付きナイフ	III A 1	"	11	Ha-Sh.	
3	"	"	覆 土				15	"	III A 2	床	4	"	
4	"	"	床 覆 土			I b-1 に近い	16	"	III A 5	"	8	Obs.	
5	"	"	I 層				17	スクレイパー	III B	床 直	18	"	
6	"	"	床 直			同一個 体	18	つまみ付きナイフ	III A 5	II 層	1.8	"	
7	"	"	"				19	"	"	床 直	2	"	
8	"	I b-3	覆 土			同一個 体	20	石 斧	IV A 5	"	485	Ser.	
9	"	"	床 直				21	す り 石	VI A 1	床	505	And.	
10	"	"	"				22	た た き 石	V A 2	覆 土	385	Ser.	
11	"	"	床 覆 土				23	"	"	床 直	632	And.	
12	"	II a-2	覆 土				24	"	"	覆 土	660	"	

表VI-5 DH-2 掲載遺物一覧表

DH-3

位置 W-87-c、W-88-b、X-87-d、X-88-a

規模 7.55×5.45×0.50

特徴 平面形は南側がややへこむ不整小判形。主軸を西北西に向ける。床面には角礫が全面に広がっている。この礫面上で起居する生活は困難だろう。柱穴は確認できなかった。壁は東側を除き、緩いがしっかりとした立ち上がりをなす。炉跡は中央と東寄りの2ヶ所ある。東寄りのF-1は焼土の規模が小さく補助的なものと思われる。中央のF-2は規模が大きく脇に大きな平たい石を埋め立ててある。メインの炉と考えられる。他の住居跡と同様降下軽石のしまったレンズ状の堆積がみられ、その上層と下層（床面まで）とでは遺物の時期に大きな差がある。

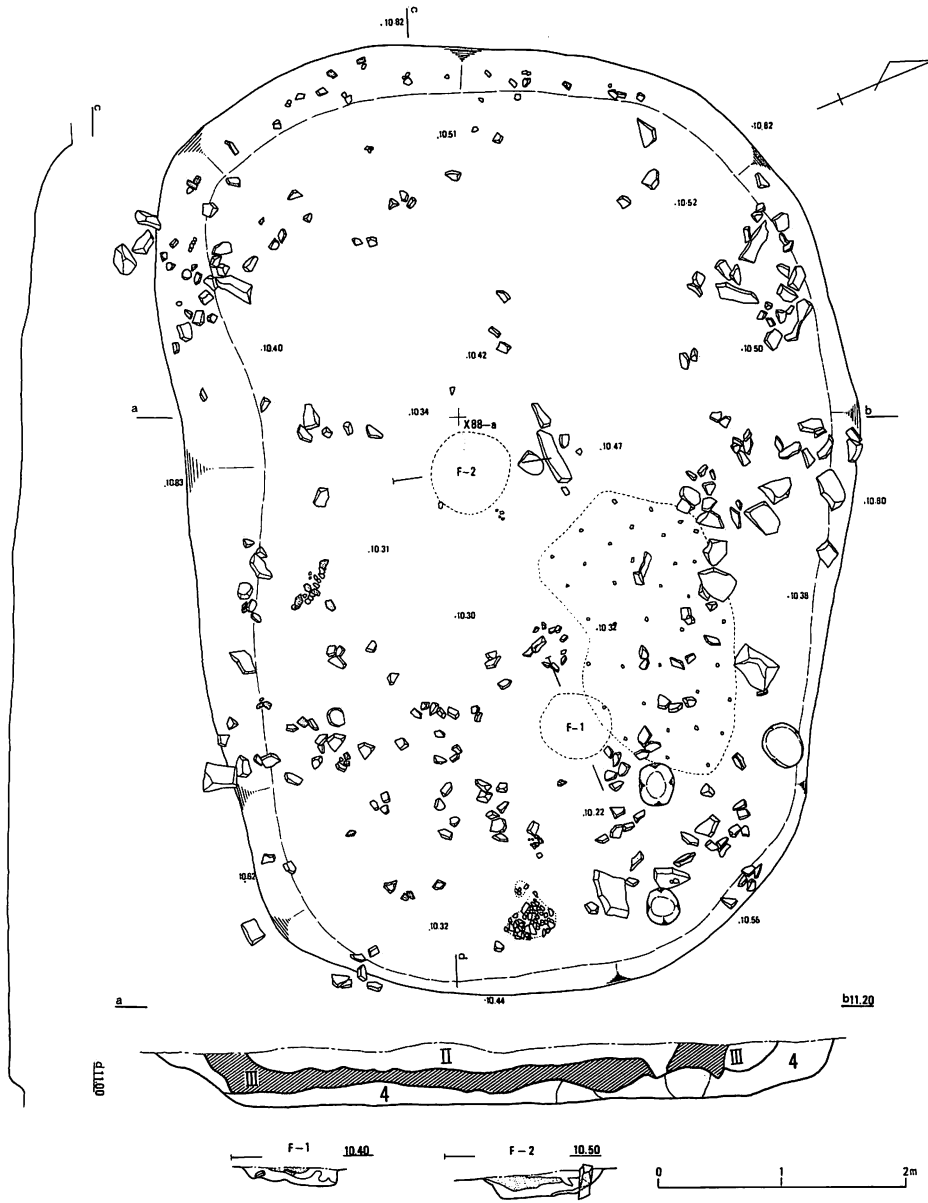
遺物 1は、III a類の完形土器である。サイベ沢VII式土器に相当する。I b-1類とI b-2類の土器はI b-1類（2~4）がやや高い出土レベルを示すものの、両者とも流れ込みの様相が強い。それに対してI b-3類の土器（12~17）はまとめて、床面やその直上から出土している。18は土製円盤で、DH-7の土器片と近似している。I b-1類の絡条体圧痕文土器である。石器は、床面及びその直上からすり石、石皿、砥石等が出土している。DH-1よりやや古い時期のものとして推定する。

時期 土器出土状態からI b-3類土器の時期と考える。

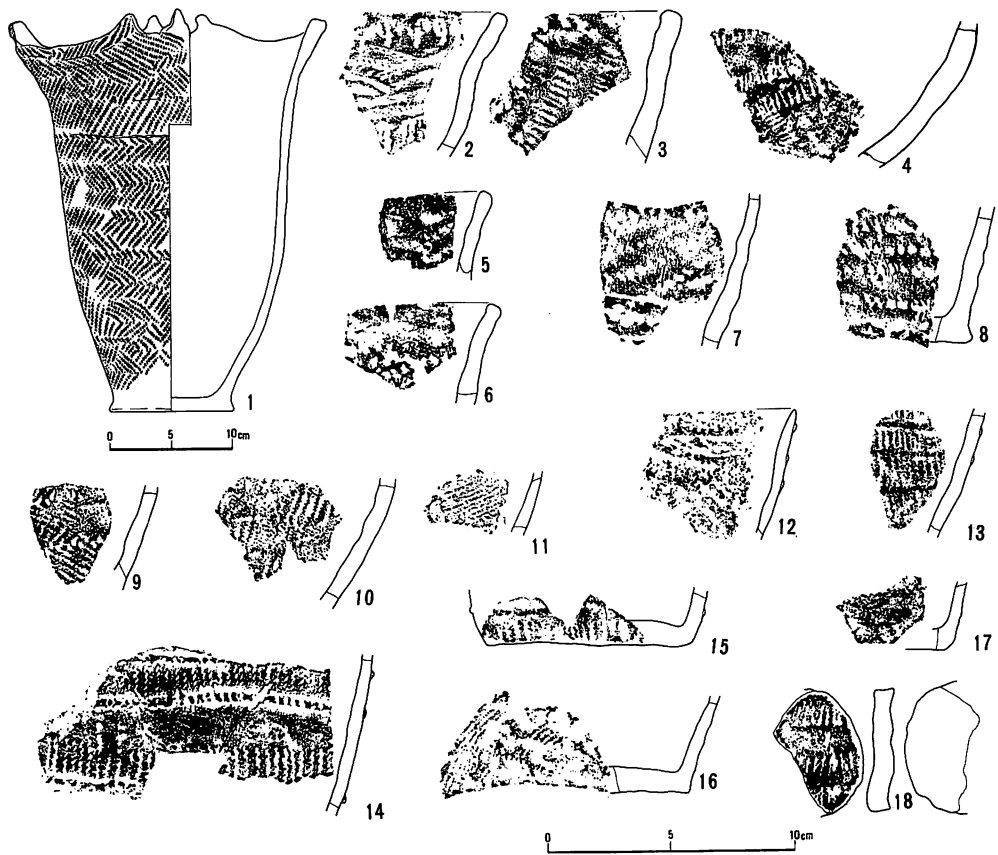
名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面			覆 土	床 面
土 器	I a	2		スクレイパー	III B 8	1	
"	I b-1	23	2	"	9		1
"	-2	1	1	たたき石	V A 9	1	
"	-3	241	5	すり石	VI A 2	1	
"	I b-	1		石 皿	VI B 9		1
"	III a	120		砥 石	VII B 2		1
"	不 明	1		フ レ イ ク	IX B	20	
石 鍬	I A 2 a	2		礫 ・ 礫 片		2	3
"	c	1		土 製 円 盤		1	
つまみ付きナイフ	III A 2	1					

(計 433点)

表VI-6 DH-3 出土遺物一覧表



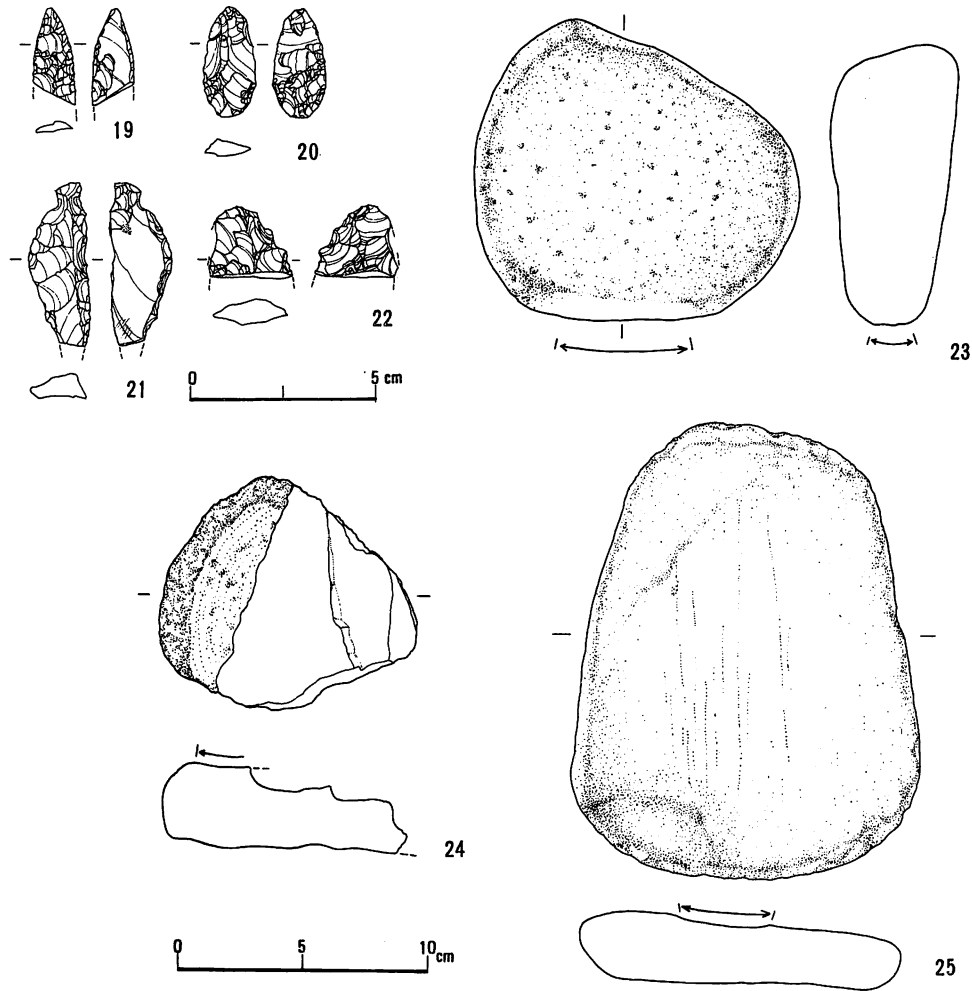
図VI-8 DH-3



図VI-9 DH-3出土の土器

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	Ⅲa	Ⅱ層			サイベ沢 瓦並行	14	土器	Ib-3	床直			16と一括 出土
2	"	Ib-1	覆土			同一個 体DH -7	15	"	"	床			14と一括 出土
3	"	"	"				16	"	"	床直			
4	"	"	Ⅱ層				17	"	"	Ⅲ層			DH-7 土器に近 似
5	"	Ib-1 ~2	不明		無文		18	土製円盤	Ib-1	覆土			
6	"	Ib-2	床			同一個 体	19	石 鏃	IA2a	"	0.4	Obs.	
7	"	"	覆土				20	"	IA2c	床直	2	"	
8	"	"	"				21	つまみ付きナイフ	ⅢA2	Ⅱ層土	4	Ha-Sh.	
9.10	"	"	Ⅱ層				22	スクレイパー	ⅢB8	床直	3	Obs.	
11	"	"	床直			(Ib- 2に近 いIb- -3)	23	すり石	ⅥA2	"	1,060	And.	
12	"	Ib-3	Ⅲ層				24	石 皿	ⅥB1	床	400	"	
13	"	"	床				25	砥石	ⅥB2	"	900	Sa.	

表VI-7 DH-3掲載遺物一覧表



図VI-10 DH-3出土の石器

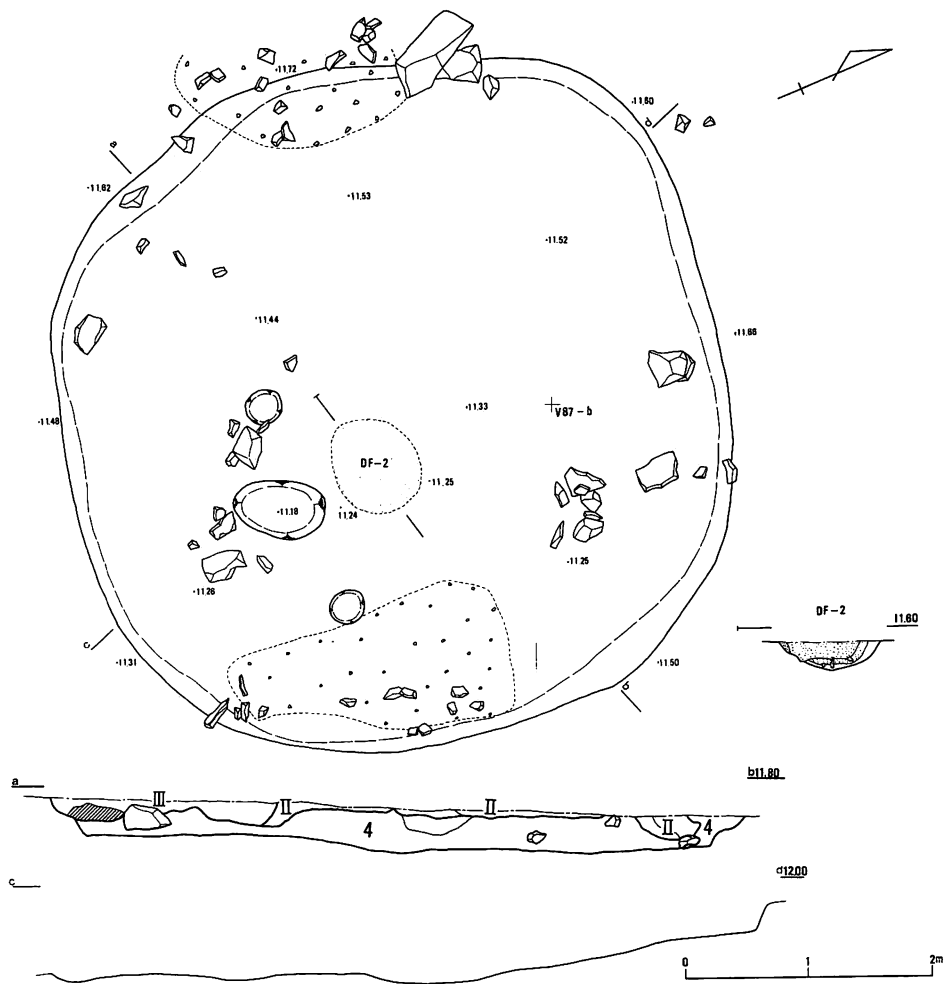
DH-4

位置 V-86-c、V-87-a・b

規模 5.94×5.67×0.35

特徴 平面形はほぼ円形。床面は中心に向かって緩く鐮鉢状に凹んでいる。柱穴らしきピットが2カ所ある。壁面はそれほど顕著な立ち上がりを示さず、発掘はきわめて困難であった。炉跡は確認できなかった。覆土の一部には、降下軽石層がみられ、降下前に落ち込みのあったことは確かであるが、他の住居跡と比較して構造や土層の堆積がやや異なる。なおDF-2は、軽石層の直下であり、住居埋没後のくぼみを利用したもので住居のものではない。

遺物 数が少なく、すべて覆土から出土している。1~3はIb-2類、4・5はIb-



図VI-11 DH-4

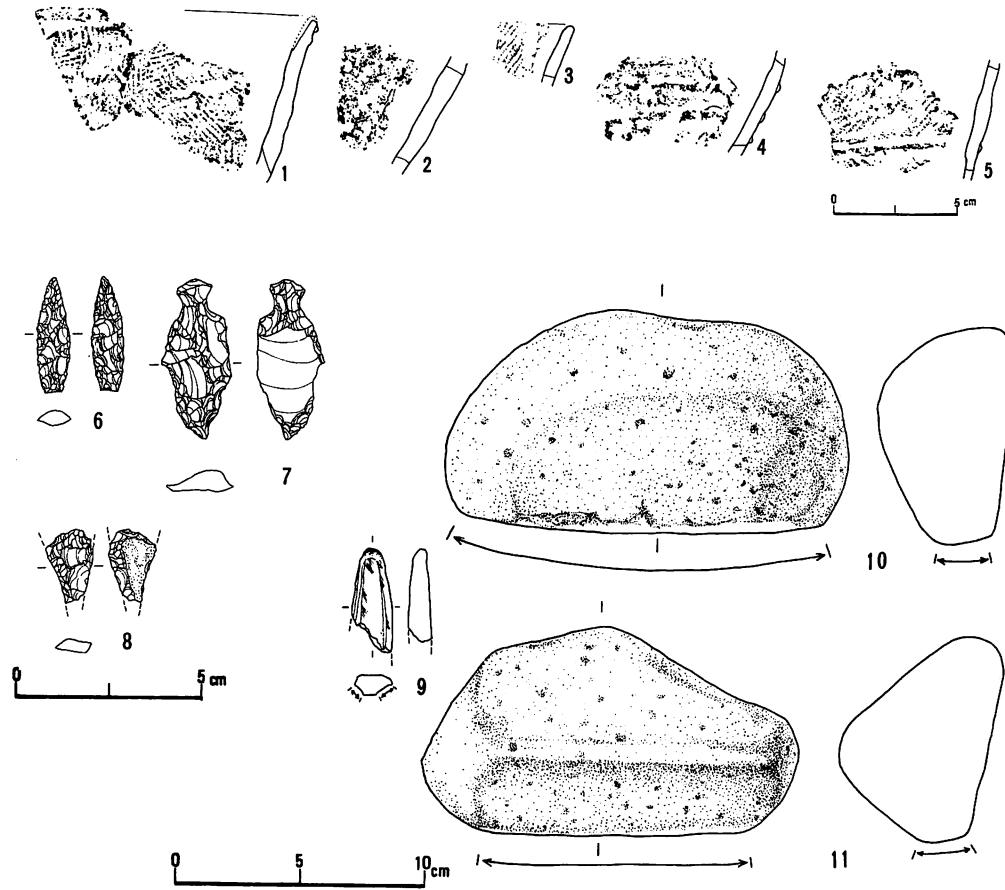
名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	I b-2	22		つまみ付きナイフ	III A 2	1	
	-3	6			スクレイパー	III B 9	1
石	鍬類	I A 2 a	1	フレイク	IX B	23	
		II A 1	1				
石	錐類			礫・礫片		2	

(計 57点)

表VI-8 DH-4 出土遺物一覧表

3類土器。1は口唇付近に一本の縦貼付帯をもち、その下に不規則な方向の縄文が施文されている。9はD地区唯一の石のみで蛇紋岩製である。刃部を欠損する。

時期 I b-2類~I b-3類土器の時期に埋まり始めたものと推定される。



図VI-12 DH-4出土の遺物

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1-3	土器	I b-2	覆土				8	石錐類	II A 1	"	1	Obs.	
4.5	"	I b-3	"				9	石のみ	IV B	II層	6	Ser.	
6	石鏃	IA 2	"	2	Obs.		10	すり石	VI A	"	1,050	And.	
7	つまみ付きナイフ	III A 2	"	4	Ha-Sh		11	"	VI A 1	"	1,010	"	

表VI-9 DH-4掲載遺物一覧表

DH-5

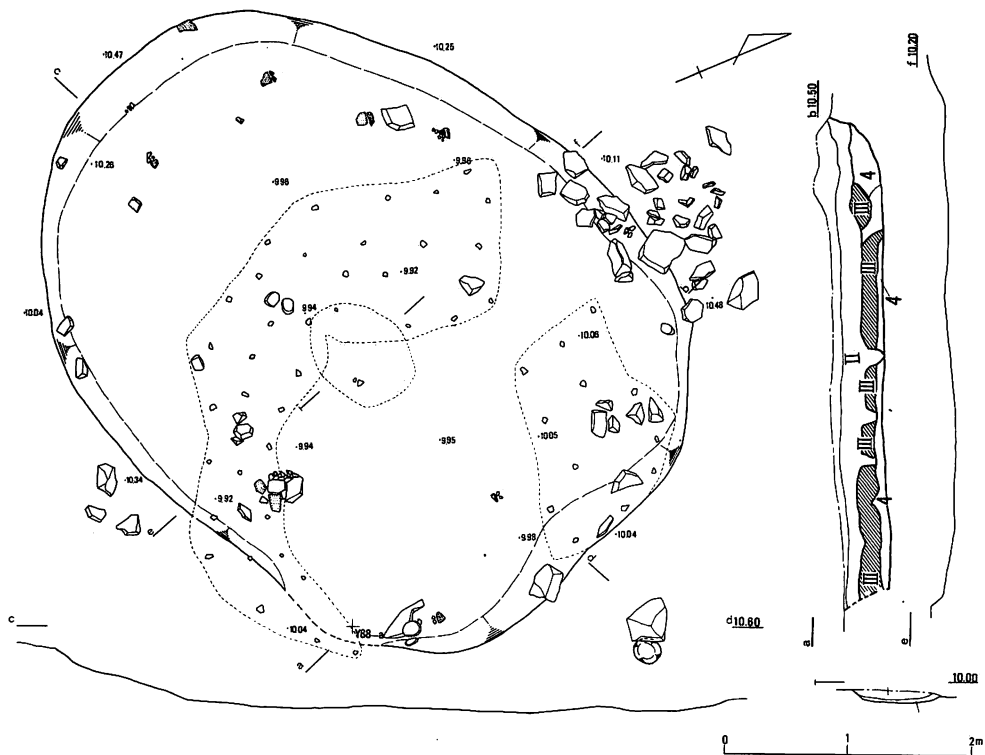
位置 X-87-c、X-88-b、Y-87-d、Y-88-a

規模 5.44×4.15×0.45

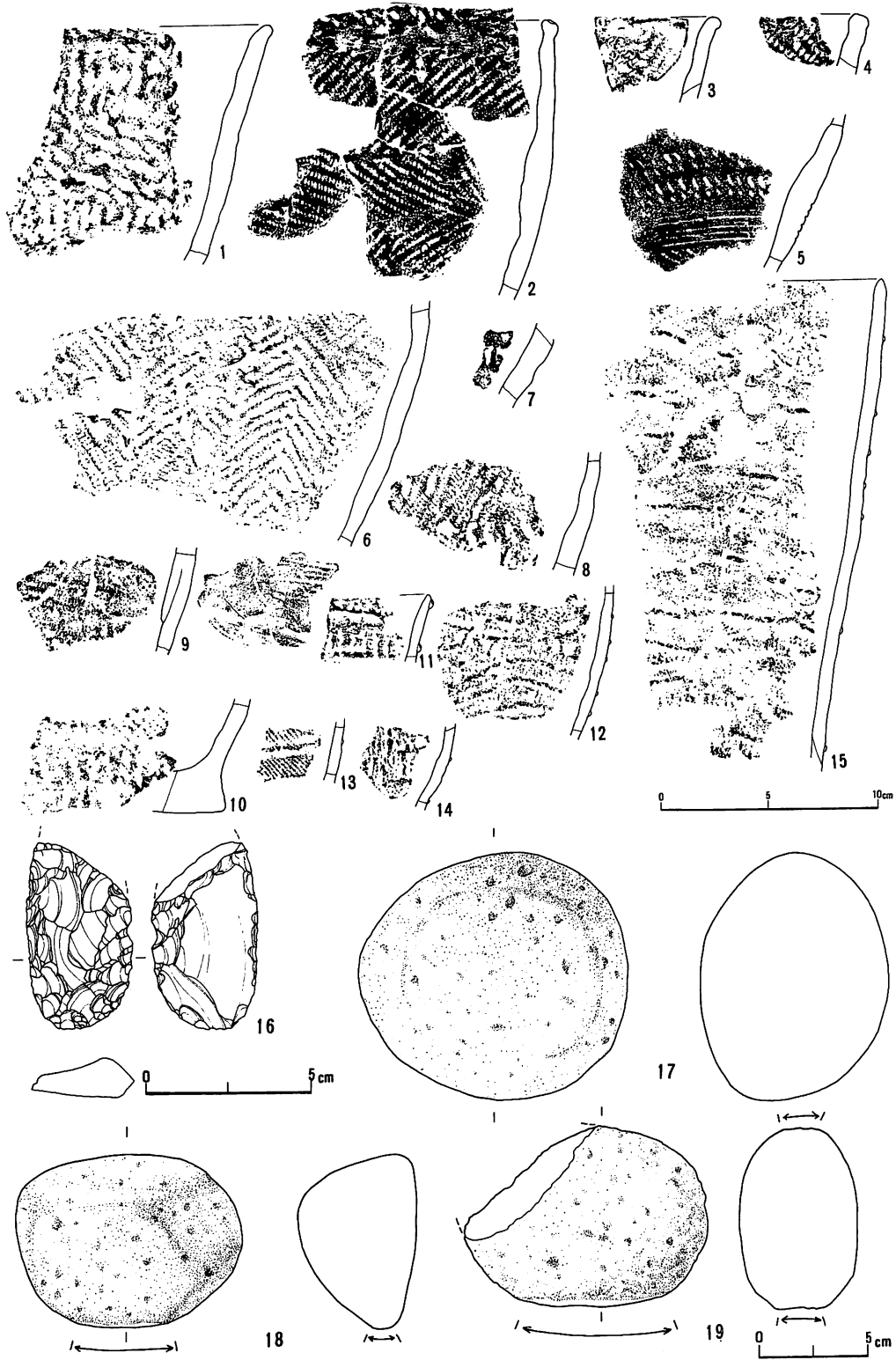
特徴 平面形は、長軸がほぼ東西に向く卵形。床面には角礫が多く、しまりもあまりない。壁面の立ち上がりも礫で乱されている。炉跡は住居跡の中央に広い範囲にある。覆土に降下軽石のレンズ状堆積層があり、それによって住居跡の確認がなされた。

遺物 I b-1 類土器が多いが、北側グリッドからの流れ込みによるものがほとんどで、出土レベルも高い。DH-7と接合するものあり(1~10)。I b-3 類土器が床面とその直上からまともに出している(11~15)。5はDH-7のものに近似する魚骨の回転によると思われる文様をもつもの、6は縦方向の結束羽状縄文が施文されている。15は当住居の時期を決定する床面出土の土器である。I b-2 類の様相を残しており、文様は横方向の細貼帯の上から撚紐による圧痕が施文されている。石器は床直上にスクレイパー(16)、たたき石(17)、すり石(19)があった。

時期 I b-3 類土器の時期と考えられる。



図VI-13 DH-5



図VI-14 DH-5出土の遺物

名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面			覆 土	床 面
土 器	I b-1	86		す り 石	VI A 2	1	
"	- 3	19	54	石 皿	VI B 1		1
スクレイパー	III B 9	1		フ レ イ ク	IX B	17	10
たたき石	V A 2	1		礫 ・ 礫 片		1	
す り 石	VI A 1	1					

表VI-10 DH-5 出土遺物一覧表

(計 192点)

番号	名 称	分 類	層位	重さ(g)	材 質	備 考	番号	名 称	分 類	層位	重さ(g)	材 質	備 考
1	土 器	I b-1	床直				11	土 器	I b-3	不明			
2	"	"	覆土				12	"	"	床直			
3	"	"	床直			6と同一個体	13	"	"	"			
4	"	"	覆土				14	"	"				
5	"	"	"			DH-7と同一個体 10と同一個体	15	"	"	床			
6	"	"	III層			3と同一個体	16	スクレイパー	III B 9	床直	25	Sh.	
7	"	"	床直			DH-7と同一個体	17	たたき石	V A 2	"	1,400	And.	
8	"	"	覆土				18	す り 石	VI A 1	覆土	545	"	
9	"	不 明	"				19	"	VI A 2	床直	560	"	
10	"	I b-1	"			5と同一個体							

表VI-11 DH-5 掲載遺物一覧表

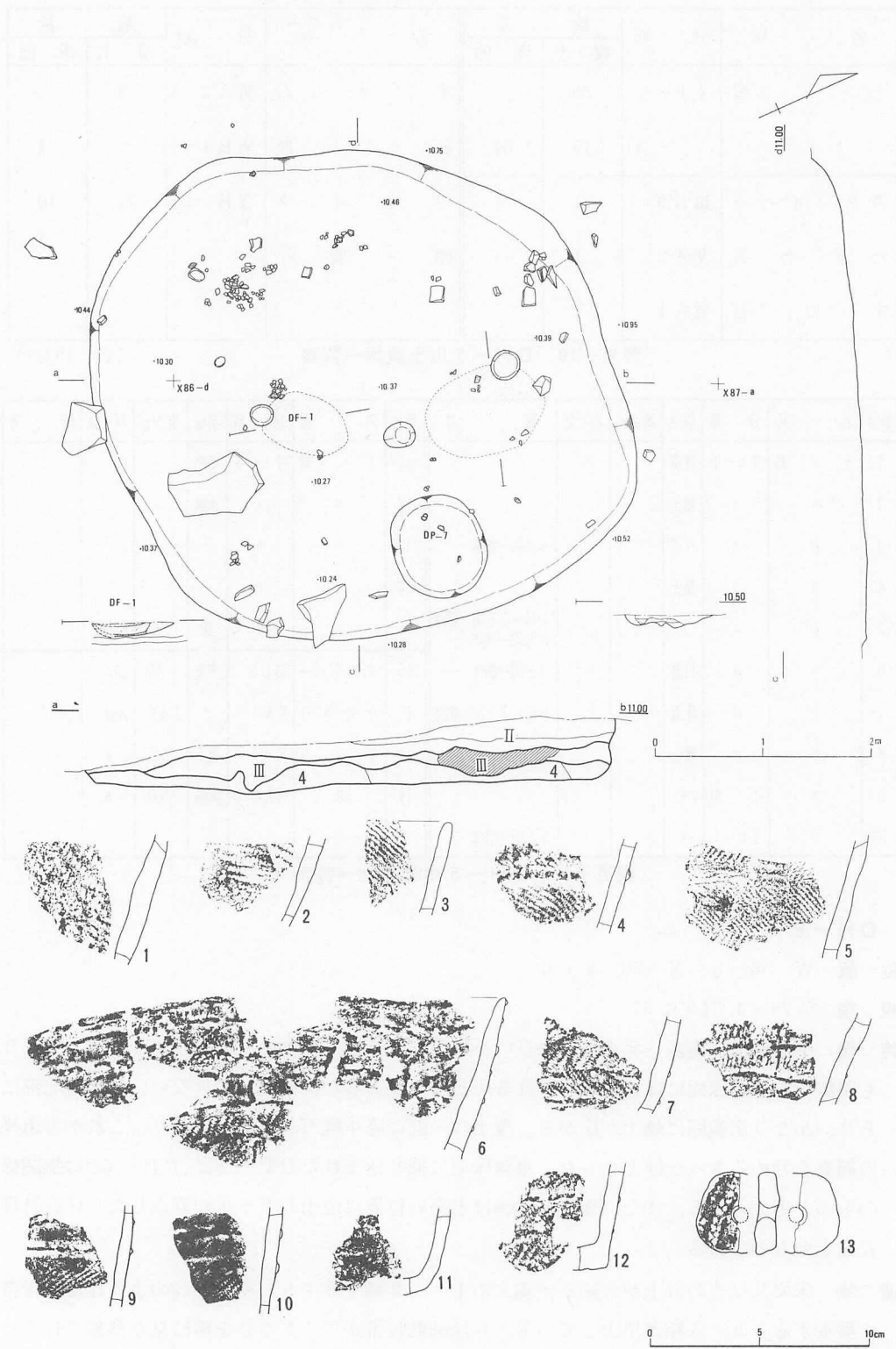
DH-6

位 置 W-86-b、X-86-a、d

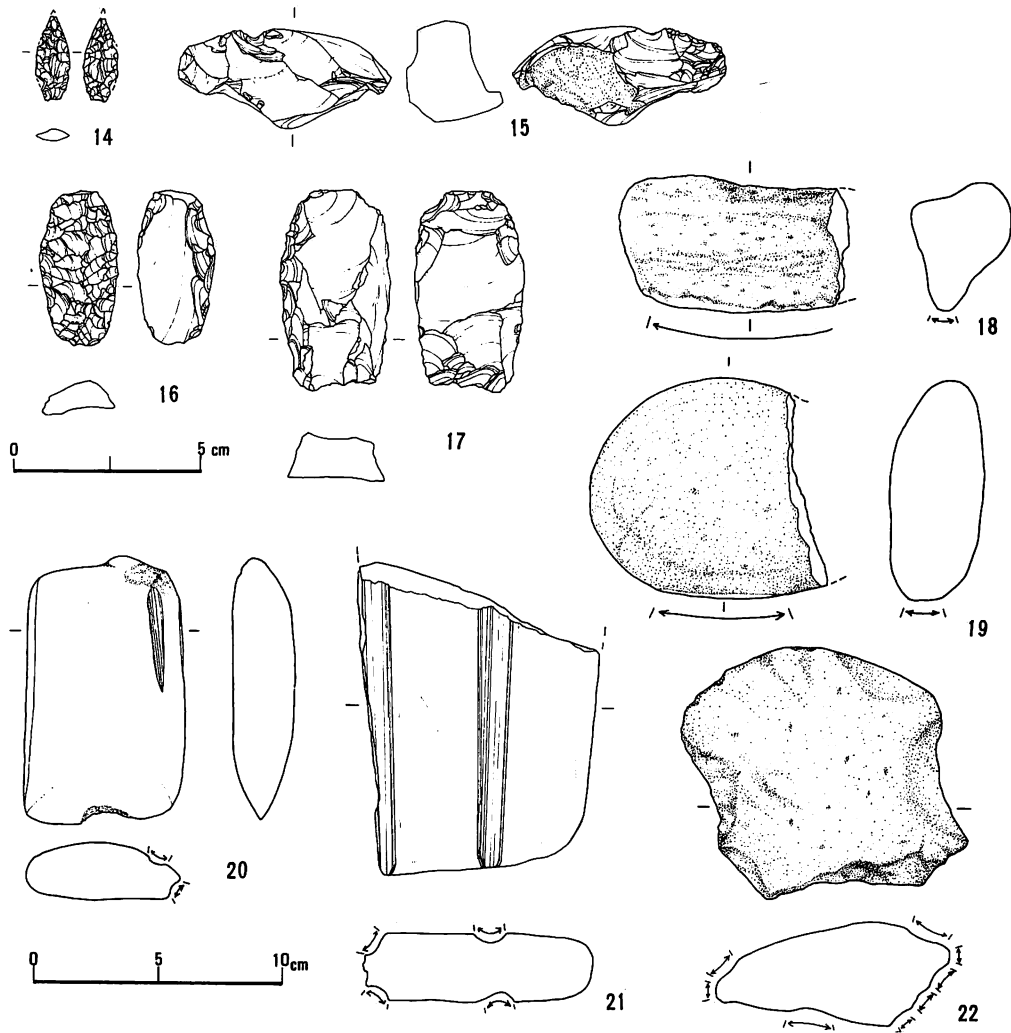
規 模 5.74×4.51×0.57

特 徴 平面形は、南西—北東にやや長い不整形円形。床面・壁面とも固くしまり、立ち上がりも明瞭である。床面には柱穴と思われる小ピットがあるが、確定はできない。炉跡は北部にあり、かなり広範囲に焼土が広がる。覆土の一部に降下軽石が堆積しており、これが当遺構の調査を始めるきっかけとなった。東側床面に掘り込まれたDP-7は、DH-6とは無関係のものと考えられる。また、床より20cmほど高い位置に焼土DF-1が存在した。住居跡埋没途上のものである。

遺 物 床面及びその直上から細かい縄文のI b-2類(3~5)や6~12のような細貼付帯が横走るI b-3類が出土している。6は細貼付帯がアミダくじを横に見た状態で付されている。やや浮いた状態で出土した。13はI b-1類の三本組紐圧痕文の施文された土器片



図VI-15 DH-6とDH-6出土の土器



図VI-16 DH-6出土の石器

名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆土	床面			覆土	床面
土 器	I b-1	5	1	擦り切り残片	IV A 8	1	
”	-2	14	3	す り 石	VI A 1	1	
”	-3	142	4	”	VI A 2	2	
”	不 明	3		砥 石	VII B 9	1	
石 鍬	I A 2 a	1		コ ア	IX A	1	
スクレイパー	III B 1	1		フ レ イ ク	IX B	55	3
”	III B 9	1		U. フ レ イ ク	X A	1	1
石 斧	IV A 1	1		土 製 円 盤			1

表VI-12 DH-6出土遺物一覧表

(計 243点)

の有孔円盤片で、焼土脇の床面から出土した。石器は床面やその直上から出土が多く、20は擦り切りの磨製石斧、21はその未製品である。

時期 土製円盤は再加工品であることから、住居跡の時期はI b-1類以降である。床面及びその直上の遺物からみると、I b-2~3類土器の時期と推定するのが妥当だろう。

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	I b-1	覆土				13	土製円盤	I b-1	床			
2	"	不明	不明				14	石鎌	IA 2 a	床直	2	Obs.	
3	"	I b-2	覆土				15	コア	VI A	"	29	"	
4	"	"	"				16	スクレイパー	III B 1	"	9	Sh.	
5	"	"	床・床直				17	"	III B 9	"	23	Ha-Sh.	
6	"	I b-3	覆土			同一個体	18	すり石	VI A 1	"	190	And.	
7	"	"	"				19	"	VI A 2	覆土	420	"	
8	"	"	"				20	石斧	IV A 1	床直	265	Gr-Mud.	
9	"	"	床直				21	"	IV A 8	"	540	"	
10	"	"	床				22	砥石	VII B 9	"	390	Sa.	
11	"	"	不明										
12	"	"	覆土										

表VI-13 DH-6掲載遺物一覧表

DH-7

位置 U-86-a、b、c、d V-86-a、d

規模 6.16×5.75×0.66

特徴 平面形はほぼ円形である。この住居跡は古い沢筋にあたるため、床面、壁面は礫の流れ込みや水の影響でかなり乱れており、固くしまった面は確認できなかった。住居跡の中央へ向かって開口部が傾斜する柱穴状の小ピットが壁面に並んでいる。北側床面で、柱の炭化材が確認された。ただし、腐食が激しく、そのまま取り上げることはできなかった。炉跡は発見できなかった。

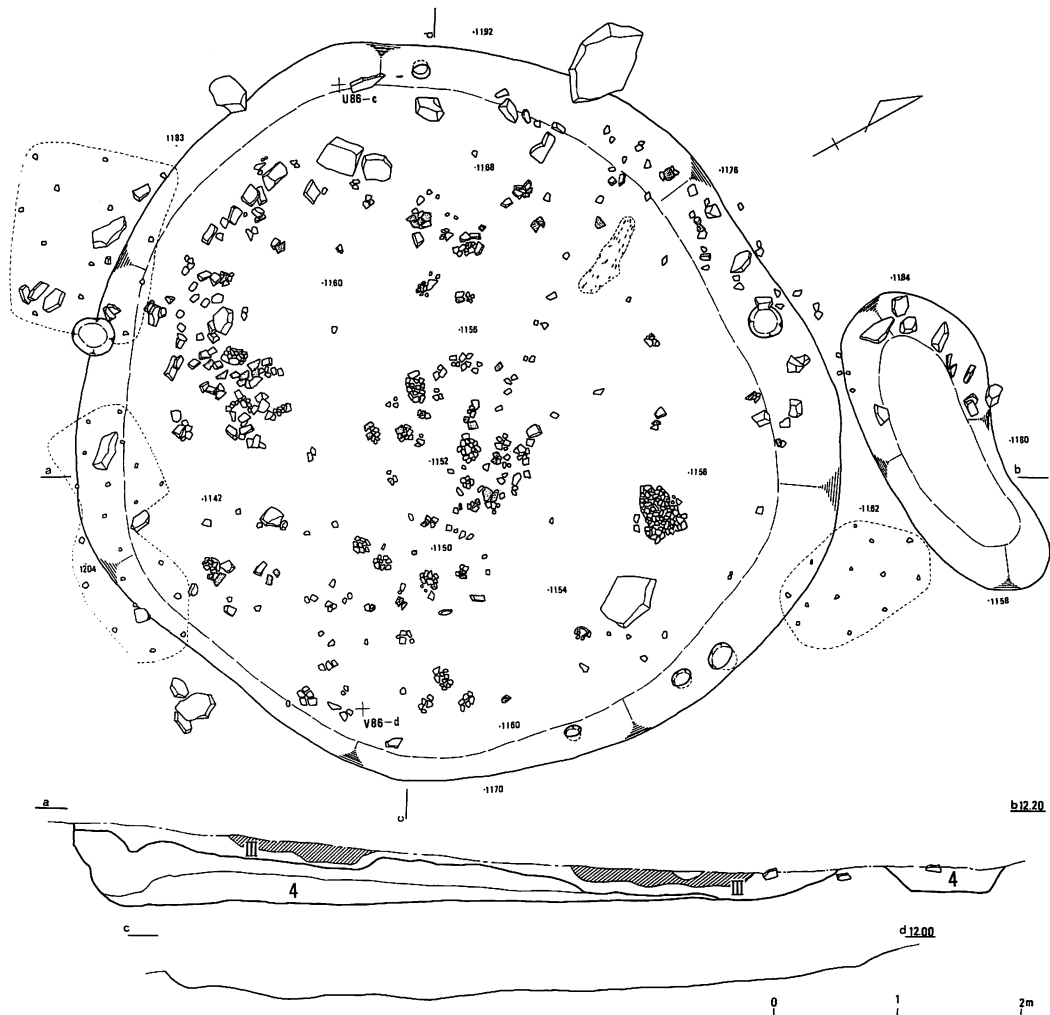
遺物 I b-1類土器が出土している。1は全面に結束羽状縄文が施文され、口唇には撚紐による刻みが入り、底部内側には指先と思われる圧痕が残されたものである。床面近くから出土した底部破片に、周辺グリッドや20~40m離れたDP-4やDH-5とその付近から出土した破片が接合するなど、広汎な接合関係をもつ土器である。住居が放棄されて間もない頃にDH-7の上方から流れ込んだものであろう。2・13・14・17・18も床面付近出土で、1同様底部付近に太い撚紐圧痕がある。中でも、13は角ばった長円形の底である。3は床面出土の撚紐圧痕文と魚骨の回転によると思われる文様帯が交互に入る土器で、同種のものが

DH-5から出土している。他に短縄文をもつもの(5・7・8)、全面に原体の太い絡条体
 圧痕文をもつもの(9~11)が床面付近から出土している。12のI b-2類土器は、床面付
 近から出土しており、全面に細い縄文、口唇に撚紐による刻みがある。小さな土製円盤が2

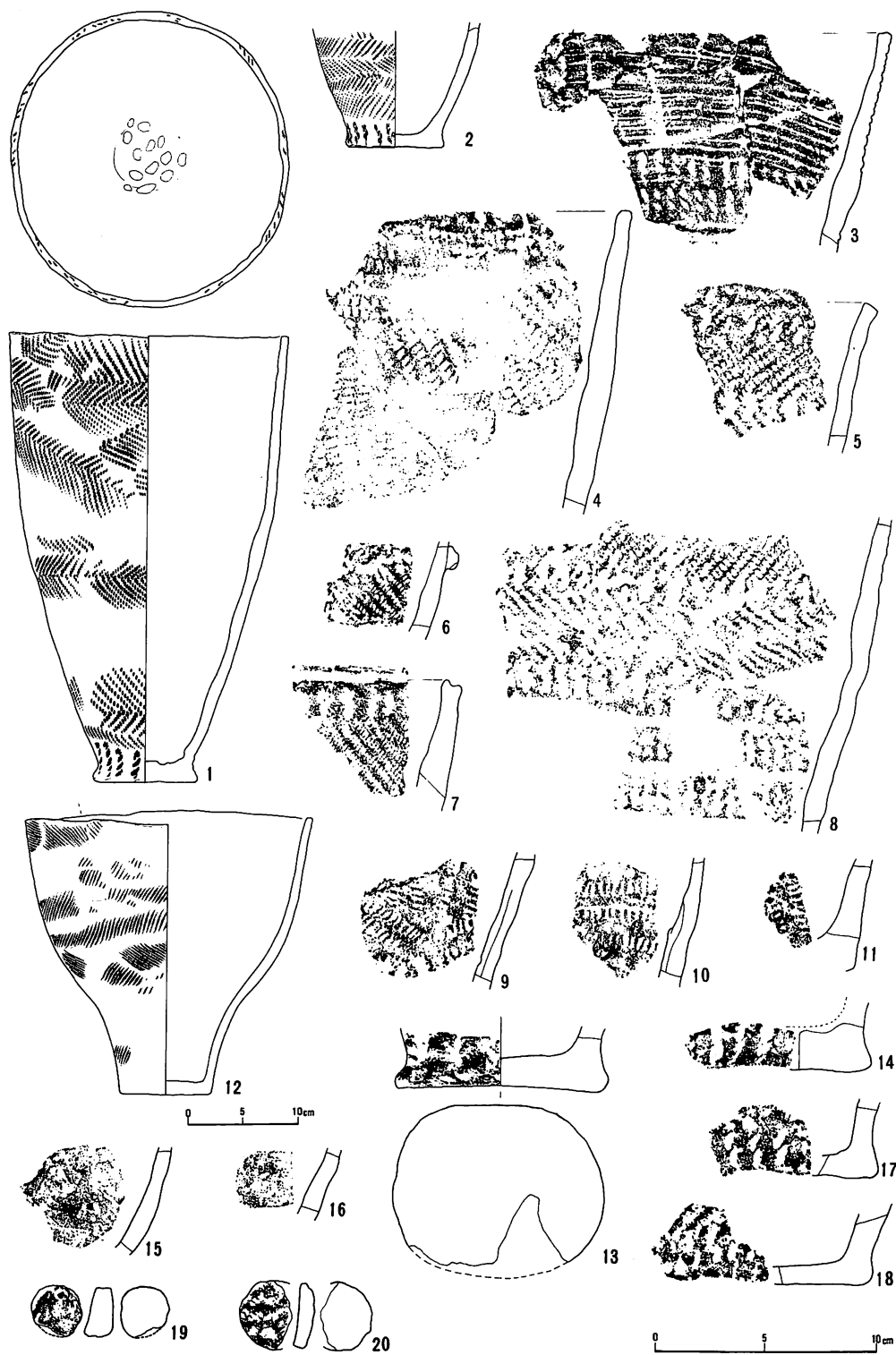
名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面			覆 土	床 面
土 器	I b-1	418	201	石 皿	VI B 9		1
"	-2	148		フ レ イ ク	IX B	3	
"	-3	1		礫 ・ 礫 片		3	
"	II a	1		土 製 円 盤		2	
スクレイパー	III B 9	1					

表VI-14 DH-7 出土遺物一覧表

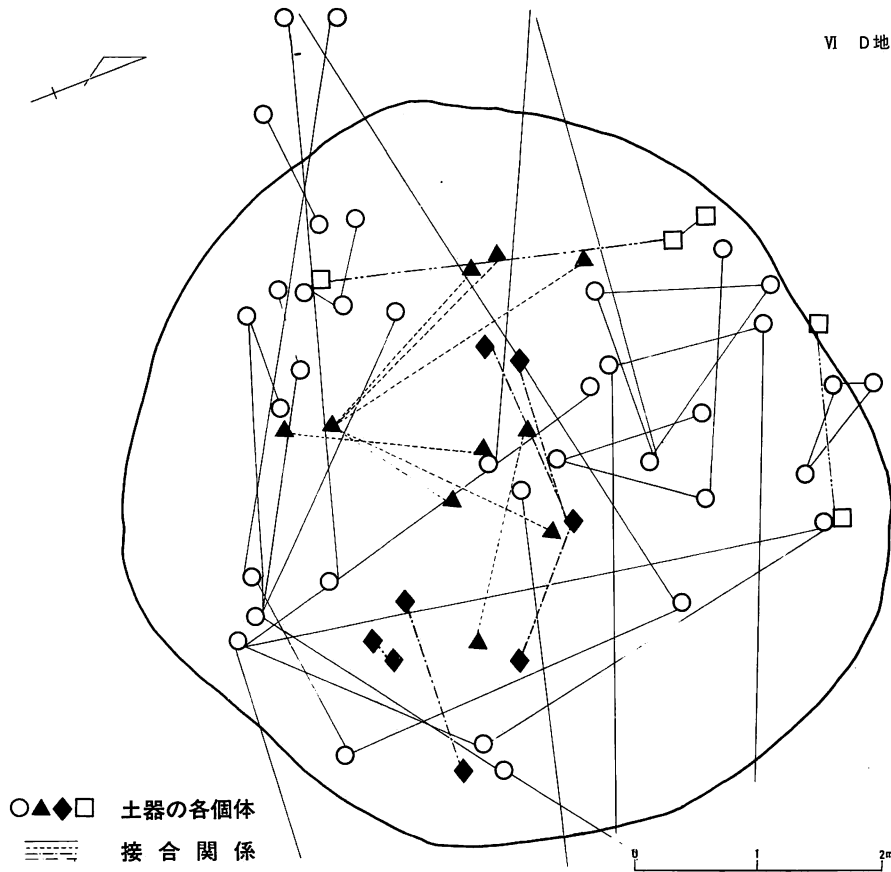
(計 779点)



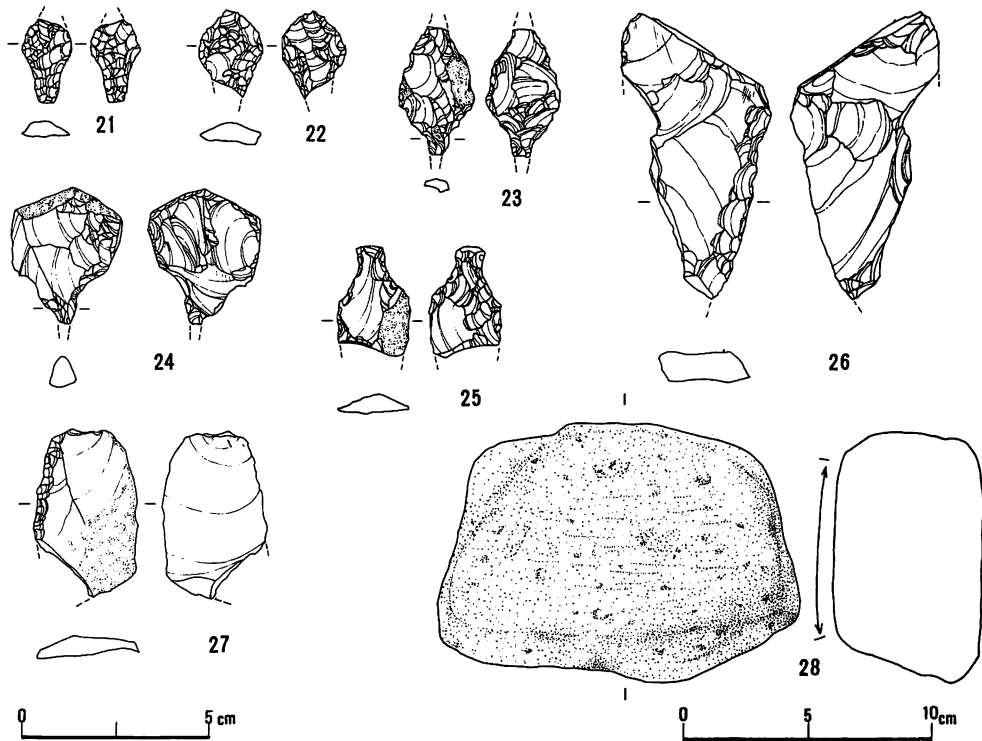
図VI-17 DH-7



図VI-18 DH-7出土の土器



図VI-19 DH-7出土土器の接合関係



図VI-20 DH-7出土の石器

個(19・20)出土している。石器は28の石皿だけが床面にあり、他の剥片石器は覆土のものである。石器が少なく、土器が異常に多いのが、当遺構の特徴である。

時期 流れ込みはあるものの、床面近くから出土した土器はすべてI b-1類で、この時期の住居とみなしてよいだろう。当地区で最も高位にあり、しかも最も古い住居と考えられる。

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	I b-1	床			DP-4・DH-5と接合	15	土器	Ib-1	覆土			無文
2	"	"	"				16	"	"	床			無文
3	"	"	不明			DH-5と同一個体	17	"	"	床直			
4	"	"	床				18	"	"	"			
5	"	"	床直			8と同一個体	19	土製円盤	"	不明			
6	"	"	床				20	"	"	床直			
7	"	"	床直				21	石 鏃	IA5	II層	2	Obs.	
8	"	"	床・床直			5と同一個体	22	石 錐 類	IIA	"	2	"	
9	"	"	床直			同一個体	23	"	"	"	3	"	
10	"	"	"				24	"	"	"	11	"	
11	"	"	不明				25	つまみ付きナイフ	IIIA9	"	2	"	
12	"	I b-2	床直				26	スクレイパー	IIIB9	"	26	"	
13	"	I b-1	床・覆土			一括	27	"	"	床直	10	Ha-Sh.	
14	"	"	床				28	石 皿	VI B9	床	1,520	And.	

表VI-15 DH-7掲載遺物一覧表

DH-8

位置 V-81-b、c W-81-a、d

規模 6.72×(5.15)×0.49

特徴 南側壁面は損壊しているが、平面の復原形は東南に長軸をもつ不整卵形である。浸出する水の影響が大きく床面が粘土化しており、覆土と床面の判別がきわめて困難であった。そのためか柱穴や炉跡は確認されていない。また覆土の降下軽石層も水を多量に含んでいたが、この層が遺構発掘の目安となった。

遺物 西側床面に完形土器がつぶれた状態で出土している(1)。ゆるい二山の波状口縁をもつ薄手の土器で、口唇には3条の細い貼付帯をめぐらし、その上にかかるように帯間に短縄文を施文する。上半部は縦横の細貼付帯が波状、円弧状、階段状に走り、その帯間は階段内や

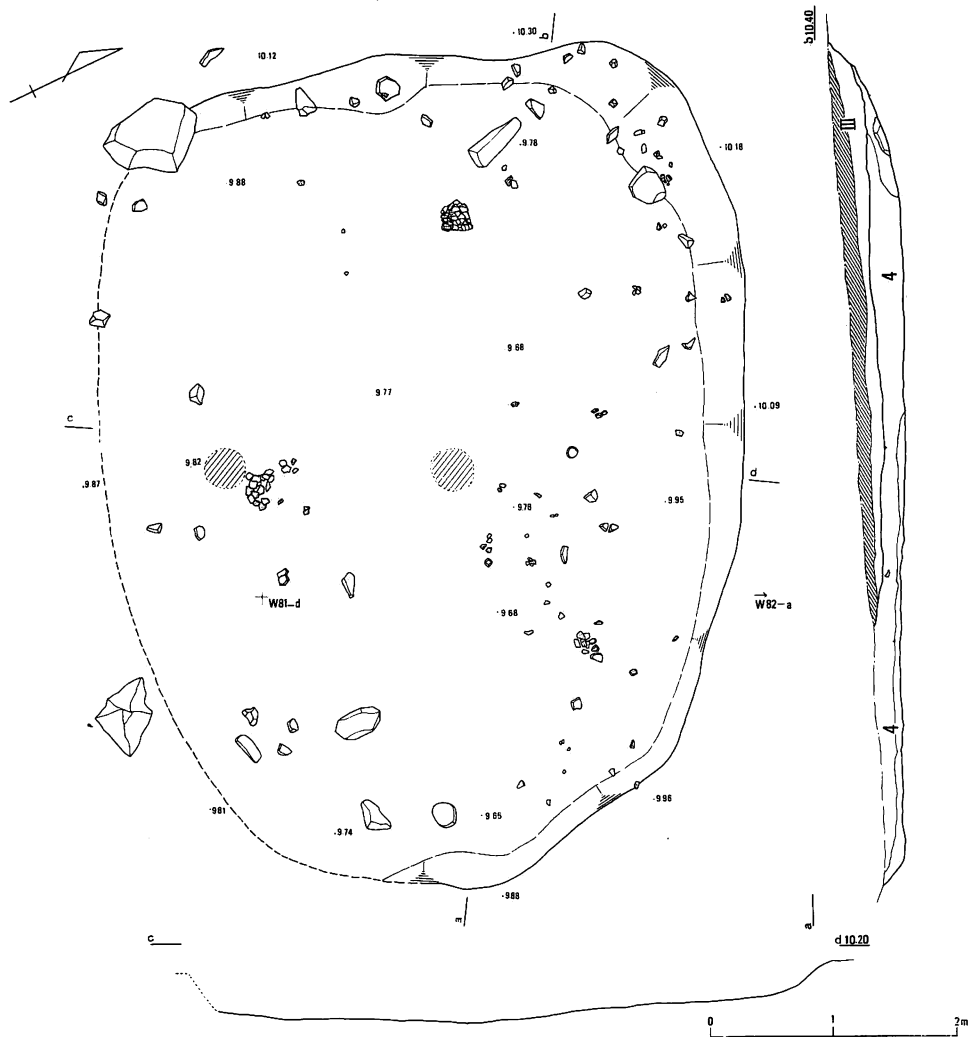
名称	分類	数量		名称	分類	数量	
		覆土	床面			覆土	床面
土器	I b-1	88		土器	II a-	3	
"	-2	4		"	III a	8	
"	-3	545	2	"	III b-3	2	
"	II a-1	4		"	不明	5	

表VI-16① DH-8出土遺物一覧表(1)

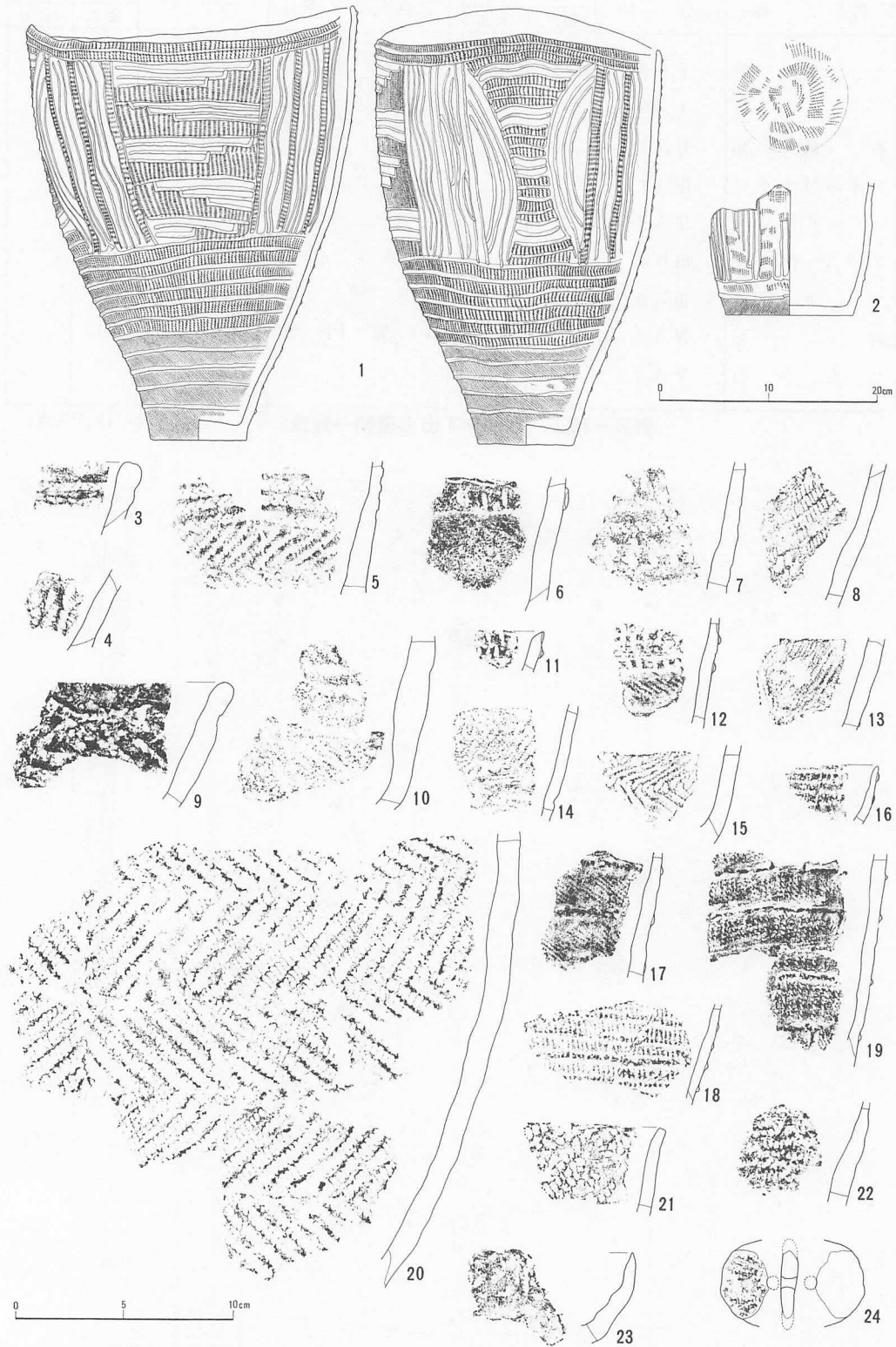
名 称	分 類	数 量		名 称	分 類	数 量	
		覆土	床面			覆土	床面
石 鍬	I A 2 a	2		た た き 石	V A 3	1	
”	I A 3	1		す り 石	VI A 1	3	
石 錐 類	II A 1	1		砥 石	VII B 9	1	
つまみ付ナイフ	III A 1	1		コ ア	IX A	1	
”	III A 9	1		フ レ イ ク	IX B	11,458	
スクレイパー	III B 1	2		U. フ レ イ ク	X A	5	
”	III B 9	8		礫・礫 片		4	
石 斧	IV A 8	1		土 製 円 盤		1	
た た き 石	V A 2	2					

表VI-16② DH-8 出土遺物一覧表(2)

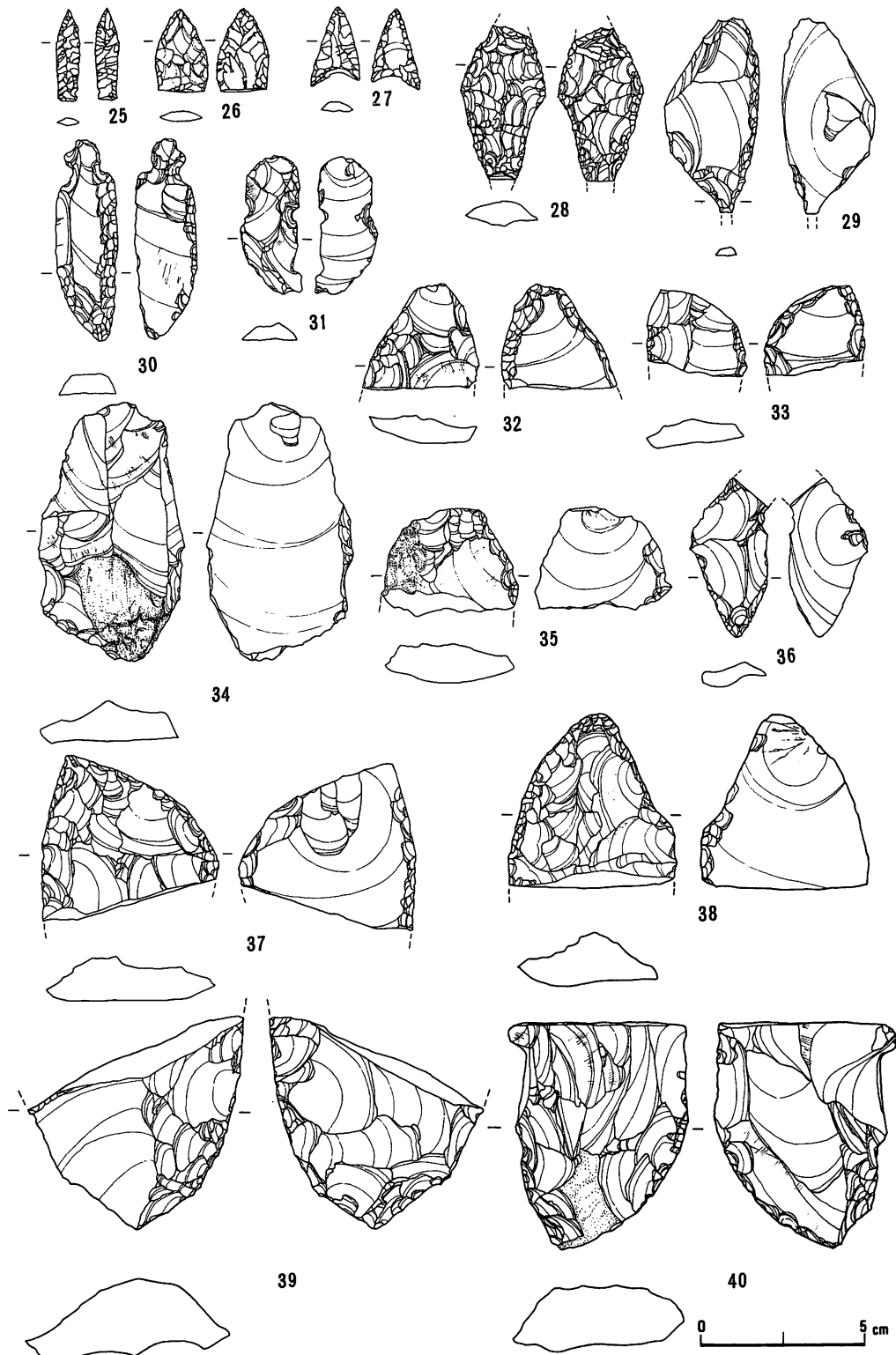
(計 12,154点)



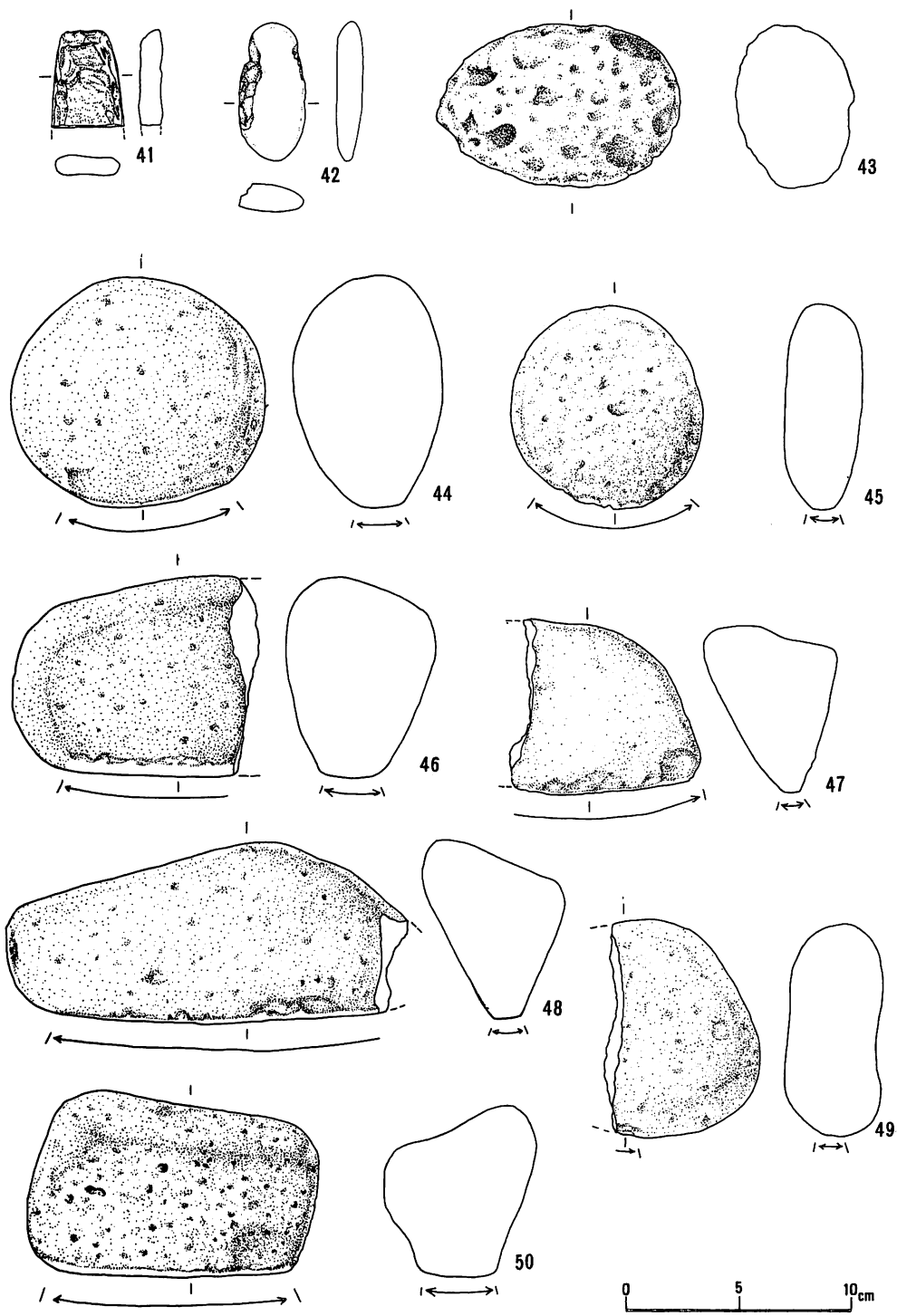
図VI-21 DH-8



図VI-22 DH-8出土の土器



図VI-23 DH-8出土の石器(1)



図VI-24 DH-8出土の石器(2)

その他に無文部分がある他は絡条体圧痕文が施文されている。下半部は横に11条の細貼付帯がめぐらされ、その帯間は下5段に細かい斜縄文、上6段に短縄文を施文している。I b-3類に分類したが、I b-2類の様相も合わせもつ。床面東側から底の内側に縄文の施された、土器底部(2)が出土した。外面の文様は縦横の細貼付帯と短縄文、細縄文、とで構成される。その他床面直上にはI b-3類の土器が多く、細貼付帯間を短縄文で埋めたものなどがある。I b-1類の土器が覆土にやや多く、中でも3・5・7・9のように三本組紐圧痕文が横走するものが多い。23は時期不明の手づくね土器である。24はI b-2類の土器片を使った有孔円盤である。降下軽石層の直下から前期の土器が出土している。20は羽状縄文で繊維の入ったII a-1類土器片である。II群土器の包含層からは、黒曜石と頁岩の細片が集中して出土した。中には29や40の石器が混入している。剥片石器はすべて覆土の出土品である。

番号	名 称	分 類	層位	重さ(g)	材 質	備 考	番号	名 称	分 類	層位	重さ(g)	材 質	備 考
1	土 器	I b-3	床				26	石 鏃	IA2a	覆土	2	Obs.	
2	"	"	"				27	"	IA3	"	2	Ha-Sh.	
3	"	I b-1	覆土				28	やり先又はナイフ	IB1	II層	10	Obs.	
4	"	"	"				29	石 鏃 類	IIA1	覆土	13	Ha-Sh.	覆土フレイク 集中
5	"	"	"				30	つまみ付きナイフ	IIIA1	"	10	"	
6	"	"	"				31	"	IIIA5	"	17	Obs.	
7	"	"	III層				32	スクレイパー	IIIB1	"	10	Ha-Sh.	
8	"	"	覆土				33	"	"	"	7	"	
9	"	"	II層				34	"	IIIB9	"	42	"	
10	"	"	覆土				35	"	"	"	15	Sh.	
11	"	I b-2	"			} 同一個体	36	"	"	"	4	Ha-Sh.	
12	"	"	II層				37	"	"	"	30	"	
13	"	"	"				38	"	"	"	36	"	
14	"	"	"				39	"	"	"	72	"	
15	"	"	覆土				40	"	"	"	78	"	覆土フレイク 集中
16	"	I b-3	床直				41	石 斧	IVA8	II層	26	Bl-sch.	
17	"	"	"				42	た た き 石	VA9	"	30	Gr-Mud.	
18	"	"	"				43	砥 石	VIB9	覆土	74	Pum.	
19	"	"	"				44	た た き 石	VA2	床直	885	And.	
20	"	II a-1	覆土				45	"	VA3	"	310	"	
21	"	II a-2	II層				46	す り 石	VI A1	覆土	887	"	
22	"	"	"				47	"	"	床直	375	"	
23	"	I b-4	覆土				48	"	"	"	960	"	
24	土 製 円 盤	I b-2	不明				49	た た き 石	VA2	"	445	"	
25	石 鏃	IA2a	覆土	1	Obs.		50	す り 石	VI A1	覆土	1,095	"	

表VI-17 DH-8 掲載遺物一覧表

31の両長辺の中央を打ち欠いたつまみ付きナイフの類例は、DH-2に3例ある。41は小型の石斧、42は小型のたたき石、43は軽石製砥石である。

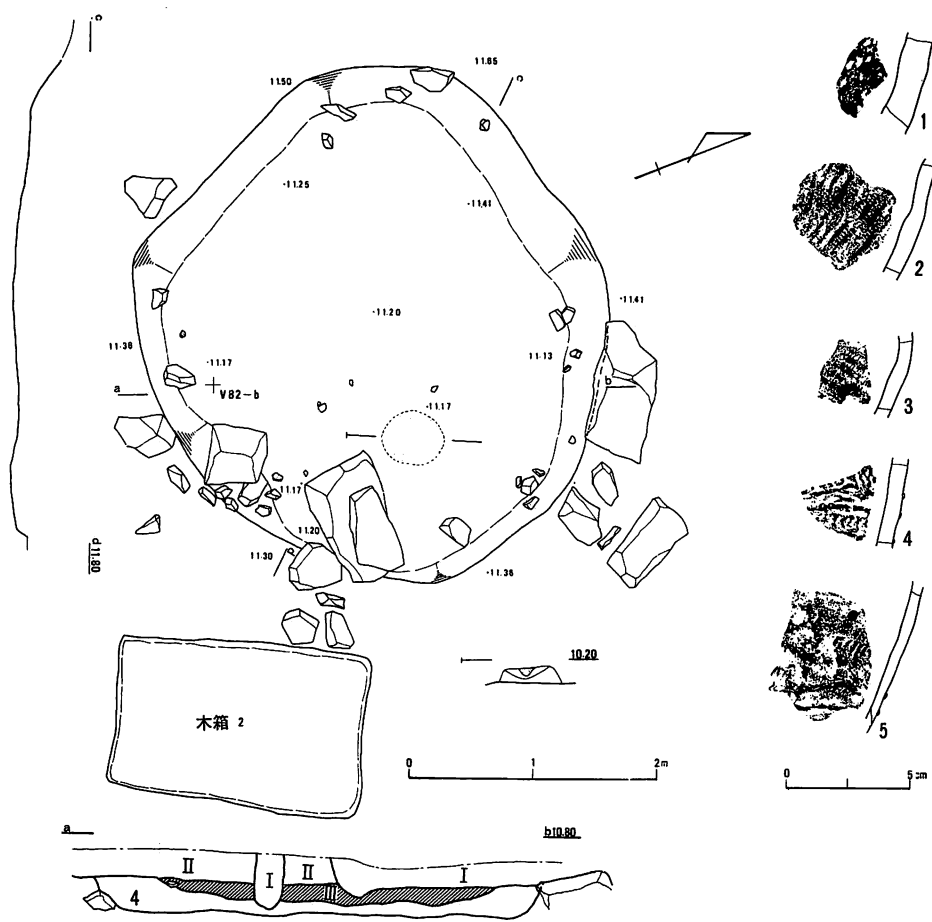
時期 床面の土器(1・2)からI b-3類土器の時期とする。

DH-9

位置 V-81-c、d、V-82-a、b

規模 4.16×3.79×0.30

特徴 平面形は不整円型。巨礫や水の影響で床、壁面はしまりを失っている。東寄りに床面よりやや浮いた状態で焼土がある。D地区住居跡では最も小型である。覆土に固くしまった降下軽石層が、レンズ状に堆積しており、当遺構発見の契機となった。



図VI-25 DH-9・DH-9出土の土器

遺物 総点数が少なく時期決定の決め手を欠く。I b-2、3類の土器片が床面直上に4片(2~5)あった。

時期 I b-3類土器の時期以前。

名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面
土 器	I b-1	3	
"	-2	1	
"	-3	3	
フ レ イ ク	IX B	2	

表VI-18 DH-9出土遺物一覧表

(計 9点)

番号	名 称	分 類	層 位	重 さ (g)	材 質	備 考
1	土 器	I b-1	不 明			
2	"	I b-2	床 直			
3	"	I b-3	"			
4	"	"	"			
5	"	"	"			

表VI-19 DH-9掲載遺物一覧表

DP-1

位 置 X-86-a、d

規 模 1.56×1.12×0.88

特 徴 火山灰と粘土混じりの土が相互にレンズ状に堆積していた。南北に長い卵形で、深い底面には巨礫がつかまっている。底面近くは水が浸出して、形状は把握しにくい。性格不明のピットである。

遺物 I b-1類土器胴部下半部1点が覆土より出土。磨滅のため判然としないがかすかに縄文が見える。

時 期 I b-1類土器の時期か。

名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面
土 器	I b-1	1	

(計 1点)

番号	名 称	分 類	層 位	重 さ (g)	材 質	備 考
1	土 器	I b-1	覆 土			

表VI-20 DP-1出土及び掲載遺物一覧表

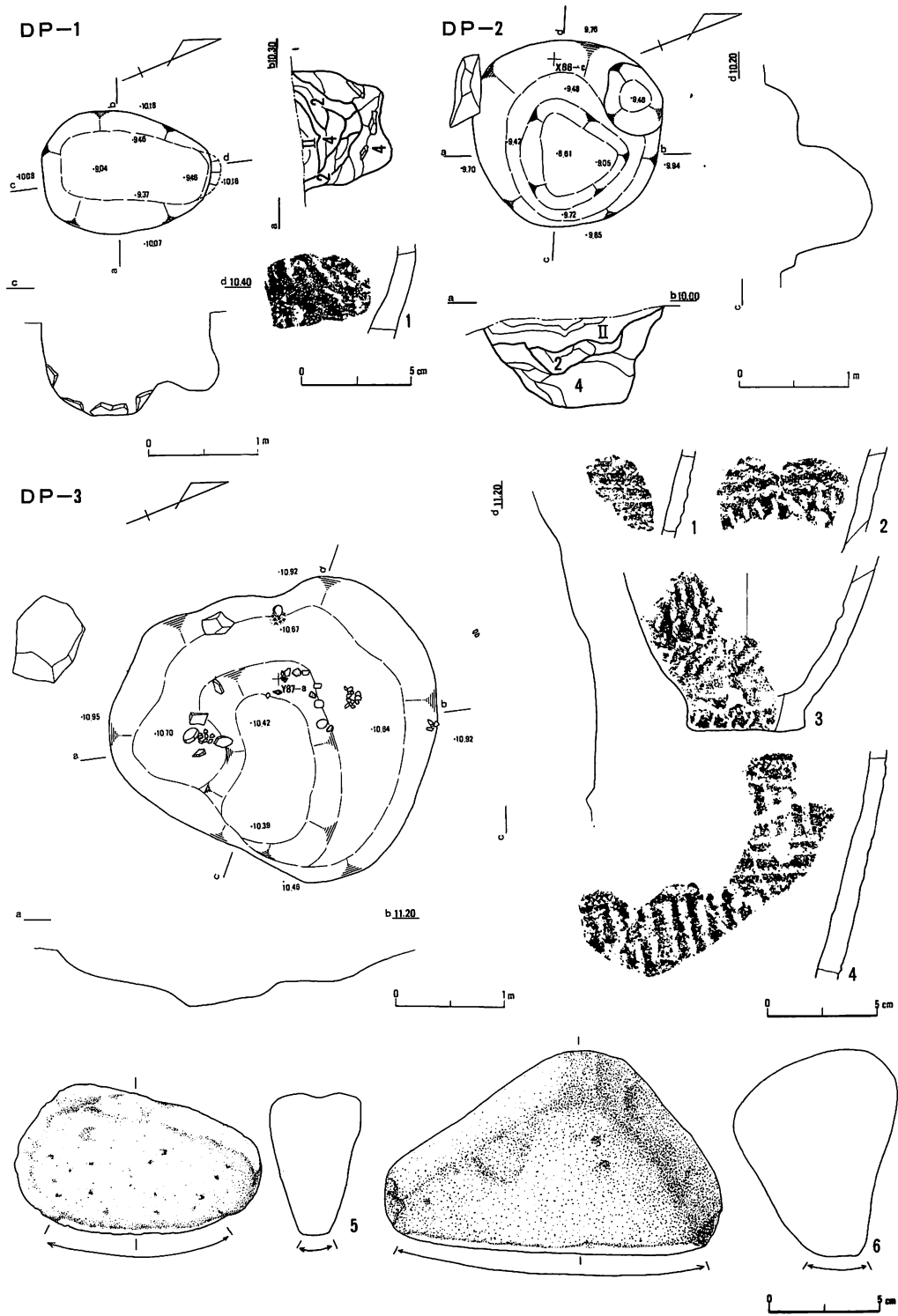


図 VI-26 DP-1・2・3

DP-2

位置 X-86-a、b、c、d

規模 1.73×1.69×0.89

特徴 平面形は円形で、底面に巨礫がないこと以外は、DP-1 とほぼ同様の構造や堆積状態である。遺物は出土していない。

時期 DP-1 と同じとすれば、I b-1 類土器の時期か。

DP-3

位置 X-86-c、X-87-b、Y-86-d、Y-87-a

規模 3.00×2.75×0.51

特徴 平面形は不整形な円形。底面は中央に1段低い面がある。浅い皿状のピットである。性格は不明。

遺物 I b-1 類の土器がほとんどで、特に三本組紐圧痕文のものが多く、2、3は表面調整がていねいで三本組紐圧痕文と短縄文で構成されている。石器はすり石が2個出土している。他に黒曜石のフレイクが多い。

時期 I b-1 類土器の時期。

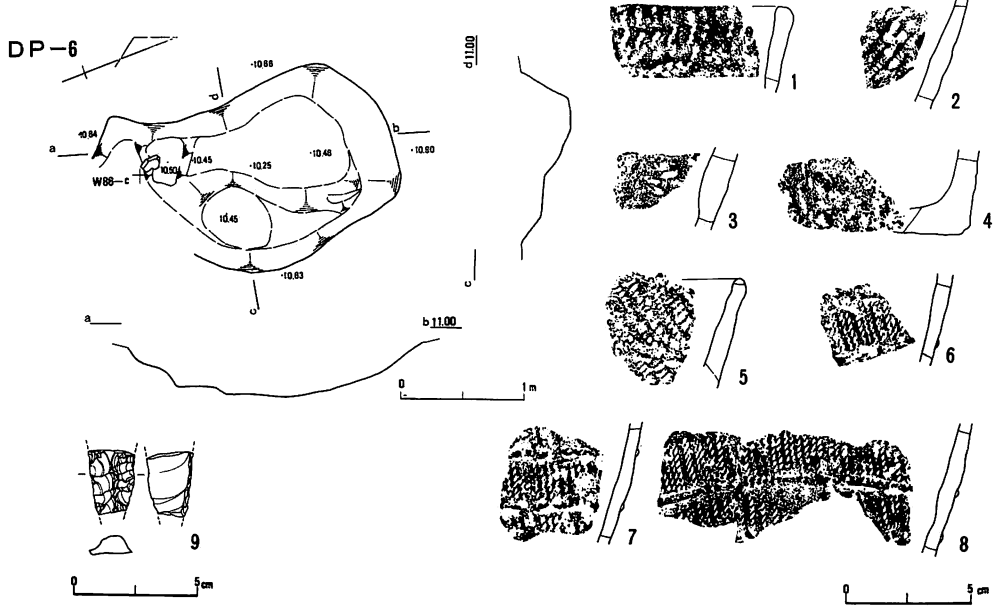
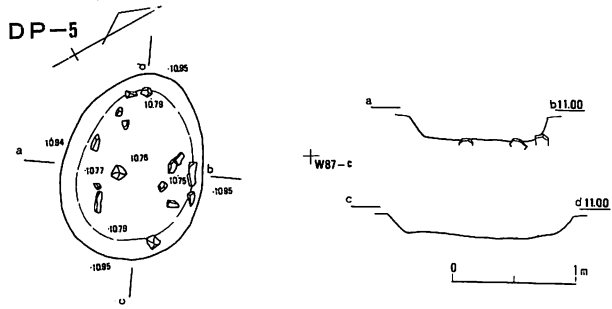
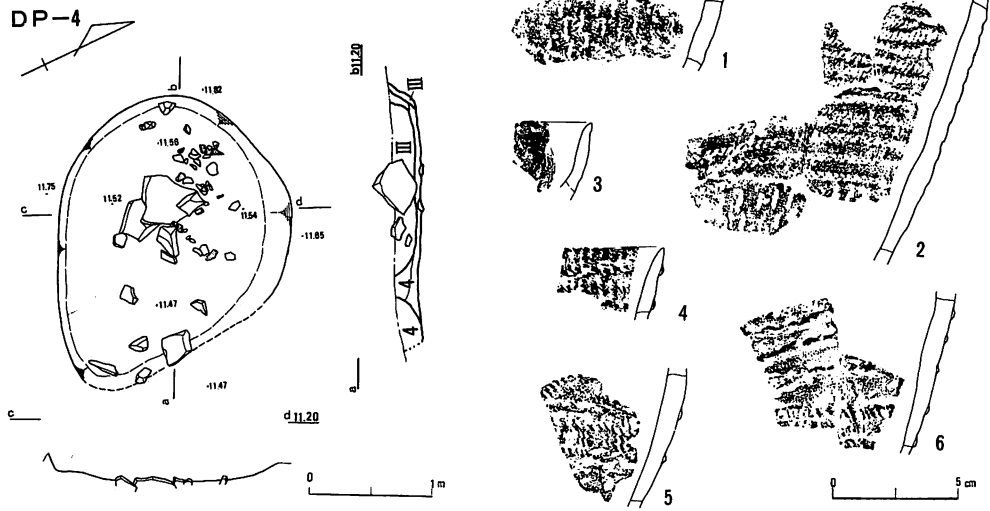
名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面
土 器	I b-1	45	
”	-2	2	
”	不 明	1	
す り 石	VI A 1	2	
フ レ イ ク	IX B	27	
加 工 痕 の あ る 礫	X B	1	
礫 ・ 礫 片		1	

表VI-21 DP-3 出土遺物一覧表

(計 79点)

番号	名 称	分 類	層 位	重 さ (g)	材 質	備 考
1	土 器	I b-1	覆 土			} 同一個体
2	”	”	”			
3	”	”	”			
4	”	”	”			
5	す り 石	VI A 1	”	355	And.	
6	”	”	不 明	1,145	”	

表VI-22 DP-3 掲載遺物一覧表



☒ VI-27 DP-4・5・6

DP-4

位置 W-87-b

規模 2.43×1.87×0.28

特徴 平面形は長軸を南東に向けた卵形。IV層に掘り込まれた底面は、平坦で固くしまっているが、礫が多い。中央西寄りに底面よりやや浮いた位置に、巨礫1個と小礫が集中し、礫の間に土器破片が入り込んでいる。東側壁面が攪乱で崩壊している。

遺物 底面より10cmほど浮いた位置に礫と混在して土器片が発見された。I b-1類の土器は、DH-7の1の復元土器に接合した破片である。I b-3期のものは、5、6のように細貼付帯横走と帯間に短縄文の施文されたものが多い。

時期 出土レベルでI b-1類土器が下位にあるので、I b-1類期のものと思われる。

名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面
土 器	I b-1	27	
”	- 3	62	
そ の 他 の 礫・礫 片		5	

表VI-23 DP-4 出土遺物一覧表

(計 94点)

番号	名 称	分 類	層 位	重 さ (g)	材 質	備 考
1	土 器	I b-1	覆 土			} 同一個体
2	”	”	”			
3	”	不 明	”			無文
4~6	”	I b-3	”			

表VI-24 DP-4 掲載遺物一覧

DP-5

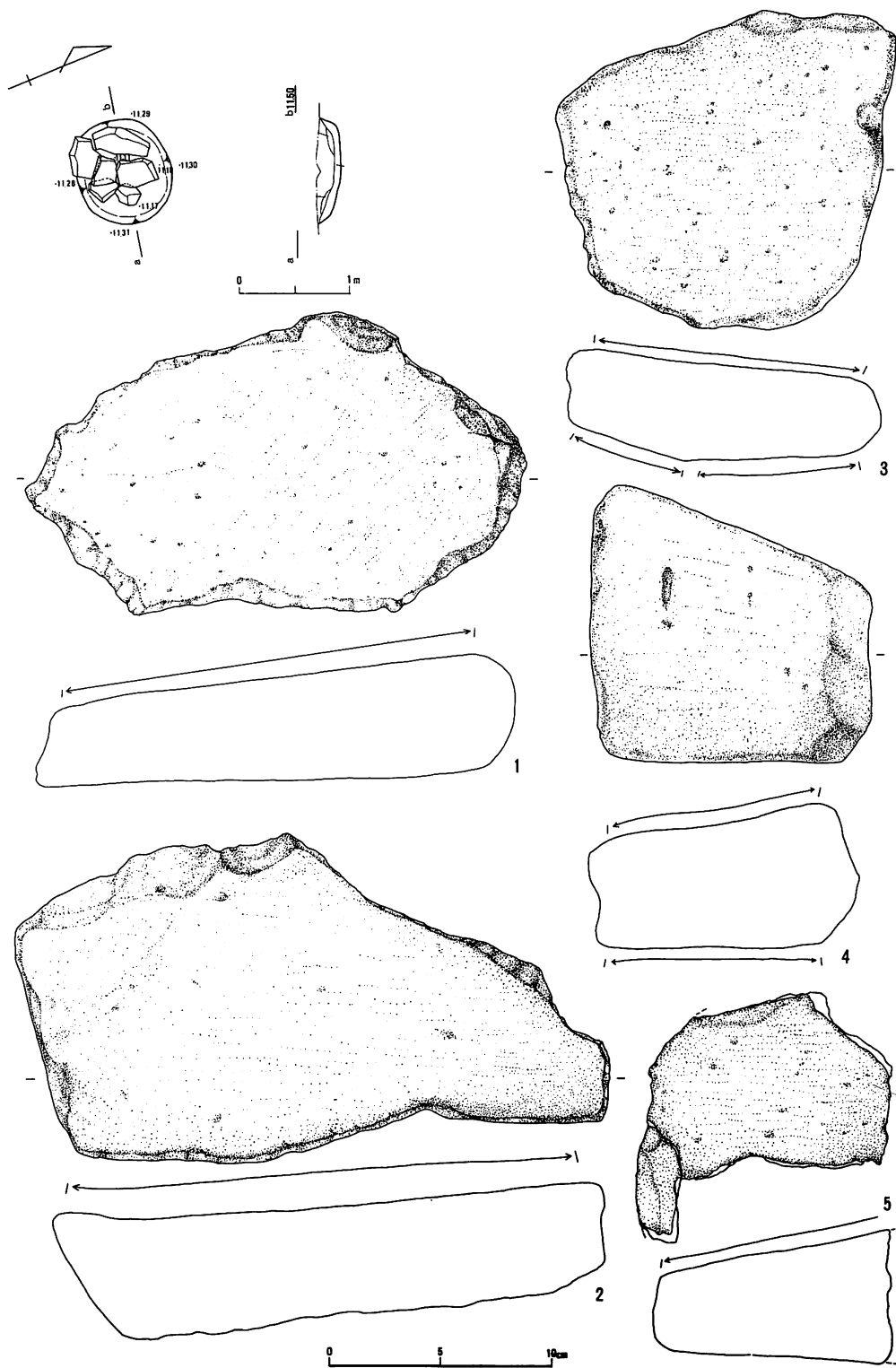
位置 W-87-b

規模 1.51×1.24×0.19

特徴 平面形は長軸を北西に向けた卵形。IV層に掘り込まれた浅い平坦な底面には礫が全面に突出している。土器はなく性格不明の小ピット。

遺物 フレイク1点。

時期 不明。



図VI-28 DP-7とDP-7出土の石器

DP-6

位置 W-86-a、b、c、d

規模 2.48×1.58×0.32

特徴 平面形、底面ともに不整形で、段差のある底面をもつ。覆土上層には降下軽石の層があった。風倒木痕の可能性もある。

遺物 すべて覆土からの出土。土器はI b-3類が多く、6~8は同一個体。横方向に細貼付帯をもちその帯間に短縄文が施こされている。

時期 I b-3類土器の時期。

名称	分類	数量	
		覆土	床面
土器	I b-1	10	
"	-2	3	
"	-3	38	
"	I b-	1	
つまみ付きナイフ	III A 1	1	

表VI-25 DP-5 出土遺物一覧表

(計 52点)

番号	名称	分類	層位	重さ(g)	材質	備考
1	土器	I b-1	覆土			
2	"	"	"			
3	"	"	"			
4	"	I b-2	"			} 同一個体
5	"	"	"			
6	"	I b-3	"			} 同一個体
7	"	"	"			
8	"	"	"			
9	つまみ付きナイフ	III A 1	"	5	Ha-Sh.	

表VI-26 DP-5 掲載遺物一覧表

DP-7

位置 X-86-d (DH-6内)

規模 0.96×0.86×0.22

特徴 DH-6 東側の床面に、床よりやや上から掘り込まれた円形の小ピット。

遺物 掘り込み面のレベルに石皿5個と巨礫1個が使用面を内側に傾けて環状に並んでいる。

遺物 1・2の2個が大型。他の3個は小型及び破片。

時期 I b-3類の時期以降。

名 称	分 類	数 量	
		覆 土	床 面
石 皿	VI B 1		5
そ の 他 の 礫・礫 片			1

表VI-27 DP-7出土遺物一覧表 (計 6点)

番号	名 称	分 類	層 位	重 さ(kg)	材 質	備 考
1	石 皿	VI B 1	不 明	14.1	And.	
2	"	"	"	24.5	"	
3	"	"	"	11.1	"	
4	"	"	"	10.6	"	
5	"	"	"	5.2	"	

表VI-28 DP-7掲載遺物一覧表

3. 包含層の遺物

1) 土 器

縄文時代早期 (I 群) の土器が断然多い。当地区は古い沢で南北に別れているが、I b-3 類は全体にほぼ均等にみられ、I b-1、2類は沢の北側に多い。沢の南側にはI b-4類がみられるようになる。また沢の上にIII a類の土器が集中出土している。図版では沢南、北、上に分けて掲載したが、説明は各分類ごとに行うものとする。

I 群(1~35・40~94) : 1~4・40~42をI a類、5~12・43~62をI b-1類、13~15・63~82をI b-2類、16~31・83~93をI b-3類、32~35・94をI b-4類として細分する。

a 類 (1~4・40~42)

いずれも薄手の無文である。4の底部はやや張り出し全面にささら状工具で表面調整されている。裏側はほとんどのものに指圧痕が残っている。ただし41はよく調整がなされている。

b-1 類 (5~12・43~62)

44・57・59は絡条体圧痕が施文されている。いずれも原体は太く、類品がDH-5、7にある。62は撚紐圧痕文をもつ。51・52・58は三本組紐の圧痕文が施されている。51・58は細い組紐が五段一組で施文され、51はその間に短縄文、58は上に斜縄文、下に縄端圧痕文が施されている。52は太い組紐でその上に斜縄文が入る。54はDH-5、7にみられる魚骨の回転によると思われる文様を施した土器である。6は粘土紐をはりつけて、口唇部を幅広くし、その上を撚紐で刻んでいる。60は縄文を地文とし、太く短かい粘土紐を貼りつけたもので、その上下面に撚紐による圧痕を施している。焼成は良い。

7・8・45・47・50・61は撚紐圧痕文が主役である。口唇直下と底部のくびれ部に施されるのが一般的であるが、50は胴部にこれがある。

8・45は口唇下から斜めに短縄文が入る。45・47は口唇部にも撚紐圧痕による刻みを施す。12

は紐端結節の羽状縄文を施したもので、裏面には指圧痕がはっきり残っている。11・50・53は羽状縄文の施されたもので、11は張り出しのある底部でわずかに縄文がみられる。53は縦方向に羽状縄文が走るものでDH-5に類品がある。5・9・46・48・49はいずれも縄文のみ施されたものですべて口縁部である。ただし5には口唇にのみ撚紐圧痕による刻みがある。9と49は波状口縁で、49は特に薄手で細かい縄文をもつ。10・43・55・56は無文で、表面調整がていねいで、いずれも焼きがよい。10は径1cmほどのスタンプ状のくぼみがある。55、56は同一個体の口縁と底部である。

b-2類 (13~15・63~82)

器形は、深鉢形がほとんどを占める。13・64・66・67・71・82は棒状工具で細い貼付帯に刻みを入れる。69は絡条体圧痕で刻み、66・68・72・73は撚紐圧痕による細い貼付帯への刻みが入る。13はDH-8に同一個体があり、口縁部に2本の細貼付帯をもつ。上1本には深い刻みが入っている。地文は細かい縄文である。67・70・77は同一個体である。口唇の一本の貼付帯を棒状工具で刻む。全体に細い縄文、縄端結節羽状縄文が交互に施文され、底部は数段にわたり短縄文がみられる。15・75も撚紐圧痕文の底部である。胴部の縄端結節羽状縄文は81にも施文されている。82は結束羽状縄文を地文とし、底部付近は短縄文、その上部に棒状工具による刻みをもつ2本の細貼付帯がある。底部は粘土紐貼り付けによる張り出しがあり、約2cmおきに指圧痕のへこみがめぐっている。64は口唇から3cmほどの範囲の短縄文帯に、棒状工具で軽くおさえられた刻みをもつ二本の細い粘土紐が貼付されている。下部は斜縄文である。66と72は、口縁部2本の貼付帯に撚紐で刻みを入れている。地文は細い縄文である。66はさらにその下部に棒状工具で刻みを施した細貼付帯をもつ。

68・69・71・73・74・80は絡条体圧痕文が施されたものである。68は貼付帯で区画された部分に短縄文が入っている。71は細い貼付帯が短縄文や棒状工具で刻まれ、帯間に絡条体圧痕を施文する。73・74・80は同一個体、73の縦貼付帯は短縄文で刻みが入られている。74・80では横方向の貼付帯より下は細かい斜縄文になっている。69は地文が絡条体圧痕文で口縁の突起につづいて太い縦の貼付帯がつけられている。貼付後両脇を絡条体で押えつけ、さらに貼付帯上にも施文している。14・76・78は斜縄文のみの底部で、76は72の底部、78は73・74・80の底部の可能性がある。63と79は無文。同一個体である。

文様構成を大づかみにみると、DH-7で出土した全体縄文だけのもの(図VI-18-12)は稀で、縄文を地文として横走る細い貼付帯が全面にあるものと、下半部にあるものに分けられる。下半部に数条の貼付帯が入るものには、口唇に1・2条の貼付帯をもつだけのものと、上半部が絡条体圧痕文と縦横の貼付帯で複雑に構成されるものがある。貼付帯や口唇には刻みの入るものが多い。

b-3類 (16~31・83~93)

DH-8の土器にみられるように、文様構成等でI b-2類に近い様相を示すものが多い。主に細い貼付帯か微隆起線文をつくり、その後に施文するものを特徴とする。19と27は微隆起

線文である。貼付帯に撚紐による刻みがあるのは、16・28・30のみで、他の破片は帯間に施文された短縄文が貼付帯にまでかかるものが多い。絡条体圧痕が施文されたものは16・19～21・26・85・86～88・89で、16・19～21・26・30の沢南のものは短縄文が併用されている。16は口唇直下に細貼付帯を1条めぐらし、そこから縦貼付帯を下ろし、樹枝状に絡条体圧痕文を施す。19・21と24は同一個体の可能性が強い。絡条体圧痕文の文様帯を微隆起線で区切り、その下部に微隆起線を数条めぐらし、上から撚紐をおしたものである。20はこの微隆起線が細貼付帯になっている。26の底部内側には文様がある。DH-8の文様と異なり、絡条帯圧痕と棒状刺突による。85・86の口唇直下に1条の細貼付帯がある。87・88は同一個体で波状口縁である88の一部には、絡条体圧痕文を施した部分がある。93は細い貼付帯の間に同一原体による縄文と、半置半転の圧痕文(短縄文)が施文されている。

90・91は縄文のみの底部で、91は底内部中央に貼付と思われる突起をもつ。23は貼付帯の上から細い縄文を施したもの。25は微隆起線の上にそれがなされている。

b-4類(32～35・94)

32・33は同一個体、32は波状口縁で、口唇部に短縄文を施文し、33・94と同様、胴部に羽状の撚糸文を施す。33は羽状縄文ではさまれた空間に上下に2条の綾絡文をめぐらし、中央に3列の縄端による刺突列がある。34は口唇から2条1組の綾絡文を下方までめぐらす。35は太い縄文が施文されている。

II群a類(36～39・95・96)：a-1類はDH-8の覆土からまとまって発見されたものの他、36がある。他はa-2類に属する。(37～39・95・96)。

a-1類(36)

ゆるい波状口縁をもち全面に羽状縄文が展開する。

a-2類(37～39・95・96)

厚手の土器で、不規則な縄文が施文される。39・96はへら状工具による内面調整がなされており、光沢がある。

III群a類(97・102～108)

102～108は沢上出土で、102は断面の丸い口唇の直下に幅広のうすい貼付帯があり、結節羽状縄文が施されている(103は口唇に刻みをもつ)。104と107・108は同一個体で、握り拳状の突起には撚紐による4本の刻みがあり、口縁には、短く細い粘土紐が表裏にわたってかけられている。貼付帯には紐状のものと環状のものがあり荒い刻みが入っている。105は猪口状の突起をもち、その中央から縦に太い貼付帯がつけられている。猪口状の口唇部には撚紐による刻みが入っている。106は外側に稜をつくる口縁で、その下の文様は結束羽状縄文である。

IV群a類(98・99及び100・101)：

100・101は同一個体で、時期不明だが、IVa類に近いものと考えられる。98は口縁に細い沈線文が施されている。

2) 石器等

黒曜石、頁岩のフレイクの集中が数ヶ所みられたため総点数は15,000点以上と多いが、道具は約350個にすぎず、そのうち約250個が包含層出土のものである。土器からもわかるように早期の遺跡ということで、当然石器も当該期のものが大半である。石鏃は早期の柳葉形のもの(1)や五角形のもの(2)が破損して出土するものが多く、図示に耐えず、早期以降のものを多く図示した(3~7)。やり先またはナイフは早期のものが3点出土しているうち2点を図示した(8・9)。石錐(10~12)は全例頁岩である。つまみ付きナイフ(13~23)はⅢA-1類(13~19)が断然多くⅢA-5類(23)の両長辺に打ちかきを入れ、つまみと刃部を同じような大きさにつくったもの(23)も1個出土している。類例はDH-2・8にある。スクレイパー(24~26)は数は多いが不定形で図示に耐えるものが少ない。早期のものは遺構からの出土がより多い。石斧は遺構からの出土がほとんどで、数が少ない。礫石器はたたき石(27~29)や、すり石(30~40)が多い。29は軟質砂岩製で端を使用している。すり石は、早期の形態を示す断面三角形のもの(30~35・37)や扁平礫利用のもの(36・38・39)がほとんどである。石皿は安山岩製のもの(42)を1点図示した。このほか板状の安山岩(鉄平石)を石皿に利用することがあったらしい。43に図示した大型のもの他、DP-7やE地区、C地区でも出土している。砥石は扁平礫の片面を利用した砂岩製のもの(41)が1点出土した。遺構の項で若干触れたが、降下軽石層の直下、直上の前期土器の包含層には、黒曜石や頁岩のフレイクチップの集中が数ヶ所みられ、製品やフレイクも混入している。また早期包含層に混入してW-88-bからマイクロコアらしきものが出土している。別項にて詳述する。

その他、土器片を利用した円盤が発見されている。中には有孔のものもある。44は沢南側からの出土でIb-3類土器の利用、45~47は沢北側で3個ともIb-1類土器の利用である。46は有孔円盤の未製品で両面から穿孔しようとした痕跡がみられ、完成品の47とともに、D地区東端のX-87-b・c、Y-87-a・dにわたる風倒木痕のような落ち込みの中から発見されたものである。そして、この落ち込みの中からは滑石製で、北海道では類例のない形状と角孔をもつ珧状耳飾の半欠が出土した。珧状耳飾については別項で詳述する。

VI D地区の調査

番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
1	I a	W-82-a-134	以下39まで 沢南側出土	41	I a	V-87-b	
2	"	V-82-b-6		42	"	X-87-c-12	
3	"	V-82-b-9		43	I b-1	W-87-c-10	
4	"	W-82-a-104 108		44	"	W-88-a-3	
5	I b-1	W-83-b		45	"	V-87-b-1	
6	"	V-83-d		46	"	W-87-a- ¹¹ 80 108	
7	"	V-83-c		47	"	X-87-b-72	
8	"	X-83-c		48	"	X-86-c-8	
9	"			49	"	W-88-a-62	
10	"	W-81-d-43		50	"	W-88-b-3	
11	"	S-85-b-1 T-85-a-1		51	"	Y-87-a-27	
12	"	W-82-a		52	"	X-87-b-16	
13	I b-2	W-82-a	53	"	X-87-b-16	56と同一個体 無文 55と同一個体 無文	
14	"	X-82-c	54	"	Y-88-a-1		
15	"	W-81-d	55	"	Y-88-a-36		
16	I b-3	V-82-b-16	56	"	Y-88-a-21		
17	"	W-82-a-57	57	"	W-87-a		
18	"	V-82-b-3・4	58	"	W-88-a-130		
19	"	W-82-a-169	59	"	W-88-a-73		
20	"	W-82-a	60	"	Y-88-a-36		
21	"		61	"	X-87-b-63		
22	"	W-82-a	62	"	Y-88-a-1		
23	"	W-82-a-128	63	I b-2	W-88-a-89- ¹¹⁹ 122		79と同一個体 無文
24	"	W-82-a-169	64	"	X-88-d-6		70・77と 同一個体
25	"	W-82-a-172	65	"	W-88-a- ^{68 69} 75 97 122 125		
26	"		66	"	V-87-c-25		
27	"	W-82-a-113	67	"	W-87-a- ¹¹ 80 108		
28	"	W-82-a-117	68	"	X-87-b-80		
29	"	W-82-a-16	69	"	X-87-b-71		
30	"	W-82-a-190	70	"	W-87-a- ¹¹ 80 108	67・77と 同一個体	
31	"	W-82-a	71	"	W-87-a- ² 4 6	76と 同一個体 74・78・80と 同一個体 73・78・80と 同一個体	
32	I b-4	W-82-b-23	72	"	Y-87-a-12		
33	"	W-82-b-12	73	"	W-88-a		
34	"	W-84-a-1	74	"	W-88-a-80	72と 同一個体 67・70と ¹¹ 80 108 同一個体 73・74・80と 同一個体 63と 同一個体 73・74・78と 同一個体	
35	"	W-82-a-31	75	"			
36	II a	X-83-c-4	76	"	Y-87-a-12		
37	"	X-83-c-9	77	"	W-87-a- ¹¹ 80 108		
38	"	W-82-a	78	"	X-88-d-5		
39	"	W-82-a-31	79	"	W-88-a- ¹²² 142		
40	I a	X-87-b-75	80	"	W-88-a		

表VI-29① D地区掲載土器一覧表

番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
81	I b-2	V-87-b-1		95	II a	X-87-b-19	
82	"	X-87-b		96	"	X-87-a-8	
83	I b-3	W-87-a- ¹¹ ₈₀ 108		97	"	U-86-a-1	
84	"	X-88-b-137		98	IV a	V-88-b-1	
85	"	X-87-c-8		99	"	V-88-b-1	
86	"	X-87-b-86		100	不明	V-88-a-4	
87	"	X-87-b-49		101	"	V-88-a-3	
88	"	X-87-b-92		102	III a	S-85-b-1	以下沢上 集中出土
89	"	X-87-b-61		103	"	T-85-a-16	
90	"	W-87-d-3		104	"	T-85-a-5	107・108と 同一個体
91	"	V-88-b-7		105	"	S-85-b-1	
92	"	W-87-a-11		106	"	T-85-b-1	
93	"	W-88-b-13		107	"	T-85-a- ⁶ ₁₉	104・108と 同一個体
94	I b-4	Y-88-a-7		108	"	T-85-a-6	104・107と 同一個体

表VI-29② D地区掲載土器一覧表

番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	備考
1	石 鏃	IA2 a	W-81-d	0.4	Obs.		25	スクレイパー	III B 9	X-88-b	6.9	Sh.	
2	"	IA2 b	W-86-a	(1.5)	"		26	"	"	表 採	34.0	"	
3	"	IA3	X-84-a	(2.2)	"		27	たたき石	VA-2	W-83-a	605	And.	
4	"	"	Y-87-a	1.1	Sh.		28	"	"	Y-87-a	600	Mud.	
5	"	"	Y-87-a	2.0	"		29	"	VA9	W-82-b X-82-a	130	Sa.	
6	"	IA4	W-82-b	(1.7)	Obs.		30	すり石	VI A 1	W-82-b	310	And.	
7	"	IA5	T-85-a	1.7	"		31	"	"	X-84-a	815	"	
8	やり先又はナイフ	IB2	Y-88-a	26.0	Sh.		32	"	"	W-83-a	1,635	"	
9	"	"	表 採	10.5	"		33	"	"	W-83-a	1,270	"	
10	石 鏃 類	II A 1	Y-88-a	2.0	"		34	"	"	W-88-c	1,710	"	
11	"	"	W-81-c	6.0	"		35	"	"	X-88-b	160	"	
12	"	"	W-88-a	3.6	"		36	"	VI A 2	X-84-a	145	"	
13	つまみ付きナイフ	III A 1	Y-87-a	4.9	Che.		37	"	VI A 1	Y-84-a	1,070	"	
14	"	"	W-82-a	3.8	"		38	"	VI A 2	W-83-a	305	"	
15	"	"	W-87-d	7.7	Obs.		39	"	VI A 2	X-88-b	765	"	
16	"	"	W-83-c	20.0	Ha-Sh.		40	"	VI A 9	V-88-a	1,025	"	
17	"	"	Y-88-a	4.0	Sh.		41	砥 石	VII B 9	表 採	330	Sa.	
18	"	"	X-83-a	8.2	"		42	石 皿	VI B 1	V-82-c	7,800	And.	
19	"	"	表 採	9.6	Obs.		43	"	VI B	W-88-a	19,500	"	
20	"	III A 2	T-85-a	20.8	Sh.		44	土製円盤	I b-3	W-82-a			
21	"	III A 4	W-82-b	20.0	"		45	"	I b-1	W-88-b			
22	"	III A 3	X-84-a	6.7	"		46	"	"	X-87-c			
23	"	III A 5	X-86-c	(4.5)	Obs.		47	"	"	Y-87-d			
24	スクレイパー	III B 2	W-87-d	1.8	"								

表VI-30 D地区掲載石器等一覧表



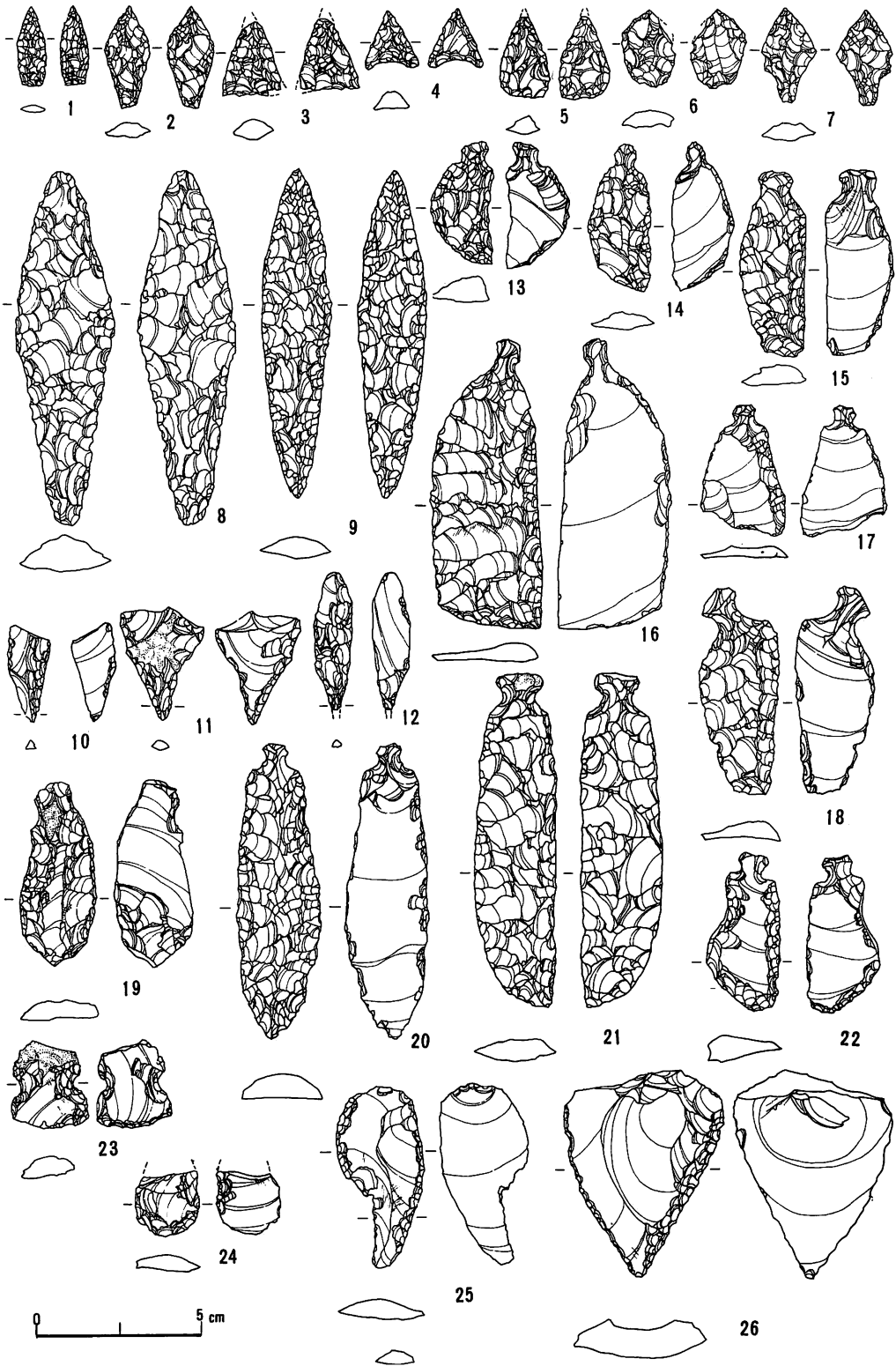
図VI-29 包含層出土の土器(1)



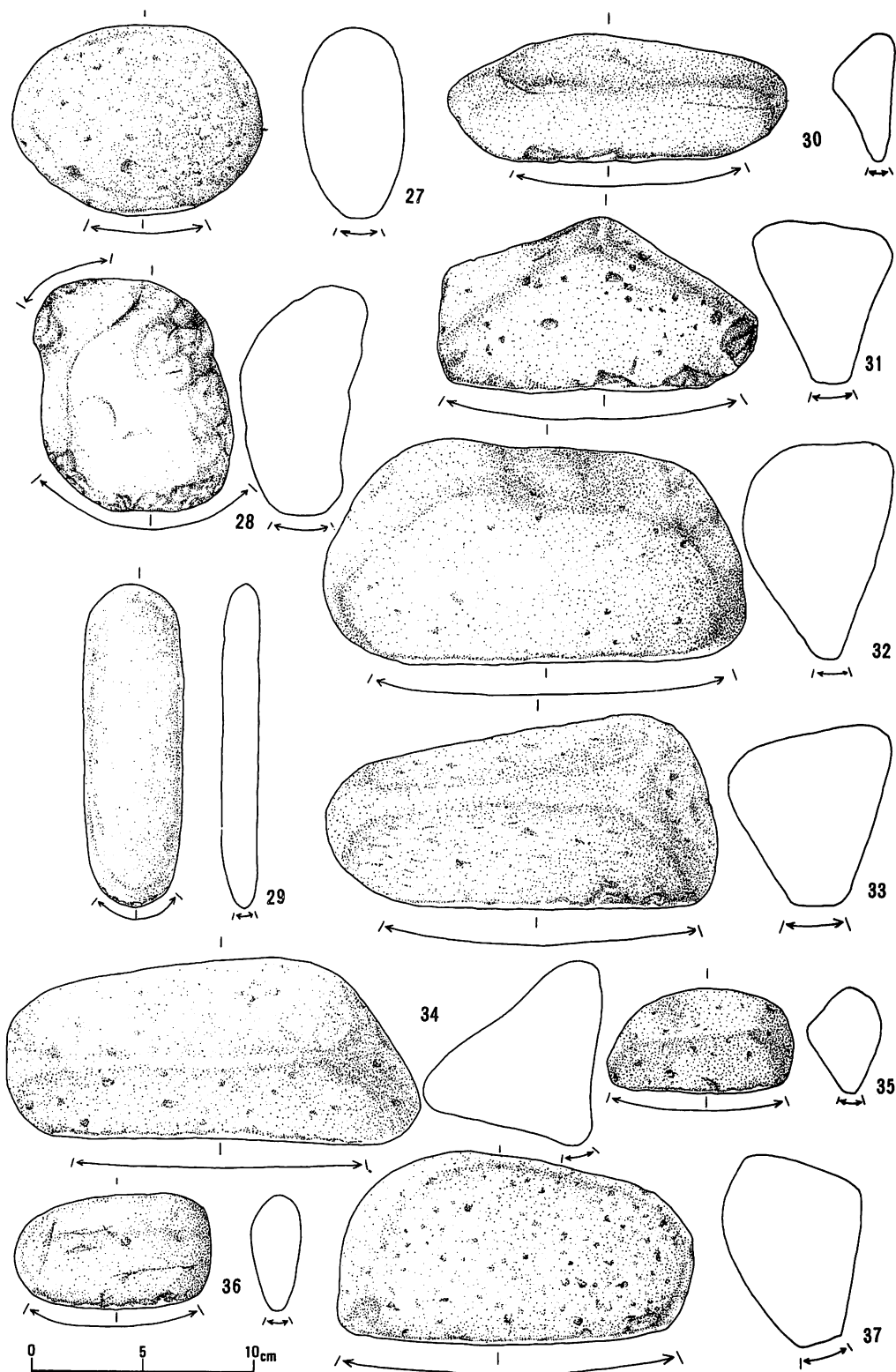
図VI-30 包含層出土の土器(2)



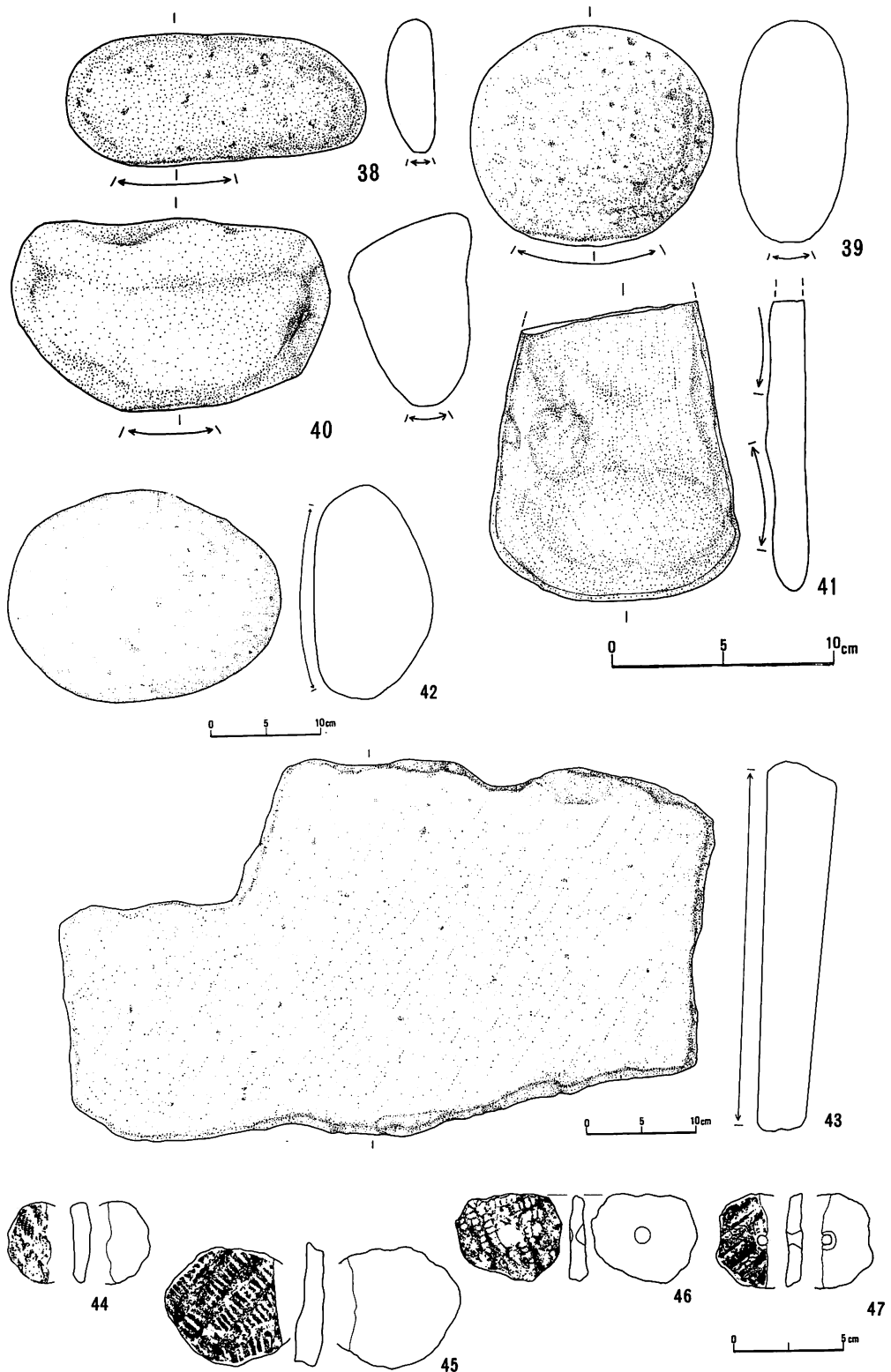
図VI-31 包含層出土の土器(3)



図VI-32 包含層出土の石器(1)



図VI-33 包含層出土の石器(2)



図VI-34 包含層出土の石器等

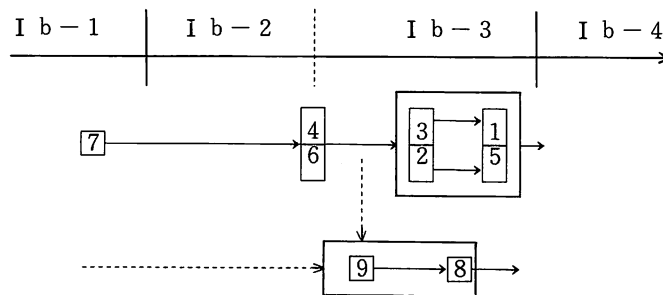
4. 小 括

縄文時代早期の集落を調査できたことは、今回の調査の成果である。土器分類でI b-1～3類の時期にあたる住居跡が計9か所発掘され全体の出土遺物の分類や床面土器の分析等から特にI b-3類土器の時期が中心と考えられる。そこで各住居の新旧関係、ひいては住居の移動と集落形成についてここで概観してみよう。まず各住居の時期を土器分類に照らしてみると、遺構各説で示したごとく、沢北側ではI b-1類期にDH-7、I b-2～3類期にDH-4と6の2軒、I b-3類期にDH-1・2・3・5の4軒、沢南側ではI b-3類期にDH-8とDH-9の2軒となる。I b-3類期では、上げ土の状態からみてDH-3がDH-1より古い。

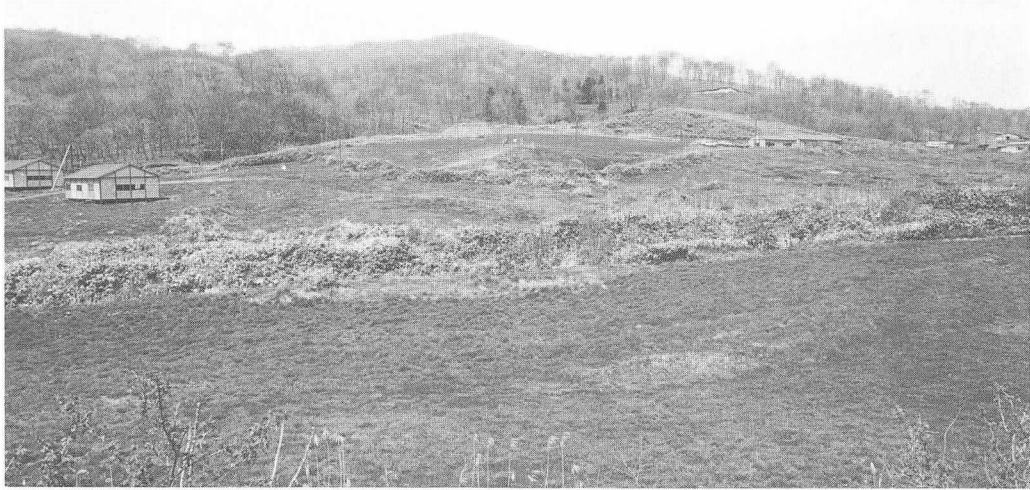
定住の開始は、I b-1類期のDH-7からという見方ができるほか、沢南の西北側にもこの時期の住居跡が存在する可能性も残る。I b-2類期と断定できる住居がないが、b-3類土器にb-2類の様相が色濃く入るものがあるなど、b-2類と3類の混在を指摘できるかも知れない。さらに、DH-4とDH-6にあった覆土の焼土(DF-1、2)や、若干浮いた位置にあったDH-9の焼土は、住居跡の廃絶以降に埋没過程のくぼみを利用した、I b-3類期の所産と考えれば、周囲にb-3類期の集落があったことと、相関関係をもってくる。

以上のような観点から、分布を考慮しつつ、大小各1軒の2軒単位(例えばDH-2と3・8と9)を基本として集団の発展を検討すれば、展開は下図のような概略で説明できよう。

(□数字は住居跡番号)



I b-2類期の住居がないため確実なことは言えず、□7→□4・□3→□1・□6→□2という個別の展開をみた方がよいのかも知れない。b-2～3類期において住居が、b-2類期から長期間営まれていた可能性もあろう。最後に、b-3類期以降の集落の動きを想像してみると、沢南側はE地区でI b-4類土器の出土が多いことを考慮し、E地区への発展、沢北側は未調査のB地区への発展の可能性、という構図を描くことができるように思う。



1. 発掘調査前全景



2. 25%調査



3. 発掘終了後全景

図版VI-2



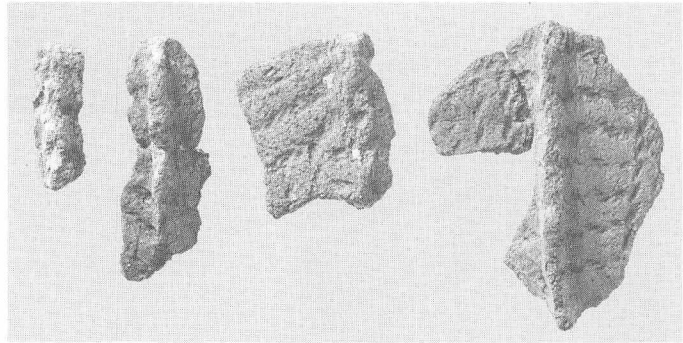
1. 沢北側住居跡群



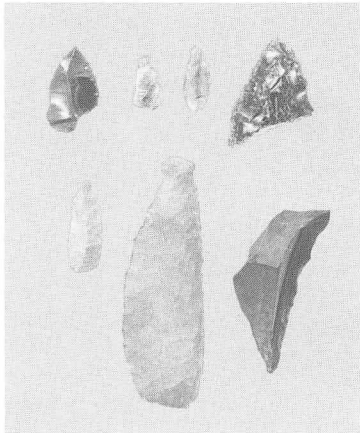
2. DH-1



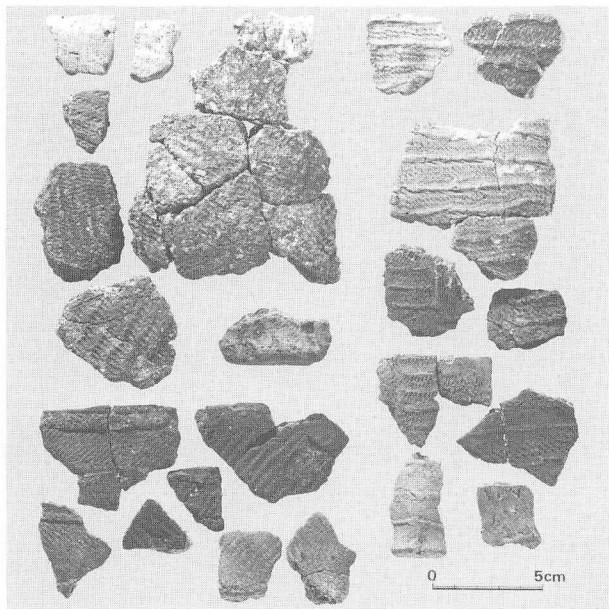
1. DH-1 出土の土器(1)



2. DH-1・3 出土の方形土器

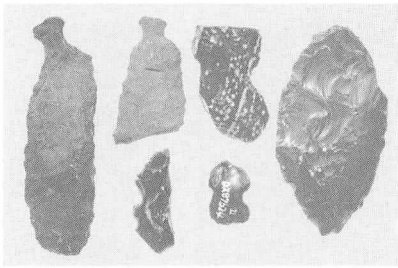
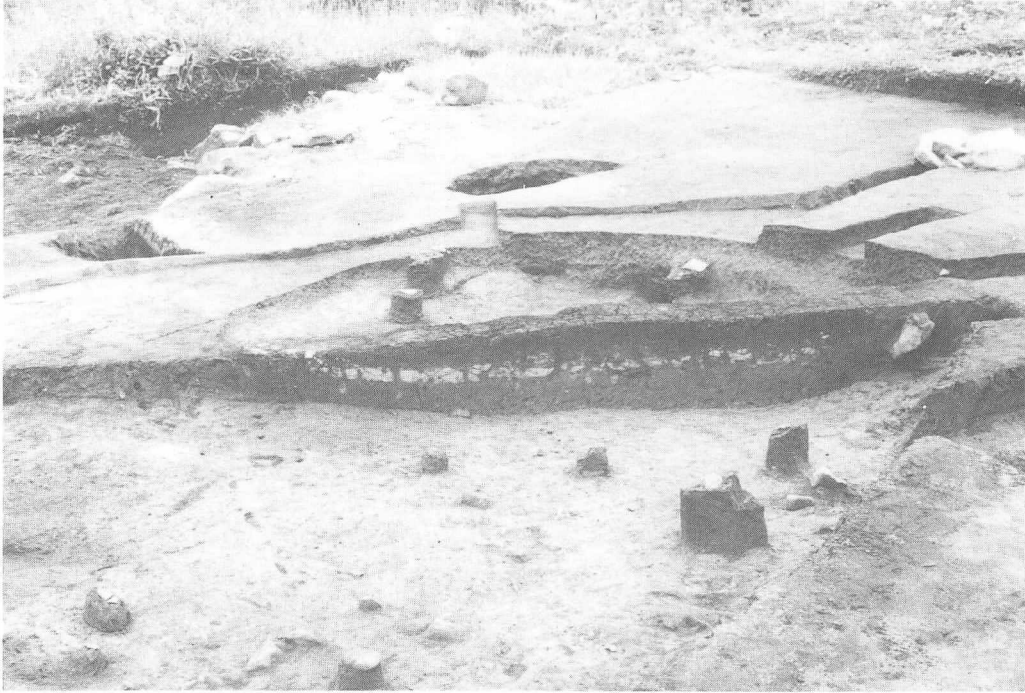


3. DH-1 出土の石器



4. DH-1 出土の土器(2)

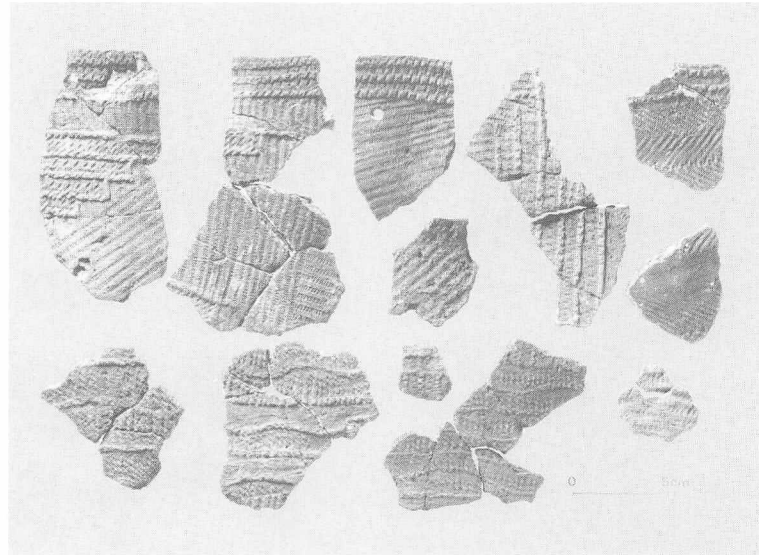
図版VI-4



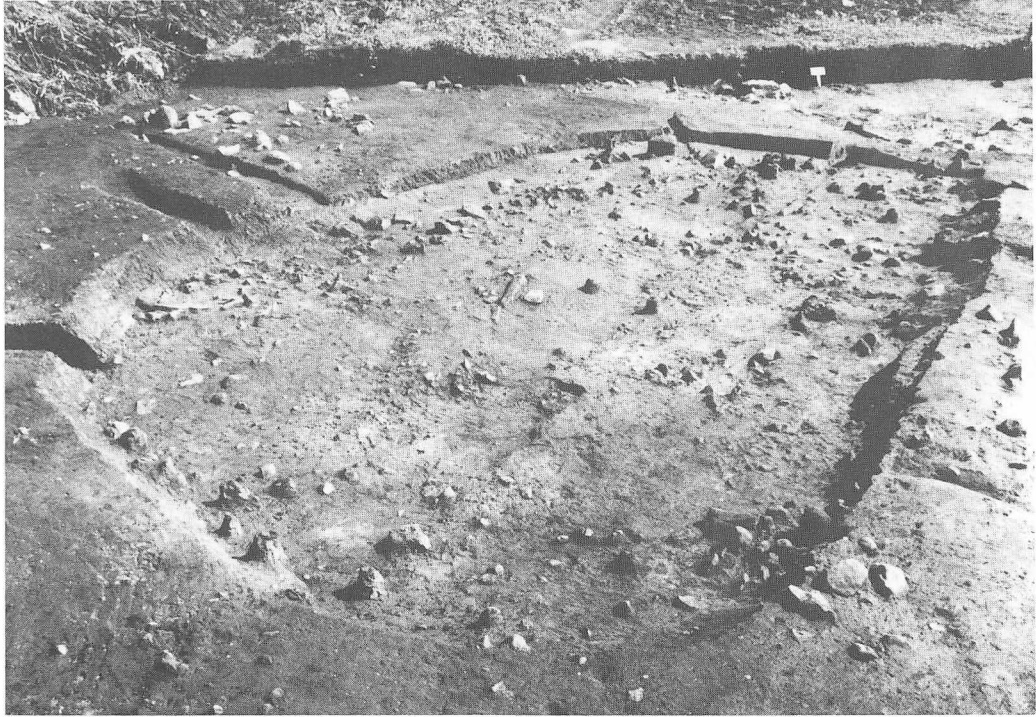
2. DH-2 出土の石器



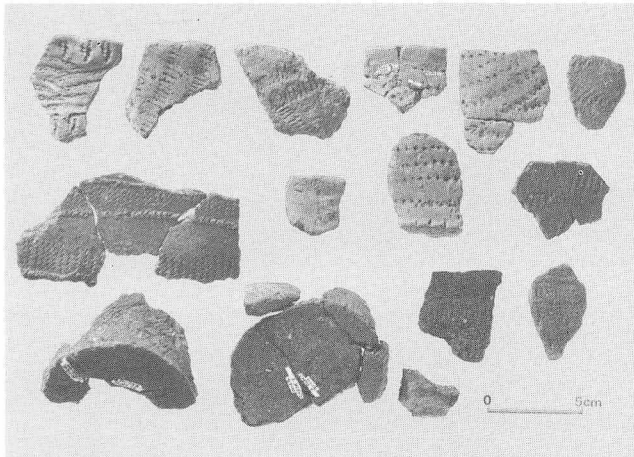
3. DH-2 出土の石斧



4. DH-2 出土の土器



1. DH-3

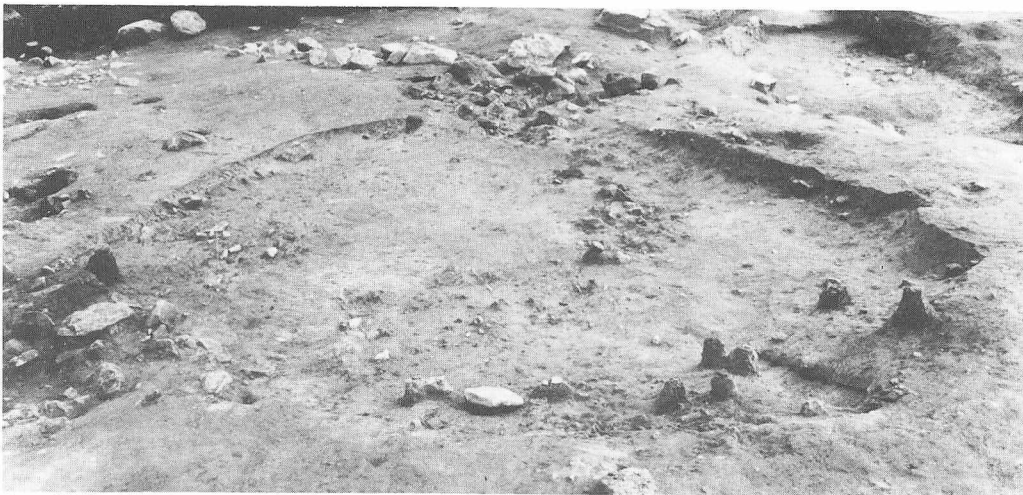


2. DH-3 出土の土器

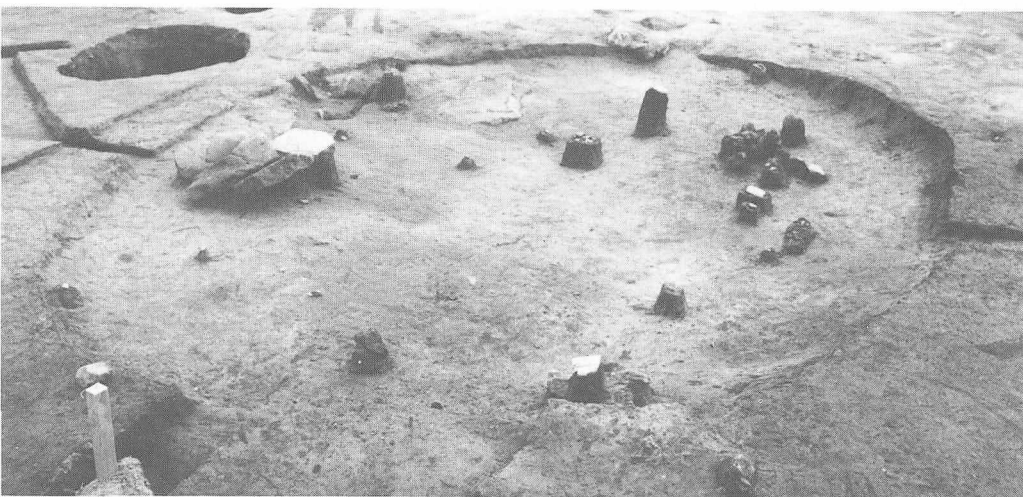


3. DH-4

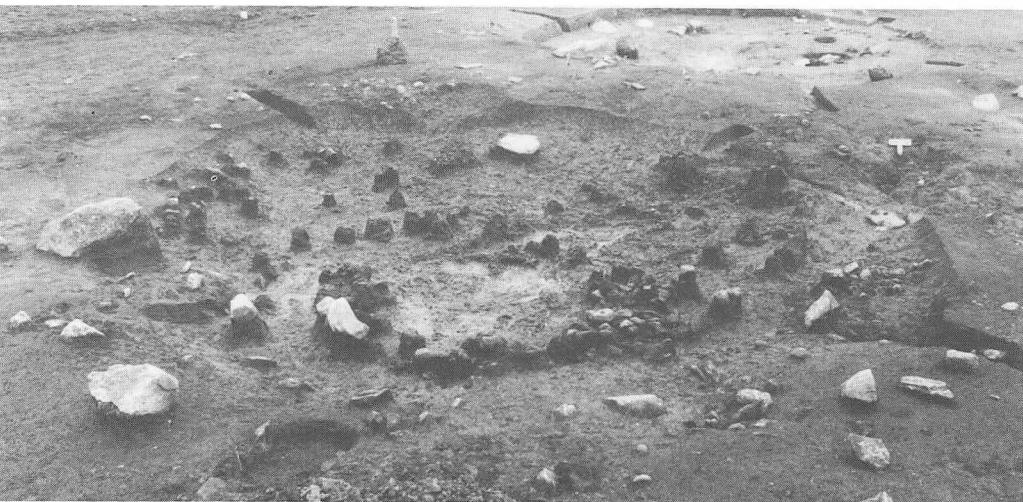
図版VI-6



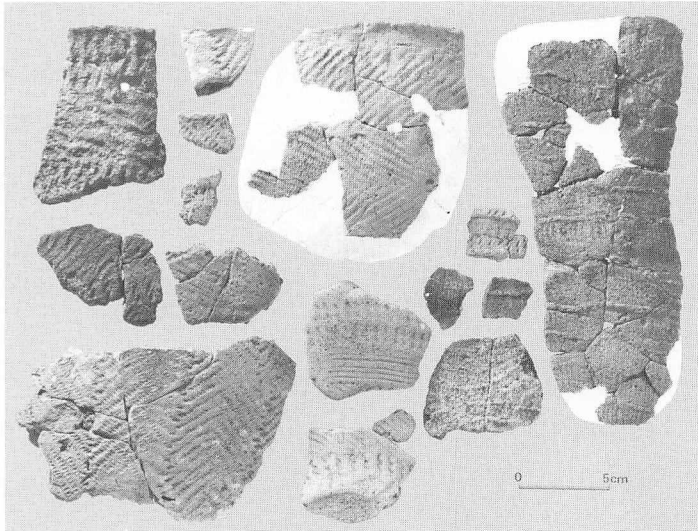
1. DH-5



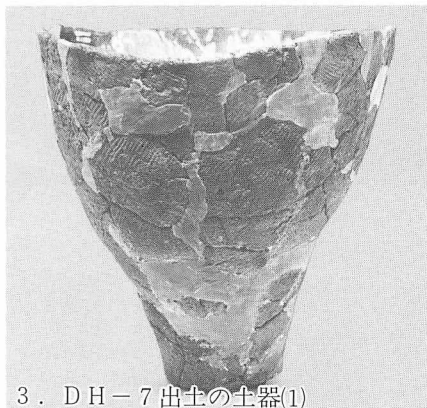
2. DH-6



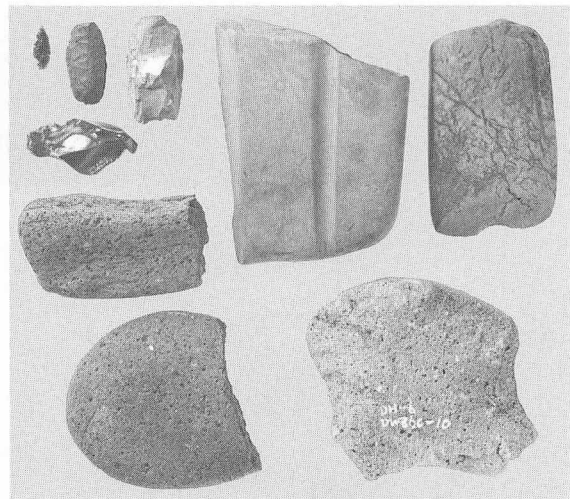
3. DH-7



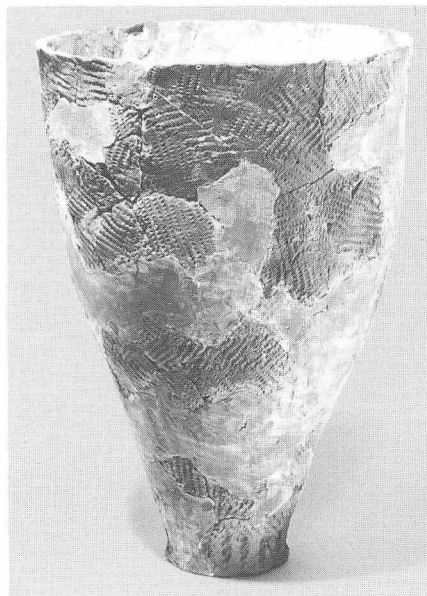
1. DH-5 出土の土器



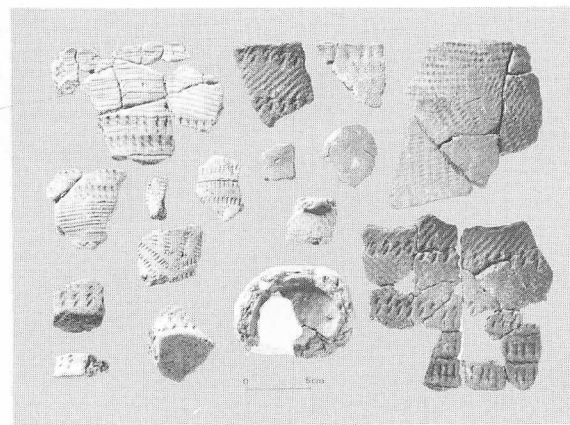
3. DH-7 出土の土器(1)



2. DH-6 出土の石器

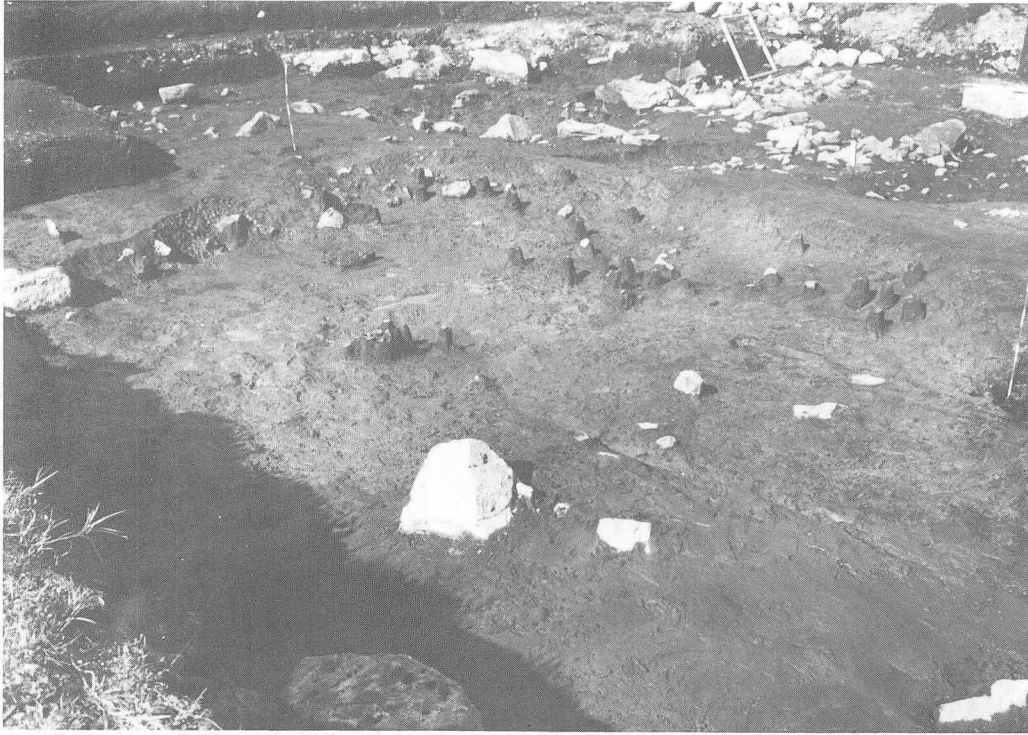


4. DH-7 出土の土器(2)



5. DH-7 出土の土器(3)

図版VI-8



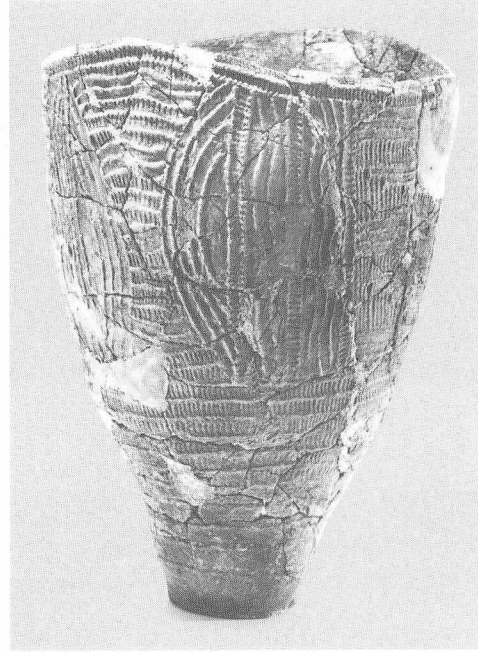
1. DH-8・DH-9(上方)



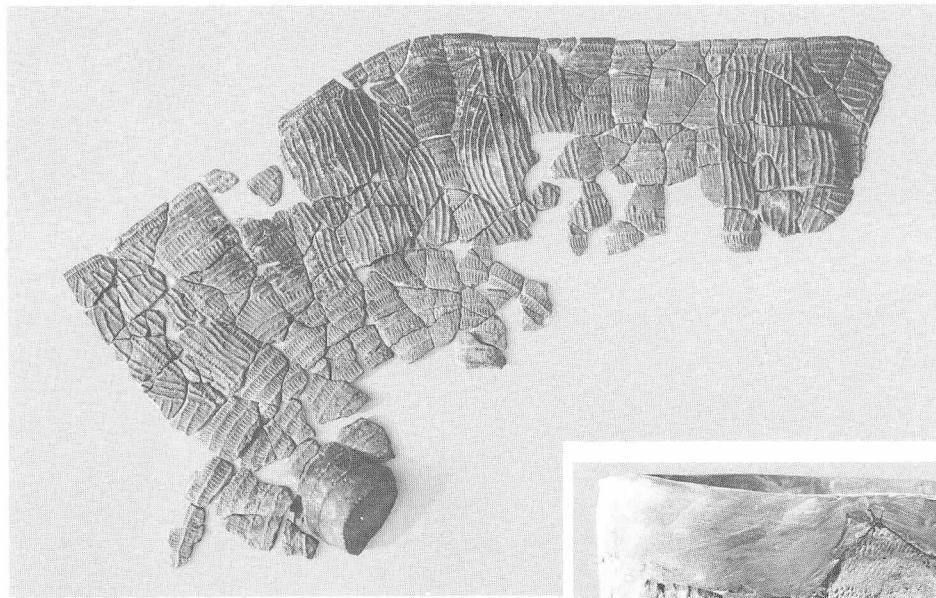
2. DH-8 出土の土器



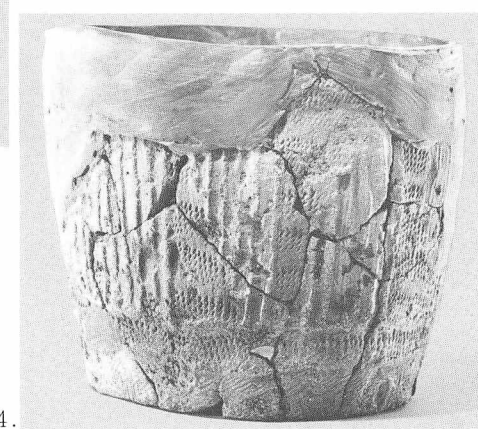
1.



2.



3.



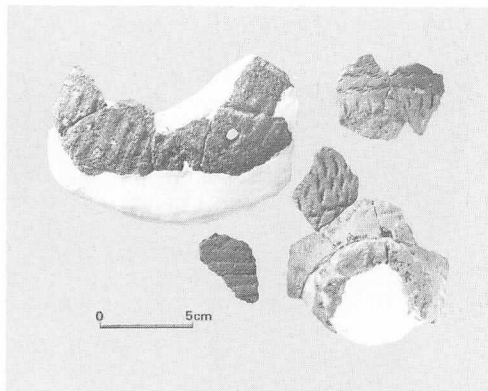
4.

DH-8 出土の土器

図版VI-10



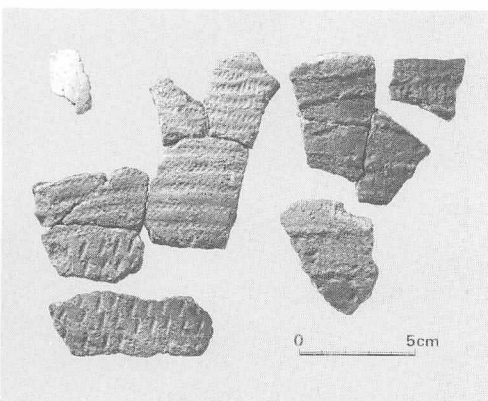
1. DP-3



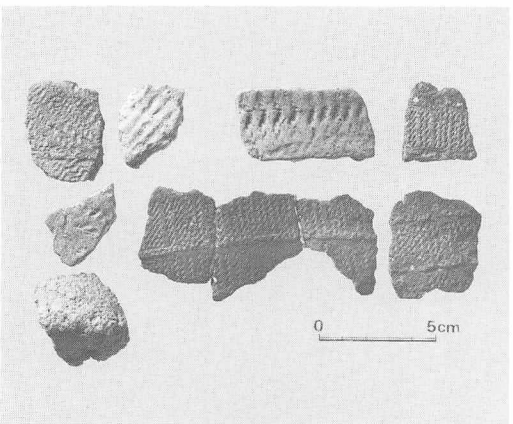
2. DP-3 出土の土器



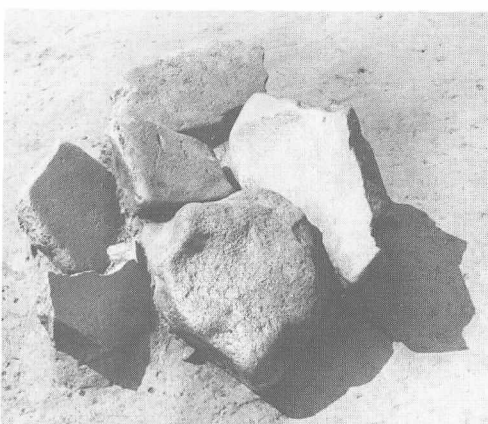
3. DP-4



4. DP-4 出土の土器



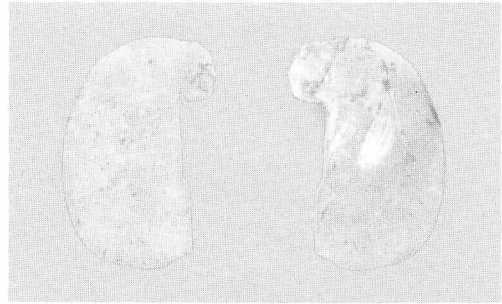
5. DP-6 出土の土器



6. DP-7 遺物出土状況



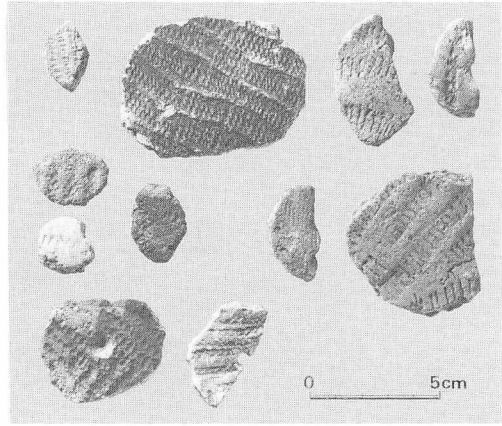
1. 玦状耳飾（側面）



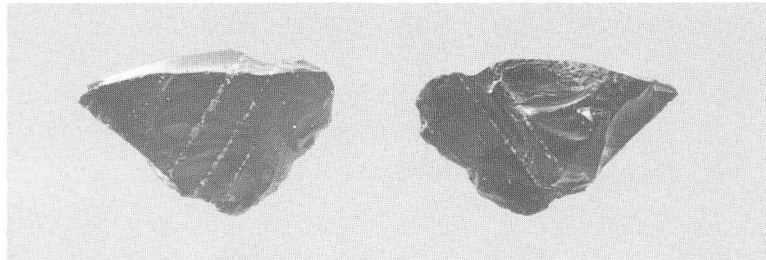
2. 玦状耳飾（平面）



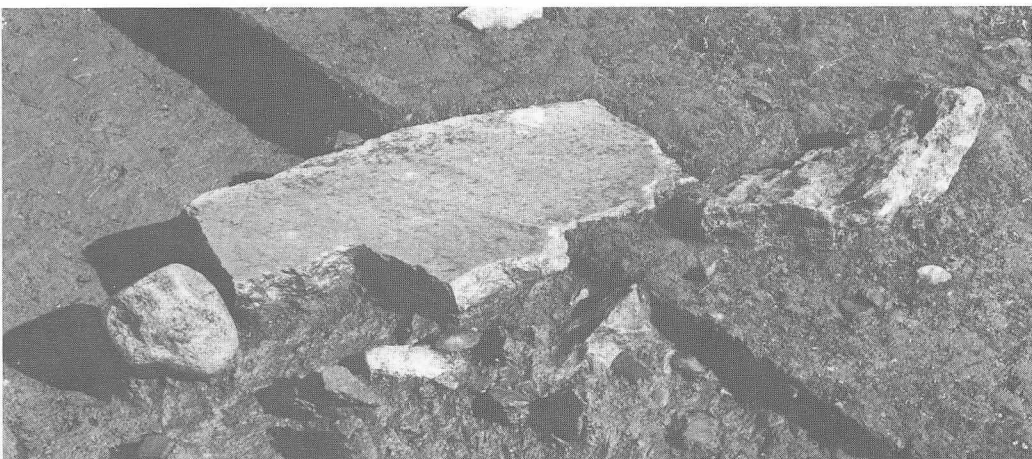
3. 玦状耳飾出土状況



4. 土製円盤

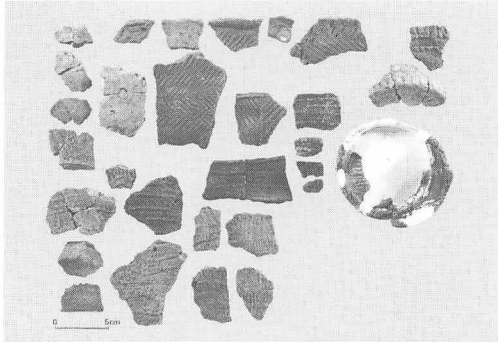


5. 細石核

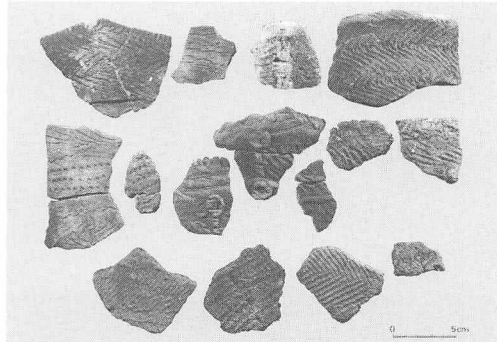


6. 石皿出土状況

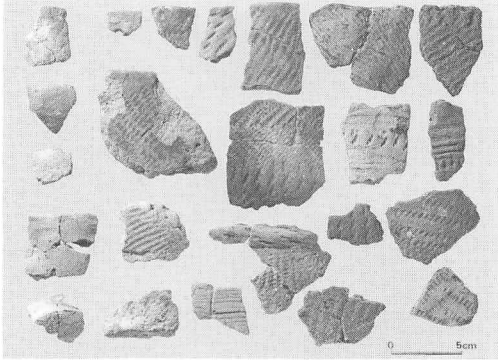
図版VI-12



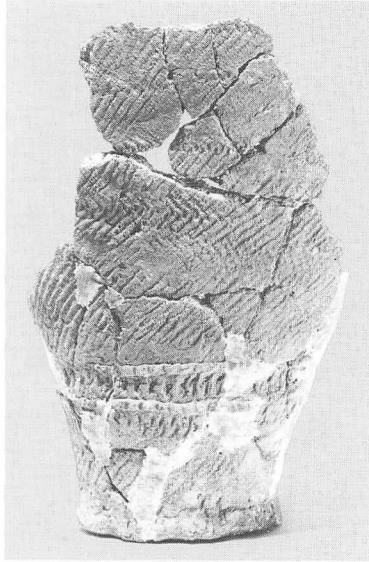
1. 沢南側 I a・I b-1・2・3 類土器



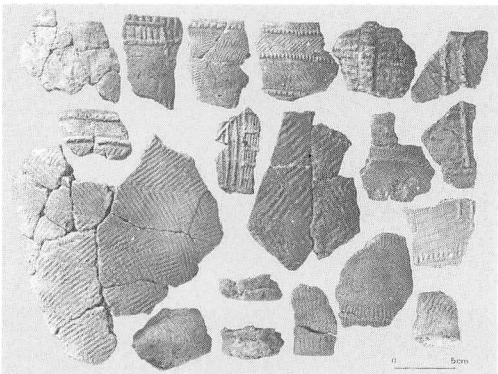
2. 沢南側 I b-4・II a 類、沢上 III a 類土器



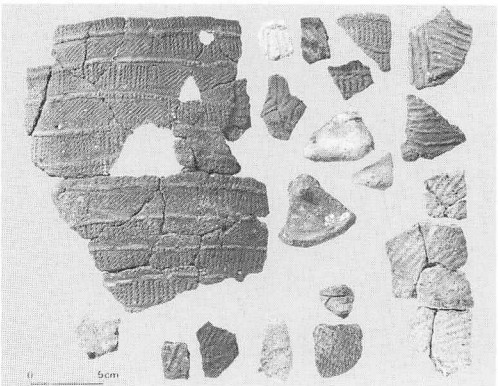
3. 沢北側 I a・I b-1 類土器



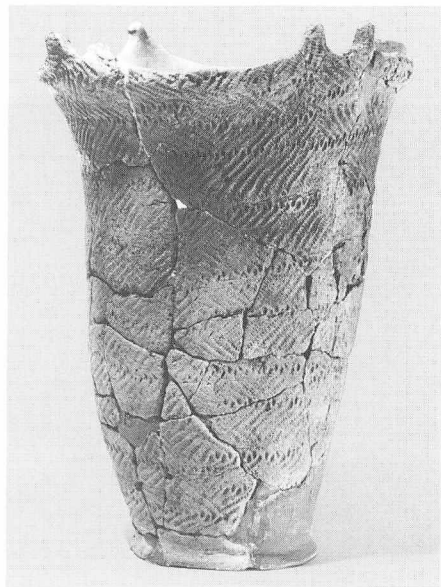
4. I b-2 類土器



5. 沢北側 I b-2 類土器



6. 沢北側 I b-3 類土器他



7. DH-3 覆土出土 III a 類土器

VII E地区の調査

1. 概 要

E地区は、ヤンケシ川第2支流と第3支流の間に位置する。西から東へ張り出すならかな尾根にある。標高10~16m。低位部は、湧水が激しく、南端のT-71では第3支流の旧河道が見つかった。南斜面には降水時に雨水の流路となる小さな沢筋が数本できるが、このような場所には、大小多数の礫が分布している。

発掘以前は、牧草地として利用されていた。そのため高所は耕作による削平をうけ、包含層が破壊されていた所もある。

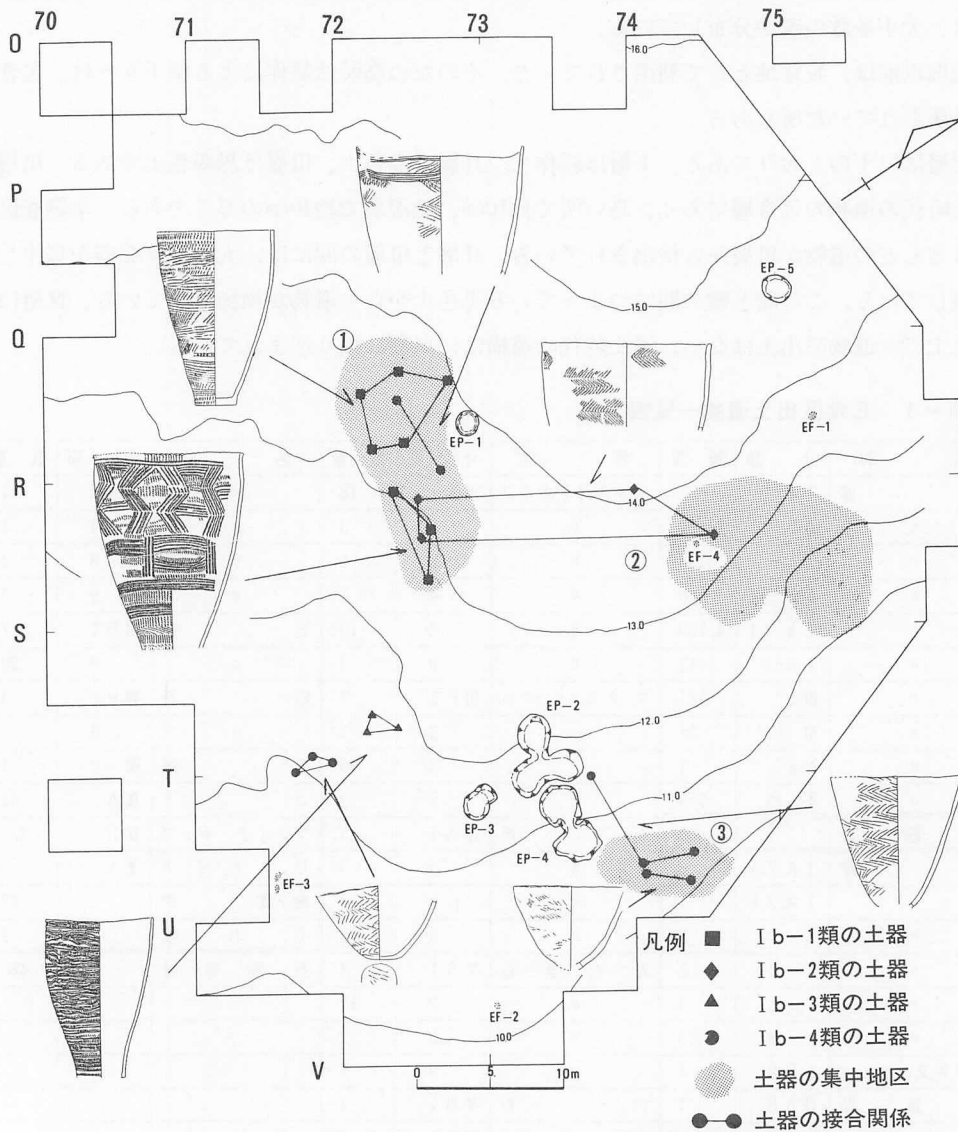
土層は以下のとおりである。I層は耕作土。II層は黒色土、III層は黒褐色土である。III層は縄文時代の遺物の包含層であり、高い所で約10cm、低湿地で約40cmの厚さである。本調査区ではほとんどの遺物がIII層から検出されている。II層とIII層の間には、大小様々な礫が集中して堆積している。この礫と礫の間につまっている黒色土からも遺物が検出されている。IV層は黄褐色土で、遺物の出土はない。縄文時代の遺構は、IV層に掘り込まれている。

表VII-1 E地区出土遺物一覧表

名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量	
土 器	I a	33	つまみ付きナイフ	III A 1	18	〃	VI A 2	4	
〃	I b-1	2,079	〃	2	3	〃	4	1	
〃	I b-2	198	〃	3	1	〃	8	2	
〃	I b-3	626	〃	4	1	〃	9	3	
〃	I b-4	4,190	〃	8	10	石	皿	VI B 1	7
〃	I b	17	〃	9	2	〃	8	29	
〃	III a	181	スクレイパー	III B 1	7	砥 石	VI B 2	3	
〃	III	36	〃	2	1	〃	8	2	
〃	IV a	1	〃	8	5	石	錘	VII A 2	1
〃	不 明	269	〃	9	9	コ	ア	IX A	42
土 器 計		7,631	石	斧	IV A 1	3	フレイク・チップ	IX B	227
石	鏃	I A 2 a	3	〃	5	5	U.フレイク	X A	3
〃		I A 2 b	1	〃	8	3	礫・礫 片		27
〃		3	2	〃	9	2	そ の 他		2
〃		4	1	た た き 石	V A 1	3	石 器 等 計		480
〃		5	3	〃	2	11			
〃		8	3	〃	3	1			
やり先又はナイフ	I B 9	1	〃	9	6				
石 錐 類	II A 8	1	台 石	V B 1	2				
〃	II A 9	1	す り 石	VI A 1	18				

遺物は、縄文時代早期と中期のものが、土器7,631点、石器478点出土している。遺構は縄文時代早期のものと思われるピットを2基確認した。土器の分類別分布は図Ⅶ-1に示した。縄文時代早期の、東釧路Ⅲ式(I b-1類)、コッタロ式(I b-2類)、中茶路式(I b-3類)、東釧路Ⅳ式(I b-4類)が全体の9割以上を占める。早期の土器は、主に3つの集中地区から出土している。①：標高13m前後のQ-72、R-72区周辺の南側の斜面、②：R-75、76区周辺の北側のやや急な斜面、③：標高11m以下のT-73・74区周辺の低湿地である。I b-1類の土器は①と②の地区に、I b-3類の土器は②のS-72区にほぼ一個体分がまとまって出土している。I b-4類は、①、②、③の全域から出土している。

縄文時代中期の土器は、円筒上層式(Ⅲ a類)に相当するもので数は多くない。R-75、Q



図Ⅶ-1 遺構・遺物の分布と土器の接合関係

-75区周辺に集中している。

石器の出土地区は、土器の集中出土地区とよく一致する。早期に属するⅢA1類のつまみ付きナイフが多い。ほかに擦り切り磨製石斧、断面三角形のすり石などが目立つ。

遺構からは石皿に使用されたとと思われる安山岩の板石が出土している。焼土は4か所存在したが伴出する遺物はない。

その他、近、現代遺構には、炭窯が2基、用途不明の円形のピット1がある。これらの遺構については、Ⅹ章にまとめて報告する。

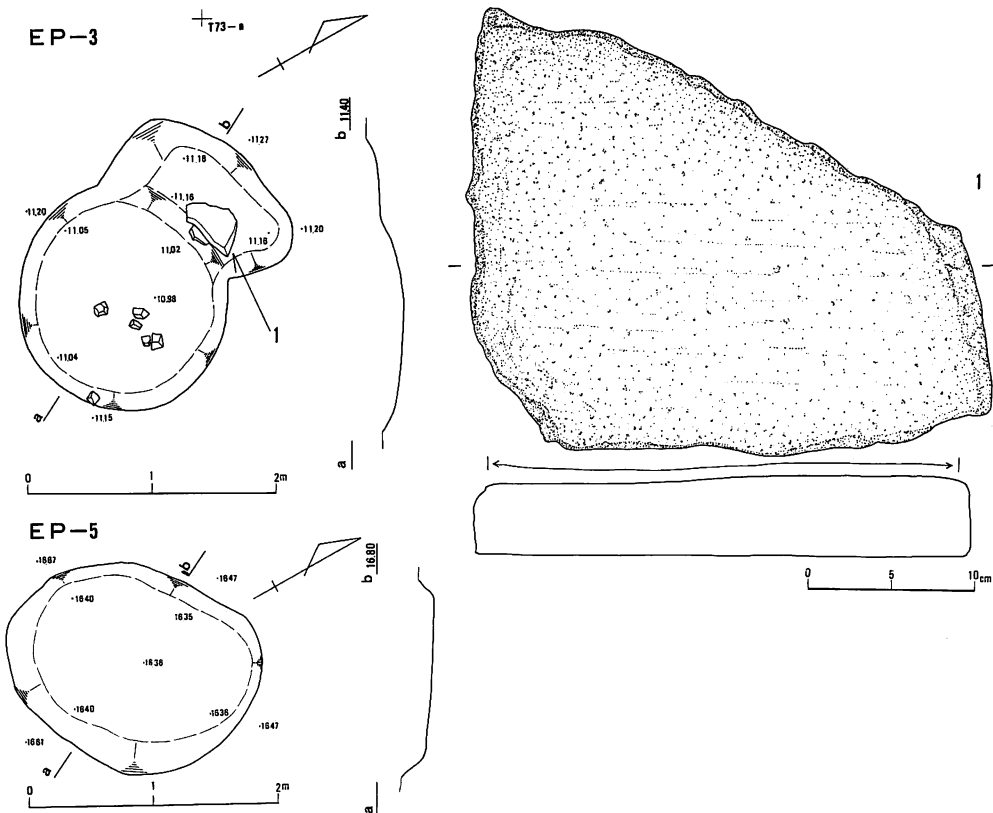
2. 遺構とその遺物

EP-3 (図Ⅶ-2、図版Ⅶ-1)

位置 T-72-d、T-73-a 規模 1.75×1.69×0.16

形状 平面形はほぼ円形。北側は攪乱されている。Ⅳ層中に掘り込まれ、覆土には、Ⅲ層が堆積していた。中からは、石皿に使用されたとと思われる大形の安山岩の板状の石が1個と少量の礫が出土した。遺構の性格は不明である。付近の包含層からは、I b-4類の土器がまとめて出土している。

時期 縄文時代早期。



図Ⅶ-2 EP-3、EP-5

EP-5 (図Ⅶ-2)

位置 P-74-C、P-75-b 規模 2.05×1.58×0.24

形状 平面形は長円形。Ⅳ層をわずかに掘り込んでいる。遺物は出土していない。ピットの性格は不明である。付近の包含層からは、I b-4類の土器がわずかに出土している。覆土にはⅢ層が堆積している。 時期 縄文時代早期

3. 包含層の遺物

1) 土器

I群a類(図22~28、図版Ⅶ-22)

25は縦に鋭い沈線が2本、27は細い沈線が1本見られる。ほかはすべて無文である。26~28には、表裏面に擦痕があり、24の裏面にはかすかに条痕がみられる。23の口縁は波状の可能性はある。26、27は大楽毛式類似のものと思われる。

I群b-1類(図1~7・29~52、図版Ⅶ-2・3)

器形はいずれも深鉢形を呈し、高さ53cmの大型のものからかなり小型のものまでである。平縁の口縁で、やや外反するものが多い。口唇は幅が広く、撚糸、絡条体、組紐等で刻み目がつけられるものが大部分を占める。口縁部には、縦方向に撚紐の圧痕文がつけられているものがある。底部の多くは、平底で「く」の字状に張り出し、口縁同様、縦方向に撚紐の圧痕文がつけられている。胴部には、縄文、組紐圧痕文、貼付文などがみられる。

胴部の文様は、縄文が施文されているものがほとんどで、羽状を呈するもの(6・30・32・40)、1段ごとに条を横方向と斜め方向に走らせて带状の文様を組み合せたもの(1・3・5・32)などがある。30の羽状縄文は、右下がりの条が無節である。33にも無節の縄文が施されている。縄文のほか、三本組紐の圧痕文と撚紐圧痕文で文様を構成しているものがある(29・42~46・49)。42~44では、三本組紐で曲線を表現している。2は、底部付近に縄文が施されているほかは、三本組紐の圧痕文で器面を縦方向、横方向に区画し、その中に撚紐圧痕文を施して、幾何学的な文様を構成している。4は、胴部下半に撚紐圧痕文が数段にわたって施されており、底部には、指によって周囲に凹みがつけられている。34・35・39には、絡条体圧痕文がみられる。34・35は、口唇部がまるく、薄手で焼成が良い。

貼付文をもつものに、短い粘土紐を横方向、斜方向に貼り付けその上に刻みをつけたもの(1)、ボタン状の貼り付けのあるもの(45・46)がある。なお、47・48は同一個体で、無文ではあるが底部の特徴からこの分類に入ると考えられる。

I群b-2類(図8・53~56、図版Ⅶ-3・5・6)

8は深鉢形で、口唇に短縄文がみられ、口縁から胴部にかけては、結束をもつ羽状縄文が表裏面に施されている。53・54にも結束がみられ、54・56には、細い貼付帯がある。

I群b-3類(図9・57~60、図版Ⅶ-3・6)

9は、体部がやや膨む深鉢形である。器面全体に、細い断面三角形の貼付帯をめぐらして、直線と曲線を描いている。貼付帯の間は、胴上半部では短縄文が、胴下半部では細かい縄文が施されている。59は裏面に擦痕が認められた。60は、底部の内側に認められた突起である。貼り付けか、指でつまんで成形したかは判然としない。底面は平坦である。

I 群 b-4 類 (図10~21・61~91、図版Ⅶ-4・5・7・8)

器形は深鉢形で、丸底に近い平底のものが一般的で、尖底に近いものが一例ある(13)。羽状の捺糸文が施されたものがほとんどで、まれに縄文がつけられたものもある(13,81)。

21・71・91では底にも捺糸文がみられる。17・18・49は、口縁部に幅の狭い文様帯をもつもので、数段の縄端圧痕文が施されている。70は、裏面にも縄端圧痕文がある。71・72は、捺糸文の原体が押捺されている。75~80は綾絡文をもつものである。75の口唇部には刻み目がある(20)。83~88は魚骨回転文が施されている。85の口縁と胴部にはU字形の刺突が施されている。魚骨の端によるものかもしれない。

なお、10と19には、捺紐の軸の回転痕がついている。これによればこの原体の軸が縄であることがわかる。88~89は無文のものである。

III 群 a 類 (図92~103、図版Ⅶ-8)

92は口縁部に貼付帯がめぐらされ、その上に捺紐で刻みをつけている。93・95~98は細い貼付帯上に捺紐の圧痕文が施されている。96は、口唇部に縄による刻み目があり、口縁直下には、連続刺突文が施されている。94・98は突起の部分である。

2) 石器 (図Ⅶ-9~11、図版Ⅶ-9・10)

つまみ付きナイフ、石皿(片)、すり石の占める割合が多い。次いで、スクレイパー、たたき石、石斧、石鏃が多い。剥片、礫等が全体の56%を占める。つまみ付きナイフのうち半数以上は、縄文時代早期に属すると思われる(11~19)。また頁岩、硅岩製のものが大多数を占め、完形品では、黒曜石製のものはない。10cm前後の大型のものが多い。すり石は、安山岩製で断面三角形の縄文時代早期に属するもの(図Ⅶ10、31~34)が多く、北海道式石冠の破片(図Ⅶ10、35)も1点出土している。石錘は1点出土しているが、安山岩製で加工は粗雑である。重量は600g以上あり、早期に属するものと考えられる。

両先端をたんに加工した硅岩製のドリル(10)、破損しているが大形のやり先またはナイフが、それぞれ1点出土している。

石斧は、緑色泥岩のものが多数を占める。擦り切り手法の痕跡がみられる破片(27)が出土している。

つまみ付きナイフ、石鏃、すり石の出土地点は、早期の土器の集中出土地点とほぼ一致する。たたき石は、大形扁平礫の側縁を使用したものが多い。ほかに安山岩の台石と石皿がある。III a 類の土器に伴うものであろう。

4. 小 括

本調査区では、縄文時代早期のものと思われる浅いピットが2基検出されたのみで、住居跡等当時の生活の跡を示す遺構はなかった。しかし、土器の集中地区が3か所あり、それぞれが生活の場であった可能性はある。そのうち①と②地区は、その間が耕作により削平されてはいるが、土器片の接合関係から、つながる要素があることがわかった。すなわち、①地区と②地区から出土した、I b-1、I b-2類の土器片が約20m離れてはいるが、接合しているのである。このことから、現在は削平により分断されてはいるが、①から②にかけての地区は、縄文時代早期の土器の時期にひとつづきの生活の場であったのではないかと推定できる。

また、低位の③のI b-4類の土器集中地区は、湧水によって水没し、遺構の有無は確認できなかったが、相当数の復原可能な土器の集中から考え、ここにも生活の場が存在していた可能性はある。なお③の地区より下位の本調査区に続く牧草畑にトレンチをいれ、包含層が続くかどうかを確認してみたが、耕作土の下はすぐ泥炭層で、遺物は検出されなかった。

表VII-2① E地区掲載土器一覧表(1)

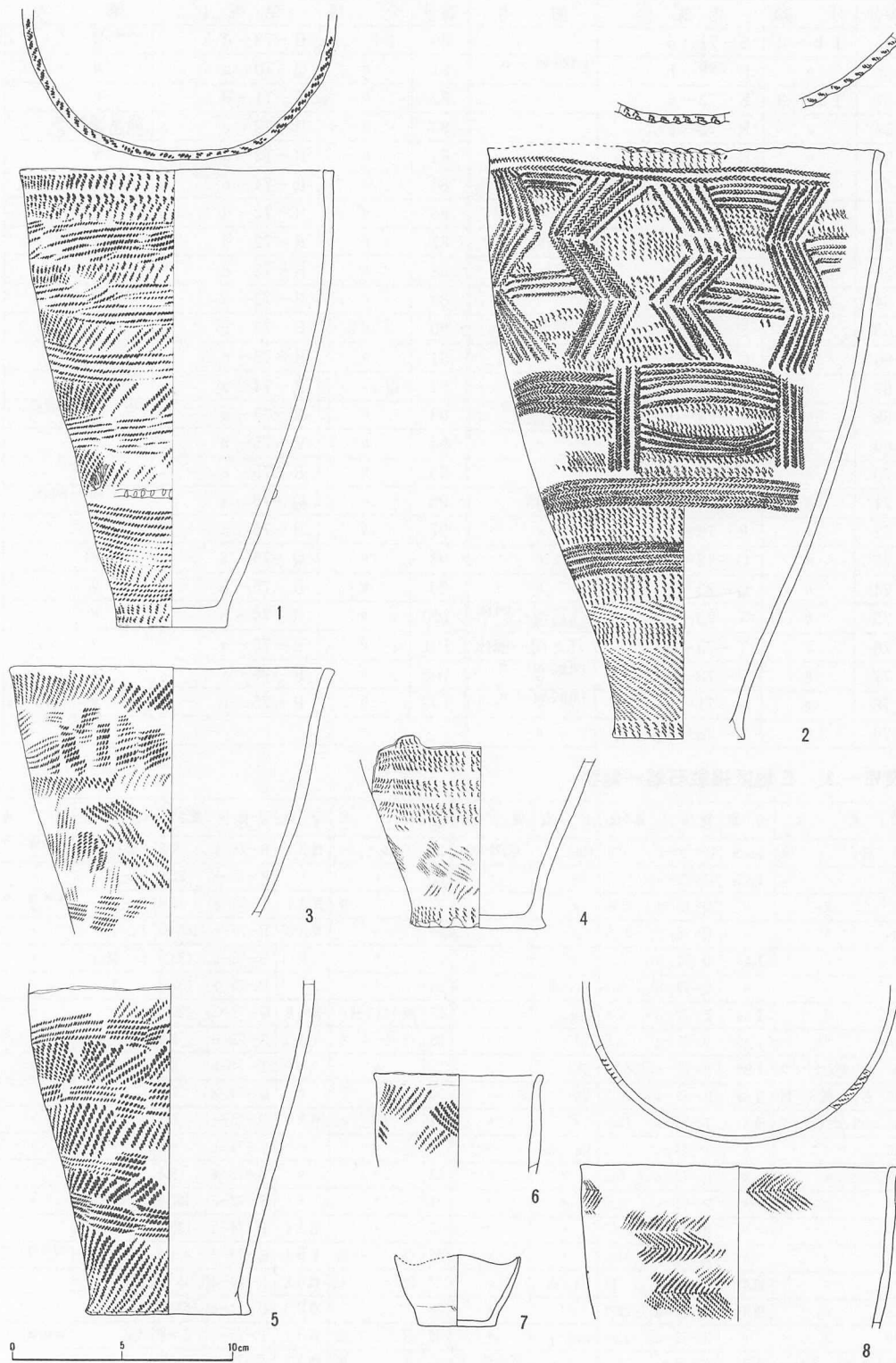
番号	分 類	発 掘 区	備 考	番号	分 類	発 掘 区	備 考
1	I b-1	Q-72-a・b・d	図版VII-2 3	28	I a	R-74-c	図版VII-5 3
2	"	R-72-a・c	図版VII-2 4	29	I b-1	S-72-d	図版VII-5 4
3	"	R-75-a	図版VII-3 1	30	"	R-75-a・b S-71-c	
4	"	R-72-a・c		31	"	O-71-b	図版VII-5 4
5	"	Q-72-d	図版VII-3 2	32	"	R-75-a	"
6	"	R-72-b・c		33	"	E-72-d	"
7	I b-	R-74-a	図版VII-3 4	34	"	Q-72-c	"
8	I b-2	R-72-d、R-74-d R-72-a、Q-71-c	図版VII-3 3	35	"	R-74-d	"
9	I b-3	S-72-b	図版VII-3 5	36	"	R-75-a	
10	I b-4	R-74-c	図版VII-4 1	37	"	R-72-c	
11	"	R-72-a	図版VII-4 2	38	"	S-72-d	図版VII-5 4
12	"	T-74-b	図版VII-4 3	39	"	R-74-d	"
13	"	T-74-b	図版VII-4 4	40	"	R-72-c	図版VII-b 1
14	"	T-73-c・d T-74-b	図版VII-4 5	41	"	P-75-b	"
15	"	T-73-d T-74-a・b	図版VII-4 6	42	"	R-72(C調)	"
16	"	T-73-c		43	"	S-72-a	"
17	"	T-73-d T-74-a・b	図版VII-4 7	44	"	Q-72-b	"
18	"	P-72-a		45	"	R-72-c	"
19	"	Q-72-a・c	図版VII-4 8	46	"	P-71-a	"
20	"	Q-72-b	図版VII-5 1	47	"	S-71-c	48と同一個体
21	"	S-71-c	図版VII-5 2	48	"	R-74-d	47と同一個体
22	I a	Q-72-c	図版VII-5 3	49	"	O-71-b	図版VII-6 1
23	"	R-72-d	"	50	"	R-75-a	
24	"	Q-73-b		51	"	R-75-a	
25	"	Q-72-b	図版VII-5 3	52	I b-2	R-74-c	
26	"	R-75-a	"	53	"	Q-75-a	図版VII-6 2
27	"	S-72-a	"	54	"	Q-75-a	"

表VII-2② E地区掲載土器一覧表(2)

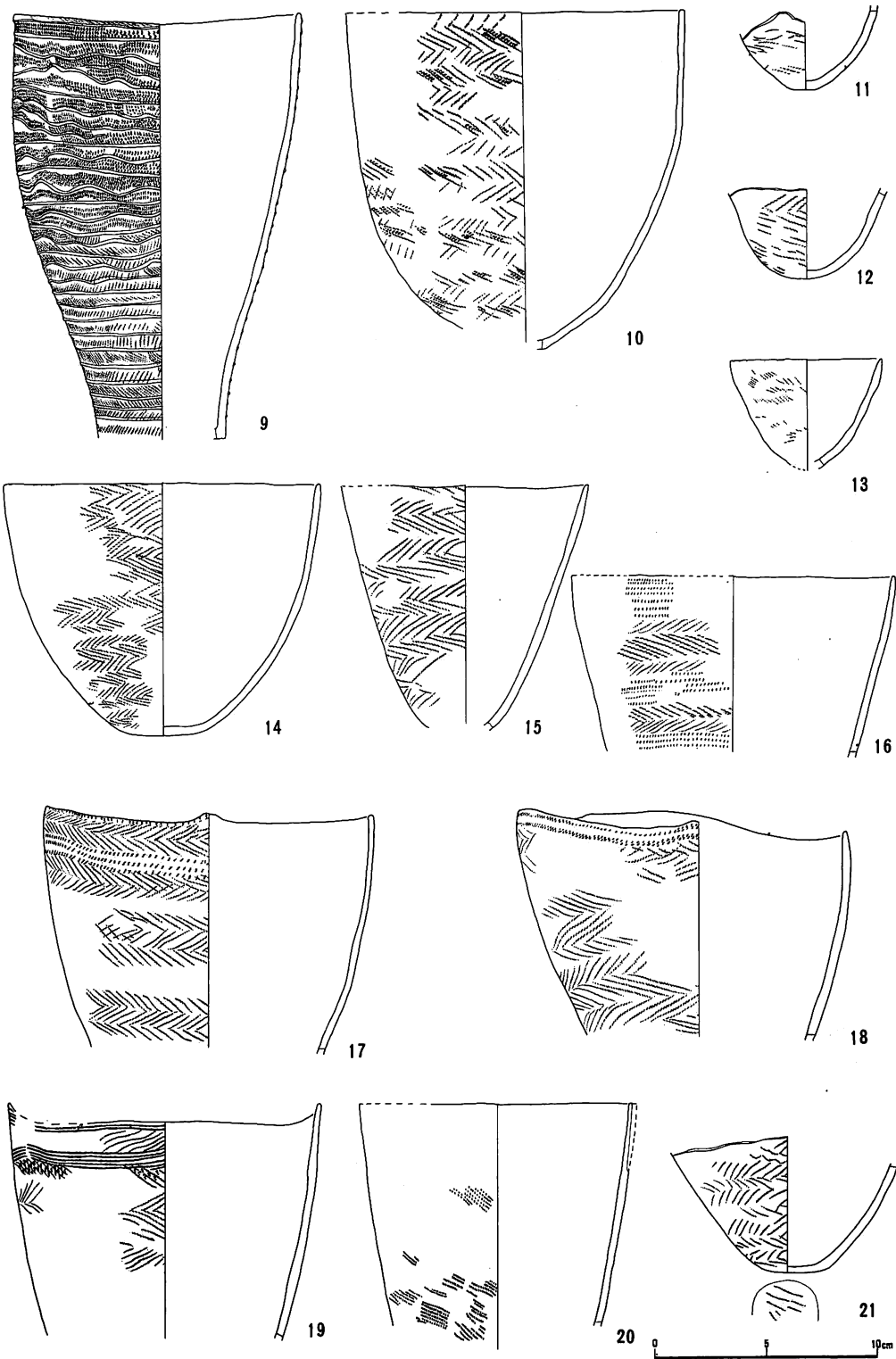
番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
55	I b-2	S-71-d		80	I b-4	R-72-d	図版VII-7
56	"	R-72-b	図版VII-6	81	"	Q-70-a	"
57	I b-3	S-72-a	"	82	"	S-71-d	"
58	"	R-72-c	"	83	"	R-72-c	魚骨回転文 図版VII-8、2
59	"	R-75-a	"	84	"	R-72-d	"
60	"	R-74-c	"	85	"	R-74-c	"
61	I b-4	Q-74-d	図版VII-7	86	"	R-72-d	"
62	"	Q-72-a	"	87	"	R-72-d	"
63	"	T-74-a	"	88	"	R-72-d	"
64	"	R-72-d	"	89	"	R-72-a	図版VII-8
65	"	F-74-b	図版VII-7	90	"	R-75-c	"
66	"	Q-74-a	"	91	"	R-75-c	"
67	"	T-74-b	"	92	III a	R-74-a	図版VII-8
68	"	T-74-b	図版VII-7	93	"	R-75-a	96と同一個体
69	"	Q-72-b	"	94	"	R-75-b	"
70	"	T-74-a	"	95	"	R-75-a	"
71	"	R-75-c	"	96	"	Q-75-a	93と同一個体
72	"	R-76-a	"	97	"	R-75-a	"
73	"	O-72-a	"	98	"	Q-75-a	"
74	"	Q-72-b	"	99	"	R-75-a	"
75	"	T-73-c	76と同一個体 図版VII-8、1	100	"	R-74-b	"
76	"	T-73-c	75と同一個体	101	"	R-75-a	"
77	"	U-72-d	図版VII-7	102	"	R-75-a	"
78	"	S-71-c	図版VII-8	103	"	R-75-b	"
79	"	T-73-c	"				

表VII-3 E地区掲載石器一覧表

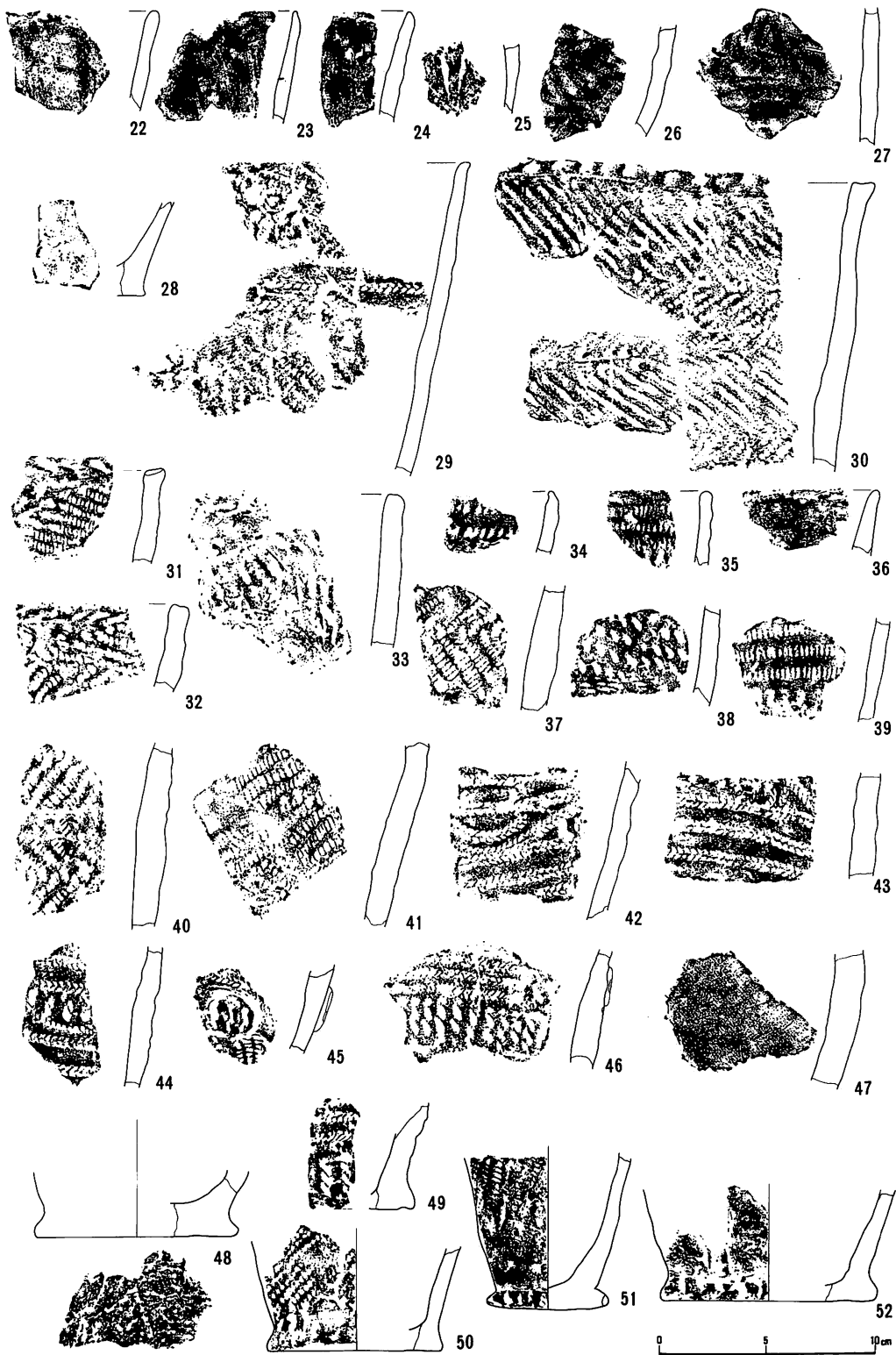
番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	備考	番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	備考
1	石 鉄	IA2b	O-74-a	0.1	Obs.	図版VII-9、1	21	スクレイパー	III B 1	R-75-b	9.0	Obs.	図版VII-9
2	"	IA2a	U-72-a	7.5	"	"	22	"	"	R-72-b	22.8	Ha-sh.	"
3	"	"	Q-73-d	0.24	"	"	23	石 斧	IV A 1	T-72-a	17.0	Ser.	図版VII-9
4	"	"	Q-75a	0.15	"	"	24	"	IV A 5	P-73-b	(169.9)	Ta.	"
5	"	IA3	Q-71-b	0.7	"	"	25	"	"	O-72-d	(292)	Gr-Mud.	"
6	"	"	Q-72-b	0.4	Ha-sh.	"	26	"	"	P-75-b	(526)	"	"
7	"	IA4	T-72-c	0.4	Obs.	"	27	擦り切り残片	IV A 8	Q-72-b	120.0	"	"
8	"	IA5	R-75-d	0.6	"	"	28	たたき石	V A 2	R-72-d	535	And.	図版VII-10
9	やり先又はナイフ	IB9	R-75-a	(38.6)	Sh.	"	29	"	"	T-74-b	607	"	"
10	石 錐 類	IIA9	R-72-a	20.3	Che.	"	30	"	"	Q-74-d	790	"	"
11	つまみ付きナイフ	III A 1	T-74-a	17.8	"	"	31	すり石	VI A 1	P-75-c	835	"	"
12	"	"	T-74-b	25.4	Ha-sh.	"	32	"	"	T-74-b	869	"	"
13	"	"	R-72-d	8.5	"	"	33	"	"	Q-72-b	968	"	"
14	"	"	P-75-a	9.7	"	"	34	"	"	S-72-d	107.9	"	"
15	"	"	R-74-d	0.67	"	"	35	"	VI A 4	P-74-a	(765)	"	"
16	"	"	R-70-c	34.0	"	"	36	台 石	V B 1	R-75-d	4,400	"	図版VII-10
17	"	III A 2	P-74-d	13	Ha-sh.	"	37	砥 石	VII B 2	R-70-d	(215.0)	Sa.	"
18	"	III A 4	Q-74-d	22.2	"	"	38	"	VII B 8	U-71-d	(63.0)	"	"
19	"	"	R-72-a	31.3	Che.	"	39	石 皿	VI B 1	P-75-c	1,800	And.	図版VII-10
20	スクレイパー	III B 1	R-75-a	3.9	"	図版VII-9	40	石 錘	VII A 2	Q-72-c	639	"	"



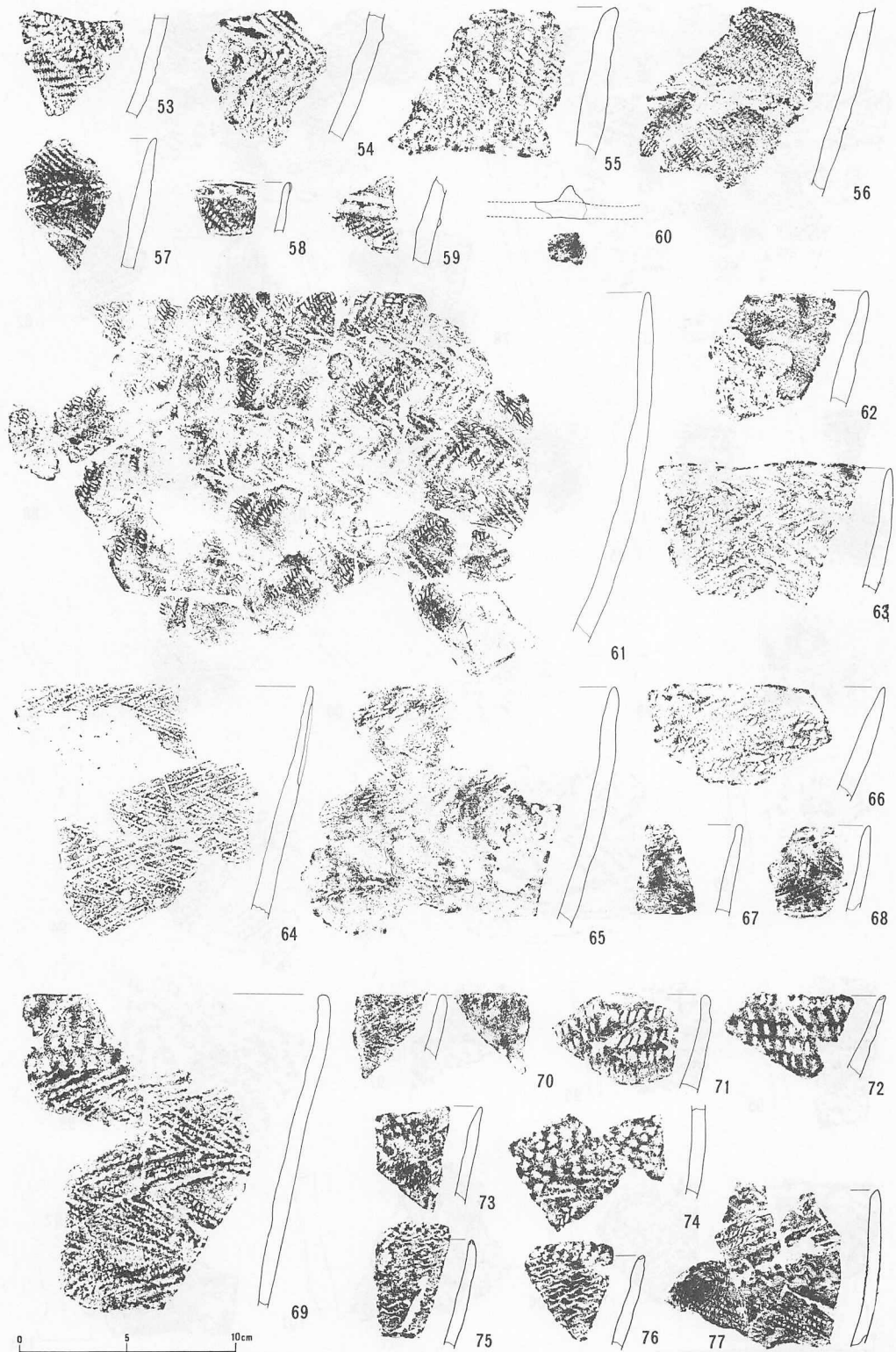
図VII-3 包含層出土の土器(1)



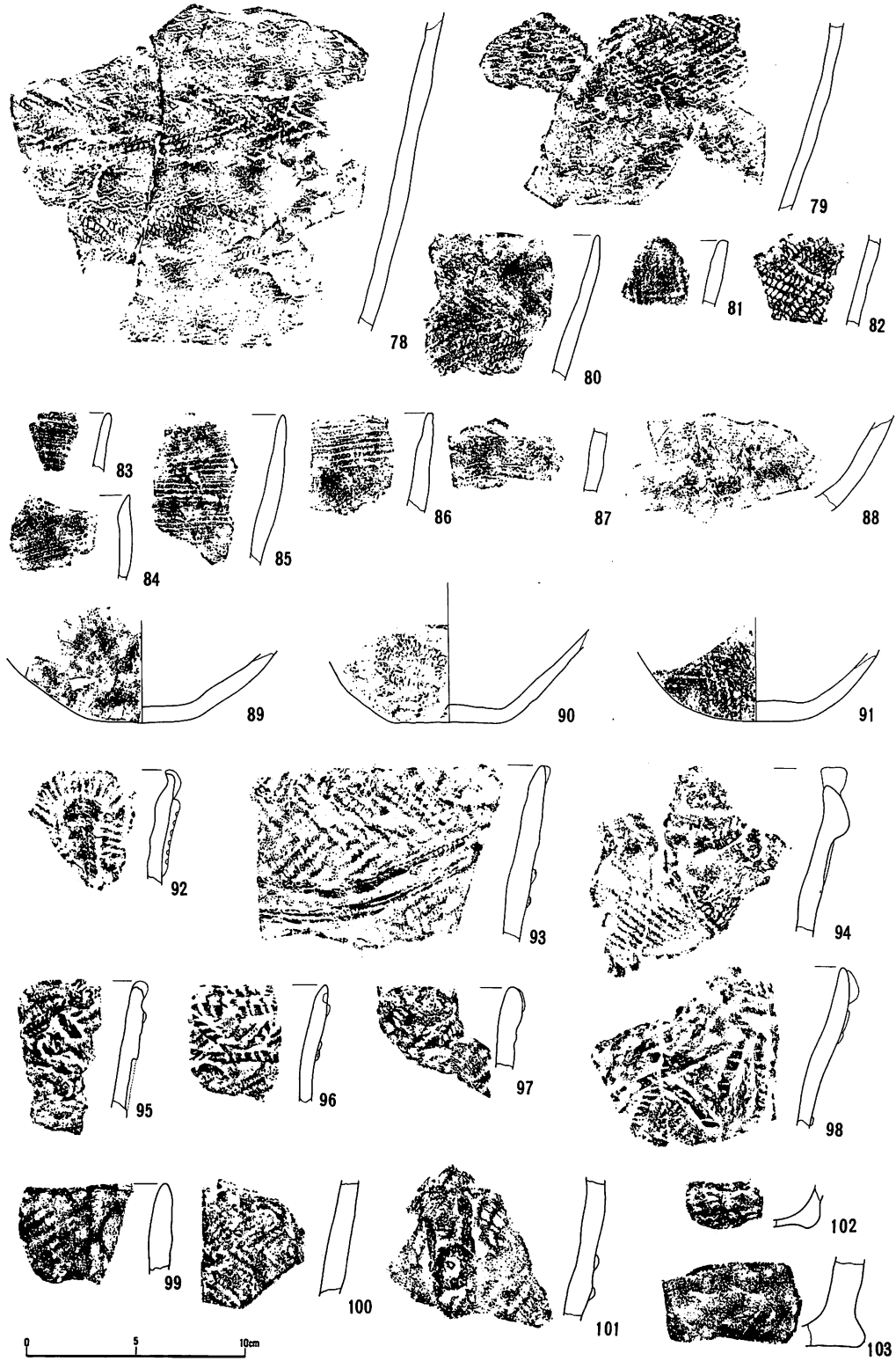
図Ⅶ-4 包含層出土の土器(2)



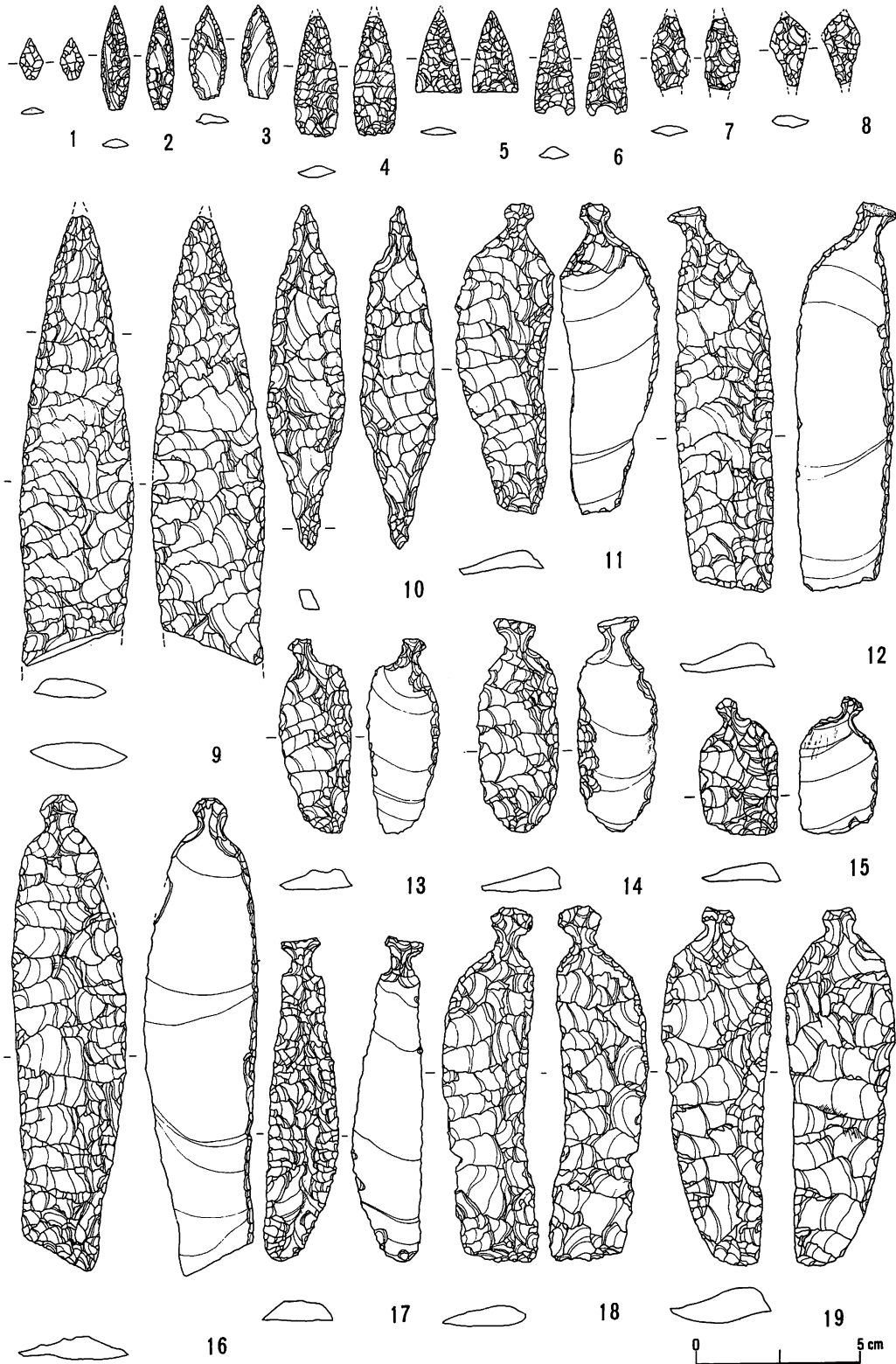
図Ⅶ-5 包含層出土の土器(3)



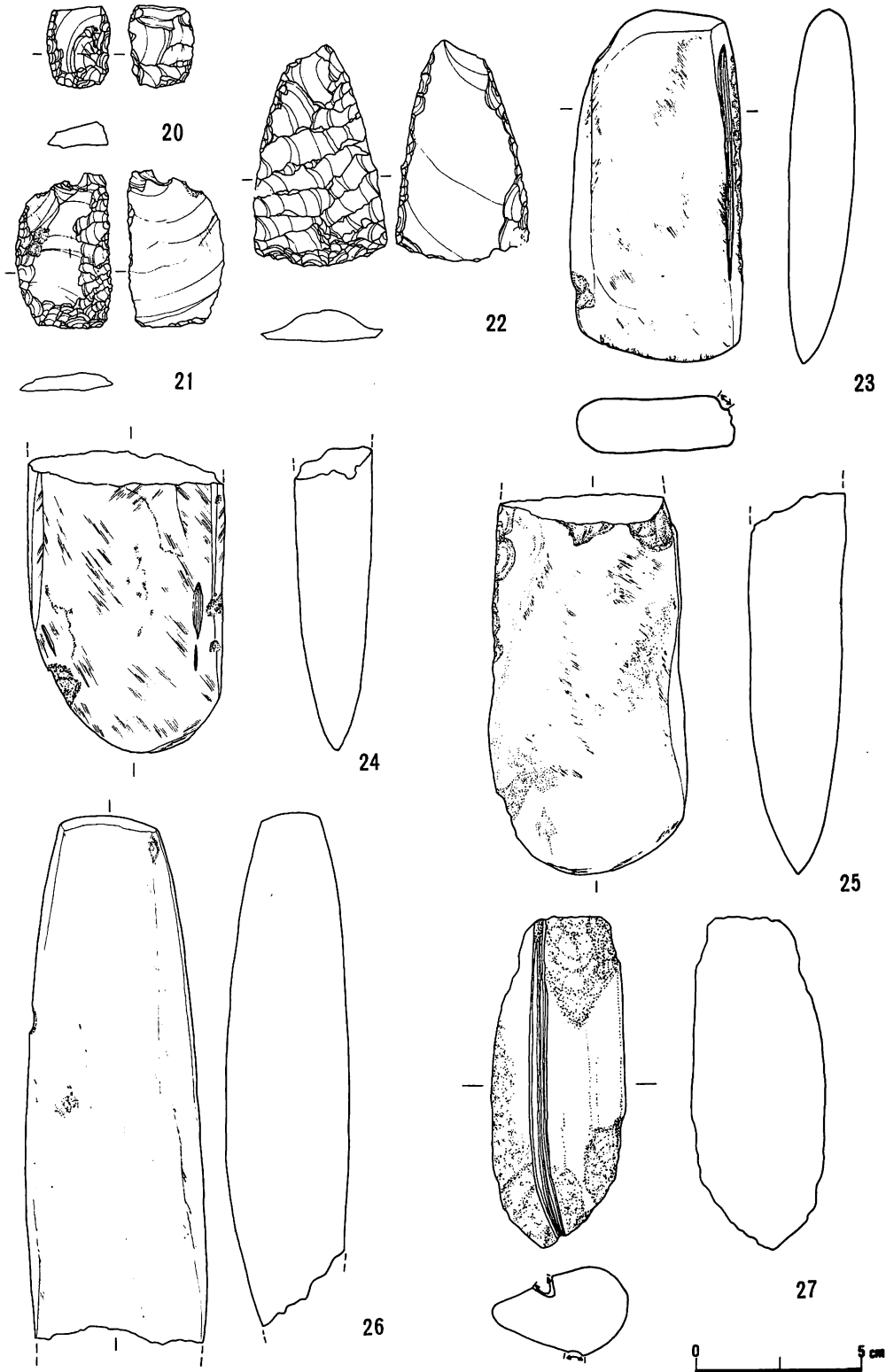
図VII-6 包含層出土の土器(4)



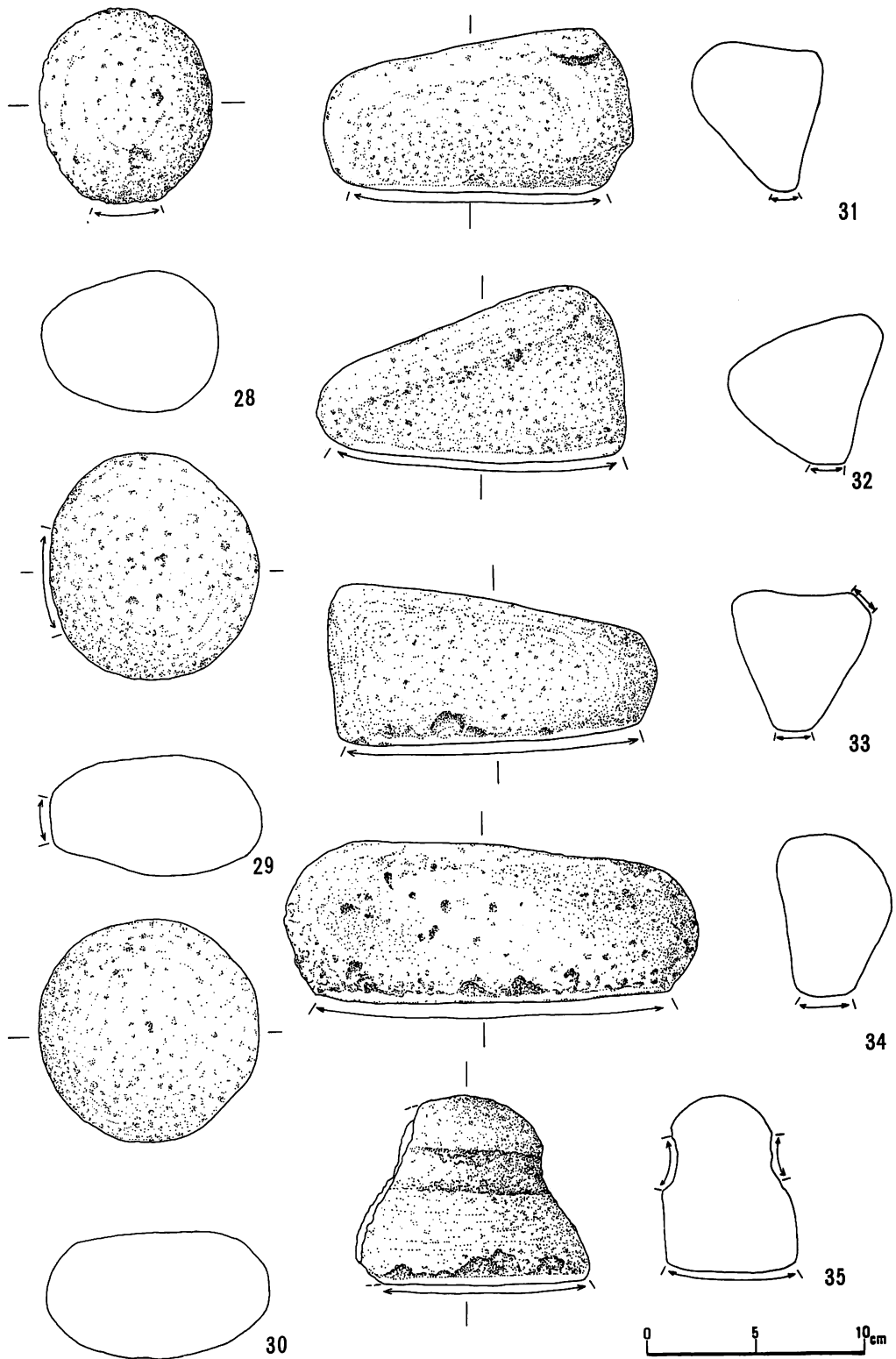
図Ⅶ-7 包含層出土の土器(5)



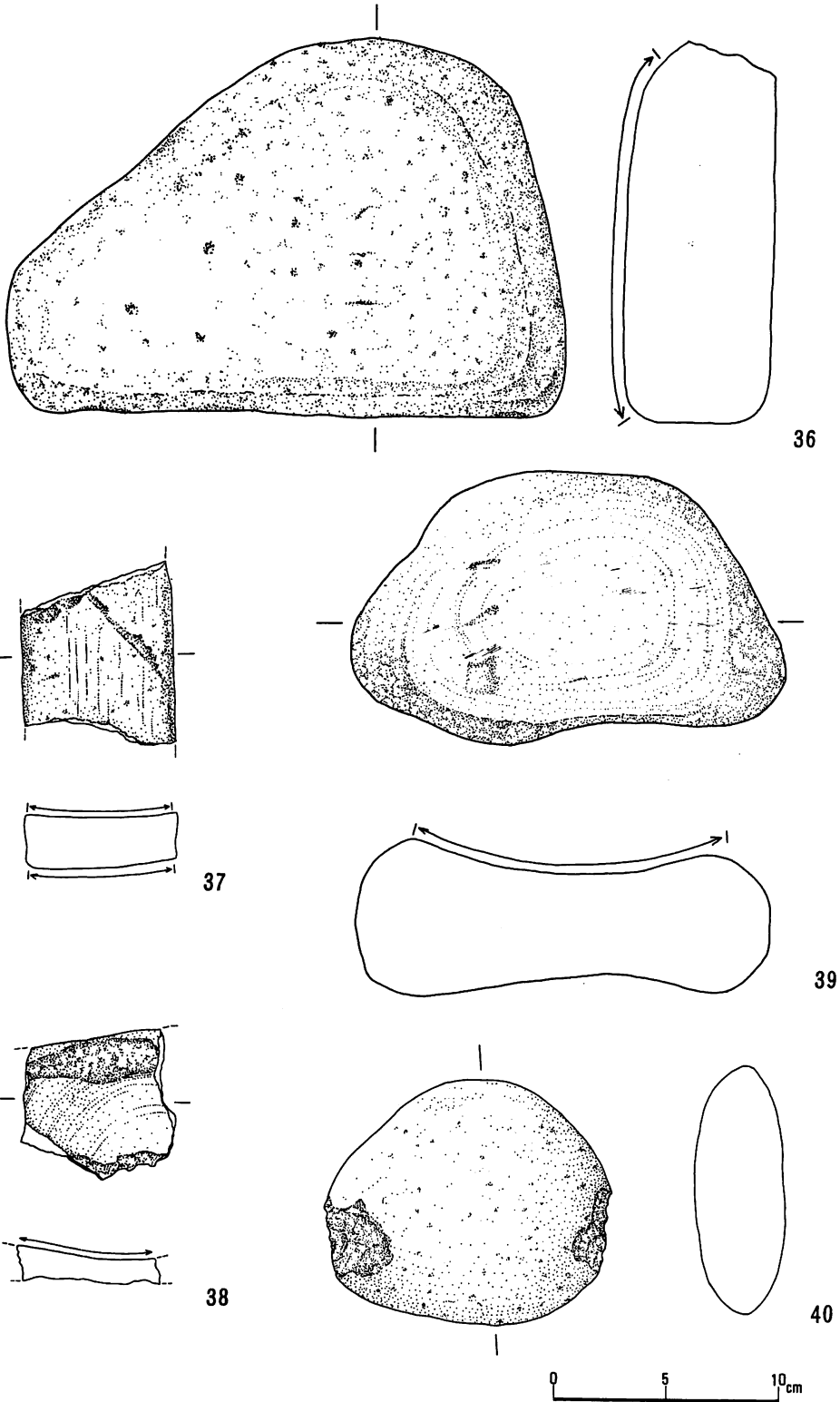
図VII-8 包含層出土の石器(1)



図Ⅶ-9 包含層出土の石器(2)



図Ⅶ-10 包含層出土の石器(3)



図Ⅶ-11 包含層出土の石器(4)



1. 発掘調査状況 (25%調査)



2. EP-3

図版VII-2



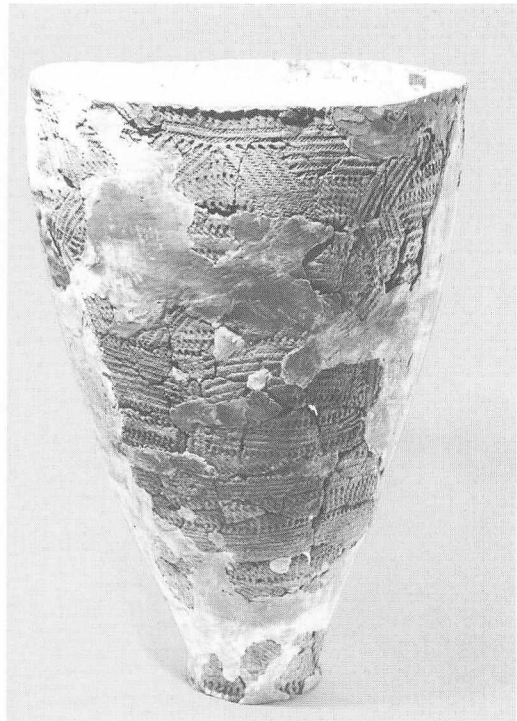
1. 土器出土状況 (Q-72-b)



2. 土器出土状況 (R-74-a)



包含層出土の土器(1)

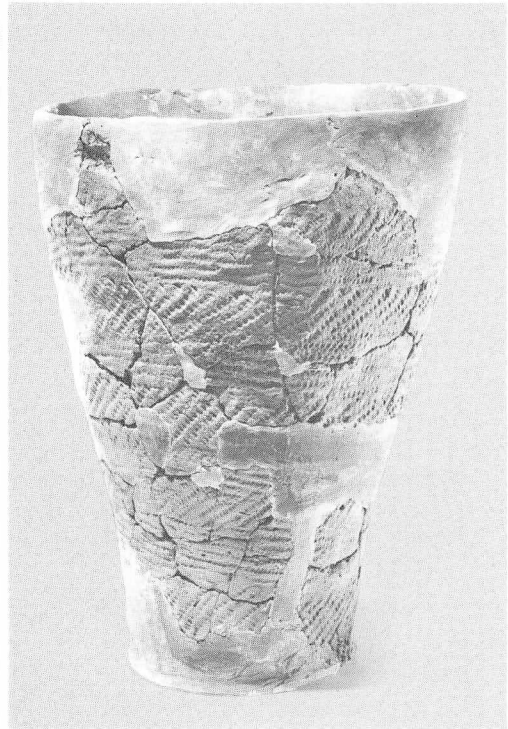


3.

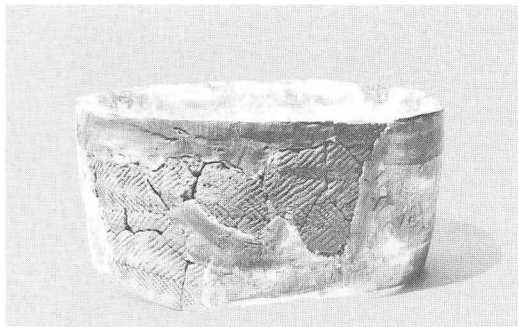
4.



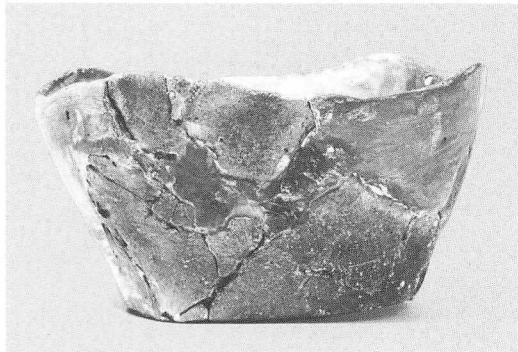
1.



2.



3.



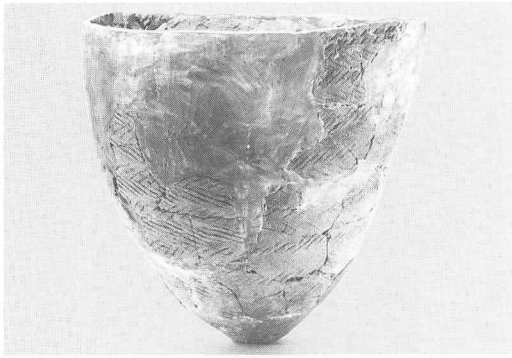
包含層出土の土器(2)

4.



5.

図版Ⅶ-4



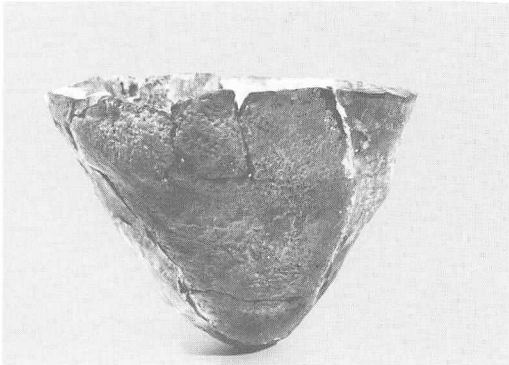
1.



2.



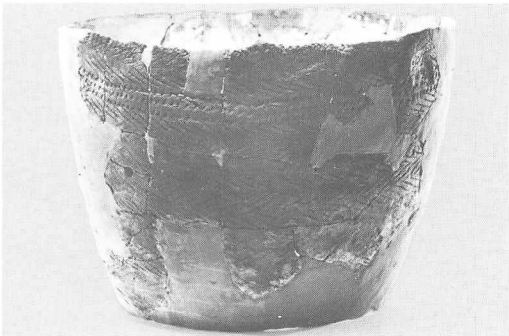
3.



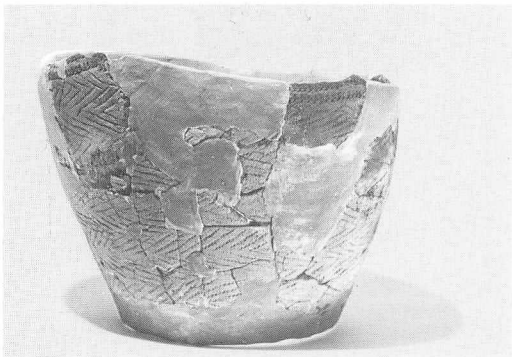
4.



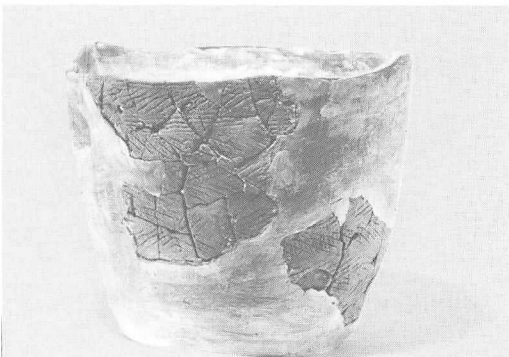
5.



6.

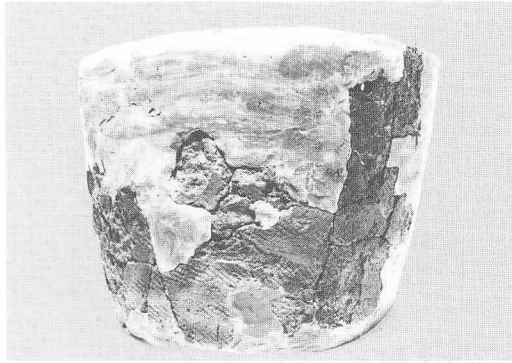


7.



8.

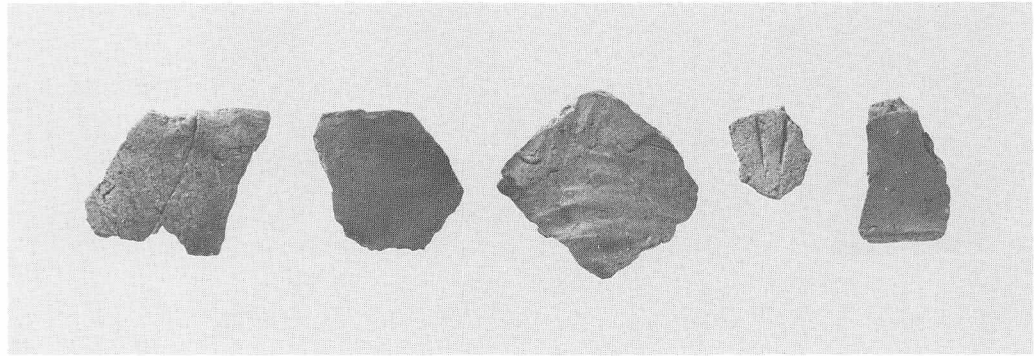
包含層出土の土器(3)



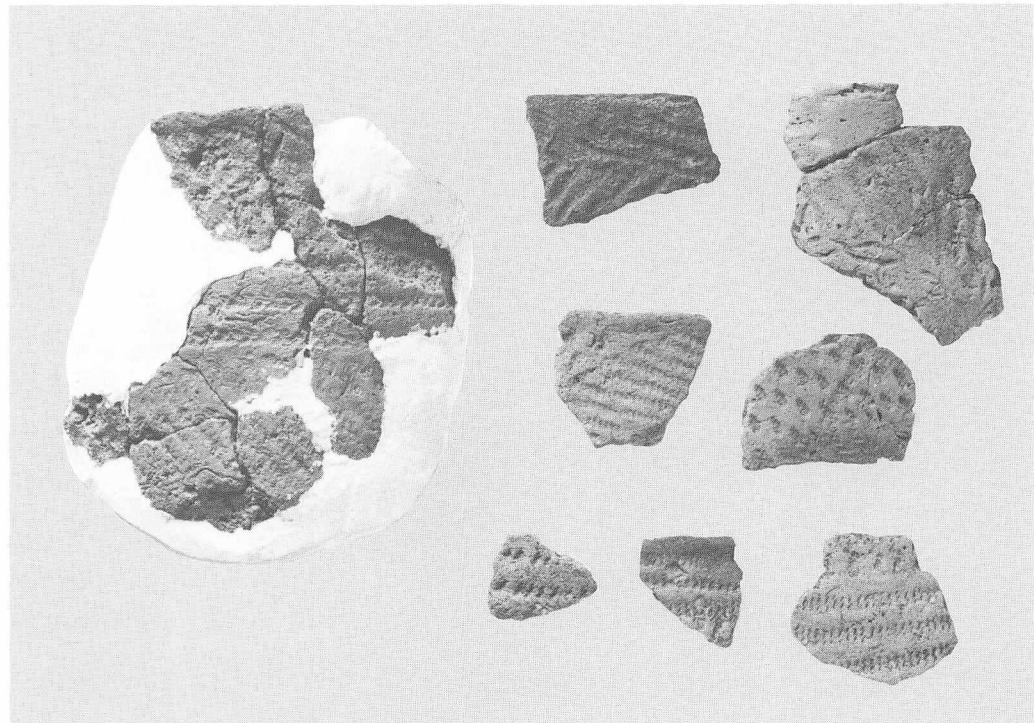
1.



2.



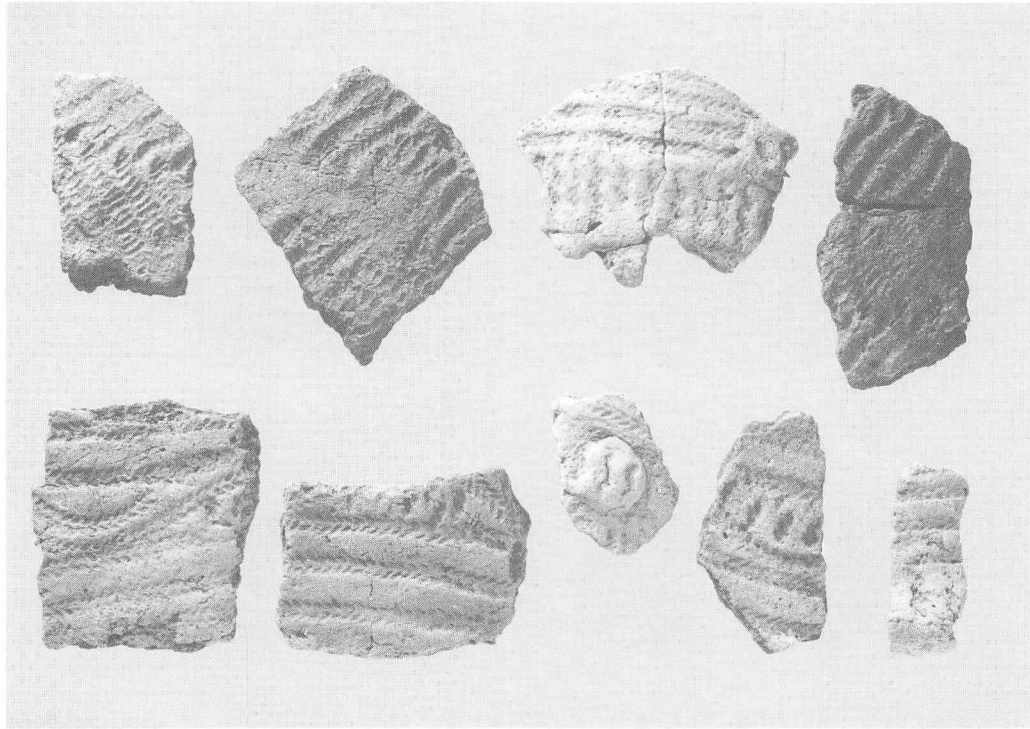
3.



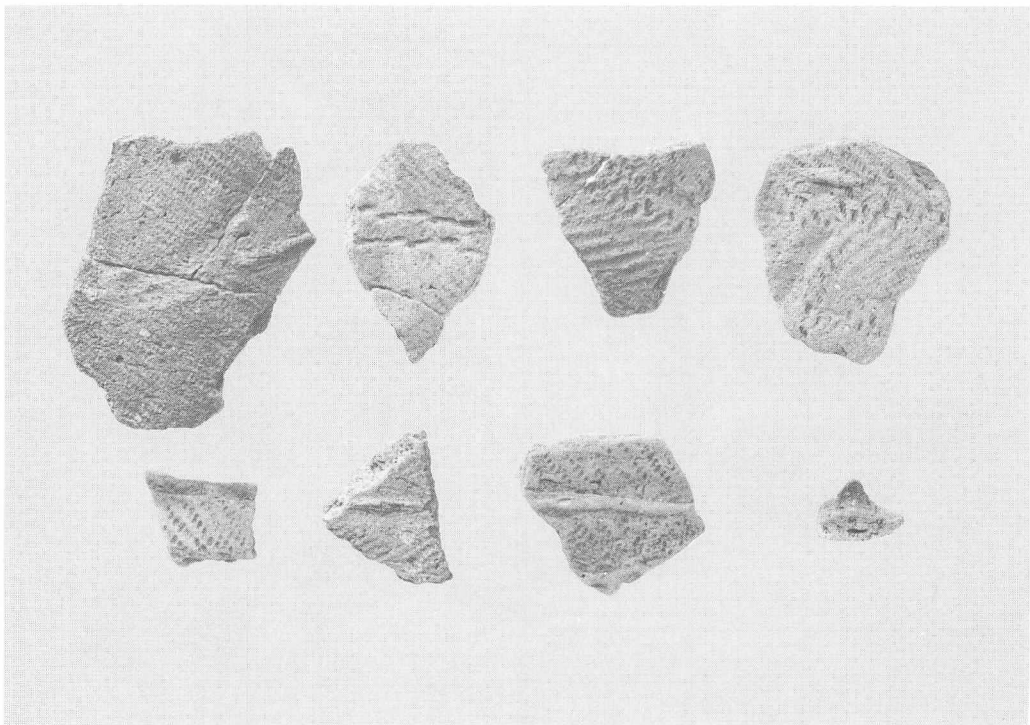
包含層出土の土器(4)

4.

図版Ⅶ-6

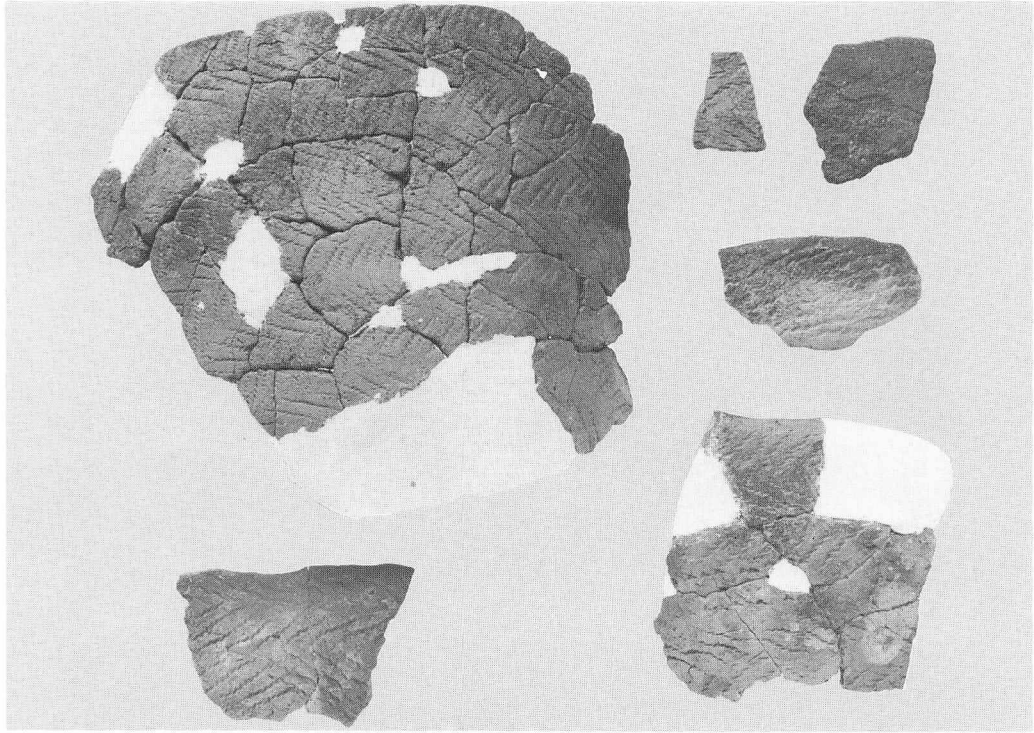


1.



包含層出土の土器(5)

2.

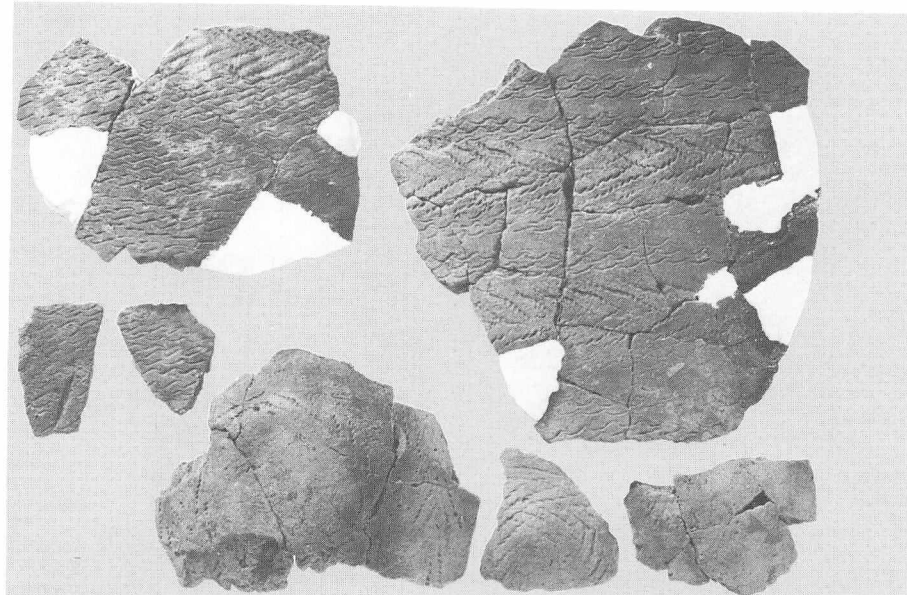


1.

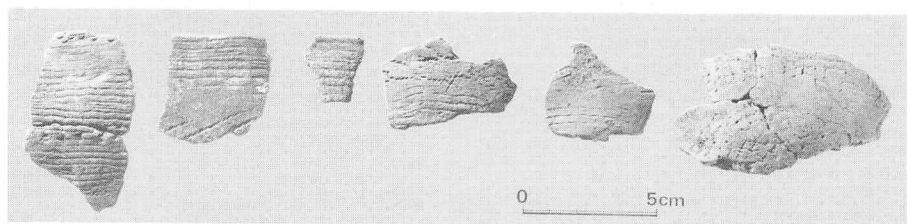


包含層出土の土器(6)

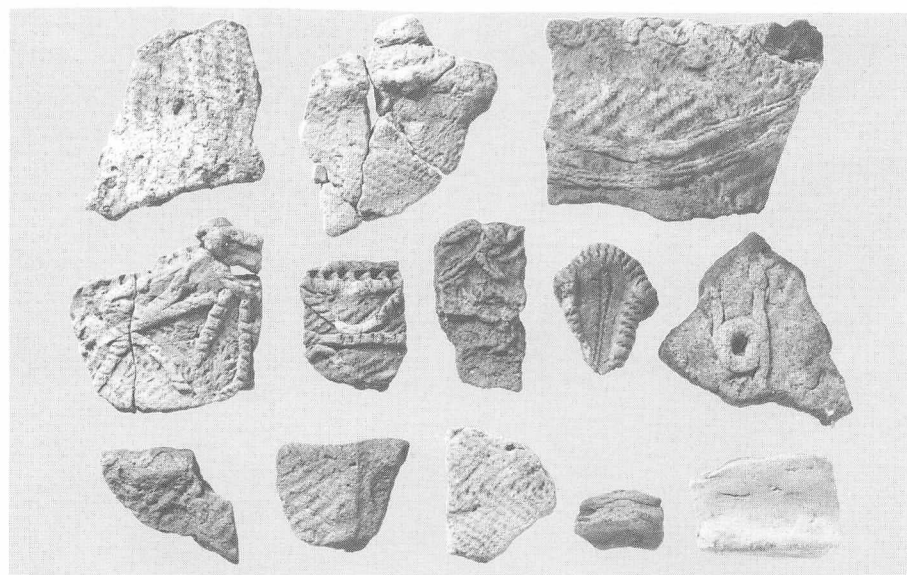
図版VII-8



1.

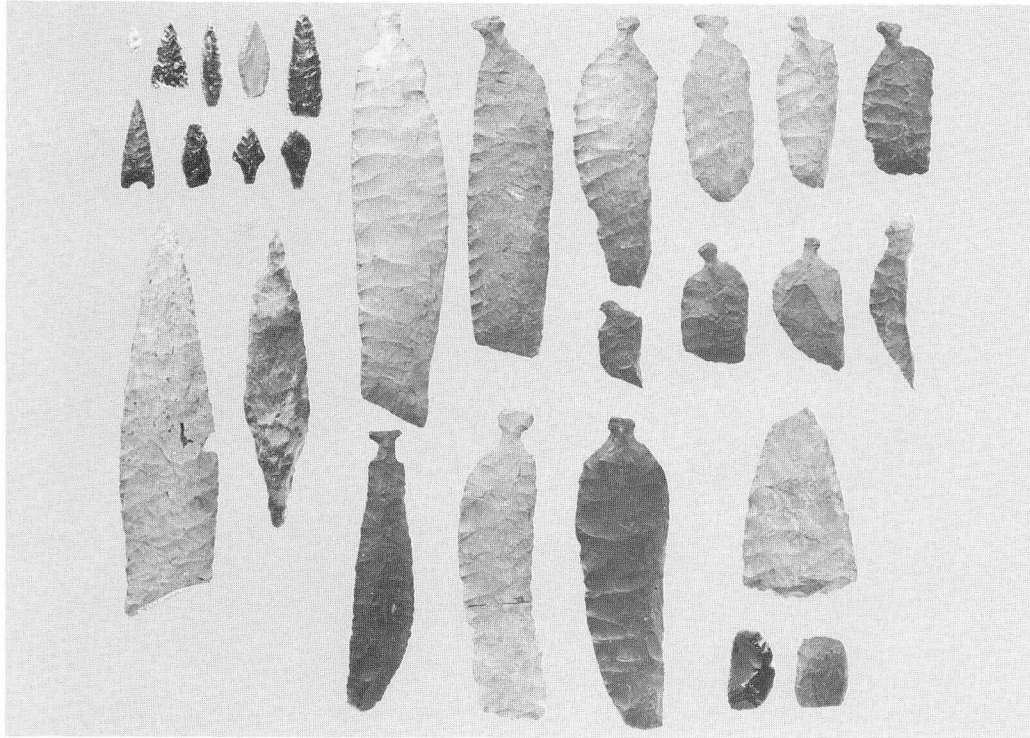


2.

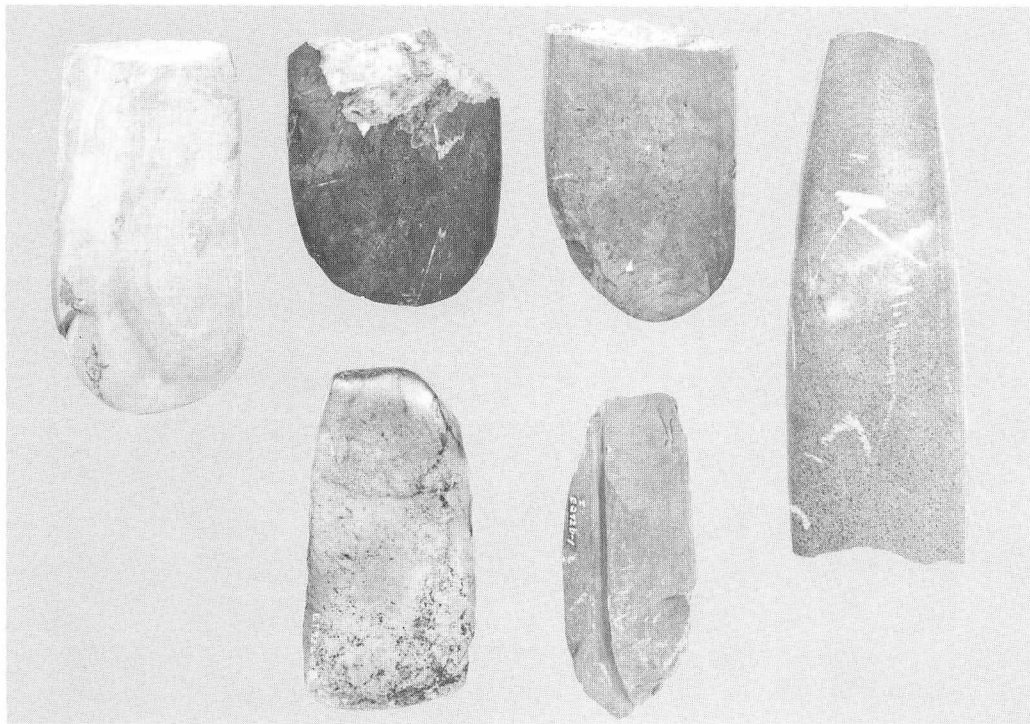


包含層出土の土器(7)

3.



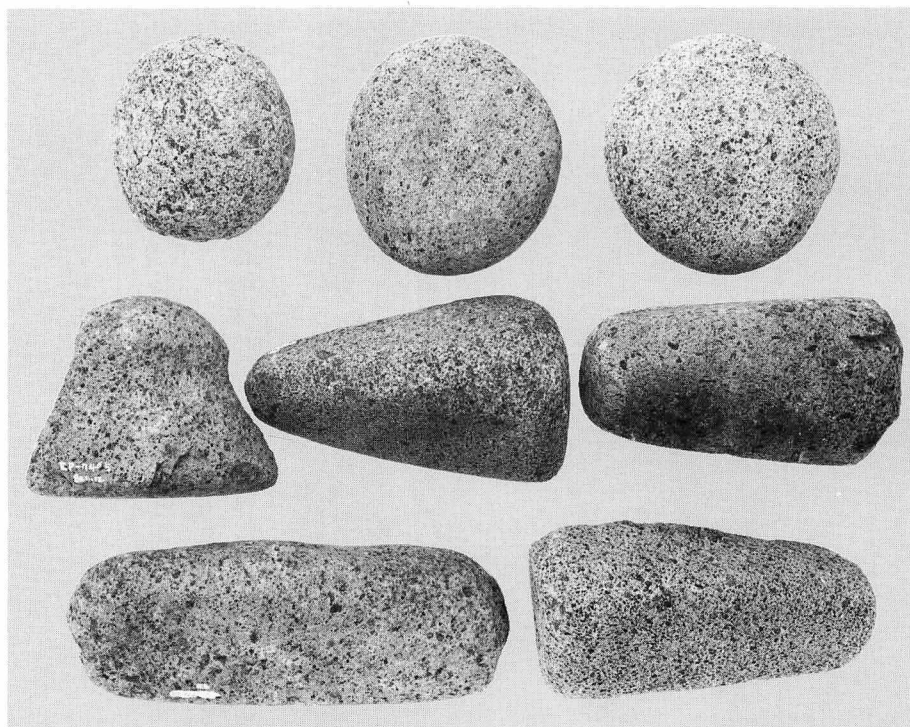
1.



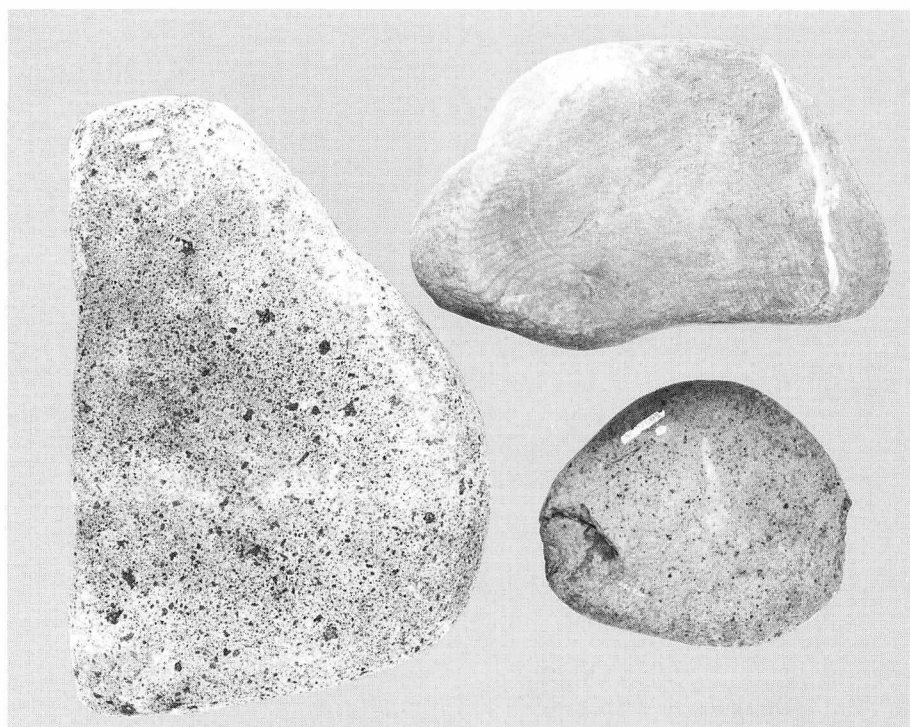
包含層出土の石器(1)

2.

図版VII-10



1.



包含層出土の石器(2)

2.

VIII F地区の調査

1. 概 要

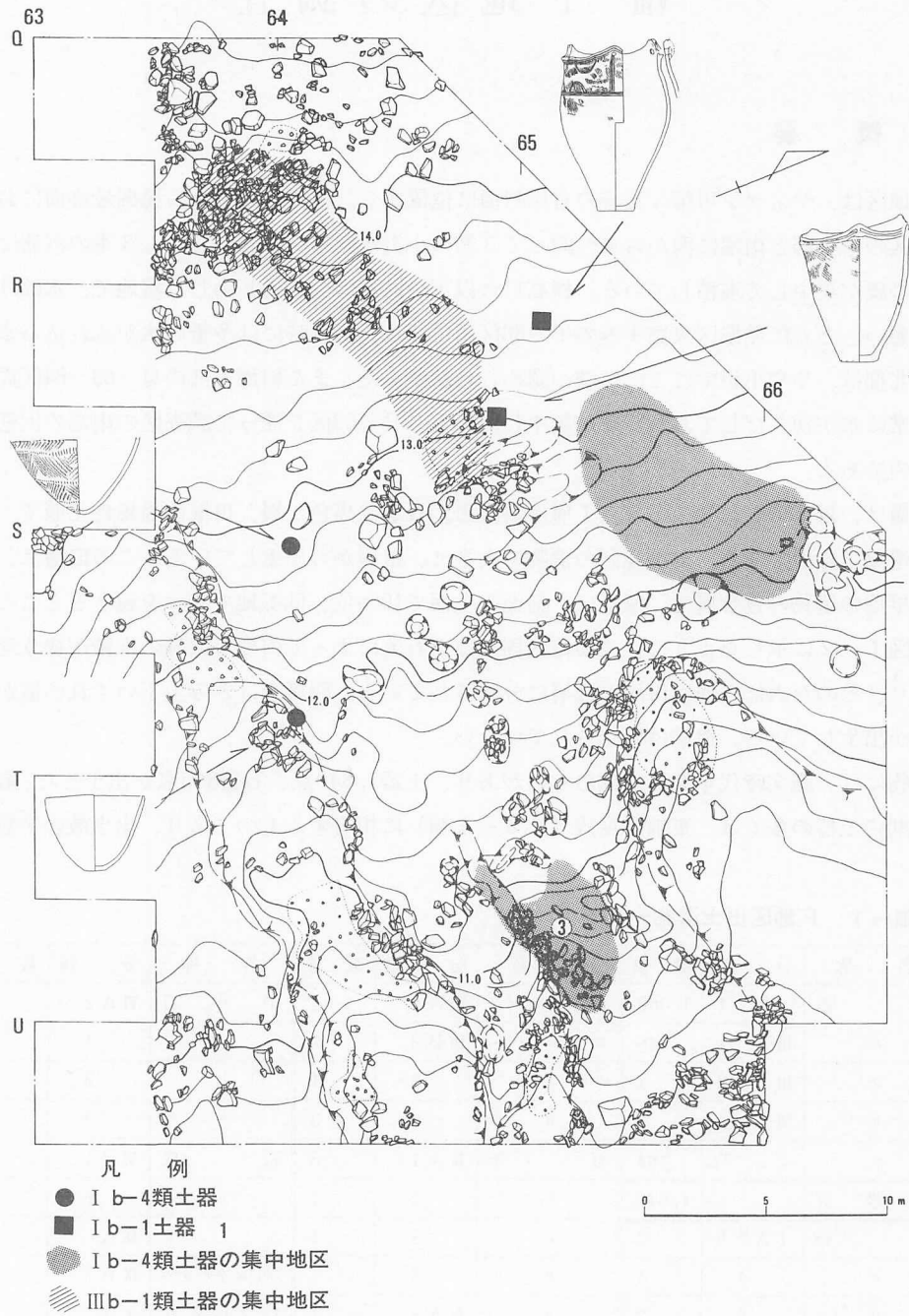
F地区は、ヤンケシ川第3支流の右岸斜面に位置する。標高10~16m。発掘最終面において、発掘区の中央部と南端に西から東へ向って3筋の小沢が認められた。これら3本の沢筋には、大小の礫が集中して堆積している。標高11m以下の区域は、じめじめした湿地で、水はけが極めて悪い。とくに発掘区東側すみのT-66区周辺では、降水時には多量の水が流れ込み水没する。北部は、やや平坦でここには礫が認められなかった。また斜面上部のQ-63、64区周辺では、常に水が湧きだしており、礫が集中している。R-63区を通過して調査区の南端の沢筋に続くものである。

土層は、以下のとおりである。I層は耕作土。II層は黒色土層、III層は黒褐色土層で、いずれも遺物包含層である。本調査区の遺物の大半は、III層から出土している。このIII層は、縄文時代早期の遺物の包含層で、厚さは、斜面の上面で10cm位、低湿地で40cmを超えるところもある。図I-2に示したように、この地区周辺は土石流によって何度も土砂の堆積が繰り返されており、そのためにII層、III層が数層に分断されている。間層をはさみ上下いずれの層からも、遺物が出土している。遺構は確認されていない。

遺物には、縄文時代早期と中期のものがあり、土器1,840点、石器325点が出土した。縄文時代早期の土器の多くは、東釧路IV式(Ib-4類)に相当するものであり、出土数の半数以上

表VIII-1 F地区出土遺物一覧表

名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量
土 器	I b-4	1,008	つまみ付きナイフ	III A 9	4	す り 石	VI A 2	1
〃	III b-1	346	スクレイパー	III B 2	2	〃	4	1
〃	III b-2	1	〃	8	1	〃	8	2
〃	VI a	1	〃	9	3	〃	9	3
〃	不 明	484	石 斧	IV A 1	3	石 皿	VI B 1	2
土 器 計		1,840	〃	2	1	〃	8	1
石 鏃	I A 2 b	2	〃	3	1	コ ア	IX A	1
〃	4	1	〃	5	1	フレイクチップ	IX B	253
〃	8	2	〃	IV A 8	1	Uフレイク	X A	2
〃	9	1	た た き 石	V A 3	1	礫・礫 片		18
つまみ付きナイフ	III A 1	8	〃	9	4	石 器 等 計		325
〃	2	3	す り 石	VI A 1	2			



図VIII-1 遺物の分布

を占める。中期の土器は見晴町式(Ⅲb-1類)に並行するものである。また入江式(Ⅳa類)に相当するものが1点出土している。

土器の出土地区の分布は大きく3か所に分けることができる。(図Ⅷ-1参照)

①:斜面上部の標高13m以上の区域、礫が集中しており水が湧き出しているQ-63、R-64区から、礫のあまりないR-64、65区にかけての地区。Ⅲb-1類の土器が、数か所にまとまって出土している。②:発掘区北側、R-65、S-65区周近で、礫があまりないやや平坦なところ。Ib-4類の土器がまとまって出土している。③:T-64、65区周辺の3本の沢筋が集中する低湿地。Ib-4類の土器のみが集中して出土している。①の地区の土器で、礫と礫の間の黒色土の中から出土しているものは、摩耗が激しい。また礫の少ないところからも、ほぼ一個体分の土器片がまとまって出土している。②の地区では、土器の摩滅はあまりみられず、器面の文様がはっきりとわかるものが多い。③の地区では、①の地区と同様に礫と礫の間、間層をはさんだ上下2層の包含層から遺物が出土しており、この地区の遺物も摩耗が激しい。

土器の出土状況は、高いところにⅢb-1類、低いところにIb-4類がまとまっている。石器も、この3地区にまとまって出土している。T-65区でフレイクが多数出土した。

2. 包含層の遺物

1) 土器(図Ⅷ-2、図版Ⅷ-2・3)

I群b-4類(1・2・5~18):平底のもの(1・17・18)と丸底のもの(2)とがあり、いずれも深鉢形である。1・17は無文、2には縄文が施されており、縄端圧痕文を三重にめぐらしている。口縁部の文様をみると、撚紐圧痕文が施されたもの(8)、綾絡文をもつもの(9・10)、撚糸文の原体を押捺したと思われるもの(11)がある。12・13は短縄文が施された間に、二本組の撚糸圧痕文で山形の文様を描いている。15は裏面にヘラ状工具によると思われる器面調製の際の擦痕がみられる。

Ⅲ群b-1類(3・4・19~26):3、4は、見晴町式に並行するものである。19~26の土器もほぼこの時期のものと思われる。3は三つの山形突起をもち、口縁はやや外反する。口唇部に、竹管状工具による沈線がみられる。4には、それぞれ形の異なる三つの山形突起があり、胴部が口縁よりもわずかに張り出している。縦・横の平行線、孤線の沈線文が施され、口唇部には3と同様の沈線がみられる。25には綾絡文が付されている。19・21は、口縁の隆起帯上に縄による刻みがつけられており、19は縦、横に太い沈線が特徴的である。

Ⅲ群b-2類(27):厚手で胎土に砂粒が混入しており、若干の繊維痕がみられる。

Ⅳ群a類(28):沈線文をもつものである。入江式に相当するものといえよう。

2) 石器(図Ⅷ-3、図版Ⅷ-4)

石器の出土点数は少ない。つまみ付きナイフ、石鏃、石斧、石皿(片)、すり石の占める割合が多い。スクレイパーは粗雑な作りのものが多い。やり先またはナイフ、石錐類は、出土していない。つまみ付きナイフはほとんどが、縄文時代早期のものと思われるⅢA1類(4~8)で、

大型である。すり石は破片が多いが、縄文時代早期に属すると思われるVI A 1 (18)のものが多
い。石器の出土地区は、土器の集中地区とほぼ一致する。

3. 小 括

本調査区では、遺構はないが、縄文時代早期と中期の土器集中地区が3か所あった。またほ
ぼ一個体分の土器片のまとまりが4か所に点在してみとめられるという分布の特徴があった。

I b-4 類の土器は、②と③の地区に集中している。又単独で、南側の土石流中と礫のない
やや平坦なとこにほぼ完形に近い二個体分が出土している(図VIII-1)。②地区の土器はほとん
ど摩耗していない。しかし③地区では、土器が礫の間から出土しており摩耗も激しい。このこ
とから、③地区の土器は、出土地点より更に高い地区から土石流により押し流され沢筋に堆積
したものではないかと思われる。この場合、予想されるのは、②のR-65、S-65付近で、こ
の周辺に早期の生活域があったのではないかと考えられる。

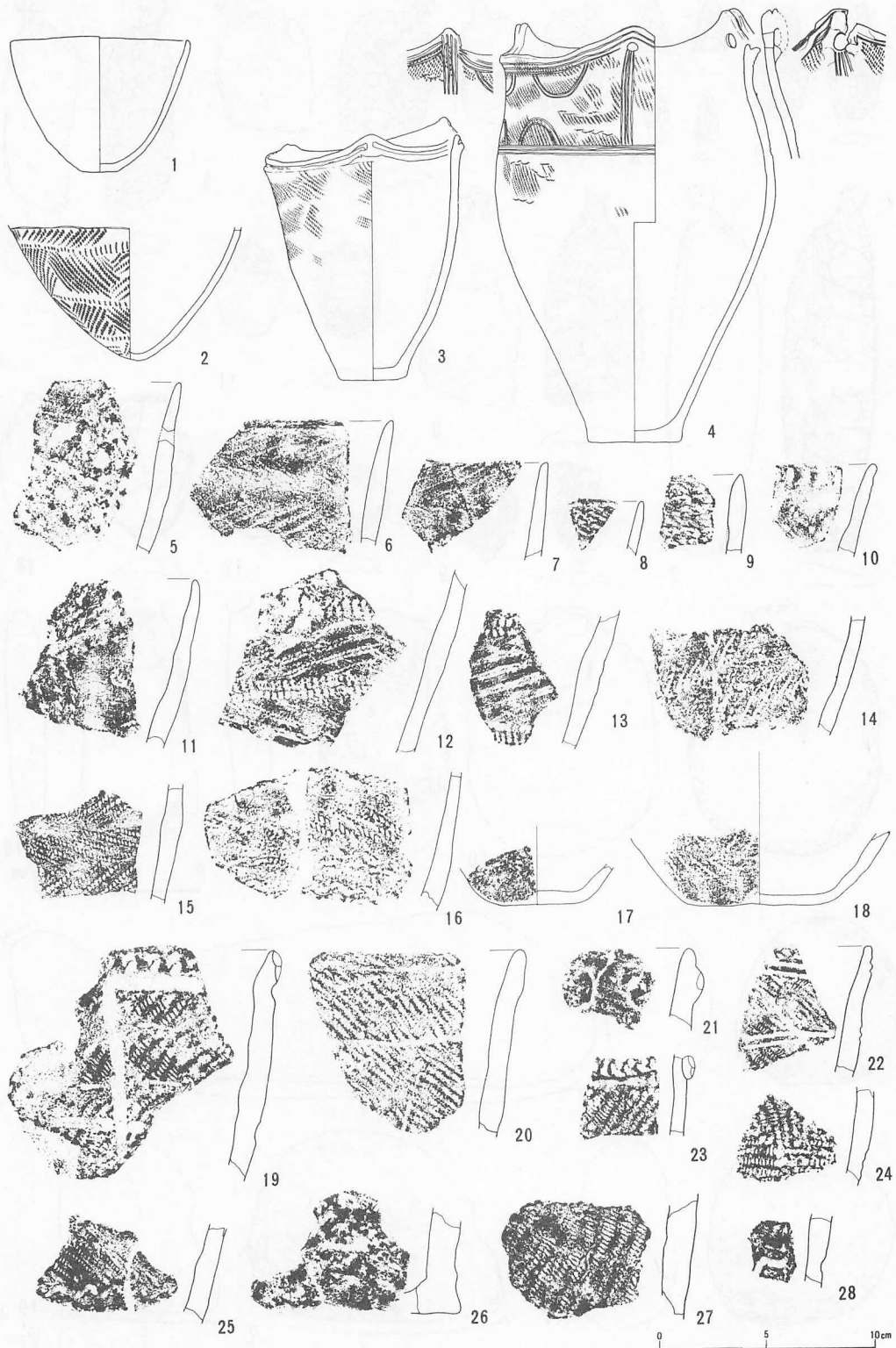
III b-1 類の土器は、①地区に数か所まとまっており、N、Us-cパミスや凝灰岩を含んだ土
石流中にみいだせる。また①地区のすぐそばから、レベルは異なるがほぼ完形にちかい形で、2
個体がいずれも、その場で押しつぶされた状態で出土している。これらのことから、この斜面
の上方に当時の生活領域があったことが予想される。

表VIII-2 F地区掲載土器一覧表

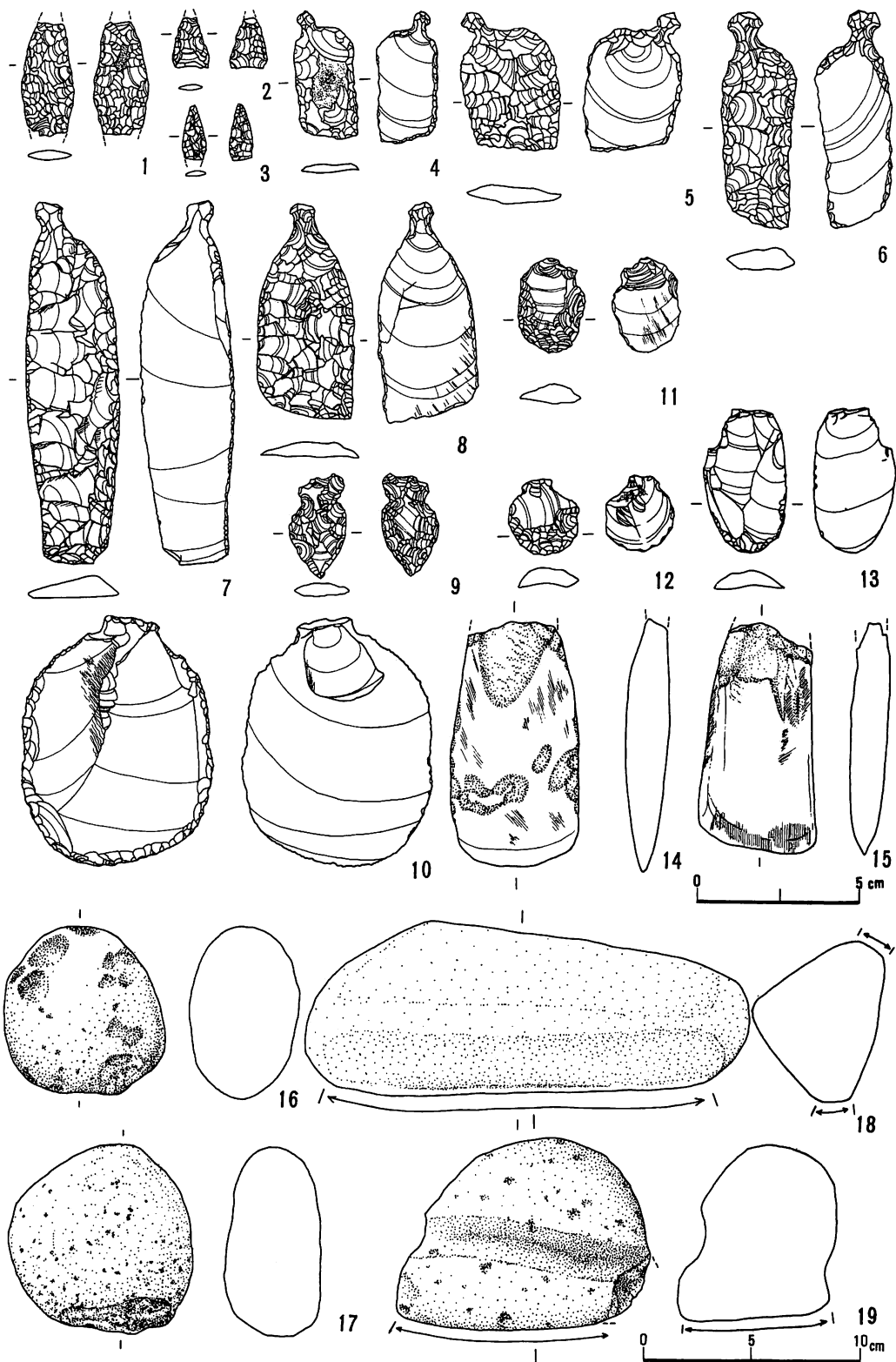
番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
1	Ib-4	S-64-b	図版VIII-2	11	Ib-4	S-65-d	図版VIII-3	21	IIIb-1	R-63-c	図版VIII-3
2	"	S-64-a	図版VIII-2	12	"	R-63-c	"	22	"	R-62-a	"
3	IIIb-1	R-64-c	図版VIII-2	13	"	R-63-c	"	23	"	Q-63-c	"
4	"	R-65-a	図版VIII-2	14	"	T-64-d	"	24	"	Q-63-c	"
5	Ib-4	S-65-d	図版VIII-3	15	"	S-65-c	"	25	"	Q-63-c	"
6	"	T-65-b	"	16	"	S-66-a	"	26	"	R-63-c	"
7	"	T-65-b	"	17	"	T-65-b	"	27	"	Q-63-c	"
8	"	R-65-a	"	18	"	R-65-a	"	28	IV a	R-64-b	"
9	"	T-65-b	"	19	IIIb-1	R-63-c	図版VIII-3				
10	"	T-65-b	"	20	"	Q-63-c	"				

表VIII-3 F地区掲載石器一覧表

番号	名 称	分類	発掘区	重さ(g)	材 質	備考	番号	名 称	分類	発掘区	重さ(g)	材 質	備考
1	石 鏃	IA2-	U-65-a	(0.24)	Obs.		11	スクレイパー	III B 2	R-65-a	(0.31)	Obs.	
2	"	IA2b	U-65-a	(0.3)	"		12	"	"	R-65-c	(0.23)	"	
3	"	IA 4	R-65-c	0.2	"		13	"	III B 9	Q-64-c	(0.58)	Sh.	
4	つまみ付きナイフ	III A 1	T-64-a	3.0	Che.		14	石 斧	IV A 3	S-66-b	(65.0)	Gr-Mud.	
5	"	III A 2	S-65-d	6.3	"		15	"	IV A 1	Q-64-b	(46.0)	"	
6	"	III A 1	S-65-d	10.0	Sh.		16	たたき石	V A 9	S-65-a	390.0	And.	
7	"	"	Q-63-c	2.41	"		17	"	"	S-63-c	430.0	"	
8	"	III A 2	R-64-b	9.3	Ha-sh.		18	すり石	VI A 1	T-66-a	1,220.0	"	
9	"	III A 9	T-65-a	2.7	Obs.		19	"	VI A 4	R-63-c		"	
10	"	"	Q-63-c	35.3	Sh.								



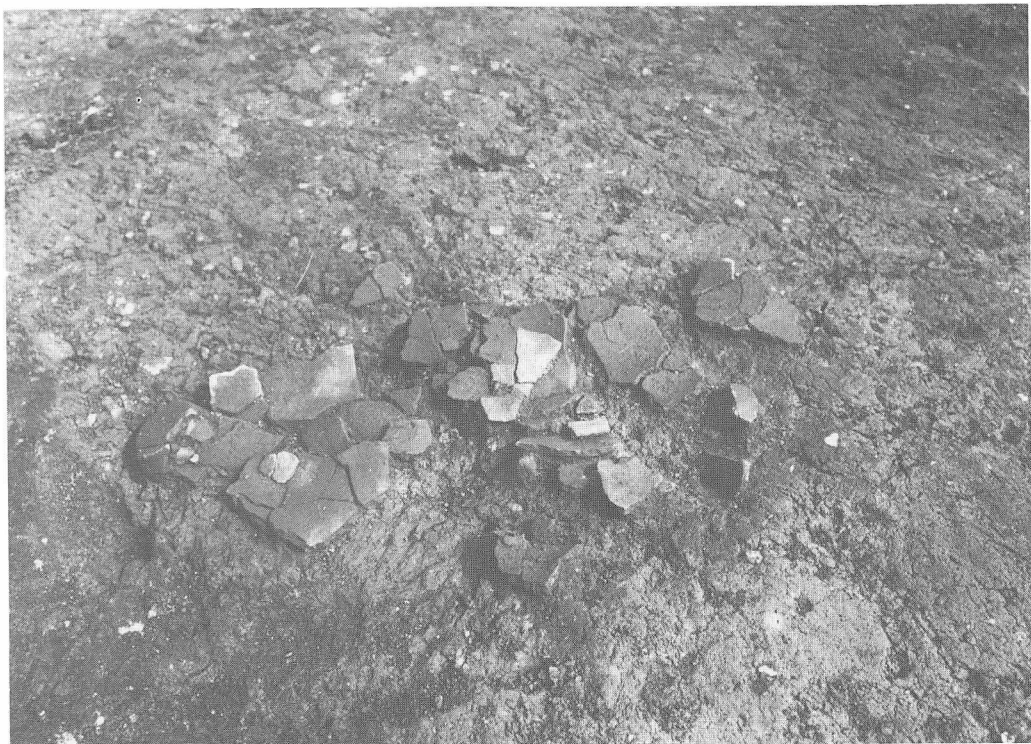
図VIII-2 包含層出土の土器



図Ⅷ-3 包含層出土の石器



1. 発掘調査状況



2. 土器出土状況 (R-64-c)

図版Ⅷ-2



土器出土状況 (R-65-a)



1.

2.

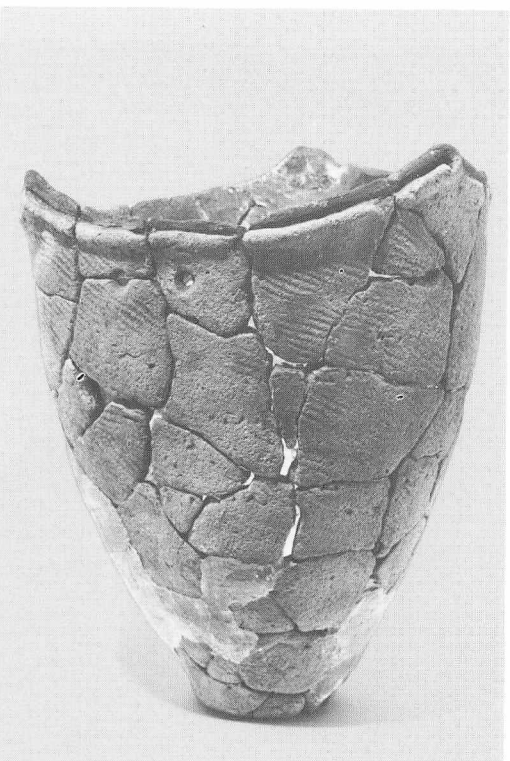


3.

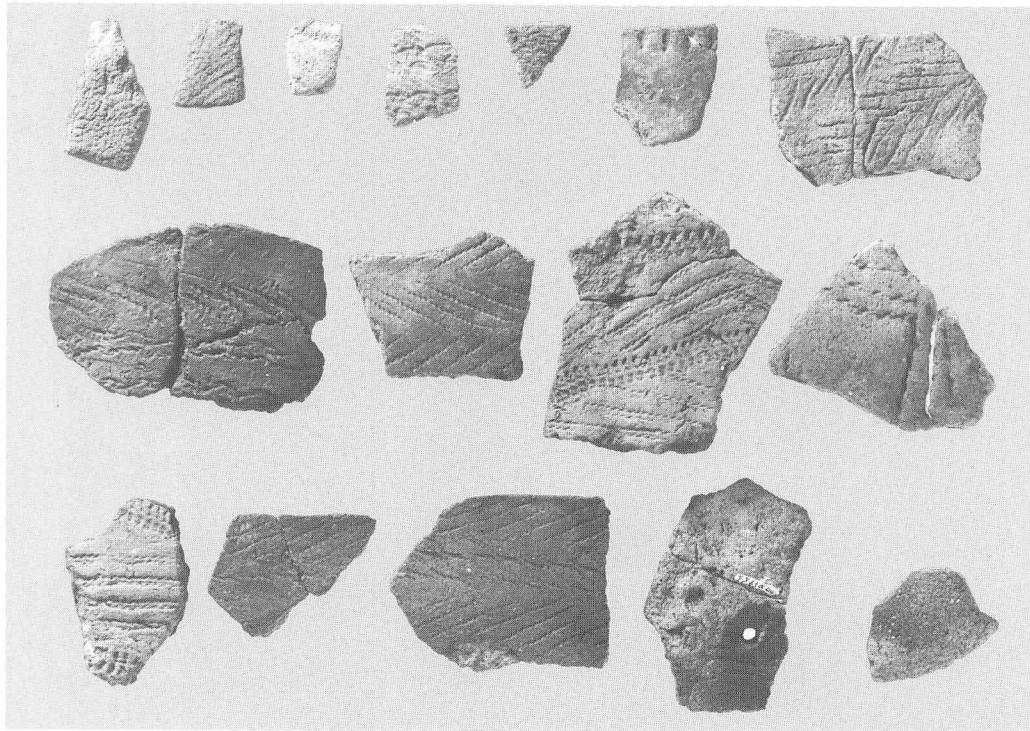


包含層出土の土器(1)

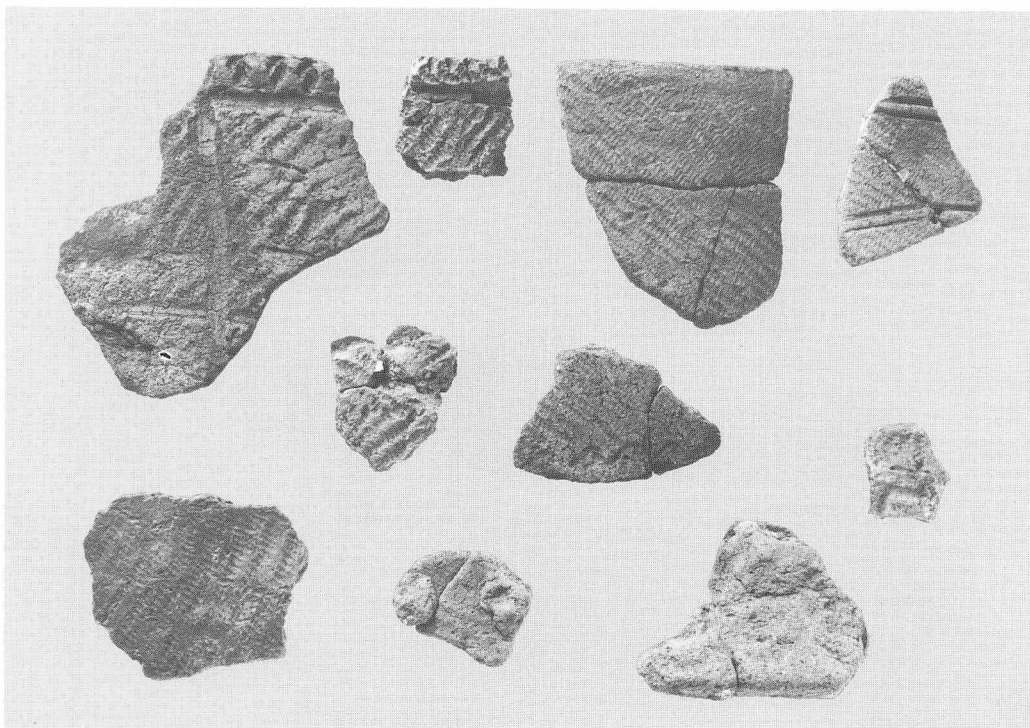
4.



5.



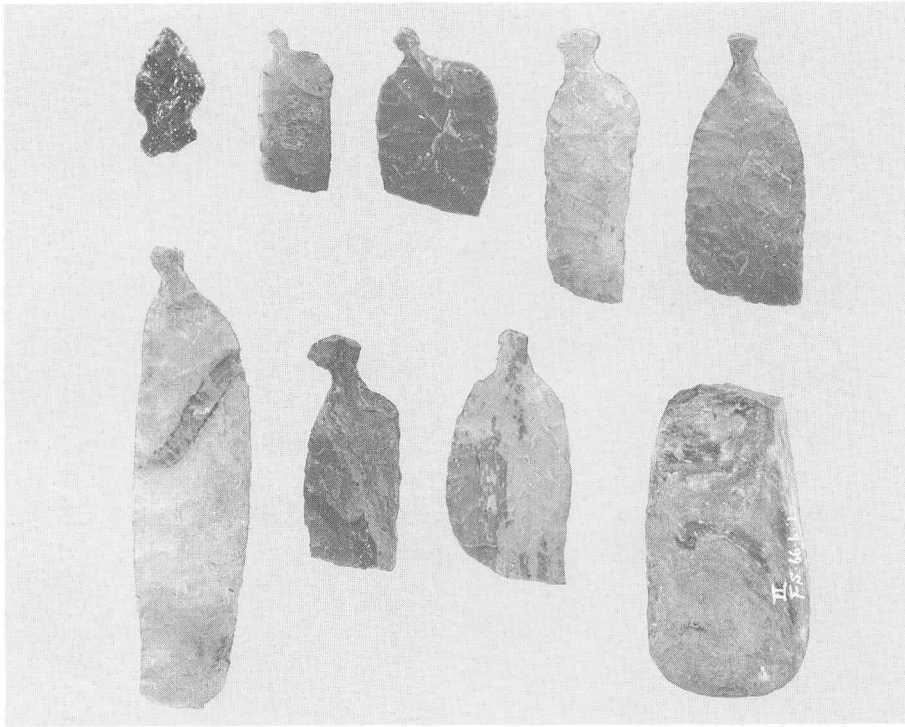
1.



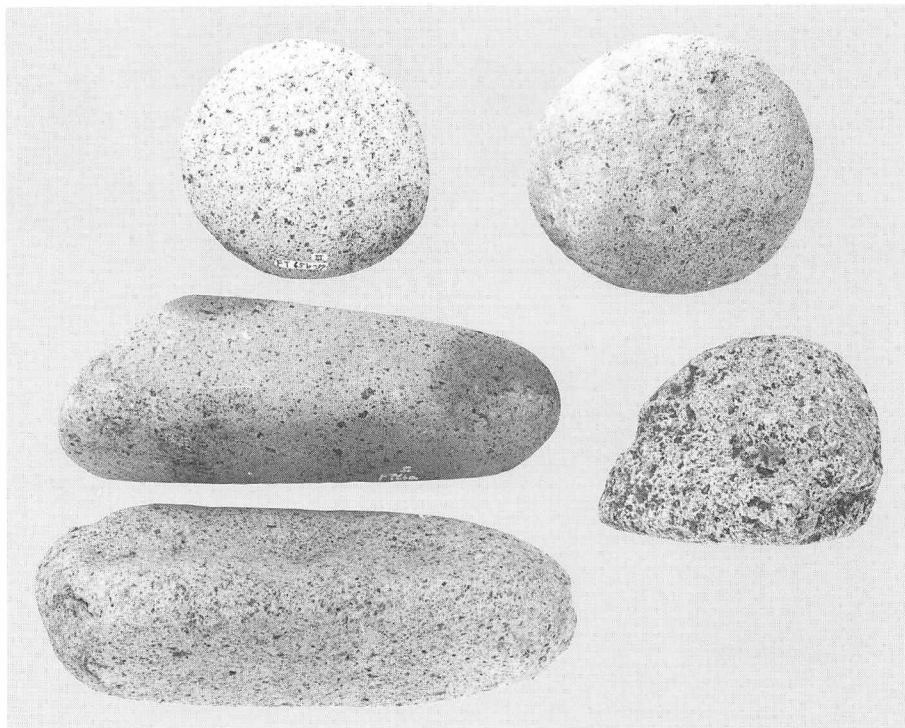
包含層出土の土器(2)

2.

図版VIII-4



1.



包含層出土の石器

2.

IX G地区の調査

1. 概 要

G地区は、カムイヌブリの南東稜の末端に位置し、川上B遺跡の南はずれにある。2か所の湧水からの流れにはさまれたやや急な斜面で、標高14~22m。

遺構は、Q-58-bのII~III層にみられる焼土1か所のみである。直径約50cmのほぼ円形で厚さ10cm。周辺からは、炭化したオニグルミが出土している。時期は縄文時代早期。

遺物は、703点出土している。縄文早期の円孔文、沈線文土器、東釧路Ⅲ式土器、縄文中期の柏木川式などがある。円孔文、沈線文土器は、(1)Q-57-bのP-1付近、(2)Q-57-d付近、(3)Q-58-bのP-2、F-1付近の3か所に分布が集中している。

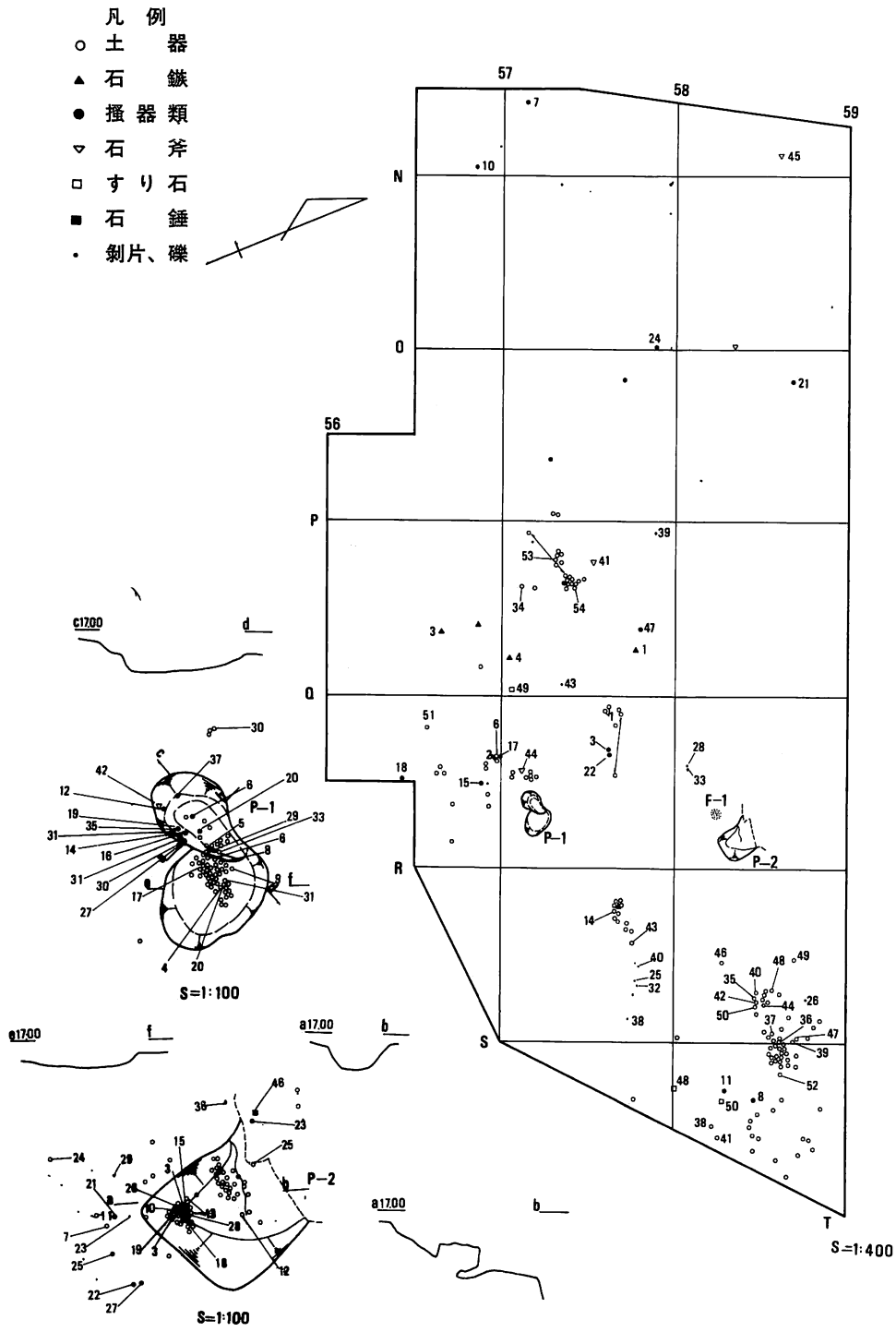
P-1は、明瞭な形状をもたないことから遺構と認定しなかったが、凹地内のIII層からは、土器片が多数出土している。また、II層からは、大形スクレイパーや石斧なども出土している。

P-2は、風倒木痕であるが、その中から土器片が多数出土した。

東釧路Ⅲ式土器は、C-58-dを中心に、かなり広範囲に分布している。縄文中期の土器はP-57-aに分布している。石器は、発掘区の全域にわたって点在している。

表IX-1 G地区出土遺物一覧表

名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量	名 称	分 類	数 量
土 器	I a	408	やり先 <small>なたは</small> ナイフ	IB 1	1	石 斧	IV A 8	3
"	I b-1	203	石 錐 類	II A 1	1	"	IV A 9	1
"	III a	17	つまみ付ナイフ	III A 1	3	す り 石	VI A 1	3
"	III b-2	14	"	2	1	石 錘	VIII A 2	1
"	III	1	スクレイパー	III B 1	1	コ ア	IX A	1
土 器 計		643	"	2	1	フ レ イ ク	IX B	17
石 鏃	IA 2 b	2	"	8	1	Uフレイク	X A	1
"	3	1	"	9	13	礫・礫 片		2
"	8	1	石 斧	IV A 1	2	有 孔 円 盤		1
"	9	1	"	5	1	石 器 等 計		61



図IX-1 遺物の分布

表IX-2 G地区掲載土器一覧表

番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
1	I a	Q-57-d		19	I a	Q-58-b		37	I b-1	R-58-c	
2	"	Q-56-d		20	"	Q-57-b		38	"	S-58-b	
3	"	Q-57-b		21	"	Q-58-b		39	"	R-58-c	
4	"	"		22	"	"		40	"	R-58-b	
5	"	"		23	"	"		41	"	S-58-b	
6	"	"		24	"	"		42	"	S-58-a	
7	"	Q-58-b		25	"	"		43	"	R-57-d	
8	"	Q-57-b		26	"	"		44	"	R-58-c	
9	"	"		27	"	"		45	"	S-58-c	
10	"	Q-58-b		28	"	"		46	"	S-58-a	
11	"	"		29	"	Q-57-b		47	"	S-58-b	
12	"	"		30	"	"		48	"	S-58-a	
13	"	"		31	"	"		49	"	S-58-c	
14	"	R-57-d		32	"	"		50	"	S-58-b	
15	"	Q-58-b		33	"	Q-57-b		51	"	R-56-d	
16	"	Q-56-d		34	"	P-37-a		52	"	S-58-d	
17	"	Q-57-6		35	I b-1	R-58-c		53	III b-2	P-57-a	
18	"	Q-58-b		36	"	"		54	"	"	

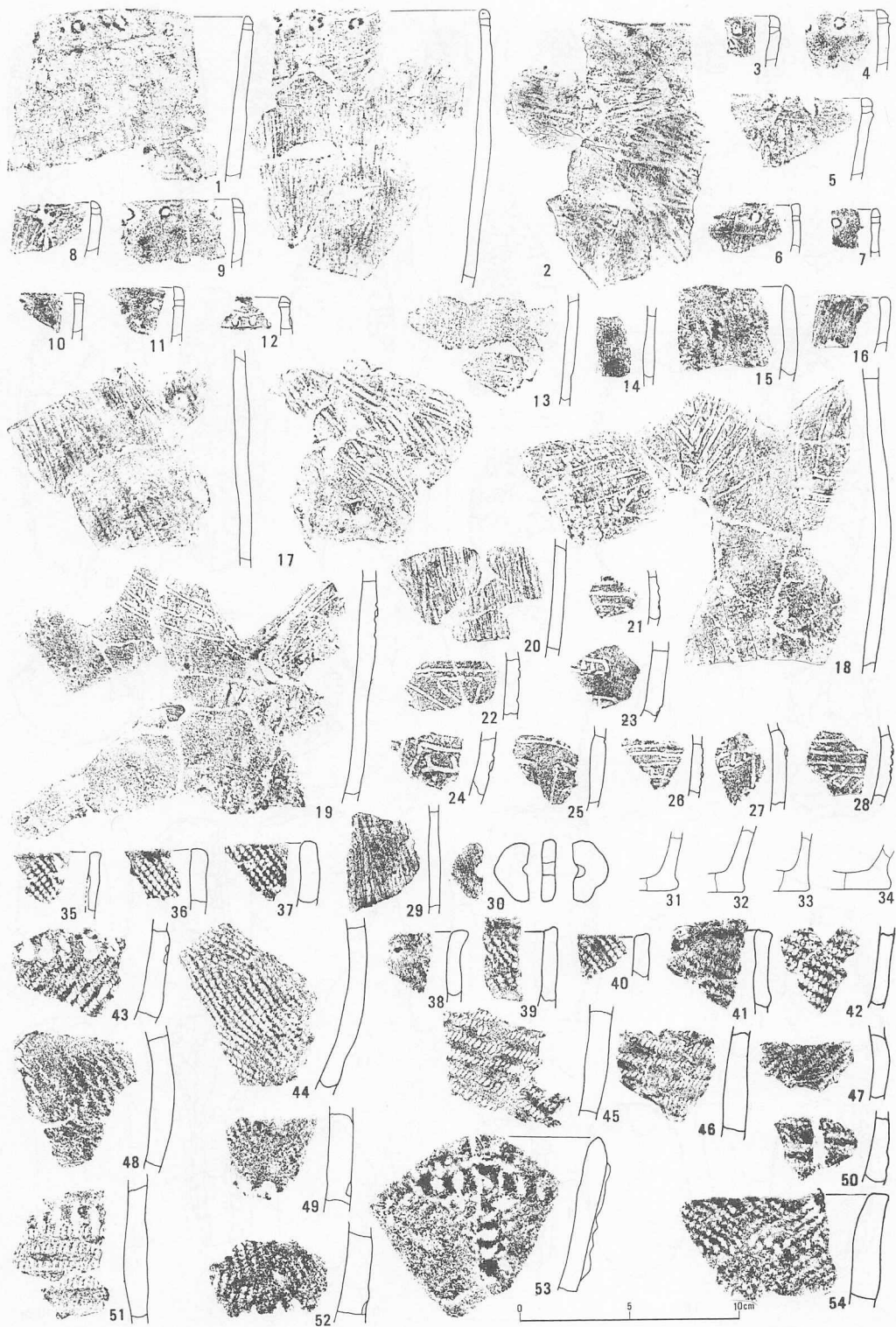
表IX-3 G地区掲載石器一覧表

番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材料	備考	番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	備考
1	石 鐵	IA 2 b	P-57-c	(0.75)	Obs.		26	スクレイパー	III B 9	R-57-c	21.6	Sh.	
2	"	IA 3	N-58-d	0.3	"		27	フレイク	IX B	R-58-c	(2.1)	"	
3	"	IA 2 b	P-56-c	(1.6)	"		28	"	"	Q-58-a	(3.0)	"	
4	"	IA 9	P-57-b	1.6	"		29	"	"	"	8.0	"	
5	やり先またはナイフ	IB 1	表面採集	8.9	"		30	"	"	Q-58-b	5.5	"	
6	石 錐 類	II A 1	Q-57-b	11	"		31	"	"	Q-57-b	38.0	"	
7	つまき付きナイフ	III A 2	M-57-b	12.5	Sh.		32	"	"	R-57-c	8.7	"	
8	"	III A 1	S-58-d	(19.9)	"		33	"	"	Q-58-a	36.7	"	
9	"	"	Q-57-b	(13.6)	"		34	"	"	Q-57-b	43.0	"	
10	"	"	M-56-c	16.8	"		35	"	"	"	27.0	"	
11	スクレイパー	III B 1	S-58-a	22.4	"		36	"	"	Q-58-b	18.8	"	
12	"	III B 2	Q-57-b	13.0	"		37	"	"	Q-57-b	13.6	"	
13	"	III B 9	Q-57-d	8.6	"		38	"	"	R-57-c	(6.7)	"	
14	"	"	Q-57-b	38.1	"		39	"	"	P-57-d	13.7	"	
15	"	"	Q-56-c	8.0	"		40	"	"	R-57-c	(4.1)	"	
16	"	"	Q-57-b	24.7	"		41	石 斧	IV A 1	P-57-d	44.4	Sch.	
17	"	"	Q-56-d	(13.2)	"		42	"	"	Q-57-b	49.8	Gr-Mud.	
18	"	"	Q-56-a	(16.8)	"		43	礫	"	P-57-b	8.6	"	
19	"	"	Q-57-b	75.9	"		44	石 斧	IV A 8	Q-57-a	(28.8)	"	
20	"	"	Q-57-b	44.7	"		45	"	IV A 5	N-58-b	(125)	"	
21	"	"	Q-58-b	26	"		46	石 錘	VII A 2	Q-58-b	112	"	
22	"	"	Q-57-d	8.0	"		47	スクレイパー	III B 9	P-57-c	242	Ba.	
23	"	"	Q-58-d	8.1	"		48	すり石	VI A 1	S-58-a	(371)	And.	
24	"	"	N-57-c	29.6	"		49	"	"	P-57-b	680	"	
25	"	"	Q-57-b	30.7	Mud.		50	"	"	S-58-a	245	"	

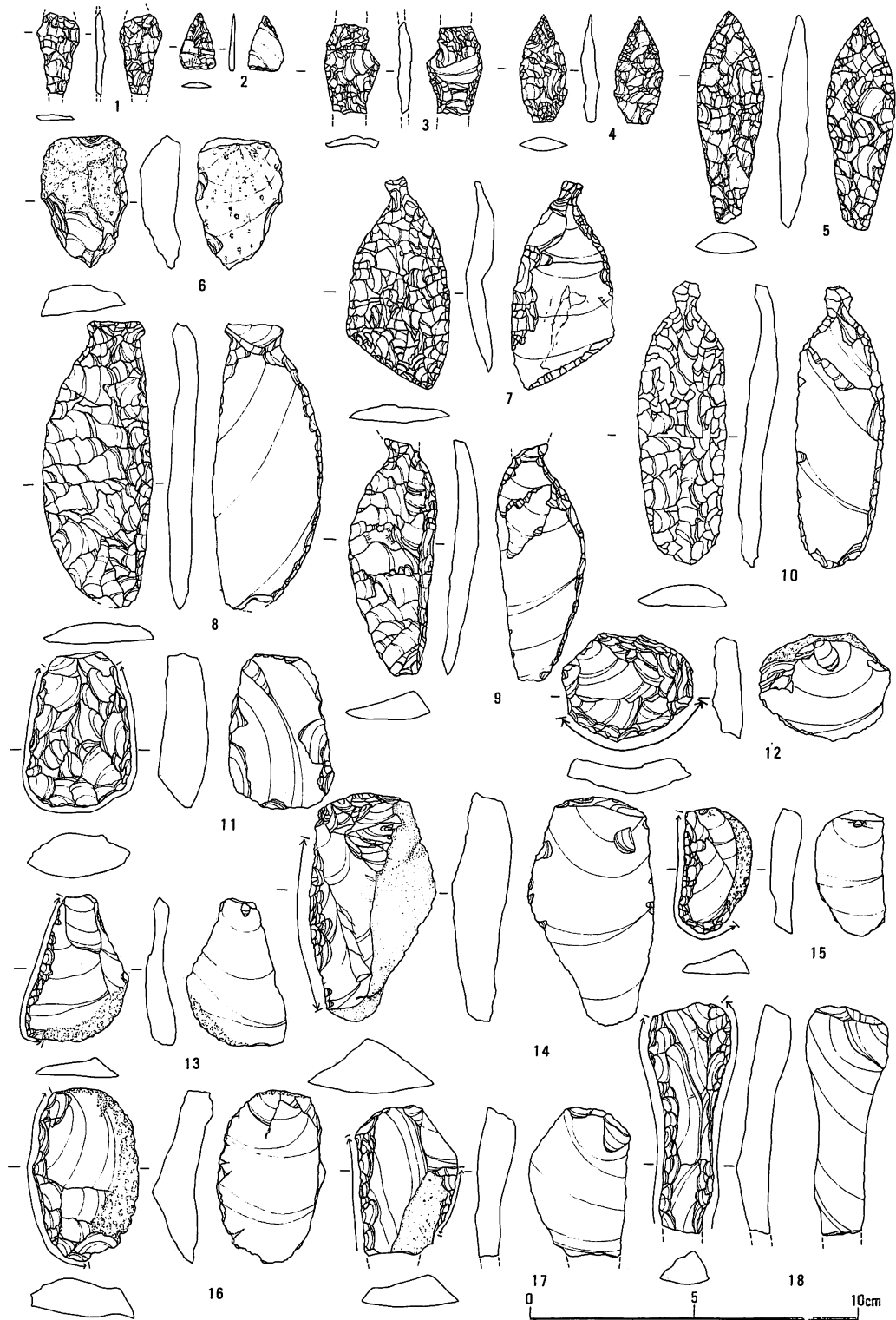
2. 遺物

1) 土器

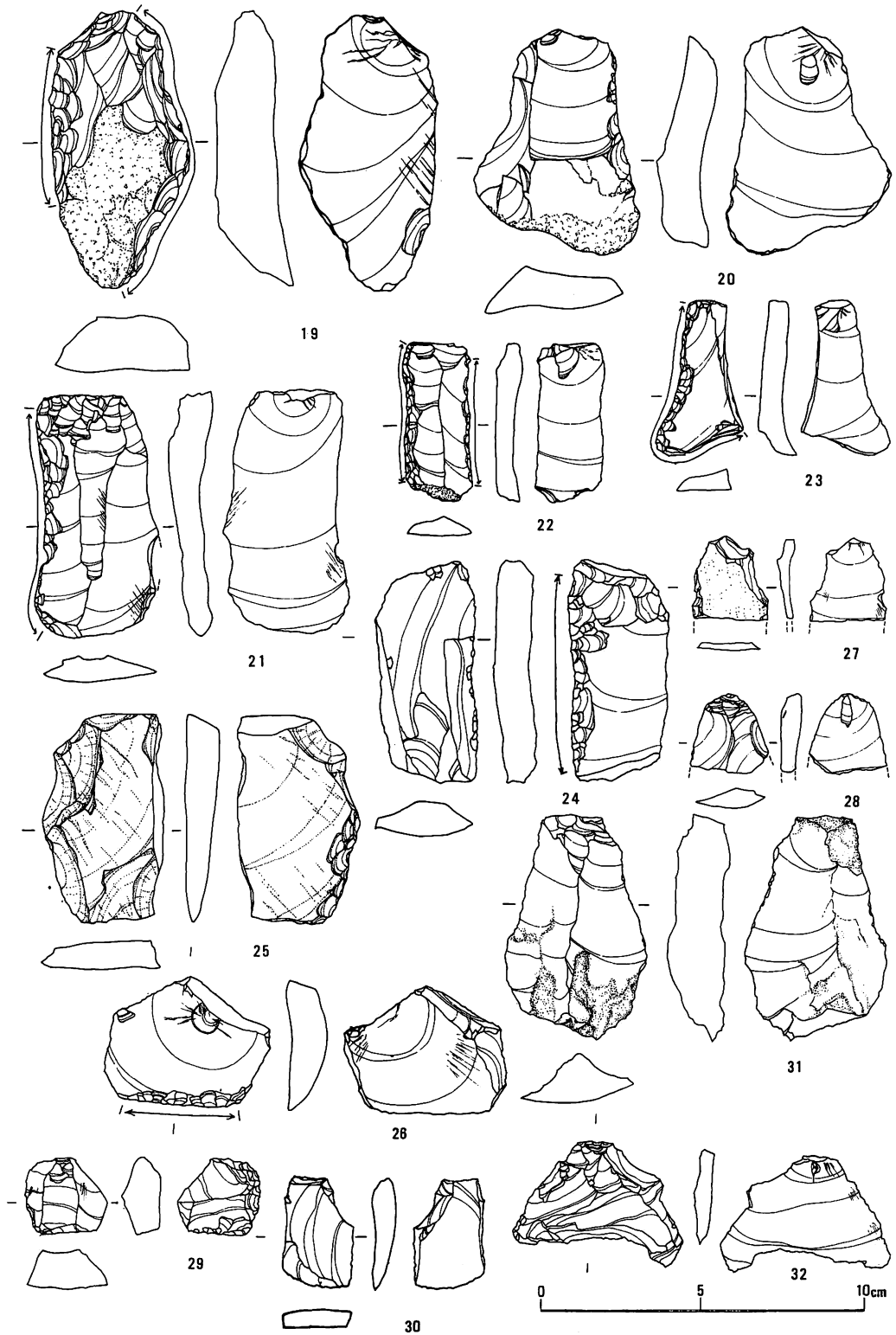
縄文早期の2型式と、縄文中期の土器が出土した。1～12が円孔文土器。1は口縁がゆるやかな波状を呈する。器壁は4mmと非常に薄い。胎土には小礫、石英を含むが繊維はみられない。文様はI・0の円孔文が口縁に平行してほぼ2cm間隔で4つ施されている。器表面には炭化物が付着し黒色の色調である。3・7・10～12はP-2から出土している。いずれも小片である。10・11の口唇は平坦に作られ、11はやや外側に傾斜している。文様は3・7・10・11が円孔文+沈線文。円孔文は3・7・10がI・0、11・12が0・Iである。12の沈線文は口縁に平行する沈線が2本、そのなかに縦位の短い沈線が施されている。2・4～6・8・9はP-1出土。2は口唇部が器面調整と同施文具で整形され、やや外側に傾斜している。胎土には小礫と石英を含み、繊維はみられない。外面には縦位の調整痕がみられ、内面はより明瞭に斜位の調整痕が認められる。文様はI・0の円孔文。縦位の調整痕は5・8の外面にもみられる。円孔文はいずれもI・0である。13・14にも縦位の調整痕がみられる。15・16は円孔文のみられない口縁部破片。15はP-2、16はP-1出土。15は波状口縁。外面は凹凸が著しい。16にも縦位の調整痕がみられる。17・20・29はP-1出土。内外面に縦位、斜位の調整痕が認められる。18・19・21～28は沈線文土器でP-2出土。18・19は同一個体。かなり大形の土器で、やや胴張りの器形である。文様は沈線で構成され、胴下半部には施文されていない。口縁部がないため口縁部文様とのつながりは不明である。従って18・19の文様は文様構成の末端部である。文様構成はV字もしくはL字の2本の平行沈線とそれを結ぶ縦位の短沈線の3構成となっている。そして平行沈線の文様構成はV字間の空間内に施文されている。23は平行沈線と短沈線が施文され、2本の平行沈線の末端が結ばれている。28は平行沈線間に刺突文が連続して施されている。刺突文の原体は明らかに半截状のものである。30はP-1出土の有孔円盤?。円形と思われ、その中心に孔が穿たれている。文様は認められない。31～34はP-1出土の底部。いずれも平底で底面が平坦である。底がやや張り出している。35～52は縄文早期東釧路Ⅲ式土器。35～41は口縁部破片。口唇部は平坦で若干外側に肥厚している。胎土に小礫を含み、やや脆い。色調は黒褐色ないし赤褐色を呈す。縄文はいずれもRL斜縄文。45・46は太目のRL斜縄文が横位に施されている。47はLR斜縄文。48はRの撚糸文が左上から右下に施文されている。胎土には石英が混入している。43・49・52はループ状の縄圧痕が押圧されている。縄文は43がLR、49・52がRL斜縄文。51は東釧路Ⅲ式土器の分布範囲外のQ-56-dから出土し、絡条体圧痕文と短縄文が施文されている。53・54は縄文中期のいわゆる「柏木川式土器」に類似する土器と思われる。53は波状口縁で、口唇部は円頭を呈する。器外面が風化しているため文様は鮮明でないが、T字状の貼付帯があり、その上に縄文が押圧施文されている。地文は不明である。54は口縁は波状を呈し、口唇部が内側にやや傾斜している。内面はていねいに研磨調整されている。文様は不鮮明であるが、羽状地文である。



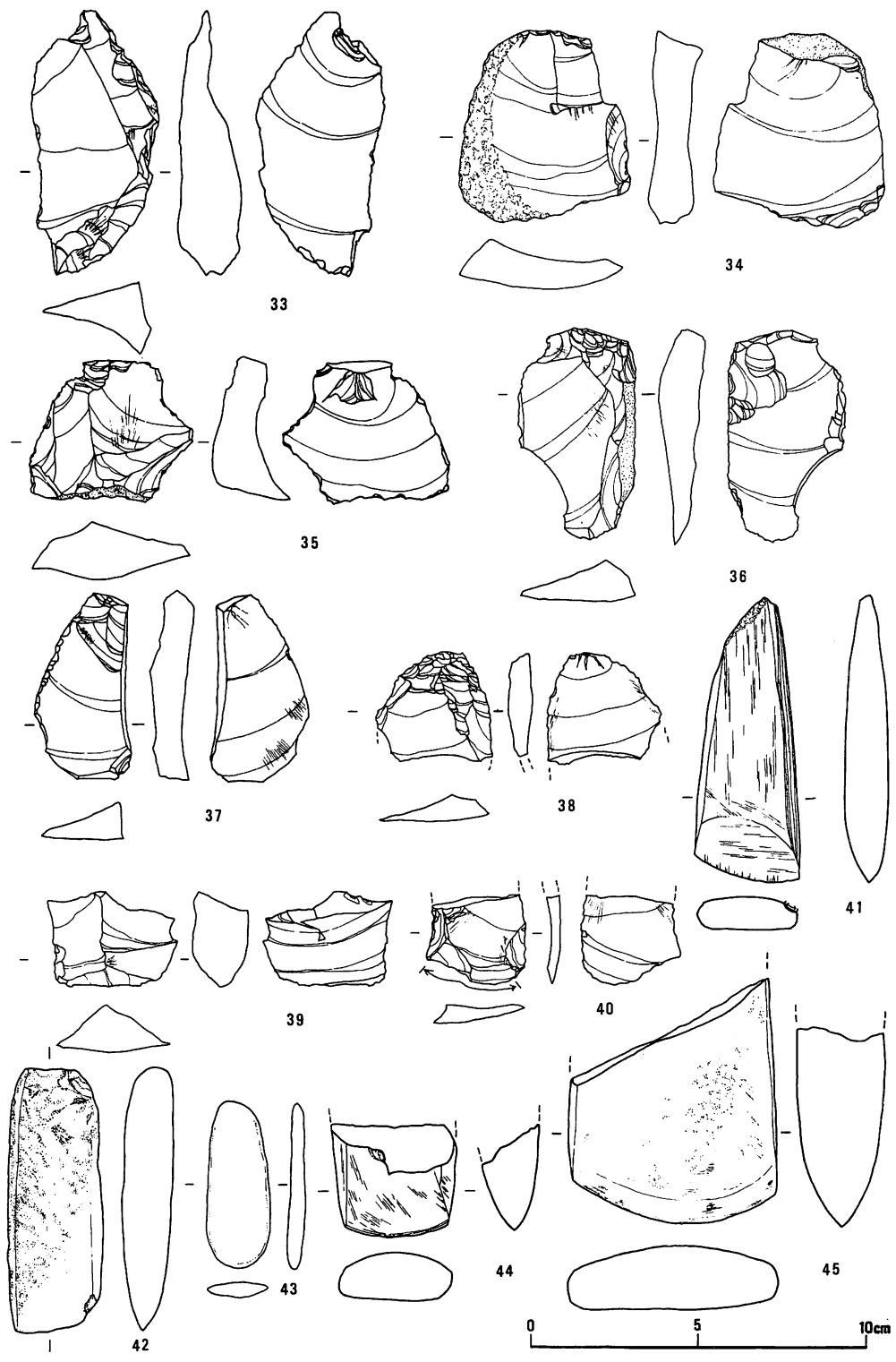
図IX-2 G地区出土の土器



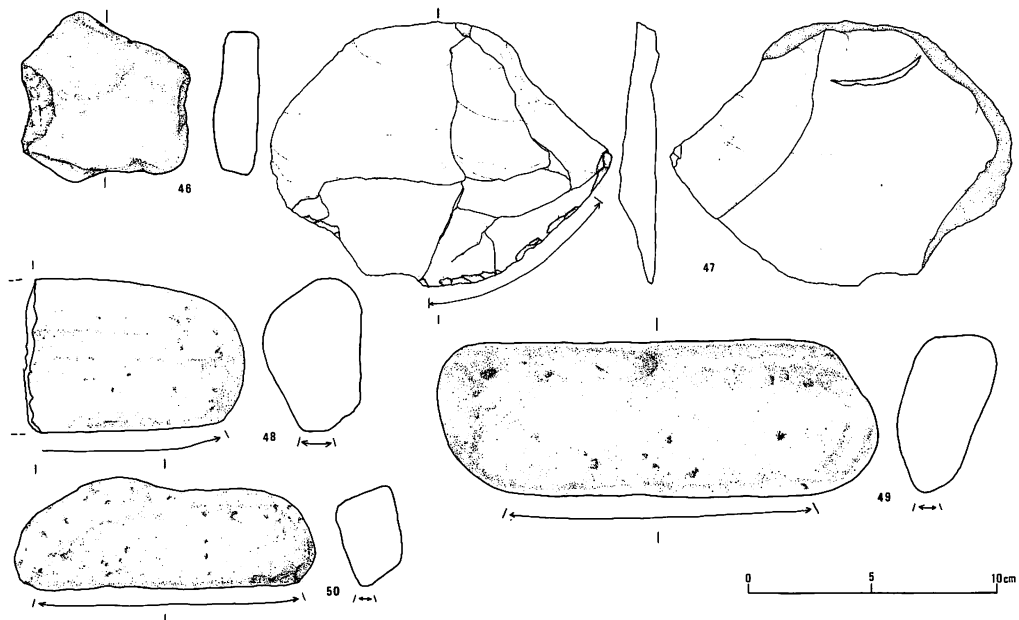
図IX-3 G地区出土の石器(1)



図IX-4 G地区出土の石器(2)



図IX-5 G地区出土の石器(3)



図IX-6 G地区出土の石器(4)

2) 石器

石質は1～6が黒曜石、7～40が頁岩、25は泥岩、41が片岩、42～45が緑色泥岩である。1・3は石鏃の未製品。いずれも茎が作られている。2は薄身の剥片に簡単な加工を施した三角鏃で基部がややくぼんでいる。4は基部の欠損した柳葉形の石鏃。5は左右がやや非対称の石槍。いわゆる花十勝の黒曜石。6は球稜のみられる赤井川産の黒曜石で、石錐もしくはスクレイパー。7～10はつまみ付きナイフ。11～40、47はスクレイパー。41・42・44・45は石斧。41・42はP-1の分布範囲内にある。いずれも擦り切り痕を残す両刃の石斧。41はていねいに全面研磨している。42は全面に細かなペッキングが認められ、刃先だけ研磨している。44・45も両刃の石斧。43は全面に研磨のみられる礫である。46は石錘。長軸の両端に打ち欠きを持つ。48～50はすり石。いずれも断面がすみまる三角形の礫に近いもので、長軸の稜の一つを使用している。

3. 小括

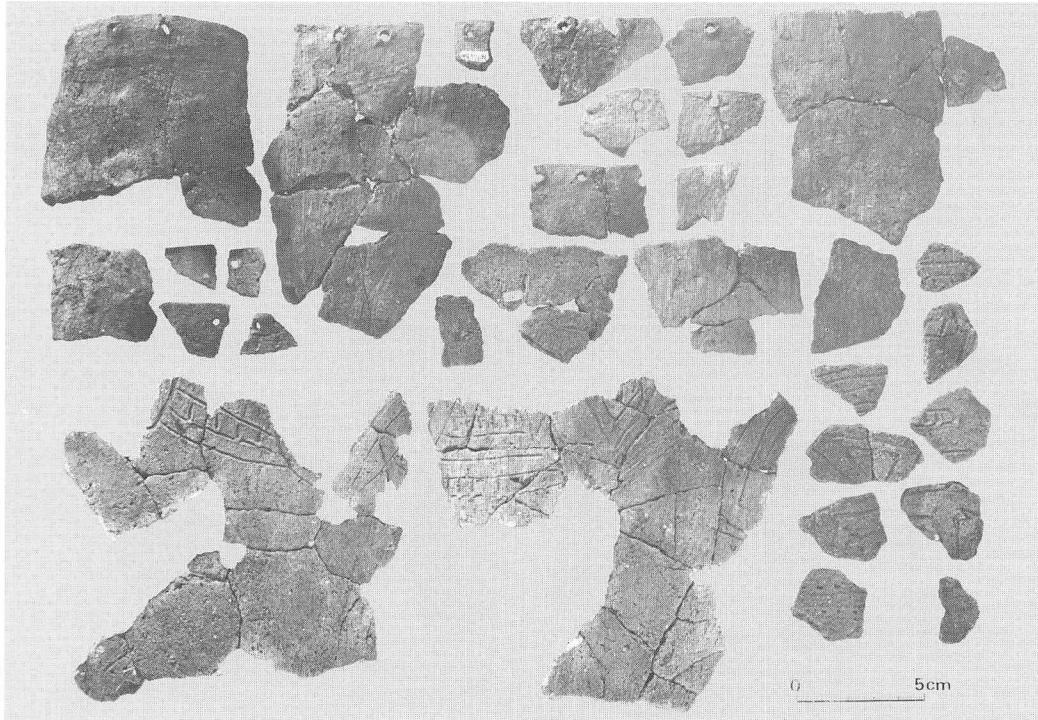
G地区は縄文早期、中期に営まれた遺跡である。焼土以外遺構は認められず、遺物集中地区が4か所あり、それぞれ時期を異にしていた。P-1の縄文早期円孔文土器とスクレイパー、大型フレイク、石斧は共伴する。土器に関していえば、縄文早期の円孔文、沈線文土器は管見の限りでは類例を知らない。従ってその編年的位置については、明確に決定しがたいが、一応縄文早期末葉のいわゆる「ムシリI式土器」と近縁関係にあるのではないかと思われる。類似の土器は現在整理中の白老町虎杖浜3遺跡から出土している。



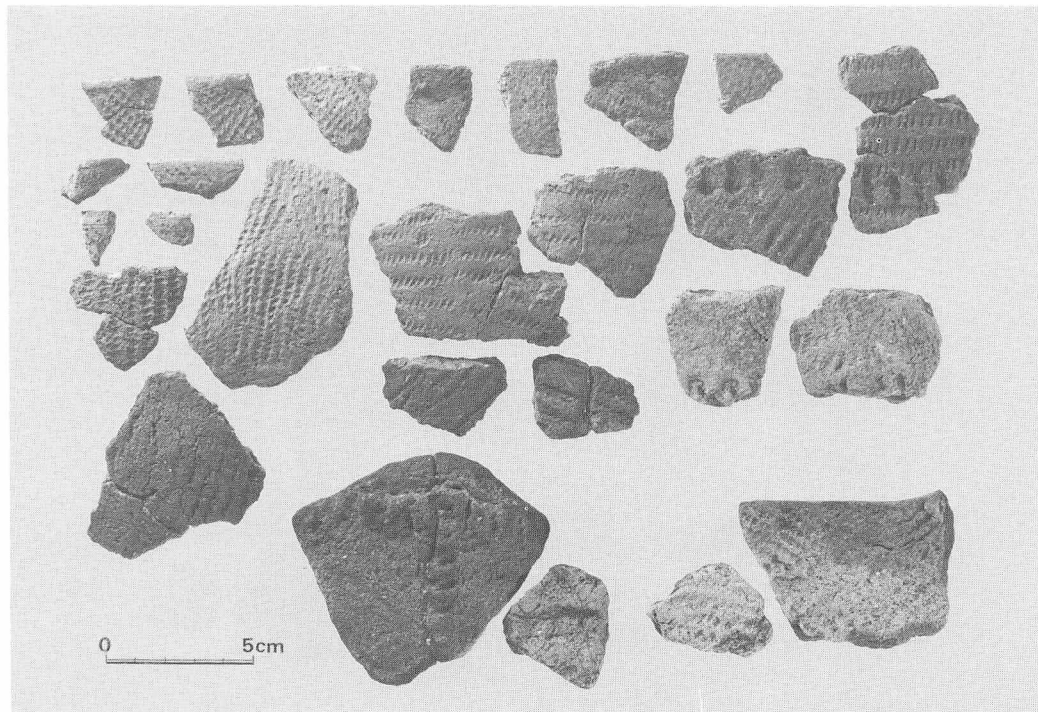
1. 発掘調査前全景



2. 発掘終了後全景

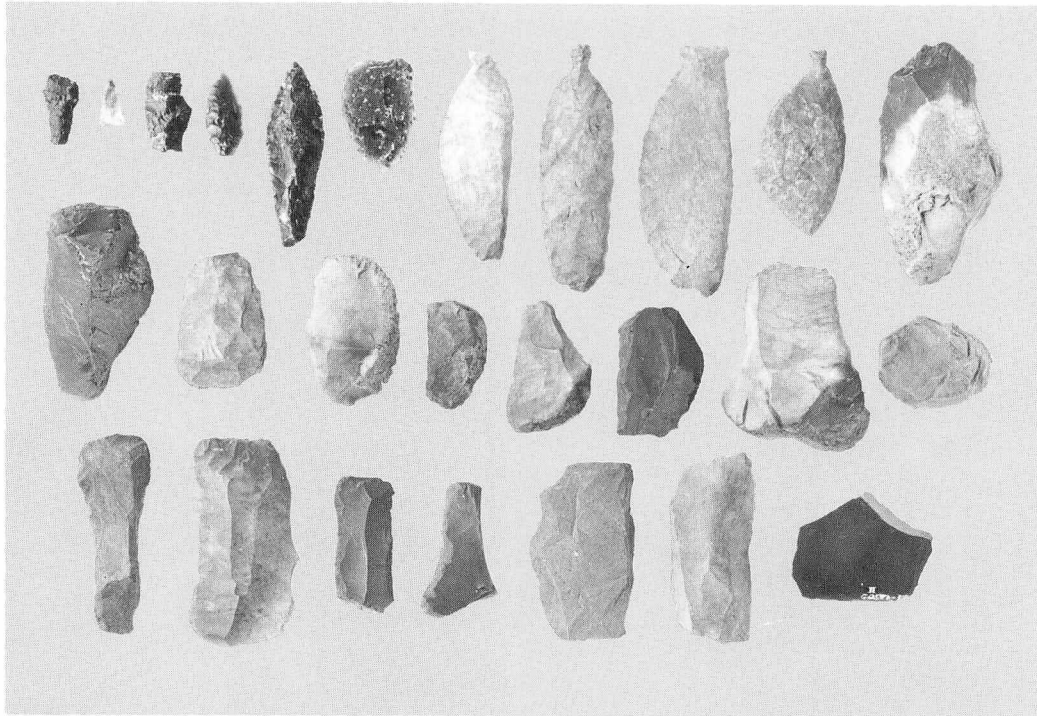


1.

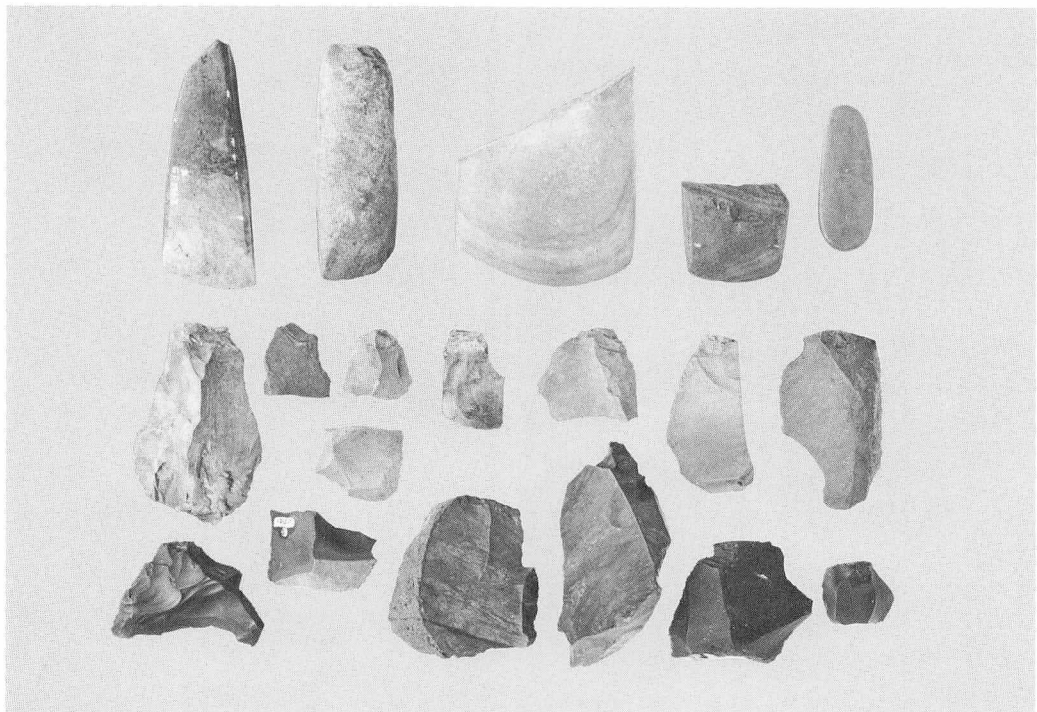


2.

包含層出土の土器



1.



2.

包含層出土の石器

X 近・現代の遺構と遺物

本遺跡のほぼ全域から、近・現代に属すと思われる遺構と遺物が発見されている。特に多いのは、CおよびE地区の高所とD地区の南側半分であり、CとD地区には近くに家があったことが知られている。また、道々上登別・室蘭線ができるまでは、丘陵のすそを巡って富岸と幌別を結ぶ道路が通っていた。現在C・D地区とE地区の間にある道路がこの旧道にあたり、E地区で南へ折れ、F・G地区の下を通過して南方へのびていた。また、E地区で南に折れずに直つゞ丘をのぼると、明治時代後半に幌別に住んだジョン・パチェラーの邸跡へ行きつく。この間は、並木道になっていたといわれ、現在でも並木の一部が残っている。

これらの道の周辺に住んでいた人々が残した遺構と遺物については、時代が新らしいにもかかわらず、性格のわからないものが多い。ここでは代表的なもののみを紹介するにとどめたい。

1. 炭窯 (EP-2、EP-4 図X-1)

E地区の緩斜面から炭窯2基が上下に並んで発見された。

EP-4は、方形に近い窯部と不整形形の付属施設と思われるピットが2つ連なっており、窯部は黄褐色ローム層(IV層)に、付属施設は黒色土(II・III層)に底面が築かれている。両者を連結する部分が焚口で、両袖に板石がおかれている。焚口の左右にはピットがみられる。これは、前庭部を覆う上屋をかけるためのものかもしれない。ちなみに、焚口付近から大型の鉄鍋片(図X-2-11)が出土している。窯部は3×2.8mの規模で、壁は50cmの高さがあり、奥壁の煙道にあたる部分にわずかにくぼみがみられる。窯底の中央には小ピットがある。覆土には、木炭、焼土、灰のほか、窯の天井と思われる焼けた粘土がつまっている。覆土の上面にまで木炭混りの土が堆積していることからみて、EP-2からの排出物が投げ入れられたため、EP-2より時間的に古いものと思われる。

EP-2は、卵形の窯部と弧状の付属施設と思われるピットが2つ連なっており、ともにIV層を掘り込んで築かれている。焚口は、2つのピットの連結部にあり、両袖に板石がおかれている。窯部は3×2.3mの規模で、壁は70cmの高さがある。壁はよく焼けてクラックが入っており、奥壁には煙道を作るための半円筒形のくぼみがみられる。覆土の状態は、EP-4とほぼ同様である。

EP-2、EP-4の付属施設と思われるピットは、窯内への原木の挿入や、炭の引き出し作業を容易にするために作られたものであろう。この部分にも木炭や灰がつまっている。

また、EP-2の窯部両脇にあるピットは、窯の天井部を構築するため、ロームを掘り出したものではないだろうか。この他にもローム塊のつまったピットが何か所かみられる。その性格ははっきりしないが、新たに窯を築くため掘り始め、途中で埋め戻した可能性がある。

聞き取りによれば、昭和10年前後にこの周辺で自家用に使う炭焼きが行なわれたとのことである。

2. 円形ピット (AP-12、EP-1 図X-1)

遺跡のほぼ全域にわたって、径1~1.5mの円形を呈するピットが散在している。遺物が全くみあたらない例がほとんどであるが、まれに焼酎徳利 (図X-2-8) の出土するものがある (AP-12等)。覆土はすべて耕作土 (I層) である。遺跡周辺で行なわれていた畑作と関連するもので、時期的には明治以降のものと考えることができよう。

EP-1は、同じ形のピットであるが、特殊な性格のものである。このピットは、径1.6mの円形を呈し、深さは0.4mである。中央部に礫がまとまっており、それに押しつぶされたかのように、ワイン瓶 (図X-2-10)、三平皿、片口鉢、板ガラス片が発見された。また、それらを丸く取り囲むように、丸釘が頭を下にして立った状態で出土している。一部に木質部が残っていることから、輪状の木製品に、板が打ちつけられた状態で埋められたものであると考えられる。その内側に、砂が敷かれ、ガラス瓶等が入れられており、その上から礫が落ち込んだのであろう。蓋があったかどうかはわからない。

3. 木箱 (図版X-3)

D地区より大・小2つの木箱が埋設された状態で出土した。

小型のもの (木箱1) は、長辺78cm、短辺59cm、現存の深さ15cmで、板の厚さは2cmほどである。木箱の周囲には掘り込みが認められている。箱の内部には土がつまっております。底では完形の三平皿一枚が検出された。この上部には、蓋と思われる板材が格子目伏になって出土した。

大型のもの (木箱2) は、長辺176cm、短辺90cm、現存の深さ40cmで、板の厚さは平均3cmである。木箱より若干大き目に掘り込みがみられ、側板の腐蝕状態からみて尋ほどまで埋められていたようである。側板は各1枚づつ、底板は4枚で構成されており、釘で打ち付けられている。底の内側には、小さな穴をふさぐために板があてられており、使用時には、細かいものが入れられていたと推測される。箱の内側につまっていたものは、陶製片口鉢・皿、ガラス製ランプ、ガラス板、笛、村子、箸、屋根の桁板のほか、木片、クルミ、カボチャとブドウの種、トウキビ、鮭の椎骨などである。秋の一日、建物の解体の折にでも一括して投棄されたものであろう。

以前この付近に住んでいたおばあさんによれば、「ここに移り住む前にいた人が、大小2つの木箱を残していき、大型のものを種モミ入れに、小型のものを米櫃として使った」とのことである。

4. 遺物 (図X-2)

各地区から出土した遺物には、陶磁器 (茶碗、焼酎徳利等)、鉄製品 (農機具、各種工具、鉄鍋等)、ガラス製品、古銭等がある。

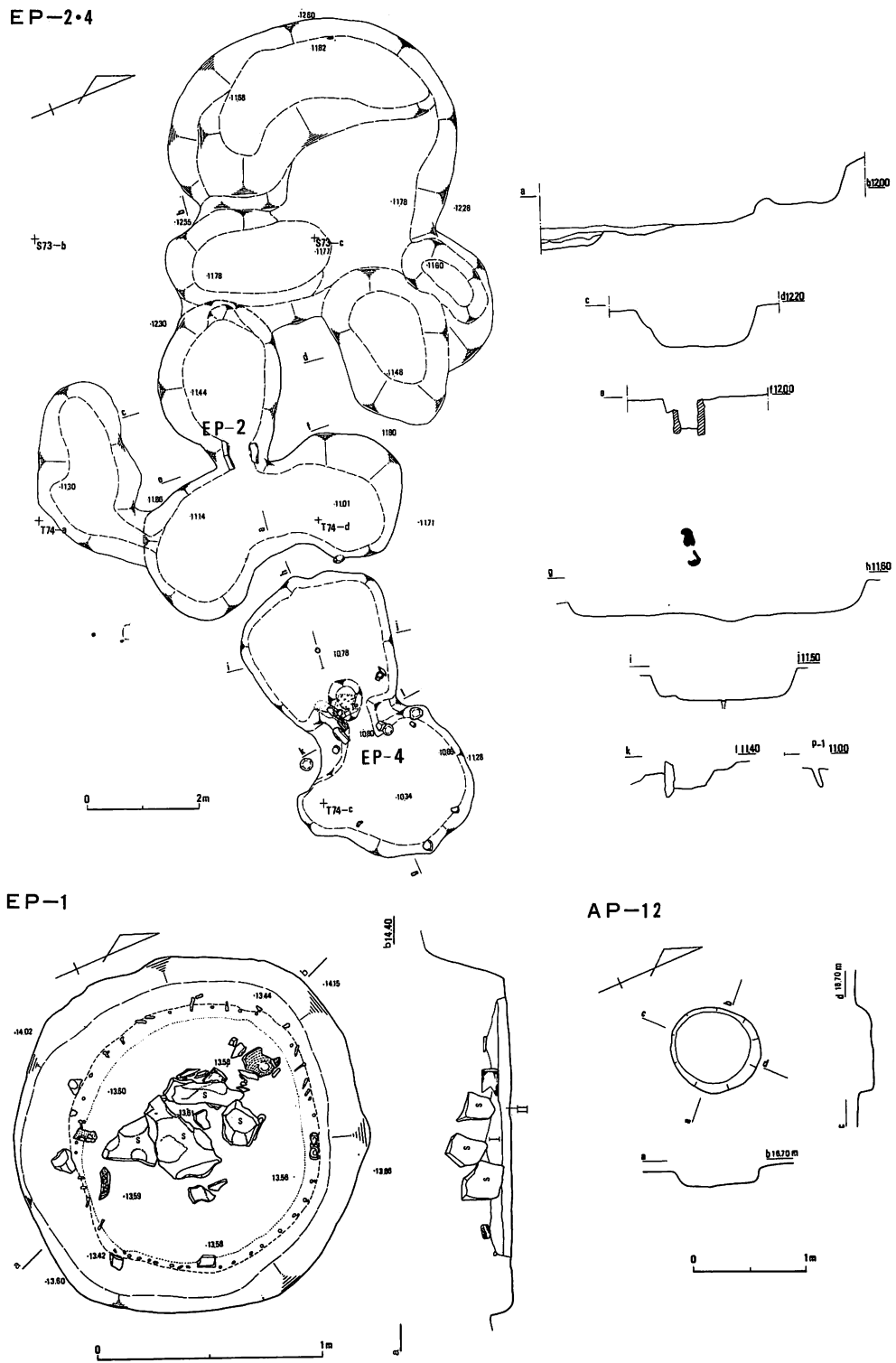


図 X-1 近・現代の遺構

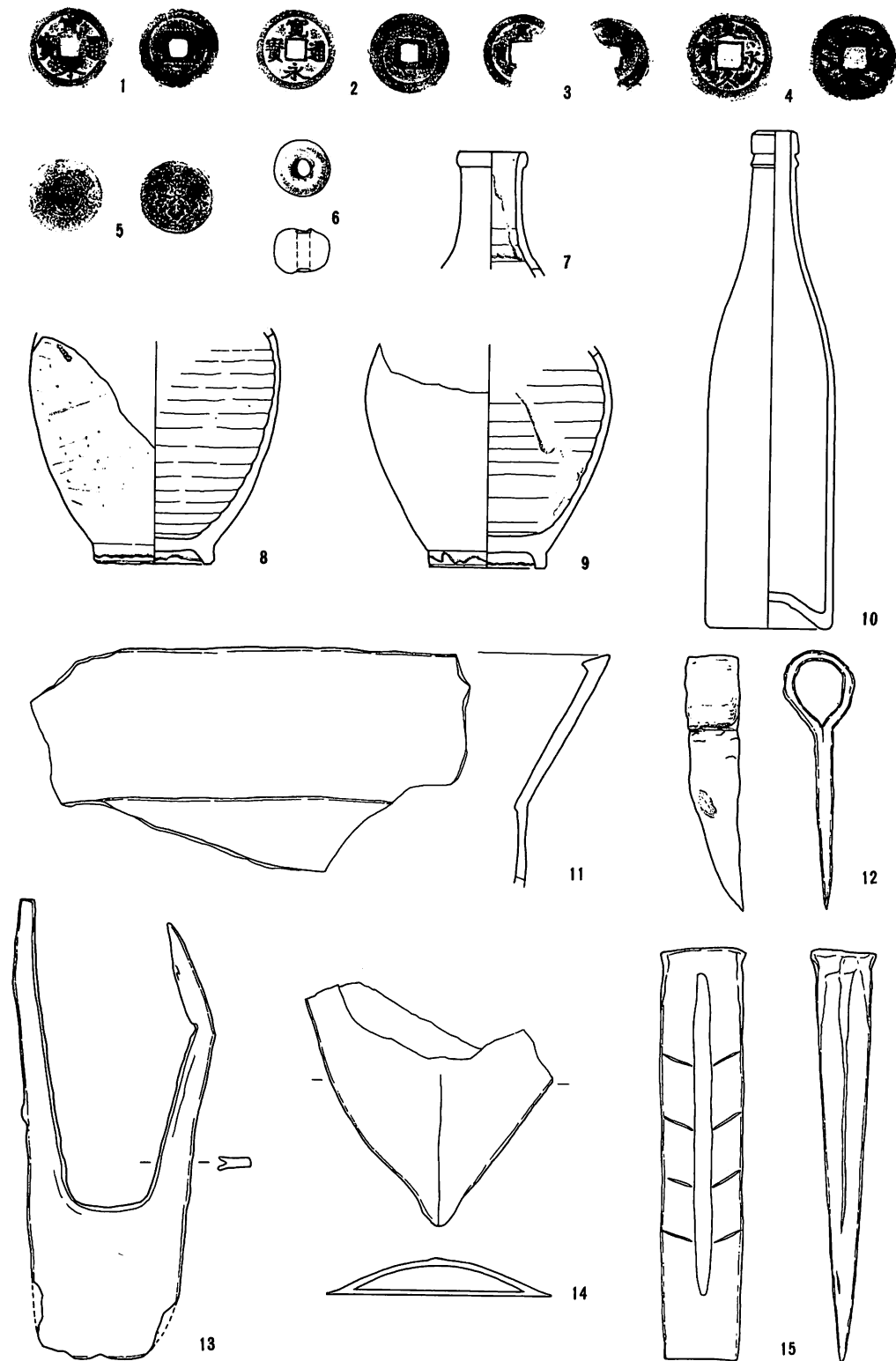


図 X - 2 近・現代の遺物 (1~5; ㄥ, 6; 十, 7~15; ㄥ)

図版 X - 1



1. EP-2

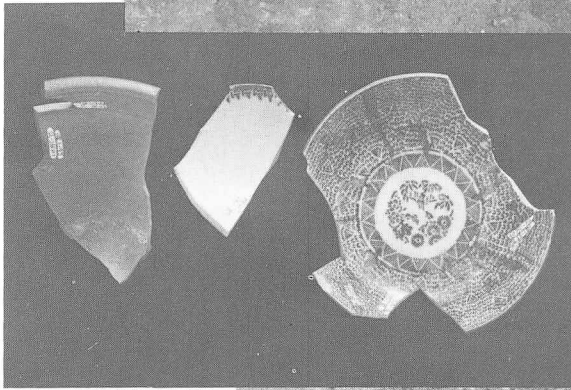


2. EP-4

図版 X - 2



1. EP-1



2. EP-1 の遺物

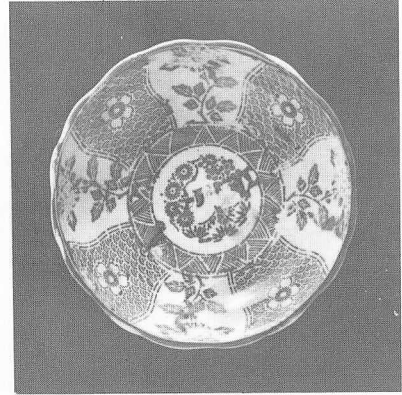


3. AP-12

図版 X - 3



1. 木箱 1



2. 木箱 1 の遺物

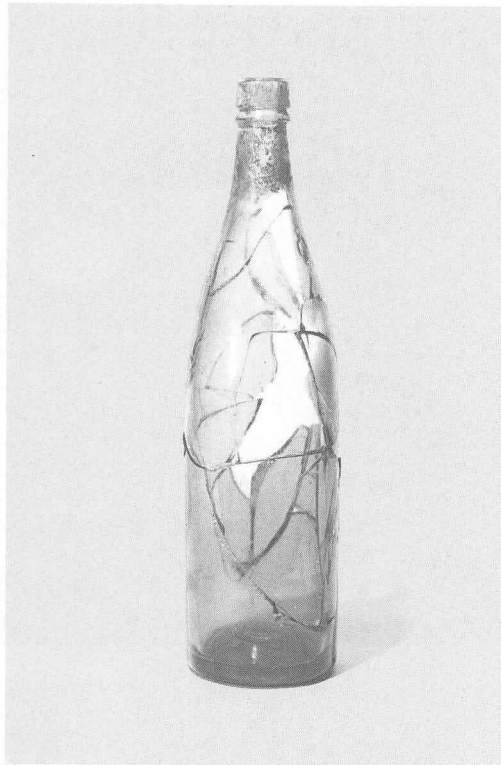


3. 木箱 2

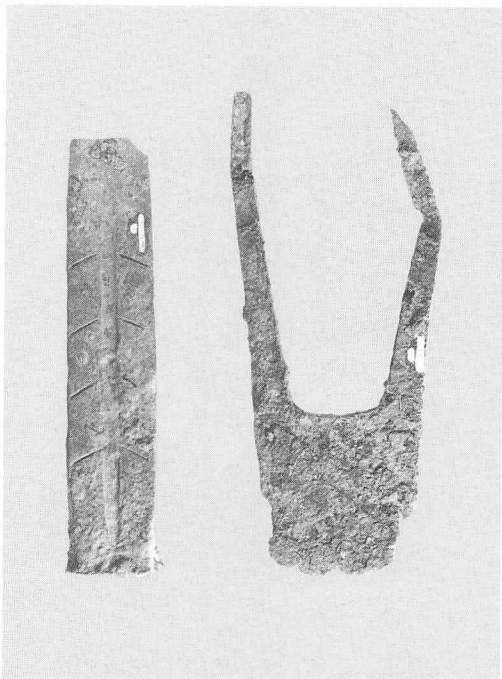
図版 X - 4



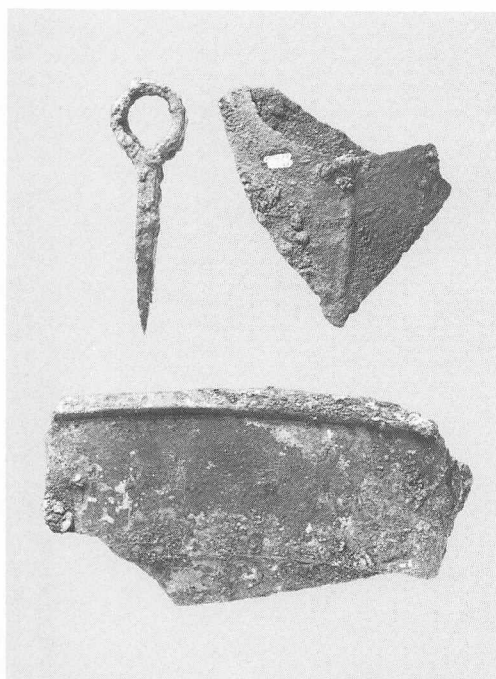
1. 陶磁器



2. ワイン瓶 (EP-1)



3. 鉄器 (1)



4. 鉄器 (2)

XI 成果と問題点

昭和55・57年の2年にわたる発掘調査によって、いくつかの成果をあげることと共に新たな問題点が生じた。各地区ごとに列記すれば、以下のようになる。

- A地区 円孔をもつ平底の条痕文土器や魚骨文土器を発見すると共に、低地における円筒土器上層式の遺跡の存在を確認した。
- C地区 いわゆる「大形住居跡」を含む縄文時代中期末～後期初の集落を確認することができた。しかし、一部のものしか住居跡の重複関係を明らかにできなかった。今後の調査にあたっては重要な課題となる。また、先土器時代の「有舌尖頭器」を発見するとともに、広汎に分布する角礫が、氷河期のソリフラクションによるものであることが判明した。今後、登別地方の先土器時代石器群の探索にあたって一つのヒントとなるだろう。
- D地区 縄文時代早期の東釧路Ⅲ式土器から中茶路式土器に至る集落の変遷をほぼ明らかにすることができた。同時に、今のところ道内最古とみられる「玦状耳飾」を発見することができた。また、細石核や底部内面に突起のある土器も出土している。
- E地区 縄文時代早期の遺物が斜面の裾に点在していることを確認した。
- F地区 縄文時代中期以前に数回にわたって土石流に見舞われており、縄文時代早期の遺物と中期の遺物が間層を挟んで層位的に出土することを確認した。
- G地区 A地区で発見した円孔をもつ平底の条痕文土器と同類の土器が出土しているが、この土器の編年上の位置づけを明確にすることができなかった。

以上のうちから、全域の発掘調査を完了したD地区の成果を主に、二三の問題について論じ、昭和57年度の発掘調査のまとめにかえたい。

1. 有舌尖頭器と細石核

C地区(M-91-a)とD地区(W-87-d)から有舌尖頭器と細石核が出土している。ともに典型的なものからみれば形がくずれているが、先土器時代の石器である。

有舌尖頭器は、先端がわずかに欠けているが、長さ10.5cm、副3.3cm。わずかに赤い縞模様に見える黒曜石製。正面は比較的大きな剥離によって整形されている。裏面は、周縁に小さな剥離がめぐり、粗雑な感じがする。側縁が直線的である点や茎部に擦痕のみられない点が、道内の一般的な有舌尖頭器と異なる。しかし、C・D地区出土の黒曜石製の石器と比較すると光沢がにぶく、縄文時代より古い石器であることがわかる。現在水和層測定中であるが、8,000y. B. P. ぐらいとの中間的な報告をうけている⁽¹⁾

細石核⁽²⁾は、高さ2.8cm、幅1.3cm。白い斑点の縞模様のある黒曜石製。細石刃の剥離痕は、正面に1面、左側に2面見える。粗雑なものであるが、楔形石核に属するものである。

以上の2点は、いずれも黄褐色シルト層の上面から出土しているが、他に関連遺物は見つかっていない。もともと遺物量の少ない上に縄文時代の遺跡と重複しているために、遺物が拡散してしまったものと考えられる。

登別市内では、千歳6遺跡で玄武岩製のナイフ形石器⁽³⁾が出土しているのに次ぐ先土器時代の石器の発見例である。今後、近辺の遺跡を発掘するにあたっては、この種の石器にも十分な注意を払わなければならないものと考えている。

(1)北海道大学教授勝井義雄氏、大学院興水達司氏に測定依頼中。

(2)図版VI-11-5参照。

(3)大島直行・瀬川拓郎昭和57年『札内台地の縄文時代集落址』登別市教育委員会

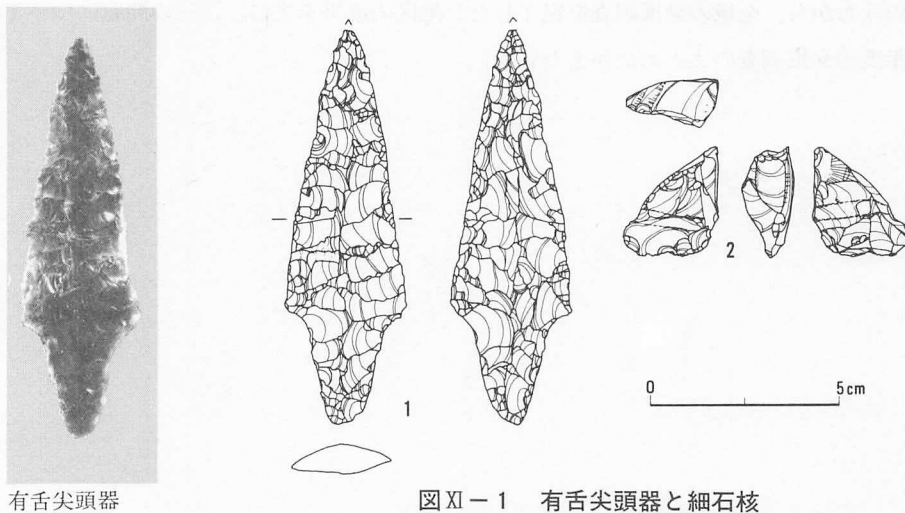


図 XI-1 有舌尖頭器と細石核

2. 球状耳飾

川上B遺跡D地区より出土した滑石製球状耳飾は、今日までに、道内で発見されている球状耳飾とは、形状や伴出土器の時期等の点で異なるものである。そこで道内の球状耳飾との比較検討を行い、川上B遺跡の球状耳飾の意義をさぐってみたい。

1) 川上B遺跡D地区出土の球状耳飾 (図IX-2-1、図版VI-11-1~3)

D地区は標高9~12mの地点にあり、中央に古い沢が入っている。球状耳飾はその北側東端の標高10m付近、DH-1・2・5、DP-3に三方をかこまれる場所の、IV層をもえぐった風倒木痕状の落ち込み下層部から出土した。薄橙色を呈する滑石製で、高さ3.2cm、復元推定幅3.6cm、厚さ0.6cm、孔の長さ1.1cm、切れ込みの深さ1.0cm、現重量3.5gの半欠品である。形状の特徴は、平面形がやや横長の下膨れで、切れ込み裾部が急に開く形を呈し、断面形は下端から上辺に向かい徐々に厚みを増し、孔の上端で最大厚となる凸レンズ形をしている。切れ込みが浅く、中央孔は珍しく縦長方形をしている。半欠品によくみられる補修孔のような上辺部の小孔は無い。これらの点は、従来本道で発見されている球状耳飾とは異なる特徴である。上記落ち込みからは、他にIb-1類土器の破片を利用した、有孔円盤とその未製品が出土しており、これと球状耳飾との関連も注意を要する。またこの落ち込み内やその付近で出土した土器は、Ib-3類が大半で、出土状況からは縄文時代早期後半のものと思われる。

2) 形状の比較

次にこの特異な形状を、北海道出土の他の球状耳飾と比較してみる。まず中央孔の形状は、『北海道原始文化聚英』に写真掲載されている2点のうちの一点(図XI-20-16)に角孔らしき様相がみられるのと、森越遺跡土の一点(図XI-2-10b)の菱形孔、計二点以外は、円孔またはそれに近い孔形を呈しており、川上B遺跡出土品との類似点は見い出せない。大きさは、平面隅丸三角形を呈すものとは、厚さが比較的薄いということ近似し、円形のものとは平面寸法が近似しているが、総合的にみると異なるものである。あえて形状で類品をさがせば、栗山町北学田の長円形のもの(図XI-2-7)が平面形では最も似ている。全般に出土状況に不明な点が多く、比較検討が難しいが、装飾品、祭祀品が周辺から出土しているものが多い。問題は伴出土器の時期で、当遺跡のものは早期後半の土器の伴出がみられるが、他は前期またはそれ以降のものが大半であるという点である。次項でこれら問題点を検討してみる。

3) 北海道における球状耳飾の特色

これまでに北海道で発見された球状耳飾の形状は、隅丸三角形又は等脚台形のもの、ほぼ円形のものに大別される。概して前者が後者より薄く、大形である。森越遺跡の五角形状のもの(図XI-2-10a)と、吉井の沢1遺跡の隅丸長方形のもの(図XI-2-2)、入江貝塚の卵形のもの(図XI-2-17)が、やや形状を異にしている。また前述したように中央孔は川上B遺跡と出土不明の方形、森越遺跡の菱形、吉井の沢1遺跡の瓢形?を除けば円孔である。平面形が、円形を呈すものが川上B遺跡出土品を除いてすべて完形であるのに対し、類三角形のものが、寿都3遺跡

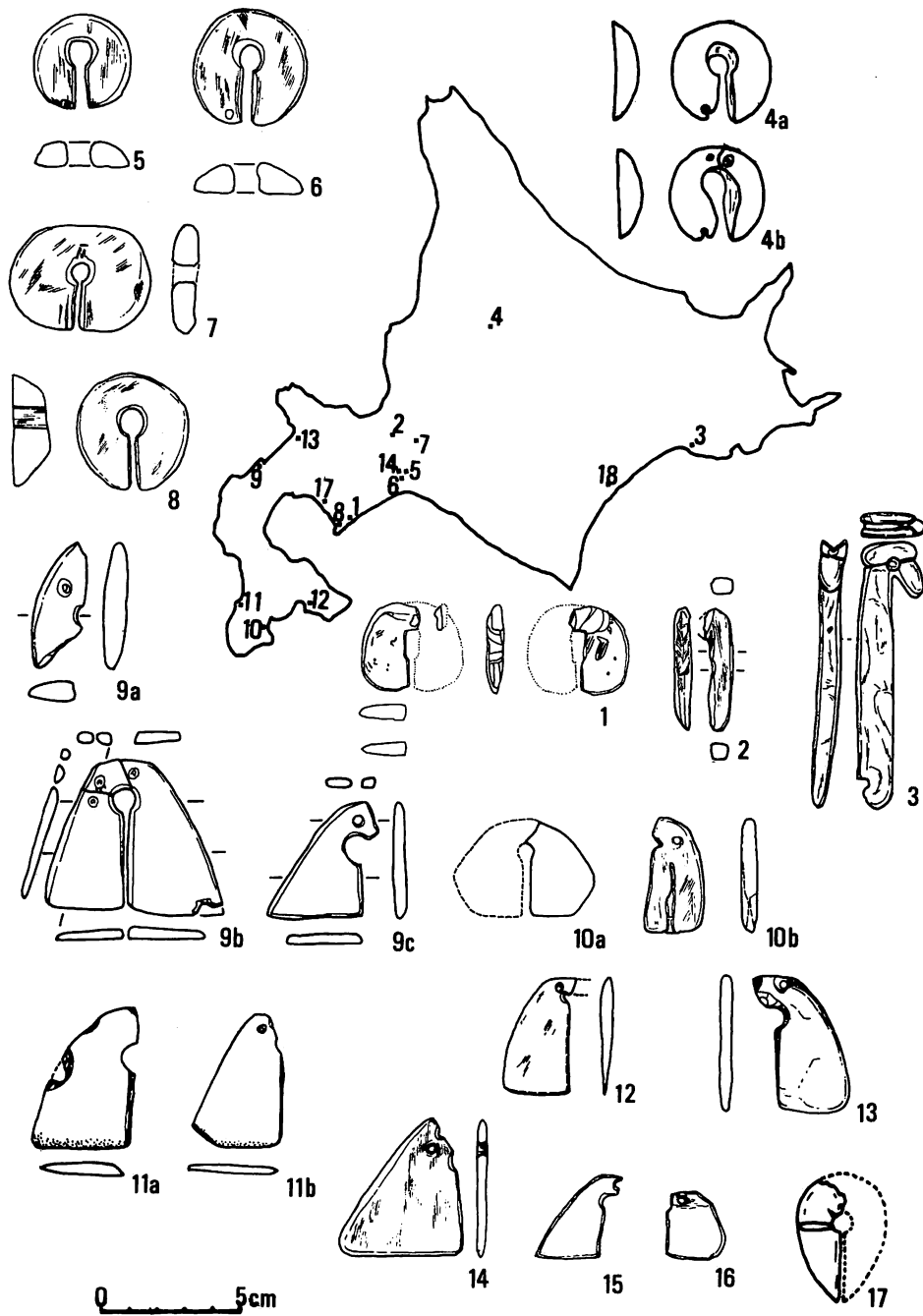


図 XI-2 北海道出土土状耳飾集成図 (番号は表と一致・各図は筆者が掲載文献より再トレースしたものである)

の一点を除いて半欠品である。おそらくは、円形の方が、類三角形のものより小さく、しかも厚いという点で、破損しにくかったものと思われる。破損品の上部、中央孔付近にある小孔は、寿都3遺跡や緑町1遺跡の完形品の例(図XI-2-4b・9b)にもあるように補修孔の意味があることは確かである。しかし、破損品をあえて補修せずに、半欠のまま小孔を穿ち装飾品等として再利用した場合もあったのだろう。出土状態が伴然としないものの、同一遺跡において垂飾等の装身具、祭祀品類が発見されることは、再利用や、祭祀、信仰という面での問題として考える必要もあるだろう。ちなみに寿都3遺跡や森越遺跡などで発見されている垂飾とされるものに、玦状耳飾と形態が近似するものがしばしばみられ、再利用、加工技術、形状等の点についても比較検討が必要である。完形品の特異な例としては、緑町1遺跡の一对のものが上げられる。2個とも円形で左脚端に小孔をもち、大きさもほぼ同じである。報告では墓墳からの出土のようで、耳飾として一对をなすような出土例は北海道では唯一である。これに匹敵する例として美々5遺跡と美沢4遺跡のものがある。両者は、美沢川をはさみ直線距離にして約1kmはなれた場所出土している。形状や左脚端にある小孔など、きわめて相似した点が多く、一对の耳飾であった可能性がある。対のものであると考えると、美々5遺跡のものが1個のみで墓墳から出土したことは、緑町1遺跡のものと並んで、玦状耳飾が祭祀、信仰に関連する意義を予想させるものである。特にこの3遺跡4個は形状が酷似しており、左脚端の小孔の意味等注目すべきものがある。また、ポンナイ遺跡出土の1個⁽¹⁾は中期の墓墳からの出土とされているが、形状等詳細は不明である。北斗遺跡のものも墓墳出土で、形はちがうが、長脚下部のえぐりが小孔を思わせる。逆に、勝山館、寿都3、森越の3遺跡では、それぞれ複数の耳飾が出土しているが、見た目に対になるようなものはない。これらの事実から、一对、一個のいずれでも装着された可能性や、分有関係を考えるのは短絡であろうか。材質については、一応滑石が多いようである。美しく、加工が容易な材質を選択したことによるのだろう。

4) 玦状耳飾の編年

形状からの北海道の玦状耳飾の編年を伴出土器を基準にしていえば、円形に近い平面形をもつものが縄文時代前期前半の土器(Ⅱa-2類)と伴出し、類三角形のものが前期後半(Ⅱb類)のものと伴出する。また、吉井の沢1遺跡にみられる長方形のものや、北斗遺跡の細長い棒状の玦状耳飾類似品がⅡa-1類土器(網文式土器等)と伴出していることが注目される。川上B遺跡における早期の土器との伴出は、今のところ道内で最も古い。これらの編年を総合してみれば、芹沢長介氏の早期末から前期にかけての所産とみる考え⁽²⁾に合致する。例外として、入江貝塚の卵形のもものが、中期(Ⅲ群円筒上層~北筒式)の土器と伴出している。総合的にみて玦状耳飾の形状を、土器を基準とした編年で分類することができそうである。裏を返せば、玦状耳飾の伴出を土器編年のための一要素とすることができる。

5) おわりに

以上みてきた通り、今調査で発見された玦状耳飾は、その形状や時期において、従来の北海道内出土の玦状耳飾と比較しても特殊なものである。特に時期については、周辺部や発見位置で

表 XI-1 北海道出土塊状耳飾一覽表

図番号	遺跡名	形状	材質・色調	大きさ (復元)	高cm 厚cm 幅cm 重g	伴出土器 時期分類	伴出した装身具・ 祭祀品等	文献 番号
1	登別市 川上B	肩の張る円形。断面レンズ形でうすい。中央孔は縦長の角形である。半欠。	薄 橙 色 滑 石	3.2 (3.6)	0.6 3.5	Ib-3	Ib-1類土器片製有孔円盤 " " " 未製品	
2	江別市 吉井の沢1	平面長方形。中央孔は瓢形の可能性あり。類品なし。半欠。	メノウ質 頁 岩	4.3 2.5	0.6 4.2	IIa-1	棒状黒曜石・線刻黒曜 石・土玉・玉・垂飾	①
3	釧路市 北斗	頭部、頸部に溝をもち、又部に孔がある。長短の極端な、平たい二脚をもち、長脚の外端に抉りが入っている。	ヒ ス イ	高 (9.5)		IIa-1	ベンガラを床面にひいた墓墳 に人骨・木炭があり、つまみ付 きナイフ、石斧が伴出	②
4	旭川市 緑町1	a	乳 白 色 玉 質	3.5	1.0	周辺に シブノ ツナイ 式あり	墓墳の可能性大 ベンガラ・石錐・つま み付きナイフ a・bで一對のもの と思われる。	③
		3.4 3.5		0.9				
5	千歳市 美々5	平面はほぼ円形で、丸い中央孔と幅広の切れ込みをもつ。断面台形。左脚部に小孔あり。完形。	メ ノ ウ	3.4 3.1	0.9 14.2	IIa-2	墓墳P-49より石斧・石 槍・スクレイパー・つま み付きナイフ出土	④
6	苫小牧市 美沢4	5と酷似。やや大きい。完形。	滑 石	3.9 3.9	1.0 18.8	IIb-2	石環・円盤形石製品	⑤
7	栗山町 北学田	平面は長円形を呈す。ほぼ均等の厚みがある。完形。	安山岩系	3.6 4.8	0.8			⑥ ⑦
8	室蘭市 熊の谷貝塚	平面は円形、断面は台形で厚みがある。完形。	鯨 骨 または 白 色 石	3.9 3.9	1.5		ボンナイ遺跡のもの と同一とすれば中期墓 からの出土。人骨と伴出	⑧ ⑨
9	寿都町 寿都3	a	滑 石	0.7	10.7	IIa~IIIa	土器片製有孔円盤・玉・ 垂飾・ベンガント様石器・ 石棒・石枕 玉・垂飾には塊状耳飾 に近似するものが2個 ある。	⑩
		5.4 6.5		0.4 23.7				
		(4.2) (6.2)		0.4 8.9				
10	知内町 森越	a 横長で頭部の丸い五角形状である。半欠。 b 平面は全辺丸味をもつ台形である。中央孔は菱形を呈しその脇に小孔が穿たれている。半欠。	薄緑色に 紺の斑点	3.8 3.7	0.3 0.5	IIb~IIIa	玉・垂飾・石環・耳飾 線刻品・土製品 玉・垂飾には塊状耳飾 に近似するものが2個 ある。	⑪
11	上ノ国町 勝山館	a 平面は半円形の三角形を呈す。厚みが無い。半欠。 b ほぼ三角形の平面をもつ。断面はうすい。切れ込みは深く中央孔は小さい。上部に小孔あり。半欠。	貴 石	4.3 (6.0)	0.4 0.2	II b	玉	⑫
12	函館市 サイベ沢	脚部に丸味をもつ台形を呈す。厚みが無い。切れ込みは深く、中央孔は小さい。上辺部に小孔あり。半欠。	緑 色 蛇 文 岩	4.0 4.8	0.3	II b	垂 飾	⑬
13	岩内町 東山	平面は斜辺に丸味をもつ台形を呈す。厚みが無い。半欠。	緑 色 蛇 文 岩	5.0 (5.6)	0.4	II b		⑭
14	千歳市 美々4	平面は頭部の丸い三角形を呈すよう、厚みはきわめてうすい。中央孔脇に小孔をもつ。半欠。	滑 石	(5.0) (8.1)	0.2 9.4	Ib-4-Vc II群多い	玉・垂飾・石棒・土製 垂飾 その他	⑮
15	出土地不明	平面形は台形を呈す。切れ込みは深い。中央孔上2ヶ所に小孔がある。寿都3の12に形態上近似する。半欠。						⑮
16	出土地不明	角をおとした台形を呈すよう、中央孔は角孔になる。その脇に小孔がある。片側と残りの上辺を欠く。						⑮
17	虻田町 入江貝塚	現在北海道で唯一の卵形。薄形である。中央孔は円形で長い切れ込みをもつ。半欠。	玉 髓	(4.6) (3.3)	0.3	IIIa~IIIb	黒曜石製垂飾	⑯
18	浦幌町 共栄B	環状弧状の破片で、報文では一端のみの破損で一端はオリジナルな面だという。		幅 (4.4)		I 群	垂 飾	⑰
		同 上		幅 (5.0)				

※右覧の文献番号は別掲(表註文献)で示してある。

ある落ち込み内の土器が縄文時代早期（特に中茶路式を指標とする I b - 3 類が多い）であることや、同時出土した有孔円盤 2 点が、やはり縄文時代早期でも東釧路Ⅲ式を指標とする I b - 1 類土器片の加工であることから、この塊状耳飾が、縄文時代早期の終わりごろのものと考えざるを得ないのである。

(1) 文献⑧に図があり、熊の谷貝塚出土とされている。⑨にあるポンナイ遺跡とは、地理的に近いが、図は掲載されていない。とりあえず今回は同一のものとして考えた。

(2) 芹沢長介 昭和40年「周辺文化との関連」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房

参考文献

樋口 清之 昭和8年「塊状耳飾考」『考古学雑誌』23-1・2

藤田富士夫 昭和45年「攻玉遺跡からみた塊状耳飾の編年」『玉』日本玉研究会会誌1

上田 耕 昭和56年「九州における塊状耳飾について」『鹿児島考古』15

表註文献（表の右覧にある文献番号で示したもの）

- ① 勸北海道埋蔵文化財センター 昭和56年度『吉井の沢の遺跡』
- ② 釧路市教育委員会 昭和50年『釧路市北斗遺跡調査概要』
- ③ 旭川商業高等学校郷土部 昭和36年『旭商郷土部ノート』No.5
- ④ 勸北海道埋蔵文化財センター 昭和55年度『美沢川流域の遺跡Ⅳ』
- ⑤ 勸北海道埋蔵文化財センター 昭和54年度『フレベツ遺跡群』
- ⑥ 栗山町教育委員会 昭和42年『栗山町の文化財』
- ⑦ 空知地方史研究協議会他 昭和44年『空知の文化財第一集』
- ⑧ 北海道出版企画センター 昭和58年『河野常吉ノート考古篇2』
- ⑨ 室蘭市 昭和56年『新室蘭市史第一巻』
- ⑩ 寿都町教育委員会 昭和55年『寿都町文化財調査報告書Ⅱ』
- ⑪ 知内町教育委員会 昭和50年『森越』
- ⑫ 上ノ国村教育委員会・江差町教育委員会 昭和30年『桧山南部の遺跡』
- ⑬ 市立函館博物館 昭和33年『サイベ沢遺跡』
- ⑭ 岩内町教育委員会 昭和33年『岩内遺跡』
- ⑮ 犀川会 昭和8年『北海道原始文化聚英』所収
- ⑯ 名取武光・峰山巖 昭和33年「入江貝塚」『北方文化研究報告』第十三輯
- ⑰ 浦幌町教育委員会 昭和51年『共栄B遺跡』

3. 土器片の移動について

本年度の調査では、できる限り遺物の出土位置を記録し、それをもとにして土器の接合関係、同一個体の土器片の分布状態を把握することを目標とした。この作業により、遺跡の性格を考えるための資料が見出されると考えたからである。

D地区では、縄文早期の住居跡9、ピット7、焼土2が検出されており、VI章の小括で述べられているような、集落の再構成がなされている。そのためには1つ1つの遺構の時期を決定することが、重要ポイントであった、ところが、ほとんどの遺構において確実に時期を決定できるだけの資料は少なく、多くの場合床面または覆土の下位から出土するわずかの土器片にたよらざるを得なかった、そのためこれらの遺物の出土状態を検討し、遺構の時期を推定したわけであるが、この作業にあたって、土器の接合関係と同一個体の破片の分布を知ることが決め手となった。ここでは、遺物取り扱いの概要について簡単に述べてみたい。

1) DH-7出土土器の分析

DH-7は、沢の北側における住居跡群のうち最も高い位置にあり、降下軽石層下の覆土や床面近くから数多くの遺物が出土している。この住居跡の土器について出土状況を点検したところ、(1) 数量が多いにもかかわらず、住居使用時の土器がそのままの形で残されていない、(2) 住居跡内出土と同一個体の土器片が沢の北側一帯に広く分布している、という2つの特徴を知ることができた。

(1)については、I b-1類土器が住居跡より高い位置にある破片と接合関係があること、出土状態が個体ごとにまとまっておらず(図VI-19)、流れ込みの礫の間から出土するものがあることから、床面がほとんど埋まらないうちに、高い位置から土器が流れ込んだと推定される。また、唯一まとまって出土したI b-2類土器(図VI-18-12)についても、I b-1類土器片よりやや高位にあることから、住居跡の廃絶時と直接関係するものではなく、住居跡の埋没過程で、まとまって投棄されたものと考えるのが妥当であろう。

(2)については、図1に示したとおりである。たとえば、図VI-18-1の土器は、底部がほぼ床面から、また胴部片が床面直上から出土しているのに、その間をつなぐ胴下半部の破片は、40m近く離れたY-88-aからみつまっている。この他同一個体の破片は、W-88-b、DP-4とDH-3覆土、住居跡より高い位置にあるU-86-aなどから出土している。また、3や9と同じ個体の破片も、DH-3、DH-5の覆土等にみられる。このように広い分布がみられるのは、I b-1類土器がDH-7に流れ込んだ際に、住居跡の周辺にも散乱し、それが傾斜に沿って移動したためであろう。Y-88-aから出土した土器片は、磨耗がはげしく、水による長距離移動の痕跡がみとめられる。

2) 地形と土器片の移動との関係

図1は、D地区における同一個体の土器の分布を示したものである。これによると、沢の北側では、傾斜に沿って西から東へという土器片の動きを認めることができる。

I b-1 類の土器は、その大半がDH-7にまとまっており、東側の遺構密集地区ではほとんどまとまった分布を示さず、復原可能なものも見当たらない。現在では包含層の残存状態がよくないのはっきりしないが、I b-1 類土器は本来DH-7周辺の高い位置にあり、それが時間とともに全域に拡散していったものと推察される。

この移動がおきた時期については、DH-7の例からみて、I b-1 期であると考えられるが、これを補う証拠がDP-3とDP-4にみることができる。DP-4では、覆土下部にI b-1 類、覆土上部にI b-3 類とはっきりわかれて土器片が出土している。このI b-1 類中には、DH-7の1と接合した破片が含まれている。一方、DP-3には周囲にI b-2、I b-3 類土器片が多いのに、覆土中からはI b-1 類土器のみが出土している。低い位置にあるため早い時期に埋没したのであろう。わずかな例ではあるが、I b-1 類土器の頃の埋没が一気に行なわれ、次の堆積まで時間差があったことを示すものといえよう。これに対して、遺構の覆土、床面から出土するI b-1 類は、I b-2、3 類と混在して出土している。住居が構築された時に掘り上げられ、廃絶後埋没した土に含まれたのであろう。

I b-2、3 類土器は、遺構の集中地区にまとまって分布している。この時期の土器片も西から東へ傾斜に沿った動きが認められ、DH-5周辺の低い部分には、磨耗した各時期の土器片がまとまって出土している。主として水の営力により移動したものであろう。ただ、I b-

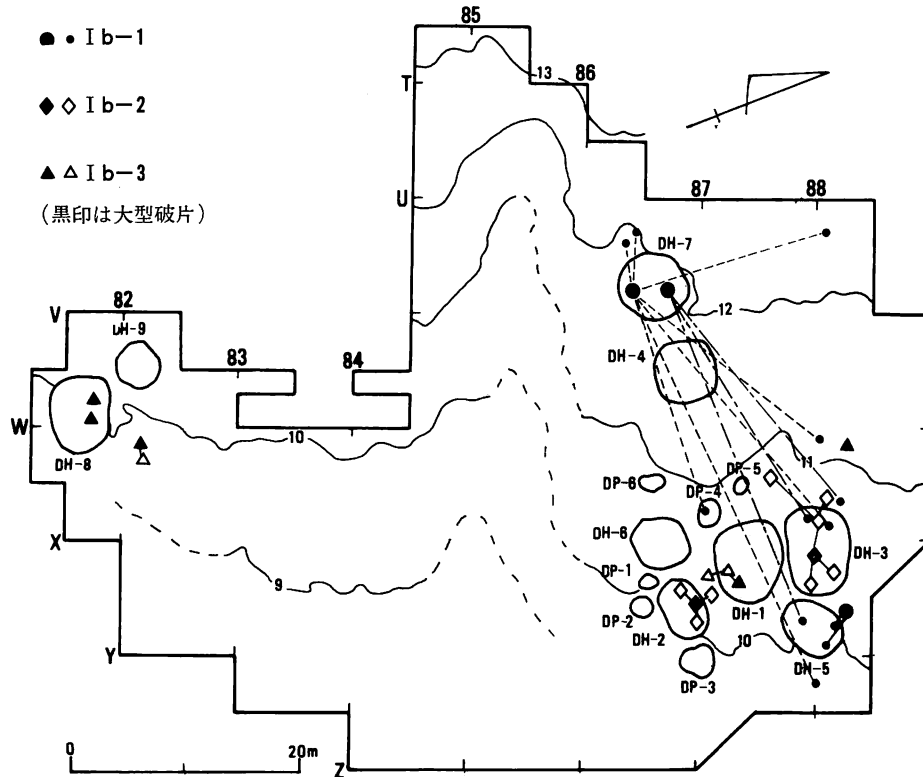


図1：D地区における同一個体土器片の分布

1類の動きほど大きくないことと、遺構内から大型の破片にまとまる資料が出土することがこの時期の特色である。

3) 遺構内における遺物の出土状態

今まで述べてきた、遺跡全域における遺物の大きな動きは、個々の遺構における遺物出土状態とどのように関連するのだろうか。遺構の時期決定と関連させて考えていきたい。

遺構内から出土する土器の状態は、大きく次の3つに区分することができる。

- (1) 完形に近い土器が、そのままつぶれたような状態で出土するもの
- (2) 大形の破片にまとまる状態で出土するもの
- (3) 小片となって出土するもの

住居跡の時期決定には、(1)が一番比重が重くつづいて(2)(3)となっていく。

(1)の状態から床面から土器が出土するDH-8は、時期決定の上でまず問題はない。一方、(3)の場合は、先に述べたDP-3、DP-4のように特殊な場合を除き、はっきりと時期決定するのが困難である。DH-4の例では、覆土上部にIb-2・3類の小片がみられるが、床面に近い所に土器片はみられない。覆土中における小片の接合関係をみると、両類は混在しており時期の新らしいIb-3類の時期に流れ込んだものといえよう。その時この住居跡は、ある程度埋没していたわけである。ところでこの住居跡の上限は、この住居跡がDH-7の近くにあるのに、Ib-1類土器が全く出土していないことから、DH-7にIb-1類が流れ込

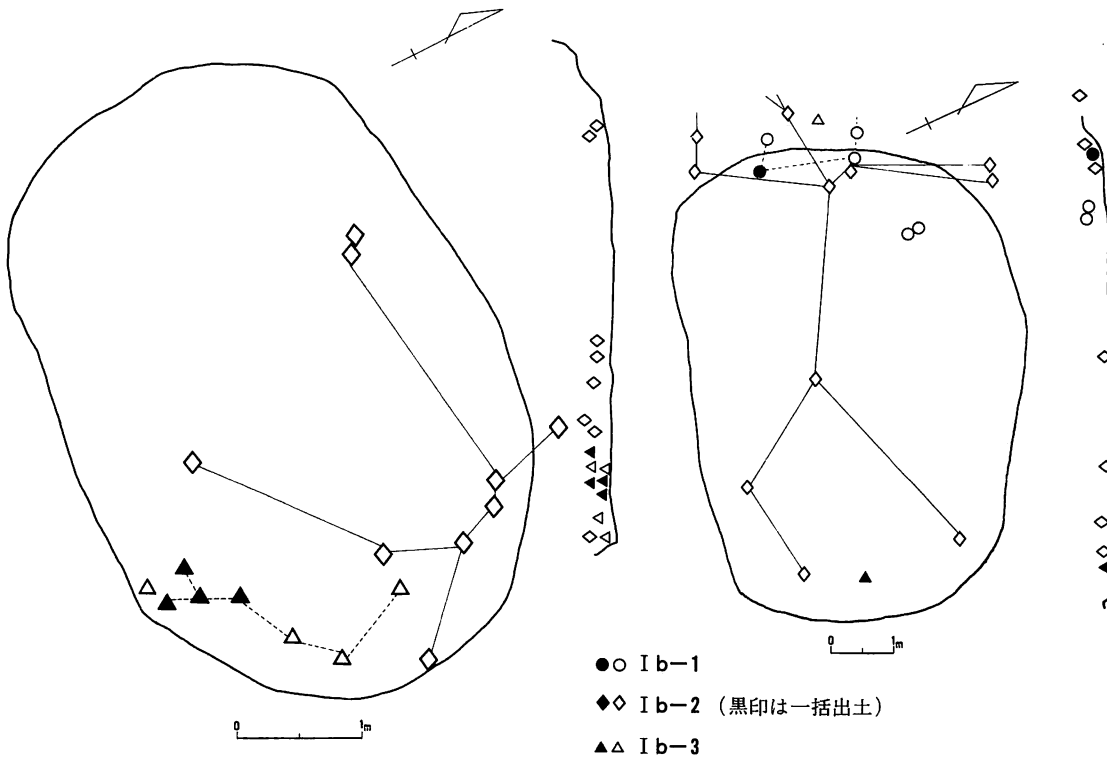


図2 : DH-2

図3 : DH-3

み移動が完了した時以後のものと考えられる。DH-9については、床面近くにまでI b-2～3類の土器片が入っており、最も新しいI b-3類の時期直前と考えられる。I b-3類は、ほとんど埋まっていない状態の凹み中に入り込んだわけで、少なくともDH-4より新しいものであろう。

最も多いのは、(2)の場合である。DH-2の床面には、I b-2、3類があり(図2)、ともに接合すると大型の破片になる。ところが、同一個体の分布を追うと、I b-2類は住居跡の内部に点々とみられるだけでなく、包含層中にも見出すことができる。これに対し、I b-3類は、住居跡の南壁際に分布がまとまっている。I b-2類は北側からの流れ込み、I b-3類は住居跡に伴うものか、廃絶時直後に投棄されたものと考えられる。

DH-3(図3)の床面には、I b-1～3類の土器がみられる。I b-1類はDH-7と同一個体の破片も含め(2)または(3)の状態、I b-2は(3)、I b-3は(2)の状態出土している。同一個体の分布をみるとI b-1、2はともに住居跡内に点々とみられるだけでなく住居跡の外にも分布が広がり、流れ込みであることがはっきりする。これに対し、I b-3類は、さほど大破片ではないが分布が狭いことからみて投棄されたもの、または流れ込みであっても最もこの住居跡の廃絶期に近い頃のものとする。

同様の方法で、各遺構の時期を推定したのが次表である。

表XI-2 遺構内における遺物の出土状態

	DH-1	DH-2	DH-3	DH-4	DH-5	DH-6	DH-7	DH-8	DH-9	DP-3	DP-4
	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)	(1)(2)(3)
I b-3	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
I b-2	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌
I b-1	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌	┌

● 推定時期 ┌ 床面出土状態 ┌ 覆土中出土状態

4. ま と め

丹念に同一個体の土器片の分布を追うことにより、D地区における土器の動きをとらえ、住居跡の時期決定における一つの資料とすることができた。もし、包含層が耕作による攪乱をうけない遺跡に応用すれば、もっと複雑な分布関係を描くことができるかもしれない。そして、(2)のような分布状態を示す土器が、人為的に投げ込まれたものが、自然の営力によるものかを見分け、人々の活動の跡を復原していくことができるものとする。

4. 底部内面に突起のある土器

今年度調査された川上B遺跡のD・E地区から、底部内面に突起のある土器片が1片ずつ出土した。底部内面のほぼ中心部に、高さ6mm前後の円錐形の突起を持つものである。

D地区の土器片は、同地区北部の黄褐色シルト質降下軽石層直下より出土し、平底で側面に縄文が施されているIb-3類の土器である。E地区の土器片は黒褐色土の包含層より出土し、突起部分だけの平底の破片である。この土器も、周囲の出土遺物からみてIb-3類に相当するものと思われる。これらの突起は、つまみ出しによって成形された可能性もあるが、ひび割れの状態からみると貼付して成形した可能性のほうが大きいように思われる。

類例は少ないが、今までに知りえたものを以下に紹介する。室蘭市絵鞆遺跡⁽¹⁾北見市開成遺跡⁽²⁾幕別町猿別C遺跡⁽³⁾登別市千歳5遺跡⁽⁴⁾に1点ずつ、江別市吉井の沢の遺跡⁽⁵⁾に2点出土しているだけである。また、網走市モコト貝塚出土の「乳房状尖底」土器片も底部内面の突起の可能性もある。この点については、石橋次雄氏がすでに指摘している⁽⁶⁾

絵鞆遺跡の土器片は、エンルム・チャシ13号ピットより出土。13号ピットは「アイヌ文化期」⁽⁷⁾の墳墓であるが、この土器片は覆土から出土したものと思われ、続縄文時代恵山式とみられる。突起は高さ1cm以上あり、上げ底で底部側面に縞縄文が施されている。

開成遺跡と猿別C遺跡の土器片は縄文時代中期モコト式とみられる。モコト貝塚の土器片もモコト式土器で、これらの突起は大きく、いずれも底に縄文が施されている。

千歳5遺跡の土器片は、周囲の出土遺物からみて北筒式とみられる。吉井の沢遺跡の土器は2点とも早期コッタロ式とみられ、突起の形は川上B遺跡の土器に近い。

これらの資料は、縄文時代早期、中期、続縄文時代の各期にばらついており、一時期だけに特徴的にみられる現象ではない。強いていえば、中期モコト式に類例が多い。出土地点は、胆振、石狩、十勝、網走と広い地域にわたっている。

これらの土器片の突起が単なる整形痕ではないとするならば、その目的や機能についても検討が必要である。しかし現段階ではそれに十分こたえるだけの資料はない。今後の資料の増加を待ちたい。

- (1) 室蘭市民俗資料館保管。発掘報告には、本資料は掲載されていない。大場利夫、溝口稠昭和46年『室蘭絵鞆遺跡発掘調査概要報告書』室蘭市教育委員会。
- (2) 宮宏明氏の御教示による。開成1遺跡か開成3遺跡で採集されたらしい。北見市立郷土博物館保管。開成1・3遺跡の発掘調査では類似資料は出土していない。北見市教育委員会(昭和55年)『北見市開成遺跡発掘調査報告書』
- (3) 昭和57年度発掘出土品、幕別町教育委員会保管。昭和58年3月報告書出版予定。
- (4) 昭和57年度発掘出土品、昭和58年3月報告書出版予定。
- (5) 発掘報告には、本資料は掲載されていない。北海道埋蔵文化財センター(昭和57年)『吉井の沢の遺跡』

- (6) 石橋次雄（昭和57年）「北海道考古学会だより」第15号、藤本強氏も再検討の余地ありと語っている。藤本強（昭和55年）「モコト貝塚表面採集の土器」『ライトコロ川口遺跡』東京大学文学部。豊原照司（昭和57年）「北海道東部の土器」『縄文文化の研究』4、雄山閣。
- (7) (1)の文献による。

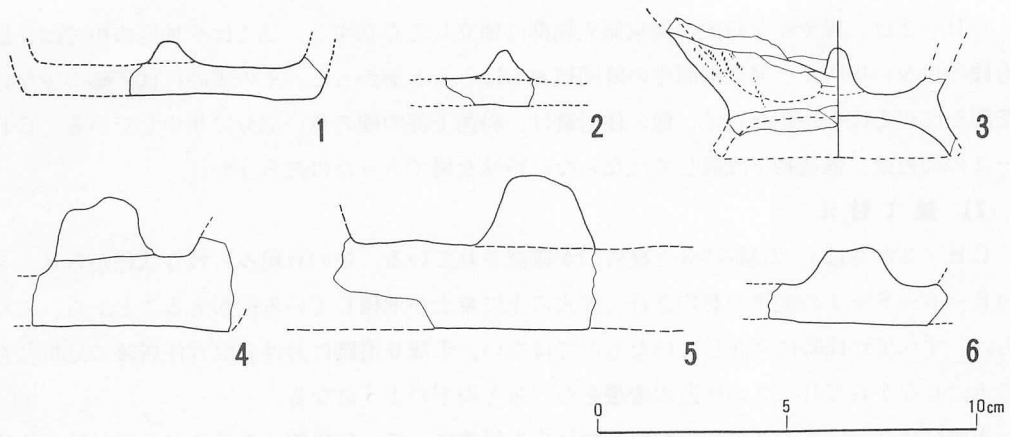
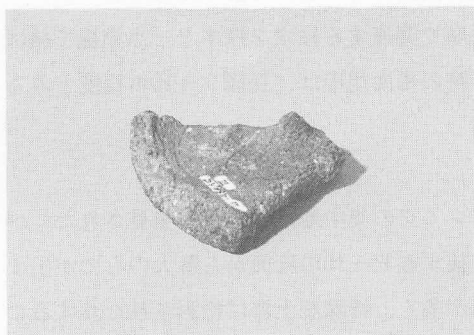


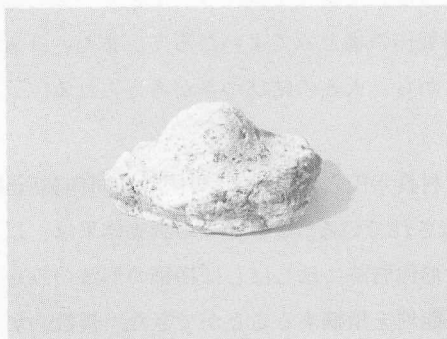
図 XI-5 1. 登別市川上B遺跡・D地区 2. 登別市川上B遺跡・E地区
3. 室蘭市絵鞆遺跡 4. 幕別町猿別C遺跡 5. 北見市開成遺跡 6. 登別市千歳5遺跡



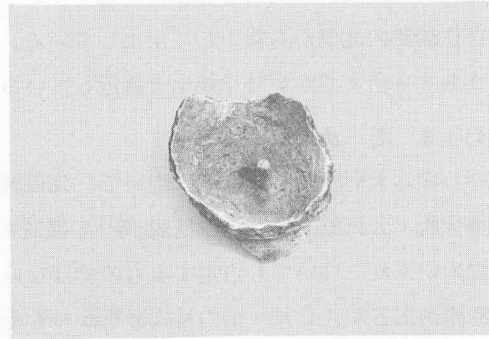
1. 登別市川上B遺跡・D地区



2. 登別市川上B遺跡・E地区



3. 登別市千歳5遺跡



4. 室蘭市絵鞆遺跡

5. 大形住居跡

C地区において、長径12mをこえる大形住居跡（CH-2）が発見された。これは、他の住居跡と比較すると、立地、構造、出土遺物などに特異性がみられる。以下に、それらの点について詳細に述べ、C地区の住居跡群のなかでの位置づけを考えてみたい。

1) 立地

CH-2は、緩やかな斜面の南東側先端部に独立して存在する。ここはC地区の中では、最も礫の少ない場所で、発掘期間中の降雨被害もほとんど無かった。その周囲には、礫の少ない空間が広がるにもかかわらず、他の住居跡は、斜面上部の礫の多い部分に集中している。CH-2の周辺は、構造物を設置してはならない特殊な場であったのだろうか。

2) 建て替え

CH-2からは、石組み炉3と柱穴52が確認されている。炉の石組みの残存状態からS-3→S-2→S-1の変遷が想定され、柱穴の上に焼土が堆積している例があることから、これらは、すべてが同時に存在していたものではない。千歳6遺跡における竪穴住居跡の分析⁽¹⁾を参考にしながらCH-2の構造の変遷をたどると以下のようになる。

南側の壁ぎわにある2ヵ所の傾斜した柱穴を規準にして、住居跡の長軸に対して対称の位置にある柱穴を探すと破線で結ばれる柱穴列がうかんでくる。これは住居跡の輪郭とよく一致し、かつその長軸線上にS-1が位置することから、最終段階のものともみてよいだろう。

次に、S-2の長軸の延長線に対して同様の手順で関連する柱穴を探すと一点鎖線で結ばれる柱穴列となる。この柱穴列から想定される住居跡の平面規模は、長径9～10m程度とみられる。

3) ベンガラとフレイクの出土

他の住居跡には見られないベンガラ塊が3点とフレイクの集中地点が3ヵ所発見された。ベンガラは、覆土と床面直上から小塊が、S-2に隣接するP-10の床面から拳大のものが出土している。一般にベンガラは、墓に散布されることが多く、特殊な土器に塗彩されたりすることから、葬送・祭祀に深いかわりをもつものと考えられている。このことから、CH-2の機能については、祭祀的な様相も考慮すべきものだろう。フレイクは、S-1とF-2の周辺及び住居跡の北側から集中して出土している。石器製作の場ともみてよいだろう。また、3ヵ所のうち2ヵ所までが炉跡や焼土と接近していることから、火との結びつきが考えられる。

4) まとめ

いわゆる大形住居跡の機能について、渡辺誠・中村良幸氏らによって「雪国の共同作業所説」「集会所・公民館説」「祭祀遺構説」等⁽²⁾の諸説が発表されている。CH-2の調査結果は、以上の説のいずれについても否定するものではない。大形住居跡にはしばしば増築の形跡のみられるものがあるが、CH-2の柱穴分析からもその可能性を指摘することができた。複数の炉をもつ点についても同様である。さらに、ベンガラが出土していることから、祭祀遺構の可能性

についても十分吟味する必要があるだろう。

道内では、苫小牧市の美沢2遺跡に円筒土器を出土した大形住居跡の調査例⁽³⁾があるが、今のところ類例は少ない。登別市の千歳6遺跡⁽⁴⁾では住居跡19のうち最大のものは、長径が11mあり、平面的な規模はCH-2に近い。北海道の大形住居については、今後類例の増加をまって検討したい。

- (1) 瀬川拓郎昭和57年「千歳6遺跡における竪穴の構造と集落の変遷」『札幌台地の縄文時代集落址』登別市教育委員会
- (2) 渡辺誠 昭和55年「雪国の縄文家屋」『小田原考古学研究会会報』第9号
- (3) 北海道教育委員会昭和53年『美沢川流域の遺跡群 II』
- (4) (1)に同じ

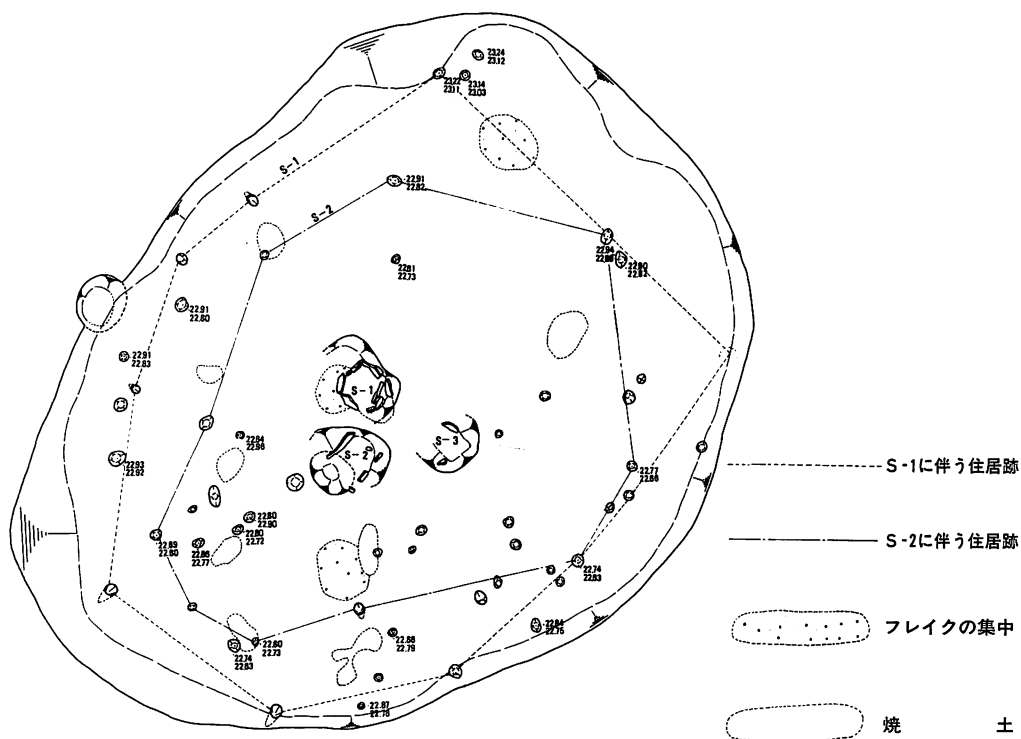


図 XI-6- CH-2 の建て替え想定図

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告 第13集

川上 B 遺跡

—北海道縦貫自動車道登別地区
埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和58年3月31日 発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター
064 札幌市中央区南15条西17丁目
TEL. (011) 561-0067

印刷 第一法規出版株式会社
札幌市中央区北4条西6丁目(毎日札幌会館)
TEL(代) (011) 281-6061

